

太田東部遺跡群

1985

群馬県教育委員会
群馬県埋蔵文化財調査事業団

太田東部遺跡群

-太田東部地区県営ほ場整備事業関連-



1985

群馬県教育委員会
群馬県埋蔵文化財調査事業団

序

昭和48年度から昭和51年度にかけて、発掘調査を実施してまいりました、太田東部地区県営ほ場整備事業に関連する諸遺跡の調査結果につきましては、諸般の事情もあり、公表する機会も得ずに、今日に至っております。しかし、関係各位の御協力によりまして、整理体制も整い、ここに調査報告書として公刊する運びとなりましたことは、まことに喜ばしいことであります。

4年次にわたる調査を通じ、この地域の様々な貴重な資料を得ることができました。なかでも、古墳時代にかけての集落跡、そして、そこから出土している「矢田」、「神殿」等の墨書をもつ土器など、太田市周辺の古代史を究明していく上で、注目すべき数多くの資料が発見されています。

ここに報告書を刊行することができましたのも、県当局、太田東部地区県営ほ場整備事業関係者、そして、地元地権者、調査担当者等多くの方々の御指導と御協力の賜物であります。ここに厚く感謝の意を表します。

多くの貴重な資料を盛り込んだ本報告書が、今後、数多くの人々に有効に活用され、その価値がますます高められていくことを念じ序といたします。

昭和60年3月26日

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

理事長 清水 一郎

例 言

1、本書は、「太田東部地区」県営ほ場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告である。

2、本書に所収の遺跡名と発掘調査地の所在地番は以下のとおりである。

安房田（やすぼうだ）遺跡		太田市大字竜舞字安房田3447
塚井（つかい）遺跡	1号墳	太田市大字茂木字塚井820
	2号墳	太田市大字竜舞字塚井3551
清水田（しみずだ）遺跡		太田市大字茂木字清水田348、349、507～520、522、543 544、545、547、548 太田市大字茂木字塚井541、542 太田市大字茂木字稻荷塚2114、2115 太田市大字茂木字榎町506、553、554、557 太田市大字竜舞字八町2414～2417、2419～2422
小町田（こまちだ）遺跡		

3、発掘した遺跡の調査期間と調査面積は以下のとおりである（第3図参照）

安房田遺跡	1次	昭和49年1月10日～1月29日	150㎡
	2次	昭和49年11月11日～12月7日	1095㎡
塚井遺跡		昭和49年11月25日～昭和50年1月11日	700㎡
清水田遺跡	1次	昭和50年11月10日～昭和51年2月25日	4000㎡
	2次	昭和51年11月24日～昭和52年1月31日	6300㎡
小町田遺跡		昭和53年1月17日～4月28日	5200㎡

4、事業主体者は、群馬県農政部耕地開発課である。

5、調査主体者は以下の分担である。

発掘調査	群馬県教育委員会文化財保護課
整理	群馬県教育委員会文化財保護課
整理・報告書作成	群馬県埋蔵文化財調査事業団

6、調査組織 今回報告する調査の発掘関係者、整理作業関係者、整理事務関係者は以下のとおりである。

発掘関係者

遺 跡 名	調 査 担 当 者	調 査 員	調 査 協 力 者
安房田遺跡 1次	原田恒弘 飯塚卓二	岡部修一 久保田文雄	井上唯雄 山形水哉 神保侑史 小内安藏
			梅沢重昭 木村義一郎 木暮仁一 横沢克明 外山和夫 沢口 宏
安房田遺跡 2次	原田恒弘 石塚久則	岡部修一 久保田文雄	

塚井遺跡	原田恒弘 石塚久則	岡部修一 久保田文雄	山形水哉 神保信史 小内安藏 梅沢重昭 木暮仁一 横沢克明 外山和夫 沢口 宏
清水田遺跡 1次	原田恒弘 飯塚卓二	岡部修一 久保田文雄 中里吉伸	大沢秀男 神保信史 諏訪和雄 小谷野 基
清水田遺跡 2次	石塚久則	岡部修一 平野進一 木暮仁一 横沢克明	山形水哉 群馬大学考古学研究会
小町田遺跡	飯塚卓二	岡部修一 山下 歳信	神奈川大学考古学研究会 浜野和宗作 関 邦一

整理作業関係者（第1次 昭和53年4月1日～昭和55年3月31日）

青木静江、阿部京子、武井秋子、中東彰子、西田順子（五十音順）

整理作業関係者（第2次 昭和58年4月1日～昭和60年3月31日）

新井悦子、大川明子、榊沢禄子、佐藤美代子、鈴木紀子、関 清美、高橋真樹子、辻口敏子
平林照美、福島恵理子、宮内菊江、茂木順子、柳井さよ里（五十音順）

整理事務関係者

大沢秋良、松本浩一、定方隆史、国定 均、笠原秀樹、須田朋子、吉田有光、柳岡良宏

- 7、報告書の作成作業は、発掘作業を担当した飯塚卓二と石塚久則が協議して、以下の職員が協力した。

原稿執筆及び編集

石塚久則（縄文時代の遺物は執筆依頼）

遺物実測及び製図、遺構製図、原稿浄書、レイアウト

榊沢禄子、佐藤美代子、高橋真樹子、平林照美、柳井さよ里（五十音順）

- 8、報告書の縄文時代の部分については、谷藤保彦、関根慎二（群馬県埋蔵文化財調査事業団）に原稿依頼した。なお、文責はそれぞれの文章末尾に明記した。

- 9、石器の石材鑑定は、飯島静夫氏（群馬県地質研究会）にお願した。

- 10、「太田東部遺跡群」関連の発掘調査報告書は、すでに「塚廻り古墳群」として昭和55年に刊行されており、今回はその続編ということになる。

- 11、「太田東部遺跡群」の末報告の遺跡に、「遠空（とのおがき）遺跡」、「花ノ木（はなのき）遺跡」、「宮免（みやめん）遺跡」、「上神原（こうじんはら）遺跡」がある。

また、清水田遺跡の住居址の後半部分（S B089～132）は次回の報告にまわした。

- 12、発掘調査及び本書の作成にあたり、下記の方々より御指導、御協力をいただいた。記して感謝の意を表したい（敬称略）

沢口 宏、中東耕志、浜沢三久、相京建史、坂瓜久純


- 13、出土遺物・図面・写真・記録等の資料は一括して群馬県埋蔵文化財センターに保管してある。


- 14、発掘調査にあたって毎年の厳冬期、困難な作業に従事し、また多くの便宜を図っていただいた地元の方々に深く感謝いたします。


凡 例


- 1. 報告書** 本書は昭和40年代という行政内の埋蔵文化財の発掘調査の状況、とりわけ大型ほ場整備事業に対応する初期段階の調査であった。その調査内容は、道路と用、排水路掘削部分のみに発掘調査を限定せざるを得なかった。そのため調査内容の不充分さがその後には及ぼした遺構・遺物の整理作業に悪影響を与えずにはおかなかった。特に報告書所収の遺構の重複関係などに想像線（破線）の多用を余儀なくされたのもそのためであった。
- 2. 図面** 平面図・断面図の記録のあるものはなるべく掲載することに努めた。なお、住居址内の床下掘り方は紙数の制限から省略した。また、重複の多い住居址の切り合い関係の理解を助けるために立面図を平面図から積極的に復元して、多数掲載することに努めた。
- 3. 遺跡** 遺跡の位置の基準は平面直角座標IX系を使用し、原点からの距離を表示した。
遺跡の高さの表示は標高を基準とした。
遺跡の方位は平面直角座標の縦方向、方眼北で表示した。
遺跡の方眼北に対して磁北は西へ6°40'、真北は東へ0°20'の角度をもつ。
遺跡の解説は調査概要、日誌、遺構概説、遺構実測図、遺物概説、遺物実測図、遺物観察表の順に並べることを原則とした。
- 4. 遺構** 竪穴住居址実測図の縮尺は $\frac{1}{4}$ に統一した。竪を天に住居址を描え、発掘範囲を方眼枠にレイアウトして他の遺構との重複関係を明瞭に表現することに努めた。
各竪穴住居址の解説は、位置、重複関係、平面形、規模、覆土の土層、出土遺物、時期判定の順に記述した。
竪穴住居址の主軸方位は、竪を通る左右壁の平均軸と方眼北のなす角度で表現した。
覆土は各々の基本土層で統一し、それ以外の土層については実測図に補足して記入した。
遺構の略記号でSBは住居址、SDは溝、SKは土塊、A-1などの記号は発掘区を表わす。
- 5. 遺物** 報告した4遺跡の総土器破片点数は49792点である。これらの遺物の出土地点は竪穴住居址、溝、土塊、発掘区、その他に分類される。整理作業で実測した点数は1908点で本書掲載点数はそのうちの1015点で総出土土器の2%ということになる。
土器類の実測図の縮尺は $\frac{1}{4}$ に統一し、その他の遺物は観察が容易になるように適宜縮尺をかえた。実測図は可能な限り表限方法の統一をはかったが、その他にもり込めない表現については観察表に記述するように努めた。
土器の器種及び焼成技術の表現については統一した基準もないままに従前の呼称を使用した。土器の色調については「新版標準土色帖」（農林省農林水産技術会議事務局監修 1976年）に準じた。


住居の説明の順序は以下の如くである。位置(発掘区)、重複関係(旧→新)、平面形態・規模(長辺×短辺)、床面積(復元が多いためプランメーターを使用せず単純に長辺×短辺とした)。主軸と壁角度は図示参照。壁高は遺構確認面最高より床面高さ平均値との差。土層は基準土層に準拠。

 **電構築材** 灰白色粘土を主体とした電構築材で両袖から煙道にかけて馬蹄形にめぐる。

 **焼土層** 電構築材の内側、主として電焚口底面に焼土層と焼土塊が船底形に堆積するものとそれ以外の床面に散布する焼土層。

 **遺構** 掘立柱建物の柱痕や、長方形土塊など、土層の共通性や相互に関連が認められるもの。


 **攪乱土塊** 植栽の根痕や時期不明確及び不定形の土塊など。

 **遺構検出面** 表土層を重機で削りジョレンによる手作業で検出した土層の面で、ルーム推移及びルーム層が主体を占める。

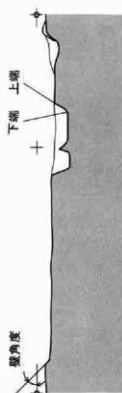
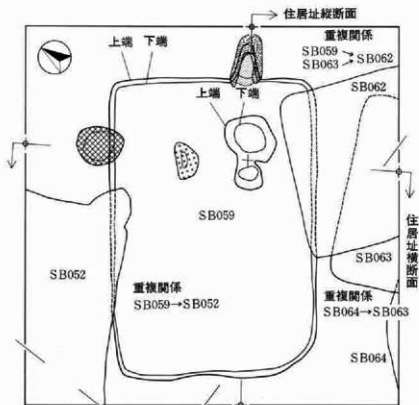


方眼北

平面直角座標Ⅹ系の方眼北である。主軸は電を通る住居軸の軸線と方眼北の角度を測定してある。

 **住居址関連土塊**

住居址発掘時に床面又は床面下に検出された遺構で住居址に関連する土塊。



標高 33.1m
 発掘区 E-24区を表示し全体図を参照



土層注記
 基準土層以外の土層観察



目 次

第I章 序 言	1
第II章 安房田遺跡の調査	7
1 調査概要	7
2 遺 跡	9
3 遺 物	21
第III章 塚井遺跡の調査	41
1 調査概要	41
2 遺 跡	44
3 遺 物	55
第IV章 清水田遺跡の調査	63
1 調査概要	63
2 遺 跡	67
3 遺 物	174
第V章 小町田遺跡の調査	225
1 調査概要	225
2 遺 跡	227
3 遺 物	267
第VI章 総 括	330

挿 図 目 次

第 1 図	大田東部連勝群の位置と範囲 (1/5000)	3	第 56 図	清水田遺跡 発掘調査区設定図 (1) (1/1000)	64
第 2 図	大田東部連勝群 (1/1000)	5		大設定と字界	64
第 3 図	調査進行図	6	第 57 図	清水田遺跡 発掘調査区設定図 (2) (1/1000)	65
第 4 図	安房田遺跡 発掘調査区設定図 (1/1000)	9		グリット網の呼称	65
第 5 図	安房田遺跡 全体図 (1/300)	10	第 58 図	清水田遺跡 電機式図	68
第 6 図	安房田遺跡 横断面模式図	11	第 59 図	清水田遺跡 住居址分布図	69
第 7 図	安房田遺跡 1号住居址平面図 (1/60)	12	第 60 図	清水田遺跡 1号住居址実測図 (1/60)	70
第 8 図	安房田遺跡 1号住居址断面図 (1/60)	12	第 61 図	清水田遺跡 2号住居址実測図 (1/60)	71
第 9 図	安房田遺跡 2号住居址平面図 (1/60)	13	第 62 図	清水田遺跡 3号住居址実測図 (1/60)	72
第 10 図	安房田遺跡 2号住居址断面図 (1/60)	13	第 63 図	清水田遺跡 4号住居址実測図 (1/60)	73
第 11 図	安房田遺跡 2号住居址柱根 (1) (P 1) (1/3)	14	第 64 図	清水田遺跡 5号住居址実測図 (1/60)	74
第 12 図	安房田遺跡 2号住居址柱根 (2) (P 2) (1/3)	14	第 65 図	清水田遺跡 6号住居址実測図 (1/60)	75
第 13 図	安房田遺跡 2号住居址柱根 (3) (P 3) (1/3)	15	第 66 図	清水田遺跡 7号住居址実測図 (1/60)	76
第 14 図	安房田遺跡 2号住居址柱穴断面図 (P 2・P 3)	15	第 67 図	清水田遺跡 8号住居址実測図 (1/60)	77
	(1/20)	15	第 68 図	清水田遺跡 9号住居址実測図 (1/60)	78
第 15 図	安房田遺跡 3号住居址平面図 (1/60)	16	第 69 図	清水田遺跡 10号住居址実測図 (1/60)	79
第 16 図	安房田遺跡 4号住居址平面図 (1/60)	17	第 70 図	清水田遺跡 11号住居址実測図 (1/60)	80
第 17 図	安房田遺跡 4号住居址柱穴断面図 (1/40)	17	第 71 図	清水田遺跡 12号住居址実測図 (1/60)	81
第 18 図	安房田遺跡 5号住居址平面図 (1/100)	18	第 72 図	清水田遺跡 13号住居址実測図 (1/60)	82
第 19 図	安房田遺跡 6号住居址平面図 (1/100)	18	第 73 図	清水田遺跡 14号住居址実測図 (1/60)	83
第 20 図	安房田遺跡 7号住居址平面図 (1/100)	18	第 74 図	清水田遺跡 15号住居址実測図 (1/60)	84
第 21 図	安房田遺跡 1号溝断面図 (1/20)	19	第 75 図	清水田遺跡 16号住居址実測図 (1/60)	85
第 22 図	安房田遺跡 2号溝断面図 (1/20)	19	第 76 図	清水田遺跡 17号住居址実測図 (1/60)	86
第 23 図	安房田遺跡 3号溝断面図 (1/300)	19	第 77 図	清水田遺跡 18号住居址実測図 (1/60)	87
第 24 図	安房田遺跡 溝平面図 (1/160)	20	第 78 図	清水田遺跡 19号住居址実測図 (1/60)	88
第 25 図	安房田遺跡 紡績車・土玉実測図 (1/3)	21	第 79 図	清水田遺跡 20号住居址実測図 (1/60)	89
第 26 図	安房田遺跡 出土土器の分類	21	第 80 図	清水田遺跡 21号住居址実測図 (1/60)	90
第 27 図	安房田遺跡 土器実測図 (1) (1/4)	22	第 81 図	清水田遺跡 22号住居址実測図 (1/60)	91
第 28 図	安房田遺跡 土器実測図 (2) (1/4)	23	第 82 図	清水田遺跡 23号住居址実測図 (1/60)	92
第 29 図	安房田遺跡 土器実測図 (3) (1/4)	24	第 83 図	清水田遺跡 24号住居址実測図 (1/60)	93
第 30 図	安房田遺跡 土器実測図 (4) (1/4)	25	第 84 図	清水田遺跡 25号住居址実測図 (1/60)	94
第 31 図	安房田遺跡 土器実測図 (5) (1/4)	26	第 85 図	清水田遺跡 26号住居址実測図 (1/60)	95
第 32 図	安房田遺跡 土器実測図 (6) (1/4)	27	第 86 図	清水田遺跡 27号住居址実測図 (1/60)	96
第 33 図	安房田遺跡 土器実測図 (7) (1/4)	28	第 87 図	清水田遺跡 28号住居址実測図 (1/60)	97
第 34 図	安房田遺跡 石製構造具実測図 (1/1)	29	第 88 図	清水田遺跡 29号住居址実測図 (1/60)	98
第 35 図	安房田遺跡 石製構造品の寸法と研磨方向 (1/3)	29	第 89 図	清水田遺跡 30号住居址実測図 (1/60)	99
第 36 図	安房田遺跡 石製構造具実測図 (1/1)	30	第 90 図	清水田遺跡 31号住居址実測図 (1/60)	100
第 37 図	塚井遺跡 周辺の地形図 (1/2000)	42	第 91 図	清水田遺跡 32号住居址実測図 (1/60)	101
第 38 図	塚井遺跡 発掘調査区設定図 (1/1000)	44	第 92 図	清水田遺跡 33号住居址実測図 (1/60)	102
第 39 図	塚井遺跡 古墳断面模式図	45	第 93 図	清水田遺跡 34号住居址実測図 (1/60)	103
第 40 図	塚井遺跡 金環実測図 (1/1)	47	第 94 図	清水田遺跡 35号住居址実測図 (1/60)	104
第 41 図	塚井遺跡 1号住居址実測図 (1/60)	48	第 95 図	清水田遺跡 36号住居址実測図 (1/60)	105
第 42 図	塚井遺跡 2号住居址実測図 (1/60)	49	第 96 図	清水田遺跡 37号住居址実測図 (1/60)	106
第 43 図	塚井遺跡 住居址分布図 (1/240)	50	第 97 図	清水田遺跡 38号住居址実測図 (1/60)	107
第 44 図	塚井遺跡 1号墳築造部設定図 (1/240)	51	第 98 図	清水田遺跡 39号住居址実測図 (1/60)	108
第 45 図	塚井遺跡 1号墳復元図 (1/240)	51	第 99 図	清水田遺跡 40号住居址実測図 (1/60)	109
第 46 図	塚井遺跡 1号墳断面図 (東西方向) (1/80)	52	第 100 図	清水田遺跡 41号住居址実測図 (1/60)	110
第 47 図	塚井遺跡 1号墳断面図 (南北方向) (1/80)	52	第 101 図	清水田遺跡 42号住居址実測図 (1/60)	111
第 48 図	塚井遺跡 2号墳発掘部設定図 (1/240, 1/60)	53	第 102 図	清水田遺跡 43号住居址実測図 (1/60)	112
第 49 図	塚井遺跡 2号墳復元図 (1/240)	53	第 103 図	清水田遺跡 44号住居址実測図 (1/60)	113
第 50 図	塚井遺跡 2号墳断面図 (東西方向) (1/80)	54	第 104 図	清水田遺跡 45号住居址実測図 (1/60)	114
第 51 図	塚井遺跡 2号墳断面図 (南北方向) (1/80)	54	第 105 図	清水田遺跡 46号住居址実測図 (1/60)	115
第 52 図	塚井遺跡 出土土器の分類	55	第 106 図	清水田遺跡 47号住居址実測図 (1/60)	116
第 53 図	塚井遺跡 遺物実測図 (1) (1/4)	56	第 107 図	清水田遺跡 48号住居址実測図 (1/60)	117
第 54 図	塚井遺跡 遺物実測図 (2) (1/4)	57	第 108 図	清水田遺跡 49号住居址実測図 (1/60)	118
第 55 図	塚井遺跡 遺物実測図 (3) (1/4)	58	第 109 図	清水田遺跡 50号住居址実測図 (1/60)	119

第110回	清水田道跡	51号住居址実測図 (1/60)	-----120	第165回	清水田道跡	土器実測図 (2) (1/4)	-----176
第111回	清水田道跡	52号住居址実測図 (1/60)	-----121	第166回	清水田道跡	土器実測図 (3) (1/4)	-----177
第112回	清水田道跡	53号住居址実測図 (1/60)	-----122	第167回	清水田道跡	土器実測図 (4) (1/4)	-----178
第113回	清水田道跡	54号住居址実測図 (1/60)	-----123	第168回	清水田道跡	土器実測図 (5) (1/4)	-----179
第114回	清水田道跡	55号住居址実測図 (1/60)	-----124	第169回	清水田道跡	土器実測図 (6) (1/4)	-----180
第115回	清水田道跡	56号住居址実測図 (1/60)	-----125	第170回	清水田道跡	土器実測図 (7) (1/4)	-----181
第116回	清水田道跡	57号住居址実測図 (1/60)	-----126	第171回	清水田道跡	土器実測図 (8) (1/4)	-----182
第117回	清水田道跡	58号住居址実測図 (1/60)	-----127	第172回	清水田道跡	土器実測図 (9) (1/4)	-----183
第118回	清水田道跡	59号住居址実測図 (1/60)	-----128	第173回	清水田道跡	土器実測図 (10) (1/4)	-----184
第119回	清水田道跡	60号住居址実測図 (1/60)	-----129	第174回	清水田道跡	土器実測図 (11) (1/4)	-----185
第120回	清水田道跡	61号住居址実測図 (1/60)	-----130	第175回	清水田道跡	土器実測図 (12) (1/4)	-----186
第121回	清水田道跡	62号住居址実測図 (1/60)	-----131	第176回	清水田道跡	土器実測図 (13) (1/4)	-----187
第122回	清水田道跡	63号住居址実測図 (1/60)	-----132	第177回	清水田道跡	土器実測図 (14) (1/4)	-----188
第123回	清水田道跡	64号住居址実測図 (1/60)	-----133	第178回	清水田道跡	土器実測図 (15) (1/4)	-----189
第124回	清水田道跡	65号住居址実測図 (1/60)	-----134	第179回	清水田道跡	土器実測図 (16) (1/4)	-----190
第125回	清水田道跡	80号住居址 竊盗実測図 (1/2.5)	-----135	第180回	清水田道跡	土器実測図 (17) (1/3)	-----191
第126回	清水田道跡	66号住居址実測図 (1/60)	-----136	第181回	清水田道跡	墨書土器実測図 (1) (1/3)	-----192
第127回	清水田道跡	67号住居址実測図 (1/60)	-----137	第182回	清水田道跡	墨書土器実測図 (2) (1/3)	-----193
第128回	清水田道跡	68号住居址実測図 (1/60)	-----138	第183回	清水田道跡	墨書土器実測図 (3) (1/3)	-----194
第129回	清水田道跡	69号住居址実測図 (1/60)	-----139	第184回	清水田道跡	墨書土器実測図 (4) (1/3)	-----195
第130回	清水田道跡	70号住居址実測図 (1/60)	-----140	第185回	清水田道跡	墨書土器実測図 (5) (1/3)	-----196
第131回	清水田道跡	71号住居址実測図 (1/60)	-----141	第186回	清水田道跡	遺物実測図 (1) (1/4)	-----197
第132回	清水田道跡	72号住居址実測図 (1/60)	-----142			(磁石・土製支脚・土鏝・紡錘車) ---197	
第133回	清水田道跡	73号住居址実測図 (1/60)	-----143	第187回	清水田道跡	遺物実測図 (2) (埴輪) (1/4)	-----198
第134回	清水田道跡	74号住居址実測図 (1/60)	-----144	第188回	清水田道跡	遺物実測図 (3) (石製模造品) (1/1)---199	
第135回	清水田道跡	75号住居址実測図 (1/60)	-----145	第189回	清水田道跡	遺物実測図 (4) (石帯) (1/1)	-----199
第136回	清水田道跡	76号住居址実測図 (1/60)	-----146	第190回	小町田道跡	遺物分布図 (1/120)	-----200
第137回	清水田道跡	77号住居址実測図 (1/60)	-----147			(左・土壇、右住居址と溝) -----228	
第138回	清水田道跡	78号住居址実測図 (1/60)	-----148	第191回	小町田道跡	発掘調査区設定図 (1/2000)	-----229
第139回	清水田道跡	79号住居址実測図 (1/60)	-----149	第192回	小町田道跡	電機式図 -----230	
第140回	清水田道跡	80号住居址実測図 (1/60)	-----150	第193回	小町田道跡	1号住居址実測図 (1/60、1/30)	-----231
第141回	清水田道跡	81号住居址実測図 (1/60)	-----151	第194回	小町田道跡	2号住居址実測図 (1/60)	-----232
第142回	清水田道跡	82号住居址実測図 (1/60)	-----152	第195回	小町田道跡	2号住居址土層出土状態図	-----233
第143回	清水田道跡	83号住居址実測図 (1/60)	-----153	第196回	小町田道跡	3号住居址実測図 (1/60)	-----234
第144回	清水田道跡	84号住居址実測図 (1/60)	-----154	第197回	小町田道跡	4号住居址実測図 (1/60、1/30)	-----235
第145回	清水田道跡	85号住居址実測図 (1/60)	-----155	第198回	小町田道跡	5号住居址実測図 (1/60)	-----236
第146回	清水田道跡	86号住居址実測図 (1/60)	-----156	第199回	小町田道跡	6号住居址実測図 (1/60、1/30)	-----237
第147回	清水田道跡	87号住居址実測図 (1/60)	-----157	第200回	小町田道跡	7号住居址実測図 (1/60)	-----238
第148回	清水田道跡	88号住居址実測図 (1/60)	-----158	第201回	小町田道跡	7号住居址土層出土状態図 (1/60)	-----239
第149回	清水田道跡	獨立柱建物復元図 (1)	-----159	第202回	小町田道跡	8号住居址実測図 (1/60)	-----240
第150回	清水田道跡	獨立柱建物復元図 (2)	-----160	第203回	小町田道跡	8号住居址土層出土状態図	-----241
第151回	清水田道跡	獨立柱建物実測図 (1) (1/100)	-----161	第204回	小町田道跡	9号住居址実測図 (1/60、1/30)	-----242
		(S B133・S B134・S B135)	-----161	第205回	小町田道跡	10号住居址実測図 (1/60、1/30)	-----243
第152回	清水田道跡	獨立柱建物実測図 (2) (1/100)	-----162	第206回	小町田道跡	11号住居址実測図 (1/60)	-----244
		(S B136・S B137)	-----162	第207回	小町田道跡	11号住居址土層出土状態図 (1/60)	-----245
第153回	清水田道跡	獨立柱建物実測図 (3) (1/60)	-----163	第208回	小町田道跡	12号住居址実測図 (1/60)	-----246
		(S B138)	-----163	第209回	小町田道跡	15号住居址実測図 (1/60)	-----247
第154回	清水田道跡	獨立柱建物復元図 (3)	-----164	第210回	小町田道跡	16号住居址実測図 (1/60)	-----248
第155回	清水田道跡	獨立柱建物実測図 (4) (1/60)	-----164	第211回	小町田道跡	2号溝断面図 (1/40)	-----249
		(S B139)	-----164	第212回	小町田道跡	4号溝断面図 (1/40)	-----250
第156回	清水田道跡	10号溝実測図 (1/200)	-----165	第213回	小町田道跡	4号溝平面図 (1/80)	-----251
第157回	清水田道跡	溝断面図 (S D011・S D012・S D013・S D014) (1/50、1/40)	-----166	第214回	小町田道跡	5号溝断面図 (1/100)	-----252
第158回	清水田道跡	全体図 (1) (1/500)	-----167	第215回	小町田道跡	1号土壇実測図 (1/20)	-----253
		(區分期以前の住居址と土壇)	-----167	第216回	小町田道跡	2号土壇実測図 (1/40、1/20)	-----254
第159回	清水田道跡	全体図 (2) (1/500)	-----168	第217回	小町田道跡	3号土壇実測図 (1/40、1/20)	-----255
		(掘立柱建物・溝・土壇)	-----168	第218回	小町田道跡	4号土壇実測図 (1/40、1/20)	-----256
第160回	清水田道跡	溝平面図 (S D011・S D012) (1/200)	-----169	第219回	小町田道跡	5号土壇実測図 (1/40、1/20)	-----257
第161回	清水田道跡	溝平面図 (S D014) (1/200)	-----169	第220回	小町田道跡	6号土壇実測図 (1/40、1/20)	-----258
第162回	清水田道跡	土壇分布図	-----171	第221回	小町田道跡	7号土壇実測図 (1/40、1/20)	-----259
第163回	清水田道跡	出土土器の分類	-----174	第222回	小町田道跡	8号土壇実測図 (1/40、1/20)	-----260
第164回	清水田道跡	土器実測図 (1) (1/4)	-----175	第223回	小町田道跡	9号土壇実測図 (1/40、1/20)	-----261
				第224回	小町田道跡	10号土壇実測図 (1/40、1/20)	-----262

第225回	小町田遺跡	1号土壌土器実例図 (1/6、1/3) -----	263	第249回	小町田遺跡	土器実例図 (6) (1/4) -----	291
第226回	小町田遺跡	3・4・5・7・8・9号土壌 土器実例図 (1/3) -----	264	第250回	小町田遺跡	土器実例図 (7) (1/4) -----	292
第227回	小町田遺跡	全体図 (1/300) -----	265	第251回	小町田遺跡	土器実例図 (8) (1/4) -----	293
第228回	小町田遺跡	縄平面図 (1/160) -----	266	第252回	小町田遺跡	土器実例図 (9) (1/4) -----	294
第229回	小町田遺跡	出土土器の分類 -----	267	第253回	小町田遺跡	土器実例図 (10) (1/4) -----	295
第230回	小町田遺跡	第1・2群土器実例図 (1/3) -----	272	第254回	小町田遺跡	土器実例図 (11) (1/4) -----	296
第231回	小町田遺跡	第3群土器実例図 (1) (1/3) -----	273	第255回	小町田遺跡	土器実例図 (12) (1/4) -----	297
第232回	小町田遺跡	第3群土器実例図 (2) (1/4、1/3) -----	274	第256回	小町田遺跡	土器実例図 (13) (1/4) -----	298
第233回	小町田遺跡	第3群土器実例図 (3) (1/3) -----	275	第257回	小町田遺跡	遺物実例図 (1/4) (土器・土製支脚・磁石・土鏝) -----	299
第234回	小町田遺跡	第3・4・5群土器実例図 (1/3) -----	276	第258回	小町田遺跡	木製品実例図 (1) (1/2) -----	318
第235回	小町田遺跡	表採の縄文土器実例図 (1/3) -----	277	第259回	小町田遺跡	木製品実例図 (2) (1/2) -----	319
第236回	小町田遺跡	土製円盤実例図 (1/3) -----	277	第260回	小町田遺跡	木製品実例図 (3) (1/2) -----	320
第237回	小町田遺跡	ミニチュア土器実例図 (1/2) -----	277	第261回	小町田遺跡	木製品実例図 (4) (1/2) -----	321
第238回	小町田遺跡	石鏝・石杵・大珠実例図 (1/2) -----	278	第262回	小町田遺跡	木製品実例図 (5) (1/2) -----	322
第239回	小町田遺跡	磨製・打製石杵実例図 (1/3) -----	279	第263回	小町田遺跡	木製品実例図 (6) (1/2) -----	323
第240回	小町田遺跡	打製石斧・凹石実例図 (1/3) -----	280	第264回	小町田遺跡	木製品実例図 (7) (1/2) -----	324
第241回	小町田遺跡	凹石実例図 (1/3) -----	281	第265回	小町田遺跡	木製品実例図 (8) (1/2) -----	325
第242回	小町田遺跡	磨石・磁石・石鏝実例図 (1/3) -----	282	第266回	小町田遺跡	木製品実例図 (9) (1/2) -----	326
第243回	小町田遺跡	石皿実例図 (1/3) -----	283	第267回	小町田遺跡	木製品実例図 (10) (1/2) -----	327
第244回	小町田遺跡	土器実例図 (1) (1/4) -----	286	第268回	小町田遺跡	木製品実例図 (11) (1/4、1/2) -----	328
第245回	小町田遺跡	土器実例図 (2) (1/4) -----	287	第269回	小町田遺跡	木製品実例図 (12) (1/8) -----	329
第246回	小町田遺跡	土器実例図 (3) (1/4) -----	288	第270回	太田東部遺跡群	周辺の遺跡分布 -----	331
第247回	小町田遺跡	土器実例図 (4) (1/4) -----	289	第271回	太田東部遺跡群	周辺の水系復元図 -----	335
第248回	小町田遺跡	土器実例図 (5) (1/4) -----	290				

表

第1表	安房田遺跡	遺物観察表 -----	31	第12表	小町田遺跡	石器計測表	打製石斧 -----	283
第2表	塚井遺跡	遺物観察表 -----	59	第13表	小町田遺跡	石器計測表	凹石 -----	284
第3表	清水田遺跡	鉄製品一覧表 -----	135	第14表	小町田遺跡	石器計測表	磨石 -----	285
第4表	清水田遺跡	未報告住居址一覧表 -----	170	第15表	小町田遺跡	石器計測表	磁石 -----	285
第5表	清水田遺跡	土器一覧表 -----	172	第16表	小町田遺跡	石器計測表	石鏝 -----	285
第6表	清水田遺跡	遺物観察表 -----	200	第17表	小町田遺跡	石器計測表	石皿 -----	285
第7表	小町田遺跡	土製円盤計測表 -----	277	第18表	小町田遺跡	遺物観察表 -----	300	
第8表	小町田遺跡	石器計測表	石鏝 -----	283	第19表	小町田遺跡	木製品計測値一覧表 -----	317
第9表	小町田遺跡	石器計測表	石杵 -----	283	第20表	【太田東部遺跡群】	周辺の遺跡一覧表 -----	332
第10表	小町田遺跡	石器計測表	大珠 -----	283	第21表	参考文献 -----	336	
第11表	小町田遺跡	石器計測表	磨製石斧 -----	283				

本扉のさし絵

谷ノ藪古墳群 (林泊村5号墳) より出土の仿製四脚鏡で、復元径12.1cmを測る。

写真図版

PL

- | | | | | | |
|----------------|---|--|----------------|---|--|
| 1 安房田遺跡
遺跡 | 1 発掘区全景
3 発掘区全景
5 遺跡全景
7 遺跡全景 | 2 発掘区全景
4 遺跡全景
6 遺跡全景 | 12 清水田遺跡
遺構 | 1 S B71建物
3 S B47建物
5 S B54建物
7 S B60建物 | 2 S B72建物
4 S B49建物
6 S B66建物
8 S B88建物 |
| 2 安房田遺跡
遺溝 | 1 S B01建物
3 S B03建物
5 S D01溝
7 S D02溝 | 2 S B02建物
4 S B04建物
6 02、03溝
8 S D03溝 | 13 清水田遺跡
遺構 | 1 南区
3 南区
5 南東区
7 南東区 | 2 南区
4 南東区
6 南東区 |
| 3 安房田遺跡
遺物 | 1 東海系土器
3 S B01土器
5 S B07土器
7 S B07土器 | 2 古式土師器
4 S B02土器
6 S B07土器
8 S D02土器 | 14 清水田遺跡
遺構 | 1 S B133建物
3 S K28土壇
5 S D14溝
7 11、12溝 | 2 S B139建物
4 60、61土壇
6 S D14溝
8 11、12溝 |
| 4 安房田遺跡
遺物 | 1 S B07
3 C1区
5 S B01建物
7 S B01 | 2 C1区
4 C1区
6 S B01 | 15 清水田遺跡
遺物 | 1 古式土師器
3 丸高式土器
5 S B35土器
7 S B41土器 | 2 S B29土器
4 S B35土器
6 S B41土器
8 S B25土器 |
| 5 塚井遺跡
1号墳 | 1 発掘区全景
3 主体部
5 墳丘盛土
7 北トレンチ | 2 発掘区全景
4 墳丘盛土
6 西トレンチ | 16 清水田遺跡
遺物 | 1 園分式土器
3 S B15土器
5 S B44土器
7 S D14土器 | 2 S B07土器
4 S B40土器
6 S B74土器
8 S D14土器 |
| 6 塚井遺跡
2号墳 | 1 発掘区全景
3 主体部トレンチ
5 西トレンチ
7 01、02建物 | 2 主体部トレンチ
4 南トレンチ
6 東トレンチ | 17 清水田遺跡
墨書 | 1 S B83土器
3 S B79土器
5 S B68土器
7 F17区土器 | 2 S B103土器
4 E28区土器
6 S B26土器
8 S B94土器 |
| 7 塚井遺跡
遺物 | 1 1号墳土器
3 S B03土器
5 2号墳土器
7 2号墳
9 2号墳 | 2 S B01土器
4 2号墳土器
6 2号墳土器
8 2号墳 | 18 清水田遺跡
墨書 | 1 S B106土器
3 S B103土器
5 I20区土器
7 S B68土器
9 F17区土器
11 S B15土器 | 2 S B83土器
4 E28区土器
6 E28区土器
8 S B26土器
10 S B33土器
12 S B79土器 |
| 8 清水田遺跡
遺跡 | 1 発掘区全景
3 発掘区近景 | 2 発掘区全景
4 発掘区近景 | 19 清水田遺跡
遺構 | 1 S B76土器
3 A24区土器
5 S B40
7 S D14
9 S B14 | 2 S B76土器
4 B25区
6 S B40
8 S B07
10 S B23 |
| 9 清水田遺跡
遺構 | 1 西区 西より
3 西区 東より
5 西区 南東より
7 西区 東より | 2 西区 西より
4 西区 北西より
6 西区 西より | 20 小田町遺跡
遺跡 | 1 発掘区全景
3 発掘区全景
5 遺跡全景
7 遺跡全景 | 2 発掘区全景
4 遺跡全景
6 遺跡全景 |
| 10 清水田遺跡
遺構 | 1 05、07建物
3 S B15建物
5 S B20建物
7 S B24建物 | 2 S B10建物
4 S B16建物
6 S B23建物
8 S B35建物 | 21 小田町遺跡
遺構 | 1 S B02建物
3 S B06建物
5 S B08建物
7 S B12建物 | 2 04、05建物
4 S B07建物
6 10、11建物
8 15、16建物 |
| 11 清水田遺跡
遺構 | 1 北東区
3 北東区
5 北東区
7 北東区 | 2 北東区
4 北東区
6 北東区 | | | |

22 小田町遺跡 遺物	1	S B02建物	2	S B02建物	27 小田町遺跡 遺物	1	S B12土器	2	S B12土器
	3	S B02建物	4	S B06建物		3	S B15土器	4	S B07
	5	S B07建物	6	S B08建物		5	S B07	6	S B08
	7	S B08建物	8	S B12建物		7	S B16	8	S D02
						9	S D05		
23 小田町遺跡 遺構	1	S K01土壇	2	S K02土壇	28 小田町遺跡 遺物	1	S D05	2	S D05
	3	S K03土壇	4	S K04土壇		3	S D05	4	S D05
	5	S K05土壇	6	S K08土壇	29 小田町遺跡 遺物	1	S D05	2	S D05
	7	S K09土壇	8	S K10土壇		3	S D05	4	S D05
24 小田町遺跡 遺構	1	S D01溝	2	S D01溝	30 小田町遺跡 遺物	1	S D05	2	S D05
	3	02、04溝	4	S D02溝		3	S D05	4	S D05
	5	S D05溝	6	S D05溝	5	S D05	6	S D05	
	7	S D05	8	S D05	31 発掘作業	1	清水田遺跡	2	清水田遺跡
				3		S D05	4	S D05	
25 小田町遺跡 遺物	1	S K01土器	2	C 3区土器	1	清水田遺跡	2	清水田遺跡	
	3	S B02土器	4	S B02土器	3	小町田遺跡	4	小町田遺跡	
	5	S B02土器	6	S B02土器	5	清水田遺跡	6	小町田遺跡	
	7	S B02土器	8	S B02土器	7	清水田遺跡	8	清水田遺跡	
26 小田町遺跡 遺物	1	S B07土器	2	S B07土器					
	3	S B07土器	4	S B07土器					
	5	鬼高式土器	6	S B08土器					
	7	S B08土器	8	S B08土器					

太田東部遺跡群

やすほうだ
安房田遺跡

つかい
塚井遺跡

しみずだ
清水田遺跡

こまちだ
小町田遺跡

太田東部遺跡群

第I章 序 言

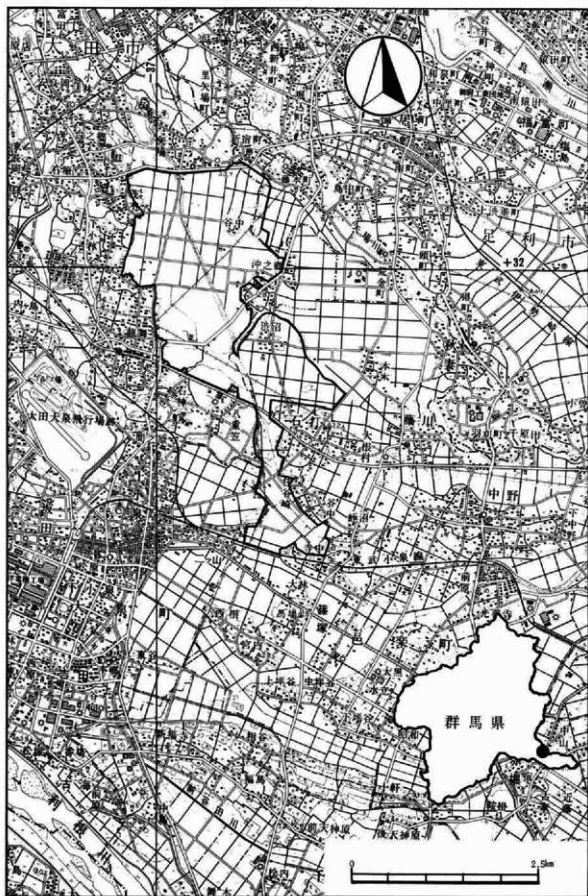
はじめに 事業計画 群馬県営ほ場整備事業・太田東部地区は本県の東南端に位置し、東に一級河川・藤川、西に一般県道・竜舞山前停車場線、南に一般国道122号線と東武小泉線、北は一般県道・佐野太田線に囲まれた標高25～35mの沖積平野に分布する。西から東南にかけて1/100～1/1000の緩傾斜をなす水田地帯がひろげる。土壌は灰褐色の壤土～植壤土で、地力は一般的に高い。用水は利根川水系で渡良瀬川に水源を持つ休泊川、葦川、不動堀及び藤川に求めているが、排水との分離がされていないため営農に支障をきたしている。立地条件としては太田・大泉・館林を始め近隣の都市群に恵まれ、東北縦貫道利用による京浜地帯等の大消費地とも時間短縮が計られ、非常に有利な条件を備えている。本事業では区画を整形化し、用排水路を整備し、農業の近代化による大型機械の導入を可能ならしめ、有力農業の推進を計り生産性の向上と農業の構造改善に資するものである。なお換地工区を10区分し、換地の適性を計ろうとするものである。事業は昭和47年度に着工、昭和56年度に完了したものである。

埋蔵文化財の調査 本地区は太田市大字茂木、沖之郷、竜舞、八重笠を中心に一部、邑楽町、栃木県足利市を含む667haを対象としている。本遺跡の周辺には多くの遺跡が密集しており、特に低地に面しては古墳時代から平安時代の遺跡が多く、台地上の全てがこの時代の集落址であるといっても過言ではない。古墳では北に控しても主体部に粘土椀、副葬品に獣形鏡、石剣、銅鏡を出土している矢場薬師塚古墳、全長約130mの規模で前方後方墳の藤本観音山古墳、西方へ2kmの距離に立地する東国最大の前方後円墳、太田天神山古墳そして女体山古墳と枚挙にいとまがない。当然、本地区の中にも多数の遺跡の存在が予想され、その取り扱いについて昭和47年、群馬県耕地開発課、館林土地改良事務所、太田東部事業所と群馬県教育委員会文化財保護課との間で協議が持たれた。その結果、当該地区内の遺跡について工事着工以前に発掘調査する必要について理解が得られた。しかしながら、調査の実施期間、遺跡範囲の認定方法、予算等については、数回の協議が必要であった。最終的な合意事項としては、工区全域の遺跡分布図の作成、発掘調査費は群馬県土地開発課の負担、調査期間は年度毎の換地工区内の調査とし、上物の収穫後から、植栽期間以前とすること、調査範囲は掘削の深い水路部分のみとし、遺跡の拡がる田畑面の土砂移動は極力避けて現状保存とする、調査の事業主体者は館林土地改良事務所が実施、群馬県教育委員会に実質的な調査を依頼、太田市教育委員会、太田市史編集室の協力を得て実施することになった。

発掘調査と報告 発掘調査は48年度、49年度に安房田遺跡、遠笠遺跡、塚井遺跡、50年度、51年度に清水田遺跡、花ノ木遺跡、宮免遺跡、上神原遺跡、塚廻り古墳群、52年度に小町田遺跡を発掘した。以上9遺跡の発掘調査の成果は、昭和54年度に「塚廻り古墳群」として、そして本年、59年度に安房田遺跡、塚井遺跡、清水田遺跡、小町田遺跡の4遺跡が「太田東部遺跡群」として報告されることになった。

地理的・歴史的環境

県営ほ場整備の計画された太田東部地区は県の東部に位置している。市町村の境界は東を邑楽郡邑楽町、西は太田市、南は邑楽郡大泉町、北は栃木県足利市である。計画地の地理的条件は北を県道佐野・太田線に、東は藤川、南は国道122号線に、西は竜舞・山前停車場線に囲まれた地域である。標高25mから35mの沖積平野は、西から東南に $\frac{1}{100}$ ～ $\frac{1}{1000}$ の緩傾斜をなす農耕地である。現況は田554ha、畑26ha、樹園地29haであるが、湿地帯の水田を排水路整備事業を実施することにより畑地を105haに転換するなど変作地帯を目指している。地形的環境は大泉町の乗る邑楽台地が利根川、古渡良瀬川の自然堤防として堆積し、吹き寄せられた火山灰質砂が古砂丘を形成した。その後の海退に伴って河川の侵食が進みローム層が堆積して現状の台地となったといわれている。この邑楽台地の北方には、旧渡良瀬川の流路に沿うように台之郷、下小林、竜舞地区を乗せる葦川台地と休泊台地が北西から南東に向かって続く。この洪積台地は中部ローム層以上を乗せるが原形面はラミナの発達する特異な砂礫層である。この台地の東方から足利市にかけては、太田市北東部の唐沢地区を頂頂に開き始め、八重笠、沖之郷地区を扇状にする扇状地形を呈する。この扇状地は、形成時期から2面に分類される。旧渡良瀬川の一支流と考えられる葦川用水路に沿って上部ローム層上部を乗せる洪積世未形成のI面と、沖積世に形成されたもので旧渡良瀬川の一支流矢場川沿いに展開するII面とに区分され、総称して渡良瀬川扇状地と呼ぶ。さて、これらの扇状地面より一段下の水田下から遺跡が多数発見されている。これらの遺跡の乗る埋没地形は、邑楽台地の自然堤防の延長なのか、扇状地面であるのか明らかではない。けれども、この微高地は、なぜ埋没しているのだろうか。今後も、考古学と地質、地理学などの共同作業をとってこの地域の自然と歴史の解明を進めてゆかねばならないであろう。太田東部遺跡群は縄文時代では草創期～後期を中心とする遺物、遺構が検出されている。また、弥生時代の遺構の調査例を欠くものの遺物の散布はみられる。古墳時代前期～奈良時代～平安時代にかけては大きな集落が検出されている。これらのことから、当地域の周辺が台地、微高地などの集落立地に恵まれ、また、広範な水田可耕地がひかえていることが長期間の生活を支えたものと考えられる。ここで、各時代ごとに本地域の遺跡の変遷を概観しておきたい。旧石器時代の遺跡は本地域内では確認されていないものの、邑楽台地上に今後発見されてゆく可能性は高く、すでに御正作遺跡ではナイフ形石器を伴うユニットが調査されている。縄文時代では草創期には小町田遺跡、上遺跡、間之原遺跡、早期には小町田遺跡、焼山遺跡、賀茂遺跡、上遺跡、間之原遺跡などで有否尖頭器や土器などが確認されているが、いずれも量も規模も小さく少ない。前期になると、特に関山、黒浜期の遺跡が増加し集落も調査されている。小町田遺跡、賀茂遺跡、上遺跡、間之原遺跡、清水田遺跡、塚廻り古墳群、細金遺跡、御堂遺跡、大塚・間之原遺跡、焼山遺跡である。中期になると、前半は遺跡は減少するものの後半はまた増加してくる。小町田遺跡、賀茂遺跡、上遺跡、灰塚遺跡、雷遺跡、間之原遺跡、御堂遺跡、焼山遺跡である。後期には遺跡が減少する。雷遺跡、塚廻り遺跡、間之原遺跡である。晩期は僅少ではあるが、間之原遺跡で分布が認められる。弥生時代の遺跡は遺構の調査例はないものの、淡沼遺跡、間之原遺跡、焼山遺跡などで遺物の散布が認められる。古墳時代前期には、上遺跡、清水田遺跡、沖之郷遺跡、深町遺跡、細金遺跡、間之原遺跡、大塚・間之原遺跡、焼山遺跡、賀茂遺跡であるが、前期前半石田川期の集落の進出が目立つ。古墳時代後期になると、集落は台地縁辺、微高地上に拡散する。これらの古墳時代の各時期、各集落がこの地域のどの首長墓に対応するのかは今後の研究課題ではあるが、4世紀代の矢場兼師山古墳、藤本観音山古墳、5世紀代の太田天神山古墳、女体山古墳、更に各地域ごとに展開する6世紀代の矢場川古墳群、塚廻り古墳群、松本古墳群など中小首長墓の系譜は続く。また7世紀代終末期に所属するであろう谷ノ裏古墳群の一部は東側に近接する磯神社の礎石群、すなわち初期寺院と対応させて考えると興味深い。



第1図 太田東部遺跡群の位置と範囲

発掘調査

昭和49年1月から昭和53年4月まで5年度、9遺跡の発掘調査を実施した。以下、調査年次順に太田東部地区内の遺跡の位置（第1図）を参照しながら調査の概略をまとめておきたい。

安房田遺跡 昭和48、49年度の2年次にわたり発掘調査を実施した。沖之郷集落の東方、礎神社の南方に位置する。従来、低湿地中に分布する微高地上に土器片が広域に散布していることから、「沖之郷遺跡」といった大字単位の遺跡名を冠していた。けれども調査の結果は、遺跡がそれぞれ独立、異った立地と性格を有している可能性が強く、小字名から安房田遺跡とすることになった。

達笠遺跡 昭和48年度の発掘調査で遺跡の範囲確認を実施した。安房田遺跡の北西、小さな谷が西北から東南に横切る北側の微高地、西に接して葦川用水が流れる。遺跡の東西方向と北方向の広がり、追求していないが、南限と考えた。沖之郷小字二ノ塚までは遺跡の存在は認められなかった。発掘面積は試掘溝で100㎡と狭い。遺構は検出されなかったが遺物の出土は少量ある。

塚井遺跡 昭和49年度に発掘調査を実施した。低湿地中に存在するもの、すでに昭和10年代には古墳群として記録され、周知の遺跡であった。立地は清水田遺跡の東南方向、清水田遺跡の舌状台地の先端部分が埋没したものと考えられ、集落と墳墓の複合した「遺跡」とした。

清水田遺跡 昭和50年、51年度に発掘調査を実施した。大字茂木字塚井、稲荷塚、榎町、清水田を中心に広域に遺物が散布する。遺跡面積は16,000㎡とされていたが調査の結果からは東に西北方向に拡がることは確実である。第1次調査では4,000㎡、第2次調査では6,300㎡の調査面積を測る。石田川期は調査区域に平均して分布し、鬼高期は西寄りに偏在する。国分期は北側全体に集中し、切り合いも多く、長期的に継続した集落と考えられる。

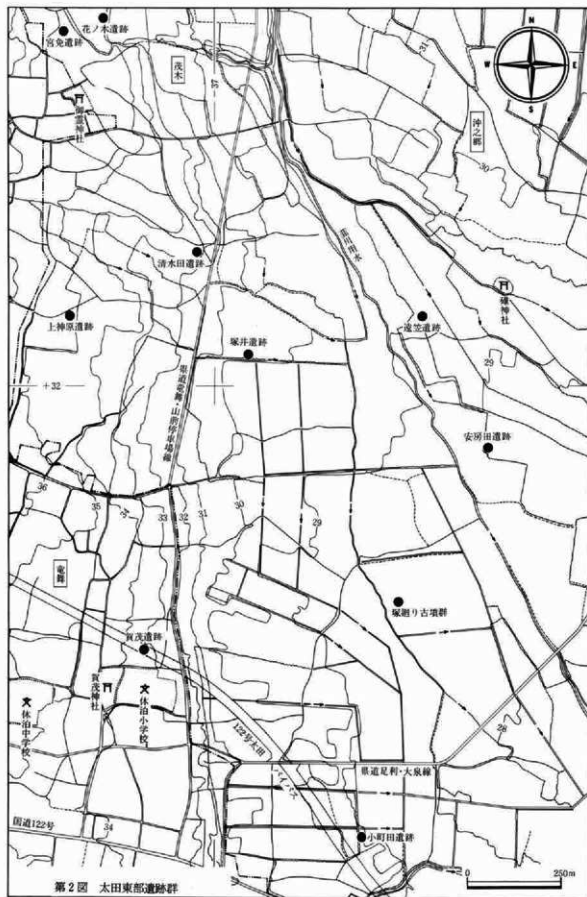
花ノ木遺跡 土地改良区の北側に近い低台地の先端に位置する。台地を掘削、流出する小河川に区分された対岸の位置には宮免遺跡がある。遺跡範囲は独立気味な地形で7,500㎡と考えられ、調査地点は水路部分に限定された。遺跡地の東側に試掘溝80㎡が穿たれ、遺構は検出されなかったが、遺物の包含は確認された。

宮免遺跡 花ノ木遺跡の対岸、南側に位置する。小河川の入り組んだ奥の5,000㎡が遺跡の範囲である。調査は掘削の深い水路部分に限定され、遺跡地の北側80㎡に試掘溝が穿たれた。遺構の検出はなかったが、若干の遺物の包含は認められた。

上神原遺跡 休泊小学校北方1kmの台地中央部10,000㎡に遺跡が存在するが、それも散布が密の範囲を指すさらに広域な遺跡である。発掘調査は水路部分に限定され、200㎡を試掘した。その結果は、遺構は検出されなかったが、遺跡の包含層は認められた。

塚廻り古墳群 昭和51年度、清水田遺跡の発掘中に検出された。地名が物語ってはいたものの、現況での遺跡の確認は不可能に近かった。遺跡の範囲は、塚井遺跡に続く40,000㎡と考えられるが、発掘調査は水路掘削で発見された範囲1,200㎡に限定した。墳丘下には石田川期の包含層が古墳は鬼高期で7基が調査された。塚井遺跡と性格的には近似するが、占有する時代の推移が異なる。

小町田遺跡 土地改良区の南側、微高地上40,000㎡に遺物が分布する。土地改良区内は昭和53年に県教育委員会5,200㎡、一般国道122号バイパス敷地内は果埋蔵文化財調査事業団が6,300㎡発掘調査を実施した。遺物は縄文草創期から弥生時代を欠き平安時代と続く。遺構は縄文時代の住居址、土壌、古墳時代の住居址、奈良平安時代の溝、平安時代の住居址が検出された。



第2図 太田東部遺跡群

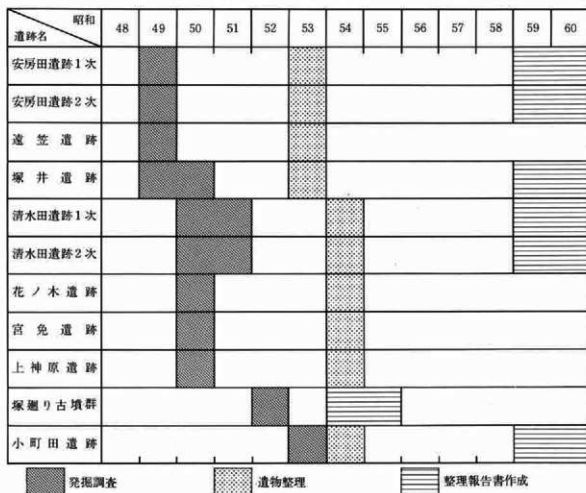
調査組織

今回報告する安房田遺跡、塚井遺跡、清水田遺跡、小町田遺跡の4遺跡の発掘調査は、群馬県教育委員会文化財保護課が担当した。遺物の基礎整理（注記、復元、一部の実測作業）は同じく文化財保護課が担当した。また、整理、報告書の作成は群馬県埋蔵文化財調査事業団が担当し、実施した。主たる調査関係者は以下の通りである。

発掘調査

担当者	群馬県教育委員会文化財保護課	原田 恒 弘
	同	飯塚 卓 二
	同	石塚 久 則
調査員	太田市教育委員会文化財担当	久保田文雄
	太田市史編集室原始古代担当	岡部 修 一
	群馬県教育委員会嘱託	山下 歳 信
遺物整理	群馬県教育委員会文化財保護課	飯塚 卓 二
	同	石塚 久 則
整理、報告書作成	群馬県埋蔵文化財調査事業団	石塚 久 則

なお、清水田遺跡の土壌や発掘区東南区の住居址については紙幅の限界から一覧表で割愛せざるを得なかった。また遠笠遺跡、花ノ木遺跡、宮免遺跡、上神原遺跡の発掘成果についても次回の報告にゆずった。



第3図 調査進行図

第Ⅱ章 安房田遺跡の調査

1 調査概要

概要 発掘調査の経過 昭和48年度の太田東部地区ほ場整備工区内に、群馬県遺跡台帳掲載「二之堰遺跡」が存在していることが判明していた。この遺跡地の保存の取り扱いをめぐって、同年5月と10月に群馬県新地開発課、館林土地改良事務所の太田東部事業所、群馬県教育委員会文化財保護課3者との間で協議がもたれた。その結果、当該遺跡について工事着工以前に発掘調査を実施する必要が確認された。また予算不足から調査範囲は水路部分に限定し、遺跡範囲の他の部分の表面削平は行わず、現状保存が約束された。調査期間は、上物保障をさけて、昭和49年1月から実施することとし、経費は群馬県耕地開発課が負担することになった。事業主体は館林土地改良事務所で実施し、発掘調査を群馬県教育委員会に依頼し、太田市教育委員会、太田市史編纂室の協力を得て実施した。昭和48年度の発掘を実施したところ、遼笠遺跡、安房田遺跡、二ノ堰遺跡といった遺跡が低地帯にそれぞれ独立して存在することが確認された。更に、水田として削平予定されている畑地部分の計画について、遺跡地で保存の不可避な部分については、昭和49年度に発掘調査を実施することとした。安房田遺跡の昭和48年度の発掘は、昭和49年1月に160㎡、昭和49年度の発掘は49年11月から12月にかけて1,158㎡の面積を調査した。

遺跡の環境 本遺跡は周囲の現水田面より50cmの比高差を持つ、東南方向へ張り出した舌状の洪積台地上に位置している。周辺にはこのような低い洪積台地が島状に取り残されていて、中、小の水路がその間を縫うように東南方向に走る。古墳時代から平安時代にかけての集落跡は安房田遺跡から、北西400mの距離に遼笠遺跡、同じく200mの距離に二ノ堰遺跡、北東1.2kmの距離に後原・清水田遺跡が存在する。これら4つの遺跡は、従来沖之郷遺跡の中に包括されて呼称されていたが、発掘調査の結果個々の遺跡に分類したものである。古墳時代の墳墓は西北西700mの距離に塚井遺跡(谷ノ裏古墳群)が、南西500mの距離に塚廻り古墳群が位置する。また、北方400mに鎮座する礎神社境内の礎石群は、奈良時代の寺院址の可能性が高く、この地域の空白の時代を埋める遺跡として特に興味を引く。

発掘された遺跡の変遷 本遺跡に初めて遺構を残したのは、古墳時代前期になってからである。石田川期の住居址が3軒検出され、北西から南東に直線的に並び、この時期の集落の拡がりや北東方向にのびることが予想される。古墳時代中期、和泉期になると、集落は東側に近接して営まれる。検出された石製模造品もこの時期に帰属するものと考えられる。集落の住居地域外の空間機能を考えてもよいのであろうか。古墳時代後期になると、本遺跡では住居址は検出されず、大、小の水路3本が検出された。同一方向で、同時期に機能した農業生産用の水路であろうと考えられる。奈良時代の遺構は存在せず、平安時代になると、住居址1軒と掘立柱建物1棟が検出されている。河川に制限された小規模な遺跡であるが、古墳時代前期から平安時代まで比較的安定した集落が継続して営まれたものであろう。

調査日誌

安房田遺跡(第1次) 1974年1月10日～1月29日

1・10 調査担当者、太田市教育委員会担当、土地改良関係者と現地集合。打ち合わせ。調査担当者で遺跡周辺のマッピング。周辺低湿地帯が続き、わずかに微高地残る。遺跡の存在あやふゆ声もあり。午後、本課に戻り発掘器材準備。

1・11 調査事務所へ、発掘器材搬入。午後、地権者を中心に作業員募集に歩く。

1・12 遺跡地造査、近景写真撮影。発掘作業員に集まっていたり手続き、連絡事務。

1・14 発掘区の設定。土地改良事業計画書上、表土カットは最少限にとどめられそうなので、掘削の深い水路についてのみ調査する。測量開始。

1・15 発掘区の南側、Fトレンチより発掘開始。Eトレンチに黒色の落ち込み検出。住居址か。

1・16 Dトレンチ発掘着手。全体的に黒色を呈し、土器器の破片大量に出土。

1・17 Cトレンチ発掘着手。溝一本、住居址らしき落ち込み1ヶ所検出。

1・18 Bトレンチ発掘着手。Aトレンチ寄り、すなわち北寄りにローム面が落ち込む。

1・19 出土遺物水洗、注記作業。今後の調査方針について打ち合わせ。地形としてはBトレンチに北端、Fトレンチに南端の落ち込みあり。住居址らしき落ち込み4ヶ所、溝1条検出。トレンチ内のみ調査にするのか、拡張するのかが協議。遺構検出レベルと、工事掘削レベルとの関係を再度、土地改良側と打ち合わせを適切に行なうことにする。

1・21 課内会議の連絡に担当1名参加。午後より土地改良側と協議。発掘区西側へ30mは掘削レベル変更不可能なため次年度に再調査することになる。また、住居址らしいという不安定なデータでは困るので1部分拡張して発掘成果を土地改良側に示すことになる。

1・22 Eトレンチに検出された5号住居発掘開始。B、Cトレンチに検出された2号住居発掘開始。この部分はトレンチ内のみ調査にとどめる。

1・23 Dトレンチの3号住居は、西2方向に拡張区設定。発掘開始。3号住居の南側に土器層検出。7号住とする。

1・24 7号住の東・西拡張区設定。発掘開始。2号住は平面形の北東隅を発掘している。5号住は平面形の西隅を発掘している。3号住は拡張区の外側作業。

1・25 2号住土層断面検出。遺構全景写真撮影。5号住土層断面図検出。遺構増補後、全景写真撮影。

1・26 2号住、5号住土層断面図、平面図作成。3号住土層断面図検出。遺構全体写真撮影。平面実測図作成中。

1・28 7号住遺物取り上げ後の精査。6号住検出。現在の拡張区内での調査にとどめる。3号溝の土層観察ベルト外し。

1・29 3号住の床面下の精査、実測図の補正。器材点検。出土遺物、器材撤収、関係機関の挨拶まわり。本日に終了。

安房田遺跡(第2次) 1974年11月11日～12月7日

11・11 発掘器材搬入。発掘作業員集合、雇用手続事務。遺跡地造査写真撮影。発掘区設定、重機による表土剥ぎ準備。

11・12 重機による表土剥ぎ開始。併行してジョレンによる遺構検出作業。発掘区測量作業。

11・13 表土剥ぎ作業。レベル基準の移動作業。掛土量と作業員不足の関係からベルトコンベアー導入準備。

11・14 表土剥ぎにベルトコンベアー使用開始。エンジン調整に若干手間どる。B1、C1区を中心に遺構検出作業。

11・15 遺構検出作業。B2、C2区を中心に進める。基準土層の検出。作業員確保のため、マイクロバスのチャーター手続。

11・16 土層検出作業続ける。A1～A3区遺構検出作業・遺構全体の検出を急ぐ。

11・18 A0、B0、C0、D0、E0、F0区の遺構検出作業・前年度の調査区との関係を把握する。

11・19 B3、C3、D3、E3区の遺構検出作業。本日に2遺構全体の把握が完了し、明日より遺構発掘作業にかかる。

11・20 1号住発掘作業開始。2号住発掘作業開始。1号溝、2号溝発掘作業開始。

11・21 おだやかな発掘日。1号住床面精査。2号住床面精査。いづれも住居址埋土は浅い。

11・22 1号住床面精査。写真撮影。遺物取り上げ。2号住床面精査。写真撮影。遺物取り上げ。B1区より柱穴検出。

11・23 B1区の柱穴群検出の結果、4号住として調査予定。出土遺物の水洗作業を始める。実測図検出。

11・25 1号住、2号住遺構全体写真撮影。高齢者多く、タワー移動も担当者だけ。1号溝、2号溝精査。

11・26 1号溝、2号溝写真撮影。3号溝発掘開始。土層断面検出作業。1号溝遺物取り上げ作業。

11・27 3号溝発掘作業。

11・28 2号溝遺物取り上げ作業。

11・29 2号住居床面下精査。柱穴より柱材の遺存確認される。更に床面下に掘り方検出。

11・30 2号住居址の柱材を土層図との関係で、大規模な断面を作ることにする。調査終了間近。

12・1 調査も終盤になり、担当者による調査方針への確認と遺構検出を実施。3号溝発掘作業。

12・2 雨天のため午前中に発掘作業中止。室内にて出土遺物の水洗、注記作業。実測図面の検出。

12・3 3号溝発掘作業。土層断面3ヶ所のそれぞれ切り合い関係がもう少し不明な点がかかる。

12・4 午前中は全員で遺構の全体写真撮影準備。終了後、3号溝の周辺精査。遺構外の面の再度のジョレンかき。

12・5 2号住居址柱穴土層断面図作成準備。柱材を中心に発掘区を設定。発掘作業。3号溝精査。

12・6 2号住居址柱材の写真撮影。土層断面図実測。3号溝の土層図作成。切り合い関係について慎重な確認作業続く。

12・7 実測図面の再検出。3号溝の土層断面図について担当者と意見調整。器材撤収、点検、搬出。関係機関へ御礼挨拶。

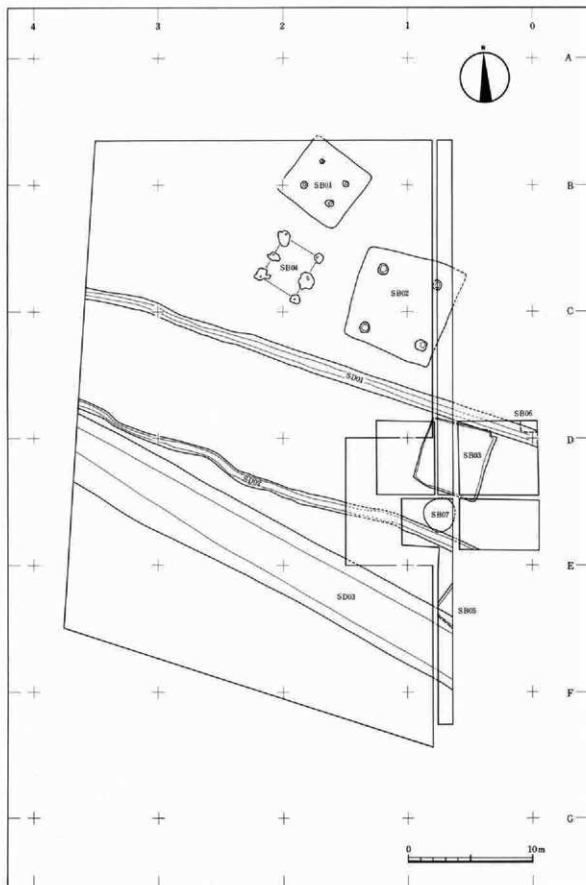
2 遺 跡

概要 発掘区は東西に走る支線道路27号と南北に走る支線排水17号の交点を基点とした。基点から95mの位置に仮柱を打ち、そこから東に直交して7.5mをA-0の杭とした。北から南へ10mのピッチでA~F、東から西へ10mのピッチで0~4のグリッドを設定し発掘区とした。発掘区の方眼北はN-3°-E、遺跡の位置は第IX座標系、X=-36.150、Y=+31.900である。発掘調査は48年度、49年度の2年次におたり実施した。1年度は南北に走る支線排水17号の水路部分160㎡を発掘調査した。2年次は東西に走る支線道路から支線排水17号を南下した100mから150mの間の西側1158㎡を発掘調査した。検出された遺跡は住居址と溝であった。竪穴住居址は6軒検出され、発掘区の東北側に集中していた。いずれも古墳時代から古代に属し、石田川期は3軒、和泉期は2軒、国分期は1軒であった。石田川期の住居址はいずれも正方形の平面形で、4本の主柱穴を持つ。3軒は北西から南東の斜めの線上に並び、隣接する同時期の住居址が3mと近く、同時代内での年代幅が考えられる。和泉期のS B05は竪穴住居址であるが、S B07は土器のみであった。けれども本遺構は住居址平面の検出ができなかった結果によると考えられる。2つの遺構が3mと距離が接近しており、同時期内での幅が考えられる。国分期の住居址は発掘区東隅で一部分検出された。掘立柱建物のS B04は国分期と考えられ、東西1間×南北2間の柱間であった。溝は3本検出された。発掘区内では30mの長さを西から東へ横断する。方向もN-65°-Wほどで平行して走り、S D03の溝にも同方向の重複が考えられた。いずれも鬼高期に属し、埋没時期に相当流水の早い条件で埋没してしまったことが考えられた。



第4図 安房田遺跡 発掘調査区設定図

第II章 安房田遺跡の調査

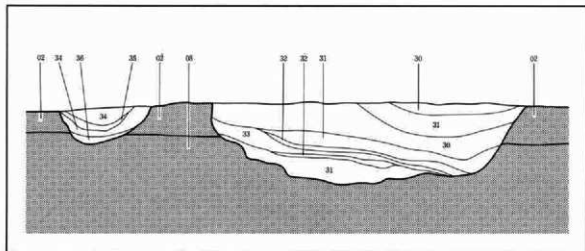


第5図 安房田遺跡 全体図

基準土層

本遺跡は沖之郷集落の西方の菰川用水路東端に近く位置する。北方には確神社が存在し、現在広々とひろがる低湿地帯の埋没土の下に起伏に富んだ旧地形が刻み込まれていることが予想されていた。発掘調査は土層の層序確認をトレンチにて、平面での遺構検出面確認までは重機を使用した。遺跡地の基本土層は3層に大別される①表土層は2層からなり、上層は現水田耕作面で暗灰褐色土層で下層より多孔質で軟らかい。下層は上面の鋤床下層で灰褐色粘質土層である。②遺物包含層は黒褐色の粘質土で低地に向かうほど厚さを増し、高位面では存在しないところもある。③旧表土面は遺物包含層の下半部分で黒褐色粘質土が上層、黄褐色ローム質土が中層、青灰色シルト層が下層の3層に分離される。調査では層序に番号をつけて凡例とした。

- 01層 旧表土層 黒褐色粘質土層で上部に遺物包含層を乗せる。
 02層 旧表土層 黄褐色のローム層であるが、水田下に常時あるためか、灰色味が強い。
 03層 旧表土層 ローム層下に存在し青灰白から灰白色と色調は変化する。土質も粘土層からシルトへ変化。
 10層 住居址覆土 住居址覆土の上部を占める。黒色土中にローム粒の小さなもの、褐色粒も含む。
 11層 住居址覆土 住居址覆土の下部を占める。黒色土は硬くしまり焼土、炭化物を含む。
 12層 住居址覆土 住居址床面近くに薄く堆積する焼土、炭化物、灰層が多様に混土している。
 13層 住居址覆土 住居址の壁際を中心に堆積する土層で、壁崩落土と考えられる黄褐色ロームブロック。
 14層 住居址覆土 床面下の整地土層である。黒色土と褐色土、ローム粒に焼土、灰層も混土する。
 20層 掘立柱建物の柱穴埋没土層 茶色味の強い堅くしまった黒色土層である。
 30層 溝堆積土層 溝堆積土中の上層を占める灰褐色土層で粘質土中に砂層をラミナ状に挟む。
 31層 溝堆積土層 溝堆積土中の下層を占める灰褐色土層で上層より黄色味が強く土質は砂層が主体。
 32層 溝堆積土層 不安定な堆積をみせる薄い間層で黄褐色粘土質土層、土質は砂質分が強い。
 33層 溝堆積土層 砂層中に径5mm程度の小石を含み河川からの流入、堆積を推定させる。
 34層 溝堆積土層 灰褐色粘土層 S D01、S D02に堆積する硬質土層で黒褐色ブロックを混土する。
 35層 溝堆積土層 暗褐色粘土質層 S D01、S D02に堆積する。
 36層 溝堆積土層 黒褐色粘土質層 S D01、S D02に堆積する。

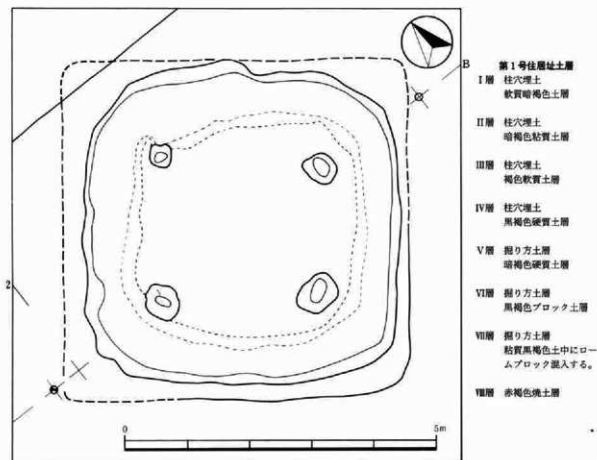


第6図 安房田遺跡 溝断面模式図

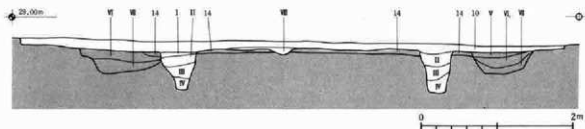
住居址

第1号住居址 (出土遺物 第27図)

本遺構は発掘区の北寄り、A-1区に位置する。本住居址は他の遺構と重複しない。平面形は隅丸正方形を呈し、規模は一辺の長さ5.4×5.5mを測り、床面積は29.7㎡である。主軸はN-40°-Eを示す。壁の高さは全体的に浅く最深度で17cmを測り、壁は垂直に近く立ち上がる。主柱穴が4本検出され東西約2.6m、南北約2.2mで長方形をとる。竈は検出されなかった。床面下主柱穴の外側には幅40cm、深さ20cmで逆台形の掘り方がめぐる。本住居址の時期は覆土、出土遺物、住居構造などから石田川期と考えられる。



第7図 安房田遺跡 1号住居址平面図



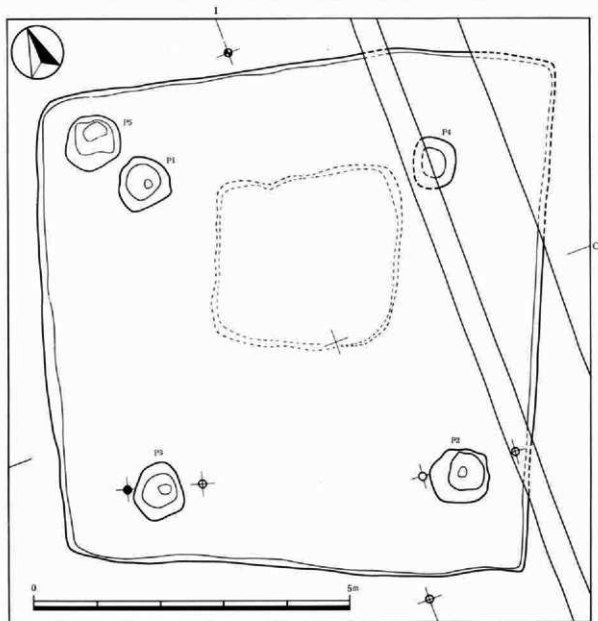
第8図 安房田遺跡 1号住居址断面図

第2号住居址 (出土遺物 第28、29図)

本遺構は発掘区の北寄りB-0区に位置する。本住居址は他の遺構とは重複しない。平面形は変形した方形を呈し、規模は長さ8.2m×7.9mを測り、床面積は約64m²である。住居址の主軸はN-23°-Eを指す。住居址の立ち上がりは垂直に近く、壁の最深部で27cmを測る。炉の位置は確認されなかった。床面上で支柱穴は4本(P1～P4)検出された。P1の北側にP5が検出され、深さが10cm、焼土が多量に出土している。P1とP4寄りの床面下に深さ15cmで東西2.9m、南北3mの隅丸方形の掘り方が検出された。住居床面上との関連性は掴めなかった。

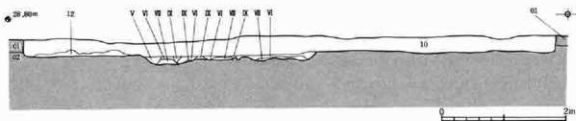
遺構土層は、旧表土が2層、住居址覆土は2層、掘り方覆土は3層に分層された。VI層は黒褐色ブロック土層、VII層は粘質、黒褐色土中にロームブロックを混入する層、IX層はロームブロック層である。

なお、P1～P3の支柱穴掘り方底面から柱根が検出された。樹種は鑑定依頼中である。

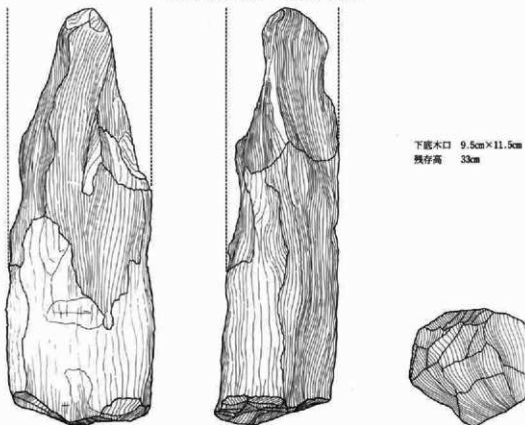


第9図 安房田遺跡 2号住居址平面図

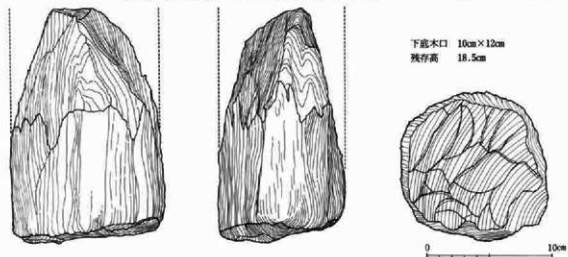
第II章 安房田遺跡の調査



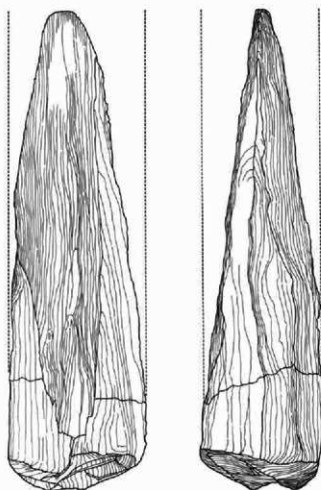
第10図 安房田遺跡 2号住居址断面図



第11図 安房田遺跡 2号住居址柱根 (1) (P1)

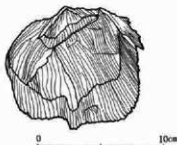


第12図 安房田遺跡 2号住居址柱根 (2) (P2)

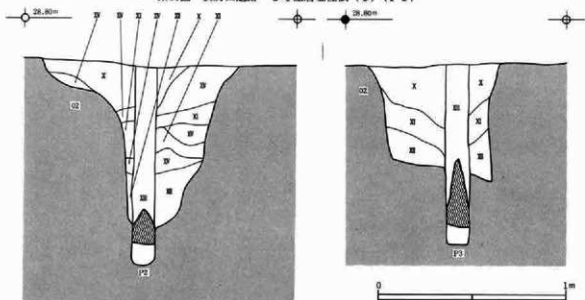


下底木口 9.5cm×11cm
残存高 38cm

注 S B02から出土した柱根は3本でい
ずれも木取は角材で木口は手斧ハツリ
による整形である。柱根底下のための
礎盤などの施設はないが、不定形な掘
り方底部に柱根と同じ径の穴を掘り不
動を保っている。



第13図 安房田遺跡 2号住居址柱根(3)(P3)



第14図 安房田遺跡 2号住居址柱穴断面図(P2・P3)

柱穴埋土

X層 硬くしまった灰黒色ロームブロック。
II層 灰黄色ロームブロック

III層 黒くよごれた粘質ローム。

IV層 多孔質の灰黒色土。

V層 黒色土中に灰黒色ブロックを含む。

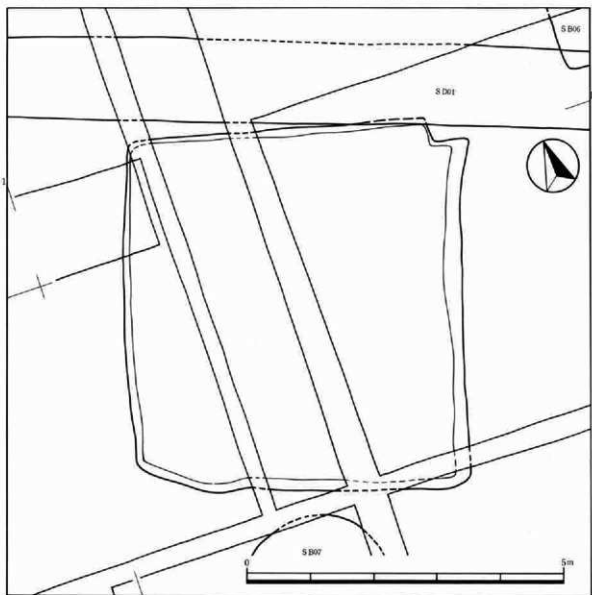
第3号住居址 (出土遺物 第30図)

本遺構は発掘区の中央部で東寄りのC-0区に検出された。1次調査の試掘溝で発見され、周辺を拡張して全掘したものである。平面形は方形を呈し、長さ東西5.3m、南北5.7mを測り、壁の深さは17cmである。柱穴、竈、炉、焼土範囲など住居遺構の施設は検出されず、特徴といえば、北東隅の一部に切り欠きが見られるのみであった。住居址の主軸方向はN-20°-Eを指す。発掘区北側ではS D01により切られ、南側ではS B07により切られている。

遺構覆土は基準土層の10層に近い層が一括堆積していたが、下層近くには黒色土が硬くしまり、焼土、灰層が少量検出されている。

出土遺物は小破片が多く、21点を数えた。S字状口縁変形土器5、壺形土器4、高杯2、埴8、器台1、甌1に分類された。

住居址構造、覆土、出土遺物の特徴から、本住居址の時期を石田川期とした。



第15図 安房田遺跡 3号住居址平面図

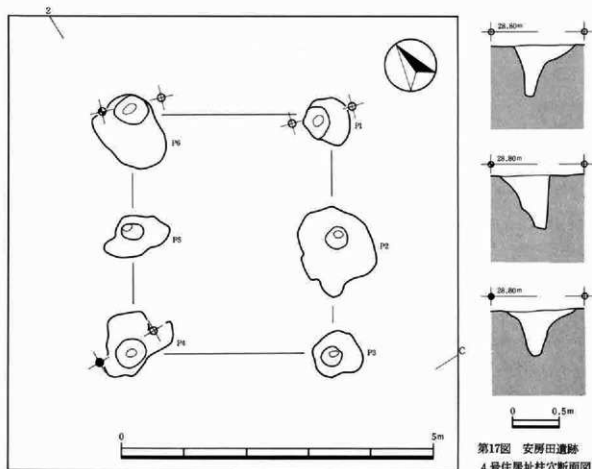
第4号住居址 (出土遺物 第30図)

本遺構は発掘区の北側のB-1区で検出された。S B01が北側に、S B02が東側に、S D01が南側に接して位置している。

本遺構は柱穴が6本(P1~P6)が検出され、掘立柱建物と考えられた。柱穴埋土は6本とも単一土層と判断され、柱痕や抜き取り痕は確認できなかった。埋土は茶色味の強い堅くしまった黒色土層である。柱穴の上面の形は偏楕円で一定しておらず、下面になると比較的安定した柱穴となる。計測値を以下にまとめる。P1は上面での平面形は円形を呈し、最大径85cm、深さ75cmである。P2は上面では最大径は140cmで下面の径は85cm、深さは81.5cmである。P3は円形を呈し、最大径85cm、深さ73.5cmを測る。P4は上面の平面形は不定形で、最大径は130cm、下面は円形で50cm、深さは79.5cmを測る。P5は上面の形は不定形で、最大径は110cm、下面の形は隅丸長方形で径は70cm、深さは82.5cmを測る。P6は上面の平面形は偏楕円を呈し、最大径は130cm、下面の平面形は円形で径60cm、深さは65.5cmを測る。

この掘立柱建物はN-35°-Eを主軸にもつ南北建物で、設計段階では東西3.45m、南北3.88mの仮設建物と考えられる。

遺物はP3埋土上層から土師器の杯が出土している。古墳時代の須恵器模倣杯で、径9cm前後の小形のものである。柱穴埋土はS B01やS D01と若干異なり褐色味が強く軟質の部分もみられ、出土遺物も鬼高期後半と考えられることから時期は新しいと思われる。



第16図 安房田遺跡 4号住居址平面図

第17図 安房田遺跡
4号住居址柱穴断面図

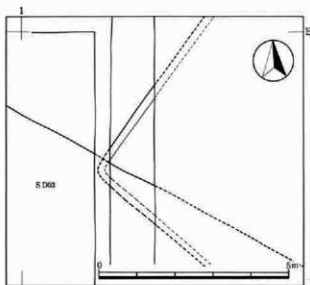
第二章 安房田遺跡の調査

第5号住居址 (出土遺物 第30図)

本遺構は、発掘区の南東隅E-0区、1次調査の試掘溝で検出されている。

北西辺と南西辺の2辺が確認され、それから推定すると、主軸はN-39°-Eと考えられる。掘り込み深さは15cmと浅く、10層にあたる黒色土中にロームブロックの混土層が覆土している。

遺物は9点出土している。「S」字状口縁変形土器、台付壺、単口縁壺、高杯、器台、小形壺、埴などである。住居址覆土の性質や出土遺物などから本住居址は石田川期と考えられる。

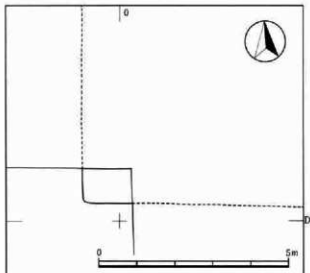


第18図 安房田遺跡 5号住居址平面図

第6号住居址 (出土遺物 第30図)

本遺構は、発掘区の東辺C-0区で検出した。

S B03の拡張区にさらに北東隅で住居址の南西隅だけを確認している。掘り込み深さは20cmで黒褐色軟質土層が覆土していた。隣接して出土しているSD01溝、S B03住居址の覆土より褐色が強く軟質である。ここからも出土している遺物に甌がある。いわゆる羽釜の上に乗せるもので、器形は上半部は羽釜形をして底部は肥厚して外反する口縁部を思わせる。淡黄色を呈し土師器を思わせる酸化焙焼成である。

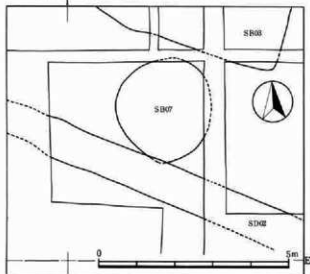


第19図 安房田遺跡 6号住居址平面図

第7号住居址 (出土遺物 第31、32図)

本遺構は発掘区の東側D-0区に位置する。1次調査の試掘溝で検出され、拡張区を設定して全面発掘した。

遺構は黒色土中にロームブロック、焼土を多量に混土した土層に覆われ、東西3.2m、南北3.5mの円形の範囲に遺物が集中していた。柱穴、炉址などの施設は検出されなかった。遺物は土師器が38点出土している。単口縁、球脚壺が11点、「S」字状口縁変形土器が2点、折り返し、複合口縁などの壺が6点、小形壺が6点、埴が5点、高杯が7点、器台が1点に分類される。



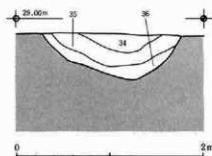
第20図 安房田遺跡 7号住居址平面図

溝

第1号溝 (出土遺物 第32、33図)

発掘区の北寄り、北西から南東の方向、 $N-68^{\circ}-W$ の角度に走る。溝の断面形はゆるやかな「U」字形を呈し、平均的な幅は75cm、深さ25cmを測る。溝の勾配は1/200で発掘区では長さ30m確認され南東へ向かう。土層は基本的には3層に分類される。34層は灰褐色粘土層、35層は暗褐色粘土質層、36層は黒褐色粘土質層である。

本溝はS B03を切っており、覆土中より出土の遺物や土層の色調から使用時期を鬼高期とすることができる。

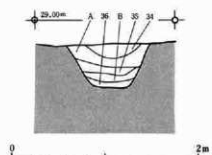


第21図 安房田遺跡 1号溝断面図

第2号溝 (出土遺物 第33図)

本溝は北西から南東方向、 $N-66^{\circ}-W$ に向かって発掘区では30mの長さで走り、勾配は1/200である。溝の幅は上幅45cm、下幅25cm、深さは25cmで逆台形の断面が一般的である。土層は5層に分類され、A層は褐色の粘土質、B層は黄褐色の粘土質である。

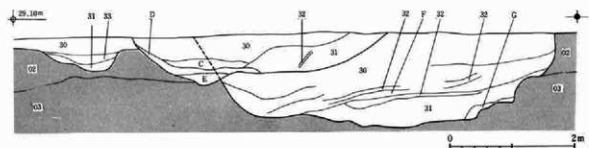
本溝はS B07を切断し、覆土中出土の遺物、土層の色調から使用時期を鬼高期とすることができる。



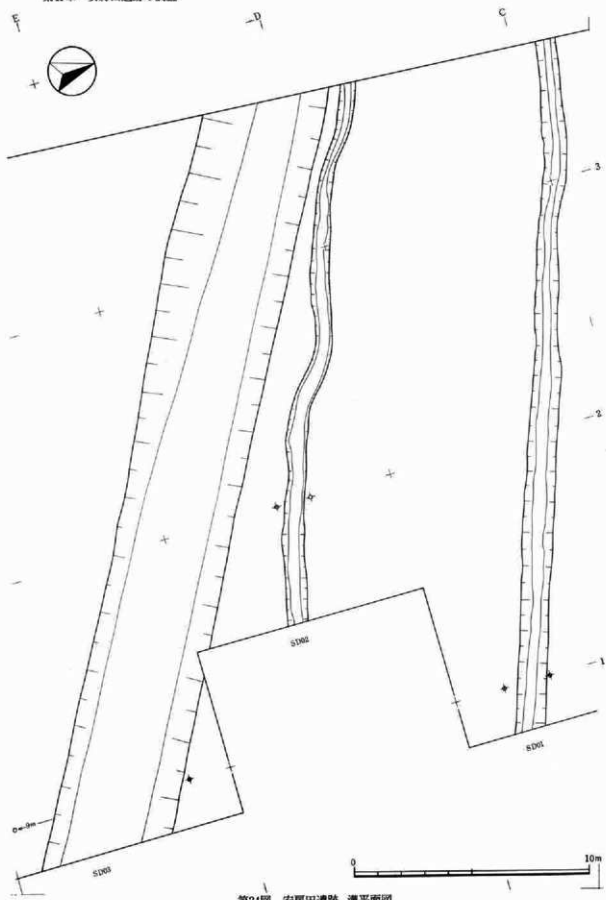
第22図 安房田遺跡 2号溝断面図

第3号溝 (出土遺物 第33図)

本溝は北西から南東へ、 $N-59^{\circ}-W$ の角度、発掘区内では35mの長さで走り、溝の勾配は22/1000である。溝の断面観察では本溝は3回以上の掘削が考えられる。すなわち、左右の小溝と大溝が平行して走り、後に中央を中溝が走る順となる。土層は基準土層に準じ、2層は黄褐色のローム層であるが、水田下に常時あるためか灰色味が強い旧表土層、3層はローム層下に存在し青灰白から灰白色と色調は変化し、土質も粘土層からシルトへ変化する旧表土層。30層は溝堆積土中の上層を占める灰褐色土層で粘質土中に砂層を挟み、31層は溝堆積土中の下層を占める灰褐色土層で上層より黄色味が強く土質は砂層が主体、32層は不安定な堆積をみせる薄い間層で黄褐色粘土質土層、土質は砂質分が強い。33層は砂層中に径5mm大の小石を含み河川からの流入、堆積を推定させる。その他の土層では、C層は荒い砂層、D層の砂質の強い黄褐色粘土質層、E層は褐色粘土質土層、F層は暗褐色を呈する砂層、G層は黄褐色ローム層である。



第23図 安房田遺跡 3号溝断面図



第24図 安房田遺跡 溝平面図

3 遺 物

概要

2年次にわたる発掘調査の総面積は約1320㎡である。

検出された遺構は住居址が6軒で、それらの時期は古墳時代の石田川期が3軒、和泉期が2軒、平安時代が1軒であった。掘立柱建物が1棟検出され、平安期に属している。溝は3本検出され同方向に走る。

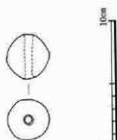
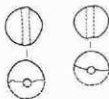
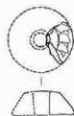
本遺跡から出土した土器は総点数4594点であった。

遺構別にみると、住居址からが1614点、溝からが100点、発掘区からの取り上げが2435点、その他の表採品、出土地不明が445点であった。これらのことから本遺跡では遺物包含層からの量の多さが目立つ。

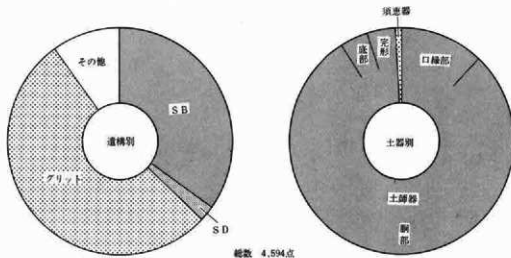
土器別にみると、土師器が4577点、須恵器が17点である。この遺跡が土師器が全体の99%を占め、古墳時代でも前・中期の集落であることかうかがえる。

出土土器のうち図化したものは327点である。報告書に所収しえたものは185点で全体数の4%である。本遺跡出土の土器の特色をみると石田川期の土器で、東海系の特徴を持つ壺形土器片が出土している(PL-3)ことや、多様な口縁部形態を持つ(10、11、12、33、34)壺形土器が目立つ。台付壺形土器を古・中・新の3段階に分けると本遺跡の出土の壺(2、3、4、8、9)は、S字状口縁端部の丸み、胴上半部の刷毛目施文の横線の欠落などから、中の段階に位置づけることができる。

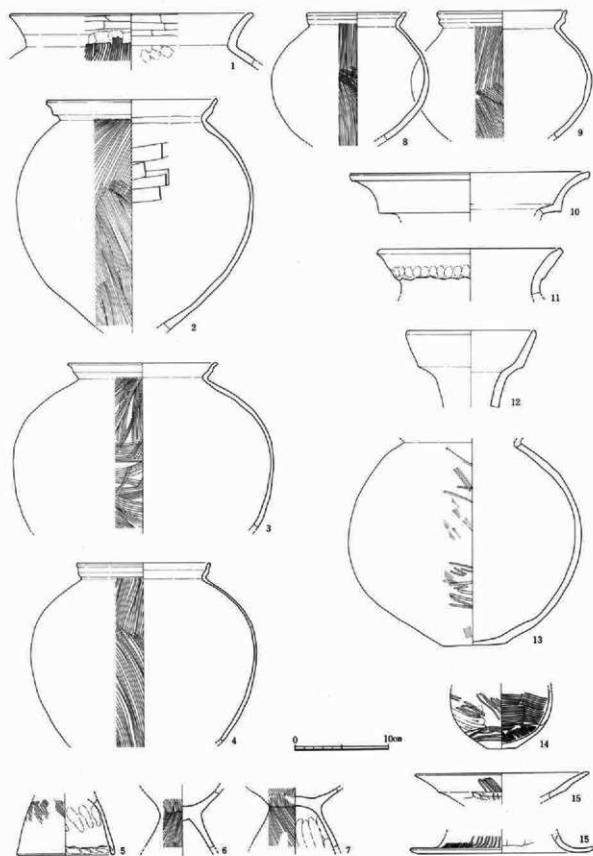
その他の遺物として、石製模造品4点(186~189)がある。186は剣形で長さ13.9cm、最大幅5.2cm、厚さ1.4cmと大形である。187は、剣又は刀子の未成品、188は剣形の未成品、189は剣形の完成品である。母材からの、割り以降の過程を187から189の順にみるようで興味深い。石製品としては紡錘車の残欠(25図 190)、他に土玉3点(191~193)が出土している。



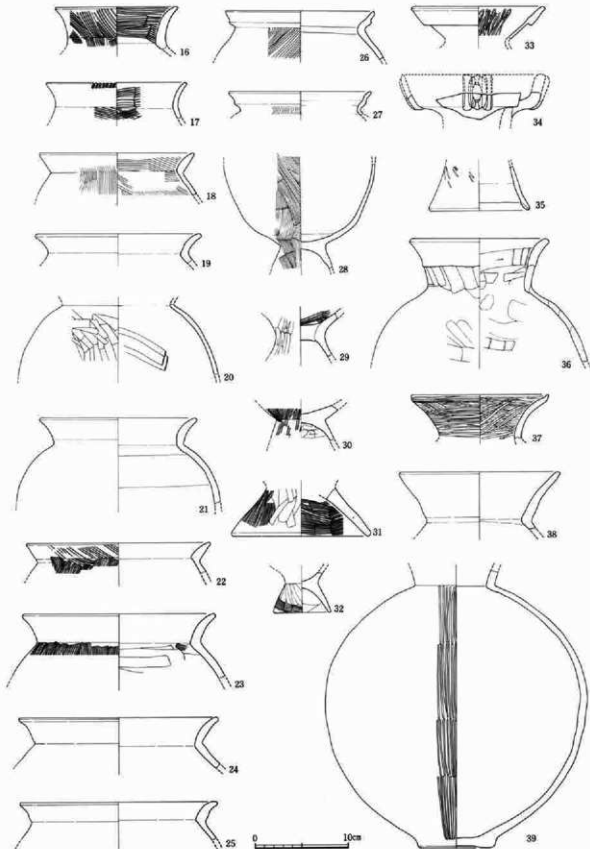
第25図 安房田遺跡
紡錘車・土玉
実測図



第11章 安房田遺跡の調査

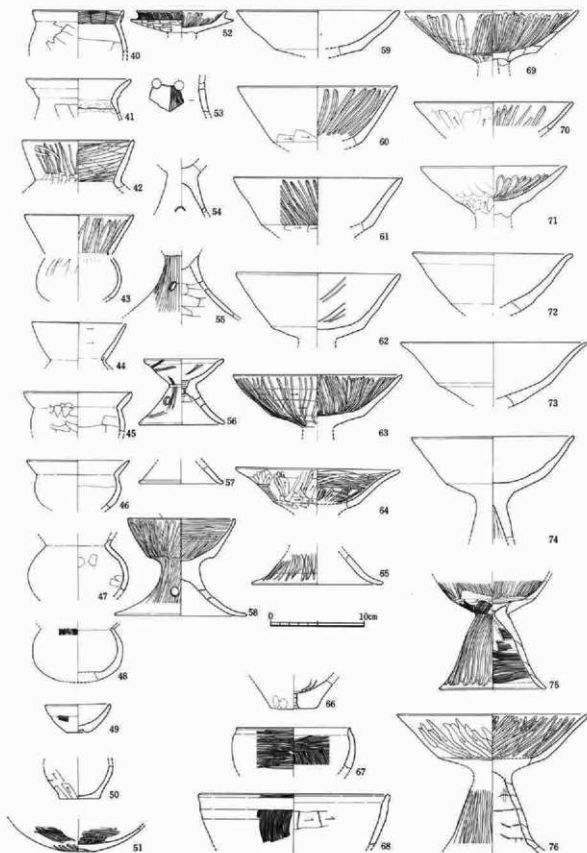


第27図 安房田遺跡 土器実測図(1)



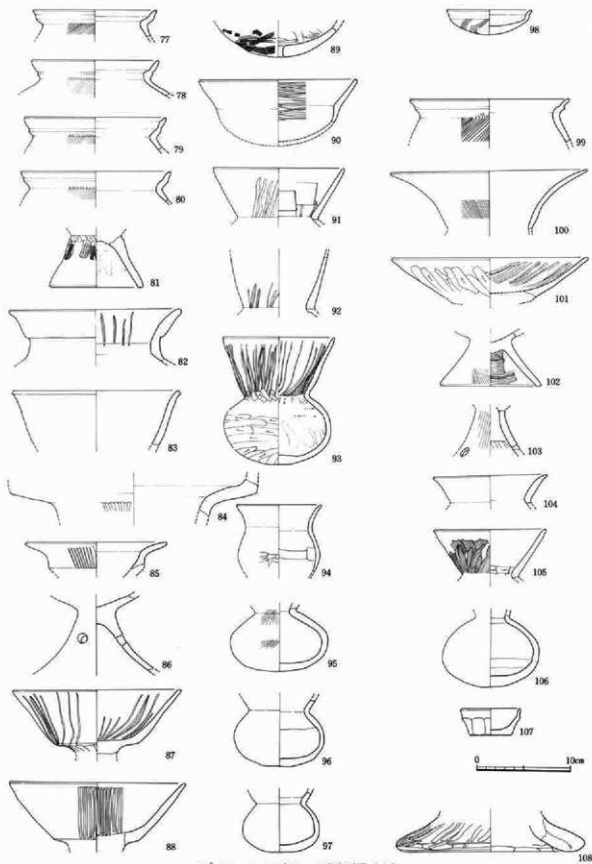
第28図 安房田遺跡 土器実測図(2)

第二章 安房田遺跡の調査



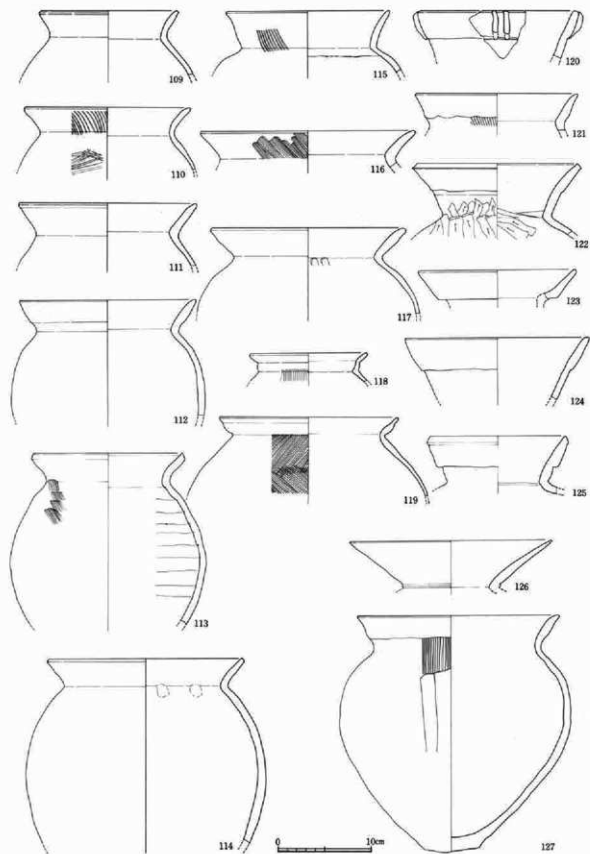
第29図 安房田遺跡 土器実測図(3)

3 遺 物

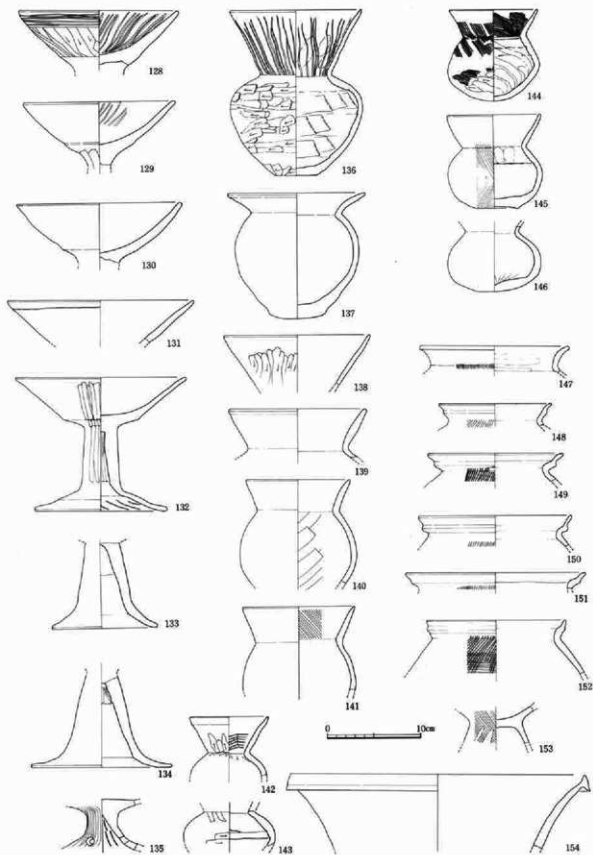


第30图 安房田遺跡 土器実測図(4)

第11章 安房田遺跡の調査

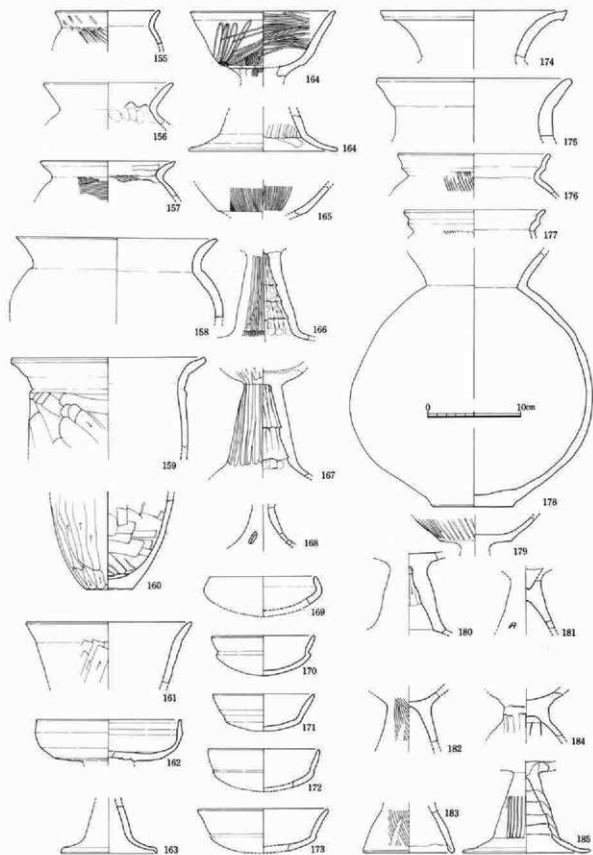


第31図 安房田遺跡 土器実測図(5)

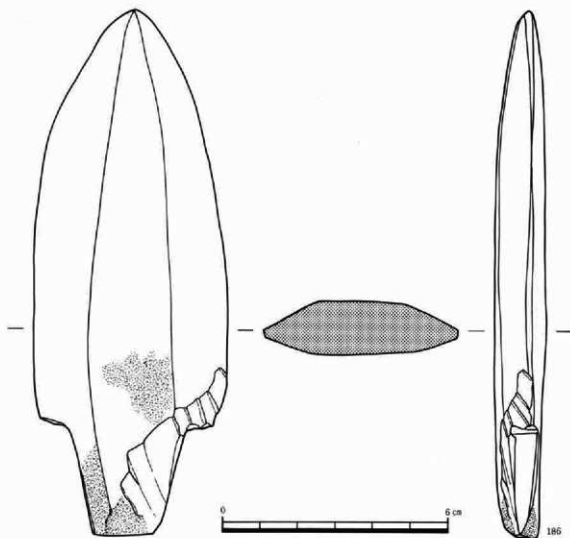


第32图 安房田遺跡 土器実測図(6)

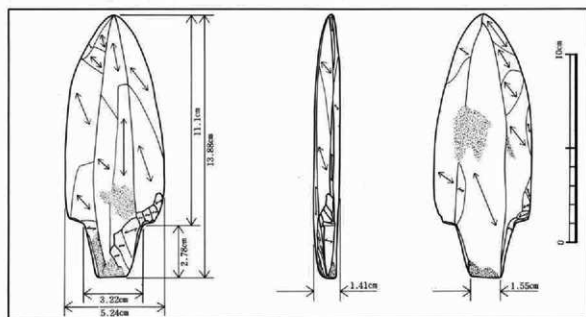
第11章 安房田遺跡の調査



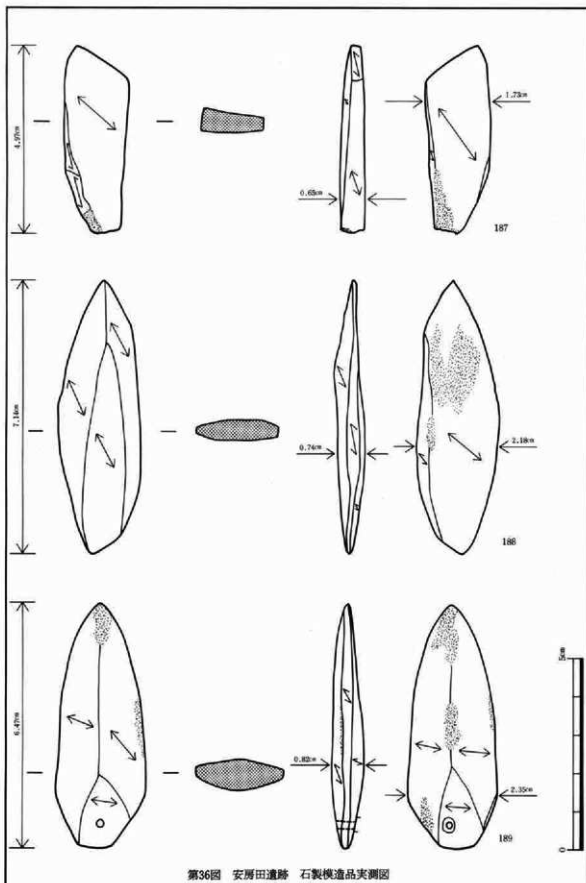
第33図 安房田遺跡 土器実測図(7)



第34図 安房田遺跡 石製模造品実測図

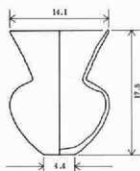


第35図 安房田遺跡 石製模造品の寸法と研磨方向



第36図 安房田遺跡 石製模造品実測図

遺物観察表



法 量 (cm)	
口 径	14.1
器 高	17.5
底 径	4.4

規定次元の場合は()を付けた

安房田遺跡 遺物観察表 (第1表)

遺物番号	器 形	法 量(cm)	器 形 の 特 徴	成・整形の特徴	胎 土	色 調・焼 成	備 考
001 S B01	甕	(26.0) — —	胴部は球形で、「く」の字状に外反する。	口縁部横なで後横刷毛目。胴部外面縦刷毛目。	1~3mmの砂粒含む。	にぶい黄褐色。良好。	
002 S B01	甕	(18.2) — —	体部最大径は中位より上方頸部~口縁部は屈曲。口縁は中間に段、明瞭な段。	口縁部は横なで。胴部外面全体に刷毛目状の押痕あり	小砂粒含む。	黒褐色。堅緻。	
003 S B01	甕	(16.0) — —	有段の口縁。体部は肩が大きく張る球形。最大径は中位。	口縁部は横なで。胴部外面は刷毛目内面なで。	小砂粒含む。	黒褐色。堅緻。	
004 S B01	甕	(14.3) — —	短い有段の口縁。体部は球形。最大径は中位の上方。	胴部外面は、刷毛目整形。	小砂粒含む。	黒褐色。堅緻。	
005 S B01	甕	— — (10.5)	S字状口縁台付甕の胴部。	外面斜刷毛目。縦部横なで。内面指なで裾部指屈圧痕	0.5mmの白色鉱物含む。	浅黄色。良好。	
006 S B01	甕	— — —	器内は厚くゆるやかに広がりをもつ。	端部は横なで。外面は棒状旋磨き。内面は横位刷毛目	細砂粒含む。	浅黄褐色。軟質。	
007 S B01	甕	— — —	S字状台付甕の胴部。	外面は斜刷毛目。内面指なで。	2~3mm小砂粒含む。砂粒多量含む。	灰白色。軟質。	
008 S B01	甕	(10.6) — —	短い有段口縁。体部はゆるみのある球形。最大径は中位。胴部は欠損。	胴部外面上下位縦刷毛目。中位斜刷毛目。内面斜刷毛目。	細砂粒含む。	黒褐色。堅緻。	
009 S B01	甕	(13.8) — —	短い有段口縁。胴部は球形。最大径は中位上方。	胴部外面上下位縦刷毛目。中位斜刷毛目。内面斜刷毛目。	良好。	黒褐色。堅緻。	
010 S B01	甕	(25.6) — —	頸部から強く外反しながら屈曲している。	口縁部横なで。胴部外面横なで。	白砂粒含む。	橙色。堅緻。	
011 S B01	甕	(19.8) — —	頸部から大きく外反する形で、複合口縁である。	口縁部横なで。口縁部外面指屈圧痕。胴部内外面横なで	良好。	灰白色。堅緻。	内面に黒斑あり。
012 S B01	甕	(13.9) — —	頸部はわずかに広がりをもち口縁は段を有す。	口縁部横なで。胴部内外面直刷り。	細かい砂粒。小石を含む。	にぶい黄褐色。	
013 S B01	甕	(6.5) — —	底部は平らで小さく、体部最大径は中位。体部中位が大きく張り出す球形。	胴部外面斜磨き	良好。	橙色。堅緻。	
014 S B01	甕	— — (3.3)	胴部は丸く、小さな底部がつく。	外面胴部底部直刷り後直磨き。内面横刷毛目。	0.5~1mmの石英含む。	橙色。堅緻。	
015 S B01	高 杯	(18.5) — (19.6)	直線的に外方に開く。杯部は屈曲して更に広がる。胴部は外反する。	口縁部横なで後放射状旋磨き。体部外面刷毛なで後旋磨き。	0.1~1mmの砂粒含む。	にぶい黄褐色。良好。	

第II章 安房田遺跡の調査

遺物番号	器形	決量同	器形の特徴	成・整形の特徴	胎土	色調・焼成	備考
016 S B02	壺	(13.0) — —	肩の張る胴部が直立する口縁部に至る。	口縁部外面斜刷毛目。内面横刷毛目。	0.5~1mmの砂粒含む。	ぶい橙色。 良好。	
017 S B02	壺	(15.0) — —	肩のなだらかな胴部は、ゆるやかに外反して口縁部となる。	口縁部内外面横刷毛目。胴部内外面斜刷毛目。	2mmの砂粒を含む。	洗黄褐色。 堅緻。	
018 S B02	壺	(16.5) — —	口縁部は短かく、「く」の字に外反する。内外面に刷毛目を有す。	口縁部横なで。胴部内外面縦刷毛目。	小石を含む。	ぶい黄褐色。部分的に橙。 堅緻。	
019 S B02	壺	(17.8) — —	胴部が欠失し肥厚した口縁部が外筒する。	口縁部横なで。	0.5~1mmの砂粒含む。	ぶい橙色。 堅緻。	
020 S B02	壺	— — —	口縁部が欠失し、肩のなだらかな胴上半部が残る。	胴部外面斜刷毛目内面斜度なで。	1~1.5mmの砂粒少量含む。	ぶい橙色。 堅緻。	
021 S B02	壺	(16.8) — —	「く」の字状口縁。器厚ほぼ一定の肩が丸味をもって張り出した形の壺。	口縁部横なで。胴部外面斜刷毛目後なで内面刷毛目整形。	良好。	黒褐色。 堅緻。	
022 S B02	壺	(19.6) — —	欠失した胴部から肥厚して短い口縁部が「く」の字状に外反する。	口縁部斜刷毛目後横なで。胴部外面縦刷毛目。	0.5~1mmの砂粒含む。	ぶい黄褐色。 良好。	
023 S B02	壺	(20.5) — —	欠失した胴部は、「く」の字状に開く口縁部に続く。	口縁部横なで。外面頸部下から縦刷毛目なで。内面横筋なで。	0.5~1mmの砂粒含む。	ぶい黄褐色。 良好。	
024 S B02	壺	(21.3) — —	頸部から「く」の字状に外反する口縁を呈す。	口縁部横なで。外面頸部下刷毛目後横なで。	良好。	内面一灰白色。 外面一明褐色。 不良。	
025 S B02	壺	(21.0) — —	欠失した丸い胴部は、外反する肥厚して短い口縁となる。	口縁部横なで。	0.5mmの砂粒含む。	ぶい橙色。 良好。	
026 S B02	壺	(15.9) — —	短いS字状口縁から丸味のある体部(胴部)へと続く。	口縁部横なで。胴部外面斜刷毛目。	白砂粒含む。	褐色。 堅緻。	
027 S B02	壺	(15.3) — —	台付甕で、S字状口縁部。	口縁部横なで。頸部縦刷毛目。	良好。	洗黄褐色。 軟質。	
028 S B02	壺	— — —	単口縁の台付甕で胴下半から脚上半が残る。	胴部外面斜刷毛目内面横筋の為不明。	良好。	ぶい橙色。 良好。	
029 S B02	壺	— — —	台付き甕の脚上半。	外面縦位の寛なで外面横位の刷毛目。	白色粒含む。	明赤褐色。 堅緻。	
030 S B02	壺	— — —	S字状口縁台付き甕の脚台部。	脚部外面縦刷毛目内外面横筋有り。	0.5~1.5mmの白色鉱物含む。	洗黄褐色。 良好。	
031 S B02	壺	— — (15.0)	台付き甕の脚台部。	脚部外面縦刷毛目内面横刷毛目。	0.5~1mmの砂粒含む。	洗黄褐色。 堅緻。	
032 S B02	壺	— — (6.2)	小形甕の脚台部。	脚部外面縦刷毛目後斜しい斜刷毛目。内面なで。	0.5mmの砂粒含む。	ぶい橙色。 良好。	
033 S B02	壺	(14.0) — —	「く」の字に開く折り返し口縁は、丸い胴に接合する。	頸部外面斜刷毛目なで内面放射状筋磨き。	1~2mmの砂粒含む。	ぶい橙色。 堅緻。	
034 S B02	壺	(15.4) — —	複合口縁部に3本4単位の貼り付け紋がめぐる。	外面斜刷毛目後筋磨き、内面筋磨き。	細砂粒含む。	ぶい橙色。 堅緻。	
035 S B02	壺	— — (10.8)	S字状口縁鑿形土器の脚台部。	外面斜位寛なで。	1mmの砂粒を含む。	ぶい橙色。 良好。	

遺物番号	器 形	法 量 ^①	器 形 の 特 徴	成・整形の特徴	胎 土	色 調・焼 成	備 考
036 S B02	壺	(14.0) — —	折り返し口縁は直立後外反し、胴部の肩はなだらかである。	口縁部横なで。胴部外面斜刷毛目。内面横刷毛目。	1～4mmの砂粒を含む。	にぶい橙色。良好。	
037 S B02	壺	(14.6) — —	球胴部は欠失し外開する口縁部の口唇は、つまみ上げる。	外面斜磨磨き。内面灰物の多い粘土をなでつける刷毛目。	0.5～3mmの長石含む。	橙色。良好。	
038 S B02	壺	(17.0) — —	頸部より「く」の字状に大きく外反する口縁を返す。	口縁部横なで。内外面直なで。	細砂粒を含む。	灰白色。不具。	
039 S B02	壺	— — (8.2)	体部最大径は中位にあり、球形を呈し頸部はくびれている。底部平直。	胴部外面斜刷毛磨き。内面横なで。	白茶色砂粒含む。	明赤褐色。堅緻。	
040 S B02	壺	(9.8) — —	短かく直立する口縁部は、肩強りの弱い胴部へ続く。	胴部外面斜刷毛目。口縁部内面横刷毛目。	1mmの砂粒含む。	淡黄褐色。軟質。	
041 S B02	壺	(11.0) — —	「く」の字状に開く口縁部で、肩の張りの弱い胴部へ続く。	口縁部横なで。胴部外面斜刷毛目。胴部内面指頭圧痕。	1mmの砂粒含む。	橙色。良好。	
042 S B02	壺	(12.0) — —	球胴部は欠失し「く」の字状に開く口縁部となる。	外面放射状磨磨き。底部平直。内面直削り後直磨磨き。	0.5mmの砂粒含む。	にぶい橙色。良好。	
043 S B02	罎	(11.6) — —	胴下部部に最大径を持ち、口縁部は「く」の字状に開く。	口縁から頸部縦刷毛目。内面放射状磨磨き。	0.5mmの砂粒含む。	にぶい橙色。良好。	
044 S B02	罎	(10.0) — —	「く」の字状に開く口縁部で球胴欠失する。	口縁部横なで。内面直なで。	0.5～1mmの砂粒含む。	淡黄褐色。軟質。	
045 S B02	壺	(11.6) — —	底部を欠く胴部は、「く」の字状に短かく開く口縁部に接続する。	口縁部横なで。外面頸部斜刷毛目。胴部横削り内面横直なで。	0.5～1mmの砂粒含む。	淡黄褐色。良好。	
046 S B02	壺	(11.0) — —	底部を欠く胴部は、「く」の字状に短かく開く口縁部に接続する。	内外面横なで。	白色砂粒多量に含む。	にぶい黄褐色。軟質。	
047 S B02	罎	— — —	丸い胴は口縁部と底部を欠く。	内外面直なで整形不明。	0.5～1mmの砂粒含む。	橙色。良好。	
048 S B02	罎	— — —	球形の体部。	外面胴上位縦刷毛目。中位直削り後なで。内面直なで。	若干の砂粒含む。	灰色～褐灰色。良好。	
049 S B02	杯	— — (2.5)	上げ直風の底部は、内湾する底部へ続く。	口縁部横なで。胴部外面横刷毛目。内面刷毛目。	0.5～2mmの白色灰物含む。	にぶい橙色。良好。	
050 S B02	壺	— — (4.4)	器内は薄い。底部は、平直直立する口縁部を持つ小形の壺。	器面荒れているが外面(下～上)刷毛目。	白砂粒含む。	にぶい橙色。堅緻。	
051 S B02	杯	— — (3.4)	球胴部の下半。上げ直。	体部下位内外面直磨磨き。	1mmの砂粒少量含む。	橙色。良好。	
052 S B02	器台	(9.6) — —	皿に直立した器受部を持つ下座。	外面上半位縦刷毛目。下半位横削り。内面放射状磨磨き。	1～2mmの砂粒含む。	淡黄色。良好。	
053 S B02	器台	— — —	「ハ」の字状に開く脚部。穿孔4ヶ所か？。	外面縦磨磨き。内面横刷毛目。	0.1mmの砂粒含む。	橙色。良好。	
054 S B02	高杯	— — —	杯部の欠失した高杯の脚部穿孔4ヶ所。	外面棒状磨磨き。内面指頭圧痕。	細砂粒少量含む。	にぶい橙色。堅緻。	
055 S B02	高杯	— — —	「ハ」の字状に開く脚部。穿孔3ヶ所。	胴部外面縦磨磨き。内面上位直なで。下位横刷毛目。	1mmの砂粒少量含む。	橙色。良好。	

第II章 安房田遺跡の調査

遺物番号	器形	法量 ^(a)	器形の特徴	成・整形の特徴	胎土	色調・焼成	備考
056 S B02	器台	8.5 7.0 9.2	口縁部外反。底部中央に穴。脚部は外反蓋広がり。上位に円窓3個が認められる。	外面棒状磨き。	良好。	浅黄褐色。堅緻。	
057 S B02	器台	— — (9.0)	「ハ」の字状に開く脚部の先端は、丸くなる。	裾部内外面横なで	0.5mmの砂粒含む。	ぶい褐色。良好。	
058 S B02	器台	(11.4) 10.3 (14.0)	杯部は直立し、脚部は色に広がる。穿孔は3ヶ所。	外面放射状磨き 杯部内面下位斜磨き 磨き上位横磨き	1~2mmの砂粒含む。	褐色。良好。	
059 S B02	高杯	(17.4) — —	杯部下半部内傾して縁縁まで縁き上半部は縁縁から直線的に伸び口唇部に至る	杯部口唇部横なで 外面斜磨き。内面摩擦減の為不明。	良好。	ぶい褐色。軟質。	
060 S B02	高杯	(17.0) — —	脚台部の欠失した杯部である。	外面摩擦減の為整形不明。内面放射状磨き。	1~2mmの砂粒含む。	黄褐色。	
061 S B02	高杯	(18.0) — —	脚台部の欠失した杯部である。	杯部外面放射状磨き。内面摩擦減の為不明。	0.5~1mmの砂粒含む。	ぶい褐色。良好。	
062 S B02	高杯	(17.5) — —	内湾気味で深い器形の杯部	口縁部横なで。外面摩擦減の為不明。	茶砂粒含む。	赤褐色。堅質。	
063 S B02	高杯	(18.1) — —	脚台部の欠失した杯部である。	口縁部横なで。内外面磨削り後放射状磨き。	0.3~1mmの白色鉱物含む。	淡黄色。軟質。	
064 S B02	高杯	(17.6) — —	脚台部の欠失した杯部である。	口唇部横なで。外面磨削り後磨き 内面磨き。	0.5mmの砂粒含む。	ぶい褐色。良好。	
065 S B02	高杯	(14.0) — —	「ハ」の字状に開く高杯の脚部。	杯部外面放射状磨き。裾部横なで。	0.5~1mmの砂粒含む。	褐色。良好。	
066 S B02	甌	— — (5.0)	小形の甌の底部は肥厚して単孔を穿つ。	外面下部指頭圧痕内面磨なで。	0.5mmの白色鉱物を少量含む。	浅黄褐色。良好。	
067 S B02	鉢	(12.2) — —	最大部を胴上半に持ち、短かい口縁部は直立する。	口唇部横なで。体部内外面横なで後磨き。	0.1mmの砂粒含む。	ぶい褐色。良好。	
068 S B02	鉢	(20.4) — —	最大部が口縁部になる鉢。又は、甌。	口縁部横なで。体部外面横なで後磨削り。内面横なで後磨削り。	0.5~2mmの砂粒を含む。	ぶい黄褐色。良好。	
069 S B02	高杯	(18.6) — —	平板上に外反する杯部が残る。	杯部内外面放射状磨き。	0.5~1mmの白色鉱物含む。	浅黄褐色。良好。	
070 S B02	高杯	(17.0) — —	内湾ぎみに外反する高杯の杯部。	外面磨削り。内面放射状磨き。	0.5mmの砂粒含む。	ぶい黄褐色。良好。	
071 S B02	高杯	15.5 — —	残存する浅い杯の器内は厚い。	口縁部横なで。外面中位厚なで下位磨削り。内面放射状磨き。	0.3~0.5mmの白色鉱物。黒雲母含む。	褐色。軟質。	
072 S B02	高杯	(17.1) — —	杯部は内湾しつつも外方に伸びて、口縁部で外反して終る。	外面磨削り後磨き 内面磨削り後棒状工具で磨き。	良好。	ぶい褐色。内面一黒色。堅緻。	
073 S B02	高杯	(20.0) — —	頸部から器厚を減し斜めに伸びる口縁。下半部は中頃で立ち上り外反する。	口縁部横なで。内外面は磨削り。	小砂粒含む	浅黄褐色。軟質	
074 S B02	高杯	(17.3) — —	頸部から内湾し伸びる杯部下半、縁縁から上り内湾し外方に伸びる口唇部に至る	杯部外面磨削り後磨き。内面磨削り。	小砂粒含む	ぶい赤褐色。堅緻。	
075 S B02	高杯	— — (11.4)	外反気味で短かく脚部の下に杯の下半が残る。	杯部内外面放射状磨き。脚部外面放射状磨き。内面横削り色。	0.5mmの白色鉱物。黒雲母含む。	淡黄色。良好。	

遺物番号	器 形	法 量 ¹⁾	器 形 の 特 徴	成・整形の特徴	胎 土	色 調・焼 成	備 考
976 S B02	高 杯	(20.4) — —	平板に杯が直線的に外反する。胴部は裾が欠失する。	口縁部横なで。外面杯部放射状磨き。放射状内面磨き。	1mmの砂粒を多量に含む。	淡黄褐色。良好。	
977 S B03	罍	(13.1) — —	S字状口縁の壘形土器の口縁部。	口縁部横なで。体部外面斜位刷毛目。内面横位刷毛目。	良好。	灰黄褐色。良好。	
978 S B03	罍	(13.5) — —	S字状口縁壘形土器の口縁部。	口縁部横なで。体部上位外面斜位刷毛目。内面なで。	小石を含む。	褐色。良好。	
979 S B03	罍	(15.1) — —	S字状口縁壘形土器の口縁部。	口縁部横なで。胴部外面放射状。内面指痕旺盛。	褐色紅物粒を含む。	褐色。良好。	
980 S B03	罍	(16.0) — —	口縁部は、浅いS字を呈する。	口縁部横なで。体部上位外面斜位刷毛目。内面なで。	茶褐色の粒を含む。	淡黄褐色。不良。	
981 S B03	罍	— (10.0) —	台付臺の胴部は肥厚している。	台部外面刷毛目後磨削り。	1~2mmの砂粒を含む。	淡黄褐色。良好。	
982 S B03	罍	(18.4) — —	折り返し口縁を持つ罍。内面に縦方向4本単位の寛記号がある。	口縁部横なで。	白小砂粒を含む。	にぶい赤褐色。堅緻。	寛記号の反対側に口唇刻み。
983 S B03	罍	(18.0) — —	胴部から直線的に外傾して伸び、口唇先で小さく外反しその先は平らに横なで。	口縁部横なで。外面縦刷毛目。内面なで。	細砂粒を含む。	褐色で内面は褐色。堅緻。	
984 S B03	罍	— — —	大形で二重口縁の罍。	外面横位刷毛目。内面横位刷毛目後横位横位磨き。	良好。	にぶい黄褐色。堅緻。	
985 S B03	罍 台	(15.0) — —	口縁上半部のみ残存し、外面に横をつかって深く接合口縁。大きく外反する。	口縁部横なで外面縦刷毛目。	細砂粒を含む。	淡黄褐色。良好。	
986 S B03	罍 台	— — —	脚部は付根からゆるく開き、円窓を3個有す。	外面放射状後横位磨き。内面杯部磨き。脚部刷毛目。	細砂粒、小石を含む。	外面一淡黄褐色。内面一褐色。堅緻。	
987 S B03	高 杯	(18.0) — —	脚柱部の太い高杯で、平板に直線的に体部が開く。	口縁部横なで。内外面放射状磨き。体部下位指なで。	0.5~1mmの砂粒を含む。	淡褐色。良好。	
988 S B03	高 杯	(18.7) — —	脚部付根から横をもち口唇部まで直線的に大きく開く。器厚は平均している。	口縁部横なで。体部外面放射状後横位磨き。	茶褐色の粒を含む。	赤褐色。良好。	
989 S B03	甌	— — —	碗形を呈する器形で底部は丸く単孔を穿つ。	外面は刷毛目後指なで。内面横なで後磨き。	1~5mmの砂粒を含む。	にぶい褐色。良好。	
990 S B03	鉢	(17.0) — —	丸底の体部から直線的に口縁部が開く。	口縁部横なで。外面摩滅の為不明。内面横位磨き。	0.5mmほどの砂粒を含む。	淡黄褐色。良好。	
991 S B03	罍	14.0 — —	丸底の胴部は欠失し「く」の字状に開く口縁が残る。	口縁部外面縦位磨き。内面横位なで。	1~2mmの砂粒を含む。	淡黄褐色。良好。	
992 S B03	罍	— — —	長い直線は、甌形の小型甌と考えられる。	外面横なで後放射状磨き。内面指なで。	0.1~1mmの砂粒を含む。	にぶい褐色。良好。	
993 S B03	罍	(12.0) (13.5) —	丸底で扁平な胴部は「く」の字状の口縁部に続く。	口縁部内外面放射状磨き。胴部外面横位磨削り。内面指なで。	0.2~1mmの石英、白色紅物を含む。	灰黄褐色。良好。	
994 S B03	罍	(9.0) — —	底部は欠失する丸底の胴部から、口縁部はゆるやかに外反する。小型である。	胴部外面放射状後磨き。内面指なで。	金雲母少量、1mm砂粒を含む。	灰色。堅緻。	
995 S B03	罍	— — —	体部は球をつよした様な扁平な形。器内は厚く、胴部は細い。底は安定平らである。	胴部から体部上位縦位刷毛目。中位斜位刷毛目。	細かい砂粒を含む。	淡黄色。堅緻。	

第II章 安房田遺跡の調査

遺物番号	器形	法量 ⁴⁾	器形の特徴	成・整形の特徴	胎土	色調・焼成	備考
095 S B03	埴	— — —	体部中ほどに最大径、底は安定。口縁部直線的に大きく開く。	外面口縁部から体部までで、下位などで後置削り。内面直線で、	茶褐色粒を含む。	褐色。 堅緻。	
097 S B03	埴	— — —	体部は上から大きく押しつよした形で中位に最大径。底はわずかに平になっている。	口縁部横なで、体部外面棒状蹴磨き内面指押え。	細砂粒、茶褐色の粒を含む。	浅黄褐色。 堅緻。	
098 S B04	杯	9.0 2.6 —	小形で口縁部は外傾し、やや内湾しながら底部に至っている。	口縁部横なで。体部外面刷毛目。	良好。	明褐色。 堅緻。	
099 S B05	杯	(16.8) — —	S字状台付甕の口縁部で胴部の張り強い。	口縁部横なで。胴部斜刷毛目。	良好。	浅黄褐色。	内面スス付着。
100 S B05	甕	(20.9) — —	大形甕の口縁部。頸部の接合は不安定で急に外反する。	口縁部横なで。頸部外面棒状蹴磨き内面直線で、	細砂粒を含む。	浅黄色。 良好。	
101 S B05	高杯	(20.9) — —	脚部を欠失した浅い杯部。	口縁部横なで。胴部外面斜刷毛目。内面放射状蹴磨き	0.3~1mmの石英、白色鉱物少量含む。	内面一褐色。 断面一浅黄褐色。	いよし状黒色。
102 S B05	厨台	— — —	3孔を穿つと考えられる器台脚柱部。	器台外面刷毛目。内面上位指おき中位位置削り下位刷毛目。	長石、黒雲母含む。	褐色。 良好。	
103 S B05	甕	— — (10.8)	甕を欠失した「く」の字状に開く器台。	裾部横なで、外面刷毛目。内面横刷毛目。	褐色鉱物粒を含む。	一褐色。 良好。	
104 S B05	埴	(12.1) — —	球割を欠失した「く」の字状口縁。	口縁部横なで。	0.5~1mmの白色鉱物、黒雲母粒。	淡褐色。 良好。	
105 S B05	埴	(12.0) — —	球割を欠失した「く」の字状に開く単口縁か?	口縁部横なで。外面直線で後置削り。頸部内面横置削り。	0.5~1mmの石英、黒雲母。	淡褐色。 良好。	
106 S B05	埴	— — —	丸底。扁平で体部最大径は中位より下にある。脚部ふくらみのわりに頸部径は小	外面で後置削り内面上位で中位以下は直線で、	茶褐色の粒を多量含む。	一褐色。 良好。	
107 S B05	杯	6.4 2.8 4.4	手づくねを思わせる小形の杯。	口縁部横なで。外面指押え。内面直線で、	0.3~0.5mmの黒雲母、石英含む。	淡黄色。 良好。	
108 S B06	甕	(20.0) — —	いわゆる羽釜とセットをなすもので、底面は外反肥厚する。	裾部直なで。外面蹴磨き。外面直削り。	0.3~0.5mmの黒雲母、石英含む。	淡黄色。 良好。	
109 S B07	甕	(14.9) — —	口縁部は厚く外方に開く。口唇部は幅をもち比較的腕部は張りをもつ縁子。	口縁部横なで。頸部上位外面斜位蹴磨き。内面直削り。	細砂粒、小石を含む。	外面一灰白黄褐色。 内面一灰白色。	
110 S B07	甕	(17.8) — —	最大径は胴部中位。口縁部は「く」の字に開く。体部器内湾し。口縁部は厚い。	口縁部斜位刷毛目。体部外面横位刷毛目。頸部指押え。	小石を含む。	褐色。 良好。	
111 S B07	甕	(19.0) — —	「く」の字状口縁。口唇部に沈痕をもち横なで。頸部はなだらかな直線で下へと向う。	口縁部横なで。頸部外面直削り。内面直削り。	細砂粒多量含む。	黒灰色。 内面一灰褐色。	
112 S B07	甕	(18.9) — —	口縁部「く」の字状に外反し、肩部は張る。	口縁部横なで。頸部厚縁の不明。	細砂粒含む。	灰黄褐色。 良好。	
113 S B07	甕	(16.4) — —	口縁部「く」の字に外反し厚縁有り。口唇部内面わずかに横をもつ。体部中位最大径。	頸部から体部上位縦位の刷毛目。	小石粒含む。	浅黄褐色。	
114 S B07	甕	(21.0) — —	口縁部の立ち上り短かく、「く」の字に外反し、丸味のある体部へと続く。	体部外面縦位直なで。内面刷毛目整形。頸部直なで。	白色粒含む	褐色。	
115 S B07	甕	(17.4) — —	口縁部「く」の字に外反し肩部は張る。	口縁部下位刷毛目。	良好。	浅黄褐色。 不良。	

遺物番号	器 形	法 量 ⁽⁴⁾	器 形 の 特 徴	成・整形の特徴	胎 土	色 調・装 成	備 考
116 SB07	壺	(23.0) — —	「く」の字状口縁の壺形土器の口縁部。	口縁部外面刷毛目状旋削り。	1～2mmの砂粒含む。	灰黄色。 軟質。	
117 SB07	壺	(29.9) — —	口縁部は「く」の字に外反し肩部は直る。	口縁部横なで。	良好。	褐色。 良好。	
118 SB07	壺	(12.6) — —	器内は薄く、口縁部は「コ」の字を呈す。	口縁部横なで。胴部上位外面刷毛目。内面なで。	茶褐色の粒を多く含む。	洗黄褐色。 不良。	
119 SB07	壺	(19.1) — —	口縁部はS字を呈し、体部は大きくふくらみをもり刷毛目がある。	口縁部横なで。胴部外面刷毛目。胴部内面なで。	細砂粒、小石を含む。	にぶい黄褐色。 良好。	
120 SB07	壺	(17.0) — —	折り返し口縁に2本4単位の棒状浮文を貼り付ける。	口縁部横なで。	細砂粒、軽石、褐色紅土粒を含む。	褐色。 良好。	
121 SB07	壺	(17.4) — —	口縁が折り返し状に肥厚し端部はとがる。	口縁部上半横なで下半外面指押え。内面直なで。	良好。	淡黄色。	
122 SB07	壺	(18.1) — —	体部上端から肩面に立つ口縁は中頃の接合痕で止り、外面及び外反し口唇部に至る。	口縁部横なで。胴部外面旋削り。内面直なで。	0.3～1.8mm石英、黒雲母含む。	洗黄色。 良好。	
123 SB07	壺	(16.9) — —	直立する縦口縁に直線的に外反する口縁がつく壺。	口縁部水挽きによる横なで。	1～2mmの砂粒含む。	赤褐色。 良好。	
124 SB07	壺	(19.6) — —	折り返し口縁の名残りで、口縁部中位まで折り返し。	器面荒れの為技法の観察困難。内面は丁寧なで。	微砂粒少量含む。	洗黄褐色。 軟質。	
125 SB07	壺	(15.0) — —	頸部から垂直に立ち上る口縁は、口縁部中頃で段をもち厚みを増す複色口縁。	口縁部横なでと削りて整形。	細砂粒含む。	洗黄褐色。 軟質。	
126 SB07	高 杯	(21.5) — —	脚柱部は円盤台状で裾部の境が明瞭である。	柱上位内面刷毛目の溝有り。以下は横位旋削り。	茶砂粒含む。	褐色。 良好。	
127 SB07	壺	(21.5) (25.0) (5.8)	最大径は体部中位。底部は平底で小さい。「く」の字状口縁をなす。	口縁部外面下半旋削り。肩部刷毛目痕。内面なで。	細砂粒多い。	灰褐色。	スス付着。
128 SB07	高 杯	(17.1) — —	太い脚柱部の欠失した杯部	口縁部横なで。胴部外面旋削り後磨き。内面放射状磨き。	石英、長石、白色紅土を含む。	洗黄褐色。 軟質。	
129 SB07	高 杯	(16.2) — —	杯部は内湾しながら直線状に開き、外面受け部との接点に壁を有している。	口縁部横なで。外面摩滅の為不明。内面放射状旋削り。	良好。	内面一褐色。 外面一明黄褐色。 良好。	
130 SB07	高 杯	(17.6) — —	杯部は内湾しながら開き外面受け部との接点に壁を有している。	杯部内外面摩滅の為不明。棒状磨きが分かる。	良好。	内面一明褐色。 外面一洗黄褐色。 良好。	
131 SB07	高 杯	(20.0) — —	脚部を欠失した浅い杯部。	口縁部横なで。器面摩滅の為不明。	1～2mmの砂粒含む。	褐色。 良好。	
132 SB07	高 杯	18.2 14.0 14.1	杯部は内湾しながら開き、口唇部で外反する。柱部は円柱状で幅広く開く。	口縁部端部横なで。外面旋削り後磨き。	良好。	褐色。 良好。	
133 SB07	高 杯	— (11.3) —	柱部はふくらみもち一度しぼられた後裾部が45°の角度で広がる。	脚部外面旋削り。内面直削り後棒状磨き。	細砂粒多く含む。	褐色～にぶい黄褐色。 良好。	
134 SB07	高 杯	(21.6) — —	底部より直線的に外反し、口縁部でやや内湾する。	器部横なで。脚部外面磨き。内面直削り。	茶砂粒含む。	褐色。 良好。	
135 SB07	高 杯	— — —	平らな受け部より円盤状に脚部が開く。脚部に円窓2個あり。	脚部外面磨き。内面横なで。	良好。	明赤褐色。 堅緻。	

第II章 安房田遺跡の調査

遺物番号	器形	法量(k)	器形の特徴	成・整形の特徴	胎土	色調・焼成	備考
136 S B07	壺	(14.0) (17.5) (4.4)	体部上半に最大径。胴部肩が張り丸みをもつ。平底。口縁と体部最大径は等しい	口縁部内外面横なで後縁磨き。体部外面磨削り内面磨削り。	小砂粒多量を含む。	赤褐色。堅緻。	黒斑あり。
137 S B07	壺	14.7 13.3 5.8	胴部の張った胴部から「く」の字状に外反する口縁に至る。	口縁部横なで。胴部指なで。	1mmの砂粒含む。	よい黄褐色。良好。	
138 S B07	埴	(15.7) — —	胴部は欠失し薄手の器内は「く」の字状に外反する。	口縁部横なで。胴部外面縦磨削り。	長石、黒雲母、褐色鉱物粒を含む。	よい黄褐色。良好。	
139 S B07	壺	(14.8) — —	球胴は欠失し、「く」の字状に開く口縁部は良い。	口唇部横なで。胴部内外面横なで後縁状磨なで。	靑砂粒含む。	よい黄褐色。良好。	
140 S B07	壺	(11.2) — —	最大径は体部中位にあり球形を呈すと思われる。口縁部は「く」の字に外反。	口縁部横なで。体部外面横なで。内面頸部下指押え。	細砂粒含む。	洗黄褐色。不良。	
141 S B07	壺	(11.9) — —	体部最大径は中程にあり張りは弱く、口径とほぼ等しい。	口唇部横なで。外面磨削り後縁状磨削り。内面なで。	細砂粒含む。	よい黄褐色。堅緻。	
142 S B07	埴	(8.4) — —	胴径と同じく「く」の字状に開く口縁部。	口唇部横なで。胴部外面で後縁磨削り。内面指なで。	長石粒、赤色粘土粒を含む。	淡灰色。良好。	
143 S B07	埴	— — —	口縁部と蓋部の欠失した扁平な胴部。	体部外面横磨なで。	0.5mmの砂粒を含む。	よい白色。良好。	
144 S B07	埴	(9.3) (9.6) —	口縁部は短く「く」の字状に開く。内面の頸部下に接合痕。体部の形にゆがみ有り。	胴部内外面斜刷毛目。体部下半磨削り。内面指なで。	良好。	褐色。良好。	黒斑あり。
145 S B07	埴	9.9 9.8 4.5	口縁部「く」の字に外反し体部は丸い。口径、胴径が等しい。	外面全体に斜刷毛目。胴部内面指磨削り。	良好。	灰褐色。堅緻。	
146 S B07	埴	— — —	体部はやや扁平。	口縁部横なで。外面で後縁磨削り。内面底部磨なで。	細砂粒、小石を含む。	外面一層、洗黄褐色。内面一洗黄褐色。	
147 S D01	壺	(16.0) — —	球胴部を欠失し、口縁部は短かく外薄する。	口縁部横なで。胴部外面縦刷毛目。内面横刷毛目。	0.1mmの砂粒を含む。	よい白色。良好。	
148 S D01	壺	(12.0) — —	大きく張り出す肩をもち、それにつながる口縁は、S字状を呈す。	口縁部横なで。胴部縦刷毛目。	良好。	よい黄褐色。軟質。	
149 S D01	壺	(14.4) — —	S字状台付壺の口縁部。肩は大きく張る。	口縁部横なで。胴部外面縦刷毛目。	良好。	よい黄褐色。軟質。	
150 S D01	壺	(16.3) — —	S字状台付壺の口縁部。肩は張る。	口縁部横なで。胴部外面縦刷毛目。	良好。	洗黄褐色。軟質。	
151 S D01	壺	(19.1) — —	S字状台付壺の口縁部。	口縁部横なで。胴部外面縦刷毛目。	良好。	洗黄褐色。軟質。	
152 S D01	壺	(14.8) — —	短い有段口縁をもち胴部が張り出す。	口縁部横なで。胴部斜刷毛目後縁刷毛目。内面なで。	石英粒多量を含む。	洗黄褐色。軟質。	
153 S D01	壺	— — —	S字状口縁台付壺の胴台部。	外面縦刷毛目。内面上位磨なで。下位指おきえ。	良好。	よい黄褐色。良好。	
154 S D01	壺	(31.3) — —	口頸基部より外反して立ち上り大きくなだらかに屈曲し口縁部は帯状の段を成す	水洗き成形の後、回転で調整。	1～2mmの白色粒を含む。	灰色。堅緻。	須恵器。
155 S D01	壺	(10.0) — —	肩の張りの弱い胴部は欠失し、口縁部が短かく立つ。	口縁部横なで。胴部外面斜刷毛目。内面磨削り。	0.5mmの砂粒を含む。	黄褐色。良好。	

遺物番号	器 形	法 量(μ)	器 形 の 特 徴	成・整形の特徴	胎 土	色 調・焼 成	備 考
156 SD01	壺	(13.8) — —	球胴を欠失し、口縁部は「く」の字状に開く。	口縁部水挽き横なで、頸部外面指なで、内面指調正直。	0.1~1mmの砂粒を含む。	外面一色色。内断面一にぶい橙。良好。	
157 SD01	壺	(14.4) — —	胴全体に刷毛目が残り、口縁部は、つまみ上げて特徴的。	口縁部横なで、頸部外面刷毛目内面刷毛目なで。	1~2mmの砂粒を含む。	橙色。良好。	
158 SD01	壺	(21.4) — —	胴球は欠失し、短い口縁部は外湾する。	口縁部横なで、胴部外面縦置削り、内面横置なで。	2~3mmの小石を含む。	ぶい橙色。良好。	
159 SD01	壺	(20.8) — —	直立気味の胴部は頸部で凹み外反し、口縁部へ続く。口唇部は一条の稜線をもつ。	口縁部横なで、外面割部は貫削り、内面割部置なで。	良好。	ぶい黄橙色。良好。	
160 SD01	壺	— — (5.0)	最大幅が胴上半部にある小形の壺。	胴部外面置削り、内面置なで。	1~3mmの砂粒を含む。	浅黄褐色。良好。	
161 SD01	壺	(17.6) — —	底部に向かってすぼまる瓶の上半部。	口縁部横なで、胴部外面斜置削り、内面斜置削り。	黒雲母、褐色鉱物粒を含む。	ぶい黄褐色。	
162 SD01	高 杯	(15.4) — —	脚部は欠失し、杯部は腰が張り、浅い。	口縁部横なで、杯部下位外面置削り内面指で横なで。	1~2mmの砂粒を多量に含む。	灰色。良好。	須恵器。
163 SD01	高 杯	— — 10.3	脚基部から外反気味に下り裾部で外湾し鋭い稜を成して屈折し、狭小な腹を成す。	回転なで調整。	白砂粒含む。	灰色。堅緻。	須恵器。
164 SD01	高 杯	(15.4) — —	杯部は深く、脚の幅は「く」の字に開く。	杯部外面放射状置磨き、頸部上位置削り、内面置磨き。	0.5~1mmの砂粒を含む。	橙色。良好。	
165 SD01	高 杯	— — —	丁寧な仕上げりの高杯の杯部。	杯部内外面縦置磨き、外面頸部指なで。	0.1~0.5mmの砂粒を含む。	浅黄褐色。良好。	
166 SD01	高 杯	— — —	杯部を欠失した中空の脚柱部。	脚部外面横なで後縦置磨き、内面指はり目、裾部指調正直。	0.1~0.2mmの砂粒を含む。	外断面一色色。内面一にぶい橙色。良好。	
167 SD01	高 杯	— — —	杯部を欠失した中空の脚柱部。	頸部外面置削り、脚部外面横なで後縦置磨き、頸部指なで。	1~4mmの砂粒を含む。	橙色。良好。	
168 SD01	高 杯	— — —	器内は薄い。上端のつけ根から序々に広がり、円窓3個を穿つ。	外面縦置棒状取磨き上端横位、内面横位置なで。	小石を含む。	橙色。良好。	
169 SD01	杯	(11.3) — —	器内は厚く、口縁部は内湾する。	口縁部横なで、体部外面置削り。	細砂粒含む。	ぶい橙色。堅緻。	
170 SD01	杯	11.0 4.2 —	丸底で体部が開き「く」の字に屈曲し、丸味をもつ厚めの口縁部が外反する。	口縁部横なで、外面横位置削り、内面はなでを行う。	細砂粒含む。	明赤褐色。堅緻。	
171 SD01	杯	10.9 3.4 —	内縮する底部から強く立ち上り沈線をもつ口縁部を作る。口唇部は先が尖る。	横なで、削り。	良好。	ぶい橙色。軟質。	
172 SD01	杯	(12.0) — —	口縁部立ち上り部に段をもち、立ち上りが高い。	口縁部横なで、体部内面なで、外面置削り。	若干の細砂粒含む。	橙色。良好。	
173 SD01	杯	(13.9) — —	口縁部下部に段をもち立ち上がりが高く、外方に広がっている。	口縁部横なで、外面置削り、内外面なで。	細砂粒含む。	橙色。良好。	
174 SD02	壺	(19.9) — —	口頸部は外反して立ち上り端部近くで短く外反し端部に至る。	水挽き成形後、回転なで調整。	白色粒多量含む。	褐色色。堅緻。	須恵器。
175 SD02	壺	(20.9) — —	口縁部はゆるく湾曲しつつ外反する複合口縁。器厚は比較的厚い。	口縁部横なで、胴部なで。	白砂粒多量含む。	淡黄色。堅緻。	

第二章 安房田遺跡の調査

遺物番号	器形	法量 ^{kg}	器形の特徴	成・整形の特徴	胎土	色調・焼成	備考
176 S D02	甕	(16.3) — —	短かい複合口縁をもち肩が張る台付甕。	口縁部横なで。肩部外面縦磨削り。	良好。	褐色。 軟質。	
177 S D02	甕	(15.2) — —	短い有段口縁をもち、肩部はあまり張らない。	口縁部横なで。肩部外面縦磨削り。	良好。	灰色。 軟質。	内面に有機物付着。
178 S D02	甕	— — (8.6)	最大径は中位下で丸味をもつ。底部は小さく平、口縁部は「く」の字状に外反する。	内面胴部上位横刷毛目、中位縦棒状工具でなで。	石英粒少量含む。	浅黄褐色。 良好。	
179 S D02	高杯	— — —	胴部と杯部口縁を欠失する	杯部内外面棒状縦磨削き。外面下位横なで。	褐色鉱物粒を含む。	ぶい黄褐色。 良好。	
180 S D02	高杯	— — —	裾広がりで円柱部に近く、裾部との接線をもつ。	外面摩滅の為不明瞭。内面脚部上位絞り目肌。	白 茶 砂 粒 含む。	褐色。 堅緻。	
181 S D02	高杯	— — —	胴部内窓一個認められる。	脚部外面刷毛目後縦磨削き。外面横磨削り。	良好。	灰白色。 良好。	
182 S D03	甕	— — —	S字状口縁変形土器の脚部。	脚部外面縦刷毛目内面指なで供。	細砂粒含む。	ぶい黄褐色。 軟質。	
183 S D03	甕	— — (9.8)	端部に向かいややふくらみをもって外傾する。	外面にスス付着。台部外面縦刷毛目内面横なで。	細砂粒含む。	外面一灰白色。 内面一上部褐色、下部淡黄色。不良。	
184 S D03	甕	— — —	台付甕の脚柱部で外湾して大きくふんばる。	脚部外面指なで台部上位磨なで。台部内面磨伸え。	1～3mmの砂粒を含む。	褐色。 良好。	
185 S D03	高杯	— — (13.0)	杯部を欠失した脚部で脚柱部は「ハ」の字状に開き裾部は屈曲して大きく開く。	脚部中位縦磨削き裾部横なで。内面指頭圧痕。指なで。	0.5～1mmの砂粒を含む。	ぶい黄色。 良好。	
186 C-1	剣	重量 133.95g			石製模造品	暗緑灰色。	法量は図中参照。
187 C-3	剣	重量 8.13g			石製模造品	暗緑灰色。	法量は図中参照。
188 C-3	剣	重量 12.56g			石製模造品	暗緑灰色。	法量は図中参照。
189 C-1	剣	重量 15.43g			石製模造品	緑黑色。	
190 S B02	紡錘車	重量 8.3g	1/2残存し、復元径5cm、高さ1.8cm、軸径は1cmほどである。	全体にぶいし状の研磨がかり平滑である。	0.1mm白色鉱物、石英を含む。	ぶい黄褐色。 良好。	
191 S B02	土玉	重量 14.2g	1/2残存し、復元径3cm、単孔で5mmほどである。	外面指ナゲ、磨削き。	0.1mmの白色鉱物、高雲母を含む。	ぶい黄色。 良好。	
192 S B05	土玉	重量 9.0g	1/2残存し、復元径2.7cm、単孔で5mmほどである。	外面指ナゲ、磨削き。	良好。	褐色。馬耳あり。	
193 S B07	土玉	重量 33.09g	完存、円球で径3.3cm、単孔を穿ち径5mm。	外面指ナゲ、磨削き。	良好。	褐色。 良好。	

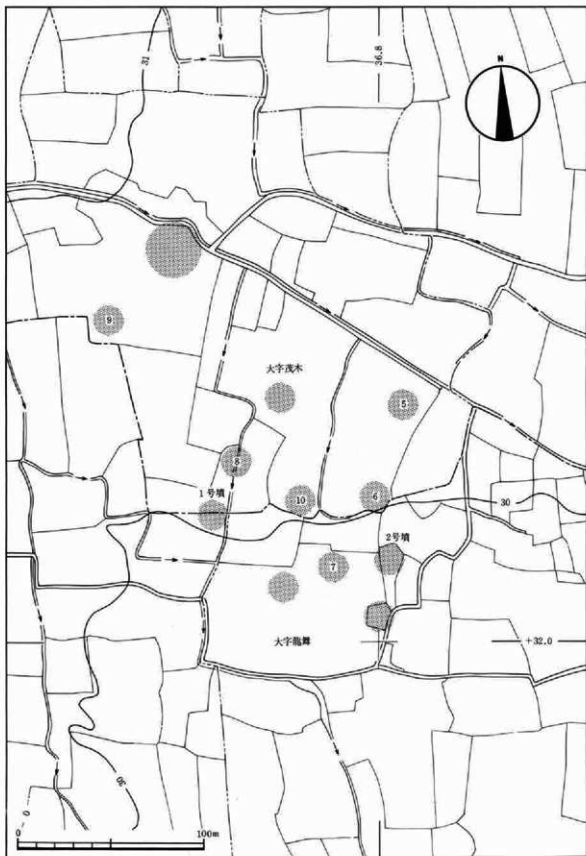
第三章 塚井遺跡の調査

1 調査概要

概要 **発掘調査の経過** 昭和47年度より開始された太田東部地区県営ほ場整備事業も3年次をむかえた。本計画区域内に存在する「太田東部遺跡群」の発掘調査も1年次の「安房田遺跡—1次—」「遠笠遺跡」に続き2年次の「安房田遺跡—2次—」と本報告の「塚井遺跡」の発掘調査を実施した。発掘調査の経費は群馬県耕地開発課が負担した。事業主体は館林土地改良事務所で、また発掘調査主体は群馬県教育委員会文化財保護課が太田市教育委員会と太田市史編集室の協力を得て実施した。発掘調査は昭和49年11月から翌年の1月まで続けられ、調査面積は560㎡であった。

遺跡の環境 本遺跡は、清水田遺跡の乗る舌状の台地の最先端に立地する。古墳は標高30mの線上に並び、谷ノ裏古墳群（塚井古墳群）と呼ばれ、現状では12基の古墳の位置が推定復元できる。本古墳群中の休泊村5号墳からは仿製四獣鏡が出土している。また休泊村9号墳からは形象埴輪（馬など）が出土しており、塚井1号墳と2号墳の築造年代を含めると6、7世紀にわたる古墳群の存在を考えることができよう。また周辺の古墳としては、北方1.3kmの距離に矢場薬師山古墳、東北東1.7kmの距離に藤本観音山古墳、西方2.5kmの距離に太田天神山古墳、女体山古墳が位置する。また、南方700mの距離に塚廻り古墳群が存在するが、この塚廻り古墳群と本古墳群との間には渡良瀬川の旧流路の石原流路が走り、両古墳群の立地が連続する可能性は少ない。

発掘された遺跡の位置 本遺跡は縄文時代前期、特に黒浜式土器を包含する時期から開始される。本遺跡では遺構は検出されなかったものの、北西300mの距離にある清水田遺跡も同時期の遺構が検出されていることから、集落の存在が予想される。その後の縄文時代から弥生時代にかけての遺構、遺物は検出されていない。続く古墳時代前期、中期の石田川期及び和泉期の土器は断片的に検出はされているものの、遺構として住居址を伴うものは後期の鬼高期になってからである。検出された5軒の住居址は一部重複がみられるが、全体としては6世紀の中葉を前後するものと考えられる。この時期の遺跡立地は埋積された低台地のため、台地の形状は不明であるが、発掘区の南東寄り地域に集中するかのようである。塚井遺跡に分布する古墳群は谷ノ裏古墳群と呼ばれ、昭和13年の上毛古墳総覧によると6基登録されている。また、今回、地割りから復元した本古墳群は東西200m、南北200mの範囲に12基の古墳が分布する。休泊村5号墳は北東寄りに位置し、仿製四獣鏡が出土している。主体部の形態や埴輪類の有無は不明であるが、6世紀の前半代の古墳と考えてよい。休泊村9号墳は発掘区北西寄りに存在する。人物、馬などの形象埴輪類が出土しており、6世紀の後半代と考えられる。また、今回発掘調査した総覧記載漏れの1号墳、2号墳は鬼高期の住居址上に築造された横穴式石室を主体部を持つ古墳と考えられ、7世紀後半代の年代を与えることができる。いずれも墳形が円墳の本古墳群は、6世紀、7世紀と築造が継続しこの地域における首長層の墓地であることが推定される。



第37図 塚井遺跡 周辺の地形図

調査日誌

塚井遺跡 1974年11月25日～1975年1月11日

- 11・25 古墳発掘のため下草刈り開始。遺跡周辺のマッピング。調査事務所設置所の選定作業。
- 11・26 1号墳発掘作業開始。発掘区を東西南北方向に設定。主体部と考えられる盛土残丘部分に10m×10mの発掘区設定。周辺部分の測量調査開始。遠景、近景の写真撮影作業。
- 11・27 中央発掘区の表土削ぎ。東西南北の4方向のトレンチ発掘作業開始。冬期にもかかわらず、現状が水田のため予想以上に湧水がひどく、排水作業について早急に検討の必要あり。
- 11・28 1号墳各トレンチ発掘作業。相変わらず湧水多く、調査進行せず。2号墳の測量調査開始。盛土残丘部分に石室根石が残存している模様。2号墳近景撮影。
- 11・29 2号墳の墳丘実測図作成。1号墳の南トレンチ発掘。2号墳の東トレンチ、北トレンチ発掘作業。2号墳の北トレンチの表土部分より金環発掘。周溝部分からの出土と考えられる。相変わらず湧水多く、作業が進行しない。
- 11・30 1号墳の周溝状態について集中的に検討を加えながら発掘作業を進めることにする。2号墳の中央発掘区の作業を中心に墳丘規模の確認作業。発掘土付付近より紡錘車出土。
- 12・2 1号墳の東トレンチの周溝部分より土師器多量に出土。古墳の周溝ではないのかもしれない。小雨のため、発掘作業を中止。室内にて出土遺物の水洗作業。
- 12・3 1号墳の墳丘部分の平面図実測作業。東トレンチ周溝部分より土師器出土。2号墳の墳丘部分の平面図実測作業。
- 12・4 1号墳の墳丘実測作業。各トレンチの発掘作業。2号墳の墳丘実測作業。各トレンチ発掘作業。
- 12・5 1号墳の東トレンチ発掘。断面検討作業の他のトレンチの断面との比較作業。
- 12・6 1号墳の中央発掘区の南西部分の発掘作業。西トレンチ発掘作業。
- 12・7 1号墳の中央発掘区の北西部分の発掘作業。2号墳の各トレンチ発掘作業。
- 12・9 1号墳の中央発掘区東南部分の平面図を断面調査に切り替え、調査中軸より45°方向にトレンチ設定。2号墳の北トレンチに周溝検出。墳部確認のために中間トレンチを設定する。
- 12・10 2号墳に設定した中間トレンチにて墳部の確認作業を進める。東トレンチにて周溝の立上り部分検出。確認。降雨激しくなり、発掘作業中止。室内にて出土遺物水洗作業。
- 12・11 1号墳中央発掘区南西部分を発掘調査。盛土部分に擾乱を受けた箇所が多く、主体部確認と見られた。2号墳中央区の盛土部分の細部調査。墳丘下より鳥高期の土師器出土。構築時期を考えると異なる。
- 12・12 1号墳の北西方向トレンチ発掘作業。東南方向トレンチ発掘作業開始したが湧水がひどく一時中止。2号墳の盛土朝岡確認作業。
- 12・13 2号墳を中心に発掘作業。北東トレンチ発掘。湧水多く作業一時中止。北西トレンチ発掘作業。墳丘下長方形の「掘り方」が存在するらしい。
- 12・14 1号墳の中間トレンチを延長して発掘開始。湧水多くト

- レンチは一時中止して、集中排水しながら発掘続行。発掘調査の時期を2月を中心に設定すれば、湧水問題も解消できたのではないかと後悔。今後の本地域の発掘調査には念願におきたい。2号墳の北トレンチ、西トレンチ断面実測作業。北西トレンチ発掘中。北東トレンチに住居址検出。1号住とする。
- 12・16 1号墳中央区北西部分、北東部分掘り下げ作業。北東部分には主体部存在せず。2号墳北東トレンチで検出の住居址のトレンチ内での検出作業。
- 12・17 1号墳の主体部を中心に精査。中央区北西部分と北東部分を掘り下げ。2号墳北東トレンチの住居址実測作業。常に湧水が多く、仕上がりの良い写真撮影は困難。
- 12・18 朝方より降雨。発掘作業中止。出土遺物の水洗。注記作業。実測図面整理作業。今後の調査方針検討会開く。
- 12・19 2号墳を中心に発掘作業を進行させる。1号墳の東トレンチ、北トレンチの土層断面検討、実測開始。南トレンチ排水作業後発掘継続。2号墳、北西、北東、南西、南東各トレンチの断面実測作業。湧水がひどく排水ポンプのフル稼働。
- 12・20 1号墳北トレンチ土層断面検討作業。東トレンチ排水作業をしながら、精査、土層検討作業。2号墳の北西トレンチの発掘作業の湧水ひどく排水作業と発掘作業を交互に連続。土層観察の表記方法について再実測作業。
- 12・21 1号墳の主体部の精査。主体部の高さめ被覆の詳細検討。低湿地帯のため、徹底した掘土作業が、実施され、石室の用材の全てが持ち去られたらしい。2号墳の北西トレンチ実測作業。
- 12・22 1号墳の主体部精査。東トレンチ断面実測中。西トレンチ、北トレンチの断面土層検討。
- 12・23 1号墳北トレンチ土層断面検討。2号墳トレンチ精査後、土層断面検討。主体部下層の「掘り方」検討。2号墳全景実測。北西トレンチ実測作業。風塵おどやめ。実測日誌。
- 12・24 1・2号墳の南面周溝の北東端部分の確認作業を重視導入検討。1号墳の主体部精査。東トレンチ断面実測中。西トレンチ、北トレンチの断面土層検討。
- 12・25 1号墳の中央区に発掘し主体部の詳細を検討。北トレンチの先端の断面に不明な箇所あり。延長の必要がある。2号墳の北東トレンチ拡張区の住居址の発掘作業。周溝をも関係する。
- 12・26 1号墳の各トレンチ断面図実測作業。2号墳北東トレンチの延長作業。1号墳の北トレンチにも一つの古墳と考えられる周溝検出。2号墳の北東トレンチ拡張部分の調査。周溝が住居址を切っているが、2つの住居の切り合い関係は不明。
- 12・27 本年最後の発掘作業日。1号墳北トレンチ、南トレンチ、東トレンチの断面実測作業。2号墳北東トレンチ拡張区1号住、2号住居址の検討。機土分布範囲、貯蔵穴の切り合い関係から1号住居→2号住居の新田開発が判明。
- 12・28～1・5 年末・年始の休刊。
- 1・6 太田市教育委員会の配慮で市内の毛豆田公民館にて出土遺物の整理作業を1週間の予定で実施する。1号墳南トレンチ排水作業後、断面実測作業。
- 1・7 本地区施工業者が協力依頼していた古墳周溝の軌目押し確認作業。結局、南面での周溝は存在しないことが判明したが、その周溝の正確な平面形は掘りすぎでせざるを得なかった。
- 1・8 1号墳の排水作業手間どる。昔日からの降雨のためか、実測始めたが、雨が強く、室内にて出土遺物の水洗作業。
- 1・9 2号墳の早出。排水作業。南西トレンチ、南トレンチ、南東トレンチ断面実測。古墳2基、住居址合計5基検出。2号墳も拡張して平面確認。実測作業は終了。明日朝決り。2基の1・10 器材清掃。発掘器材の手入れ。測量器材の点検作業。出土遺物の注記作業を進めるが、全点数の半分のみ終了。掘取後も注記作業を続けなければならない。関係機関に終了報告と挨拶。
- 1・11 器材清掃。特に活躍してくれた排水ポンプは念に入手入れ。出土遺物の検収作業。器材撤収作業。現場での発掘完了。

2 遺 跡

概要

塚井遺跡の基本杭は、土地改良区域の計画図、支線道路27号と支線道路13号の交点に設定した。1号墳はこの基本杭から西へ133m、北へ38mの交点を中心杭とした。この点より基準線は現地形に合わせてN-13°30'-Eにとった。遺跡の位置は第IX座標系、X=-36.900、Y=+32.050である。発掘区はこの中心杭より西へ25m、直交して北へ35mの交点をA-1として、西から東へA～G、北から南へ1～7の10m×10mグリッドを設定した。この発掘区の中心杭10m×10mを墳丘確認のグリッドとした。また、周溝確認のために東西南北の四方、更に45°の方向に4本、計8本のトレンチを設定した。2号墳は基本杭から西へ37m、北へ20mの交点を中心杭とした。この点より基準線は現地形に合わせて方眼北はN-10°30'-Eにとった。遺跡の位置は第IX座標系、X=-36.900、Y=+32.050である。発掘区はこの中心杭より西へ25m、直交して北へ25mの交点をA-1として、西から東へA～G、北から南へ1～6の10m×10mのグリッドを設定した。実際の発掘は中心杭を中心とした10m×10mを墳丘確認のためのグリッドとし、更にグリッドに沿う四方と、その間の45°の角度に4本、計8本の周溝確認のトレンチとした。なお、1号墳と2号墳の発掘区中心杭の距離は97.67mである。1号墳の発掘面積は210m²、2号墳の発掘面積は350m²であった。1号墳は横穴式石室を主体部にもつ円墳で、馬蹄形の周溝を持つことが判明した。また、北に隣接してもう一基の古墳の存在も確認できた。2号墳も1号墳と同様横穴式石室を主体部にもつ円墳で馬蹄形の周溝を持っていた。更に、古墳の下層で周溝のトレンチ内から鬼高期の集落が5軒検出されている。

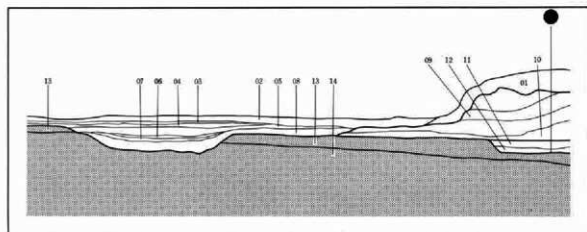


第38図 塚井遺跡 発掘調査区設定図

基準土層

遺跡地の周辺は発掘調査時、みわたす限りの平坦な草原であった。もちろん昭和46年以来の休耕の結果ではあるが、この地域が湿地帯であることを物語っている。発掘調査の目的は古墳とされている残丘部分の性格を明らかにすることであり、2ヶ所の残丘部分に放射状にトレンチを設定し、部分的に拡張を加えながら、調査は終了した。本地域の基本的な層序は①表土層で20～30cmを測る。現在水田面として使用されている土層であるが、古墳周溝部分には墳丘盛土を採土して罫床としている。②旧表土層の上面は黒色土層で、FA軽石粒が表層部分に集中する。下層は灰褐色土層から灰色粘質土、青灰色シルトに変化する。水性堆積のローム層が主体をなすと考えられ、湿地化によりロームの黄色味(酸化)が、灰色(還元)に変化したものと考えられる。さて、本地域の湿地化は調査の結果からはB軽石降下後、長期間の経過が考えられること。表面を覆う灰褐色粘質土は薄く耕作が下層まで及んでいないことなどから、近世頃の渡良瀬川の変流時による溢水が表土層を削り運搬してきたものと考えたい。なお基準層序は凡例化して下記にまとめた。

- 01層 表土層 墳丘表面の盛土覆乱層である。暗褐色を呈しロームブロック、黒色ブロックを多量に混土。
 02層 表土層 灰褐色粘質土層で現水田耕作面である。弱湿地であろうか還元力が強く灰色を呈す。
 03層 表土層 黒褐色土と暗褐色土の混土層で軟質である。古墳の盛土を敷きつめたようにみえる。
 04層 周溝堆積層 砂質灰褐色土層でロームの汚れたものを主体にした流入土のようである。
 05層 周溝堆積層 砂質暗褐色土層で下方にゆくほど黒色味が増し、植物繁茂の可能性高い。
 06層 周溝堆積層 浅間火山噴出のB軽石の純層で、部分的に紫色のラミナも入る。
 07層 周溝堆積層 黒色土で粘質高く、植物による腐蝕土層と考えられる。
 08層 周溝堆積層 暗褐色粘土質層で砂層や黒色土層もラミナ状にはさまれ、ローム層が主体であろう。
 09層 墳丘盛土層 黒褐色土層のブロックを主体に少量の暗褐色土、灰色粘土、ローム粒を含む。
 10層 墳丘盛土層 大粒のロームブロックと硬質の黒褐色土が雑然と入り混じる。
 11層 掘方充填土層 黒褐色土のブロックを主体にロームブロックを混土し、非常に硬くしめる。
 12層 掘方充填土層 ロームブロックを主体に、黒褐色土を少量混土し、つきかためられてしまっている。
 13層 旧表土 黒褐色土層で上層にゆくほど黒色味が強く、粘質土も強くなる。白色軽石粒も含まれる。
 14層 旧表土 上層の黒褐色土層から徐々に色調変化し、褐色→黄褐色→灰褐色→灰色に変化する。



第39図 塚井遺跡 古墳断面模式図

古墳

第1号墳 (出土遺物 第53、54図)

本古墳は、水田中に墳丘のみが残存していた。

墳丘長は、東西7m、南北7mの隅丸方形の平面形を呈し、高さは1mで低平な台形をなしていた。墳丘のまわりには幅50cm、深さ50cmほどの排水溝がめぐっていた。発掘区は先づ墳頂部に中心杭を据え、現水田の水路、畦を極力避けてグリットを設定した。中心軸はN-13°30'-Eにとり、トレンチ調査と併用できる形でメッシュの単位を10mとした。呼称は北から南に向かって1→7、西から東へ向かってA→Gとした。発掘は、この基準線に沿って、東、西、南、北の4方向とその間45°の角度の合計8本放射状に設定したトレンチから開始した。トレンチ幅は1.5mでトレンチの長さは中心杭からそれぞれ、北トレンチ(以下NTと略す)は約29m、NETは20.5m、ETは26m、ESTは18.5m、STは16m、SWTは23m、WTは21m、WNTは27mである。

トレンチ調査による土層断面は次のようである。水田土壌の表土層(02層)は予想以上に浅く、平均25cmである。発掘箇所によって現水田の跡床面までの上層とそれ以下の下層に分層できる。旧表土層は黒褐色土(13層)で、下方にゆくにしたい灰褐色土層(14層)となる。古墳の築造は主体部構築土層と墳丘盛土層に大別される。

主体部は横穴式石室であるが、壁石、天井石などは徹底的に破壊され抜き散らされて無い。けれども、石室構築のための「掘り方」と、その上に壁石、根石の「据え方面」が残存していた。「据え方面」は、C-4区の南西隅、標高30.1mの高さに残っていた。東西幅3m、南北幅2.5mの範囲で、南に開放する「コ」の字状の灰白色粘土帯が幅80cm、高さ50cmでめぐり、その内側に砂利層が3cmの厚さで確認された。石室床面下に「掘り方」が穿たれ、地業がなされていた。深さは60cm、東西幅3.4m、南北幅6.2mの長方形土壌である。この中に、黒褐色土のブロックを主体にロームブロックを混入するもの(11層)と、ロームブロックを主体に黒褐色土を混入するもの(12層)の2層が互層に厚さ10cm幅の水平堆積をなし、叩きしめられていた。

墳丘盛土の残存高は1.6mである。黒褐色土を主体にするもの(09層)と、ロームブロックを主体にするもの(10層)の2層が互層で主体部方向に向かって傾斜を強めて上がる。

周溝は、B軽石層の純層(06層)を中間層に上下に分けられる。上層は、砂質暗褐色土(05層)と、砂質灰褐色土(04層)、下層は、暗褐色粘土質土(08層)の上に黒色粘質土(07層)が出る。また、Eトレンチの周溝には板を4枚使った箱形の断面の周溝に、篠、竹を巻いた暗渠排水が出土している。昭和18年に埋設したという。Wトレンチの西端は徐々に傾斜を強めてゆき、自然地形なのか、他の古墳の存在など人為的なものなのか追求していない。Nトレンチの北側では、隣接する古墳の周溝が検出された。けれども、横穴式石室で囲繞する周溝の場合、南側は開口している例が多く疑問が残る。なお、A層は墳丘盛土層で暗褐色土層09層、10層とは異なり軟質である。

調査の結果、本古墳の墳丘主軸はN-2°-Eをとり、横穴式石室を主体部にもつ円墳であった。周溝は石室開口部が切れる馬蹄形をしている。残存した墳丘盛土範囲は東西14.5m、南北14mの円形で、墳形を画する地山成形範囲は東西24.8m、南北25.6m(周溝が囲繞したと仮定)の円形と考えられる。周溝の幅は各トレンチで4~7mと不規則であった。周溝を含めた東西径は32m、南北径は36.8mである。本古墳の北側にもう1基の古墳が接し、西側も地形の変化が読みとれたが発掘調査はそれ以上進められなかった。

第2号墳 (出土遺物 第55図)

本古墳は、1号墳の東側の水田中に墳丘のみが残存していた。残した墳丘長は東西4m、南北4.5m、高さ1.1mを測る。南北に長く平面形は隅丸方形を呈する。

発掘区は、先づ墳丘北東隅に中心杭を打ち、 $N-10^{\circ}30'-E$ を南北軸に10mメッシュのグリットを設定した。呼称は西から東へA→F、北から南へ1→6とした。発掘はこの基準線に沿って東、西、南、北の4本、計8本の試掘溝から始めた。トレンチ幅は1.5mで長さはNTは24.5m、NETは26m、ETは26m、ESTは18m、STは25m、SWTは20m、WTは24.5m、WNTは33mである。現況の水田の水路は、畦を極力避けたためトレンチ長さが不揃いとなっている。

土層断面は、墳丘盛土、主体部構築土層、周溝覆土に大別される。残存した墳丘はSWTの断面で確認した。ほとんどが墳丘表面の盛土攪乱層(01層)であり、暗褐色を呈し、ロームブロック、黒色ブロックを多量に混土していた。このため石室主体部に関する土層は全く残っていなかった。

けれども、石室構築前の地業の「掘り方」が検出された。旧表土面は標高30mの高さで、この面から石室構築のための「掘り方」を穿孔している。「掘り方」は奥壁側は東西5.2m、羨道側は東西4.1m、南北主軸は8.7mで深さ1mの羽子板状の長四角形である。

周溝は1号溝と同様に浅間火山噴出のB軽石の純層を挟み込み、周溝の深さは平均すると80cmほどである。周溝の幅は一定せず、北トレンチ(NT)では7m、NETでは9.7m、ETでは8.5m、ESTでは6.7m、STでは検出されず、SWTでは7m、WTでは8.4m、WNTでは7.5mである。

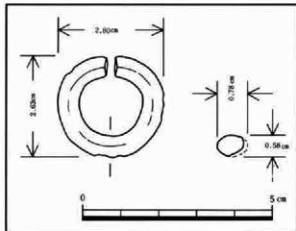
基準土層以外では、A層は墳丘土層で暗褐色土である。B層も墳丘盛土層で黒褐色土と暗褐色土の混土層で硬くしまっている。C層は上面に赤褐色の鉄分凝集層が薄く覆う溝で茶褐色粘質土が埋める。

本古墳の墳丘下より住居址が検出されている。NETから1号住居址が検出され、北拡張区からは2号住居址が重複していた。ETの東端からは5号住居址が、SWTからは4号住居址が、WNTからは3号住居址が検出された。いずれもトレンチ内での確認調査に終わっている。

土層からみた本古墳の占地の特徴は主体部下の「掘り方」地業の設定箇所が旧表土で特に黒褐色土層の厚く堆積した地盤軟弱と考えられる。また、東、西トレンチの両端にみられるように周辺に近接して古墳が存在している可能性が高いことにある。

東トレンチの表土層から金環が出土している。断面形は楕円の中実の銅線を曲げたもので、表面に金が部分的に残る。重量は15.9gである。

調査の結果、本古墳の墳丘主軸は、 $N-29^{\circ}10'-E$ を指し、横穴式石室を主体部に持つ円墳であった。本古墳の規模は残存する盛土径は東西17.2m、南北16mで円形である。墳形の地山成形規模は東西21m、南北28m(周溝が圍繞したと考えた場合)と楕円形をなす。周溝は南に開放する馬蹄形で周溝を含めた古墳規模は東西36.8m、南北42.4mと考えることができる。



第40図 墳井遺跡 金環実測図

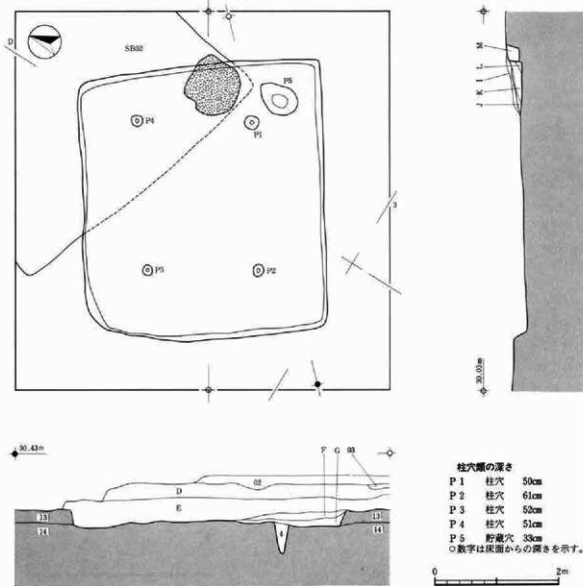
住居址

第1号住居址 (出土遺物 第54図)

本住居址は、2号墳の発掘時に北東トレンチから発見された。発掘区はC-2区にあたり、2号住居址と重複関係にある。

平面形は方形を呈し、東西長さ約4.1m、南北長さ約3.8mを測り、竈は東壁に掘えられ、やや南側に寄る。竈を中心軸にした住居址はN-60°30'-Eを指す。主柱穴が4本、貯蔵穴が南東隅に検出された。住居址の壁の深さは25cm、立ち上がり角度は急で75°~90°を測る。貯蔵穴の平面形は45cm×65cmの不安定な卵形を呈する。竈は、幅90cm、長さ95cmの円形の範囲に灰白色粘土が広がるが、壁内外への裾、煙道の発達は弱く、竈の細部調査でも構造を明らかにすることができなかった。

なお、1号住が2号住を切っていることは、土層及び竈の付設状態からも明らかである。



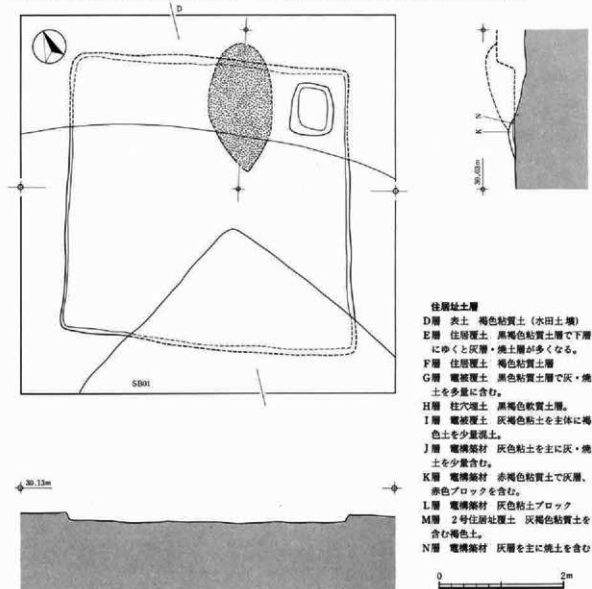
第41図 塚井遺跡 1号住居址実測図

第2号住居址 (出土遺物 第54図)

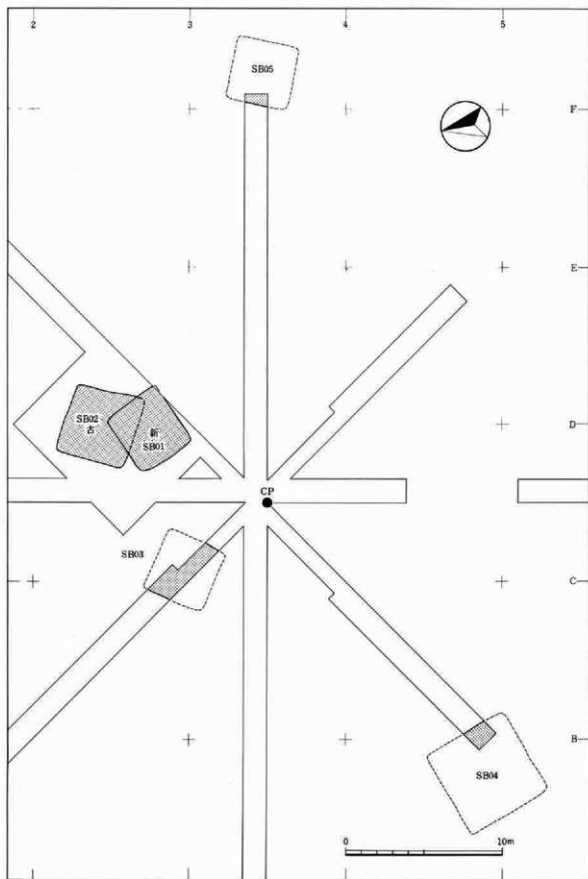
本住居址は2号墳の発掘時に北東トレンチの1号住居址確認のための拡張区の北側に検出された。

C-2区に位置し、遺構は東西長さ約4.6m、南北長さ約4.4mの方形を呈し、北側は古墳の周溝で切られて存在しない。竈は北壁に付設され、中央より東側に寄る。主柱穴は確認されず、貯蔵穴が北東寄りにある。竈を中心軸とした住居址の方向はN-24°30'-Eである。検出された壁の立ち上がり角度は約75°で、深さは15cmであった。貯蔵穴は、東西70cm、南北80cm、深さは床面から51cmの長方形を呈する。

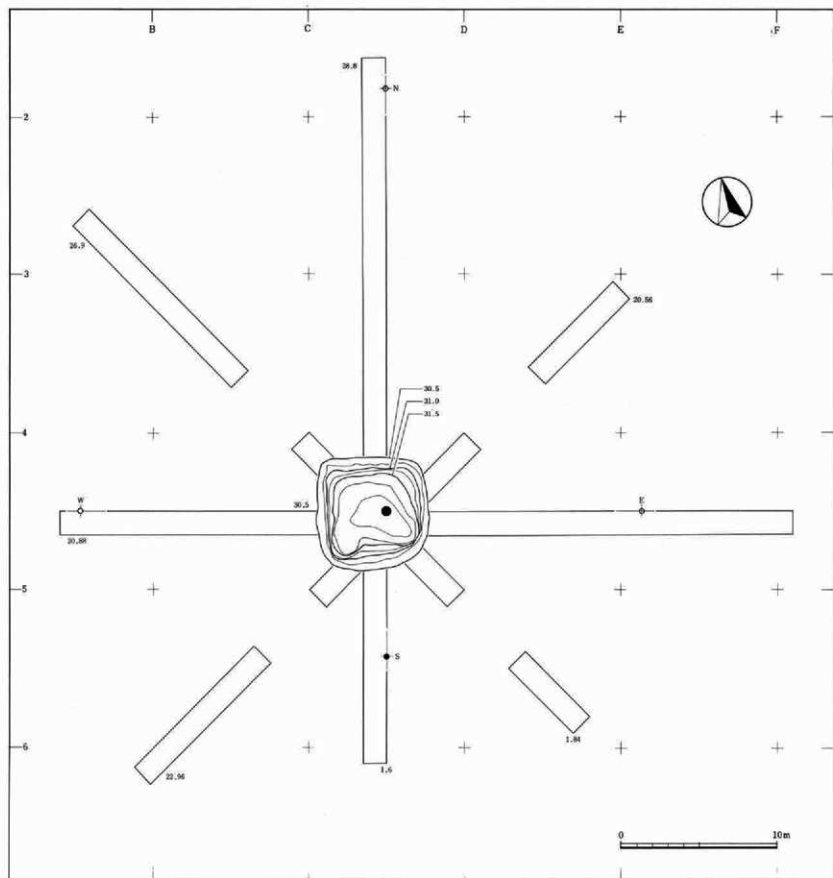
それ以外の本住居址の構造は、北側が2号墳周溝で、南側は1号住居址によって切られており、更に1号住居址検出のための拡張作業中に発見されたために、当初から十分な発掘体制で臨むことができなかった。そのため、竈の範囲も復元である。住居址の覆土は黒褐色を呈する粘質土で下方に灰層、焼土ブロックを少量含む。土師器の杯と壺の底部が住居址の床面から出土している。杯は須恵器模倣杯で鬼高期のものである。1号住居址の時期も鬼高期であることから、当時は集落立地も可能な周辺環境であったらしい。



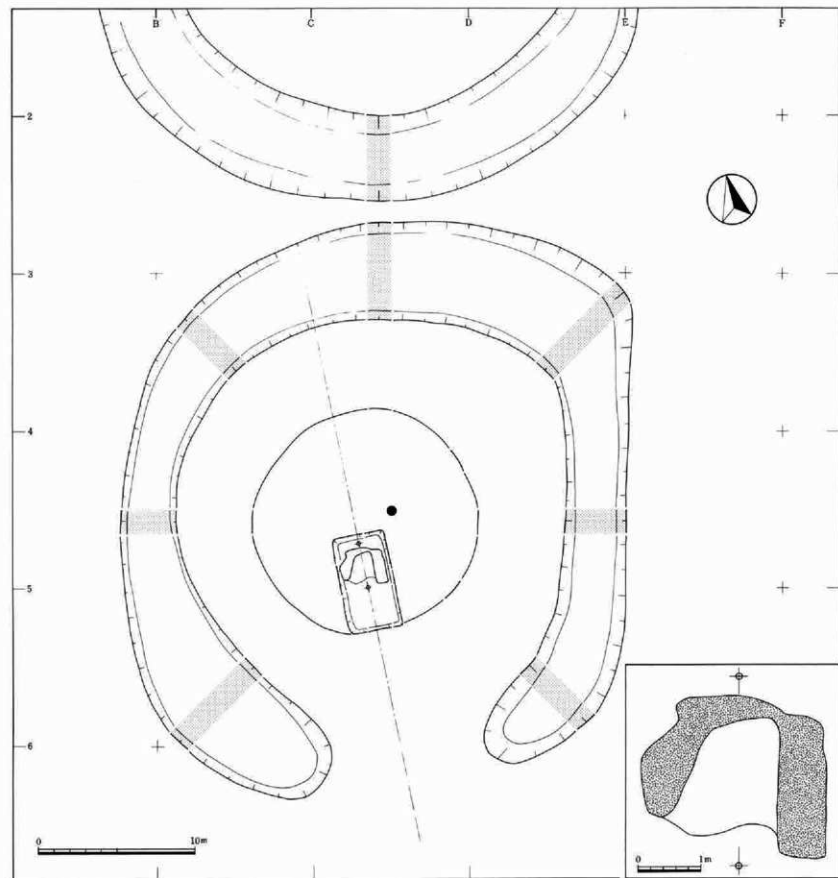
第42図 塚井遺跡 2号住居址実測図



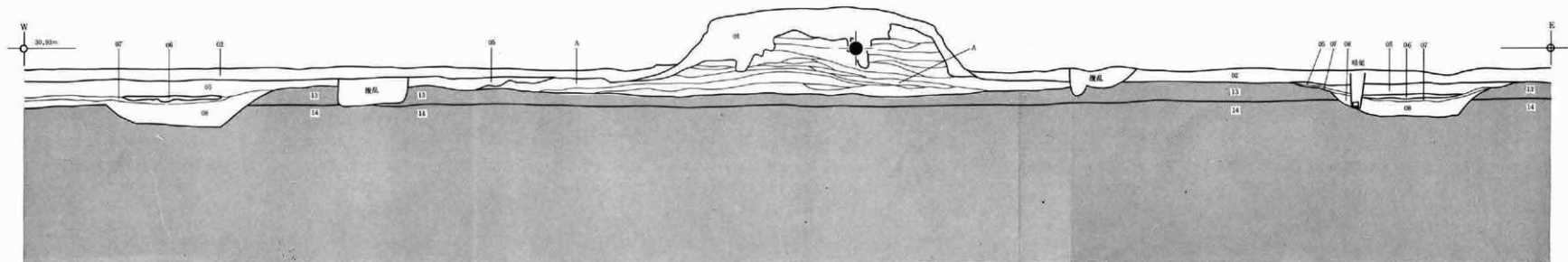
第43図 塚井遺跡 住居址分布図



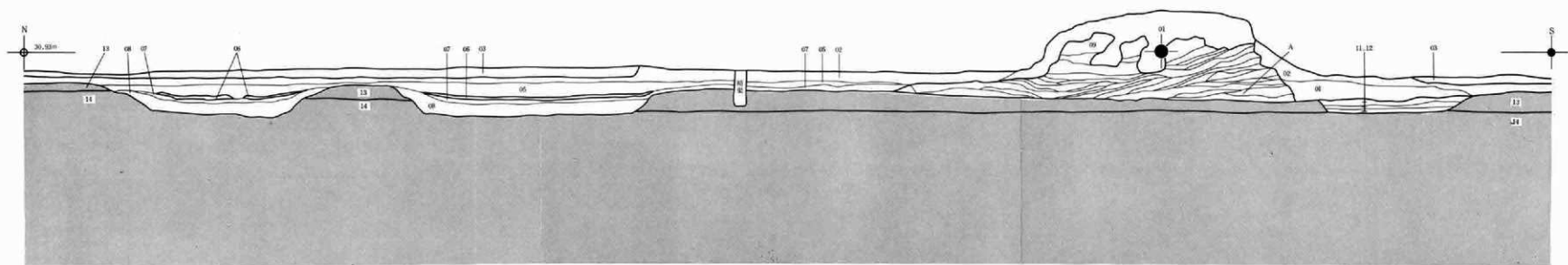
第44图 塚井遺跡 1号墳発掘区設定図



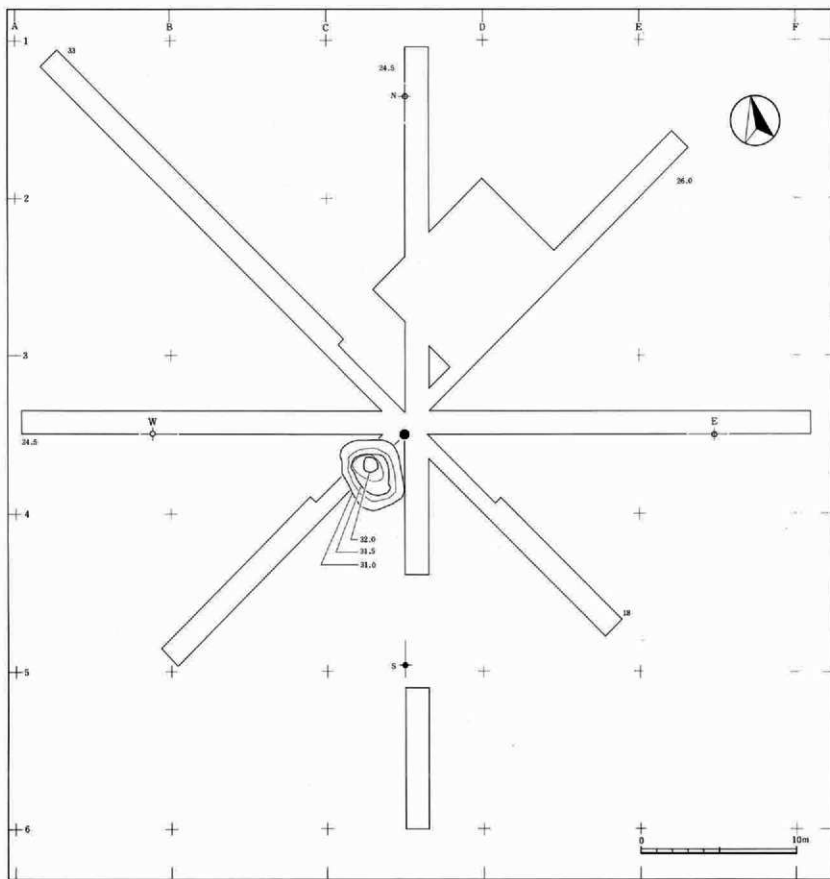
第45图 塚井遺跡 1号墳復元図



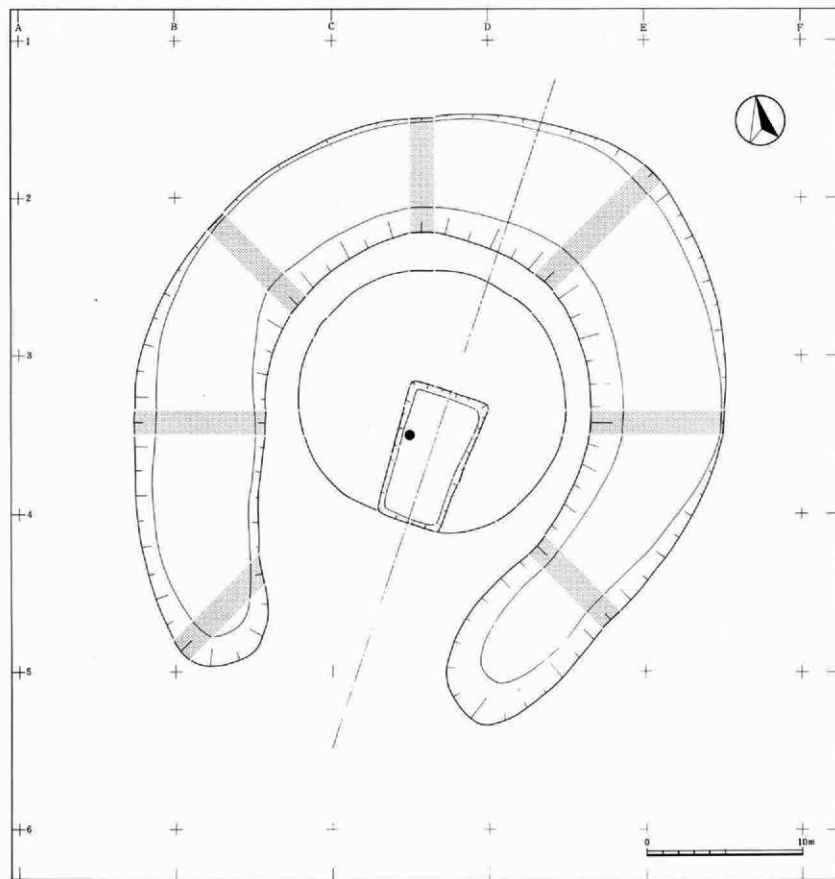
第46图 壕井遗址 1号壕断面图 (东西方向)



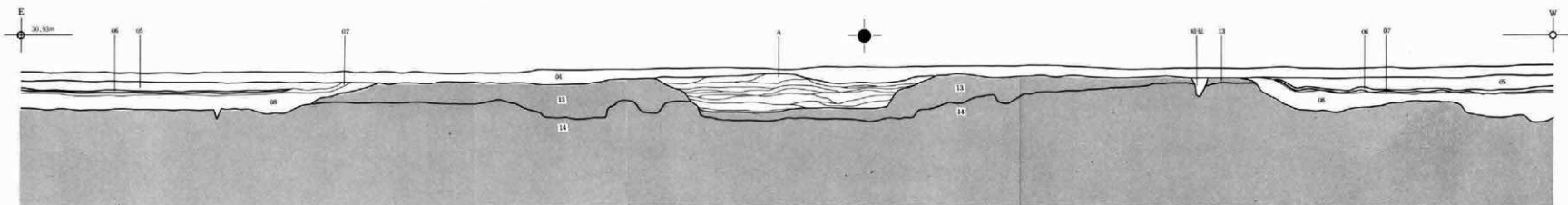
第47图 壕井遗址 1号壕断面图 (南北方向)



第48图 竖井遺跡 2号填充圏区設定图

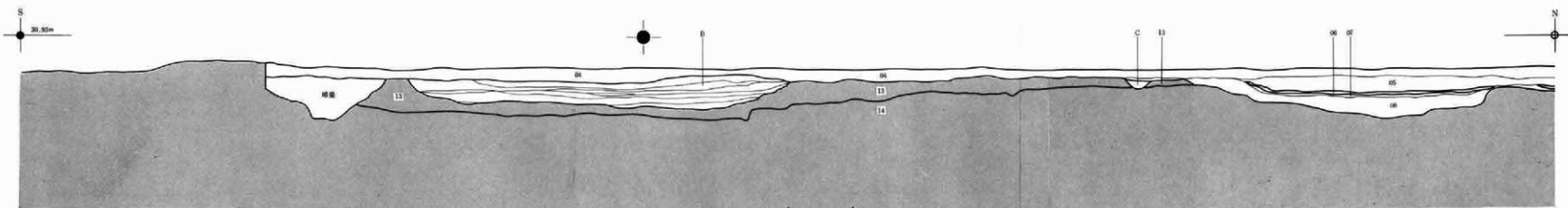


第49图 竖井遺跡 2号填充元图



第50图 壕井遺跡 2号横断面图 (东西方向)

A



第51图 壕井遺跡 2号横断面图 (南北方向)

3 遺 物

概要

本遺跡は古墳址2基の発掘を目的としたため、墳丘主体部から八方に広がるトレンチ内での墳形及び周溝確認調査に終了した感が強い。そのため予想していなかった古墳時代後期の集落調査については十分な追求ができなかった。1号墳、2号墳を含めた調査総面積は560㎡であるが、トレンチ調査のため試掘面積は周辺に広い。確認された遺構は古墳2基、住居址5軒である。古墳は横穴式石室の主体部を持つ円墳で、7世紀代に入るものと考えられる。住居址は全て鬼高期のものである。

本遺跡で検出された土器破片の総数は4023点である。遺構別にみると、住居址からは1025点、発掘区からは2687点、その他の表探が311点である。発掘区から検出された土器は全体の67%と過半数を越え、遺物包含量の多さからこの周辺に大きな集落の存在が考えられる。

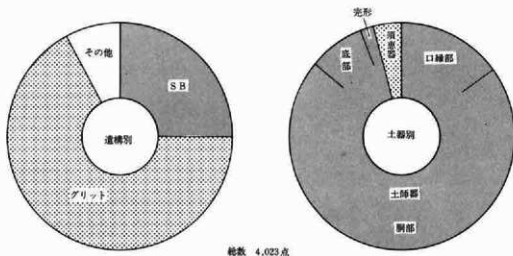
土器別にみると、縄文土器36点、土師器3845点、須恵器142点で、土師器が96%と圧倒的な量を占める。6世紀後半代を中心としたこの時期での須恵器の量の僅少さが特徴的である。

本遺跡の土器の図化点数は140点である。報告書所収点数は81点で全体量の2%と少ない。

発掘区から出土した土器のほとんどは、古墳の周溝に土器溜りとして集中して出土している。集落形成後に墓地として土地利用される過程で、前代の住居址を破壊したものが周底に堆積したものと考えられる。

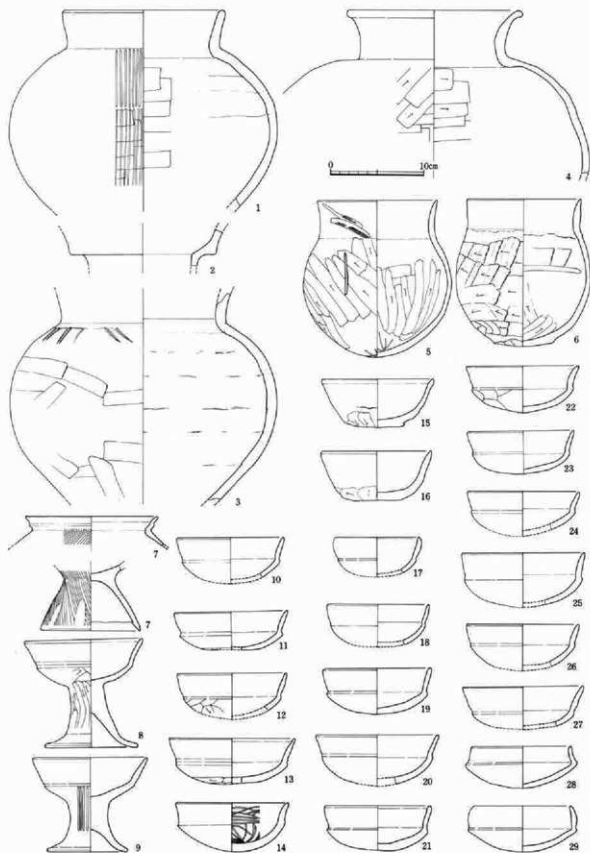
出土した土器の時期は縄文時代から古墳時代である。縄文土器は前期中葉を中心に少量の中期、後期を含む。土師器は石田川期から鬼高期にかけてである。No30はS字状口縁台付壺の胴上部で肩部に横走の刷毛目を巡らす。No32は器台の脚部で3孔を穿つ。No33はいわゆる鉄兜と呼ばれる鉢である。No35は大形の須恵器壺の口縁部である。No45は須恵器の蓋杯で口縁部は直立し端部は屈曲し天井部は回転寛削りであるが、古相をとどめる。須恵器模倣の杯は、細部に多様な器形変化をもち全体的には新しい傾向がみられる。

その他に石製紡錘車と土鍾が出土している。紡錘車の斜面部分には、放射状の刻線が描かれている。



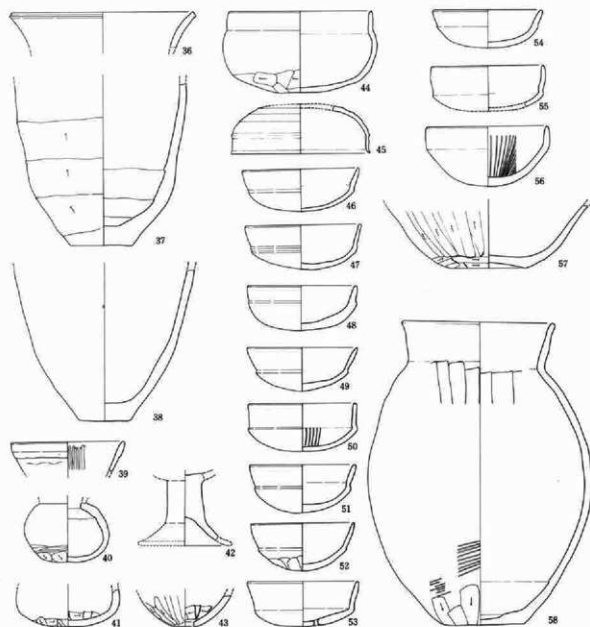
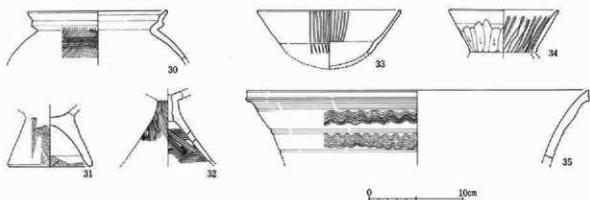
第52図 塚井遺跡 出土土器の分類

第三章 塚井遺跡の調査



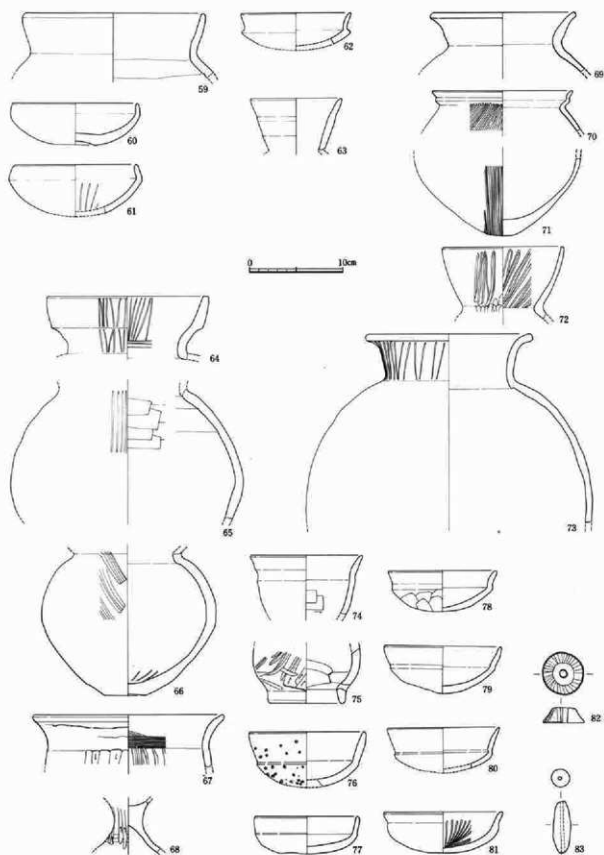
第53図 塚井遺跡 遺物実測図(1)

3 遺 物



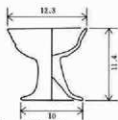
第54图 塚井遺跡 遺物実測图(2)

第三章 塚井遺跡の調査



第55図 塚井遺跡 遺物実測図(3)

遺物観察表



塚井遺跡 遺物観察表 (第2表)

法 量 (cm)	
口 径	12.3
器 高	11.4
底 径	10.0

・推定還元の場合は()を付けた

・底部がない場合は底径欄を省略したのももある

遺物番号	器 形	法 量 ^①	器 形 の 特 徴	成・整形の特徴	胎 土	色 調・焼 成	備 考
001 1号墳	甕	(17.2) — —	口縁部は直立で球形の体部 中位に最大径をもつ。器内 全体的に厚い。	体部中位、上位、口 縁部と3段階に分 かれている。	茶砂粒細砂粒 含有。	外面にぶい橙色、内 面橙色。堅緻。	
002 1号墳	甕	— — —	頸部から外反する口縁は外 側に壁をつくり出す段口 縁の形をとる。	外面はナデ。内面 は横ナデ。	若干の砂粒含有。	にぶい橙色。良好。	
003 1号墳	甕	— — —	口縁部と底部欠損。最大径 を胴上半にもち口縁部は直 立する。	体部は寛削り内面 はココナデで巻き 上げ砥状す。	1～2mmの砂 粒含有。	にぶい橙色。良好。	
004 1号墳	甕	(18.2) — —	口縁部は頸部で一度すぼま り肥厚し口唇部で細くなる 外面に壁を有している。	体部中位肩部内面 に粘土巻き上げ 砥。	砂粒含有。	灰白色。堅緻。	
005 1号墳	甕	(12.8) (16.6) —	球胴から直口気味に口縁部 が立ちあがる。	口縁部横ナデ体部 寛削り内面は指ナ デ。	1～2mmの砂 粒含有。	浅黄橙色。良好。	
006 1号墳	甕	12.0 15.6 6.2	小さな底面から球胴部へ、 さらに直口と続く。	口縁部横ナデ体部 寛削り内面は寛ナ デ指ナデ。	1～2mmの砂 粒含有。	浅黄橙色。良好。	
007 1号墳	甕	14.1 — 10.6	短かい有段口縁をもつ。台 部は直線的に開き頸部でや や細く内湾気味。	口縁部横ナデ、胴 部斜位刷毛目。	砂粒を含有。	灰白色。良好。	
008 1号墳	高 杯	12.3 11.5 10.0	須磨御機像蓋杯はラッパ状 に開く脚をつける。	口縁部脚部横ナ デその他は寛削り ナデ。	若干の砂粒 含有。	橙色。良好。	
009 1号墳	高 杯	12.2 9.9 —	口縁部は外上方に直立し肩 部には強い稜を持つ。脚部 は短かく大きく開く。	杯部は内外面ナデ 脚部外面寛削り内面 は指削り横ナデ	0.5～1mmの砂 粒多量含有。	橙色。杯部内面灰白 色。堅緻。	
010 1号墳	杯	(11.5) — —	口縁部は体部との境に段を もって屈曲し壁やかに外反 する。体部は内湾する。	口縁部内外共に横 ナデ、体部外面寛 削り内面ナデ。	2～5mm位の 石若干含有。	にぶい橙色。良好。	
011 1号墳	杯	(12.0) — —	小さな底部は強く張った稜 縁から直立口縁となる。	口縁部は横ナデ体 部は寛削り。	2mmの砂粒少 量含有。	橙色。良好。	
012 1号墳	杯	(11.7) — —	丸い底部は稜縁を境に直線 的に口縁に至る。	口縁部横ナデ体部 寛削り内面ナデ	赤褐色の粘土 粒を含有。	橙色。良好。	
013 1号墳	杯	(13.6) (4.9) —	丸い体部は稜縁から直立気 味に口縁部が立ち上がる。	口縁部は横ナデ、 体部は寛削り。	1～2mmの砂 粒を含有。	にぶい橙色。良好。	
014 1号墳	杯	12.0 5.3 —	ふくみをもつて立ち上が り口縁部で壁をもちぼは直 立する。器厚は厚い。	口縁部横ナデ、体 部寛削り指おさえ、 内面放射状砥文。	良好。	にぶい橙色。良好。	
015 1号墳	杯	(12.0) 5.0 4.6	不安定な底部から腰の張つ た体部へゆるやかに変化する。	体部巻き上げ砥、 寛削り。	1～2mmの砂 粒含有。	橙色。良好。	
016 1号墳	杯	11.8 5.2 5.0	外面はかなり凸凹面が目立 ち粗雑。	外面寛削り、内面 寛ナデ横ナデ整 形。	0.5mm以下の 細砂粒含有。	橙色。やや軟。	
017 1号墳	杯	(9.0) — —	器の中央に壁を有し口縁部 は外反して立ち上がり口唇 部で内湾する。	口縁部内外面共に 横ナデ、体部外面 寛削り、内面ナデ	細砂を含み微 量の骨母を含有。	橙色。良好。	
018 1号墳	杯	10.9 (4.5) —	口縁部内湾気味に外上方へ 伸びる肩部に壁をもつ口縁 体部底面との比はほぼ同じ	口縁部は横ナデ、 体部は寛削り。	良好。	にぶい橙色。やや軟	

第三章 塚井遺跡の調査

遺物番号	器形	法 量	器 形 の 特 徴	成・整形の特徴	胎 土	色 調・焼 成	備 考
019 1号墳	杯	11.6 4.8	口縁部は外反気味に直立し肩部に稜を持つ。	口縁部横ナゲ体部寛削り内面ナゲ。	0.5mmの砂粒を含有。	にぶい赤褐色。良好。	
020 1号墳	杯	13.1 5.2 —	口縁部は直線的に外上方に伸び肩に稜をもつ。口径は体部径より大きい。	口縁部は横ナゲ体部底部は寛削り内面ナゲ。	良好。	褐色。堅緻。	
021 1号墳	杯	11.4 4.7 —	丸底の底部からふくらみをもって立ち上がり稜を呈しほぼ直立する口縁。	口縁部外面横ナゲ外面置ナゲ、底部ナゲ。	赤褐色粒含有。	明赤褐色。良好。	
022 1号墳	杯	(12.1) 5.0 —	底部は丸底で器の中央に稜を有する。口縁部はいく分外傾する。	口縁部内外面共に横ナゲ、体部寛削り内面ナゲ。	良好。	にぶい褐色。良好。	
023 1号墳	杯	(11.4) (4.5) —	底部は丸底で器の中央に稜を有する。口縁部はいくぶん外傾する。	口縁部内外面共に横ナゲ、体部外面置削り内面ナゲ。	若干の小石含有。	褐色。良好。	
024 1号墳	杯	(12.0) (4.8) —	器の中央に稜を有し口縁部はいくぶん外傾する。	口縁部横ナゲ体部寛削り内面ナゲ。	若干の小石含有。	にぶい褐色。良好。	
025 1号墳	杯	(13.2) — —	口縁部は体部との境に段をもって屈曲し外反する。体部は緩かに内湾する。	口縁部は内外面共横ナゲ、体部寛削り内面ナゲ。	良好。	にぶい褐色。良好。	
026 1号墳	杯	(12.0) — —	口縁部の立ち上がり部に段をもつ口縁部は外反し口唇部で内湾する。	口縁部は内外面横ナゲ、体部外面置削り内面ナゲ。	若干の砂粒含有。	にぶい褐色。良好。	
027 1号墳	杯	12.9 4.5 —	口縁部は外上に直立し肩部は弱い稜をもつ。	口縁部横ナゲ、体部寛削り内面は寛磨き。	0.5mm程の細砂粒多量含有。	にぶい褐色。良好。	
028 1号墳	杯	10.7 4.4 —	口縁部は垂直気味であるが立ち上がりやや内傾しつつ次第に外反する。	口縁部内外面は横ナゲ手法がみられ底部は寛削り。	細砂粒含有。	にぶい褐色。堅緻。	
029 1号墳	杯	(10.4) 4.9 —	口縁部外面に段を有し内傾し口唇部で内湾。体部内湾。	口縁部横ナゲ、内面横位刷毛ナゲ。	良好。	褐色。粗質。	
030 1号墳	壺	15.0 — —	短かいS字口縁に続く体部が僅か。	口縁部内外面共に横ナゲ、体部上位にハケ目。	細砂粒含有。	にぶい黄褐色。良好。	
031 1号墳	壺	— — 9.0	肩部は内側に折り返している。	外内面はハケ目。	茶色砂粒含有。	上部は褐色。体部内面淡黄褐色。	
032 1号墳	罎 台	— — —	杯部は欠損し「ハ」の字状に開く直線的な脚部となる。円空は3つ。	脚部内面ハケ目。脚部外面寛磨き。	1mmの砂粒含有。	褐色。良好。	
033 1号墳	埴	(15.3) — —	丸底は枕線で区画され口縁部は直線的に開く。	口唇部内湾し頸部で外反する。	良好。	外面明赤褐色。内面淡黄褐色。堅緻。	
034 1号墳	埴	(11.6) — —	球割が欠損した直線的な口縁部。	口縁部横ナゲ内面寛磨き、外面寛削り。	0.5～1mmの砂粒多量含有。	淡黄褐色。良好。	
035 1号墳	壺	36.2 — —	口頸部は外反し口縁部に至り4本の深い溝がある。	全体的に同転で調整を施す。	白砂粒多量に含有。	暗灰色。堅緻。	
036 S B01	壺	(20.0) — —	「く」の字に開く口縁の端部はつまみ上げている。	全体に横ナゲ。	0.5mmの細砂粒含有。	にぶい褐色。軟質。	
037 S B01	壺	— — 6.0	器内が一定で底部からの立ち上がり強く内湾しながら垂直に伸びる。	胴部内面寛削り後器ナゲ外面置削り。	1mm大の砂粒含有。	明赤褐色。良好。	
038 S B01	壺	— — 5.5	底部は平らで強く立ち上がり底部は内湾しながら外上方に伸びる。	胴内部置ナゲ底内部指ナゲ。	1mm砂粒含有。	灰黄褐色。軟質。	
039 S B01	鉢	(12.2) — —	器内の薄い折り返し口縁の鉢。	口縁部横ナゲ折り返し、体部指ナゲ内面縦方寛磨き。	3mmの砂粒含有。	褐色。良好。	

遺物番号	器形	法量 ^{cm}	器形の特徴	成・整形の特徴	胎土	色調・焼成	備考
040 S B01	罎	— — —	胴部の最大径は中位にある円球型である。	胴内面荒ナデ、胴外面磨き。	0.5mm以下の細砂粒含有。	褐色。堅緻。	
041 S B01	罎	— — —	小型丸底土器の底部。	内面底部荒ナデ外面底部手持ち荒削り。	1mmの砂粒を含有。	外面にぶい黄褐色、内面明赤褐色、断面浅黄褐色。良好。	
042 S B01	高杯	— — —	杯部の底部から下方に外反しながら広がる形を呈す。	杯底部は荒削り、胴部外面ハケナデ指ナデ横ナデ。	細砂粒少々赤茶粒含有。	褐色。良好。	
043 S B01	甗	— — —	鉢形を呈する単孔の甗の底部。	胴内面荒ナデ、胴外面縦方向の荒削り。	0.5mmの砂粒を含有。	褐色。良好。	
044 S B01	碗	15.5 8.5 —	口縁部はほぼ直立し体部は内湾する。底部は平底。	口縁部横ナデ体部内面縦の荒ナデ胴外面荒削り。	良好。	外面赤褐色、内面褐色。粗質。	
045 S B01	蓋	— — (14.9)	天井部が低平で直立する口縁を持つ。	口縁部横ナデ体部内面縦の荒削り。	白色鉱物粒を含有。	灰色。堅緻。	須恵器。
046 S B01	杯	12.6 4.5 —	底部は丸底で器の中央に稜を有し口縁部は外傾する。	口縁部横ナデ体部内面荒削り。	良好。	褐色。良好。	
047 S B01	杯	12.5 4.7 —	丸い体部は稜線から直立気味に口縁部が立ち上がる。	口縁部横ナデ内面は荒ナデ。	赤褐色粒を含有。	明赤褐色。軟質。	
048 S B01	杯	11.8 4.8 —	口縁部短かく直立気味で体部の器内は厚い。	口縁部横ナデ内面ナデ外面荒削り。	細砂粒赤褐色砂粒含有。	明赤褐色。良好。	
049 S B01	杯	11.8 4.6 —	口縁部内傾し外上方へ直線的に伸び肩部に強い稜あり。	口縁部横ナデ体部内面荒削り。	良好。	褐色。堅緻。	
050 S B01	杯	11.6 5.0 —	底部は丸底で口縁部で直立している。	口縁部内外面共に横ナデ後棒状荒磨き体外面荒削り。	良好。	明赤褐色。良好。	
051 S B01	杯	11.3 5.0 —	口縁部は直立気味に外反し肩部に強い稜を持つ。	口縁部横ナデ体部内面荒削り。	細砂粒少量含有。	褐色。体部表面灰白色。堅緻。	
052 S B01	杯	11.1 5.0 —	口径は体部より大きく肩に深い稜を持っている。	口縁部横ナデ体部外面荒削り、内面は荒ナデ仕上げ。	細砂粒含有。	褐色。堅緻。	
053 S B01	杯	11.9 4.9 —	口縁部は幅広く直立気味で外傾し丸底である。底に2個の成後にあけた孔有り。	口縁部は横ナデ体部外面は荒削り内面はナデ。	茶褐色の粒を含有。	褐色。堅緻。	
054 S B02	杯	11.6 4.0 —	口縁は短かく口径と体部径では口径の方が大きい。	口縁部は横ナデ体部外面荒削り。	1mmの砂粒含有。	ぶい褐色。軟質。	
055 S B02	杯	(12.0) — —	口縁部直垂気味。口径と体部径はほぼ同径である。	口縁部は横ナデ体部内面荒削り。	細砂粒を多量に含有。	褐色。良好。	
056 S B02	杯	12.8 6.3 —	体部は内湾し口唇部では内傾する。底部は丸底で肉厚である。	口縁内外面横ナデ体外面荒削り内面ナデ棒状荒磨き。	2～3mmの粒含有。	外面褐色。内面にぶい褐色。良好。	
057 S B02	壺	— — (8.0)	胴上半部が欠損し下まる下半部は上げ底に至る。	胴部底部荒削り内面は摩滅していて不明瞭。	3mmの砂粒を含有。	外面浅黄褐色、内断面褐色。堅緻。	
058 S B03	壺	16.3 31.9 8.9	口縁部直垂気味で口唇部外反する。最大径は胴部中位にある。	体部は輪稜線を消す為の板でたいた痕後荒削り。	0.5mm以下の細砂粒多量含有。	灰白色。堅緻。	
059 S B03	壺	(19.5) — —	器内は厚く口縁部は直立する。	器面が荒れがひどく観察困難。	赤褐色の粘土粒を含有。	浅黄褐色。軟質。	
060 S B03	杯	13.4 4.5 4.4	口縁部は内湾気味に立ち上がり底部はくぼみ底である。	口縁部横ナデ体部は横方向荒削り。	2～3mmの砂粒を含有。	明赤褐色。良好。	
061 S B04	杯	(13.2) — —	口縁部は短かく内湾する。底部は丸底を呈す。	口縁部横ナデ内面棒状荒磨き。	砂粒を少量含有。	外面灰白色、内面褐色。堅緻。	
062 S B05	杯	(11.8) (4.0)	口縁部は短いが大きく外反する。	口縁部横ナデ体部内面棒状荒磨き。	細砂粒を多量に含有。	ぶい褐色。堅緻。	

第三章 塚井遺跡の調査

遺物番号	器形	法量 ^④	器形の特徴	成・整形の特徴	胎土	色調・焼成	備考
063 S B05	埴	(9.7) — —	頸部から垂直に立ち上がる 口縁部は外側に伸びて口唇 部に至る。器厚は均一。	口縁部横ナデ沈線 が2本入る中位横 ナデ沈線1本入る	1~3mmの茶褐色 灰物、白色 鉱物粒含有。	外面褐色、内面黒褐色。 軟質。	
064 2号埴	甕	(17.2) — —	頸部で大きく外反しわずかに 外反が続き中位外面に段 を持ちわずかに内湾する。	内外面とも棒状の 磨で表面を研磨。	赤褐色粒を含有。	褐色。堅緻。	
065 2号埴	甕	— — —	体部はテズリ中位最大径を 持つ。	口縁部横ナデ体部 寛ナデ体部内面横 位置ナデ。	白砂粒含有。	外面にぶい褐色、内 面褐色。堅緻。	
066 2号埴	甕	— — (4.6)	器肉は厚く肩の張った胴部 はすばりながら小さな底 部となる。	体部刷毛目上位中 位と2段に分かれて いる。	細砂粒を含有。	外面にぶい褐色、内 面褐灰色。堅緻。	
067 2号埴	甕	(20.2) — —	直線的な胴部と「く」の字状 に開く口縁部。	口縁部は横ナデ、 胴部は磨り内面ハ ケナデ磨磨き。	1~2mmの砂 粒含有。	内外面褐色、断面淡 黄褐色。良好。	
068 2号埴	高杯	— — —	「X」形に開く高杯の脚部。	胴部磨磨り。	1~2mm砂粒 含有。	褐色。良好。	
069 2号埴	甕	(15.6) — —	頸部より「く」の字に外反す る口縁部をもつ。器厚は厚 い。	口縁部横ナデ、胴 部磨磨り。	1~1.5mmの茶 褐色 灰物 含有	外面褐色、内面に ぶい褐色。不良。	
070 2号埴	甕	(15.0) — —	短かいS字状口縁に続く胴 部は僅か。	口縁部横ナデ、胴 部刷毛目。	良好。	外面淡黄褐色、内面 にぶい褐色。良好。	
071 2号埴	甕	— — (2.4)	磨磨を恐わせるハケ目が外 面を覆う底部丸底気味の甕	外面10mm巾縦位 (上下)刷毛目。	細砂粒含有。	ぶい褐色。粗質。	
072 2号埴	埴	(13.0) — —	球脚状が欠損した直線的な 口縁部。	内外面磨磨き。	0.5mmの砂粒 含有。	ぶい褐色。良好。	
073 2号埴	甕	(17.9) — —	口縁部立ち上がりはほぼ垂 直で口唇部は大きく外反し 体部は円球型の部を極く。	外面棒状磨磨き内 面磨ナデ。	0.5~1mm大 の砂粒含有。	ぶい褐色。軟質。	
074 2号埴	鉢	(12.0) — —	やや垂直気味に内湾し体部 につながる口縁は小さく外 反する。	口縁部横ナデ体内 面磨ナデ。	砂粒少量含 有。	ぶい赤褐色。堅緻。	
075 2号埴	甕	— — (8.2)	小型者の底部が抜けた甕と 考えられる。	表面磨磨き磨ナデ。	1~2mmの砂 粒含有。	ぶい褐色。良好。	
076 2号埴	杯	(12.5) — —	器肉は厚く丸い底部と外反 する体部を持つ。	内面指ナデ外面は 発泡している。	5mmの砂粒を 含有。	内外面褐色、断面褐 色。良好。	
077 2号埴	杯	11.2 4.0	口縁立ち上がり外方に開く 、底部丸底で浅い。	口縁部横ナデ、底 部外面ナデ。	良好。	褐色にぶい黄褐色。 良好。	
078 2号埴	杯	11.7 4.3	底部は丸底で口縁部の立ち 上がりは垂直気味で内湾し つつ外反口唇部先端丸底有	横ナデ磨ナデ。	細砂粒含有。	ぶい褐色。やや軟 質。	
079 2号埴	杯	12.5 5.0	底部丸底で口縁部垂直気味 に立ち上がりや内湾しつ つ外方に伸びる。	横ナデ磨ナデ磨磨 り。	細砂粒少量含 有。	ぶい褐色。やや軟 質。	
080 2号埴	杯	(12.0) — —	丸い底部は棒線を持って直 線的にのびる体部になる。	口縁部横ナデ体部 磨磨り内面ナデ。	0.1mmの砂粒 を含有。	赤褐色。良好。	
081 2号埴	杯	(12.7) (4.3)	器肉は厚く丸い底部から外 反する体部になる。	口縁部は棒状磨磨 磨で体部は縦の磨 磨り。	赤褐色粒を含有。	外面にぶい黄褐色、 内面褐色。良好。	
082 2号埴	紡輪車	最大径 4.4 最小径 2.2 高さ 1.6	楕圓円錐形を呈す。	放射状に線刻有り	黄灰色の滑石 含有。	部分的に黒色(黄灰 色)。	
083 2号埴	土 繩	長さ 5.4 胴径 1.85	最大径を中央にもつ土管状 の土繩。	表面磨ナデ。	砂、小石粒含 有。	褐色。良好。	

第Ⅳ章 清水田遺跡の調査

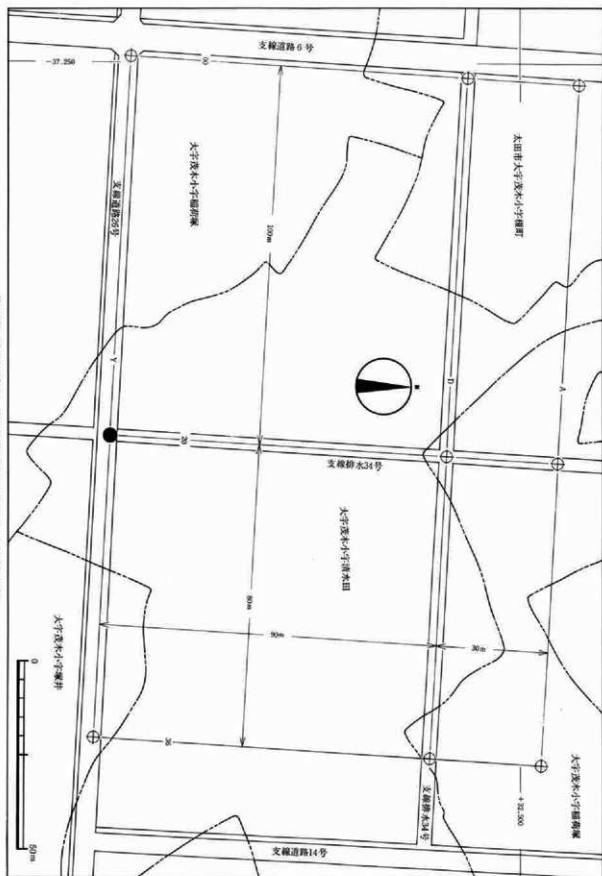
1 調査概要

概要 **発掘調査の経過** 昭和48年度に開始された太田東部地区県営ほ場整備事業に伴う「太田東部遺跡群」の埋蔵文化財発掘調査は3年次をむかえ、「花ノ木遺跡」「宮免遺跡」「上神原遺跡」の試掘調査と「清水田遺跡」の発掘調査を実施した。発掘調査の経費は群馬県耕地開発課が負担し、事業主体は館林土地改良事務所が担当した。発掘調査は、群馬県教育委員会文化財保護課が主体となり、太田市教育委員会と太田市史編集室が協力した。発掘調査は50年度と51年度の2次にわたった。1年次は、表土削平される水路部分を中心に昭和50年11月から51年2月まで続き、調査面積は2860㎡であった。2年次は昭和51年11月から昭和52年1月まで続き、水田部分として活用される畑地5630㎡を発掘調査した。

遺跡の環境 太田市茂木の集落南方の桑畑を中心として、北から張り出した標高32m前後の微高地を中心に南北600m、東西150m以上の拡がりをもつ大規模な遺跡の東南端である。本遺跡は古墳時代前期と平安時代の集落が検出されている。周辺の同時期の遺跡としては800m東南東に安房田遺跡、900m南南東に塚廻り古墳群、1km南に賀茂遺跡、1.5km南南東に小町田遺跡が存在する。また、谷ノ裏古墳群の北西端に位置すると考えられ、本遺跡出土の埴輪類も5世紀にまで遡ることが判明しており継続的な造墓が考えられる。

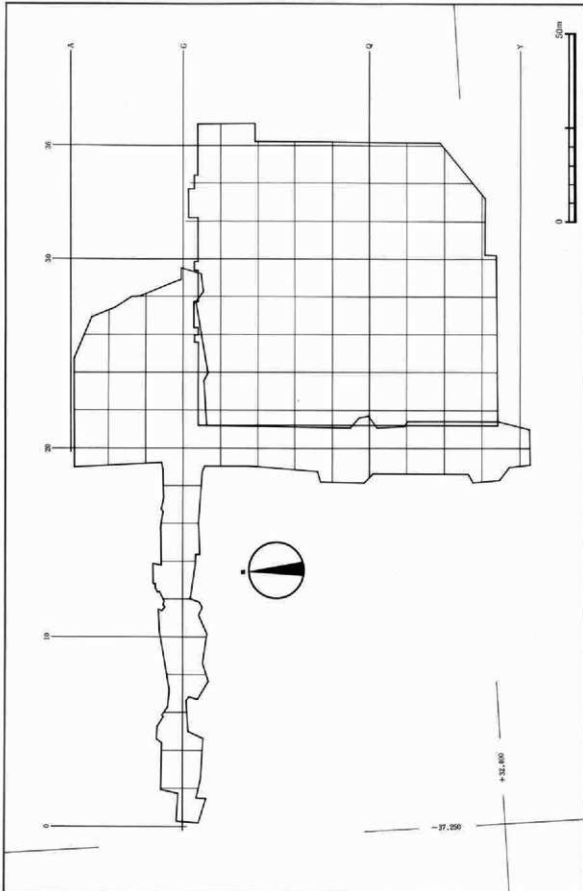
発掘された遺跡の変遷 遺跡は南側を流れる石原流路と東側を流れる葦川流路にはさまれた舌状の台地先端に立地する。本地域に確認されている初めての遺構は縄文前期からである。土壌1基で、また、その他の遺物も90点弱と少ない。前期の黒浜、諸磯式土器が9割と圧倒的に多く、その他中期の加曾利E式土器、後期の加曾利B式土器が若干見られる程度である。古墳時代前期になると26軒の住居址が台地全体に広がる。未発掘部分もあるが、4グループの台地の走向は、北西から南東に直線的に拡がる傾向がみられる。後期は8軒と集落が減少する。前期より台地中央に占地が移動し、2つのグループに分かれている。平安時代も後半になると98軒の集落が発掘区全域に分布する。けれども、この住居址は、同時期の切り合いが3回以上確認されたもので、同時存在は少ない。この時期の集落の中心は、台地中央に展開すると考えられ、多量の墨書土器などからも付近に官衙的性格を持った遺構の存在を考えたもよいのではなかろうか。また、この時代に並行して台地先端を横断する溝が掘削されている。上幅3m、深さ1.5mのこの溝は石原流路の水を葦川流路へ落すことを目的としており、当時、休泊台地西側からの水量の多さを推定させて興味深い。また、石原流路をはさんで、本遺跡と塚井遺跡には多数の古墳が存在する。本遺跡では5世紀、6世紀の古墳の存在が予想され、墳形は主として円墳であったと考えられる。また、塚井遺跡の谷ノ裏古墳群と呼ばれるものは、6世紀、7世紀を中心としたものと考えられる。本遺跡の古墳時代は集落と古墳群のあり方から、小地域の歴史的な農業共同体の存在を考えることができる。

第四章 清水田遺跡の調査



第56図 清水田遺跡 発掘調査区設定図(1) 大設定と字界

1 調査概要



第57図 清水田遺跡 発掘調査区設定図(2)グリッド細部の呼称

調査日誌

清水田遺跡(第1次)

1975年11月10日～1976年2月25日

- 11・10 発掘開始。水路部分を発掘区設定。調査事務所建設。
- 11・11～13 西区を重機により表土剥ぎ。
- 11・14～15 南区を重機により表土剥ぎ。
- 11・17～19 東北区を重機により表土剥ぎ。本日にて重機終了。
- 11・20～22 西区西側より遺構検出作業。
- 11・24～26 東北区の遺構検出作業。
- 11・27～29 南区の遺構検出作業。
- 12・1 各遺構発掘開始。1号住、2号住発掘調査。
- 12・2 1号住、2号住床面精査。平面実測も併行させる。
- 12・3 3号住発掘開始。4号住も切り合っている。
- 12・4 4号住発掘開始。
- 12・5 1号溝発掘開始。
- 12・6 出土遺物水洗・注記作業。各遺構精査。
- 12・8 5号住、6号住、7号住、8号住、9号住発掘開始。
- 12・9 各住居址の覆土発掘作業。
- 12・10 10号住、11号住、12号住、13号住発掘開始。
- 12・11 各住居址の発掘急ぐ。写真撮影、実測も併行させる。
- 12・12 14号住、15号住発掘開始。
- 12・13 各住居址の発掘作業。
- 12・15 16号住、17号住、18号住、19号住発掘開始。
- 12・16 2号溝発掘開始。
- 12・17 20号住、21号住、22号住発掘開始。
- 12・18 23号住発掘開始。着手遺構も併行作業。
- 12・19 24号住、25号住、26号住、27号住、28号住発掘開始。
- 12・20 29号住、30号住、31号住、32号住発掘開始。
- 12・22 33号住、34号住発掘開始。
- 12・23 着手した住居址の完掘を急ぐ。写真撮影多忙。
- 12・24 西区遺跡全体図作成。各住居址の完掘を急ぐ。
- 12・25 西区全体の清掃。全景写真撮影。
- 12・26 西区各遺構の精査。全体図作成。各遺構にシートかけ。
- 12・27 西区遺跡全体図作成継続。来年に持ち越し。
- 12・28～1・5 年末、年始休暇。
- 1・6 仕事始め。西区遺跡全体図作成。各遺構の発掘開始。
- 1・7 西区35号住、37号住発掘開始。
- 1・8 38号住、39号住、40号住、41号住発掘開始。
- 1・9 42号住発掘開始。西区の各遺構は全て着手。
- 1・10 西区遺跡全体図作成。出土遺物水洗、注記作業。
- 1・12 東区発掘開始。47号住、70号住、71号住発掘開始。
- 1・13 79号住、80号住、81号住、82号住発掘開始。
- 1・14 69号住、76号住発掘開始。6号溝、7号溝発掘開始。
- 1・15 仮日なれど希望者のみで発掘作業。
- 1・16～1・17 着手遺構の発掘作業。
- 1・19～1・23 43号住、44号住、48号住、49号住、50号住、51号住、61号住、72号住、73号住、74号住発掘開始。
- 1・26～1・31 77号住、78号住、83号住、84号住～88号住発掘開始。66号住～68号住、75号住発掘開始。
- 2・2～2・7 52号住、53号住、59号住、62号住～65号住発掘開始。45号住、46号住、54号住～58号住、60号住発掘開始。

- 2・9 本日より南区の発掘着手。東区の遺構実測大幅遅れ。
- 2・10～2・14 南区89号住～94号住発掘開始。8号溝発掘開始。95号住～109号住発掘開始。東区遺跡全体図作成。
- 2・16～2・17 11号溝、12号溝開始。
- 2・18 東区東北部に集中するピット群の関係について検討。
- 2・19 遺跡全体図作成。東区の残りを南区に着手。
- 2・20 遺跡全体図作成。東区の調査が無理があったようだ。
- 2・21 遺跡全体図作成。出土遺物の水洗、注記作業。
- 2・23～2・24 遺跡全体図作成。出土遺物の水洗、注記作業。
- 2・25 本日で発掘作業終了。器材、出土遺物撤収。

清水田遺跡(第2次)

1976年11月24日～1977年1月31日

- 11・24 清水田2次調査(東南区、関係者と現地で行い合わせ)。
- 11・25～11・27 重機による表土剥ぎ。
- 11・29～12・3 重機による表土剥ぎ。基礎杭打ち作業。
- 12・4 杭打ち作業。東南地区調査実施。
- 12・6 ジョレンによる遺構検出作業。遺構名をつけてゆく。
- 12・7 ジョレンによる遺構検出作業。
- 12・8 ジョレンによる遺構検出作業。107号住発掘開始。
- 12・9 132号住、111号住、118号住発掘開始。
- 12・10 108号住、109号住、110号住、112号住発掘開始。
- 12・11 各住居址の完掘急ぐ。
- 12・13 113号住、114号住、115号住、116号住発掘開始。
- 12・14 116号住と重複の117号住居址発掘開始。
- 12・15 各住居址の完掘急ぐ。各住居址毎で実測、写真撮影。
- 12・16 119号住、120号住発掘開始。
- 12・17 各住居址の完掘急ぐ。写真撮影に手回どる。
- 12・18 各住居址の細部写真撮影。発掘作業を中止。清掃作業。
- 12・20 121号住、122号住発掘開始。
- 12・21 各住居址の完掘急ぐ。風もなくおだやか。発掘日和。
- 12・23 123号住発掘開始。12号溝発掘開始。
- 12・24 着手した住居址の完掘急ぐ。
- 12・25 実測作業と出土遺物の水洗作業。
- 12・26～1・5 年末・年始休暇。
- 1・5 124号住、125号住、126号住、127号住発掘開始。
- 1・7 128号住、129号住、130号住発掘開始。
- 1・8 遺構実測作業のみで、室内にて出土遺物の水洗作業。
- 1・10 131号住発掘開始。12号溝土層断面の検討。
- 1・11 138号、139号居住建物発掘着手。
- 1・12～1・15 11号溝、12号溝発掘開始。各遺構実測図作成。
- 1・17 土壌を中心に発掘調査。各遺構実測図作成。
- 1・18 12号溝全体の精査。土層断面実測開始。
- 1・19 遺跡全体図の作成開始。12号溝写真撮影。
- 1・20 本日でほとんどの遺構の発掘は終了した。あとは実測。
- 1・21 遺跡全体の写真撮影のため、清掃。
- 1・22 遺跡全体写真撮影。各住居址の床面の調査。
- 1・24～1・28 ピット群の発掘実測。ほとんどのもが、染の横紋のもの。遺跡実測、遺跡全体図の作成を急ぐ。
- 1・29 実測図作成急ぐ。協力機関に郵礼の挨拶。
- 1・31 発掘作業終了。器材、出土遺物撤収。

2 遺 跡

概要 清水田遺跡は、土地改良区計画道路の支線道路26号と支線排水34号の交点を基本杭とした。この杭から土地改良区計画線に沿って西へ100m、直交線を北へ120mの交点をA-00区の基点とした。この基点を西から東へ向かって5mごとに00～36の番号を、北から東に5mごとにA～Yの番号をつけ、5m×5mのグリッドを発掘区として設定した。発掘区の方眼北はN-30°-Eである。遺跡の位置は第IX座標系X=-37.250、Y=+32.500である。発掘調査は昭和50年、51年の二年度にわたった。第1次調査は西区、北東区、南区の3地区、計2860m²ほどであった。第2次の発掘調査は南東区の5630m²ほどで本遺跡の総発掘調査面積は8490m²となった。遺跡地は、台地上面の稲荷塚、榎町、塚井などの字名に、低地部の清水田、鍋田、豆田などの水田地形の字名に分けられる。それからすると、この遺跡地の清水田の字名は不自然である。遺跡立地は、茂木集落から南東に延びてくる舌状の台地の先端に位置している。東側には菰川が北から南へ南側には北西から南東方向へ斜めに旧河川が走っていて台地先端で合流する。台地の高さは34mから33mの間で南東に向かって1/200の傾斜をしている。発掘区は、事業に伴う工事により水路として深耕がされない箇所、耕作面調整のため表面削平が予想される地域に限定されている。このため、発掘区の遺構分布は判明しても各時代の集落立地を把握するまでには当然至ってはいない。

住居址は、4つに分割された発掘区全域から検出された。西区は42軒の竪穴住居が検出され、石田川期7軒、鬼高期3軒、国分期32軒であった。東北区は竪穴住居が46軒、掘立柱建物が5棟検出された。時期の帰属は石田川期が4軒、鬼高期が1軒、国分期が41軒であった。なお、調査技術上の問題が多く、掘立柱建物と住居址の切り合い関係を明確にすることができなかった。感覚的にすぎないが、竪穴住居より掘立柱建物の方が新しいと考えられた。南区では竪穴住居が17軒検出された。石田川期が6軒、鬼高期が3軒、国分期が8軒であった。東南区では竪穴住居が26軒、掘立柱建物が2棟検出された。石田川期は9軒、国分期は17軒であった。時期の限定はできなかった掘立柱建物7棟以外の132軒の帰属時期をまとめると、石田川期26軒、鬼高期8軒、国分期98軒であった。特に奈良時代に該当する時期の欠落、国分期が全体の74%を占め、重複ともからめ継続している様子がうかがえる。発掘区全体から各時代の遺構分布をみると、石田川期は台地全域に広がっており、特に東南区では北西から南東に向かって直線的に配列しているようにも考えられる。鬼高期は東北発掘区の東端と、南区から西区にかけて直線的に分布する2群に分けられる。分布も石田川期より台地中央に上ってゆく傾向が認められる。国分期は台地全面に分散傾向を示す。それらは、発掘結果であった国分期同士が3期以上に重複することを考えると、同時存在の住居址は以外と少なくなるものと考えられる。平面形から横長長方形が半数以上を数えることから、国分期でも後出的であることがうかがえる。

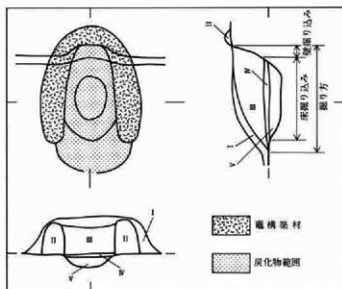
溝は14条検出されている。特に台地周縁は、調査前より黄褐色のロームが表土層として存在し、重機によるローム面までの表土削除の方法では農耕に関する遺構の破壊は不可避であった。S D01～S D09は、近世以降の畑作に関する溝、S D10は古墳の周溝と考えられる溝、S D11、S D12は同時に平行する近世以降の道路遺構、S D13は水田面と関係する近世の溝、S D14は台地先端を横断する国分期の水路であった。

土壌は73基検出された。発掘区の東半に集中しており、古墳時代～中世にかけては少数ではあるが東南区に集中する。近世以降は全体的に拡散する。時期別には縄文期1基、和泉期1基、鬼高期5基、国分期2基、中世10基、近世54基となり、近世以降の土壌が全体の74%と圧倒的多数を占める。

基準土層

本遺跡の層位は上部から①表土②包含量③ローム層の順に堆積している。地形的には西北から東南に緩傾斜する舌状の台地の先端部を現況では呈する。けれども後世の農耕による改変を中心に台地上には表土が薄く、台地縁辺に厚いことが試掘調査時に判明されている。このことは遺跡地の遺構分布とも合致する。また、遺物包含層も上部からの攪乱によって僅かに認められる程度にすぎない。このことと重機による表土削除とは何ら関係はないが、試掘溝での予備調査後、ローム層面で遺構検出を実施した。この段階で住居址の覆土の色調が2種類に分類することが出来た。ここではその層位分類を凡例化して、その他については個々の解説中に記入することにした。

20層	覆土 暗褐色土層	砂を多量に含む軟質な土層。	30層	覆土 暗褐色土層	砂質土を主体に少量の黒褐色土ブロックを含む。
21層	覆土 暗褐色土層	砂とロームブロックを少量含む軟質土層。	31層	覆土 暗褐色土層	砂を少量含み、30層より硬い。
22層	覆土 黒褐色土層	ロームブロックと焼土、炭化物を少量含む。	32層	覆土 暗褐色土層	砂はほとんど含まずロームブロックを少量含む。
23層	覆土 黒褐色土層	覆土の主体をなす土層軟質土である。	33層	覆土 黒褐色土層	ロームブロックを少量含み32層よりも硬質である。
24層	覆土 黒褐色土層	炭化物、ロームブロックを少量含む。硬質土層。	34層	覆土 黒褐色土層	ロームブロックと焼土を少量含み硬質である。
25層	覆土 黒褐色土層	焼土、炭化物を多量に含む粘質土層。	35層	覆土 黒褐色土層	粘質が強く焼土、炭化物灰層が多量に含まれる。
26層	覆土 暗褐色土層	住居址隅の壁崩落土。	36層	覆土 住居址隅の壁崩落土。	
27層	覆土 黄褐色土層	ロームブロック。	37層	覆土 黄褐色土層	ロームブロック。

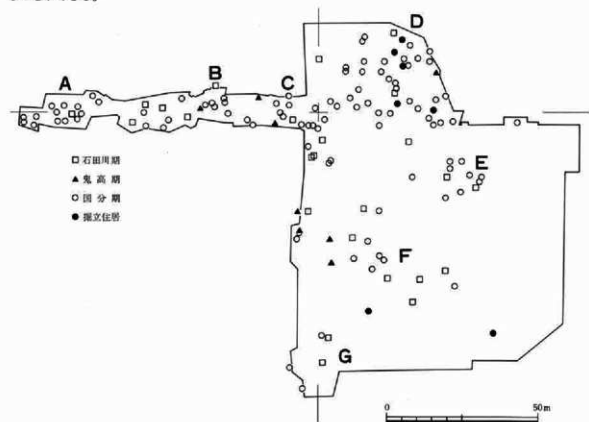


第58図 清水田遺跡 電機式図

- I 電被覆層 暗褐色土層で電崩落土や、住居覆土の混合土と考えられる。
- II 電構築材 褐色粘土層のブロックで部分的に白色粘土を含む。
- III 崩落土 電内部に充填された暗褐色土層で焼土や炭化物、灰を混土している。
- IV 床面焼土層 赤褐色土中に多量の赤色ブロックを含み上層に灰層が被さる。
- V 床面下堆積層 褐色ロームブロックと黒褐色土、焼土、灰層が混土している。

住居址

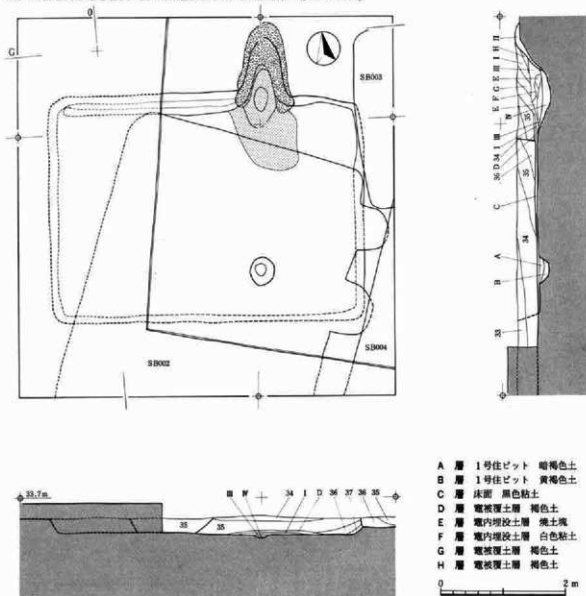
本遺跡の発掘区域は、茂木集落から南東方向へのびる低台地で標高34mから33mへ1/200の傾斜を持つ約8500m²の範囲である。東側は菰川流路で南側は石原流路で削られた舌状の低台地の先端と考えられる。遺構は全てローム台地に痕跡をとどめ、調査区の南東の低地に向かって急激にその数が減少する。検出された遺構は、竪穴住居址132軒、掘立柱建物7棟、溝14条、土壇73基であった。132軒の住居址の所属時期は以下のとおりである。古墳時代前期の石田川期は26軒、古墳時代後期の鬼高期は8軒、平安時代の国分期は98軒である。各時期の全体での占める割合は、国分期が74%、石田川期が20%、鬼高期が6%である。次に発掘区内における各時期の住居址の分布状態について概観してみたい。そこで、発掘区の集中する範囲を西側からA～Gの7ブロックに分けてみた。石田川期はAブロックが少ないものの、B～Gブロックまで全体的に分布している。鬼高期はC、D、Fブロックに分散している。国分期はA～Gブロックまで全域に分布している。また、国分期と考えられる掘立柱建物はDブロックに集中しFブロックに2棟分散して分布している。さて住居址を他の遺構と重複して考えてみたい。古墳時代前期前半の石田川期では大規模な集落を台地全面に展開する。けれどもこの集落の首長層の墳墓が検出されていない。台地中央の高位置に占地するものであろうか。古墳時代前期後半の和泉期の集落は検出されていない。けれども本遺跡より出土の埴輪類が5世紀後半に遡ることからこの周辺に古墳の存在を類推することができ、更に南東方向の塚井遺跡東方にその時期に対応する集落が予想される。古墳時代後期の鬼高期になると集落は減少する。けれども南東へ300mの距離で標高300mの地点に立地する塚井遺跡はこの時期の集落であり、集落の低地方向へと進出がうかがわれる。平安時代になると、重複による継続と時代幅は予想されるものの、集落は発掘区全域に拡散する。更に台地先端を横切る水路の開鑿は耕地の生産性を最大限に高めようとする積極的な姿を読み取ることができる。



第59図 清水田遺跡 住居址分布図

第1号住居址

本遺跡の西側、G-00に位置する。本住居址はSB001→SB002→SB003の順に重複する。平面形は横長長方形を呈し、規模は、長さ5m×2.7mを測り、床面積は約13.5㎡である。主軸は、N-13°-Eを示す。竈は、住居の北辺、東寄りに付設されている。壁高は、南壁で34cmを測る。壁の立ち上がりは、平均70°を示す。住居址内の覆土は、基本的に上層、下層に分層され、遺物の取り上げもその区分に従った。上層は、黒褐色土層で、ロームブロックと焼土を少量含み、硬質である。下層は、黒褐色土層で、粘質が強く焼土、炭化物、灰層が多量に含まれている。竈に関係する土層は、竈被覆土が4層に分層されI層は暗褐色土層、G層は炭化物、焼土を含む褐色土層、H層は焼土を多量に含む褐色土層で、竈内崩落土が5層に分層されIII層は暗褐色土層、E層は焼土ブロック、F層は白色粘土と焼土ブロック混土層で、竈床面下層はIV層で床面焼土層である。住居内のピットは、1箇所あり、その深さ約17cmである。出土遺物は検出されない。本住居址の時期は、住居址の重複関係、覆土、施設などから国分期と考えられる。

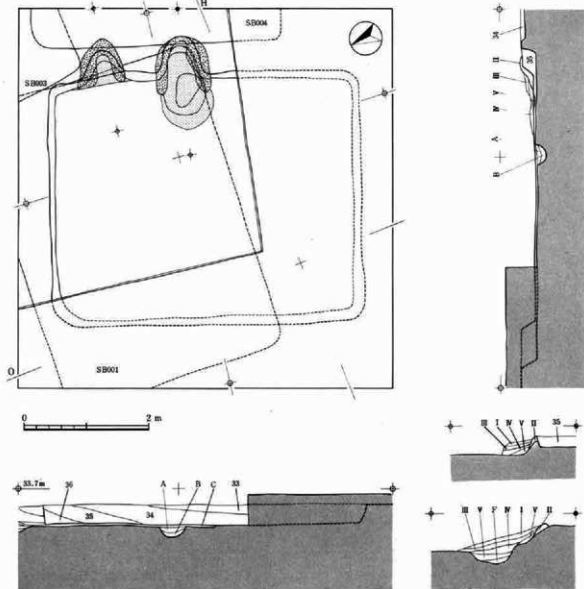


- A 層 1号住居ピット 暗褐色土
- B 層 1号住居ピット 黄褐色土
- C 層 床面 黒色粘土
- D 層 竈被覆土層 褐色土
- E 層 竈内埋設土層 焼土塊
- F 層 竈内埋設土層 白色粘土
- G 層 竈被覆土層 褐色土
- H 層 竈被覆土層 褐色土

第60図 清水田遺跡 1号住居址実測図

第2号住居址

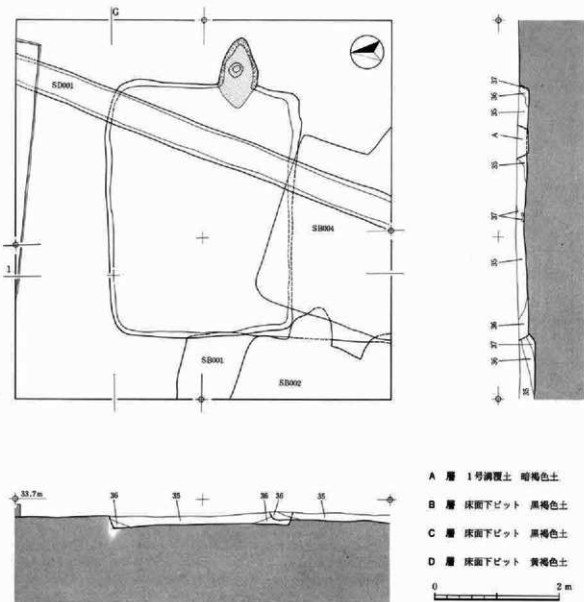
本遺跡の西側、G-00に位置する。本住居址はSB001→SB002→SB004の順に重複する。平面形は横長長方形を呈し、規模は、長さ5.3m×4mを測り、床面積は約21㎡である。主軸は、N-115°-Eを示す。竈は、東辺に2箇所付設されている。北寄りは古く、中央のものが新しい。壁高は、北壁で30cmを測る。壁の立ち上がりは、平均80°を示す。住居址内の覆土は、基本的に上層、下層に分層され、遺物の取り上げもその区分に従った。上層は、黒褐色土層で、ロームブロックを少量含み、32層よりも硬質である。下層は、黒褐色土層で、ロームブロックと焼土を少量含み、硬質である。竈に関係する土層は、竈被覆土が1層、竈内崩落土が1層、竈床面下層が4層に細別される。その他の土層として、A層は1号住居ピットで暗褐色軟質土層。B層は1号住居ピットで黄褐色硬質土層、中に黒褐色ブロックを含む。C層は床面で黒色粘質土で硬い。D層は竈床面下層で黄褐色土層である。住居内のピットはない。出土遺物は検出されない。本住居址の時期は、住居址の重複関係、覆土、施設などから国分期と考えられる。



第61図 清水田遺跡 2号住居址実測図

第3号住居址 (出土遺物 第164図)

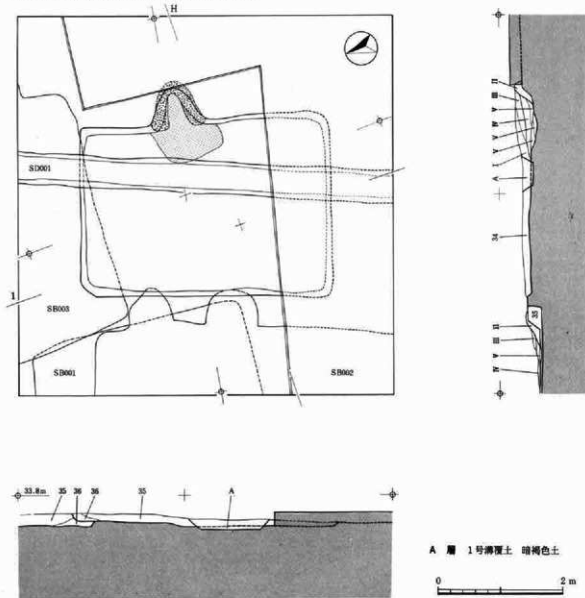
本遺跡の西側、G-01に位置する。本住居址はSB001→SB003→SB004の順に重複する。平面形は縦長長方形を呈し、規模は、長さ4.5m×3.1mを測り、床面積は約14m²である。主軸は、N-94°-Eを示す。竈は、住居の東辺、南寄りに付設されている。壁高は、南壁で20cmを測る。壁の立ち上がりは、平均70°を示す。住居址内の覆土は、基本的に同一層として観察され、遺物の取り上げも一括処理した。黒褐色土層で、粘土質が強く焼土、炭化物、灰層が多量に含まれている。竈に関する土層は、竈被覆土が1層、竈内崩落土が1層、竈床面下層が2層に細別される。その他の土層として、35層は覆土で黒褐色土層で粘土質が強く焼土、炭化物、灰層が多量に含まれる。36層は覆土で褐色土層で住居址隅の壁崩落土。37層は覆土で黄褐色土層でロームブロックである。住居内のピットはない。出土遺物は、須恵器の高台付椀、鉄鉾が検出された。本住居址の時期は、住居址の重複関係、覆土、施設、出土遺物などから、国分期と考えられる。



第62図 清水田遺跡 3号住居址実測図

第4号住居址 (出土遺物 第164図)

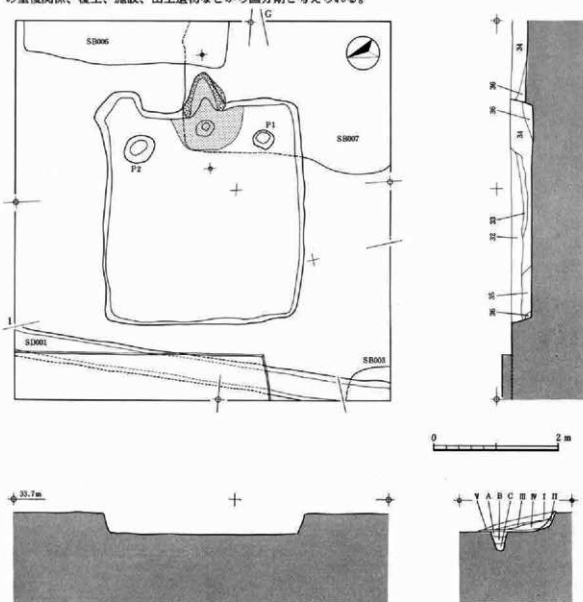
本遺跡の西側、H-01に位置する。本住居址はSB002→SB003→SB004の順に重複する。平面形は横長長方形を呈し、規模は、長さ4m×3mを測り、床面積は約12㎡である。主軸は、N-112°-Eを示す。竈は、住居の東辺、中央寄りに付設されている。壁高は、東壁で15cmを測る。壁の立ち上がりは、平均50°と、ゆるやかである。住居址内の覆土は、基本的に同一層として観察され、遺物の取り上げも一括処理した。黒褐色土層で、粘質が強く焼土、炭化物、灰層が多量に含まれている。竈に関する土層は、竈被覆土が1層、竈内崩落土が1層、竈床面下層が4層に細別される。その他の土層として、34層は覆土で黒褐色土層、ロームブロックと焼土を少量含み、硬質である。35層は覆土で黒褐色土層、粘質が強く焼土、炭水化物、灰層が多量に含まれる。36層は覆土で褐色土層、住居址隅の壁崩落土である。住居内のピットはない。出土遺物は、須恵器の杯、高台付椀、鉄滓、鉄製刀子などが検出された。本住居址の時期は、住居址の重複関係、覆土、施設、出土遺物などから固分期と考えられる。



第63図 清水田遺跡 4号住居址実測図

第5号住居址 (出土遺物 第164、186図)

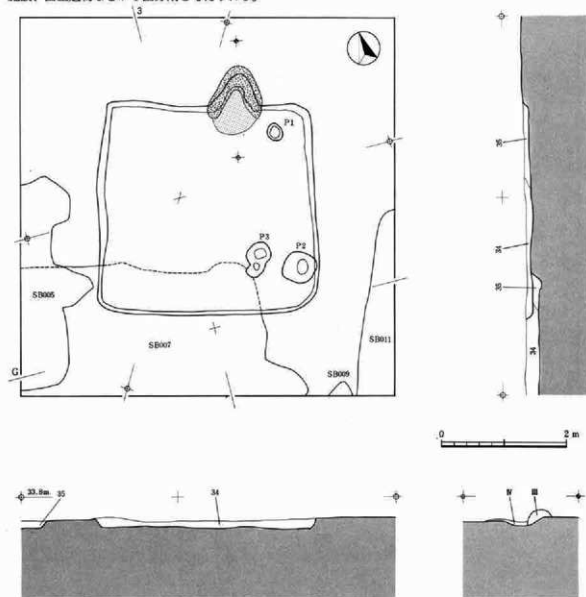
本遺跡の西側、F-02に位置する。本住居址はSB007→SB005の順に重複する。平面形は方形を呈し、規模は、長さ3.6m×3.3mを測り、床面積は約12㎡である。主軸は、N-105°-Eを示す。竈は、住居の東辺、中央寄りに付設されている。壁高は、東壁で35cmを測る。壁の立ち上がりは、平均75°を示す。住居址内の覆土は、基本的には上層、下層に分層され、遺物の取り上げもその区分に従った。上層は、黒褐色土層で、ロームブロックを少量含み32層よりも硬質である。下層は、黒褐色土層で、ロームブロックと焼土を少量含み、硬質である。竈に関する土層は、竈被覆土が1層、竈内崩落土が1層、床面下層が2層に細別される。その他の土層として、A層は竈床面下層で焼土と灰層の混土、B層は竈床面下層で炭化物を含む軟質褐色土、C層は竈床面下層で黄褐色土である。住居内のピットは、1の深さ約22cm、2の深さ約9cmである。出土遺物は、土師器の杯、須恵器の杯、高台付椀、鉄製刀子、土鏟などが検出された。本住居址の時期は、住居址の重複関係、覆土、施設、出土遺物などから国分期と考えられる。



第64図 清水田遺跡 5号住居址実測図

第6号住居址 (出土遺物 第164、165、186図)

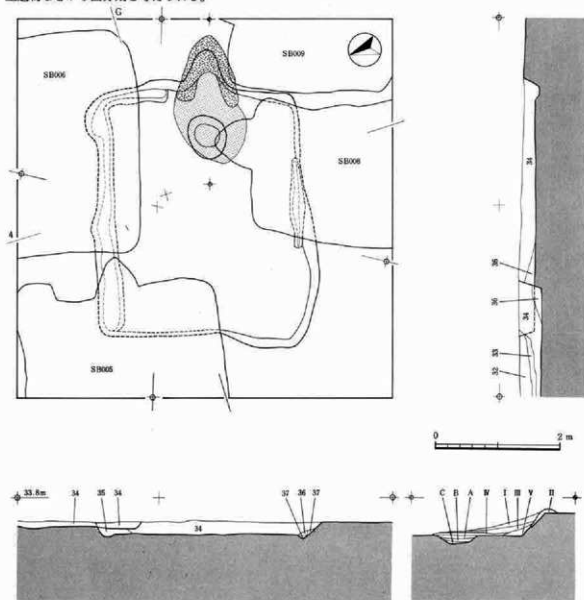
本遺跡の西側、F-03に位置する。本住居址はSB007→SB006の順に重複する。平面形は方形を呈し、規模は、長さ3.5m×3.4mを測り、床面積は約12m²である。主軸は、N-18°-Eを示す。竈は、住居の北辺、東寄りに付設されている。壁高は、東壁で15cmを測る。壁の立ち上がりは、平均70°を示す。住居址内の覆土は、基本的に同一層として観察され、遺物の取り上げも一括処理した。黒褐色土層で、ロームブロックと焼土を少量含み、硬質である。竈に關係する土層は、竈被覆土層、竈内崩落土層は確認されず、竈床面下層が残存している。34層は覆土で黒褐色土層、ロームブロックと焼土を少量含み、硬質である。34層は覆土で黒褐色土層、粘質が強く焼土、炭化物、灰層が多量に含まれている。住居内のピットは、1の深さ約16cm、2の深さ約10cm、3の深さ約44cmである。出土遺物は、土師器の杯、大甕、小甕、高台付碗、台付甕、須恵器の杯、高台付碗、内黒、鉄製工具、磁石などが検出された。本住居址の時期は、住居址の重複関係、覆土、施設、出土遺物などから国分期と考えられる。



第65図 清水田遺跡 6号住居址実測図

第7号住居址 (出土遺物 第165、186図、PL. 16、19)

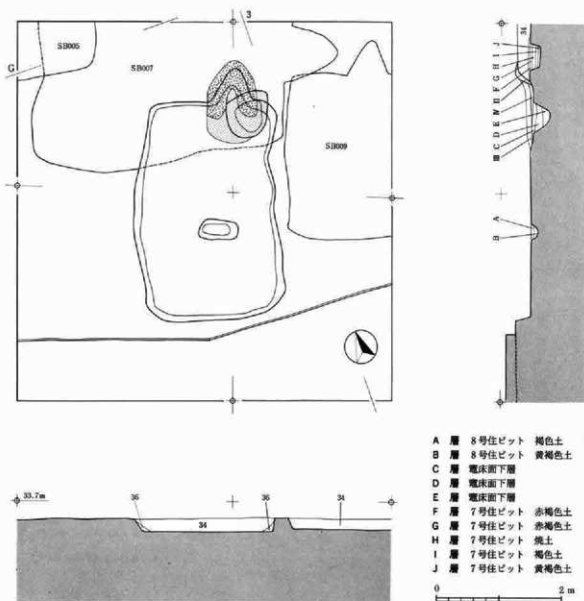
本遺跡の西側、G-03に位置する。本住居址はSB009→SB007→SB005、SB007→SB006、SB007→SB008の順に重複する。平面形は縦長長方形を呈し、規模は、長さ4.1m×3.7mを測り、床面積は15m²である。主軸は、N-110°-Eを示す。竈は、住居の東辺、中央寄りに付設されている。壁高は、東壁で25cmを測り、壁の立ち上がりは、平均70°を示す。住居址内の覆土は、基本的に同一層として観察され、遺物の取り上げも一括処理した。黒褐色土層で、ロームブロックと焼土を少量含み、硬質である。竈に関する土層は、竈被覆土が1層、竈内崩落土が1層、竈床面下層が2層に細別される。その他の土層として、A層は竈床面下層で、焼土、炭化物を多量に含む褐色土、B層は、竈床面下層で、炭化物、灰層を含む黄褐色土、C層は、竈床面下層で、黄褐色土である。住居内のピットはない。出土遺物は、土師器の杯、大甕、小甕、須恵器の杯、高台付碗、鉄製工具、磁石などが検出された。本住居址の時期は、住居址の重複関係、覆土、施設、出土遺物などから国分期と考えられる。



第66図 清水田遺跡 7号住居址実測図

第8号住居址 (出土遺物 第165、186図)

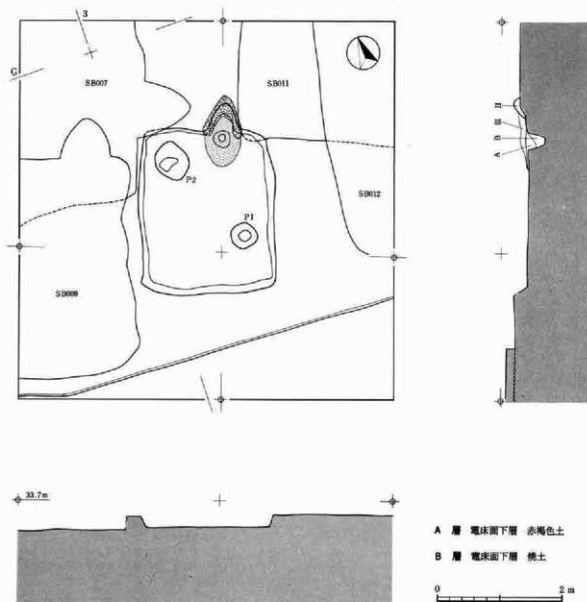
本遺跡の西側、G-02に位置する。本住居址はS B007→S B008の順に重複する。平面形は縦長長方形を呈し、規模は、長さ3.5m×2.4mを測り、床面積は約8.5㎡である。主軸は、N-22°-Eを示す。竈は、住居の北辺、中央寄りに付設されている。壁高は、西壁で38cmを測る。壁の立ち上がりは、平均85°を示す。住居址内の覆土は、基本的に同一層として観察され、遺物の取り上げも一括処理した。黒褐色土層でロームブロックと焼土を少量含み、硬質である。竈に関する土層は、竈被覆土層は確認されず、竈内崩落土が1層、竈床面下層が1層に細別される。その他の土層として、34層は覆土で黒褐色土層、ロームブロックと焼土を少量含み、硬質である。36層は覆土で褐色土層、住居址隅の壁崩落土である。住居内のピットは、1箇所で深さは約10cmである。出土遺物は、土師器の杯、羽釜、須恵器の杯、内黒、鉄製鎌、磁石などが検出された。本住居址の時期は、住居址の重複関係、覆土、施設、出土遺物などから国分期と考えられる。



第67図 清水田遺跡 8号住居址実測図

第9号住居址 (出土遺物 第166、186図)

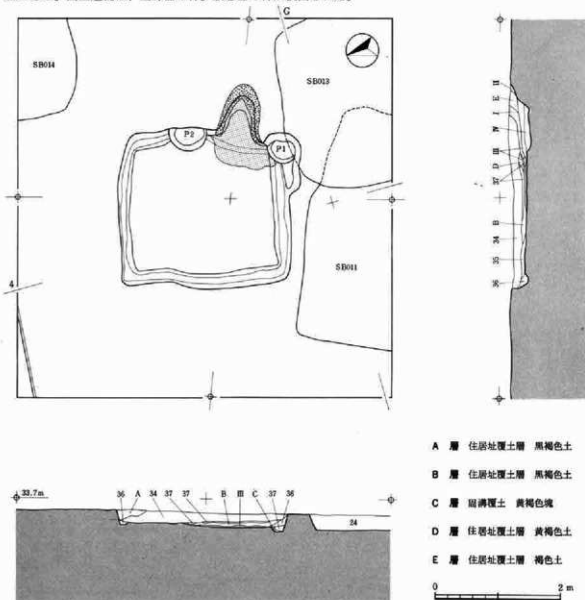
本遺跡の西側、G-03に位置する。本住居址はSB011→SB009→SB007の順に重複する。平面形は縦長長方形を呈し、規模は、長さ2.6m×2.2mを測り、床面積は約5.5㎡である。主軸は、N-22°-Eを示す。竈は、住居の北辺、中央寄りに付設されている。壁高は、東壁で19cmを測る。壁の立ち上がりは、平均70°を示す。住居址内の覆土は、基本的に同一層として観察され、遺物の取り上げも一括処理した。黒褐色土層で、ロームブロックと焼土を少量含み、硬質である。竈に関する土層は、竈被覆土層、竈床面下層は確認されず、竈内崩落土が1層が残存している。その他の土層として、34層は覆土で黒褐色土層、ロームブロックと焼土を少量含み、硬質である。住居内のピットは、1の深さ約29cm、2の深さ約15cmである。出土遺物は、土師器の大甕、須恵器の杯。内黒、砥石などが検出された。本住居址の時期は、住居址の重複関係、覆土、施設、出土遺物などから区分期と考えられる。



第68図 清水田遺跡 9号住居址実測図

第10号住居址 (出土遺物 第166図)

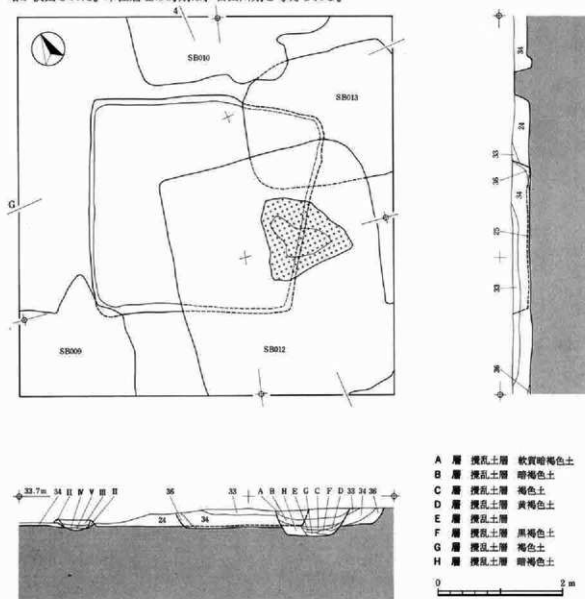
本遺跡の西側、F-04に位置する。本住居址はSB013→SB010の順に重複する。平面形は横長長方形を呈し、規模は、長さ2.8m×2.6mを測り、床面積は約7.5m²である。主軸は、N-109°-Eを示す。竈は、住居の東辺、南寄りに付設されている。壁高は、西壁で29cmを測る。壁の立ち上がりは、平均80°を示す。住居址内の覆土は、基本的に同一層として観察され、遺物の取り上げも一括処理した。黒褐色土層でロームブロックと焼土を少量含み、硬質である。竈に関する土層は、竈被覆土が2層で、竈内崩落土が1層で、竈床面下層が1層に細別される。その他の土層として、24層は覆土で黒褐色土層、炭化物、ロームブロックを少量含む、硬質土層。34層は覆土で黒褐色土層。ロームブロックと焼土を少量含む、硬質である。35層は覆土で黒褐色土層、粘質が強く焼土、炭化物、灰層が多量に含まれる。36層は覆土で褐色土層、住居址隅の壁崩落土。37層は覆土で黄褐色土層、ロームブロックである。住居内のピットは、1の深さ約14cm、2の深さ約20cmである。出土遺物は、土師器の杯。須恵器の杯が検出された。



第69図 清水田遺跡 10号住居址実測図

第11号住居址 (出土遺物 第166図)

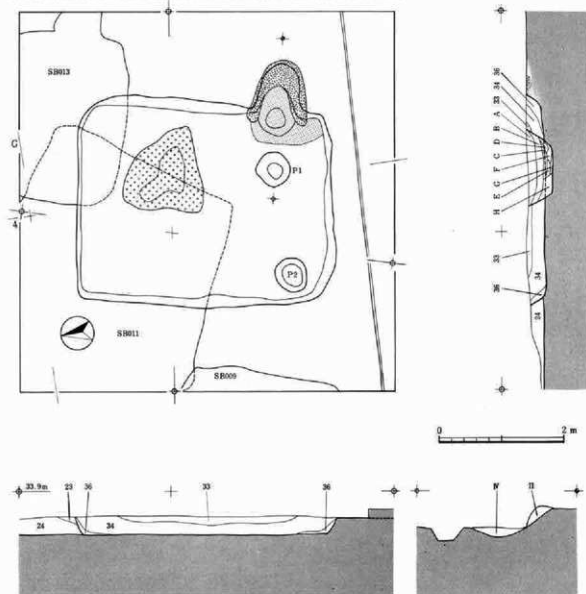
本遺跡の西側、G-04に位置する。本住居址はSB011→SB009、SB011→SB013→SB012の順に重複する。平面形は方形を呈し、規模は、長さ3.7m×3.5mを測り、床面積は約13m²である。主軸は、N-26°-Eを示す。竈はない。壁高は、東壁で25cmを測る。壁の立ち上がりは、平均70°を示す。住居址内の覆土は、基本的に上層、下層に分層され、遺物の取り上げもその区分に従った。上層は、黒褐色土層で、ロームブロックを少量含み、32層よりも硬質である。下層は、黒褐色土層で、ロームブロックと焼土を少量含み、硬質である。その他の土層として、23層は覆土で黒褐色土層、覆土の主体をなす土層、軟質土である。24層は覆土で黒褐色土層、炭化物、ロームブロックを少量含む硬質土層。33層は覆土で黒褐色土層、ロームブロックを少量含み、32層よりも硬質である。34層は覆土で黒褐色土層、ロームブロックと焼土を少量含み、硬質である。36層は覆土で褐色土層、住居址隅の壁崩落土である。住居内のピットはない。出土遺物は、土師器の壺、埴が検出された。本住居址の時期は、石田川期と考えられる。



第70図 清水田遺跡 11号住居址実測図

第12号住居址 (出土遺物 第166図)

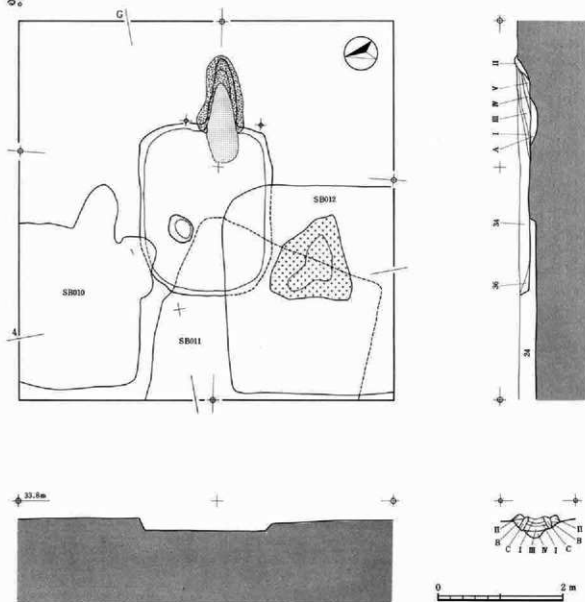
本遺跡の西側、G-04に位置する。本住居址はS B011→S B013→S B012の順に重複する。平面形は横長長方形を呈し、規模は、長さ4.2m×3.4mを測り、床面積は約14㎡である。主軸は、N-101°-Wを示す。竈は、住居の東辺、南寄りに付設されている。壁高は、北壁で28cmを測る。壁の立ち上がりは、平均65°と、ゆるやかである。住居址内の覆土は、基本的に上層、下層に分層され、遺物の取り上げもその区分に従った。上層は、黒褐色土層で、ロームブロックを少量含み、32層よりも硬質である。下層は、黒褐色土層で、ロームブロックと焼土を少量含み、硬質である。竈に関する土層は、竈被覆土層、竈内崩落土層は確認されず、竈床面下層が残存している。その他の土層は、擾乱土層で、A層は軟質暗褐色土層、B層は暗褐色土層、C層は褐色土層、D層は黄褐色土層、E層はロームブロック、F層は黒褐色ブロック、G層は炭化物を少量含む褐色土層、H層は軟質暗褐色土層である。住居内のピットは、1の深さ約19cm、2の深さ約21cmである。出土遺物は、須恵器の杯、高台付碗、蓋。内黒、鉄製刀子が検出された。



第71図 清水田遺跡 12号住居址実測図

第13号住居址 (出土遺物 第166図)

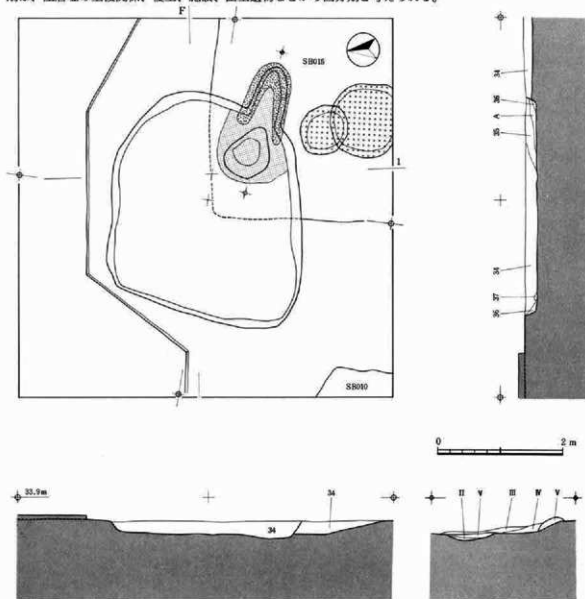
本遺跡の西側、G-04に位置する。本住居址はSB011→SB013→SB010、SB013→SB012の順に重複する。平面形は縦長長方形を呈し、規模は、長さ2.7m×2.2mを測り、床面積は約6㎡である。主軸は、N-103°-Eを示す。竈は、住居の東辺、中央寄りに付設されている。壁高は、南壁で27cmを測る。壁の立ち上がりは、平均27°と、ゆるやかである。住居址内の覆土は、基本的に同一層として観察され、遺物の取り上げも一括処理した。黒褐色土層で、ロームブロックと焼土を少量含み、硬質である。竈に関係する土層は、竈被覆土が2層、竈内崩落土が1層、竈床下層が2層に細別される。その他の土層として、A層は竈床面下層で灰、炭化物を多量に含む、軟質の黒褐色土。B層は竈構築材で袖芯材で白色粘土と焼土の混土。C層は竈構築材で袖芯材の河原石である。住居内のピットは、1箇所深さ3cmである。出土遺物は、土師器の羽釜が検出された。本住居址の時期は、住居址の重複関係、覆土、施設、出土遺物などから図分期と考えられる。



第72図 清水田遺跡 13号住居址実測図

第14号住居址 (出土遺物 第186図、PL. 19)

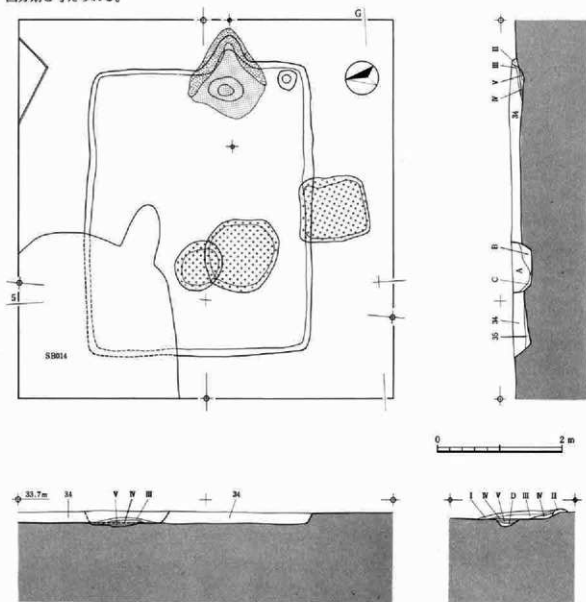
本遺跡の西側、F-05に位置する。本住居址はSB015→SB014の順に重複する。平面形は縦長長方形を呈し、規模は、長さ3.6m×3.1mを測り、床面積は約11m²である。主軸は、N-94°-Eを示す。竈は、住居の東辺、南寄りに付設されている。壁高は、南壁で25cmを測る。壁の立ち上がりは、平均70°を示す。住居址内の覆土は、基本的に同一層として観察され、遺物の取り上げも一括処理した。黒褐色土層で、ロームブロックと焼土を少量含み、硬質である。竈に関する土層は、竈被覆土層は確認されず、竈内崩落土1層、竈床面下層が3層に細別される。その他の土層として、A層は住居址覆土で暗褐色軟質土である。34層は覆土で黒褐色土層、ロームブロックと焼土を少量含み、硬質である。35層は覆土で黒褐色土層、粘質が強く焼土、炭化物、灰層が多量に含まれる。36層は覆土で褐色土層、住居址隅の壁崩落土。37層は覆土で黄褐色土層、ロームブロックである。住居内のピットはない。出土遺物は、鉄製刀子、土錘が検出された。本住居址の時期は、住居址の重複関係、覆土、施設、出土遺物などから国分期と考えられる。



第73図 清水田遺跡 14号住居址実測図

第15号住居址 (出土遺物 第166、183図、PL.16)

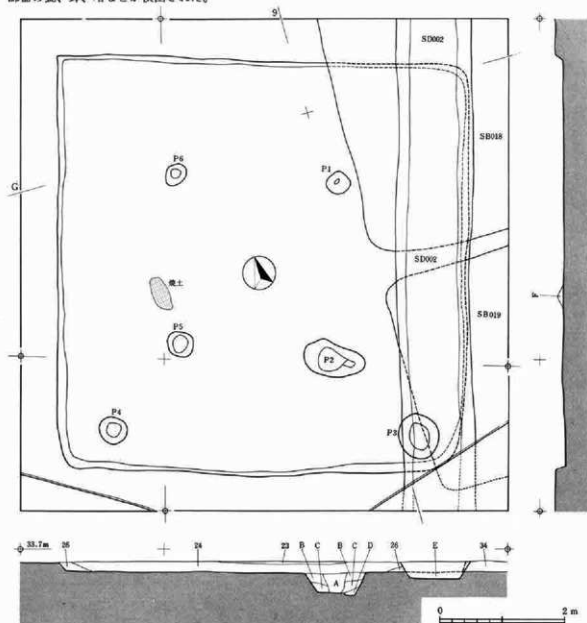
本遺跡の西側、F-05に位置する。本住居址はSB015→SB014の順に重複する。平面形は縦長長方形を呈し、規模は、長さ4.7m×3.7mを測り、床面積は約17.5m²である。主軸は、N-96°-Eを示す。竈は、住居の東辺、中央寄りに付設されている。壁高は、西壁で28cmを測る。壁の立ち上がりは、平均70°を示す。住居址内の覆土は、基本的に同一層として観察され、遺物の取り上げも一括処理した。黒褐色土層で、ロームブロックと焼土を少量含み、硬質である。竈の關係する土層は、竈被覆土が1層、竈内崩落土が1層、竈床面下層が2層に細別される。その他の土層として、A層は攪乱土層で暗褐色軟質土、B層は攪乱土層で黄褐色土とブロック混土、C層は攪乱土層でロームブロック、D層は竈床面下層で炭化物を含む黄褐色土である。住居内のピットは、1箇所で深さが約29cmである。出土遺物は、土師器の杯、小甕、須恵器の杯、高台付椀、内黒、黒書土器などが検出された。本住居址の時期は、住居址の重複關係、覆土、施設、出土遺物などから国分期と考えられる。



第74図 清水田遺跡 15号住居址実測図

第16号住居址 (出土遺物 第167図)

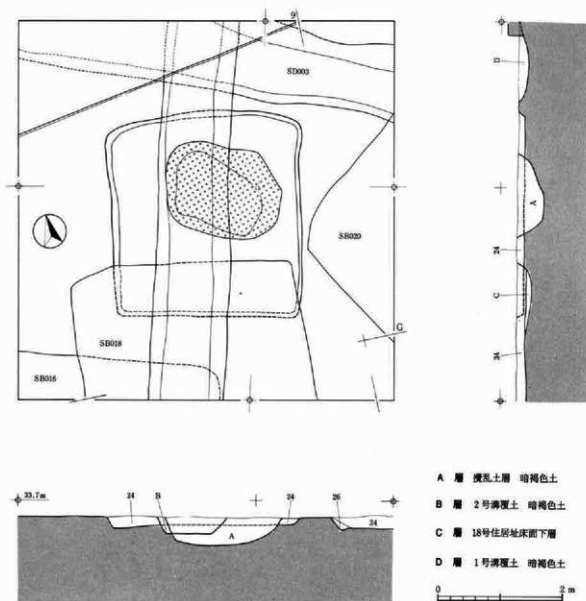
本遺跡の西側、G-08に位置する。本住居址はS B016→S B018、S B016→S B019の順に重複する。平面形は方形を呈し、規模は、長さ6.8m×6.6mを測り、床面積は約45㎡である。主軸は、N-18°-Eを示す。竈はない。壁高は、南壁で15cmを測る。壁の立ち上がりは、平均70°を示す。住居址内の覆土は、基本的に上層、下層に分層され、遺物の取り上げもその区分に従った。上層は、黒褐色土層で、覆土の主体をなす土層、軟質土である。下層は、黒褐色土層で、炭化物、ロームブロックを少量含む硬質土層。その他の土層は、A層は16号住居柱穴で黒褐色土、B層は16号住居柱穴で暗褐色土、C層は16号住居柱穴で暗褐色土、D層は16号住居柱穴で黄褐色ブロック土、E層は2号溝覆土で暗褐色土、F層は焼土ブロックである。住居址のピットの、深さは1が約29cm、2が約28cm、3が約29cm、4が約40cm、5が約39cm、6が約34cmである。出土遺物は、土師器の甕、鉢、埴などが検出された。



第75図 清水田遺跡 16号住居址実測図

第17号住居址

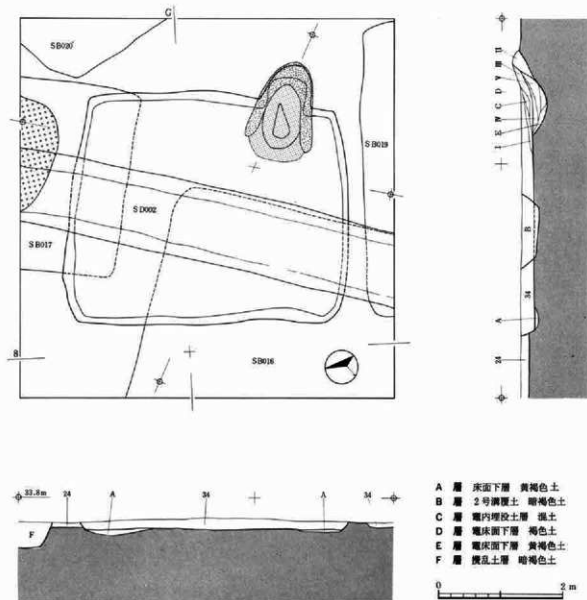
本遺跡の西側、F-08に位置する。本住居址はS B017→S B018の順に重複する。平面形は方形を呈し、規模は、長さ3.3m×3.1mを測り、床面積は約10㎡である。主軸は、N-15°-Eを示す。竈はない。壁高は、西壁で17cmを測る。壁の立ち上がりは、平均60°と、ゆるやかである。住居址内の覆土は、基本的に同一層として観察され、遺物の取り上げも一括処理した。黒褐色土層で、炭化物、ロームブロックを少量含む硬質土層。その他の土層として、24層は覆土で黒褐色土層、炭化物、ロームブロックを少量含む硬質土層。26層は覆土で暗褐色土層、住居址隣の壁前落土。34層は覆土で黒褐色土層、ロームブロックと焼土を少量含む、硬質である。住居内のピットはない。出土遺物は検出されない。本住居址の時期は、住居址の重複関係、覆土などから石田川期と考えられる。



第76図 清水田遺跡 17号住居址実測図

第18号住居址

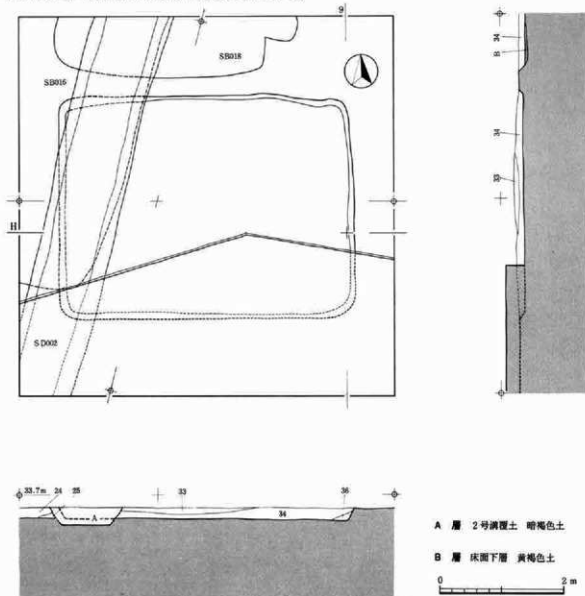
本遺跡の西側、F-08に位置する。本住居址はSB016→SB017→SB018の順に重複する。平面形は横長長方形を呈し、規模は、長さ4.5m×3.7mを測り、床面積は約16.5㎡である。主軸は、N-96°-Eを示す。竈は、住居の東辺、南寄りに付設されている。壁高は、西壁で26cmを測る。壁の立ち上がりは、平均65°とゆるやかである。住居址内の覆土は、基本的に同一層として観察され、遺物の取り上げも一括処理した。黒褐色土層で、ロームブロックと焼土を少量含み、硬質である。竈に関する土層は、竈被覆土が1層、竈内崩落土が2層、竈床面下層が4層に細別される。その他の土層として、24層は覆土で黒褐色土層、炭化物、ロームブロックを少量含む硬質土層。34層は覆土で黒褐色土層、ロームブロックと焼土を少量含み、硬質である。住居内のピットはない。出土遺物は検出されない。本住居址の時期は、住居址の重複関係、覆土、施設などから国分期と考えられる。



第77図 清水田遺跡 18号住居址実測図

第19号住居址

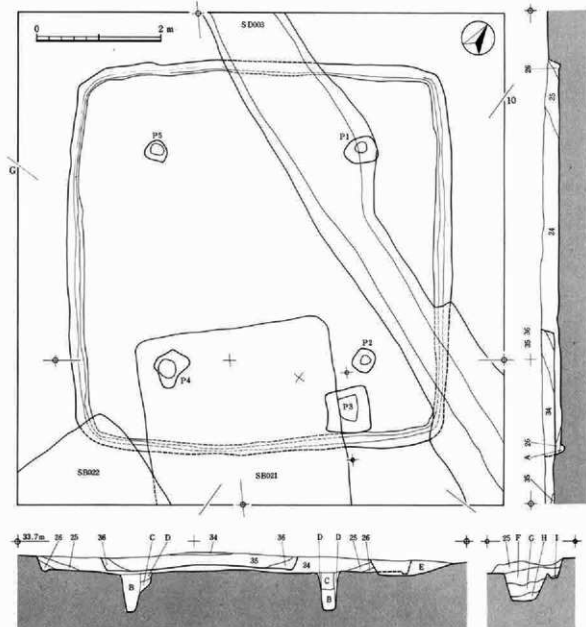
本遺跡の西側、H-09に位置する。本住居址はSB016-SB019の順に重複する。平面形は長方形を呈し、規模は、長さ4.7m×3.6mを測り、床面積は約17㎡である。主軸は、N-3'-Eを示す。竈の有無は、住居址切り合いのため、確認されていない。壁高は、東壁で19cmを測る。壁の立ち上がりは、平均70°を示す。住居址内の覆土は、基本的には上層、下層に分層され、遺物の取り上げもその区分に従った。上層は、黒褐色土層で、ロームブロックを少量含み、32層よりも硬質である。下層は、黒褐色土層で、ロームブロックと焼土を少量含み、硬質である。その他の土層として、24層は覆土で黒褐色土層、炭化物、ロームブロックを少量含む硬質土層。25層は覆土で黒褐色土層、焼土、炭化物を多量に含む粘質土層。33層は覆土で黒褐色土層、ロームブロックを少量含み、32層よりも硬質である。34層は覆土で黒褐色土層、ロームブロックと焼土を少量含み、硬質である。36層は覆土で褐色土層、住居址隅の壁崩落土。住居内のピットはない。出土遺物は検出されない。本住居址の時期は、国分期と考えられる。



第78図 清水田遺跡 19号住居址実測図

第20号住居址 (出土遺物 第167図)

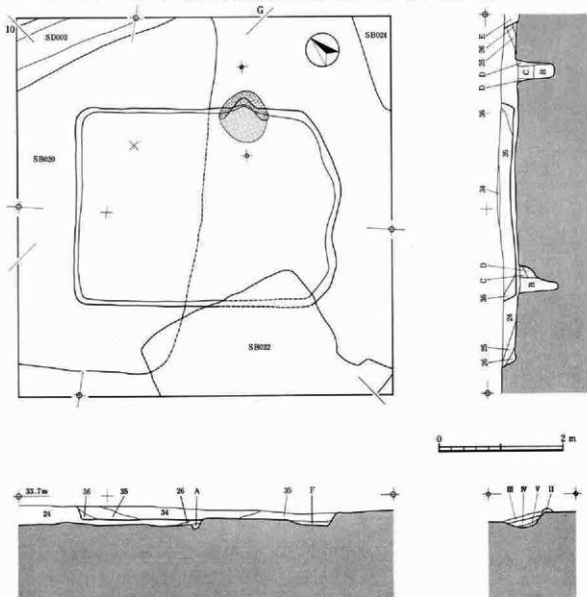
本遺跡の西側、G-10に位置する。本住居址はS B 020→S B 021→S B 022の順に重複する。平面形は方形を呈し、規模は、長さ6.4m×6.3mを測り、床面積は約40.5m²である。主軸は、N-34°-Wを示す。竈はない。壁高は、東壁で21cmを測る。壁の立ち上がりは、平均65°と、ゆるやかである。住居址内の覆土は、基本的に同一層として観察され、遺物の取り上げも一括処理した。黒褐色土層で、炭化物、ロームブロックを少量含む硬質土層。その他の土層として、A層は周溝覆土で黄褐色土。柱穴覆土は、B層は黒褐色土、C層、D層は黄褐色土、E層は3号溝覆土で暗褐色土。貯蔵穴覆土は、F層は暗褐色土、G層は暗褐色土、H層は黒褐色土、I層は黄褐色土である。住居内のピットの深さは、1が約58cm、2が約61cm、3が約28cm、4が約58cmである。出土遺物は、土師器の甕、高杯などが検出された。



第79図 清水田遺跡 20号住居址実測図

第21号住居址 (出土遺物 第167, 181図)

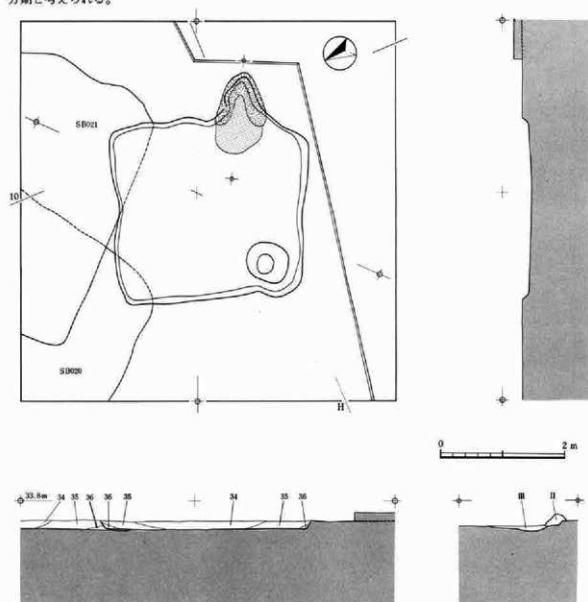
本遺跡の西側、G-10に位置する。本住居址はSB020→SB021→SB022の順に重複する。平面形は横長長方形を呈し、規模は、長さ4.3m×3.1mを測り、床面積は約13.5㎡である。主軸は、N-47°-Eを示す。竈は、住居の東辺、南寄りに付設されている。壁高は、東南壁で21cmを測る。壁の立ち上がりは、平均70°を示す。住居址内の覆土は、基本的に上層、下層に分層され、遺物の取り上げもその区分に従った。上層は、黒褐色土層で、ロームブロックと焼土を少量含み、硬質である。下層は、黒褐色土層で、粘質が強く焼土、炭化物、灰層が多量に含まれている。竈に関する土層は、竈被覆土は確認されず、竈内崩落土が1層、竈床面下層が2層に細別される。その他の土層として、A層は周溝覆土で黄褐色土。柱穴覆土は、B層黒褐色土、C層、D層は黄褐色土、E層は3号溝覆土で暗褐色土、F層は住居址床面下層で黄褐色ブロック土である。住居内のピットはない。出土遺物は、土師器の大甕、須恵器の杯、高台付椀。鉄滓、墨書土器などが検出された。本住居址の時期は、重複関係、覆土、施設、出土遺物から図分期と考えられる。



第80図 清水田遺跡 21号住居址実測図

第22号住居址

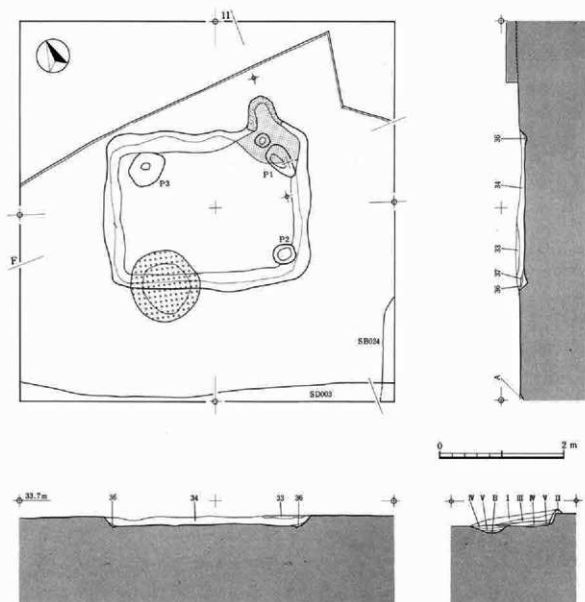
本遺跡の西側、H-10に位置する。本住居址はS B020→S B021→S B022の順に重複する。平面形は方形を呈し、規模は、長さ3.2m×3mを測り、床面積は約9.5㎡である。主軸は、N-116°-Eを示す。竈は、住居の東辺、南寄りに付設されている。壁高は、北東壁で12cmを測る。壁の立ち上がりは、平均60°と、ゆるやかである。住居址内の覆土は、基本的に同一層として観察され、遺物の取り上げも一括処理した。黒褐色土層で、ロームブロックと焼土を少量含み、硬質である。竈に関する土層は、竈被覆土層、竈床面下層は確認されず、竈内崩落土1層が残存している。その他の土層として、34層は覆土で黒褐色土層、ロームブロックと焼土を少量含み、硬質である。35層は覆土で黒褐色土層、粘質が強く焼土、炭化物、灰層が多量に含まれる。36層は覆土で褐色土層、住居址隅の壁崩落土。住居内のピットは、1箇所深さ約30cmである。出土遺物は、鉄製工具が検出された。本住居址の時期は、住居址の重複関係、覆土、施設、出土遺物などから国分期と考えられる。



第81図 清水田遺跡 22号住居址実測図

第23号住居址 (出土遺物 第168、186図、PL. 19)

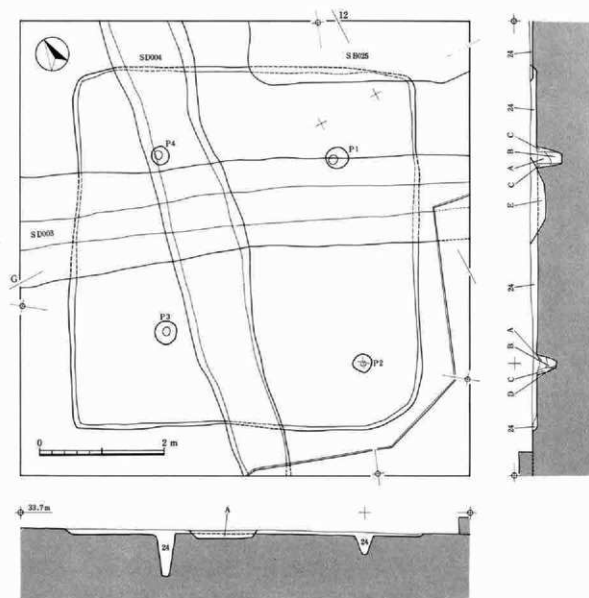
本遺跡の西側、E-11に位置する。住居址の重複はない。平面形は横長長方形を呈し、規模は、長さ3.3m×2.6mを測り、床面積は約8.5m²である。主軸は、N-24°-Eを示す。竈は、住居の東辺、南寄りに付設されている。壁高は、東壁で18cmを測る。壁の立ち上がりは、平均50°と、ゆるやかである。住居址内の覆土は、基本的には上層、下層に分層され、遺物の取り上げもその区分に従った。上層は、黒褐色土層で、ロームブロックを少量含み、32層よりも硬質である。下層は、黒褐色土層で、ロームブロックと焼土を少量含み、硬質である。竈に関する土層は、竈被覆土が1層、竈内崩落土が1層、竈床面下層が5層に細別される。その他の土層として、A層は3号溝で暗褐色軟質土、B層は竈床面下層で炭化物を含む黄褐色土である。住居内のピットの深さは、1が約10cm、2が約13cm、3が約10cmである。出土遺物は、須恵器の杯、高台付椀、紡錘車などが検出された。本住居址の時期は、覆土、施設、出土遺物などから国分期と考えられる。



第82図 清水田遺跡 23号住居址実測図

第24号住居址 (出土遺物 第168図)

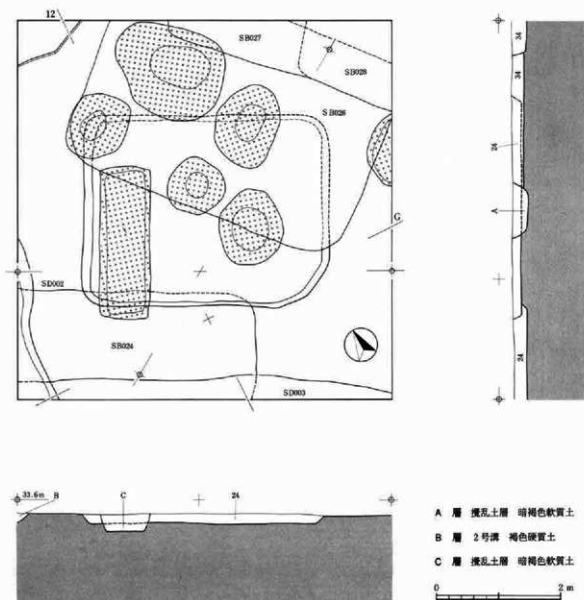
本遺跡の西側、G-11に位置する。本住居址はS B024→S B025の順に重複する。平面形は方形を呈し、規模は、長さ5.8m×5.6mを測り、床面積は約32m²である。主軸は、N-31°-Eを示す。竈はない。住居址内の覆土は、基本的に同一層として観察され、遺物の取り上げも一括処理した。黒褐色土層で、炭化物、ロームブロックを少量含む硬質土層。その他の土層は、A層が24号住居柱穴で黒褐色土中に炭化物含む。B層は24号住居柱穴で黒褐色硬質土、C層は24号住居柱穴で暗褐色硬質土、D層は24号住居柱穴で黄褐色ブロック、E層は3号溝で暗褐色軟質土である。24層は覆土で黒褐色土層、炭化物、ロームブロックを少量含む硬質土層。26層は覆土で暗褐色土層、住居址隣の壁崩落土。住居内のピットの深さは、1が約40cm、2が約31cm、3が約62cm、4の深さ50cmである。出土遺物は、土師器の甕、小甕、甕、高杯などが検出された。本住居址の時期は、住居址の重複関係、覆土、出土遺物などから石田川期と考えられる。



第83図 清水田遺跡 24号住居址実測図

第25号住居址 (出土遺物 第168図、PL.15)

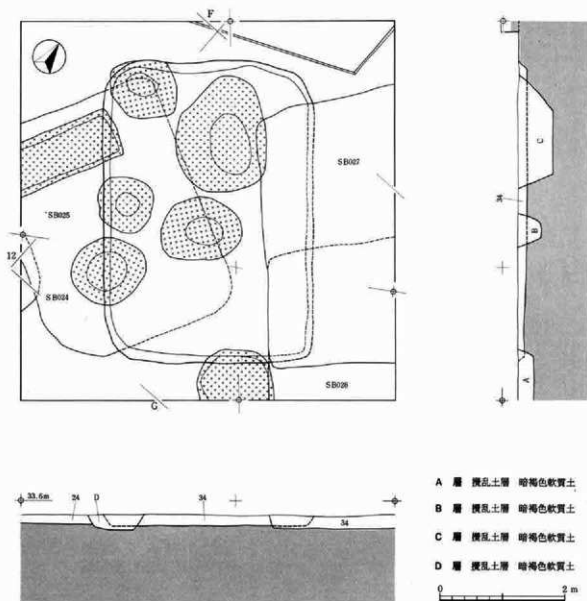
本遺跡の西側、G-12に位置する。本住居址はSB024→SB025→SB026の順に重複する。平面形は長方形を呈し、規模は、長さ4m×3mを測り、床面積は約12m²である。主軸は、N-29°-Eを示す。竈の有無は、住居址切り合いのため、確認されていない。壁高は、北東壁で18cmを測る。壁の立ち上がりは、平均60°と、ゆるやかである。住居址内の覆土は、基本的に同一層として観察され、遺物の取り上げも一括処理した。黒褐色土層で、炭化物、ロームブロックを少量含む硬質土層。その他の土層として、24層は覆土で黒褐色土層、炭化物、ロームブロックを少量含む硬質土層。34層は覆土で黒褐色土層、ロームブロックと焼土を少量含む、硬質である。住居内のピットはない。出土遺物は、土師器の杯、高杯などが検出された。本住居址の時期は、住居址の重複関係、覆土、出土遺物などから鬼高期と考えられる。



第84図 清水田遺跡 25号住居址実測図

第26号住居址 (出土遺物 第168、183図、PL.17)

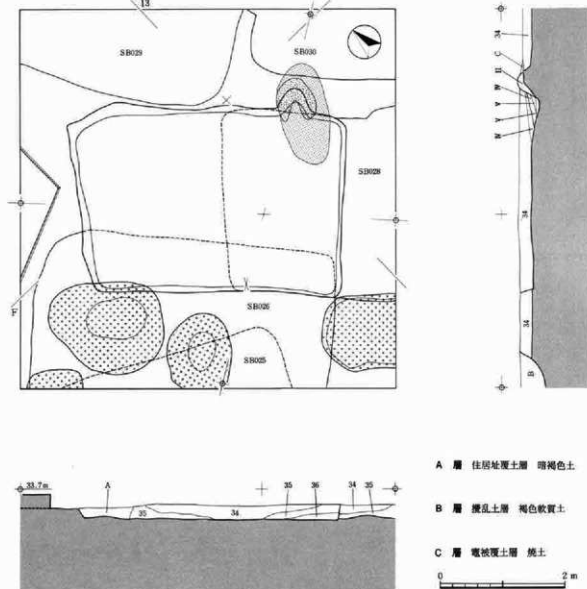
本遺跡の西側、F-12に位置する。本住居址はSB025→SB026→SB028→SB027の順に重複する。平面形は長方形を呈し、規模は、長さ4.8m×3.4mを測り、床面積は約16m²である。主軸は、N-38°-Wを示す。電の有無は、住居址切り合いのため、確認されていない。壁高は、南西壁で18cmを測る。壁の立ち上がりは、平均55°と、ゆるやかである。住居址内の覆土は、基本的に同一層として観察され、遺物の取り上げも一括処理した。黒褐色土層で、ロームブロックと焼土を少量含み、硬質である。その他の土層として、24層は覆土で黒褐色土層、炭化物、ロームブロックを少量含む硬質土層。34層は覆土で黒褐色土層、ロームブロックと焼土を少量含み、硬質である。住居内のピットはない。出土遺物は、土師器の杯、大甕、高台付碗。須恵器の杯、大甕。墨書土器、内黒などが検出された。本住居址の時期は、住居址の重複関係、覆土、出土遺物などから固分期と考えられる。



第85図 清水田遺跡 26号住居址実測図

第27号住居址

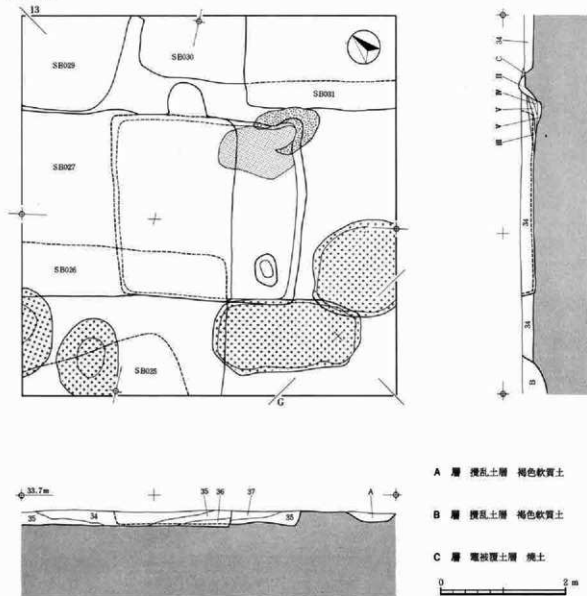
本遺跡の西側、F-13に位置する。本住居址はSB026→SB028→SB027、SB030→SB027の順に重複する。平面形は横長長方形を呈し、規模は、長さ4.4m×3mを測り、床面積は約13m²である。主軸は、N-47-Eを示す。竈は、住居の東辺、南寄りに付設されている。壁高は南壁で25cmを測る。壁の立ち上がりは、平均75°を示す。住居址内の覆土は、基本的に上層、下層に分層され、遺物の取り上げもその区分に従った。上層は、黒褐色土層で、ロームブロックと焼土を少量含み、硬質である。下層は、黒褐色土層で、粘質が強く焼土、炭化物、灰層が多量に含まれている。竈に関係する土層は、竈被覆土層は確認されず、竈内崩落土が1層、竈床面下層が3層に細別される。その他の土層として、34層は覆土で黒褐色土層、ロームブロックと焼土を少量含み、硬質である。35層は覆土で黒褐色土層、粘質が強く焼土、炭化物、灰層が多量に含まれる。36層は覆土で褐色土層、住居址隣の壁崩落土である。住居内のピットはない。出土遺物は、鉄製工具、墨書土器などが検出された。本住居址の時期は国分期と考えられる。



第86図 清水田遺跡 27号住居址実測図

第28号住居址

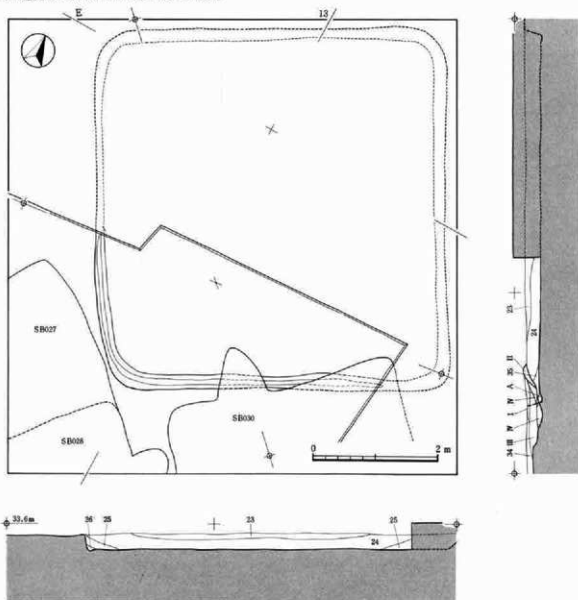
本遺跡の西側、F-13に位置する。本住居址はSB026→SB028→SB027の順に重複する。平面形は方形を呈し、規模は、長さ3m×3mを測り、床面積は約9㎡である。主軸は、N-47°-Eを示す。竈は、住居の東南隅に付設されている。壁高は、東南壁で23cmを測る。壁の立ち上がりは、平均80°を示す。住居址内の覆土は、基本的に同一層として観察され、遺物の取り上げも一括処理した。黒褐色土層で、ロームブロックと焼土を少量含み、硬質である。竈に関する土層は、竈被覆土層は確認されず、竈内崩落土が1層、竈床面下層が3層に細別される。その他の土層として、34層は覆土で黒褐色土層、ロームブロックと焼土を少量含み、硬質である。35層は覆土で黒褐色土層、粘質が強く焼土、炭化物、灰層が多量に含まれる。36層は覆土で褐色土層、住居址隅の壁崩落土である。住居内のピットは、1箇所所で深さ約24cmである。出土遺物は、鉄製刀子が検出された。本住居址の時期は、住居址の重複関係、覆土、施設、出土遺物などから国分期と考えられる。



第47図 清水田遺跡 28号住居址実測図

第29号住居址 (出土遺物 第169図、PL.15)

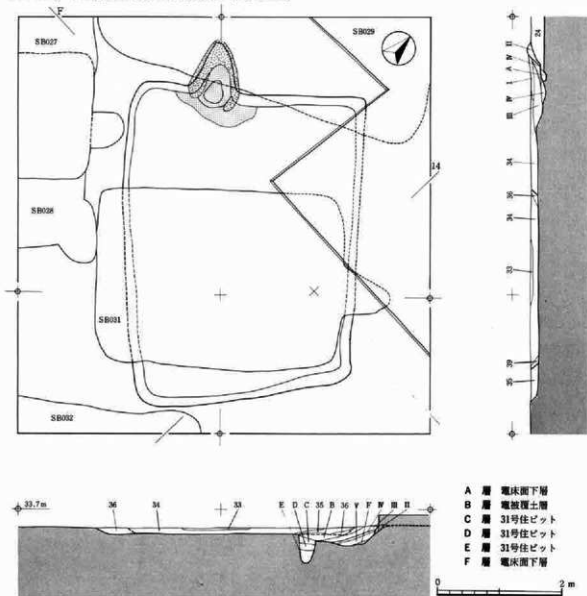
本遺跡の西側、E-12に位置する。本住居址はS B029→S B030の順に重複する。平面形は方形を呈し、規模は、長さ5.7m×5.6mを測り、床面積は約32m²である。主軸は、N-25°-Wを示す。竈はない。壁高は、南壁で20cmを測る。壁の立ち上がりは、平均75°を示す。住居址内の覆土は、基本的に上層、下層に分層され、遺物の取り上げもその区分に従った。上層は、黒褐色土層で、覆土の主体をなす土層、軟質土である。下層は、黒褐色土層で、炭化物、ロームブロックを少量含む硬質土層。その他の土層は、A層は竈床面下層で炭化物と焼土の混土層である。23層は覆土で黒褐色土層、覆土の主体をなす土層、軟質土である。24層は覆土で黒褐色土層、炭化物、ロームブロックを少量含む硬質土層。25層は覆土で黒褐色土層、焼土、炭化物を多量に含む粘質土層。26層は覆土で暗褐色土層、住居址側の壁崩落土である。住居内のピットはない。出土遺物は、土師器の甕、小甕、甌、埴、高杯などが検出された。本住居址の時期は、住居址の重複関係、覆土、出土遺物などから石田川期と考えられる。



第88図 清水田遺跡 29号住居址実測図

第30号住居址

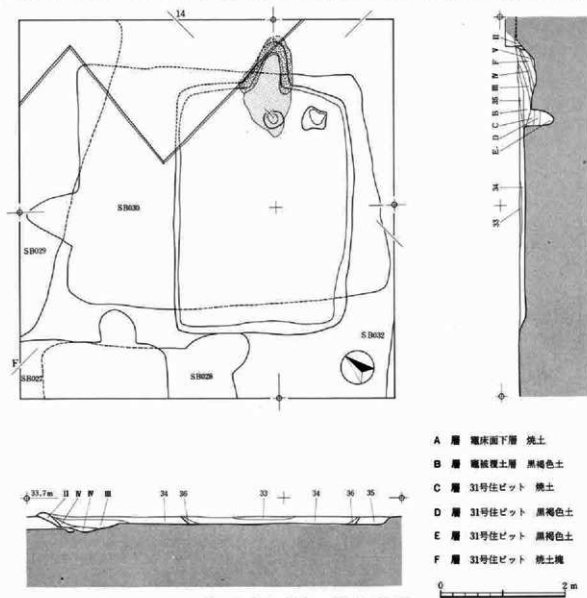
本遺跡の西側、F-14に位置する。SB029→SB030→SB031の順に重複する。平面形は縦長方形を呈し、規模は、長さ6.9m×5mを測り、床面積は約34.5㎡である。主軸は、N-41°-Wを示す。竈は、住居の北辺、西寄りに付設されている。壁高は、東南壁で10cmを測る。壁の深さが浅く、立ち上がり角度は計測されていない。住居址内の覆土は、基本的に上層、下層に分層され、遺物の取り上げもその区分に従った。上層は、黒褐色土層で、ロームブロックを少量含み、32層よりも硬質である。下層は、黒褐色土層で、ロームブロックと焼土を少量含み、硬質である。竈に関する土層は、竈被覆土が1層、竈内崩落土が1層、竈床面下層が1層に細別される。その他の土層として、A層は竈床面下層で炭化物和焼土の混土層、B層は竈床面下層で黒褐色炭化物層。31号ピットは、C層黒褐色硬質土中に焼土を含み、D層は黒褐色土、E層は黒褐色土と黄褐色土の混土、F層は竈床面下層で焼土ブロックである。住居内のピットはない。出土遺物は検出されない。本住居址の時期は、国分期と考えられる。



第89図 清水田遺跡 30号住居址実測図

第31号住居址 (出土遺物 第169、181、186図)

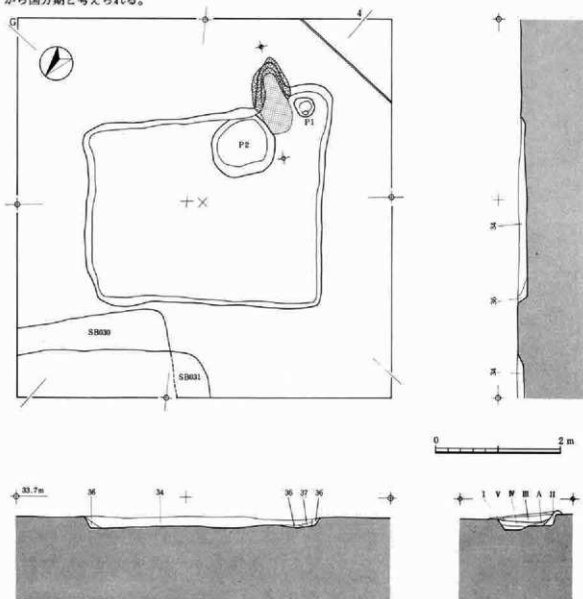
本遺跡の西側、F-14に位置する。本住居址はS B 030→S B 031の順に重複する。平面形は縦長長方形を呈し、規模は、長さ4m×2.9mを測り、床面積は約11.5㎡である。主軸は、N-49°-Eを示す。竈は、住居の東辺、中央寄りに付設されている。壁高は、東南壁で12cmを測る。壁の立ち上がりは、平均50°と、ゆるやかである。住居址内の覆土は、基本上層、下層に分層され、遺物の取り上げもその区分に従った。上層は黒褐色土層で、ロームブロックを少量含み、32層よりも硬質である。下層は、黒褐色土層で、ロームブロックと焼土を少量含み、硬質である。竈に関する土層は、竈被覆土が1層、竈内崩落土が1層、竈床面下層が3層に細別される。その他の土層として、33層は覆土で黒褐色土層、ロームブロックを少量含み、32層よりも硬質である。34層は覆土で黒褐色土層、ロームブロックと焼土を少量含み、硬質である。35層は覆土で黒褐色土層、粘質が強く焼土、炭化物、灰層が多量に含まれる。36層は覆土で褐色土層、住居址隅の壁崩落土である。住居内のピットは、1箇所深さ約27cmである。遺物は土師器、須恵器、墨書土器、磁石など。



第90図 清水田遺跡 31号住居址実測図

第32号住居址 (出土遺物 第169図)

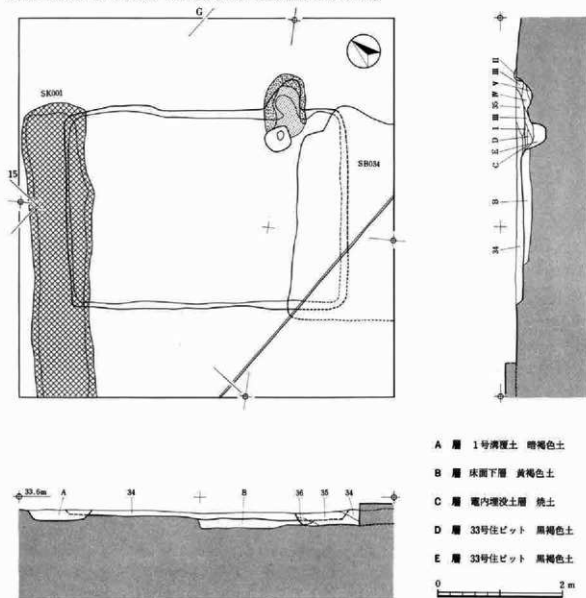
本遺跡の西側、G-14に位置する。住居址の重複はない。平面形は横長長方形を呈し、規模は、長さ3.8m×3.2mを測り、床面積は約12㎡である。主軸は、N-141°-Eを示す。竈は、住居の東辺、南寄りに付設されている。壁高は、北東壁で18cmを測る。壁の立ち上がりは、平均65°とゆるやかである。住居址内の覆土は、基本的に同一層として観察され、遺物の取り上げも一括処理した。黒褐色土層で、ロームブロックと焼土を少量含み、硬質である。竈に關係する土層は、竈被覆土が1層、竈内崩落が1層、竈床面下層が3層に細別される。その他の土層は、A層は竈床面下層で赤褐色土である。34層は覆土で黒褐色土層、ロームブロックと焼土を少量含み、硬質である。36層は覆土で褐色土層、住居址隅の壁崩落土。37層は覆土で黄褐色土層、ロームブロックである。住居内のピットは、1の深さ約19cm、2の深さは約20cmである。出土遺物は、土師器の長頸壺、杯、須恵器の高台付碗などが検出された。本住居址の時期は、覆土、施設、出土遺物などから国分期と考えられる。



第91図 清水田遺跡 32号住居址実測図

第33号住居址 (出土遺物 第170、183図)

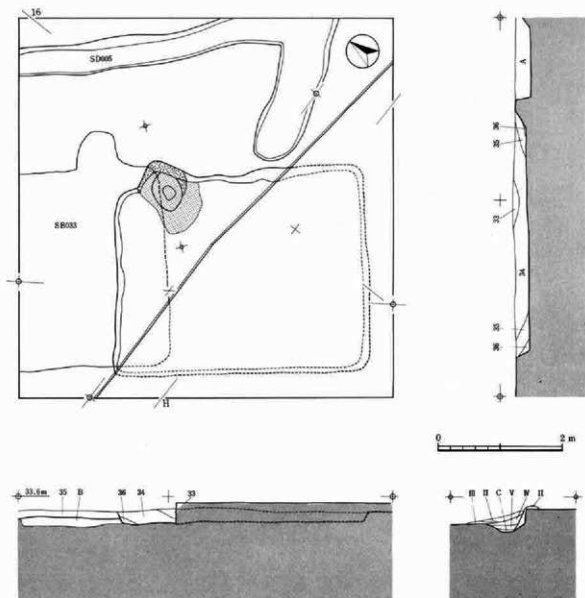
本遺跡の西側、G-15に位置する。本住居址はSB033→SB034の順に重複する。平面形は横長長方形を呈し、規模は、長さ4.5m×3.2mを測り、床面積は約14m²である。主軸は、N-51°-Eを示す。竈は、住居の東辺、南寄り付設されている。壁高は、東南壁で13cmを測る。壁の立ち上がりは、平均60°と、ゆるやかである。住居址内の覆土は、基本的に同一層として観察され、遺物の取り上げも一括処理した。黒褐色土層で、ロームブロックと焼土を少量含み、硬質である。竈に関する土層は、竈被覆土が1層、竈内崩落土が3層、竈床面下層が2層に細別される。その他の土層として、34層は覆土で黒褐色土層、ロームブロックと焼土を少量含み、硬質である。35層は覆土で黒褐色土層、粘質が強く焼土、炭化物、灰層が多量に含まれる。36層は覆土で褐色土層、住居址隅の壁崩落土である。住居内のピットは、1箇所で深さ約36cmである。出土遺物は、土師器の甔。須恵器の杯、高台付碗。内黒、墨書土器などが検出された。本住居址の時期は、住居址の重複関係、覆土、施設、出土遺物などから国分期と考えられる。



第92図 清水田遺跡 33号住居址実測図

第34号住居址

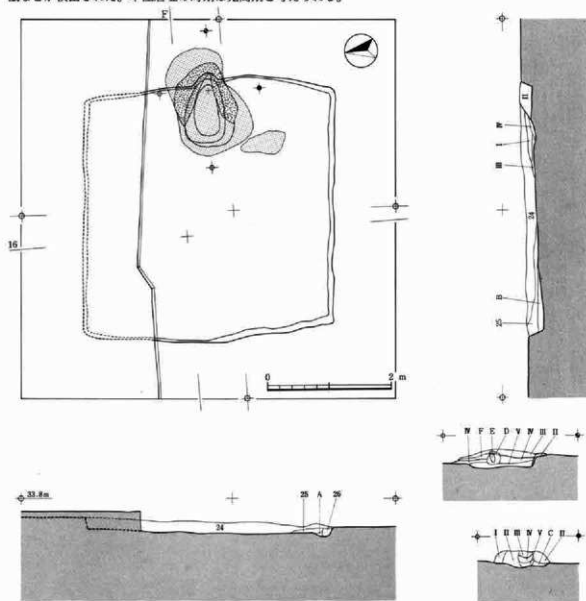
本遺跡の西側、G-15に位置する。本住居址はSB033→SB034の順に重複する。平面形は横長長方形を呈し、規模は、長さ4.1m×3.4mを測り、床面積は約13.5m²である。主軸は、N-54°-Eを示す。竈は、住居の東辺、北寄りに付設されている。壁高は、西壁で22cmを測る。壁の高ちがりは平均60°と、ゆるやかである。住居址内の覆土は、基本的に上層、下層に分層され、遺物の取り上げもその区分に従った。上層は、黒褐色土層で、ロームブロックを少量含み、32層よりも硬質である。下層は、黒褐色土層で、ロームブロックと焼土を少量含み、硬質である。竈に関係する土層は、竈被覆土層は、確認されず、竈内崩落土が1層、竈床面下層が3層に細別される。その他の土層は、A層は5号溝覆土で暗褐色軟質土。B層は33号住居貼床で黄褐色ロームブロック。C層は竈床面下層で黄褐色ブロックである。住居内のピットはない。出土遺物は検出されない。本住居址の時期は、住居址の重複関係、覆土、施設などから国分期と考えられる。



第93図 清水田遺跡 34号住居址実測図

第35号住居址 (出土遺物 第170図、PL.15)

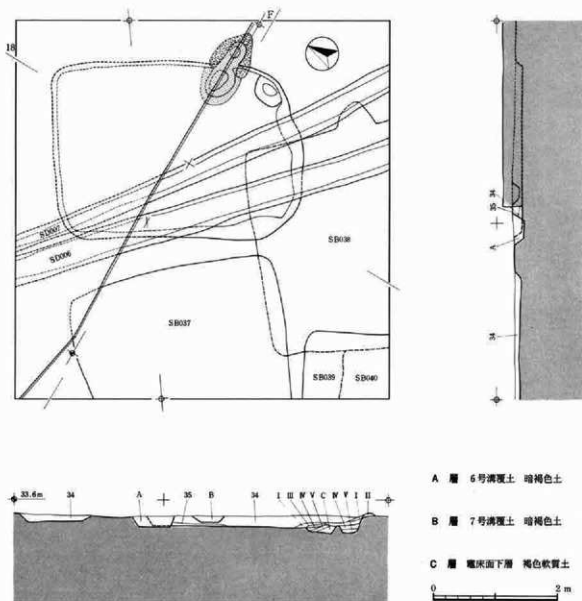
本遺跡の西側、F-14に位置する。住居址の重複はない。平面形は方形を呈し、規模は、長さ4.2m×4mを測り、床面積は約16.5m²である。主軸は、N-97-Eを示す。竈は、住居の東辺、中央寄りに付設されている。壁高は、西壁で25cmを測る。壁の立ち上がりは、平均70°を示す。住居址内の覆土は、基本的に同一層として観察され、遺物の取り上げも一括処理した。黒褐色土層で、炭化物、ロームブロックを少量含む。硬質土層。竈に関係する土層は、竈被覆土が1層、竈内崩落土が1層、竈床面下層が2層に細別される。その他の土層は、A層は周溝覆土で黒褐色硬質土、B層は35号住居床で黄褐色ブロック、C層は竈支脚で土師器、D層は竈支脚で河原石、F層は竈内埋没土層で赤褐色土である。24層は覆土で黒褐色土層、炭化物、ロームブロックを少量含む硬質土層。25層は覆土で黒褐色土層、焼土、炭化物を多量に含む、粘質土。26層は覆土で暗褐色土層、住居址隅の壁崩落土である。住居内のピットはない。出土遺物は、土師器の杯、甕、台付甕、甔などが検出された。本住居址の時期は鬼高期と考えられる。



第94図 清水田遺跡 35号住居址実測図

第36号住居址

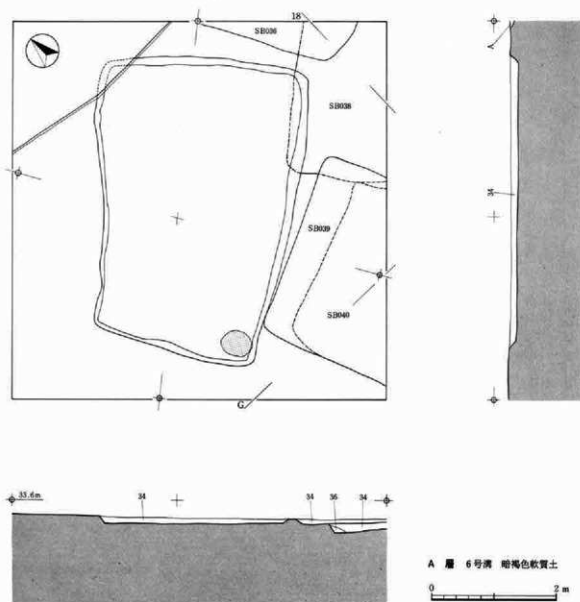
本遺跡の西側、F-18に位置する。本住居址はS B038→S B036の順に重複する。平面形は横長長方形を呈し、規模は、長さ4m×2.8mを測り、床面積は約11m²である。主軸は、N-63°-Eを示す。竈は、住居の東辺、南寄りに付設されている。壁高は、南西壁で15cmを測る。壁の立ち上がりは、平均60°と、ゆるやかである。住居址内の覆土は、基本的に同一層として観察され、遺物の取り上げも一括処理した。黒褐色土層で、ロームブロックと焼土を少量含み、硬質である。竈に関する土層は、竈被覆土が1層、竈内崩落土が1層、竈床面下層が5層に細別される。その他の土層として、34層は覆土で黒褐色土層、ロームブロックと焼土を少量含み、硬質である。35層は覆土で黒褐色土層、粘質が強く焼土、炭化物、灰層が多量に含まれる。住居内のピットは、1箇所で深さ約14cmである。出土遺物は検出されない。本住居址の時期は、住居址の重複関係、覆土、施設などから国分期と考えられる。



第95図 清水田遺跡 36号住居址実測図

第37号住居址 (出土遺物 第171図)

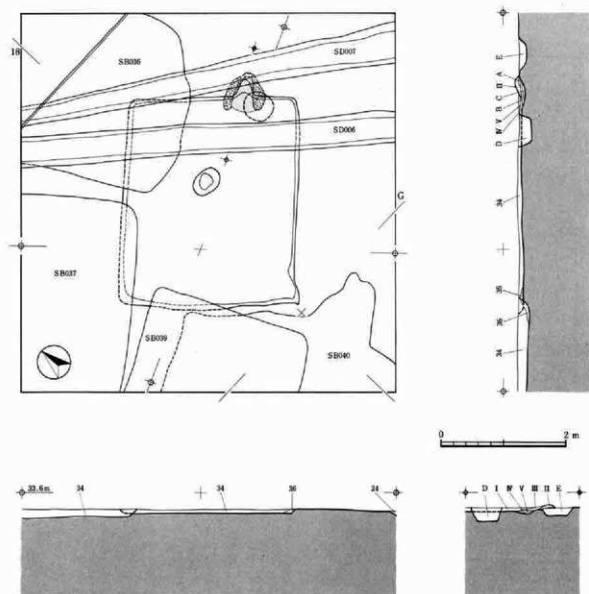
本遺跡の西側、F-17に位置する。本住居址はSB038→SB037の順に重複する。平面形は長方形を呈し、規模は、長さ4.9m×3.4mを測り、床面積は約16.5m²である。主軸は、N-43°-Wを示す。竈の有無は、住居址切り合いのため、確認されていない。壁高は、北東壁で13cmを測る。壁の立ち上がりは平均50°と、ゆるやかである。住居址内の覆土は、基本的に同一層として観察され、遺物の取り上げも一括処理した。黒褐色土層で、ロームブロックと焼土を少量含み、硬質である。その他の土層として、34層は覆土で黒褐色土層、ロームブロックと焼土を少量含み、硬質である。36層は覆土で褐色土層、住居址隅の壁落土である。住居内のピットはない。出土遺物は、土師器の杯、大甕、羽釜、須恵器の高台付椀、縁軸などが検出された。本住居址の時期は、住居址の重複関係、覆土、出土遺物などから国分期と考えられる。



第96図 清水田遺跡 37号住居址実測図

第38号住居址

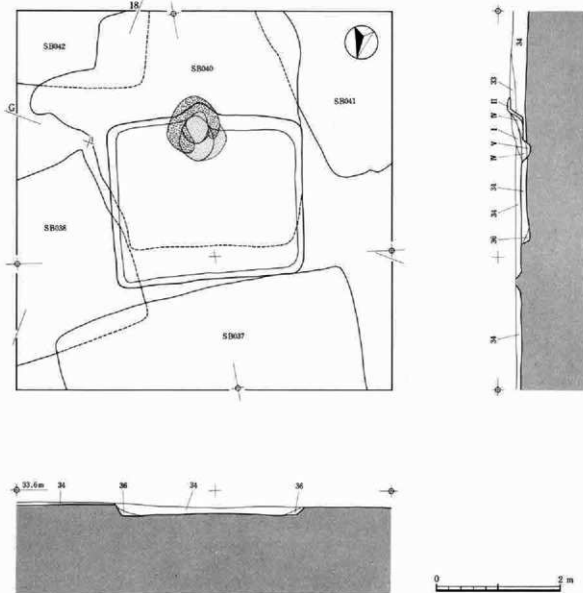
本遺跡の西側、F-18に位置する。本住居址はSB038→SB037→SB039の順に重複する。平面形は縦長長方形を呈し、規模は、長さ3.4m×2.9mを測り、床面積は約10㎡である。主軸は、N-50°-Eを示す。竈は、住居の東辺、南寄りに付設されている。壁高は、南西壁で8cmを測る。壁の深さが浅く、立ち上がり角度は計測していない。住居址内の覆土は、基本的に同一層として観察され、遺物の取り上げも一括処理した。黒褐色土層で、ロームブロックと焼土を少量含み、硬質である。竈に関する土層は、竈被覆土が1層、竈内崩落土が1層、竈床面下層が2層に細別される。その他の土層は、A層は竈芯で白色粘土に炭化物を含む。B層は竈床面下層で黒褐色土中に焼土、炭化物を含む。C層は竈床面下層で褐色硬質土、D層は6号溝覆土で暗褐色軟質土。E層は7号溝覆土で暗褐色軟質土である。住居内のピットは、1箇所深さ約25cmである。出土遺物は検出されない。本住居址の時期は、住居址の重複関係、覆土、施設などから国分期と考えられる。



第97図 清水田遺跡 38号住居址実測図

第39号住居址 (出土遺物 第172図)

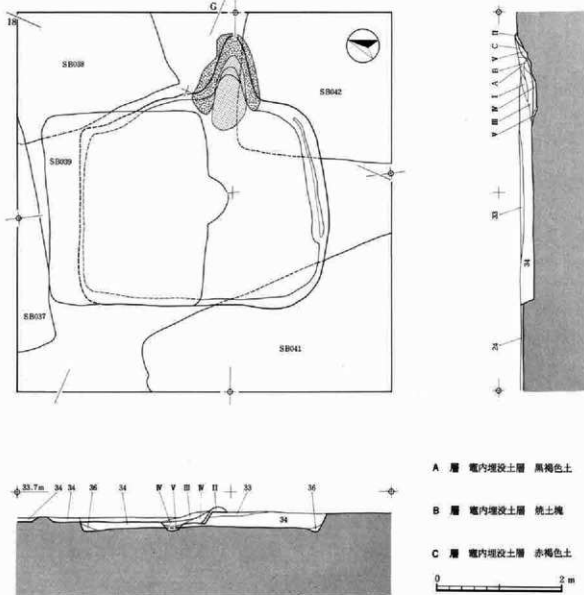
本遺跡の西側、G-18に位置する。本住居址はSB038→SB040→SB039の順に重複する。平面形は横長長方形を呈し、規模は、長さ3.1m×2.7mを測り、床面積は約8㎡である。主軸は、N-162°-Eを示す。竈は、住居の南辺、中央寄りに付設されている。壁高は、東壁で19cmを測る。壁の立ち上がりは、平均60°と、ゆるやかである。住居址内の覆土は、基本的に同一層として観察され、遺物の取り上げも一括処理した。黒褐色土層で、ロームブロックと焼土を少量含み、硬質である。竈に関する土層は、竈被覆土が1層、竈内崩落土層は、確認されず、竈床面下層が3層に細別される。33層は覆土で黒褐色土層、ロームブロックを少量含み32層よりも硬質である。34層は覆土で黒褐色土層、ロームブロックと焼土を少量含み、硬質である。36層は覆土で褐色土層、住居址隣の壁崩落土である。住居内のピットはない。出土遺物は、土師器の小甕、須恵器の杯、高台付椀などが検出された。本住居址の時期は、住居址の重複関係、覆土、施設、出土遺物などから区分期と考えられる。



第98図 清水田遺跡 39号住居址実測図

第40号住居址 (出土遺物 第172、182、189図、PL.16、19)

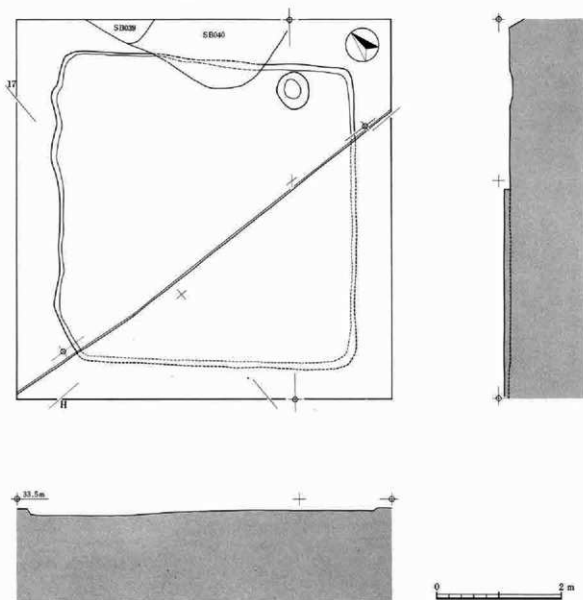
本遺跡の西側、G-18に位置する。本住居址はSB041→SB040→SB039の順に重複する。平面形は横長長方形を呈し、規模は、長さ4m×3.4mを測り、床面積は約13.5㎡である。主軸は、N-70°-Eを示す。竈は、住居の東辺、中央寄りに付設されている。壁高は、南壁で28cmを測る。壁の立ち上がりは、平均70°を示す。住居址内の覆土は、基本的に上層、下層に分層され、遺物の取り上げもその区分に従った。上層は、黒褐色土層で、ロームブロックを少量含み、32層よりも硬質である。下層は、黒褐色土層で、ロームブロックと焼土を少量含み、硬質である。竈に関係する土層は、竈被覆土が1層、竈内崩落土が4層、竈床面下層が3層に細別される。その他の土層として、24層は覆土で黒褐色土層、炭化物、ロームブロックを少量含む硬質土層。33層は覆土で黒褐色土層、ロームブロックを少量含み、32層よりも硬質である。34層は覆土で黒褐色土層、ロームブロックと焼土を少量含み、硬質である。36層は覆土で褐色土層、住居址隅の壁崩落土である。住居内のピットはない。本住居址の時期は、国分期と考えられる。



第99図 清水田遺跡 40号住居址実測図

第41号住居址 (出土遺物 第171図、PL 15)

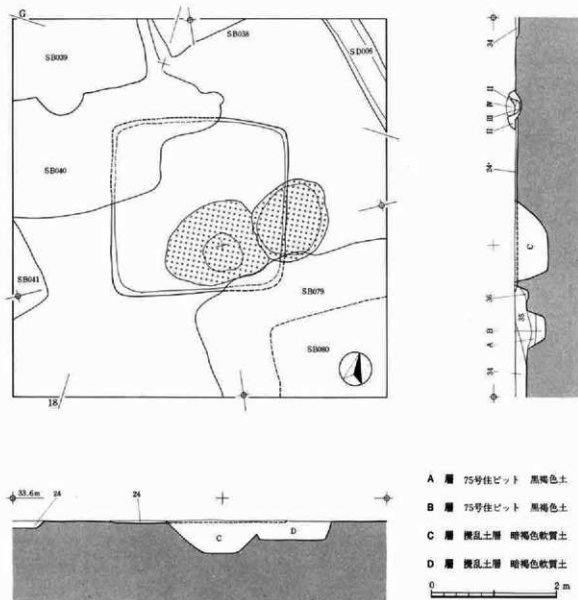
本遺跡の西側、H-17に位置する。本住居址はS B041-S B040の順に重複する。平面形は方形を呈し、規模は、長さ5m×4.9mを測り、床面積は約24.5㎡である。主軸は、N-43°-Eを示す。竈の有無は、住居址切り合いのため、確認されていない。壁高は、東壁で8cmを測る。壁の深さが浅く、立ち上がり角度は計測していない。住居址内の覆土は、基本的に同一層として観察され、遺物の取り上げも一括処理した。黒褐色土層で、ロームブロックと焼土を少量含み、硬質である。24層は覆土で黒褐色土層、炭化物、ロームブロックを少量含む硬質土層である。住居内のピットは、1箇所深さ約48cmである。出土遺物は、土師器の杯、大甕、小甕、甔、鉢などが検出された。本住居址の時期は、住居址の重複関係、覆土、出土遺物などから鬼高期と考えられる。



第100図 清水田遺跡 41号住居址実測図

第42号住居址

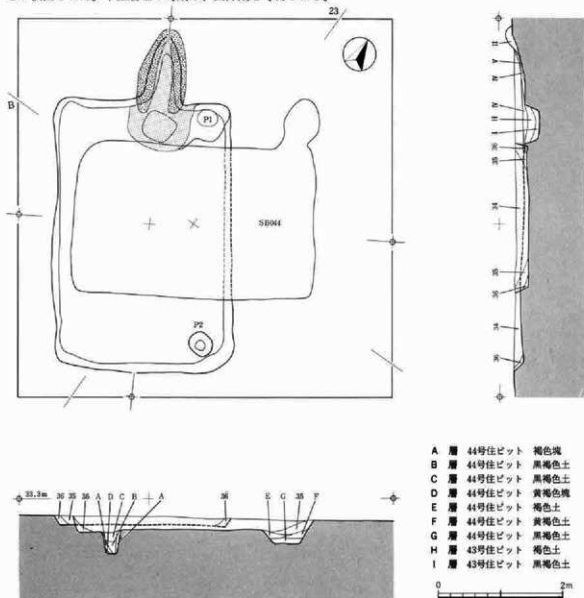
本遺跡の西側、G-18に位置する。本住居址はSB042→SB040→SB079の順に重複する。平面形は方形を呈し、規模は、長さ2.9m×2.8mを測り、床面積は約8㎡である。主軸は、N-15°-Wを示す。竈はない。壁高は、東壁で3cmを測る。壁の深さが浅く、立ち上がり角度は計測していない。住居址内の覆土は、基本的に同一層として観察され、遺物の取り上げも一括処理した。黒褐色土層で、炭化物、ロームブロックを少量含む硬質土層。その他の土層として、24層は覆土で黒褐色土層、炭化物、ロームブロックを少量含む硬質土層。34層は覆土で黒褐色土層、ロームブロックと焼土を少量含み、硬質である。36層は覆土で褐色土層、住居址隅の壁前落土である。住居内のピットはない。出土遺物は検出されない。本住居址の時期は、住居址の重複関係、覆土などから石田川期と考えられる。



第101図 清水田遺跡 42号住居址実測図

第43号住居址 (出土遺物 第172、184図)

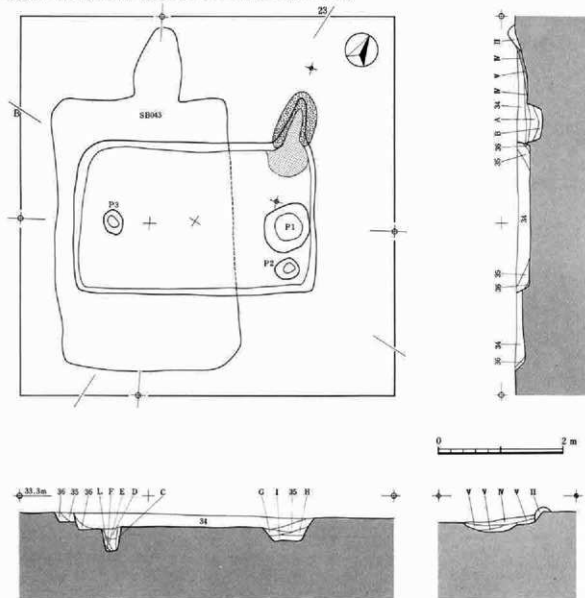
本遺跡の東北側、B-23に位置する。本住居址はS B043→S B044の順に重複する。平面形は縦長長方形を呈し、規模は、長さ4.4m×2.9mを測り、床面積は約12.5㎡である。主軸は、N-32°-Eを示す。竈は、住居の北辺、中央寄りに付設されている。壁高は、東壁で16cmを測る。壁の立ち上がりは、平均55°と、ゆるやかである。住居址内の覆土は、基本的に同一層として観察され、遺物の取り上げも一括処理した。黒褐色土層で、ロームブロックと焼土を少量含み、硬質である。竈に関する土層は、竈被覆土層、竈内崩落土層は、確認されず、竈床面下層が2層に残存している。その他の土層として、34層は覆土でロームブロックと焼土を少量含み、硬質である。35層は覆土で黒褐色土層、粘質が強く焼土、炭化物、灰層が多量に含まれる。36層は覆土で褐色土層、住居址隅の壁崩落土である。住居内のピットは、1の深さ約22cm、2の深さ約11cmである。出土遺物は、土師器の杯、大甕、小甕、須恵器の杯、高台付碗、鉄製刀子、鉄製工具、墨書土器などが検出された。本住居址の時期は、国分期と考えられる。



第102図 清水田遺跡 43号住居址実測図

第44号住居址 (出土遺物 第173、185図、PL.16)

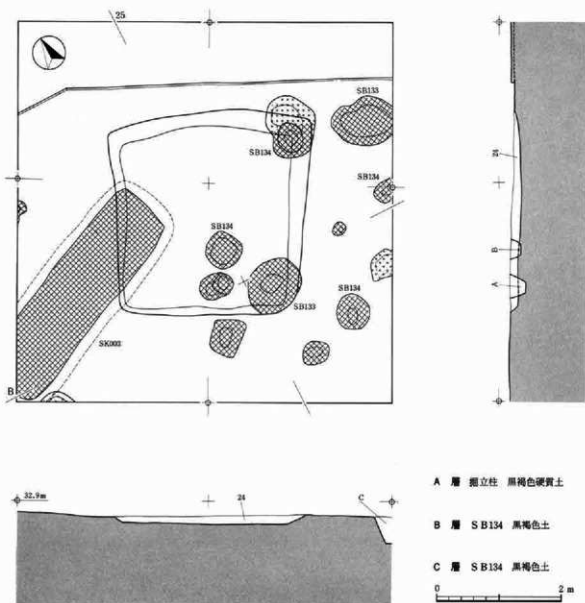
本遺跡の東北側、B-23に位置する。本住居址はSB043→SB044の順に重複する。平面形は横長長方形を呈し、規模は、長さ3.9m×2.4mを測り、床面積は約9㎡である。主軸は、N-30°-Wを示す。竈は、住居の北辺、東隅に付設されている。壁高は、西壁で26cmを測る。壁の立ち上がりは、平均75°を示す。住居址内の置土は、基本的に同一層として観察され、遺物の取り上げも一括処理した。黒褐色土層で、ロームブロックと焼土を少量含み、硬質である。竈に関する土層は、竈被覆土層、竈内崩落土層は、確認されず、竈床面下層が4層に残存している。その他の土層は、A層は43号住ビットで褐色土、B層は43号住ビットで黒褐色土、44号ビットは、C層は褐色ブロック、D層は黒褐色硬質土、E層は黒褐色硬質土にロームブロック混土、F層は黄褐色ブロック、G層は褐色軟質土、H層は黄褐色軟質土、I層は黒褐色土である。住居内のビットは、1の深さ約20cm、2の深さ約15cm、3の深さ約36cmである。出土遺物は、土師器の杯、甕、台付甕。須恵器の杯、高台付碗。鉄製刀子、墨書土器などが検出された。



第103図 清水田遺跡 44号住居址実測図

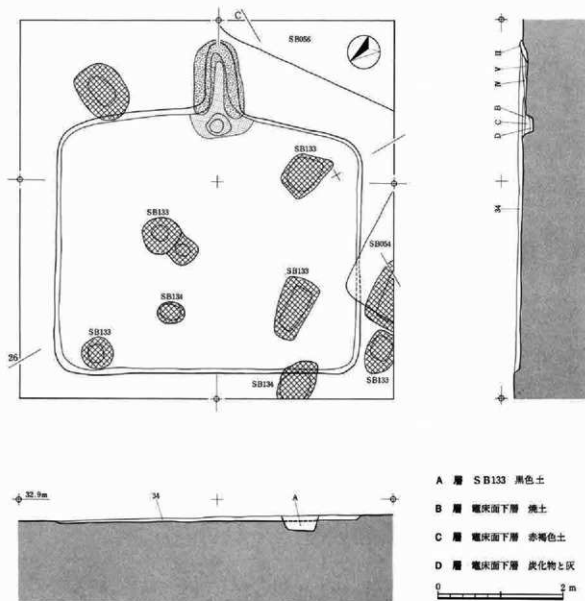
第45号住居址 (出土遺物 第173図)

本遺跡の東北側、A-25に位置する。住居址の重複はない。平面形は方形を呈し、規模は、長さ3.3m×3.3mを測り、床面積は約10.5㎡である。主軸は、N-30°-Eを示す。竈はない。壁高は東壁で13cmを測る。壁の立ち上がりは、平均50°と、ゆるやかである。住居址内の覆土は、基本的に同一層として観察され、遺物の取り上げも一括処理した。黒褐色土層で、炭化物、ロームブロックを少量含む硬質土層。その他の土層として、24層は覆土で黒褐色土層、炭化物、ロームブロックを少量含む硬質である。住居内のビットはない。出土遺物は、土師器の瑣などが検出された。本住居址の時期は、覆土、出土遺物などから石田川期と考えられる。



第46号住居址 (出土遺物 第173図)

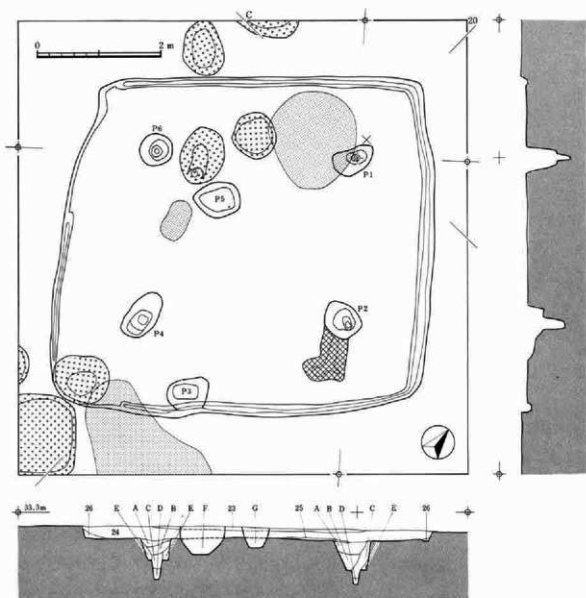
本遺跡の東北側、B-26に位置する。本住居址はSB046→SB054の順に重複する。平面形は横長長方形を呈し、規模は、長さ4.9m×4.2mを測る。床面積は約20.5m²である。主軸は、N-124°-Eを示す。竈は、住居の東辺、中央寄りに付設されている。壁高は、北西壁で7cmを測る。壁の深さが浅く、立ち上がり角度は計測していない。住居址内の覆土は、基本的に同一層として観察され、遺物の取り上げも一括処理した。黒褐色土層で、ロームブロックと焼土を少量含み、硬質である。竈に関係する土層は、竈被覆土層、竈内崩落土層は、確認されず、竈床面下層が2層に残存している。その他の土層として、34層は覆土で黒褐色土層、ロームブロックと焼土を少量含み、硬質である。住居内のピットはない。出土遺物は、土師器の大甕、羽釜などが検出された。本住居址の時期は、住居址の重複関係、覆土、施設、出土遺物などから国分期と考えられる。



第105図 清水田遺跡 46号住居址実測図

第47号住居址 (出土遺物 第173図)

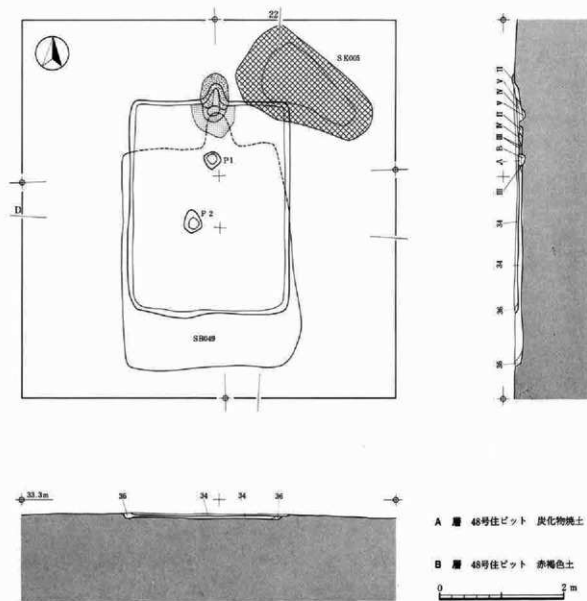
本遺跡の東北側、C-20に位置する。住居址の重複はない。平面形は方形を呈し、規模は、長さ6.1m×5mを測り、床面積は約30.5㎡である。主軸は、N-41°-Wを示す。竈はない。壁高は、南西壁で20cmを測る。壁の立ち上がりは、平均75°を示す。住居址内の覆土は、基本的に上層、下層に分層され、遺物の取り上げもその区分に従った。上層は、黒褐色土層で、覆土の主体をなす土層、軟質土である。下層は、黒褐色土層で、炭化物、ロームブロックを少量含む。硬質土層。その他の土層として、A層は柱穴で褐色土中に黒色ブロック混土、B層は柱穴で褐色硬質土、C層は柱穴で黒褐色土、D層は柱穴で黒褐色硬質土、E層は柱穴で黄褐色ブロック、F層は擾乱土層で暗褐色軟質土、G層は擾乱土層で暗褐色軟質土である。住居内のピットの深さは、1が約37cm、2が約59cm、3が約46cm、4が約53cm、5が約8cm、6が約65cmである。出土遺物は、土師器の壺が検出された。本住居址の時期は、覆土、出土遺物などから石田川期と考えられる。



第106図 清水田遺跡 47号住居址実測図

第48号住居址 (出土遺物 第173図)

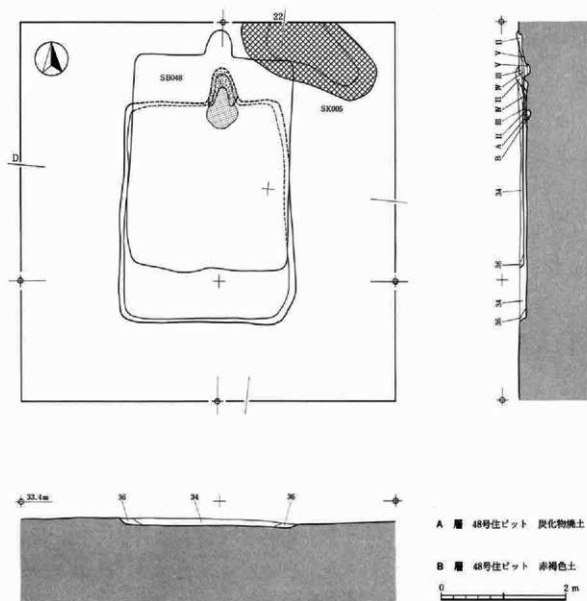
本遺跡の東北側、D-22に位置する。本住居址はS B 049→S B 048の順に重複する。平面形は縦長方形を呈し、規模は、長さ3.4m×2.6mを測り、床面積は約8.5㎡である。主軸は、真北を示す。竈は、住居の北辺、中央寄りに付設されている。壁高は、東壁で12cmを測る。壁の立ち上がりは、平均60°と、ゆるやかである。住居址内の覆土は、基本的に同一層として観察され、遺物の取り上げも一括処理した。黒褐色土層で、ロームブロックと焼土を少量含み、硬質である。竈に関係する土層は、竈被覆土層は、確認されず、竈内崩落土が1層、竈床面下層が3層に細別される。その他の土層として、34層は覆土で黒褐色土層、ロームブロックと焼土を少量含み、硬質である。36層は覆土で褐色土層、住居址隣の壁の崩落土である。住居内のピットは、1の深さ約10cm、2の深さ約30cmである。出土遺物は、鉄製刀子などがある。本住居址の時期は、住居址の重複関係、覆土、施設、出土遺物などから関分期と考えられる。



第107図 清水田遺跡 48号住居址実測図

第49号住居址

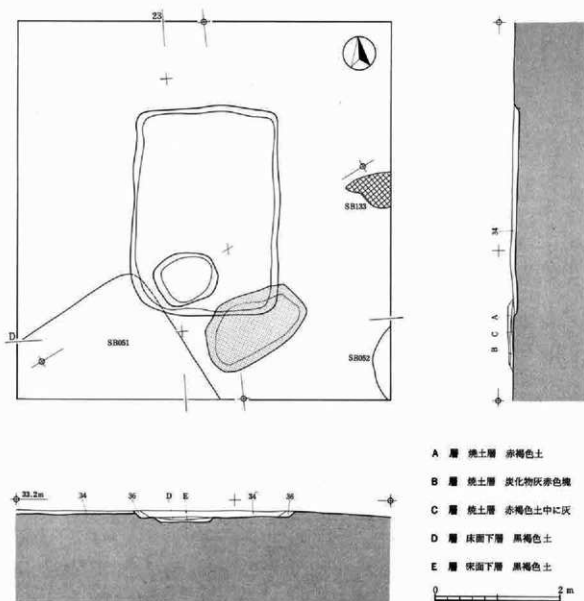
本遺跡の東北側、D-22に位置する。本住居址はS B049→S B048の順に重複する。平面形は縦長長方形を呈し、規模は、長さ3.5m×2.9mを測り、床面積は約10m²である。主軸は、N-3°-Wを示す。竈は、住居の北辺、中央寄りに付設されている。壁高は、東壁で14cmを測る。壁の立ち上がりは、平均60°と、ゆるやかである。住居址内の覆土は、基本的に同一層として観察され、遺物の取り上げも一括処理した。黒褐色土層で、ロームブロックと焼土を少量含み、硬質である。竈に関する土層は、竈被覆土層は、確認されず、竈内崩落土が2層、竈床面下層が1層に細別される。その他の土層として、34層は覆土で黒褐色土層、ロームブロックと焼土を少量含み、硬質である。36層は覆土で褐色土層、住居址隅の壁崩落土である。住居内のビットはない。出土遺物は検出されない。本住居址の時期は、住居址の重複関係、覆土、施設などから区分期と考えられる。



第108図 清水田遺跡 49号住居址実測図

第50号住居址 (出土遺物 第173図)

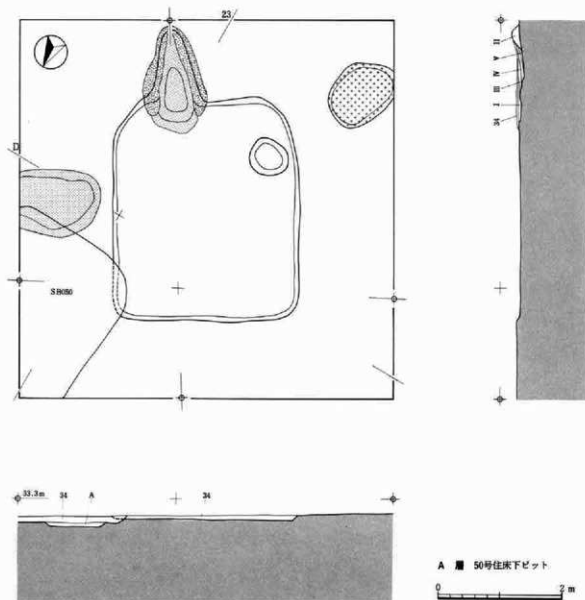
本遺跡の東北側、D-23に位置する。本住居址はSB051→SB050の順に重複する。平面形は長方形を呈し、規模は、長さ3.4m×2.4mを測り、床面積は約8㎡である。主軸は、N-6°-Eを示す。竈はない。壁高は、北壁で9cmを測る。壁の深さが浅く、立ち上がり角度は、計測していない。住居址内の覆土は、基本的に同一層として観察され、遺物の取り上げも一括処理した。黒褐色土層で、ロームブロックと焼土を少量含み、硬質である。その他の土層として、34層は覆土で黒褐色土層、ロームブロックと焼土を少量含み、硬質である。36層は覆土で褐色土層、住居址隅の壁崩落土である。住居内のピットは、1箇所あり深さ約3cmである。出土遺物は、土師器の高台付椀、羽釜などが検出された。本住居址の時期は、住居址の重複関係、覆土、出土遺物などから国分期と考えられる。



第109図 清水田遺跡 50号住居址実測図

第51号住居址

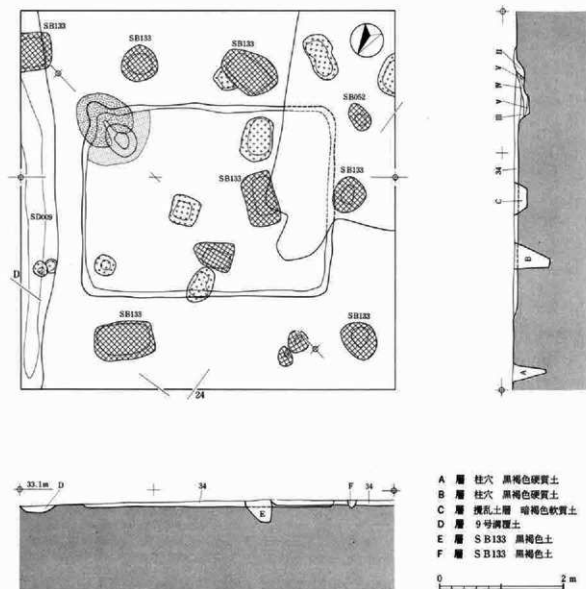
本遺跡の東北側、D-23に位置する。本住居址はS B051-S B050の順に重複する。平面形は縦長長方形を呈し、規模は、長さ3.6m×3mを測り、床面積は約10.5m²である。主軸は、N-153°-Eを示す。竈は、住居の南辺、東寄りに付設されている。壁高は、南西壁で8cmを測る。壁の深さが浅く、立ち上がり角度は計測していない。住居址内の覆土は、基本的に同一層として観察され、遺物の取り上げも一括処理した。黒褐色土層で、ロームブロックと焼土を少量含み、硬質である。竈に関係する土層は、竈被覆土が1層、竈内崩落土が1層、竈床面下層が2層に細別される。その他の土層として、34層は覆土で黒褐色土層、ロームブロックと焼土を少量含み、硬質である。住居内のピットは、1箇所深さ約21cmである。出土遺物は検出されない。本住居址の時期は、住居址の重複関係、覆土、施設などから区分期と考えられる。



第110図 清水田遺跡 51号住居址実測図

第53号住居址

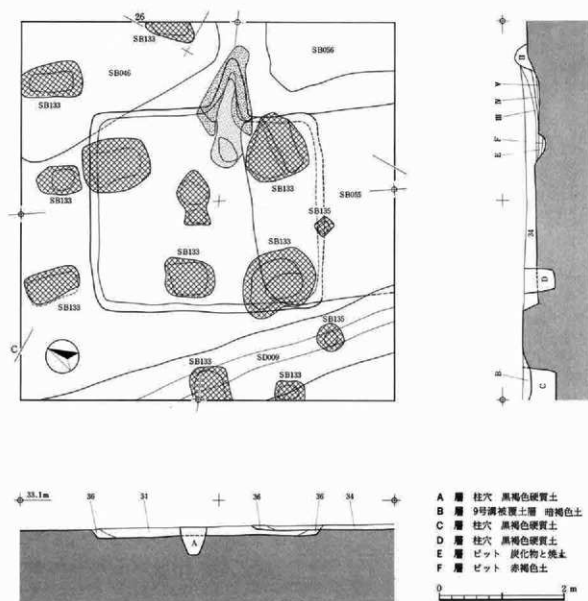
本遺跡の東北側、C-24に位置する。本住居址はSB053→SB052の順に重複する。平面形は縦長方形を呈し、規模は、長さ4m×3.1mを測り、床面積は約12㎡である。主軸は、N-57-Eを示す。竈は、住居の東南隅に付設されている。壁高は、北東壁で12cmを測る。壁の立ち上がりは、平均30°と、ゆるやかである。住居址内の覆土は、基本的に同一層として観察され、遺物の取り上げも一括処理した。黒褐色土層で、ロームブロックと焼土を少量含み、硬質である。竈に関する土層は、竈被覆土層は、確認されず、竈内崩落土が1層、竈床面下層が3層に細別される。その他の土層として、34層は覆土で黒褐色土層、ロームブロックと焼土を少量含み、硬質である。住居内のピットはない。出土遺物は検出されない。本住居址の時期は、住居址の重複関係、覆土、施設などから国分期と考えられる。



第112図 清水田遺跡 53号住居址実測図

第54号住居址 (出土遺物 第187図)

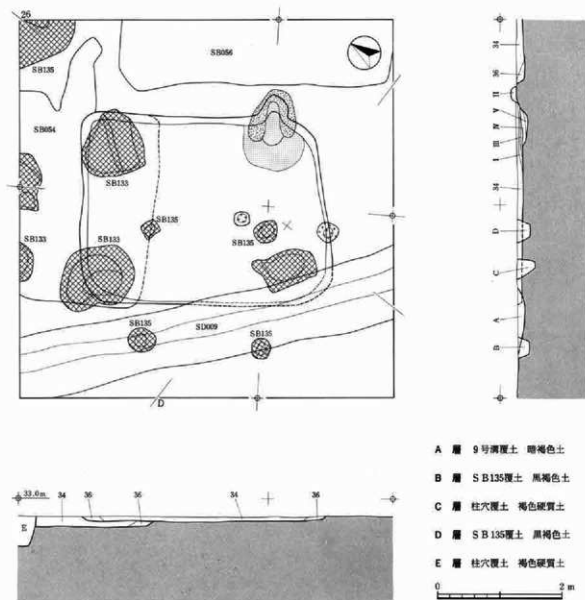
本遺跡の東北側、C-25に位置する。本住居址はSB046→SB054→SB055の順に重複する。平面形は横長長方形を呈し、規模は、長さ3.8m×3.3mを測り、床面積は約12.5㎡である。主軸は、N-64°-Eを示す。竈は、住居の東辺、中央寄りに付設されている。壁高は、西壁で24cmを測る。壁の立ち上がりは、平均65°と、ゆるやかである。住居址内の覆土は、基本的に同一層として観察され、遺物の取り上げも一括処理した。黒褐色土層で、ロームブロックと焼土を少量含み、硬質である。竈に關係する土層は、竈被覆土層は、確認されず、竈内崩落土が1層、竈床面下層が2層に細別される。その他の土層として、34層は覆土で黒褐色土層、ロームブロックと焼土を少量含み、硬質である。36層は覆土で褐色土層、住居址隣の壁崩落土である。住居内のピットはない。出土遺物は、円筒埴輪が検出された。本住居址の時期は、住居址の重複関係、覆土、施設、出土遺物などから図分期と考えられる。



第113図 清水田遺跡 54号住居址実測図

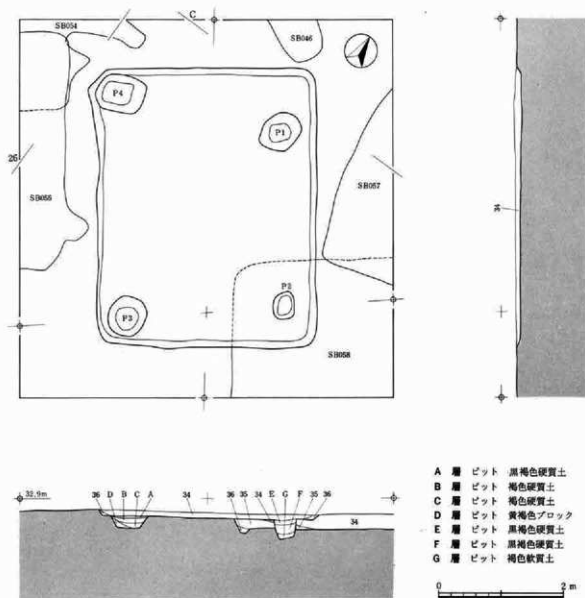
第55号住居址 (出土遺物 第174図)

本遺跡の東北側、D-26に位置する。本住居址はSB054→SB055の順に重複する。平面形は横長長方形を呈し、規模は、長さ4.1m×3.1mを測り、床面積は約12.5m²である。主軸は、N-56°-Eを示す。竈は、住居の東辺、南隅に付設されている。壁高は、北壁で7cmを測る。壁の深さが浅く、立ち上がり角度は計測していない。住居址内の覆土は、基本的に同一層として観察され、遺物の取り上げも一括処理した。黒褐色土層で、ロームブロックと焼土を少量含み、硬質である。竈に関する土層は、竈被覆土が1層、竈内崩落土が1層、竈床面下層が2層に細別される。その他の土層として、34層は覆土で黒褐色土層、ロームブロックと焼土を少量含み、硬質である。36層は覆土で褐色土層、住居址隅の壁崩落土である。住居内のピットはない。出土遺物は、土師器の杯、大甕、羽釜、須恵器の杯、高台付碗などが検出された。本住居址の時期は、住居址の重複関係、覆土、施設、出土遺物などから図分期と考えられる。



第56号住居址 (出土遺物 第174図)

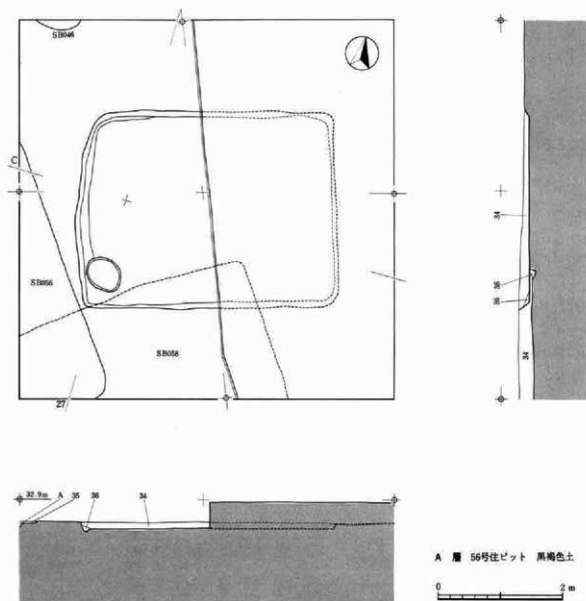
本遺跡の東北側、C-26に位置する。本住居址はSB058→SB056の順に重複する。平面形は長方形を呈し、規模は、長さ4.5m×3.6mを測り、床面積は約16㎡である。主軸は、N-33°-Wを示す。竈の有無は、住居址切り合いのため、確認されていない。壁高は、東南壁で15cmを測る。壁の立ち上がりは、平均60°と、ゆるやかである。住居址内の覆土は、基本的に同一層として観察され、遺物の取り上げも一括処理した。黒褐色土層で、ロームブロックと焼土を少量含み、硬質である。その他の土層として、34層は覆土で黒褐色土層、ロームブロックと焼土を少量含み、硬質である。35層は覆土で黒褐色土層、粘質が強く焼土、炭化物、灰層が多量に含まれる。36層は覆土で褐色土層、住居址隅の壁崩落土である。住居内のピットの深さは、1が約20cm、2が約13cm、3が約19cm、4が約33cmである。出土遺物は、土師器の杯、須恵器の杯、高台付椀などが検出された。本住居址の時期は、住居址の重複関係、覆土、出土遺物などから国分期と考えられる。



第115図 清水田遺跡 56号住居址実測図

第57号住居址 (出土遺物 第174図)

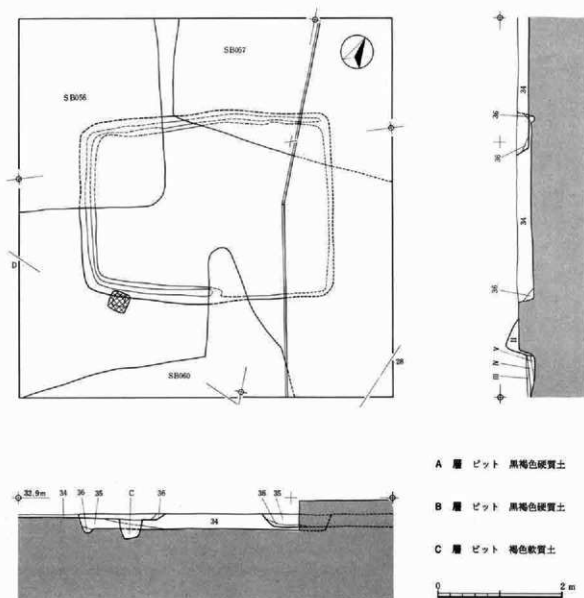
本遺跡の東北側、C-27に位置する。本住居址はS B058→S B057の順に重複する。平面形は長方形を呈し、規模は、長さ4.2m×3.7mを測り、床面積は約15.5m²である。主軸は、N-13°-Wを示す。竈の有無は、住居址切り合いのため、確認されていない。壁高は、南壁で16cmを測る。壁の立ち上がりは、平均70°を示す。住居址内の覆土は、基本的に同一層として観察され、遺物の取り上げも一括処理した。黒褐色土層で、ロームブロックと焼土を少量含み、硬質である。その他の土層として、34層は覆土で黒褐色土層、ロームブロックと焼土を少量含み、硬質である。35層は覆土で黒褐色土層、粘質が強く焼土、炭化物、灰層が多量に含まれる。36層は褐色土層、住居址隅の壁崩落土である。住居内のピットは、1箇所所で深さ約33cmである。出土遺物は、須恵器の杯が検出された。本住居址の時期は、住居址の重複関係、覆土、出土遺物などから国分期と考えられる。



第116図 清水田遺跡 57号住居址実測図

第58号住居址 (出土遺物 第174図)

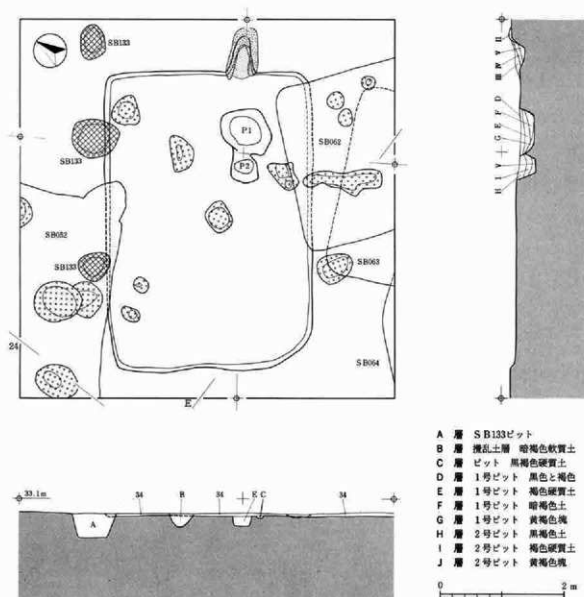
本遺跡の東北側、C-27に位置する。本住居址はSB058→SB056→SB057、SB058→SB060の順に重複する。平面形は長方形を呈し、規模は、長さ4.1m×3.1mを測り、床面積は約12.5㎡である。主軸は、N-31°-Wを示す。竈の有無は、住居址切り合いのため、確認されていない。壁高は、南西壁で29cmを測る。壁の立ち上がりは、平均75°を示す。住居址内の覆土は、基本的に同一層として観察され、遺物の取り上げも一括処理した。黒褐色土層で、ロームブロックと焼土を少量含み、硬質である。その他の土層として、34層は覆土で黒褐色土層、ロームブロックと焼土を少量含み、硬質である。35層は覆土で黒褐色土層、粘質が強く焼土、炭化物、灰層が多量に含まれる。36層は覆土で褐色土層、住居址隣の壁崩落土である。住居内のピットはない。出土遺物は、土師器の小甕、須恵器の杯、高台付椀、墨書土器などが検出された。本住居址の時期は、住居址の重複関係、覆土、出土遺物などから国分期と考えられる。



第174図 清水田遺跡 58号住居址実測図

第59号住居址 (出土遺物 第174図)

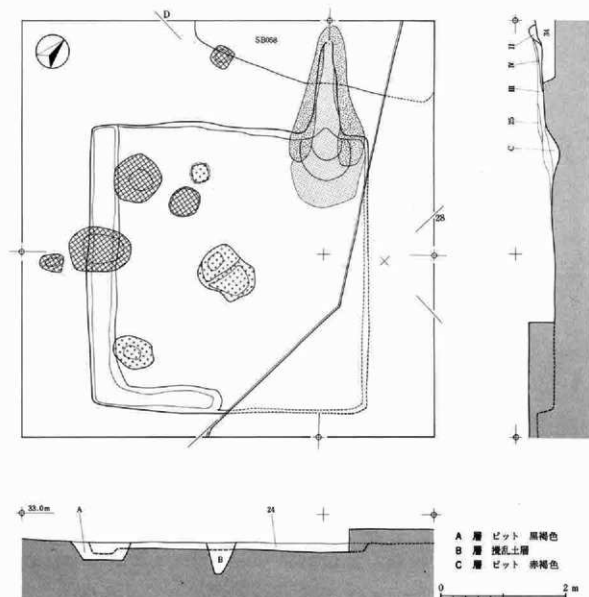
本遺跡の東北側、D-24に位置する。本住居址はSB059→SB052、SB059→SB062の順に重複する。平面形は縦長長方形を呈し、規模は、長さ4.8m×3.3mを測り、床面積は約15.5㎡である。主軸はN-56°-Eを示す。竈は、住居址の東辺、南寄りに付設されている。壁高は、南西壁で8cmを測る。壁の深さが浅く、立ち上がり角度は、計測していない。住居址内の覆土は、基本的に同一層として観察され、遺物の取り上げも一括処理した。黒褐色土層で、ロームブロックと焼土を少量含み、硬質である。竈に関係する土層は、竈被覆土層は、確認されず、竈内崩落土が1層、竈床面下層が2層に細別される。その他の土層として、34層は覆土で黒褐色土層、ロームブロックと焼土を少量含み、硬質である。住居内のビットは、1が深さ約23cm、2が深さ約27cmである。出土遺物は、土師器の杯、須恵器の杯。内黒などが検出された。本住居址の時期は、住居址の重複関係、覆土、施設、出土遺物などから国分期と考えられる。



第118図 清水田遺跡 59号住居址実測図

第60号住居址

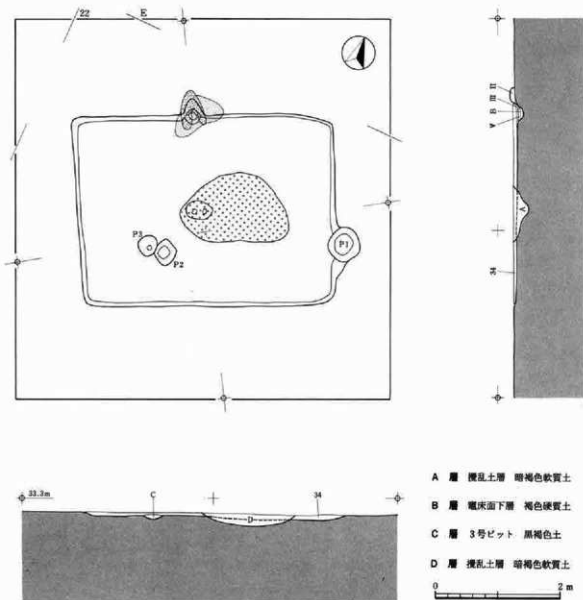
本遺跡の東北側、D-28に位置する。本住居址はS B058→S B060の順に重複する。平面形は方形を呈し、規模は、長さ4.6m×4.4mを測り、床面積は約20㎡である。主軸は、N-44°-Wを示す。竈は、住居址の北辺、東隅に付設されている。壁高は、北西壁で13cmを測る。壁の立ち上がり角度は、ゆるやかである。住居址内の覆土は、基本的に同一層として観察され、遺物の取り上げも一括処理した。黒褐色土層で炭化物、ロームブロックを少量含む硬質土層。竈に関する土層は、竈被覆土層は、確認されず、竈内崩落土が1層、竈床面下層が1層に細別される。その他の土層として、24層は覆土で黒褐色土層、炭化物、ロームブロックを少量含む硬質土層。25層は覆土で黒褐色土層、焼土、炭化物を多量に含む粘質土層。34層は覆土で黒褐色土層、ロームブロックと焼土を少量含む、硬質である。住居内のピットはない。出土遺物は検出されない。本住居址の時期は、住居址の重複関係、覆土、施設などから鬼高期と考えられる。



第119図 清水田遺跡 60号住居址実測図

第61号住居址

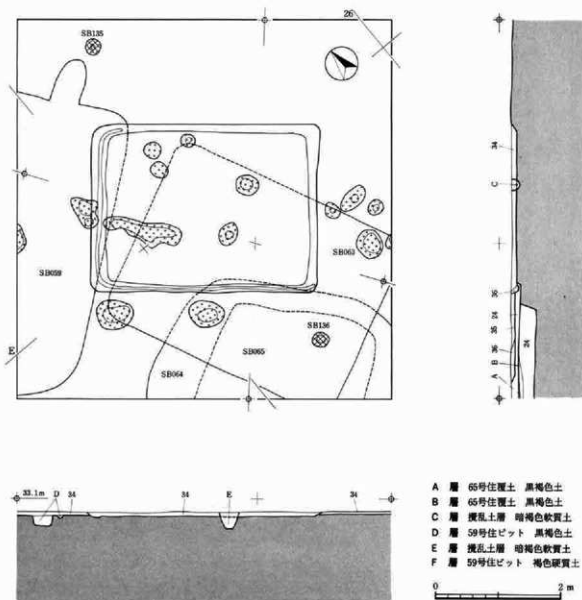
本遺跡の東北側、E-22に位置する。住居址の重複はない。平面形は横長長方形を呈し、規模は長さ4.2m×3.2mを測り、床面積は約13㎡である。主軸は、N-22'-Wを示す。竈は、住居址の北辺、中央に付設されている。壁高は、北壁で7cmを測る。壁の深さが浅く、立ち上がり角度は計測していない。住居址内の覆土は、基本的に同一層として観察され、遺物の取り上げも一括処理した。黒褐色土層で、ロームブロックと焼土を少量含み、硬質である。竈に関する土層は、竈被覆土層は、確認されず、竈内崩落土が1層、竈床面下層が2層に細別される。その他の土層として、34層は覆土で黒褐色土層、ロームブロックと焼土を少量含み、硬質である。住居内のピットは、1が深さ約5cm、2が深さ約16cm、3が深さ約11cmである。出土遺物は検出されない。本住居址の時期は、覆土、施設などから図分期と考えられる。



第120図 清水田遺跡 61号住居址実測図

第62号住居址

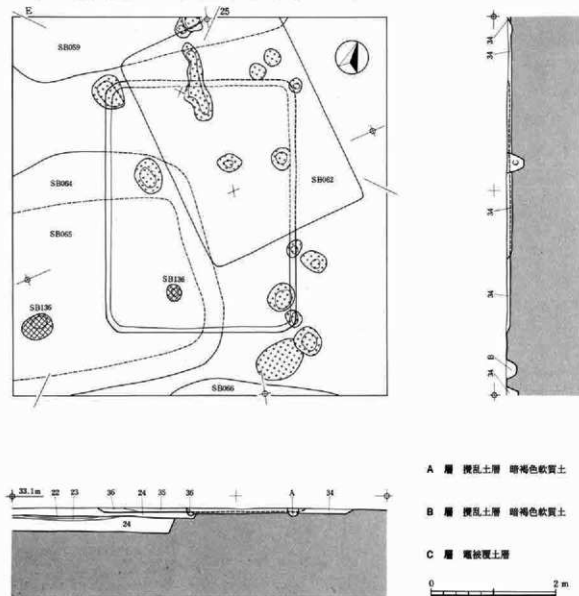
本遺跡の東北側、E-25に位置する。本住居址はSB064→SB063→SB062、SB059→SB062の順に重複する。平面形は長方形を呈し、規模は、長さ3.6m×2.7mを測り、床面積は約9.5㎡である。主軸は、N-43°-Eを示す。竈の有無は、住居址切り合いのため、確認されていない。壁高は、東西壁で12cmを測る。壁の立ち上がりは、平均65°とゆるやかである。住居址内の覆土は、基本的に同一層として観察され、遺物の取り上げも一括処理した。黒褐色土層で、ロームブロックと焼土を少量含み、硬質である。その他の土層としては、24層は覆土で黒褐色土層、炭化物、ロームブロックを少量含む硬質土層。34層は覆土で黒褐色土層、ロームブロックと焼土を少量含み、硬質である。35層は覆土で黒褐色土層、粘質が強く焼土、炭化物、灰層が多量に含まれる。36層は覆土で褐色土層、住居址隅の壁崩落土である。住居内のピットはない。出土遺物は検出されない。本住居址の時期は、住居址の重複関係、覆土などから固分期と考えられる。



第121図 清水田遺跡 62号住居址実測図

第63号住居址

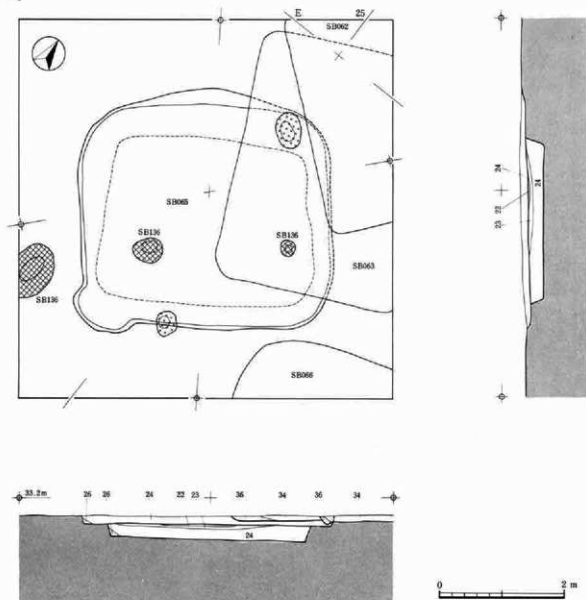
本遺跡の東北側、E-25に位置する。本住居址はSB065→SB064→SB063→SB062の順に重複する。平面形は長方形を呈し、規模は、長さ4m×3.1mを測り、床面積は約12㎡である。主軸は、N-22°-Wを示す。電の有無は、住居址切り合いのため、確認されていない。壁高は、北東壁で6cmを測る。壁の深さが浅く、立ち上がり角度は計測していない。住居址内の覆土は、基本的に同一層として観察され、遺物の取り上げも一括処理した。黒褐色土層で、ロームブロックと焼土を少量含み、硬質である。その他の土層として、22層は黒褐色土層、ロームブロックと焼土、炭化物を少量含む。23層は覆土で黒褐色土層、覆土の主体をなす土層、軟質土である。24層は覆土で黒褐色土層、炭化物、ロームブロックを少量含む硬質土層。34層は覆土で黒褐色土層、ロームブロックと焼土を少量含み、硬質である。35層は覆土で黒褐色土層、粘質が強く焼土、炭化物、灰層が多量に含まれる。36層は覆土で褐色土層、住居址隅の壁崩落土である。住居内のピットはない。出土遺物は検出されない。時期は、国分期と考えられる。



第122図 清水田遺跡 63号住居址実測図

第64号住居址

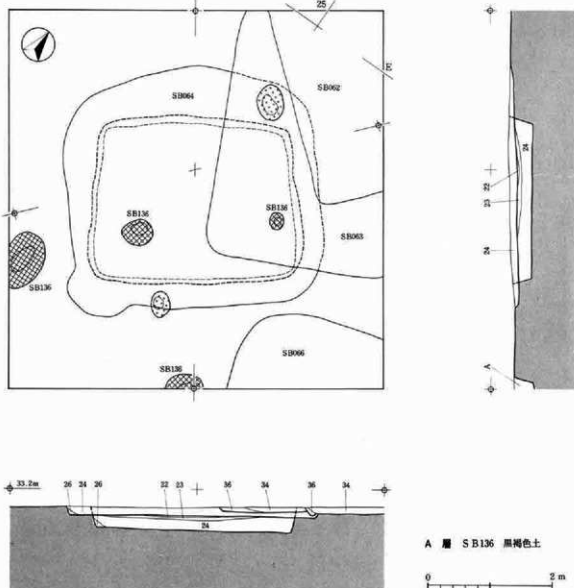
本遺跡の東北側、E-25に位置する。本住居址はSB065→SB064→SB063→SB062の順に重複する。平面形は長方形を呈し、規模は、長さ4.1m×3.8mを測り、床面積は約15.5m²である。主軸は、N-35°-Wを示す。竈はない。壁高は、北東壁で15cmを測る。壁の立ち上がりは、平均75°を示す。住居址内の覆土は、基本的に同一層として観察され、遺物の取り上げも一括処理した。黒褐色土層で、炭化物、ロームブロックを少量含む硬質土層。22層は覆土で黒褐色土層、ロームブロックと焼土、炭化物を少量含む。23層は覆土で黒褐色土層、覆土の主体をなす土層、軟質土である。24層は覆土で黒褐色土層、炭化物、ロームブロックを少量含む硬質土層。26層は覆土で暗褐色土層、住居址隅の壁崩落土。34層は覆土で黒褐色土層、ロームブロックと焼土を少量含む、硬質である。36層は覆土で褐色土層、住居址隅の壁崩落土である。住居内のピットはない。出土遺物は検出されない。本住居址の時期は、住居址の重複関係、覆土などから石田川期と考えられる。



第123図 清水田遺跡 64号住居址実測図

第65号住居址 (出土遺物 第174図)

本遺跡の東北側、E-25に位置する。本住居址はSB065→SB064→SB063の順に重複する。平面形は長方形を呈し、規模は、長さ3.5m×2.7mを測り、床面積は約9.5m²である。主軸は、N-32°-Wを示す。竈はない。壁高は、北東壁で40cmを測る。壁の立ち上がりは、平均75°を示す。住居址内の覆土は、基本的に上層、中層、下層に分層され、遺物の取り上げもその区分に従った。上層は、黒褐色土層で、ロームブロックと焼土、炭化物を少量含む。中層は、黒褐色土層で、覆土の主体をなす土層、軟質土である。下層は、黒褐色土層で、炭化物、ロームブロックを少量含む硬質土層。その他の土層として、22層は覆土で黒褐色土層、ロームブロックと焼土、炭化物を少量含む。23層は覆土で黒褐色土層、覆土の主体をなす土層、軟質土層。24層は覆土で黒褐色土層、炭化物、ロームブロックを少量含む硬質土層。26層は覆土で暗褐色土層、住居址隅の壁崩落土。34層は覆土で黒褐色土層、ロームブロックと焼土を少量含む、硬質である。36層は覆土で褐色土層、住居址隅の壁崩落土である。住居内のビットはない。



第124図 清水田遺跡 65号住居址実測図

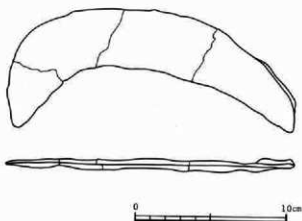
第66号住居址 (出土遺物 第175図)

本遺跡の東北側、F-26に位置する。本住居址はSB075→SB066の順に重複する。平面形は横長長方形を呈し、規模は、長さ6.5m×4.6mを測り、床面積は約30㎡である。主軸は、N-78°-Eを示す。竈は、住居の東辺、南寄りに付設されている。壁高は、北壁で16cmを測る。壁の立ち上がりは、平均55°と、ゆるやかである。住居址内の覆土は、基本的に同一層として観察され、遺物の取り上げも一括処理した。黒褐色土層で、ロームブロックと焼土を少量含み、硬質である。竈に関する土層は、竈被覆土が1層、竈内崩落土層は、確認されず、竈床面下層が2層に細別される。その他の土層として、A層はSB136で黒褐色硬質土。B層は落ち込みで赤褐色土。C層は攪乱土層で暗褐色軟質土層で下部に黄色ブロックを混土。D層は攪乱土層で暗褐色土層で径2cm大のロームブロックを混土している。E層は攪乱土層で軟質で暗褐色土層、比較的短時期に埋没されたものと考えられる。F層は攪乱土層で暗灰褐色軟質土層である。下層にゆくにしたいが黄色味が強くなる。G層はSK011で褐色硬質土。H層はSK012で褐色硬質土である。34層は覆土で黒褐色土層、ロームブロックと焼土を少量含み、硬質である。住居内のピットは、1箇所まで深さ約68cmである。出土遺物は、土師器の大甕、羽釜。須恵器の高台付椀、大甕、内黒、鉄製刀子、鉄製工具などが検出された。本住居址の時期は、住居址の重複関係、覆土、施設、出土遺物などから国分期と考えられる。

清水田遺跡 鉄製品一覧表 (第3表)

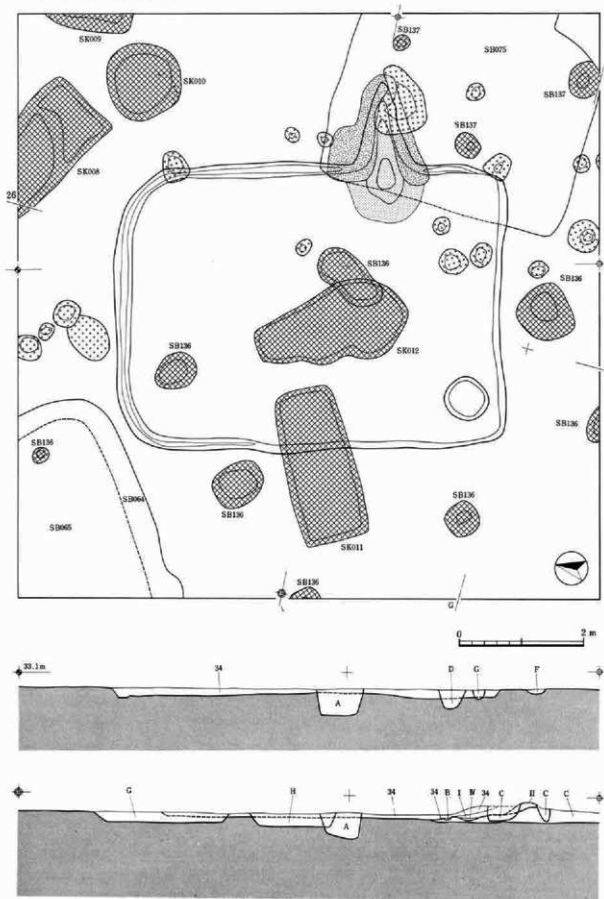
番号	住居番号	鉄製品	時期	重量(g)	備 考
1	003	鉄 滓	国 分		
2	004	金 具	国 分	3.7	角釘状金具
3	004	鉄 滓	国 分		
4	005	刀 子	国 分	2.7	茎
5	006	金 具	国 分	9.4	
6	007	金 具	国 分	10.5	角釘状金具
7	008	鎌	国 分	66.0	全長約18.8cm
8	012	刀 子	国 分	8.2	全長約9.2cm
9	014	刀 子	国 分	3.5	茎
10	021	鉄 滓	国 分	58.4	
11	022	金 具	国 分	16.8	棒状、楕円形
12	022	工 具	国 分	5.8	刃部
13	027	鉄 滓	国 分	21.1	
14	028	金 具	国 分	8.0	角釘状金具
15	043	刀 子	国 分	12.2	全長約15.5cm
16	043	金 具	国 分	18.2	中空で「コ」の字状
17	044	角 釘	国 分	4.3	全長約5.5cm
18	047	刀 子	石田川	11.0	全長約9.2cm
19	063	金 具	国 分	1.0	棒状金具
20	066	刀 子	国 分	5.2	全長約8.7cm
21	066	鉄 滓	国 分	48.5	

番号	住居番号	鉄製品	時期	重量(g)	備 考
22	068	鉄 滓	国 分		
23	079	工 具	国 分	7.5	板状工具
24	080	鎌	国 分	77.6	全長約19.2cm
25	082	工 具	国 分	7.9	刃部
26	083	角 釘	国 分	12.3	全長約9.2cm
27	083	金 具	国 分	32.1	中空で「コ」の字状
28	083	金 具	国 分	2.4	中空で棒状
29	083	鉄 滓	国 分		
30	092	鉄 滓	石田川		
31	132	工 具	国 分	118.0	27.8cm、のみ?



第125図 清水田遺跡 80号住居址 鎌実測図

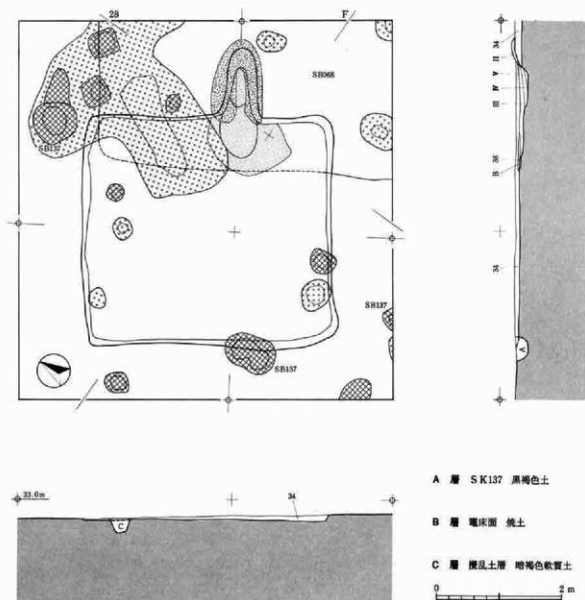
第IV章 清水田遺跡の調査



第126図 清水田遺跡 66号住居址実測図

第67号住居址 (出土遺物 第175、186図)

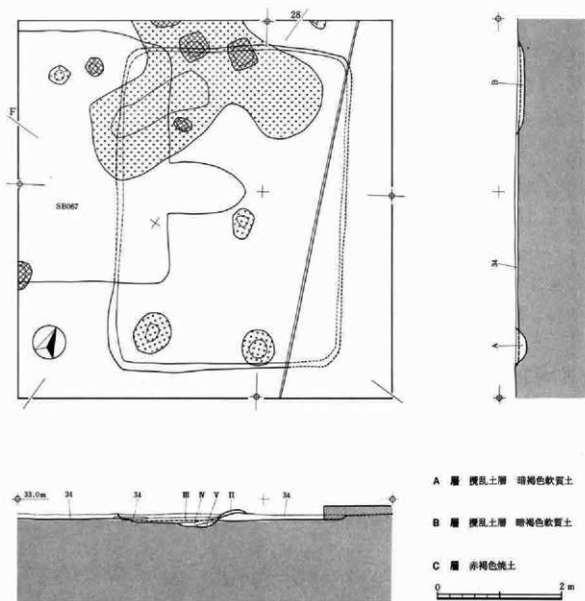
本遺跡の東北側、F-28に位置する。本住居址はS B068→S B067の順に重複する。平面形は方形を呈し、規模は、長さ4m×3.6mを測り、床面積は約14.5㎡である。主軸は、N-58°-Eを示す。竈は、住居の東辺、中央寄りに付設されている。壁高は、東南壁で10cmを測る。壁の深さが浅く、立ち上がり角度は計測していない。住居址内の覆土は、基本的に同一層として観察され、遺物の取り上げも一括処理した。黒褐色土層で、ロームブロックと焼土を少量含み、硬質である。竈に関する土層は、竈被覆土層、竈内崩落土層は、確認されず、竈床面下層が3層に残存している。その他の土層として、34層は覆土で黒褐色土層、ロームブロックと焼土を少量含み、硬質である。36層は覆土で褐色土層、住居址隣の壁崩落土である。住居内のピットはない。出土遺物は、土師器の大甕。磁石が検出された。本住居址の時期は、住居址の重複関係、覆土、施設、出土遺物などから国分期と考えられる。



第127図 清水田遺跡 67号住居址実測図

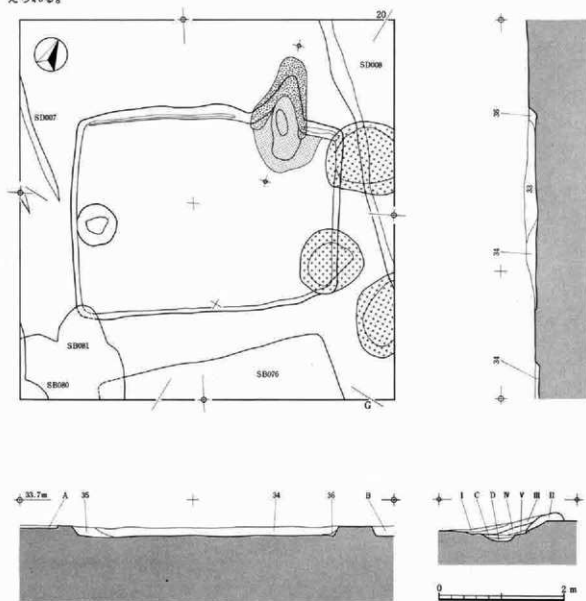
第68号住居址 (出土遺物 第175、181、183図、PL. 17)

本遺跡の東北側、F-28に位置する。本住居址はS B068→S B067の順に重複する。平面形は長方形を呈し、規模は、長さ5.3m×3.7mを測り、床面積は約19.5㎡である。主軸は、N-30°-Wを示す。竈の有無は、住居址切り合いのため、確認されていない。壁高は、東南壁で17cmを測る。壁の立ち上がりは、平均50°と、ゆるやかである。住居址内の覆土は、基本的に同一層として観察され、遺物の取り上げも一括処理した。黒褐色土層で、ロームブロックと焼土を少量含み、硬質である。その他の土層として、34層は黒褐色土層、ロームブロックと焼土を少量含み、硬質である。住居内のピットはない。出土遺物は、土師器の杯。須恵器の杯。内黒、灰釉、鉄製工具、墨書土器などが検出された。本住居址の時期は、住居址の重複関係、覆土、出土遺物などから国分期と考えられる。



第69号住居址 (出土遺物 第175図)

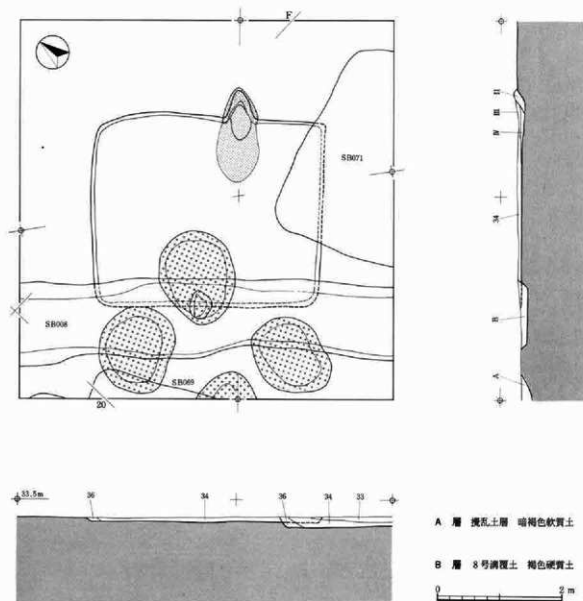
本遺跡の東北側、G-20に位置する。本住居址はSB069→SB081の順に重複する。平面形は横長長方形を呈し、規模は、長さ4.4m×3.3mを測り、床面積は約14.5m²である。主軸は、N-28°-Wを示す。竈は、住居の北辺、東寄りに付設されている。壁高は、東壁で16cmを測る。壁の立ち上がりは、平均60°と、ゆるやかである。住居址内の覆土は、基本的に同一層として観察され、遺物の取り上げも一括処理した。黒褐色土層で、ロームブロックと焼土を少量含み、硬質である。竈に関する土層は、竈被覆土が1層、竈内崩落土が1層、竈床面下層が2層に細別される。その他の土層として、A層は7号溝覆土で黒褐色硬質土、B層は8号溝覆土で黒褐色硬質土、C層は竈床面下層で赤褐色土中に焼土ブロック混入、D層は竈床面下層で炭化物、灰、焼土混入土である。住居内のピットは、1箇所所で深さ約56cmである。出土遺物は、土師器の杯、大甕、内黒などが検出された。本住居址の時期は、住居址の重複関係、覆土、施設、出土遺物などから区分期と考えられる。



第129図 清水田遺跡 69号住居址実測図

第70号住居址

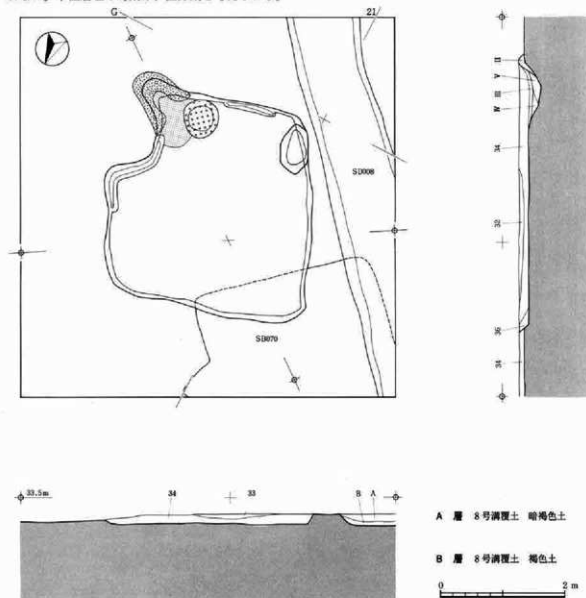
本遺跡の東北側、F-21に位置する。本住居址はSB070→SB071の順に重複する。平面形は横長長方形を呈し、規模は、長さ3.8m×3.1mを測り、床面積は約13.5m²である。主軸は、N-49°-Wを示す。竈は、住居の東辺、中央寄りに付設されている。壁高は、北東壁で12cmを測る。壁の立ち上がりは、平均55°と、ゆるやかである。住居址内の覆土は、基本的に同一層として観察され、遺物の取り上げも一括処理した。黒褐色土層で、ロームブロックと焼土を少量含み、硬質である。竈に關係する土層は、竈被覆土層は、確認されず、竈内崩落土が1層、竈床面下層が1層に細別される。その他の土層として、33層は覆土で黒褐色土層、ロームブロックと焼土を少量含み、32層よりも硬質である。34層は覆土で黒褐色土層、ロームブロックと焼土を少量含み、硬質である。36層は覆土で褐色土層、住居址隅の壁崩落土である。住居内のピットはない。出土遺物は検出されない。本住居址の時期は、住居址の重複関係、覆土、施設などから国分期と考えられる。



第130図 清水田遺跡 70号住居址実測図

第71号住居址

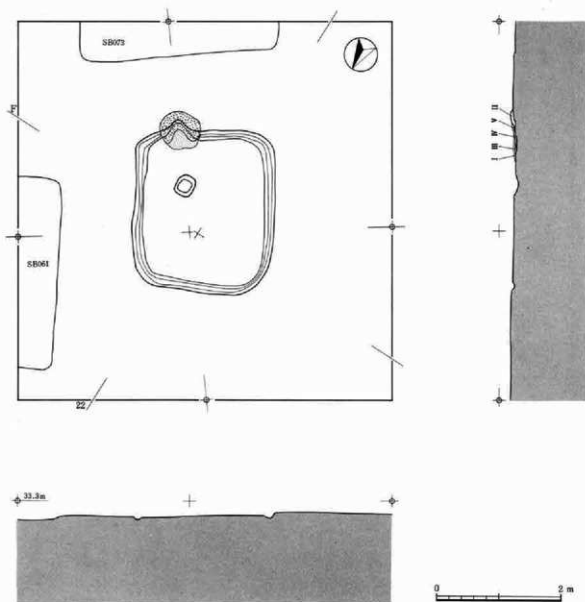
本遺跡の東北側、F-21に位置する。本住居址はS B070→S B071の順に重複する。平面形は方形を呈し、規模は、長さ3.6m×3.3mを測り、床面積は約12m²である。主軸は、N-156°-Eを示す。竈は、住居の東南隅に付設されている。壁高は、南西壁で17cmを測る。壁の立ち上がりは、平均65°と、ゆるやかである。住居址内の覆土は、基本的に上層、下層に分層され、遺物の取り上げもその区分に従った。上層は、黒褐色土層で、ロームブロックを少量含み、32層よりも硬質である。下層は、黒褐色土層で、ロームブロックと焼土を少量含み、硬質である。竈に関係する土層は、竈被覆土層は、確認されず、竈内崩落土が1層、竈床面下層が2層に細別される。その他の土層として、33層は覆土で黒褐色土層、ロームブロックを少量含み、32層よりも硬質である。34層は覆土で黒褐色土層、ロームブロックと焼土を少量含み、硬質である。36層は覆土で褐色土層、住居址隅の壁崩落土である。住居内のピットは、1箇所所で深さ約20cmである。出土遺物は検出されない。本住居址の時期は、国分期と考えられる。



第131図 清水田遺跡 71号住居址実測図

第72号住居址 (出土遺物 第176、182図)

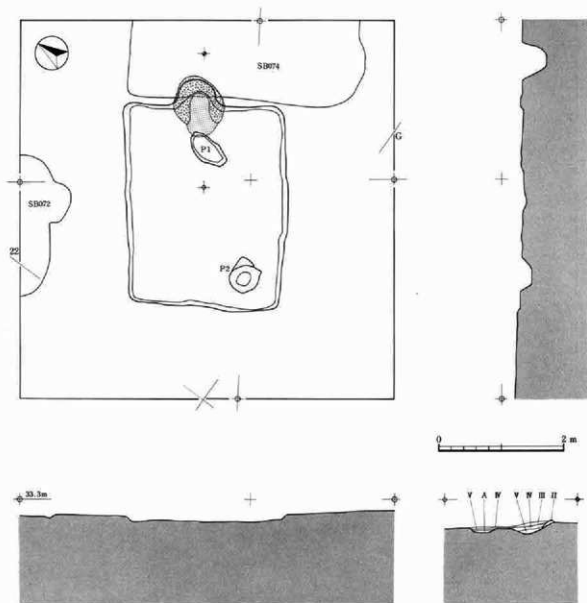
本遺跡の東北側、F-22に位置する。住居址の重複はない。平面形は縦長長方形を呈し、規模は、長さ2.6m×2.2mを測り、床面積は約5.5㎡である。主軸は、N-151°-Eを示す。竈は、住居の南辺、東寄りに付設されている。壁高は、南西壁で9cmを測る。壁の深さが浅く、立ち上がり角度は計測していない。住居址内の覆土は、基本的に同一層として観察され、遺物の取り上げも一括処理した。黒褐色土層で、ロームブロックと焼土を少量含み、硬質である。竈に関する土層は、竈被覆土が1層、竈内崩落土が1層、竈床面下層が1層に細別される。その他の土層として、34層は覆土で黒褐色土層、ロームブロックと焼土を少量含み、硬質である。住居内のピットは、1箇所で深さ約8cmである。出土遺物は、土師器の杯、高台付椀、須恵器の杯。墨書土器などが検出された。本住居址の時期は、覆土、施設、出土遺物などから国分期と考えられる。



第132図 清水田遺跡 72号住居址実測図

第73号住居址 (出土遺物 第176図)

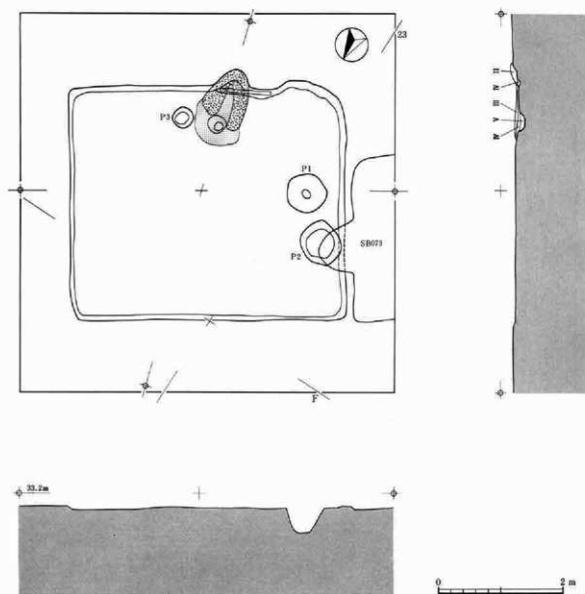
本遺跡の東北側、F-22に位置する。本住居址はSB074→SB073の順に重複する。平面形は縦長長方形を呈し、規模は、長さ3.2m×2.6mを測り、床面積は約8.5㎡である。主軸は、N-57-Eを示す。竈は、住居の東辺、中央寄りに付設されている。壁高は、北東壁で10cmを測る。壁の深さが浅く、立ち上がり角度は計測していない。住居址内の覆土は、基本的に同一層として観察され、遺物の取り上げも一括処理した。黒褐色土層で、ロームブロックと焼土を少量含み、硬質である。竈に関する土層は、竈被覆土層は、確認されず、竈内崩落土が1層、竈床面下層が4層に細別される。その他の土層として、A層はピットで黄褐色土中に炭化物を含む。34層は覆土で黒褐色土層、ロームブロックと焼土を少量含み、硬質である。住居内のピットは、1の深さ約8cm、2の深さ約19cmである。出土遺物は、土師器の大甕、須恵器の杯、高台付椀などが検出された。本住居址の時期は、住居址の重複関係、覆土、施設、出土遺物などから国分期と考えられる。



第133図 清水田遺跡 73号住居址実測図

第74号住居址 (出土遺物 第176図、PL.16)

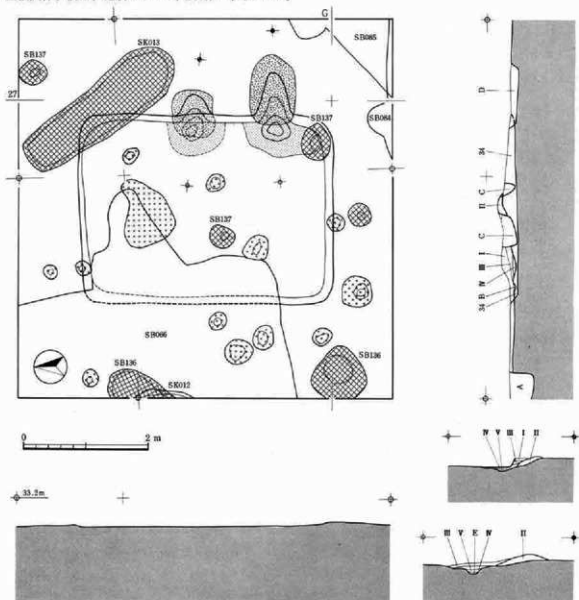
本遺跡の東北側、F-23に位置する。本住居址はS B074→S B073の順に重複する。平面形は横長長方形を呈し、規模は、長さ4.4m×3.7mを測り、床面積は約16㎡である。主軸は、N-150°-Eを示す。竈は、住居の東辺、中央寄りに付設されている。壁高は、東壁で7cmを測る。壁の深さが浅く、立ち上がり角度は計測していない。住居址内の覆土は、基本的に同一層として観察され、遺物の取り上げも一括処理した。黒褐色土層で、ロームブロックと焼土を少量含み、硬質である。竈に関する土層は、竈被覆土層は、確認されず、竈内崩落土が1層、竈床面下層が3層に細別される。その他の土層として、34層は覆土で黒褐色土層、ロームブロックと焼土を少量含み、硬質である。住居内のピットは、1が深さ約40cm、2が深さ約12cm、3が深さ約24cmである。出土遺物は、土師器の杯、大甕、小甕、須恵器の杯、灰釉などが検出された。本住居址の時期は、住居址の重複関係、覆土、施設、出土遺物などから国分期と考えられる。



第134図 清水田遺跡 74号住居址実測図

第75号住居址

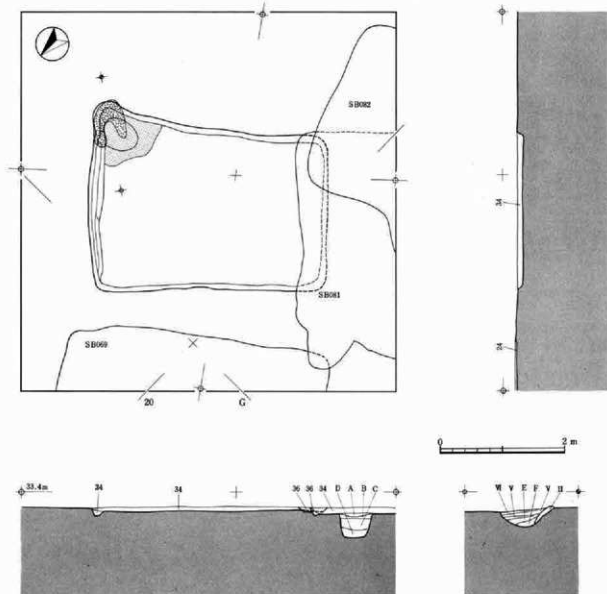
本遺跡の東北側、G-27に位置する。本住居址はS B075→S B066の順に重複する。平面形は横長長方形を呈し、規模は、長さ4.1m×3mを測り、床面積は約12m²である。主軸は、N-93°-Eを示す。竈は、住居の東辺、2箇所に付設されている。中央のものは古く、南寄りが新しい。壁高は、西壁で10cmを測る。壁の深さが浅く、立ち上がり角度は計測していない。住居址内覆土は、基本的に同一層として観察され、遺物の取り上げも一括処理した。黒褐色土層で、ロームブロックと焼土を少量含み、硬質である。竈に関する土層は、竈被覆土が1層、竈内崩落土が1層、竈床面下層が3層に細別される。その他の土層として、A層はS B136で黒褐色硬質土、B層は落ち込みで赤褐色土、C層は擾乱土層で暗褐色軟質土、D層はS K013で暗褐色硬質土、E層は竈床面下層で黄褐色ブロック土である。34層は覆土で黒褐色土層、ロームブロックと焼土を少量含み、硬質である。住居内のピットはない。出土遺物は検出されない。本住居址の時期は、住居址の重複関係、覆土、施設などから国分期と考えられる。



第135図 清水田遺跡 75号住居址実測図

第76号住居址 (出土遺物 第176図、PL. 19)

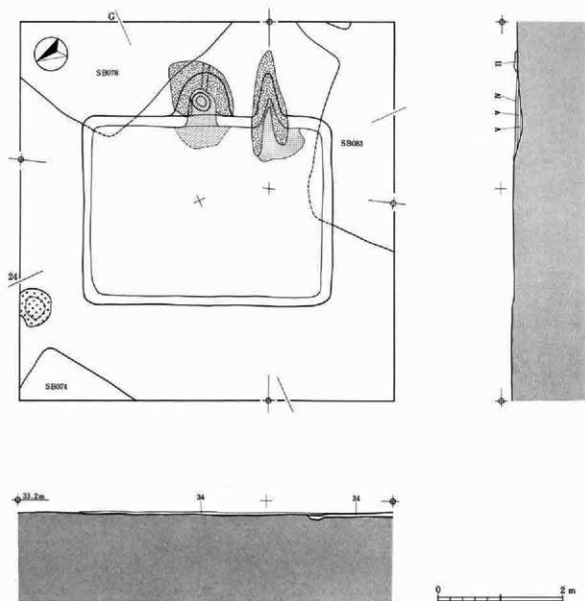
本遺跡の東北側、G-20に位置する。本住居址はSB076→SB081→SB082の順に重複する。平面形は横長長方形を呈し、規模は、長さ3.4m×2.8mを測り、床面積は約9.5㎡である。主軸は、N-137-Eを示す。竈は、住居の東辺、北隅に付設されている。壁高は、東壁で12cmを測る。壁の立ち上がりは、平均60°と、ゆるやかである。住居址内の覆土は、基本的に同一層として観察され、遺物の取り上げも一括処理した。黒褐色土層で、ロームブロックと焼土を少量含み、硬質である。竈に関係する土層は、竈被覆土層、竈内崩落土層は、確認されず、竈床面下層が5層に残存している。その他の土層として、A層は82号住ビットで黒褐色硬質土、B層は82号住ビットで黒褐色硬質土、C層は82号住ビットで褐色硬質土、D層は82号住ビットで黄褐色ブロック、E層は竈床面下層で黒褐色土中に焼土混入、F層は竈床面下層で褐色土中に灰を混入。34層は覆土で黒褐色土層、ロームブロックと焼土を少量含み、硬質である。36層は覆土で褐色土層、住居址隅の壁崩落土である。住居内のビットはない。時期は、圓分期と考えられる。



第136図 清水田遺跡 76号住居址実測図

第77号住居址 (出土遺物 第176図)

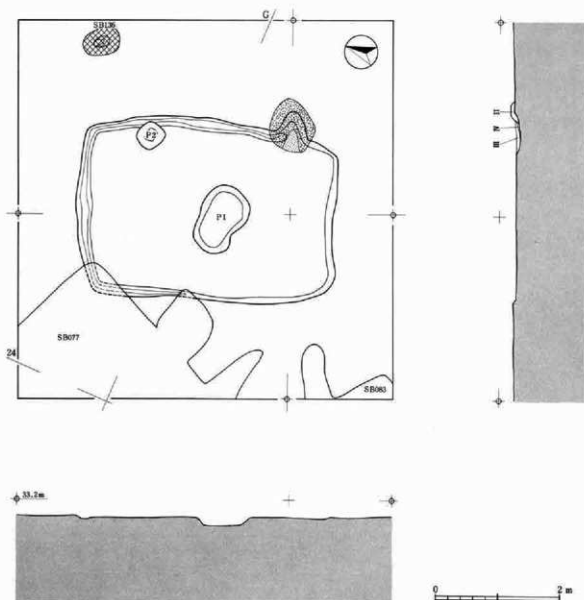
本遺跡の東北側、G-24に位置する。本住居址はSB078→SB077、SB083→SB077の順に重複する。平面形は横長長方形を呈し、規模は、長さ4m×3mを測り、床面積は約12m²である。主軸は、N-118°-Eを示す。竈は、住居の東辺、2箇所に付設されている。中央のものは古く、南寄りが新しい。壁高は、北壁で2cmを測る。壁の深さが浅く、立ち上がり角度は計測していない。住居址内の覆土は、基本的に同一層として観察され、遺物の取り上げも一括処理した。黒褐色土層で、ロームブロックと焼土を少量含み、硬質である。竈に関係する土層は、竈被覆土層、竈内崩落土層は、確認されず、竈床面下層が3層に残存している。34層は覆土で黒褐色土層、ロームブロックと焼土を少量含み、硬質である。住居内のピットはない。出土遺物は、須恵器の大甕が検出された。出土遺物は、須恵器の大甕が検出された。本住居址の時期は、住居址の重複関係、覆土、施設、出土遺物などから固分期と考えられる。



第137図 清水田遺跡 77号住居址実測図

第78号住居址 (出土遺物 第176図)

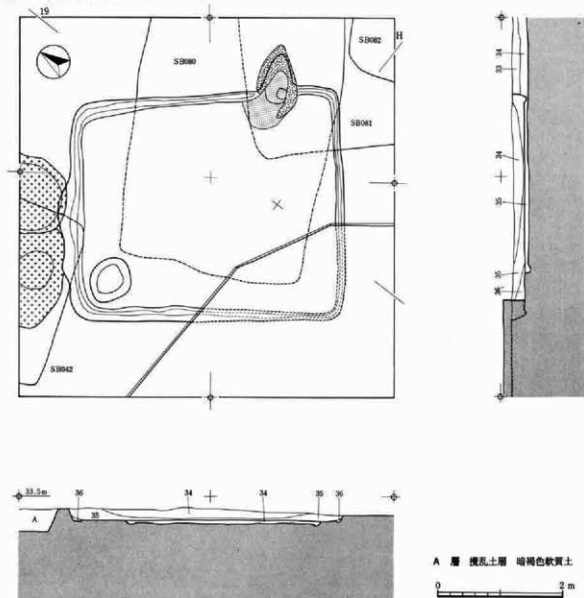
本遺跡の東北側、G-25に位置する。本住居址はSB078-SB077の順に重複する。平面形は横長長方形を呈し、規模は、長さ4.2m×3mを測り、床面積は約12.5m²である。主軸は、N-159°-Eを示す。竈は、住居の東辺、南寄りに付設されている。壁高は、北壁で4cmを測る。壁の深さが浅く、立ち上がり角度は計測していない。住居址内の覆土は、基本的に同一層として観察され、遺物の取り上げも一括処理した。黒褐色土層で、ロームブロックと焼土を少量含み、硬質である。竈に関係している土層は、竈被覆土層は、確認されず、竈内崩落土が1層、竈床面下層が1層に細別される。34層は覆土で黒褐色土層、ロームブロックと焼土を少量含み、硬質である。住居内のピットは、1が深さ約18cm、2が深さ約28cmである。出土遺物は、土師器の羽釜、須恵器の高台付椀などが検出された。本住居址の時期は、住居址の重複関係、覆土、施設、出土遺物などから国分期と考えられる。



第138図 清水田遺跡 78号住居址実測図

第79号住居址 (出土遺物 第176、182~185図、PL.17)

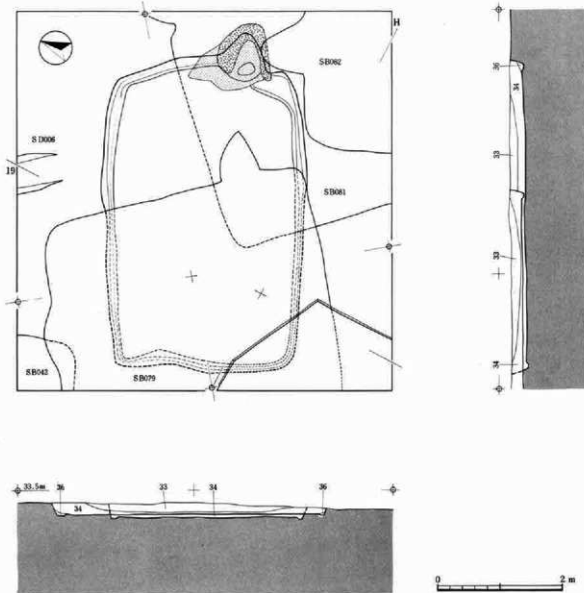
本遺跡の東北側、H-19に位置する。本住居址はSB042→SB080、SB081→SB080→SB079の順に重複する。平面形は横長長方形を呈し、規模は、長さ4.4m×3.7mを測り、床面積は約16㎡である。主軸は、N-55°-Eを示す。竈は、住居の東辺、南寄りに付設されている。壁高は、東壁で22cmを測る。壁の立ち上がりは、平均65°と、ゆるやかである。住居址内の覆土は、基本的に上層、下層に分層され、遺物の取り上げもその区分に従った。上層は、黒褐色土層で、ロームブロックと焼土を少量含み、硬質である。下層は、黒褐色土層で、粘質が強く焼土、炭化物、灰層が多量に含まれている。その他の土層として、33層は覆土で黒褐色土層、ロームブロックを少量含み、32層よりも硬質である。34層は覆土で黒褐色土層、ロームブロックと焼土を少量含み、硬質である。35層は覆土で黒褐色土層、粘質が強く焼土、炭化物、灰層が多量に含まれる。36層は覆土で褐色土層、住居址隣の壁崩落土である。住居内のピットは、1箇所、深さ約21cmである。本住居址の時期は、国分期と考えられる。



第139図 清水田遺跡 79号住居址実測図

第80号住居址 (出土遺物 第125、176、177図)

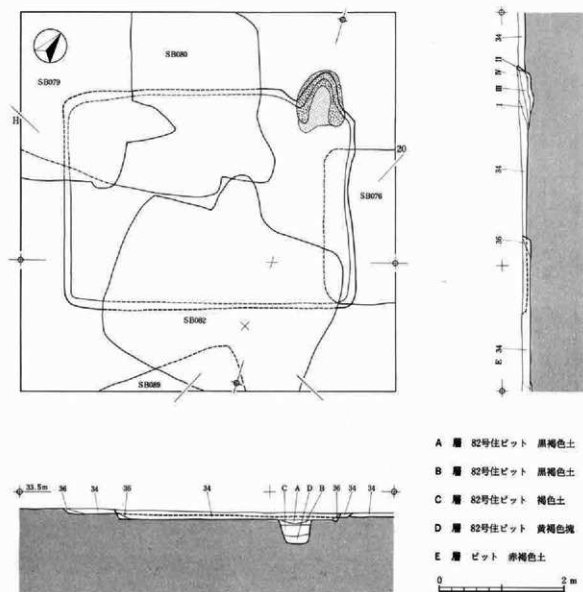
本遺跡の東北側、H-19に位置する。本住居址はSB081→SB080→SB079、SB081→SB082の順に重複する。平面形は縦長長方形を呈し、規模は、長さ5m×3.3mを測り、床面積は約16.5㎡である。主軸は、N-65°-Eを示す。竈は、住居の東辺、南寄りに付設されている。壁高は、南西壁で27cmを測る。壁の立ち上がりは、平均70°を示す。住居址内の覆土は、基本的に上層、下層に分層され、遺物の取り上げもその区分に従った。上層は、黒褐色土層で、ロームブロックを少量含み、32層よりも硬質である。下層は、黒褐色土層で、ロームブロックと焼土を少量含み、硬質である。その他の土層として、33層は覆土で黒褐色土層、ロームブロックを少量含み、32層よりも硬質である。34層は覆土で黒褐色土層、ロームブロックと焼土を少量含み、硬質である。36層は覆土で褐色土層、住居址側の壁崩落土である。住居内のピットはない。出土遺物は、土師器の杯、大甕、須恵器の杯、高台付椀。鉄製鎌などが検出された。本住居址の時期は、住居址の重複関係、覆土、施設、出土遺物などから国分期と考えられる。



第140図 清水田遺跡 80号住居址実測図

第81号住居址 (出土遺物 第177図)

本遺跡の東北側、G-19に位置する。本住居址はS B076→S B081→S B082、S B081→S B080→S B079の順に重複する。平面形は横長長方形を呈し、規模は、長さ4.2m×3.5mを測り、床面積は約14.5m²である。主軸は、N-40°-Wを示す。竈は、住居の東北隅に付設されている。壁高は、東壁で15cmを測る。壁の立ち上がり角度は、ゆるやかである。住居址内の覆土は、基本的に同一層として観察され、遺物の取り上げも一括処理した。黒褐色土層で、ロームブロックと焼土を少量含み、硬質である。竈に関係する土層は、竈被覆土が1層、竈内崩落土が1層、竈床面下層が1層に細別される。その他の土層として、34層は覆土で黒褐色土層、ロームブロックと焼土を少量含み、硬質である。36層は覆土で褐色土層、住居址隅の壁崩落土である。住居内のピットはない。出土遺物は、須恵器の高台付椀。内黒などが検出された。本住居址の時期は、住居址の重複関係、覆土、施設、出土遺物などから図分期と考えられる。



A 層 82号住ピット 黒褐色土

B 層 82号住ピット 黒褐色土

C 層 82号住ピット 褐色土

D 層 82号住ピット 黄褐色塊

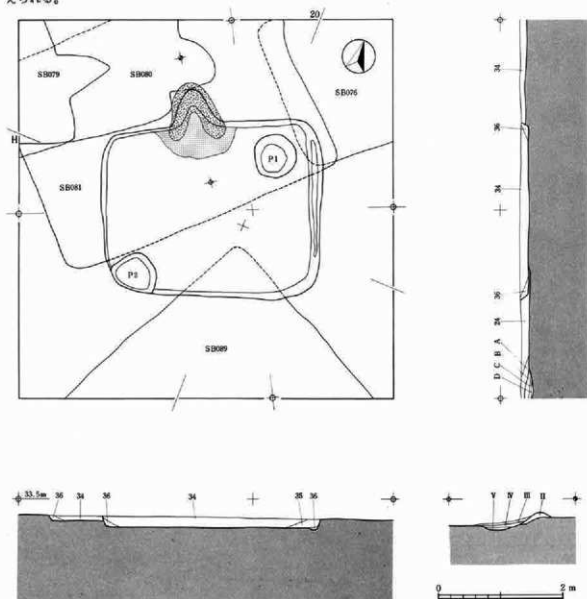
E 層 ピット 赤褐色土

0 2 m

第141図 清水田遺跡 81号住居址実測図

第82号住居址

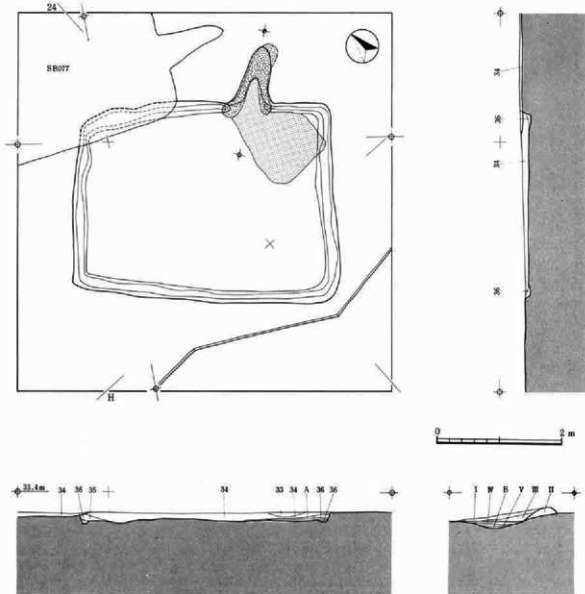
本遺跡の東北側、H-20に位置する。本住居址はSB089→SB076→SB081→SB080、SB081→SB082の順に重複する。平面形は横長長方形を呈し、規模は、長さ3m×2.8mを測り、床面積は約8㎡である。主軸は、N-18°-Wを示す。竈は、住居の北辺、中央寄りに付設されている。壁高は、東壁で18cmを測る。壁の立ち上がりは、平均70°を示す。住居址内の覆土は、基本的に同一層として観察され、遺物の取り上げも一括処理した。黒褐色土層で、ロームブロックと焼土を少量含み、硬質である。竈に関係する土層は、竈被覆土層は、確認されず、竈内崩落土が1層、竈床面下層が2層に細別される。その他の土層として、A層は89号住居焼土で赤褐色土、B層は89号住居焼土で炭化物、灰を含む赤褐色土、C層は89号住居焼土で炭水化合物を含む褐色土、D層は89号住居焼土で黄褐色ブロックである。住居内のピットは、1が深さ約43cm、2が深さ約14cmである。出土遺物は検出されない。本住居址の時期は、住居址の重複関係、覆土、施設などから国分期と考えられる。



第142図 清水田遺跡 82号住居址実測図

第83号住居址 (出土遺物 第177、181、182図、PL.17)

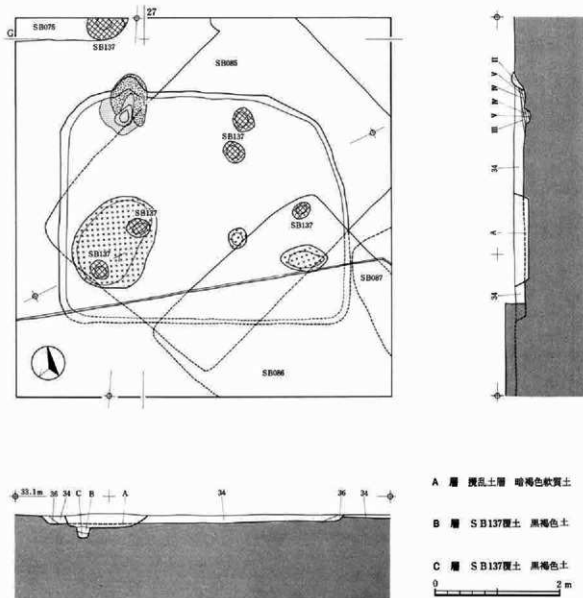
本遺跡の東北側、H-24に位置する。本住居址はS B083-S B077の順に重複する。平面形は横長方形を呈し、規模は、長さ4.3m×3.2mを測り、床面積は約13.5m²である。主軸は、N-45°-Eを示す。竈は、住居の東辺、南寄りに付設されている。壁高は、東北壁で17cmを測る。壁の立ち上がりは、平均75°を示す。住居址内の覆土は、基本的に同一層として観察され、遺物の取り上げも一括処理した。黒褐色土層で、ロームブロックと焼土を少量含み、硬質である。竈に關係する土層は、竈被覆土が1層、竈内崩落土が1層、竈床面下層が3層に細別される。その他の土層として、A層は竈隅、灰層。B層は竈床面下層で炭化物を含む黄褐色ブロックである。33層は覆土で黒褐色土層、ロームブロックを少量含み、32層よりも硬質である。34層は覆土で黒褐色土層、ロームブロックと焼土を少量含み、硬質である。36層は覆土で褐色土層、住居址隅の壁崩落土である。住居内のピットはない。出土遺物は、土師器の杯、小甕、須恵器の高台付椀、鉄製の釘、工具。鉄滓。墨書土器 (3) などが検出された。時期は、国分期と考えられる。



第143図 清水田遺跡 83号住居址実測図

第84号住居址

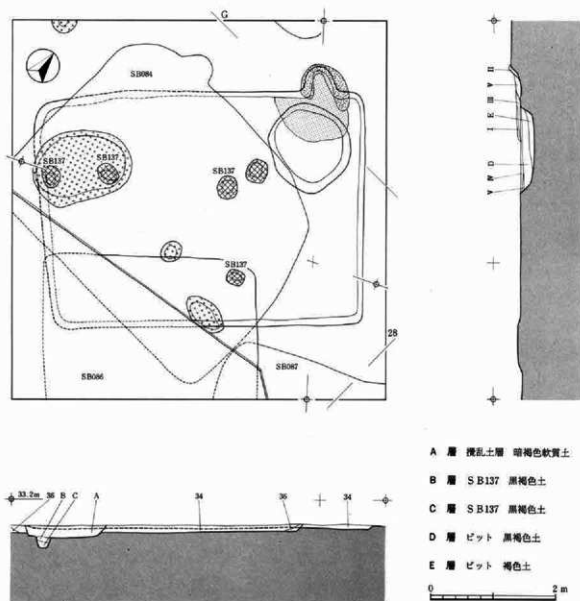
本遺跡の東北側、G-27に位置する。本住居址はSB085→SB084→SB086の順に重複する。平面形は横長長方形を呈し、規模は、長さ4.6m×3.7mを測り、床面積は約17m²である。主軸は、N-3°-Eを示す。竈は、住居の北辺、西寄りに付設されている。壁高は、西壁で12cmを測る。壁の立ち上がりは、平均50°と、ゆるやかである。住居址内の覆土は、基本的に同一層として観察され、遺物の取り上げも一括処理した。黒褐色土層で、ロームブロックと焼土を少量含み、硬質である。竈に関する土層は、竈被覆土層は、確認されず、竈内前落土が1層、竈床面下層が4層に細別される。その他の土層として、34層は覆土で黒褐色土層、ロームブロックと焼土を少量含み、硬質である。36層は覆土で褐色土層、住居址隣の壁前落土である。住居内のピットはない。出土遺物は、検出されない。本住居址の時期は、住居址の重複関係、覆土、施設などから図分期と考えられる。



第144図 清水田遺跡 84号住居址実測図

第85号住居址

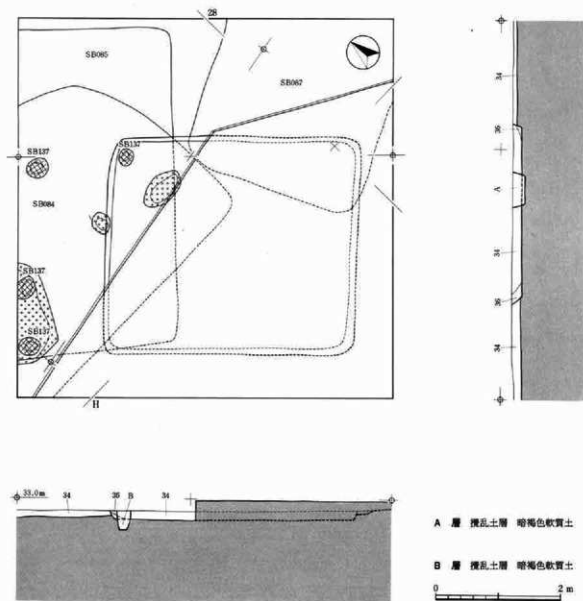
本遺跡の東北側、G-27に位置する。本住居址はSB085→SB084→SB086の順に重複する。平面形は横長長方形を呈し、規模は、長さ5.3m×3.6mを測り、床面積は約19m²である。主軸は、N-42°-Wを示す。竈は、住居の東辺、北寄りに付設されている。壁高は、南西壁で16cmを測る。壁の立ち上がりは、平均70°を示す。住居址内の覆土は、基本的に同一層として観察され、遺物の取り上げも一括処理した。黒褐色土層で、ロームブロックと焼土を少量含み、硬質である。竈に関する土層は、竈被覆土が1層、竈内崩落土が1層、竈床面下層が3層に細別される。その他の土層として、34層は覆土で黒褐色土層、ロームブロックと焼土を少量含み、硬質である。36層は覆土で褐色土層、住居址隅の壁崩落土である。住居内のピットは、1箇所まで深さ約28cmである。出土遺物は検出されない。本住居址の時期は、住居址の重複関係、覆土、施設などから区分期と考えられる。



第145図 清水田遺跡 85号住居址実測図

第86号住居址

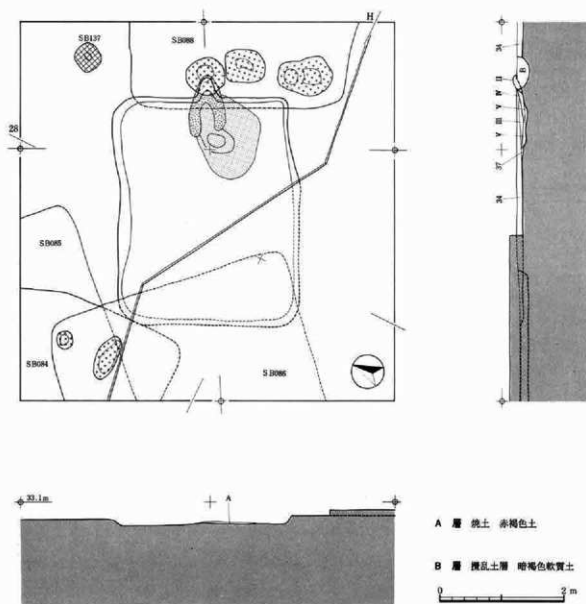
本遺跡の東北側、H-27に位置する。本住居址はSB085→SB084→SB086、SB087→SB086の順に重複する。平面形は長方形を呈し、規模は、長さ4m×3.5mを測り、床面積は約14m²である。主軸は、N-41°-Wを示す。竈の有無は、住居址切り合いのため、確認されていない。壁高は、西壁で16cmを測る。壁の立ち上がりは、平均70°を示す。住居址内の覆土は、基本的に同一層として観察され、遺物の取り上げも一括処理した。黒褐色土層で、ロームブロックと焼土を少量含み、硬質である。その他の土層として、34層は覆土で黒褐色土層、ロームブロックと焼土を少量含み、硬質である。36層は覆土で褐色土層、住居址隅の壁崩落土である。住居内のピットはない。出土遺物は検出されない。本住居址の時期は、住居址の重複関係、覆土などから区分期と考えられる。



第146図 清水田遺跡 86号住居址実測図

第87号住居址

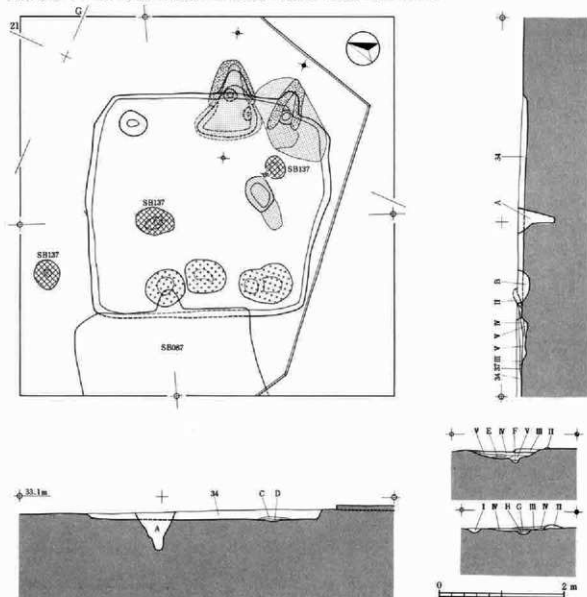
本遺跡の東北側、H-28に位置する。本住居址はSB088→SB087→SB086の順に重複する。平面形は縦長長方形を呈し、規模は、長さ3.6m×3mを測り、床面積は約10.5m²である。主軸は、N-67°Eを示す。竈は、住居の東辺、中央寄りに付設されている。壁高は、南壁で12cmを測る。壁の立ち上がりは、平均55°と、ゆるやかである。住居址内の覆土は、基本的に同一層として観察され、遺物の取り上げも一括処理した。黒褐色土層で、ロームブロックと焼土を少量含み、硬質である。竈に關係する土層は、竈被覆土層は、確認されず、竈内崩落土が1層、竈床面下層が3層に細別される。その他の土層として、34層は覆土で黒褐色土層、ロームブロックと焼土を少量含み、硬質である。37層は覆土で黄褐色土層、ロームブロックである。住居内のピットはない。出土遺物は、検出されない。本住居址の時期は、住居址の重複関係、覆土、施設などから因分期と考えられる。



第147図 清水田遺跡 87号住居址実測図

第88号住居址 (出土遺物 第177図)

本遺跡の東北側、H-24に位置する。本住居址はSB088→SB087の順に重複する。平面形は方形を呈し、規模は、長さ3.9m×3.6mを測り、床面積は約14㎡である。主軸は、N-70°-Eを示す。竈は、住居の東辺、2箇所に付設されている。中央のものは古く、南寄りが新しい。壁高は、東南壁で15cmを測る。壁の立ち上がりは、平均55°と、ゆるやかである。住居址内の覆土は、基本的に同一層として観察され、遺物の取り上げも一括処理した。黒褐色土層で、ロームブロックと焼土を少量含み、硬質である。竈に関係する土層は、竈被覆土層は、確認されず、竈内崩落土が1層、竈床面下層が4層に細別される。その他の土層として、A層はSB137で黒褐色硬質土、B層は擾乱層で暗褐色軟質土、C層は焼土で赤褐色土、D層は焼土で灰層と赤色ブロック。竈床面下層では、E層は赤褐色土、F層は赤褐色土中に赤色ブロック混入、G層は赤褐色土中に灰を多量に含む。H層は褐色土中に炭化物を含む。I層はピットで焼土を少量混入する褐色硬質土である。住居内のピットは、1箇所で深さ約14cmである。時期は、国分期と考えられる。



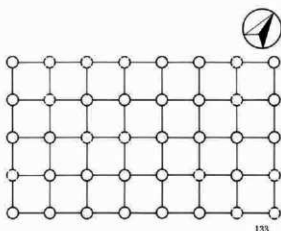
第148図 清水田遺跡 88号住居址実測図

掘立柱建物

第133号掘立柱建物

本遺構は、東北区、C-25に位置する。柱穴の通りと柱間の寸法の規則性から、この柱穴群をS B 133とした。南北4間(8.08m)×東西7間(13.12m)と推定される掘立柱建物である。南北軸はN-31°-Wを測る。柱穴は長方形で60cm×100cm、深さ50cmほどのものと、径50cmで深さ40cmほどのものが多い。

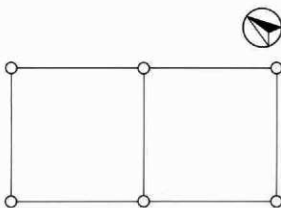
総柱の建物と考えた場合、復元位置に13本の柱が無いことが気にかかる。



133

第134号掘立柱建物

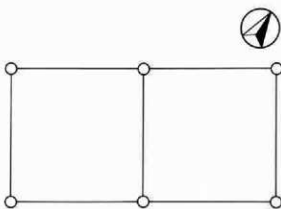
本遺構は、東北区、B-25に位置する。東西1間(2.1m)×南北2間(4.28m)を測る掘立柱建物である。柱穴は径50cm、深さ60cmほどである。南北軸はN-33°-Wを測る。埋土は、黒褐色土を呈し、軟質である。柱痕や抜き取り痕は検出できなかった。北側の柱間は200cm、南側の柱間は228cmと不揃いである。



134

第135号掘立柱建物

本遺構は、東北区、D-25に位置する。東西1間(1.84m)×南北2間(3.84m)の掘立柱建物である。柱穴は円形で径30cmで深さは30cmほどである。南北軸はN-30°-Wである。柱穴埋土は、黒褐色軟質土で、柱痕、柱抜き取り痕跡などの検出はできなかった。柱間の東と西は192cmと規則的である。



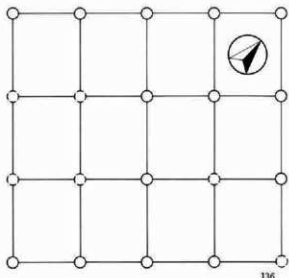
135

第149図 清水田遺跡 掘立柱建物復元図(1)

第136号掘立柱建物

本遺構は、東北区、F-25に位置する。東西2間(8.26m)×南北(7.72m)の総柱建物と推定される。南北軸はN-42°-Wを指す。柱間は東西方向は東側2.66m、中央で2.98m、西側2.62m、南北方向は北から2.12m、2.08m、1.6m、1.92mと不規則である。柱穴の径は楕円で50~60cm、深さは50cmほどである。柱穴埋土は黒褐色軟質土で柱痕、柱抜き取り痕の検出はできなかった。柱列に乗る6ヶ所の柱穴は無い。

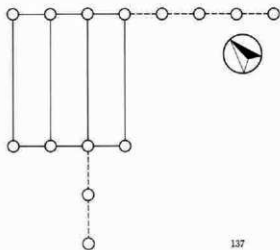
なお、注目されるのは、S B 137の西側柱列と本遺構の東側柱列が1列に乗ることである。



第137号掘立柱建物

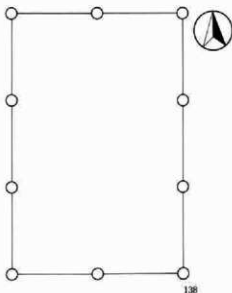
本遺構は、東北区、F-27に位置する。東西3間(6.4m)×南北1間(4.04m)で南北軸はN-44°-Wを測る。東西の柱間は東から1.6m、2.64m、2.16mと不揃いである。柱穴は円形で径50cm、深さ50cmほどである。柱穴埋土は黒褐色軟質土で、柱痕柱抜き取り痕の検出はできなかった。

なお、北側の東西列が東に6.06m、南北列が1列のみ南に2.92m延び、柱穴が東列は4本、南列は2本確認されている。

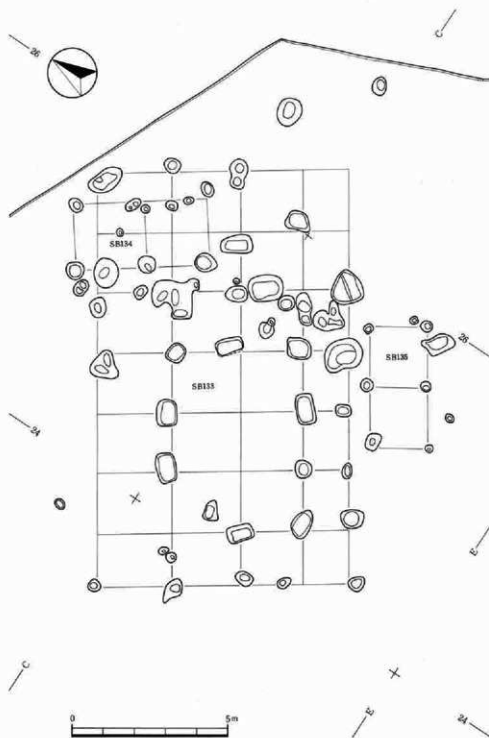


第138号掘立柱建物

本遺構は、東南区、S-24に位置する。東西2間(4.04m)×南北3間(6.46m)を測り、南北主軸の方向はN-3°-Eを測る。柱穴は長方形を呈し、長辺は1m、短辺は80cmを測り、深さは40cmほどである。東西の柱間は西側は2.06m、東側は1.98mを測る。南北の柱間は北側から2.24m、1.86m、2.36mと不揃いである。柱穴埋土の土層は黒褐色軟質土であるが、柱痕や柱抜き取り痕の検出などの作業をやっていない。

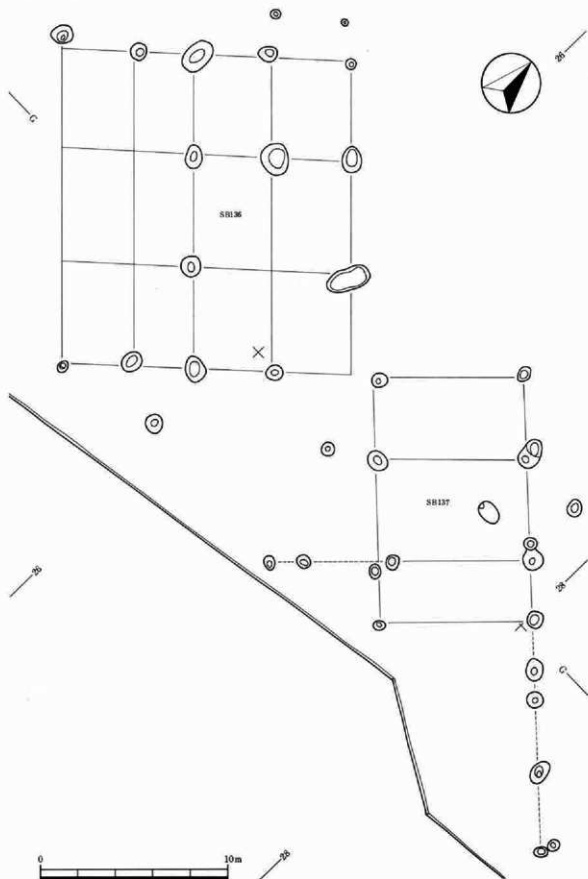


第150図 清水田遺跡 掘立柱建物復元図(2)

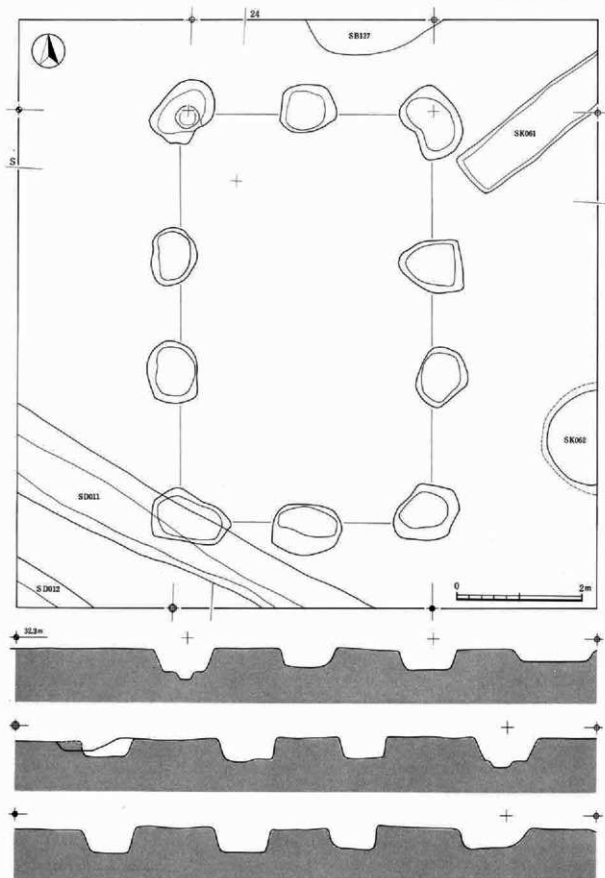


第151図 清水田遺跡 掘立柱建物実測図(1) (SB133・SB134・SB135)

第IV章 清水田遺跡の調査



第152図 清水田遺跡 掘立柱建物実測図(2) (SB136・SB137)

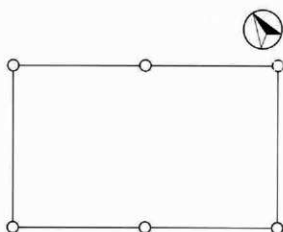


第153図 清水田遺跡 掘立柱建物実測図(3)(SB138)

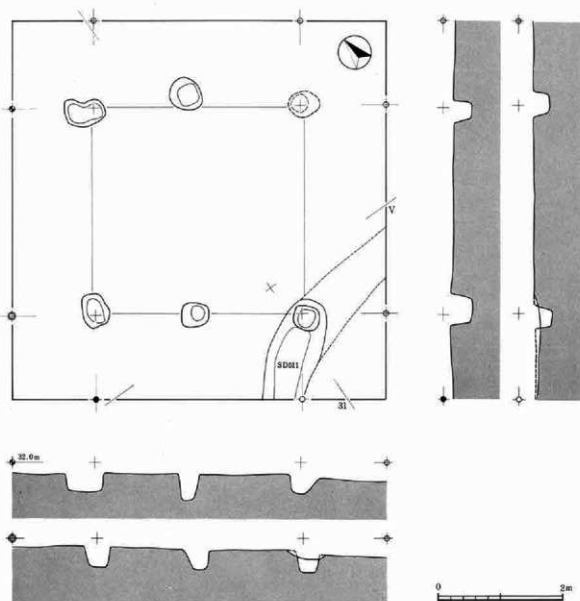
第IV章 清水田遺跡の調査

第139号掘立柱建物

本遺構は、東南区、V-31に位置する。東西2間(3.4m)×南北1間(3.26m)で南北主軸の方向はN-38°-Eを測る。柱穴は、不定形な隅丸方形を呈し、径は50~60cm、深さ40cmを測る。柱穴埋土は黒褐色の軟質土で、柱痕、柱抜き取り痕などは検出できなかった。



第154図 清水田遺跡 掘立柱建物復元図(3)

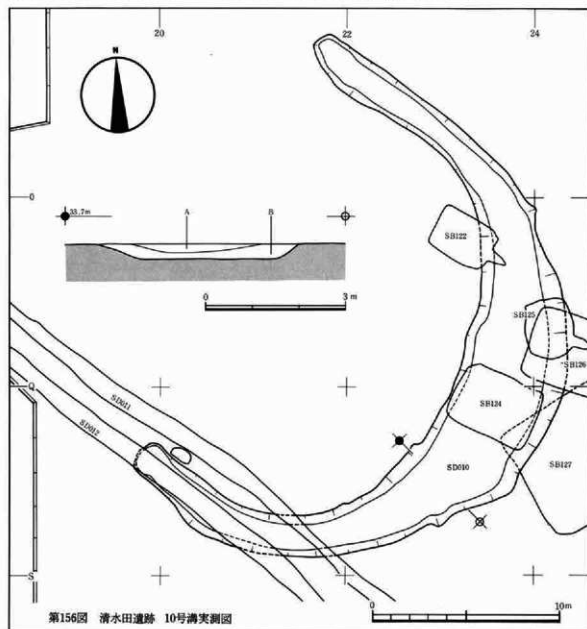


第155図 清水田遺跡 掘立柱建物実測図(4) (SB139)

溝

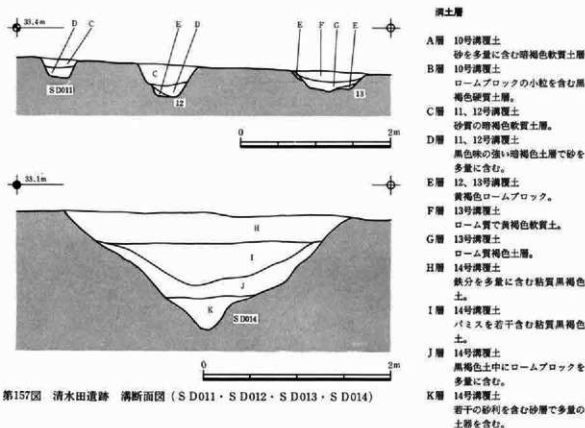
溝はS D001～S D014の合計14本検出された。S D001～S D007は西区、S D008～S D009は東北区、S D010～S D014は東南区に位置する。

まず、同一性格を有すると考えられるS D001～S D009について述べる。走向はS D001、S D002、S D004は北北東の軸に、S D005～S D009は北西方向に軸を持つ。いずれも上幅50～100cm、下幅40～90cm、深さ15cmを測る。溝覆土は軟質で褐色土、ロームブロックを少量含む表土層に近似していることで類似している。これらの溝は、現状の畑地の畝の方向と合致している。発掘区は茂木地区から南東方向に延びる舌状を呈するローム台地の先端に位置することから、畑の「さく」の列が台地の傾斜に合わせて多様に変化している。S D001～S D009は、現在耕作中の畑の周辺に深掘りされた地境に近い溝と考えられる。



S D010はD-22区を中心に北西側が切れた半月形の溝である。本溝の新旧関係はS B127を本溝が切っており、またS B122、S B124～S B126、S D011、S D012、S K016、S K018が本溝を切っている。溝の断面形状は、底面の平坦な逆台形を呈し、検出時の深さは20cmほどで浅い。溝覆土は、A、B 2層に分けられる。A層は暗褐色軟質土層で砂を少量含む。B層は黒褐色硬質土層でロームブロックの小粒を含む。土層は本遺跡の古墳時代の基準土層24層に近似する。平面形を円形とすると、溝の外径は26.2m、溝の内径は21.9mに推定できる。北東及び南西の両端付近の溝幅は2mを測り、南東の溝中央部では5mと広い。溝の形態、及び覆土は、古墳の周溝を想定させるが、遺物などの時期を決定する積極的な資料が不足している。

S D011、S D012、S D013は現在使用している道路の側溝である。S D011とS D012は、1本の道路の両側に掘られた平行する溝である。道路は北から南へ傾斜する台地の縁辺の東西に走る。S D011の溝幅は、上幅70cm、下幅20cm、深さ50cmほどの逆台形を呈する。S D012の溝幅は上幅110cm、下幅20cm、深さ9cmと浅く、逆台形を呈する。溝覆土は、2層に分けられ、C層は暗褐色土、D層は黒色の強い暗褐色土でいずれも砂質である。道路は茂木の集落より沖之郷の集落をつなぐ台地南辺を走る。道路幅は1.5m、溝と溝の間隔は2.5mを測る。S D013は、発掘区南東隅に検出され、S D012と一部分重複している。S D013よりS D012の方が新しい。溝の上幅は130cm、下幅は60cm、深さは25cmほどである。溝覆土は2層に分層され、F層は黄褐色土、G層は褐色土でいずれもローム質土である。台地に接する水田区画の道路に平行して掘削されたものである。S D014は上幅200cm、深さ150cmほどで断面形状は三角形を呈する。土層は4層に分けられ黒褐色土を主体とする。溝は舌状の台地の先端を横断するもので、北側はN-58°-Eで、南側はN-31°-Eと屈曲しながら発掘区内で90mの長さで確認され、南西から北東へ1/100の傾斜で走る。本溝の時期は平安時代と考えられる。



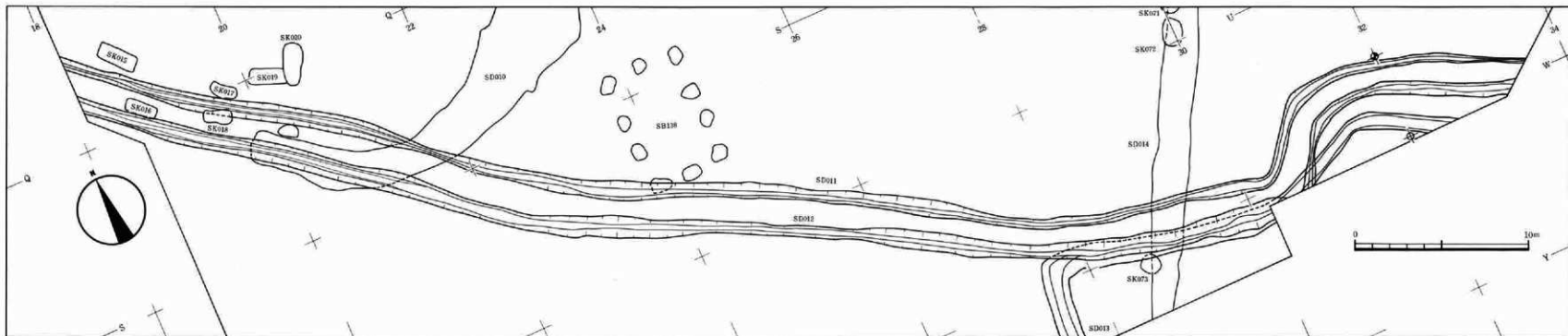
第157図 清水田遺跡 溝断面図 (S D011・S D012・S D013・S D014)



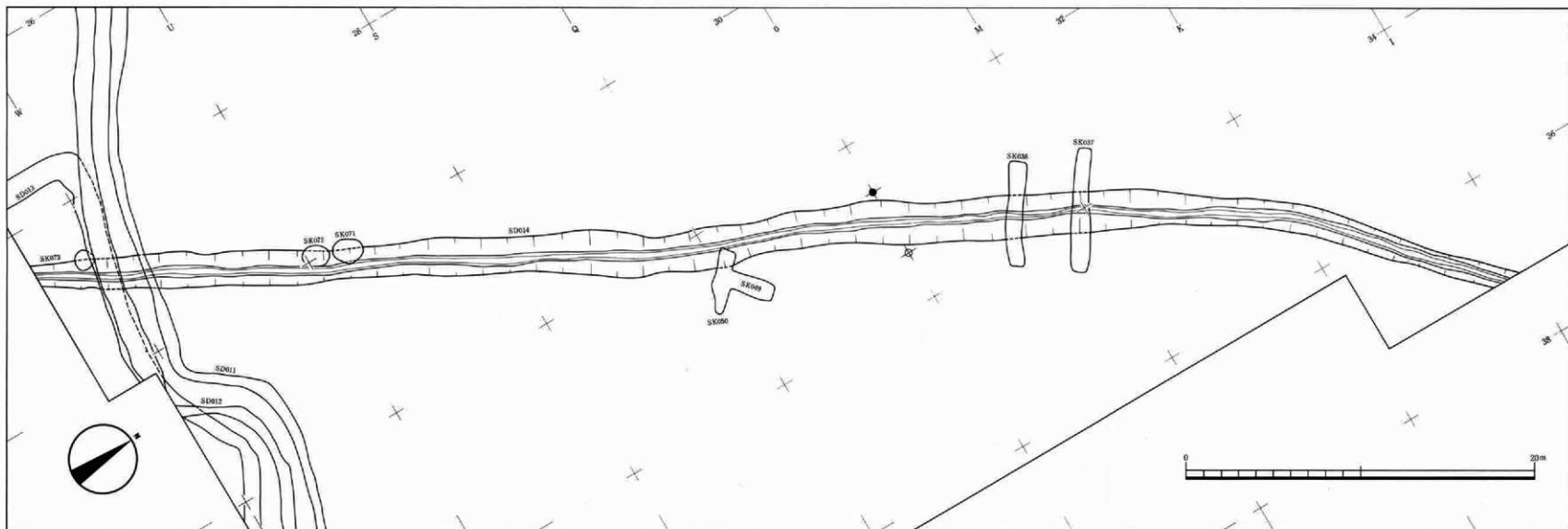
第138図 清水田遺跡 全体図(1) (国分期以前の住居址と土壌)



第159図 清水田遺跡 全体図(2) (掘立柱建物・溝・土境)

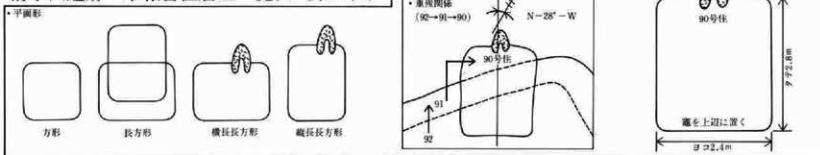


第160図 清水田遺跡 溝平面図 (SD011・SD012)



第161図 清水田遺跡 溝平面図 (SD014)

清水田遺跡 未報告住居址一覧表 (第4表)

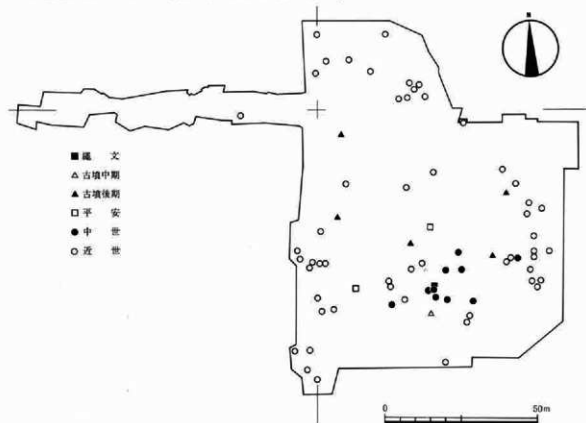


住居番号	位置	重複関係	平面形	規模(m)	主軸の方向	電の有無	時期	出土遺物
089	I-20 91-89-82		方形	4.3×4.0	N-32°-E	無	石田川	土師器
090	I-19 92-91-90		縦長長方形	2.8×2.4	N-28°-W	有	国分	土師器、須恵器
091	J-20 92-91-90	89	方形	8.6×8.4	N-38°-E	無	石田川	土師器
092	J-20 92-91-90	92-91-90 93-94	方形	6.1×6.5	N-42°-E	無	石田川	土師器、磁石、鉄滓
093	J-21 92-91-93-94		横長長方形	3.9×4.9	N-52°-E	有	国分	出土遺物なし。
094	J-21 92-91-93-94		横長長方形	3.3×4.1	N-66°-E	有	国分	土師器、須恵器、墨書土器、鹿記号
095	M-18 96-95		—	—	—	—	鬼高	出土遺物なし。
096	M-19 96-95		方形	6.6×6.2	N-31°-E	無	石田川	土師器
097	O-19 97-98-99		方形	3.6×3.5	N-94°-W	有	鬼高	土師器
098	O-19 97-98-99		方形	3.0×2.7	N-94°-W	有	国分	土師器、須恵器
099	O-19 97-98-99		方形	2.6×2.8	N-14°-E	不明	国分	出土遺物なし。
100	O-21 重複なし。		方形	5.0×4.6	N-25°-W	不明	鬼高	土師器
101	P-21 重複なし。		方形	5.4×5.4	N-34°-W	有	鬼高	土師器、支脚、紡錘車
102	U-20 102-103		方形	6.0×6.6	N-35°-E	無	石田川	出土遺物なし。
103	U-20 102-103		方形	2.4×2.6	N-155°-W	有	国分	土師器、須恵器、墨書土器
104	W-28 102と104は同時期。		方形	5.4×5.0	N-33°-W	無	石田川	土師器
105	W-18 重複なし。		横長長方形	3.1×4.1	N-126°-E	有	国分	土師器、須恵器
106	Y-19 重複なし。		方形	3.4×3.4	N-72°-E	有	国分	須恵器、墨書土器
107	I-26 重複なし。		方形	7.7×7.4	N-42°-E	無	石田川	出土遺物なし。

108	J-26 109-108		縦長長方形	3.0×4.1	N-77°-E	有	国分	土師器、須恵器、墨書土器
109	J-29 112-109	108	縦長長方形	3.6×2.4	N-49°-E	有	国分	土師器
110	J-28 110-110	110	横長長方形	3.4×4.2	N-46°-E	有	国分	土師器、須恵器
111	K-26 重複なし。		横長長方形	3.5×4.6	N-96°-E	有	国分	出土遺物なし。
112	K-28 112-109-110		方形	4.8×4.5	N-27°-E	無	石田川	出土土器なし。土鍾
113	K-30 116-113-114		縦長長方形	4.2×3.4	N-54°-E	有	国分	土師器、須恵器、紡錘車、磁石
114	K-31 116-113-114-115		横長長方形	2.6×3.4	N-43°-E	有	国分	土師器、須恵器
115	K-30 116-114-115		縦長長方形	3.7×2.4	N-55°-E	有	国分	出土遺物なし。
116	K-30 116-114-115	116	方形	7.1×7.0	N-18°-E	無	石田川	出土遺物なし。
117	L-29 117-117	117	横長長方形	2.4×3.3	N-57°-E	有	国分	土師器、須恵器
118	L-28 重複なし。		横長長方形	2.9×3.8	N-61°-E	有	国分	土師器、須恵器、磁石
119	M-23 119-120		方形	5.4×5.6	N-30°-E	無	石田川	土師器
120	M-24 119-120		縦長長方形	4.1×2.6	N-71°-E	有	国分	土師器、須恵器
121	O-22 121-122		方形	6.0×6.3	N-36°-W	無	石田川	土師器
122	O-23 121-122		縦長長方形	3.2×2.4	N-121°-E	有	国分	土師器、須恵器
123	P-22 重複なし。		縦長長方形	3.6×3.5	N-106°-E	有	国分	土師器
124	Q-23 127-124		長方形	3.6×4.6	N-28°-E	不明	国分	土師器、須恵器
125	P-24 127-125		横長長方形	2.5×3.1	N-87°-E	有	国分	出土遺物なし。
126	P-24 127-126-125		方形	4.2×3.4	N-112°-E	有	国分	墨書土器
127	R-24 127-126-124		方形	6.6×7.8	N-26°-W	無	石田川	出土遺物なし。
128	R-27 重複なし。		方形	4.8×4.6	N-43°-E	無	石田川	出土遺物なし。
129	Q-28 重複なし。		方形	5.0×4.7	N-15°-W	無	石田川	出土遺物なし。
130	S-26 重複なし。		方形	6.4×7.0	N-44°-W	無	石田川	出土遺物なし。
131	R-29 重複なし。		横長長方形	2.5×4.0	N-134°-E	有	国分	土師器
132	H-23 重複なし。		縦長長方形	4.2×2.8	N-57°-E	有	国分	須恵器、墨書土器、鉄製工具

土 壤

土壌状遺構は発掘区全面から出土している。これらの遺構は遺物を伴わず、覆土の特徴からその時期を決定した。西区に分布する円形、楕円形の土壌類は黄褐色軟質土で黄色ロームブロックを多量に含むもので、現在の耕作に関係するものと考えられ、攪乱土壌として一括除外した。東北区のS B134～S B137の掘立柱建物周辺には、黒褐色軟質土で、建物の柱穴と同色、同質の覆土を持つ土壌群が検出された。これらのうちの関連性を検討した結果が5棟の掘立柱建物となったのである。組み立てることのできなかった大量の土壌群を充分検討できなかったことを残念に思う。土壌として攪乱土壌や東北区の土壌群から分離したものが73基を数えた。土壌の時期は縄文1基、古墳時代和泉期1基、古墳時代鬼高期5基、国分基2基、中世10基、近世10基に分類される。近世以降が全体の74%と圧倒的な率を占める。形態別に分類すると、長方形が39基、楕円形が14基、円形が13基、方形が3基、その他不定形なものが4基を数えた。近世と考えた時期の長方形土壌が全体の53%を占める。土壌の性格については不明な点が多かった。明治時代の地籍図等の地割りや、古老達の教示によって得られた情報の分析からは、比較的耕作に関係する近、現代の遺構が多数を占めることが推測されたが、それらの地割りがどの時代まで遡ることが可能なか知るすべを持たなかった。長方形土壌は、検出された73基の土壌中39基と過半数を占め、時期も近世以降に集中する。掘り方の平面形は直線的で、長辺、短辺も直角で壁も垂直に、床面も平滑に仕上げている。覆土もロームブロック混入の割合が多く、多孔質で比較的短時間に使用、埋没が行なわれたことが推測される。規模は、幅75cm～125cm、長さ1.6m～4mの範囲にほとんどの土壌が集中する。これらの土壌のほとんどが現在の地割りに沿って並行して長軸方向に並んでいる。さて、これらの長方形土壌の性格であるが、この周辺は現況では桑畑となっている。県内では里芋類の貯蔵庫として同一の形態、掘り方をする例が多く、かつてある時期に、本遺跡でこれらの作物が作られていたと考えてもよいのではなかろうか。



第162図 清水田遺跡 土壌分布図

第四章 清水田遺跡の調査

清水田遺跡 土壌一覧表 (第5表)

No	位 置	平面形	方 位	規 模 (長さ×幅×深さ) cm			時 期	備 考
SK 001	G-14	長 方 形	N-44°-E	540	100	25	近 世	
002	A-20	円 形	—	50	20	42	〃	
003	A-24	長 方 形	N-63.5°-E	370	100	42	〃	
004	C-20	不 定 形	N-26.5°-W	130	40	50	〃	
005	C-22	〃	N-59.5°-W	230	140	50	〃	
006	E-20	方 形	N-36.5°-W	130	128	19	〃	
007	E-24	楕 円 形	—	230	120	54	〃	
008	E-26	長 方 形	N-57°-W	325	115	38	〃	
009	E-26	不 定 形	N-14.5°-E	145	60	13	〃	
010	E-26	円 形	—	121	120	15	〃	
011	G-26	長 方 形	N-61.5°-E	250	110	60	〃	
012	G-26	〃	N-32°-E	220	120	11	〃	
013	G-26	〃	N-37°-E	280	80	14	〃	
014	O-20	〃	N-42°-E	650	60	30	〃	
015	P-19	〃	N-42.5°-W	230	95	65	〃	
016	Q-19	〃	N-46°-W	180	80	22	〃	
017	Q-20	〃	N-54°-W	160	75	11	〃	
018	Q-20	〃	N-69.5°-W	170	80	21	〃	
019	Q-20	〃	N-67°-W	250	93	14	〃	
020	Q-20	〃	N-30.5°-S	245	110	25	〃	
021	S-20	〃	N-28.5°-E	220	80	20	〃	
022	T-20	円 形	—	230	215	17	〃	井 戸
023	T-22	〃	—	215	211	19	〃	井 戸
024	W-18	長 方 形	N-35.5°-E	225	120	12	〃	
025	W-20	〃	N-29.5°-E	220	125	8	〃	
026	X-20	方 形	N-33.5°-E	70	65	26	〃	
027	Y-20	〃	N-35°-E	60	59	28	〃	
028	G-30	楕 円 形	N-39°-W	80	60	60	〃	井 戸
029	I-22	不 定 形	—	130	100	12	古墳後期	
030	K-28	長 方 形	N-36°-W	250	100	8	近 世	
031	K-32	〃	N-46.5°-E	350	110	22	〃	
032	K-22	〃	N-62.5°-E	320	100	14	〃	
033	L-22	円 形	—	80	80	13	古墳後期	
034	M-26	長 方 形	N-30.5°-W	240	110	4	近 世	
035	K-32	〃	N-37.5°-W	400	100	15	〃	
036	M-32	円 形	—	150	90	50	古墳後期	

No	位 置	平面形	方 位	規 模 (長さ×幅×深さ) cm			時 期	備 考
037	M-34	長方形	N-56.5'-W	720	100	25	近 世	
038	L-32	〃	N- 56 '-W	600	100	18	〃	
039	N-34	円 形	—	300	100	12	〃	
040	O-28	〃	—	220	100	20	平 安	
041	P-26	長方形	N- 34 '-W	90	20	19	古墳後期	
042	O-30	円 形	—	130	20	13	中 世	
043	O-32	〃	—	80	60	67	古墳後期	
044	O-34	長方形	—	250	80	15	近 世	
045	P-34	〃	N- 46 '-E	250	110	20	〃	
046	P-34	〃	N-43.5'-E	250	80	13	〃	
047	P-34	〃	N- 43 '-E	280	90	2	〃	
048	Q-27	〃	N- 49 '-E	170	100	10	〃	
049	Q-32	〃	N- 49 '-E	250	110	16	〃	
050	Q-32	〃	N- 52 '-W	400	100	25	〃	
051	Q-34	楕円形	—	150	20	27	中 世	
052	Q-26	長方形	N-42.5'-E	350	100	7	近 世	
053	Q-28	楕円形	—	150	20	19	中 世	
054	Q-34	〃	—	170	10	18	〃	
055	Q-34	長方形	N-46.5'-W	280	90	17	近 世	
056	R-34	〃	N- 32 '-E	350	100	15	〃	
057	R-34	〃	N- 52 '-W	270	100	14	〃	
058	R-34	〃	N-46.5'-W	300	110	16	〃	
059	S-22	楕円形	—	110	80	10	平 安	井 戸
060	K-25	長方形	N- 50 '-W	250	100	14	近 世	
061	R-25	〃	N- 50 '-W	480	80	18	〃	
062	T-25	楕円形	—	140	50	47	中 世	袋 状
063	T-26	長方形	N- 29 '-E	350	120	10	近 世	
064	S-28	楕円形	—	80	40	40	縄 文	袋 状
065	S-28	円 形	—	100	110	15	中 世	
066	S-28	楕円形	—	150	110	12	〃	
067	S-28	〃	—	170	120	18	〃	
068	S-28	〃	—	170	140	36	〃	袋 状
069	S-30	〃	—	150	170	12	〃	
070	T-28	円 形	—	70	70	19	古墳中期	
071	T-30	楕円形	—	180	140	140	近 世	井 戸
072	V-30	〃	—	160	120	142	〃	井 戸
073	W-28	円 形	—	110	110	7	〃	井 戸

3 遺 物

概要

本遺跡の総発掘調査面積は約8500㎡である。

住居址は古墳時代から平安時代にかけて132軒、検出された。

石田川期は26軒、鬼高期は8軒、国分期98軒で国分期が全体の74%を占める。その他国分期に属する掘立柱建物が7棟出土している。

溝は、14条検出された。S D001～S D009は耕作関連の溝、S D010は古墳の周溝、S D011、012、013は近世以降の道路両端の溝、S D014は国分期の溝で舌状の台地を横切っている。

土壌は73基検出され、縄文時代1基、古墳時代6基、平安時代2基、中世10基、近世以降54基で近世以降が全体の74%を占める。

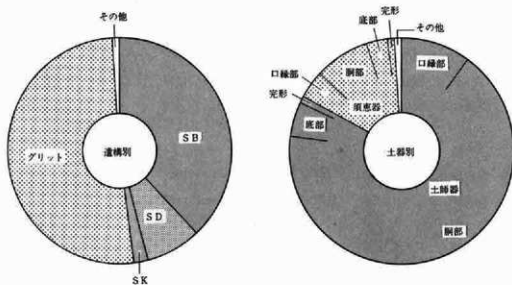
出土土器の総点数は32142点であった。

出土土器の遺構別の分類をすると、住居址出土12,352点、溝出土2,641点、土壇出土595点、発掘区出土16,411点、その他表採品143点であった。住居址出土点数が全体の38%を占めている。また、発掘区のグリット別取り上げ点数が51%と高率であるが、発掘調査の疎漏から一括処理の作業が多いことを物語り、調査担当者として反省している。

本遺跡出土の土器実測図は907点、今回報告書に所収したものは464点（S B001～S B088）、次回送り分125点（S B089～S B132）である。また土器以外の出土遺物は、砥石、土製支脚、土鍾、紡錘車、埴輪、石製模造品、石帯、鉄製品である。

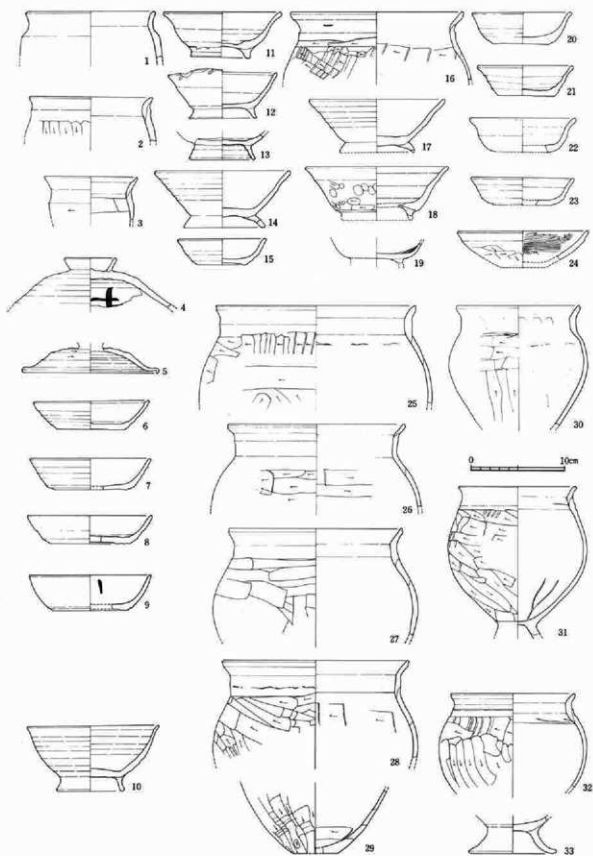
石田川期の土器は、その時期を決めるS字状口縁付壺は中段階以降に位置づけられる。鬼高期の土器の特徴的な須恵器模倣杯は新段階である。国分期は「コ」の字状口縁の甕形土器を伴うものから、いわゆる「羽釜」の多用までその継続時期は長い。

また、「土師質土器」と呼ばれる杯、碗の一群が存在する。「ロクロ成形、酸化焙焼成」の土器で、ここでは「土師器」に分類してある。資料の蓄積が東毛地方における国分期の編年を急がせている。



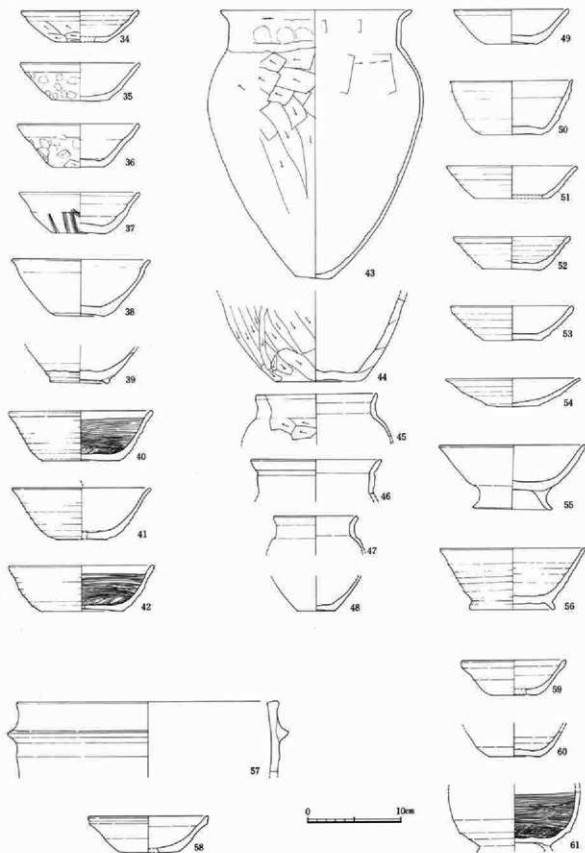
総数 32,142点

第163図 清水田遺跡 出土土器の分類



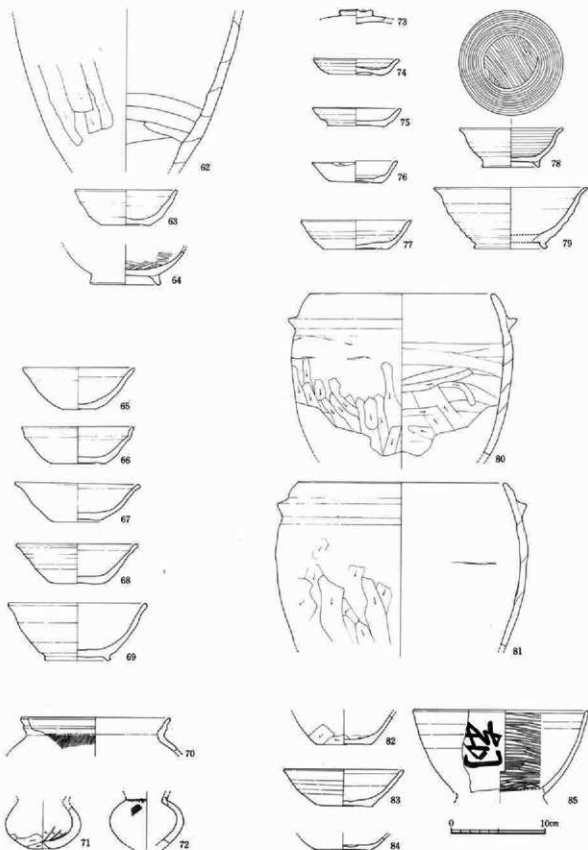
第164图 清水田遺跡 土器実測图(1)

第IV章 清水田遺跡の調査



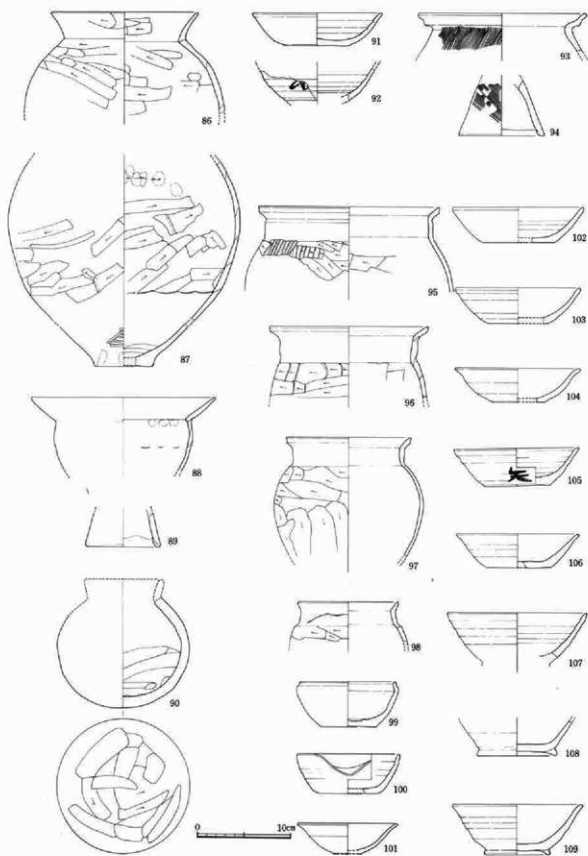
第165図 清水田遺跡 土器実測図(2)

3 遺 物



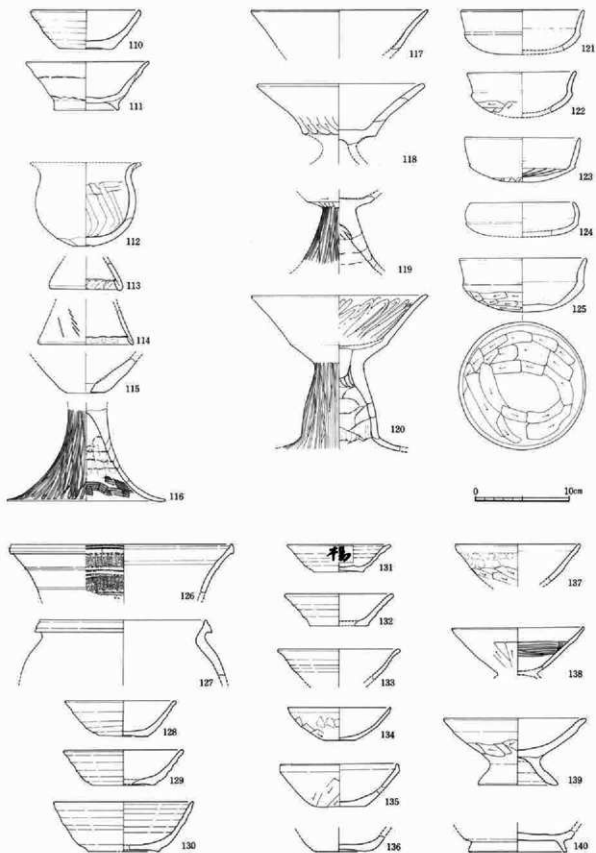
第166図 清水田遺跡 土器実測図(3)

第IV章 清水田遺跡の調査



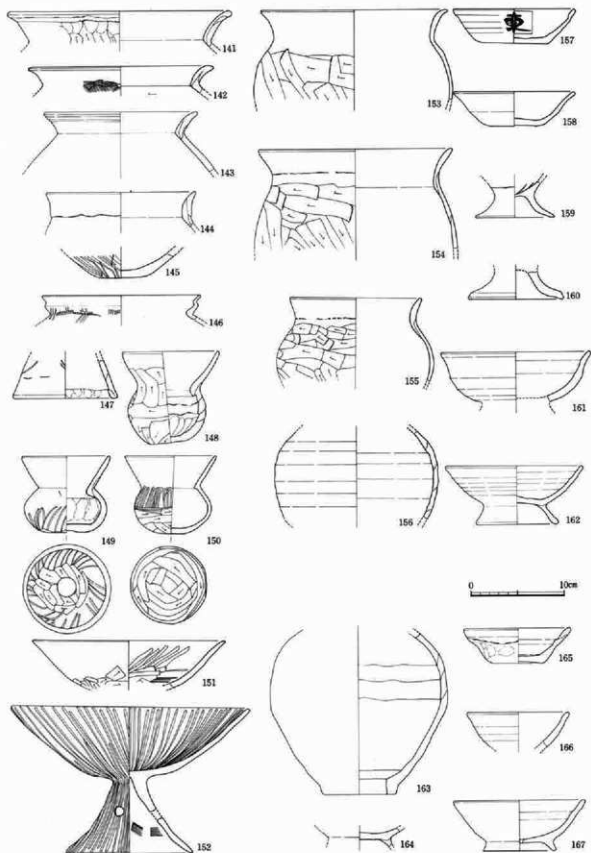
第167図 清水田遺跡 土器実測図(4)

3 遺 物



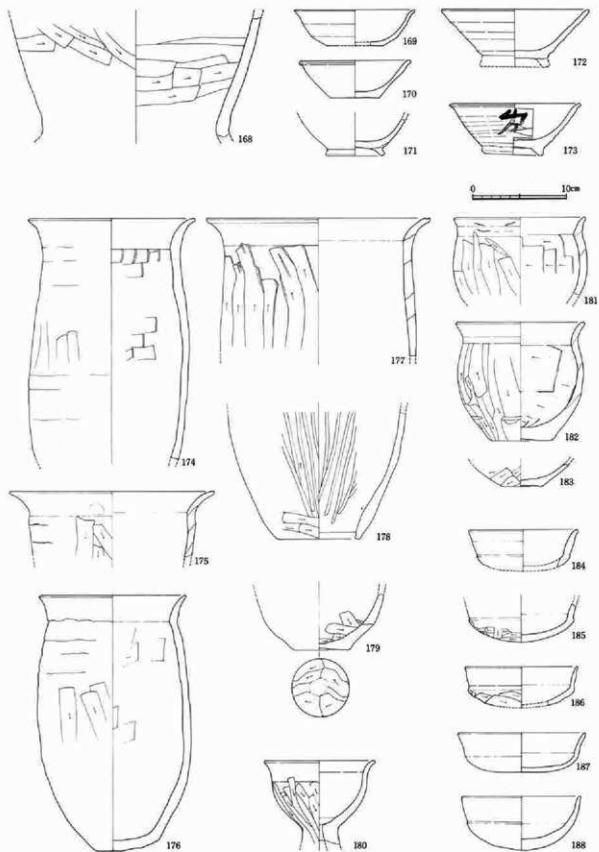
第168图 清水田遺跡 土器実測图 (5)

第IV章 清水田遺跡の調査



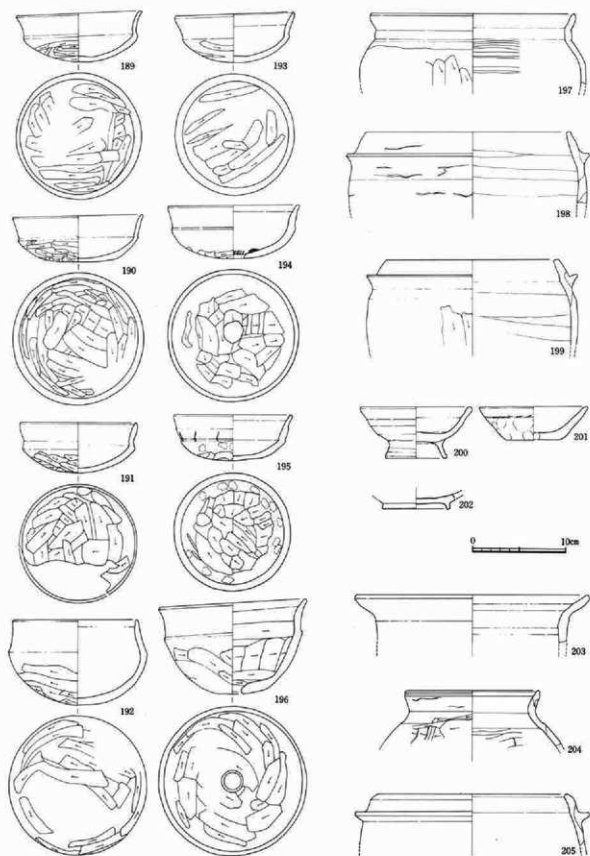
第169図 清水田遺跡 土器実測図(6)

3 遺 物



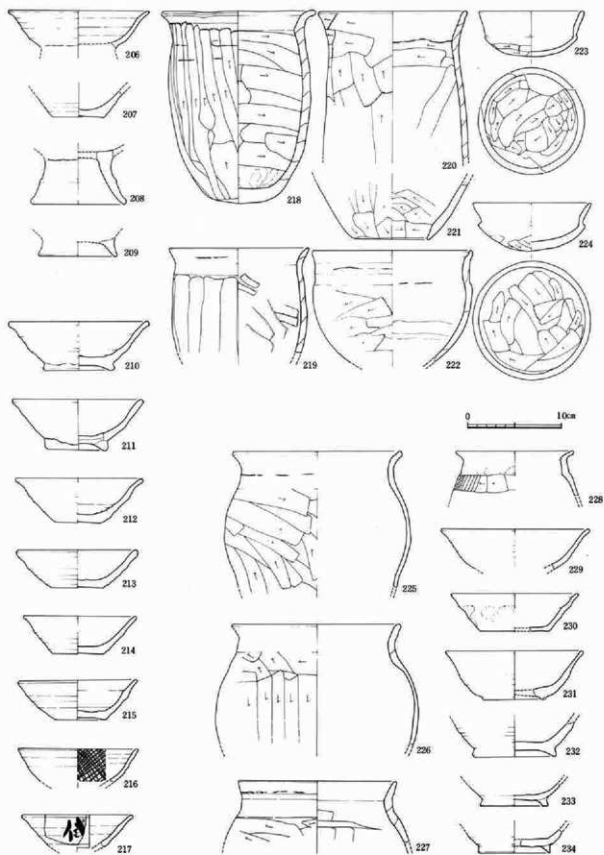
第170图 清水田遺跡 土器実測图 (7)

第IV章 清水田遺跡の調査



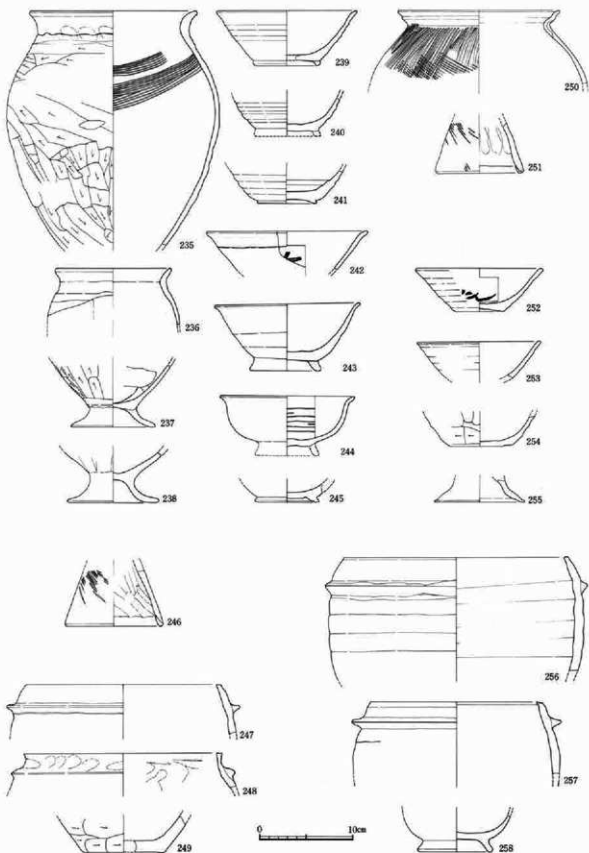
第171図 清水田遺跡 土器実測図(8)

3 遺 物

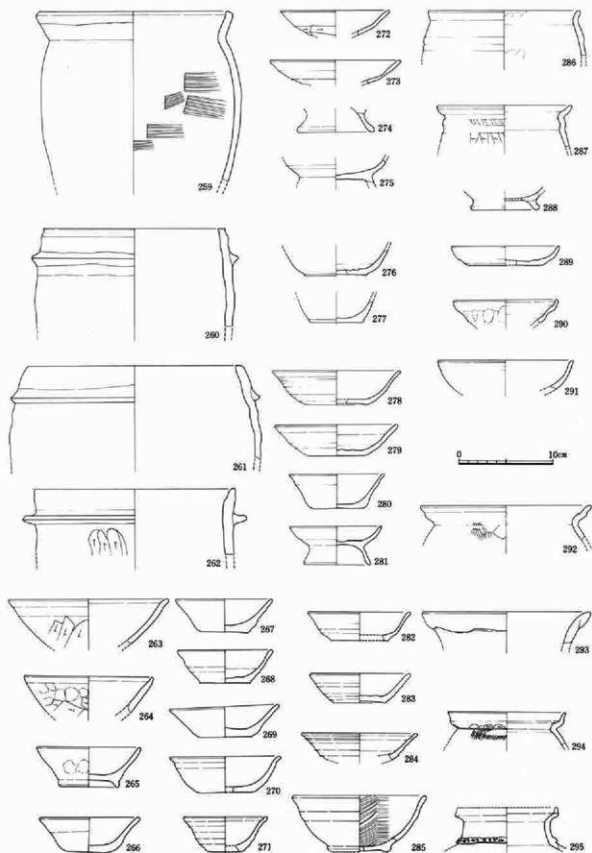


第172図 清水田遺跡 土器実測図(9)

第IV章 清水田遺跡の調査

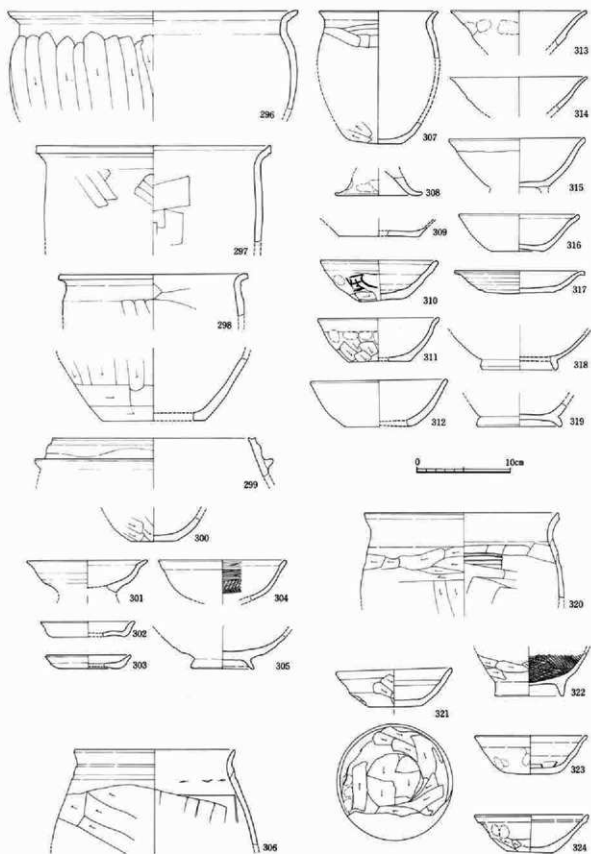


第173図 清水田遺跡 土器実測図 (10)

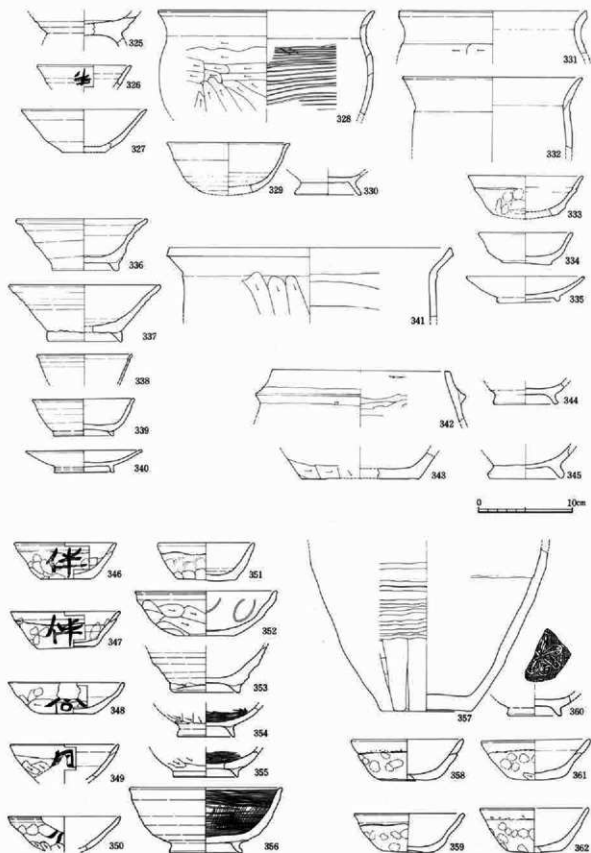


第174図 清水田遺跡 土器実測図(11)

第IV章 清水田遺跡の調査

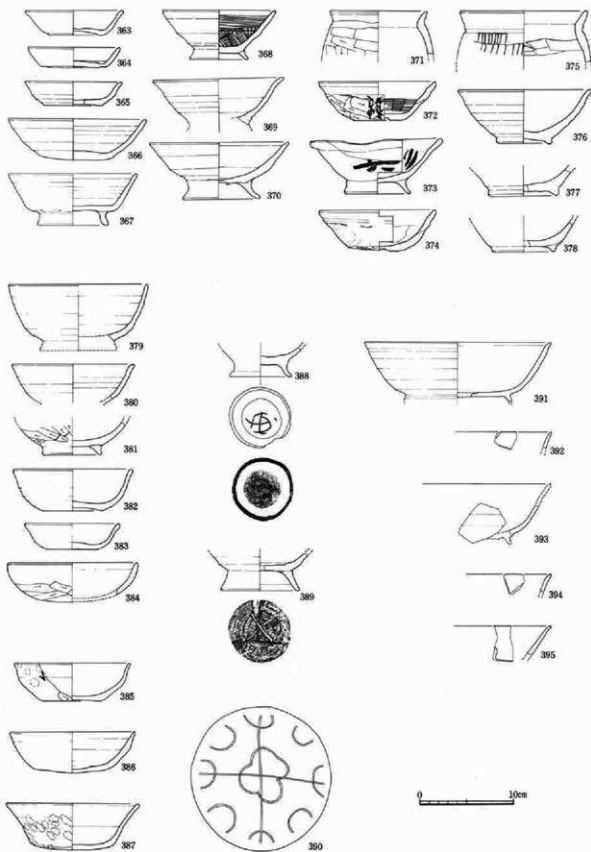


第175図 清水田遺跡 土器実測図(12)

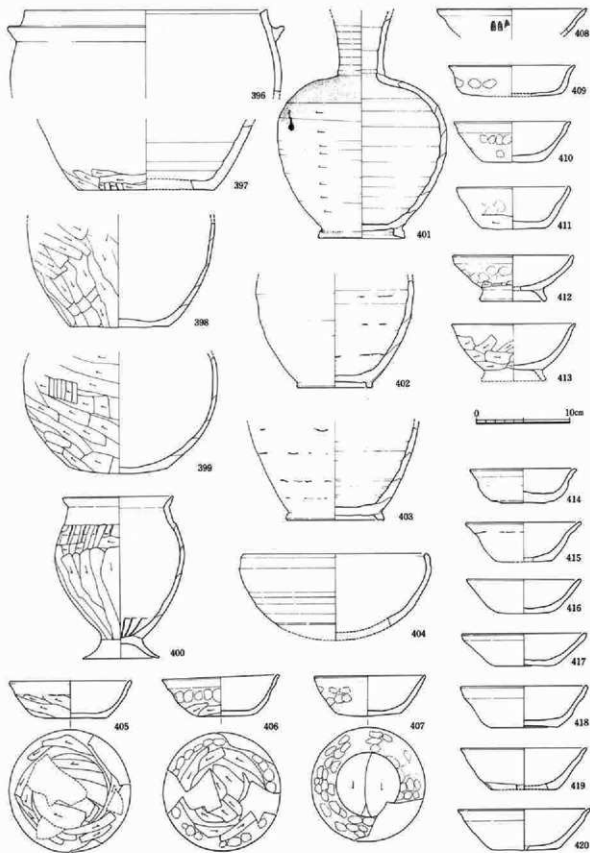


第176図 清水田遺跡 土器実測図(13)

第IV章 清水田遺跡の調査

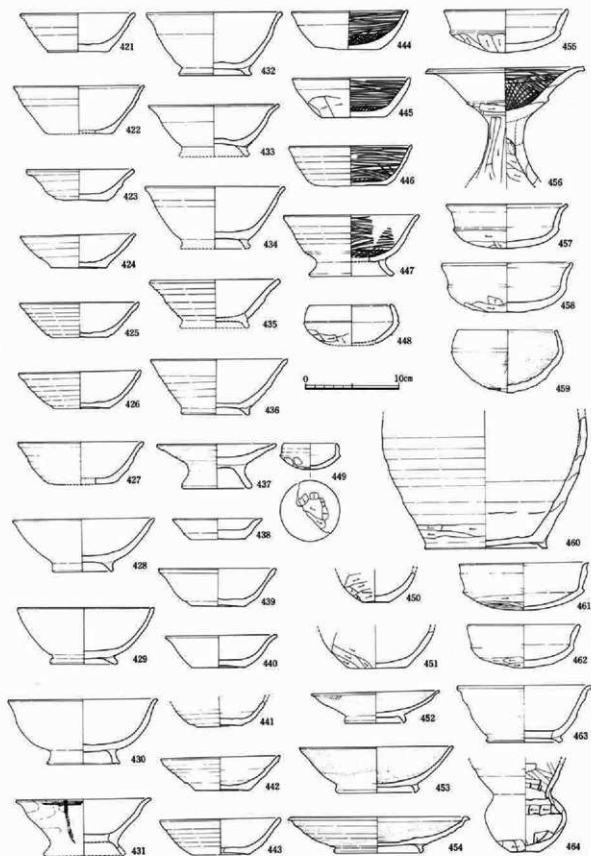


第177図 清水田遺跡 土器実測図 (14)

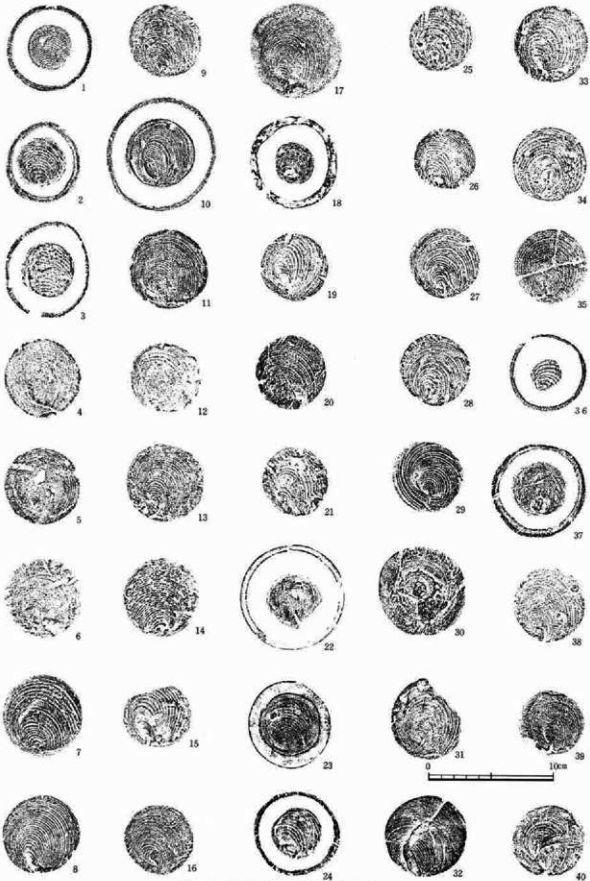


第178図 清水田遺跡 土器実測図(15)

第IV章 清水田遺跡の調査



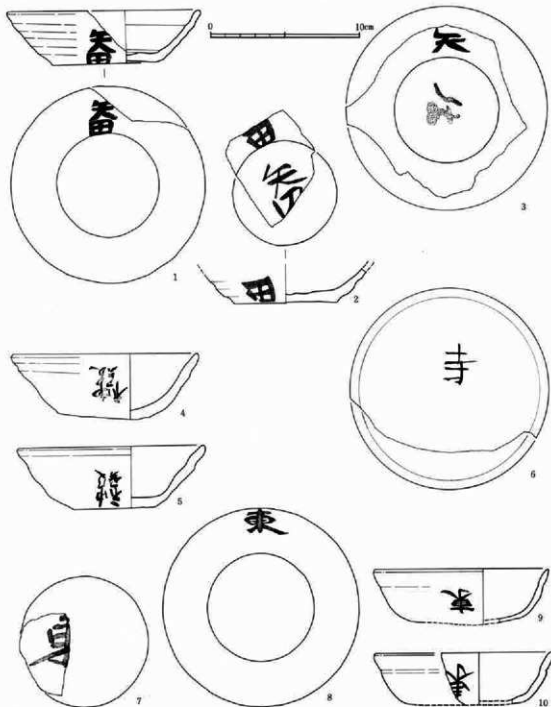
第179図 清水田遺跡 土器実測図(16)



第180図 清水田遺跡 土器底部の拓本

墨書土器釈文

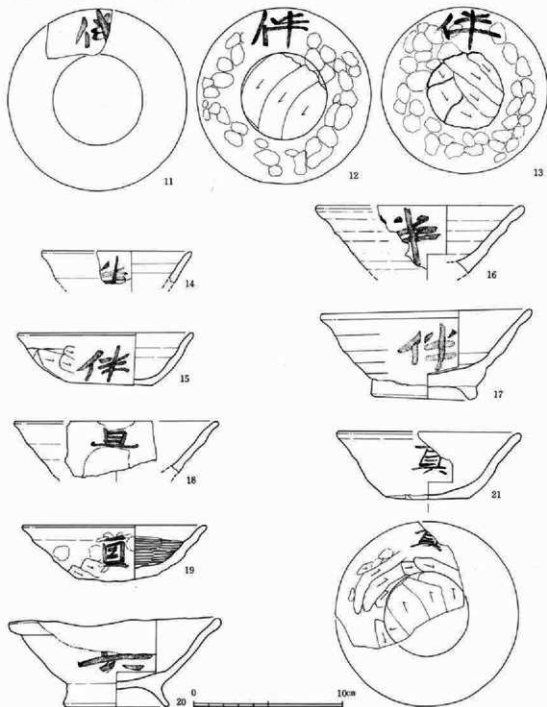
1 S B 106	杯	須恵器	矢田	体部外面	6 S B 103	椀	土師器	寺	底部内面
2 S B 126	杯	須恵器	矢	□ 底部外面	7 S B 068	杯	須恵器	□	底部外面
3 S B 021	杯	須恵器	矢	田 体部外面	8 S B 031	杯	須恵器	東	体部外面
4 S B 083	杯	土師器	神殿	□ 底部外面	9 C-27	杯	土師器	東	体部外面
5 S B 083	杯	土師器	神殿	田 体部外面	10 E-28	杯	土師器	□	体部外面



第181図 清水田遺跡 墨書土器実測図(1)

- 11 S B040 杯 須恵器 □ 体部外面 (伴 a)
 12 S B079 杯 土師器 伴 体部外面
 13 S B079 杯 土師器 伴 体部外面
 14 S B072 杯 須恵器 □ 体部外面 (伴 a)
 15 I-20 杯 土師器 伴 体部外面 (伴 a)
 16 G-28 杯 須恵器 □ 体部外面

- 17 F-11 杯 須恵器 伴 体部外面 [真 a]
 18 I-20 杯 須恵器 □ 体部外面 [真 a]
 19 E-28 杯 土師器 □ 体部外面 [真 a]
 20 S B083 杯 土師器 □ 体部外面 [真 a]
 21 E-28 杯 土師器 □ 体部外面



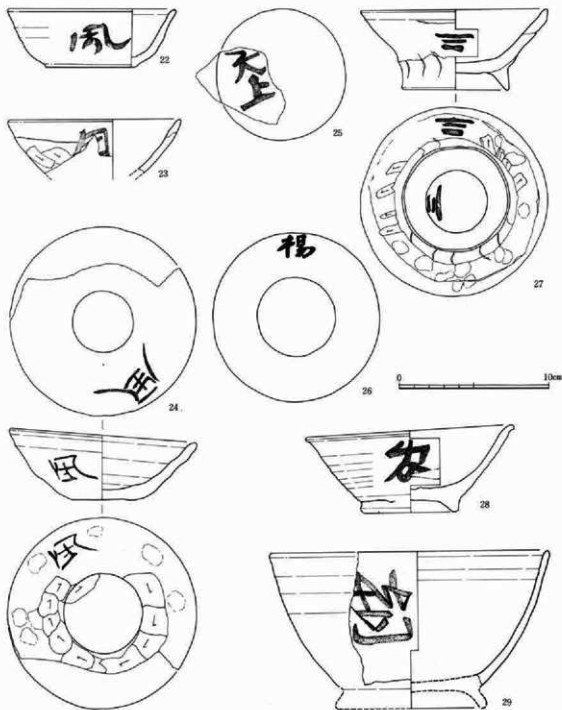
第182図 清水田遺跡 墨書土器実図(2)

第IV章 清水田遺跡の調査

- 22 A-19 杯 須恵器 □ 体部外面
 23 S B 079 杯 土師器 □ 体部外面
 24 S B 068 杯 土師器 □ 体部外面
 □ 体部内面
 [大a]
 25 S B 124 杯 土師器 □上 底部内面

[備考]

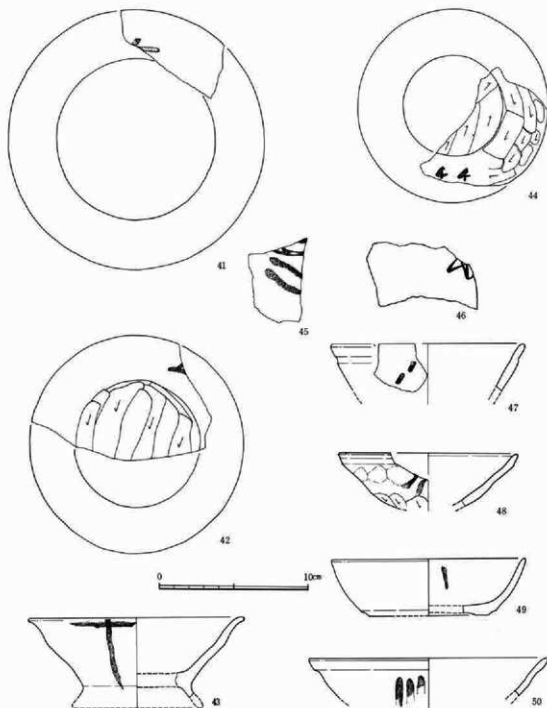
- 26 S B 026 杯 須恵器 □ 体部外面
 27 F-17 杯 土師器 三 体部外面
 三 底部外面
 28 S B 033 杯 須恵器 □ 体部外面
 29 S B 015 椀 須恵器 □ 体部外面



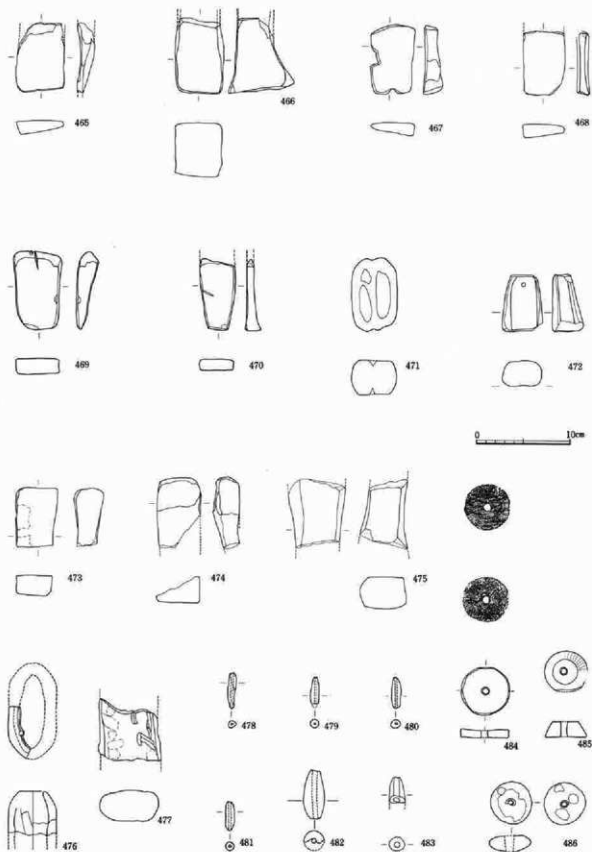
第183図 清水田遺跡 墨書土器実測図(3)

第IV章 清水田遺跡の調査

- | | | | | | | | |
|-----------|-------|---|------|-----------|-------|---|------|
| 41 S B044 | 杯 土師器 | □ | 体部外面 | 45 S B017 | 杯 須恵器 | □ | 体部外面 |
| 42 S B124 | 杯 土師器 | □ | 体部外面 | ~S B019 | | | |
| 43 S D014 | 杯 土師器 | □ | 体部外面 | 47 S B108 | 杯 須恵器 | □ | 体部外面 |
| 44 D-24 | 杯 土師器 | □ | 体部外面 | 48 S B079 | 杯 土師器 | □ | 体部外面 |
| 45 S B132 | 杯 須恵器 | □ | 底部外面 | 49 S B001 | 杯 須恵器 | □ | 体部内面 |
| | | | | ~S B003 | | | |
| | | | | 50 S D014 | 杯 土師器 | □ | 体部外面 |

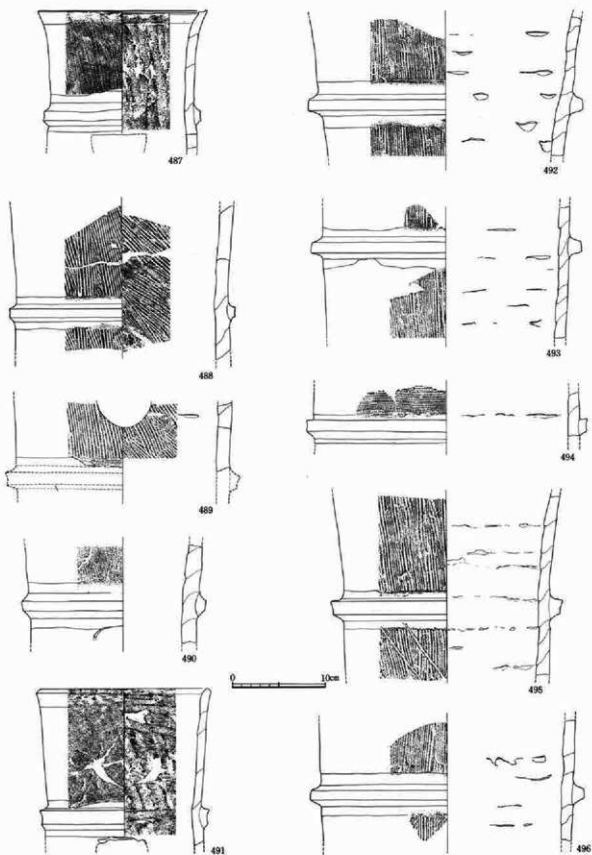


第185図 清水田遺跡 黒書土器実測図(5)

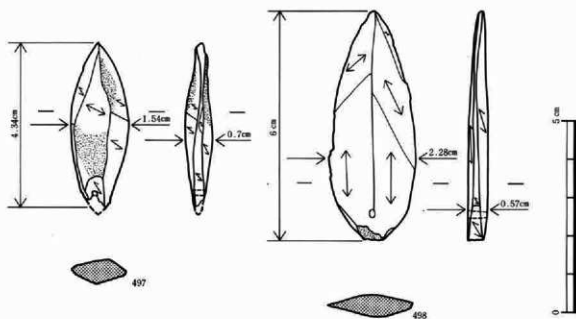


第186图 清水田遺跡 遺物実測図(1) (砥石・土製支脚・土唾・粉篩車)

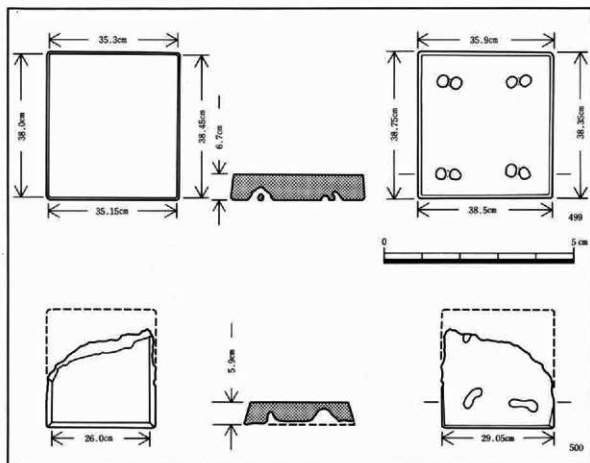
第IV章 清水田遺跡の調査



第187図 清水田遺跡 遺物実測図(2)(埴輪)

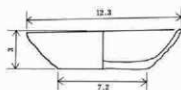


第188図 清水田遺跡 遺物実測図(3) (石製模造品)



第189図 清水田遺跡 遺物実測図(4) (石帯)

遺物観察表



法 量(cm)	
口 径	12.3
器 高	3.0
底 径	7.2

単位復元の場合は()を付けた

清水田遺跡 遺物観察表 (第6表)

遺物番号	器 形	法 量(cm)	器 形 の 特 徴	成・製形の特徴	胎 土	色 調・焼 成	備 考
001 S B001 ~003	壺	(13.8) — —	口縁部は外反し頸部と肩部の境に稜をもつ。口縁部~肩部へ残存。	口縁部横ナデ。内外面横寛ナデ。	1mmの砂粒を含む。	にぶい褐色。	
002 S B001 ~003	壺	(13.2) — —	口縁部下平は直立し上半で外反し口唇部は尖る。口縁部~肩部へ残存。	口縁部横ナデ。外面肩部横寛削り内面肩部横寛ナデ	1mmの砂粒を含む。	褐色。良好。	
003 S B001 ~003	壺	(10.0) — —	口縁部は「く」の字状に外反し肩部に稜をもつ小型壺である。	口縁部横ナデ。外面肩部横寛削り内面肩部横寛ナデ	1mmの砂粒を含む。	にぶい褐色。	外面スス付着。
004 S B001 ~003	蓋	(16.9) — —	つまみは外反し天井部はふくらみもちながら体部に続く。つまみ~体部へ残存。	回転ロクロ成形。天井部横寛削り。内外面ナデ。	1~2mmの砂粒・5mmの石を含む。	灰白色。良好。	墨書有り。須恵器。
005 S B001 ~003	蓋	14.6 (2.7) —	ふくらみをもつ天井部から体部に続く口縁部でかえりをもつ。つまみ欠損。	回転ロクロ成形。外面天井部横寛削り。内外面ナデ。	3~4mmの石を少量含む。	灰白色。良好。	須恵器。
006 S B001 ~003	杯	12.3 3.0 7.2	平な底部から体部はゆるやかに内湾して口唇部で外反する。ロクロ痕が強い。	右回転ロクロ成形。回転糸切り。内外面回転によるナデ	1~3mmの砂粒を多量に含む。	灰色。良好。	須恵器。
007 S B001 ~003	杯	(13.0) 3.4 (7.6)	平な底部から体部はゆるやかに外反して口縁部に至るロクロ痕が強い。	右回転ロクロ成形。回転糸切り。内外面回転によるナデ	1mmの砂粒を多量に含む。	灰色。良好。	須恵器。
008 S B001 ~003	杯	13.4 3.0 (4.4)	平な底部から体部はゆるやかに内湾して口縁部に至る。へ残存。	右回転ロクロ成形。回転糸切り。内外面回転によるナデ	7mmの石を1個含む。	灰白色。良好。	須恵器。
009 S B001 ~003	杯	13.0 3.7 (8.0)	平な底部から体部は内湾し口唇部に至る。へ残存。	回転ロクロ成形。回転糸切り。内外面回転によるナデ	1mmの砂粒を含む。	灰黄色。	墨書有り。内面スス付着。須恵器。
010 S B003	杯	14.2 7.0 6.6	平な底部から体部は内湾し口唇部で外反する。高台は階段状が良い。ほぼ完形。	右回転ロクロ成形。回転糸切り。内外面回転によるナデ	1~2mmの砂粒を含む。	灰白色。良好。	底部拓本有り1。須恵器。
011 S B004	杯	12.6 5.8 (5.4)	平な底部から体部は内湾し口唇部で外反する。高台は厚く端部が平である。	右回転ロクロ成形。回転糸切り。内外面回転によるナデ	2mmの砂粒を含みザラザラ。	洗黄褐色。	底部拓本有り2。須恵器。
012 S B004	杯	11.7 5.0 6.0	平な底部から体部は直線的に口縁部に至る。口唇部に歪み有り。高台は薄い。	回転ロクロ成形。回転糸切り。内外面回転によるナデ	0.1~5mmの砂粒を含む。	褐色。良好。	スス付着。底部拓本有り3。須恵器。
013 S B004	碗	— — 5.4	平な底部から縁は丸みを帯び体部に続く。高台は薄くロクロ痕が強い。	回転ロクロ成形。切り磨し技法不明内外面ナデ。	1~3mmの砂粒を含む。	褐色。良好。	須恵器。
014 S B004	杯	14.5 6.0 (7.6)	平な底部から体部は外反して口縁部に至る。ロクロ痕が強い。高台端部欠損。	回転ロクロ成形。切り磨し技法不明内外面ナデ。	白色礫石粒を含む。	灰白色。良好。	須恵器。
015 S B004	杯	9.4 2.8 5.2	平な底部から体部はゆるやかに内湾して口縁部に至る完形。	右回転ロクロ成形。回転糸切り。内外面回転によるナデ	1~3mmの砂粒を多量に含む。	淡赤褐色。	須恵器。
016 S B005	壺	(18.5) — —	頸部は内傾し外面に稜をもつ。口縁部は外反する。肩部は張りながら胴部へ続く。	口縁部横ナデ。外面肩部横寛削り内面横寛ナデ	0.5~1mmの茶色の砂粒を含む。	褐色。良好。	
017 S B005	杯	14.6 (5.6) 6.8	平な底部から体部は外反し口縁部に至る。ロクロ痕が強い。高台端部欠損。	回転ロクロ成形。切り磨し技法不明内外面ナデ。	0.5mmの砂粒を含む。	褐色。良好。	須恵器。

遺物番号	器形	法量回	器形の特徴	成・整形の特徴	胎土	色調・焼成	備考
618 S B005	杯	(15.3) (5.2) (7.2)	体部は内湾し口縁部で外反する。腰は肥厚する。高台部端部欠損。ㄱ残存。	口縁部横ナデ。体部上半指押え下半覆削り。内面ナデ。	0.5~1mmの砂粒を少量含む。	褐色。良好。	スス付着。
619 S B005	碗	— — (4.4)	平な底部から体部は内湾して立ち上がる。高台は端部が欠損する。腰は丸い。	右回転ロクロ成形回転糸切り。外面ナデ。内面足磨き。	1mmの砂粒と金雲母を含む。	褐色。良好。	須臾器。
620 S B005	杯	10.7 3.3 5.9	平な底部から体部はゆるやかに内湾し、外反する口唇部に至る。完形。	右回転ロクロ成形回転糸切り。内外面回転によるナデ	0.5~1mmの砂粒を含む。	浅黄褐色。	底部拓本有り4。須臾器。
621 S B005	杯	10.6 3.2 6.1	平な底部から体部は外反し口縁部に至る。口唇部は肥厚する。ロクロ底が強い。	右回転ロクロ成形回転糸切り。内外面回転によるナデ	0.5~1mmの砂粒を含む。	褐色。良好。	底部拓本有り5。須臾器。
622 S B005	杯	(11.6) (3.6) (5.5)	平な底部から体部は内湾し、口唇部は外反する。腰は丸みをもつ。ㄱ残存。	回転ロクロ成形。内外面回転によるナデ。	1mmの砂粒と金雲母を含む。	明赤褐色。良好。	須臾器。
623 S B005	杯	(11.0) 2.9 (6.2)	平な底部から腰は丸く体部は外反して口縁部に至る。ロクロ底が強い。ㄱ残存。	右回転ロクロ成形回転糸切り。内外面回転によるナデ	0.5~1mmの砂粒を含む。	明赤褐色。良好。	底部スス付着。須臾器。
624 S B005	杯	(14.0) — —	体部はゆるやかに外反して口縁部に至る。口縁部外面に強い稜がある。ㄱ残存。	口縁部横ナデ。外面体部覆削り。内面体部足磨き。	1mmの砂粒と金雲母を含む。	外面明赤褐色。内面黒色処理。良好。	口縁部スス付着。
625 S B006	壺	(21.4) — —	口縁部下半は直立し上半は外反し口唇部に凹線が通る。胴部は張り器肉が薄い。	口縁部横ナデ。外面肩部横削り内面胴部横削りナデ	1~2mmの砂粒を含む。	にぶい褐色。	
626 S B006	壺	(19.1) — —	口縁部下半は直立し上半は外反し口唇部に凹線が通る。胴部は肩が張る。	口縁部横ナデ。外面肩部横削り内面胴部横削りナデ	0.5~1mmの砂粒を含む。	外面褐色。内面にぶい褐色。	口縁部スス付着。
627 S B006	壺	(18.6) — —	口縁部下半は直立気味に内傾し上半で外反し口唇部に凹線が通る。胴部が張る。	口縁部横ナデ。外面肩部横削り内面胴部横削りナデ	0.5~1mmの砂粒を含む。	にぶい褐色。	
628 S B006	壺	20.0 — —	口縁部下半は直立し上半は外反する。胴部は張る。器厚が均一である。	口縁部横ナデ。外面肩部斜削り内面胴部横削りナデ	0.5~1mmの砂粒を含む。	にぶい褐色。	外面スス付着。
629 S B006	壺	— — 4.9	胴部は張りもち狭まりながら平な底部に続く。胴部下半~底部ㄱ残存。	外面胴下位縦方向覆削り底部覆削り内面胴部横削りナデ	0.5~2mmの砂粒を含む。	褐色。良好。	
630 S B006	壺	13.1 — —	口縁部下半は直立し上半は外反する。胴部は上位が大きく張る小型壺。	外面肩部横削り胴下半縦削り。内面胴部横削りナデ	0.5mmの砂粒を多量に含む。	にぶい褐色。	外面スス付着。
631 S B006	壺	(12.5) — —	口縁部下半は内傾し上半で外反する。胴部は中位に張りがあり台部に至る小型壺	外面肩部横削り胴下半縦削り。内面胴部横削りナデ	1~2mmの砂粒を含む。	明赤褐色。良好。	内外面スス付着。
632 S B006	壺	(13.2) — —	口縁部下半は内傾し上半で外反する。胴部は中位で張り器肉が薄くなる。	外面肩部横削り胴部縦削り。内面胴部横削りナデ。	1~2mmの砂粒を含む。	褐色。良好。	
633 S B006	壺	— — 9.4	小型台付壺の台部で「ハ」の字状にふんばる。	内外面台部接合時のナデ。	0.5~3mmの砂粒を含む。	褐色。良好。	台部スス付着。
634 S B006	杯	(12.5) (3.3) (5.2)	底部は平で体部は内湾して立ち上がり口唇部は外反する。腰は薄い。ㄱ残存。	口縁部横ナデ。外面体部~底部覆削り。内面ナデ。	1~2mmの砂粒を含む。	褐色。良好。	
635 S B006	杯	(12.8) 4.0 (6.2)	底部は平で体部はゆるやかに外反して立ち上がり口縁部でさらに外反する。	口縁部横ナデ。外面体部指押え底部覆削り。内面ナデ。	0.5mmの砂粒を含む。	にぶい褐色。	
636 S B006	杯	(13.0) 4.6 (5.4)	平な底部からゆるやかに外反して立ち上がり口縁部でさらに外反し端部で内湾する。	口縁部横ナデ。外面体部指押え底部覆削り。内面ナデ。	0.5mmの砂粒を含む。	にぶい褐色。	
637 S B006	杯	(12.8) 4.3 (6.0)	平な底部から体部はゆるやかに外反して口縁部に至る底部は厚い。体部ㄱ欠損。	右回転ロクロ成形回転糸切り。内外面回転によるナデ	1mmの砂粒を含む。	にぶい褐色。	底部拓本有り5。須臾器。

第四章 清水田遺跡の調査

遺物番号	器形	法量 ⁴⁾	器形の特徴	成・整形の特徴	胎土	色調・焼成	備考
038 S B006	杯	(14.8) — —	平な底部から直線的に立ち上がり口唇部で外反する。高台欠損。	右回転ロクロ成形 回転糸切り。内外 面回転によるナゲ	1~2mmの黒い砂粒を含む。	灰黄色。	須恵器。
039 S B006	杯	— — 6.0	平で厚している底部から体部は外反し低い高台がつく。体部中央~底部残存。	回転ロクロ成形。 回転糸切り。内外 面回転によるナゲ	0.5~3mmの砂粒を含む。	にぶい黄褐色。	須恵器。
040 S B006	碗	(15.4) 5.3 8.1	平な底部から体部はゆるやかに外反して口縁部に至る。ロクロ痕が強い。1/2残存。	右回転ロクロ成形 回転糸切り。内面 横。放射状捲き	0.5mmの砂粒を少量含む。	外面黄褐色、内面黒色処理。	須恵器。
041 S B006	杯	(14.9) 5.4 (7.3)	平な底部から体部は内湾し口唇部で外反する。ロクロ痕が強い。高台部欠損。	回転ロクロ成形。 回転糸切り。内外 面回転によるナゲ	0.5~1mmの白い砂粒を含む。	灰黄色。	須恵器。
042 S B006	碗	(15.6) 4.8 (8.8)	平な底部から体部はゆるやかに内湾して口縁部に至る。ロクロ痕が強い。1/2残存。	右回転ロクロ成形 回転糸切り。内面 横。放射状捲き	良好。	にぶい褐色。	須恵器。
043 S B007	甕	20.4 28.5 3.6	口縁部下半は直立し上半で外反する。胴部は胴部が張り平な底部に続く。	外面胴部横捲削り 胴部縦削り。内 面胴部横捲ナゲ。	良好。	にぶい黄褐色。	
044 S B007	甕	— — (9.0)	胴部は狭まりながら平な底部に続く。胴部下位~底部1/2残存。	外面胴部下位縦削り、底部縦削り。 内面胴部横捲ナゲ	1~4mmの暗赤褐色。不良。	暗赤褐色。不良。	内外面スス付着。
045 S B007	甕	(13.0) — —	口縁部下半は直立し上半は外反し口唇部は尖る。胴部は張りがある。	口縁部ナゲ。 外面胴部横捲削り 内面胴部横捲ナゲ	1mmの砂粒を多量に含む。	褐色。良好。	
046 S B007	甕	(14.0) — —	口縁部下半は直立し上半は外反する。口縁部中に凹縁が通る。小破片。	口縁部ナゲ。 外面胴部横捲削り 内面胴部横捲ナゲ	0.5mmの砂粒を含む。	赤褐色。良好。	
047 S B007	甕	(9.0) — —	口縁部下半は直立し上半は外反する。胴部に腰をもち胴内が薄くなる。小型甕。	口縁部ナゲ。 外面胴部横捲削り 内面胴部横捲ナゲ	1mmの砂粒を含む。	褐色。良好。	
048 S B007	甕	— — (4.0)	胴部は狭まりながら平な底部に続く。	外面胴部縦削り 内面胴部横捲ナゲ	礫石、雷母、0.5mmの砂粒を含む。	にぶい赤褐色。	外面スス付着。
049 S B007	杯	(12.2) (3.6) (5.5)	平な底部から体部はゆるやかに外反して口縁部に至る。1/2残存。	右回転ロクロ成形 回転糸切り。内外 面回転によるナゲ	1~2mmの砂粒を含む。	灰白色。良好。	口縁部スス付着。須恵器。
050 S B007	杯	(13.0) 5.7 (6.5)	平な底部から体部は内湾し口唇部で外反する。口唇部は薄くなる。体部1/2欠損。	右回転ロクロ成形 回転糸切り。内外 面回転によるナゲ	1~2mmの砂粒を含む。	灰色。良好。	底部拓本有り7。須恵器。
051 S B007	杯	(14.0) (3.5) (7.8)	平な底部から体部はゆるやかに外反して口縁部に至る。ロクロ痕が強い。1/2残存。	回転ロクロ成形。 切り離し技法不明 内外面ナゲ。	1~2mmの砂粒を含む。	灰色。良好。	須恵器。
052 S B007	杯	12.6 3.5 6.3	平な底部から体部は外反し口縁部に至る。ロクロ痕が強い。ほぼ完形。	右回転ロクロ成形 回転糸切り。内外 面回転によるナゲ	1mmの砂粒を含む。	灰色。良好。	底部拓本有り8。須恵器。
053 S B007	杯	(13.0) 3.6 (6.0)	平な底部から体部はゆるやかに外反して口縁部に至る。口唇部は肥厚する。	右回転ロクロ成形 回転糸切り。内外 面回転によるナゲ	0.5mmの砂粒を含む。	にぶい褐色。	須恵器。
054 S B007	皿	14.5 3.0 5.6	平な底部から体部はゆるやかに外反して口縁部に至る。体部欠損。	右回転ロクロ成形 回転糸切り。内外 面回転によるナゲ	0.5~2mmの砂粒を含む。	灰色。良好。	底部拓本有り9。須恵器。
055 S B007	杯	15.6 6.7 6.6	平な底部からゆるやかに内湾しつつ口縁部に至る。高台は高く「ハ」の字状にふんばる。	回転ロクロ成形。 回転糸切り。内外 面回転によるナゲ	1~3mmの砂粒を含む。	褐色。良好。	須恵器。
056 S B007	杯	15.5 6.5 9.0	平な底部から体部は直線的にのび口縁部に至る。ロクロ痕が強い。ほぼ完形。	右回転ロクロ成形 回転糸切り。内外 面回転によるナゲ	1~2mmの砂粒を含む。	灰白色。良好。	底部拓本有り10。須恵器。
057 S B008	羽釜	(28.0) — —	口縁部は直立し口唇部は平で胴部は直線的のびる。胴は三角形状である。	口縁部横ナゲ。 内外面指ナゲ。	1~2mmの砂粒を含む。	黄褐色。	

遺物番号	器形	法量 ^(a)	器形の特徴	成・整形の特徴	胎土	色調・焼成	備考
058 S B008	杯	(12.8) (3.9) (6.4)	平な底部から体部は外反し口縁部に至り、口唇部に凹縁が返る。ㄱ残存。	口縁部横ナデ。外面体部～底部磨削り。内面ナデ。	1～2mmの砂粒を多量に含む。	にぶい褐色。	
059 S B008	杯	(10.2) (3.7) (4.8)	平な底部から体部はゆるやかに外反して口縁部に至る。口縁部は肥厚する。	回転ロクロ成形。回転ロクロ成形。切り離し技法不明。内外面ナデ。	1mmの砂粒を含む。	灰色。良好。	須惠器。
060 S B008	杯	— — (5.5)	平な底部から体部はゆるやかに外反する。体部下半～底部ㄱ残存。	右回転ロクロ成形。回転糸切り。内外面回転によるナデ。	1mmの砂粒を含む。	浅黄褐色。	須惠器。
061 S B008	碗	— — —	底部は平で腰は丸みを帯び体部は内湾する。口縁部と高台部欠損。	回転ロクロ成形。糸切り後指ナデ。内面横、斜交磨き。	1～2mmの砂粒を含む。	外面にぶい褐色、内面黒色処理。	須惠器。
062 S B009	壺	— — —	胴部は器内が厚く底部に近くにしたがって狭まる。	外面胴部縦磨削り。内面胴部横ナデ。	1～6mmの砂粒を多量に含む。	褐色。良好。	
063 S B009	杯	(11.0) (3.7) (5.2)	平な底部から体部はゆるやかに外反して口縁部に至る。ㄱ残存。	右回転ロクロ成形。回転糸切り。内外面回転によるナデ。	1～2mmの砂粒を含む。	にぶい赤褐色。	内外面ス付着。須惠器。
064 S B009	碗	— — 7.4	底部は平で体部は内湾し口唇部は平である。体部～高台部ㄱ残存。	外面ナデ。内面磨削き。	1～2mmの砂粒を含む。	外面にぶい褐色、内面黒色処理。	
065 S B010	杯	(13.0) (3.4) (3.7)	平な底部から体部は内湾して立ち上がり口縁部で外反する。	口縁部横ナデ。外面体部～底部磨削り。内面ナデ。	1mmの砂粒を含む。	明黄褐色。	
066 S B010	杯	(12.0) (3.9) (5.7)	平な底部から内湾して立ち上がり口縁部で直立し口唇部で外反する。ㄱ残存。	口縁部横ナデ。外面体部～底部磨削り。内面ナデ。	1mmの砂粒を含む。	褐色。良好。	
067 S B010	杯	13.4 4.1 5.0	平な底部から体部はゆるやかに外反し、口縁部で強く外反する。	回転ロクロ成形。静止糸切り。内外面回転によるナデ。	細かい砂粒を含む。	にぶい褐色。	須惠器。
068 S B010	杯	(13.0) (4.2) (5.0)	平な底部から体部はゆるやかに外反して口縁部に至る。口唇部は肥厚する。	回転ロクロ成形。回転磨削り。内外面回転によるナデ。	細かい砂粒を含む。	にぶい赤褐色。	須惠器。
069 S B010	杯	(14.8) (6.1) (7.0)	平な底部から体部は内湾し口唇部で外反する。高台は低い。ㄱ残存。	回転ロクロ成形。回転糸切り。内外面回転によるナデ。	細かい砂粒を含む。	にぶい赤褐色。	須惠器。
070 S B011	壺	(16.0) — —	「S」字状の口縁部で胴部が肥厚し肩部は張りをもつ。口縁部～肩部ㄱ残存。	口縁部横ナデ。外面頸部縦磨削り。内面胴部横ナデ。	1mmの砂粒を含む。	浅黄褐色。	
071 S B011	甗	— — (2.6)	胴部は中位で張りをもち底部に続く。器内が薄い。胴部ㄱ残存。	外面、胴部下位斜交磨削り。内面、底部磨削り。	2mmの砂粒と1cmの石を含む。	にぶい褐色。	ス付着。
072 S B011	甗	— — —	胴部は上位で張りをもち、胴部ㄱ残存。	外面、胴部上位斜交磨削り。内面、頸部磨削り。	0.5mmの砂粒を含む。	浅黄褐色。	
073 S B012	蓋	— — —	ばたん状のつまみが天井部に付く。	回転ロクロ成形。内外面ナデ。	0.5mmの砂粒を含む。	灰白色。良好。	須惠器。
074 S B012	杯	9.4 1.7 6.0	底部は平で腰は丸みを帯びて立ち上がり口唇部で外反する。完形。	右回転ロクロ成形。回転糸切り。内外面回転によるナデ。	0.5～1mmの砂粒を含む。	褐色。良好。	口縁～体部ス付着。須惠器。
075 S B012	杯	9.5 1.9 6.2	平な底部から体部は外反して口縁部に至る。完形。	右回転ロクロ成形。回転糸切り。内外面回転によるナデ。	0.5mmの砂粒を含む。	灰白色。良好。	底部拓本有り11。須惠器。
076 S B012	杯	9.2 2.3 5.6	平な底部から体部は外反して口縁部に至る。腰は肥厚している。ほぼ完形。	右回転ロクロ成形。回転糸切り。内外面回転によるナデ。	2～3mmの砂粒を含む。	灰白色。良好。	底部拓本有り12。須惠器。
077 S B012	杯	11.8 3.1 7.0	平な底部から体部はゆるやかに外反して口縁部に至る。口唇部が強く残る。	回転ロクロ成形。回転磨削り。内外面回転によるナデ。	1mmの砂粒を多量に含む。	浅黄褐色。	須惠器。

第IV章 清水田遺跡の調査

遺物番号	器形	法量回	器形の特徴	成・整形の特徴	胎土	色調・焼成	備考
078 S B012	椀	(11.0) 4.1 5.3	平な底部から体部は内湾し口唇部で外反する。高台は丁字に付いている。	回転ロクロ成形。底部切り難し後指ナゲ。	良好。	ぶい褐色。	口縁部ス付着。須恵器。
079 S B012	杯	16.4 6.5 (7.6)	平な底部から体部は内湾して立ち上がり口唇部で外反する。高台は低い。ㄥ残存。	回転ロクロ成形。切り難し技様不明内外ナゲ。	1～2mmの砂粒を含む。	黄褐色。	須恵器。
080 S B013	羽蓋	(20.0) — —	口縁部は内湾し胴部上位に張りをもつ。脚は三角形状で上面が平である。	口縁部横ナゲ。外面割部縦貫削り内面割部置ナゲ。	1～5mmの砂粒を含む。	ぶい褐色。	
081 S B013	羽蓋	(22.0) — —	口縁部は内湾し胴部は上位に張りをもつ。脚は三角形状である。	口縁部横ナゲ。外面割部縦貫削り内面割部置ナゲ。	1～3mmの砂粒を含む。	ぶい褐色。	
082 S B015	杯	— — 6.2	平な底部から体部は外反して立ち上がる。体部ㄥ残存。	外面体部～底部削り。内面寛ナゲ。	1mmの砂粒を含む。	褐色。良好。	
083 S B015	杯	12.9 3.9 6.3	平な底部から体部はゆるやかに外反して口縁部に至る。口ロ痕が強い。定形。	右回転ロクロ成形。回転永切り。内外面回転によるナゲ。	0.5mmの白い砂粒を含む。	灰オリーブ色。	底部拓本有り13。須恵器。
084 S B015	杯	— — 6.0	平な底部から体部はゆるやかに外反する。底部ㄥ残存。	右回転ロクロ成形。回転永切り。内外面回転によるナゲ。	2mmの砂粒を含む。	灰白色。良好。	須恵器。
085 S B015	椀	(18.9) — —	体部は内湾し口縁部に至る。器厚は均一である。横部が深い大型の椀である。	回転ロクロ成形。外面ナゲ。内面寛磨き。	角閃石、0.5mmの砂粒を含む。	外面にぶい黄褐色、内面黒色処理。	墨書有り。須恵器。
086 S B016	壺	(14.2) — —	口縁部は「く」の字状に開き口唇部が尖る。胴部は張る。	口縁部横ナゲ。外面割部縦貫削り内面割部置ナゲ。	1～2mmの砂粒を多量に含む。	明赤褐色。	
087 S B016	壺	— — (6.2)	胴部中に張りがあり底部は平で厚い。	外面胴部斜削削り。足磨き。内面胴部指押え、斜削ナゲ。	1mmの砂粒を多量に含む。	褐色。良好。	内外面ス付着。
088 S B016	鉢	19.6 — —	口縁部は外反し口唇部が尖る。体部は器内が薄く丸みをもちながら狭まる。	口縁部横ナゲ。外面指ナゲ。内面指ナゲ。胴部指押え。	0.5～1mmの砂粒を含む。	ぶい褐色。	
089 S B016	壺	— — (4.1)	「S」字状の口縁部をもつ台付葉の台部で端部を折り返す。	外面指ナゲ。内面指ナゲ。	0.5mmの砂粒を含む。	ぶい黄褐色。	
090 S B016	壺	— — —	胴部は中に張りがあり丸い底部に続き頸部から底部にかけて状で厚みがある。	外面厚減のため整形不明。内面寛ナゲ。	1～3mmの砂粒を含む。	褐色。良好。	
091 S B018 ～019	杯	13.8 3.5 7.0	平な底部から体部は内湾し口縁部に至る。ㄥ残存。	右回転ロクロ成形。回転永切り。内外面回転によるナゲ。	1mmの砂粒を少量含む。	灰色。良好。	須恵器。
092 S B018 ～019	杯	— — —	体部は内湾し口ロ痕が強い。体部ㄥ残存。	回転ロクロ成形。切り難し技法不明内外面ナゲ。	1mmの砂粒を含む。	ぶい褐色。	墨書有り。須恵器。
093 S B020	壺	18.0 — —	「S」字状の口縁部で頸部は肥厚し胴部に続く。口縁部～肩部小破片。	口縁部横ナゲ。外面頸部縦削毛目内面頸部横置ナゲ。	1mmの砂粒を含む。	ぶい褐色。	
094 S B020	壺	— — (9.0)	「S」字状の口縁部をもつ台付葉の台部で端部を折り返す台部ㄥ残存。	外面台部斜削毛目内面台部指ナゲ。	1mmの砂粒を含む。	ぶい赤褐色。	
095 S B021	壺	(19.3) — —	口縁部下半は直立し上半は外反し口唇部に凹縁が巡る。胴部が張る。	口縁部横ナゲ。外面肩部縦貫削り内面肩部横置ナゲ。	1mmの砂粒を含む。	褐色。良好。	外面ス付着。
096 S B021	壺	(17.0) — —	口縁部下半は直立し上半は外反し口唇部に凹縁が巡る。胴部はやや張りがある。	口縁部横ナゲ。外面肩部縦貫削り内面肩部横置ナゲ。	1mmの砂粒を含む。	褐色。良好。	口縁部ス付着。
097 S B021	壺	(13.3) — —	口縁部下半は直立し上半は外反し口唇部に凹縁が巡る。胴部は上位に張りがある。	外面肩部縦貫削り。胴部縦削り。内面胴部横置ナゲ。	1～2mmの砂粒を含む。	赤褐色。	口縁部ス付着。

遺物番号	器形	法量 ^(a)	器形の特徴	成・整形の特徴	胎土	色調・焼成	備考
098 S B021	壺	(10.7) — —	口縁部下平は内傾し上半は外反する。肩部に稜をもつ。	口縁部横ナデ。外面肩部縦稜削り内面肩部直ナデ。	1mmの砂粒を含む。	にぶい橙色。	
099 S B021	鉢	10.2 4.8 5.8	平な底部から体部は内湾しつつ立ち上がり口縁部で直立する。ほぼ方形。	右回転ロクロ成形。回転糸切り。内外面回転によるナデ	1mmの砂粒を含みザラザラ。	灰褐色。	底部拓本有り14。須惠器。
100 S B021	杯	(10.0) (4.2) (6.0)	平な底部から体部は外反して口縁部に至る。口縁部に歪み有り。ロクロ底が強い。	回転ロクロ成形。回転糸切り。内外面回転によるナデ	1mmの砂粒を含む。	青灰色。良好。	須惠器。
101 S B021	杯	(10.7) 3.3 3.0	平な底部から体部は内湾し口縁部で外反する。底部は小さい。1/2残存。	回転ロクロ成形。切り難し技法不明内外面ナデ。	白い5mmの小石を含む。	灰色。良好。	須惠器。
102 S B021	杯	(14.0) (3.7) (7.6)	平な底部から体部はゆるやかに外反して口縁部に至る。1/2残存。	回転ロクロ成形。回転糸切り。内外面回転によるナデ	0.5mmの砂粒を含む。	灰白色。良好。	内外面スス付着。須惠器。
103 S B021	杯	(13.3) (3.8) (6.2)	平な底部から体部はゆるやかに内湾して口縁部に至る。1/2残存。	回転ロクロ成形。切り難し技法不明内外面ナデ。	1mmの砂粒を含む。	灰白色。良好。	須惠器。
104 S B021	杯	(13.4) (3.6) (5.8)	平な底部から体部は内湾し口縁部は外反する。1/2残存。	回転ロクロ成形。回転糸切り。内外面回転によるナデ	1〜3mmの砂粒を含む。	灰色。良好。	須惠器。
105 S B021	杯	(13.4) 4.0 7.0	平な底部から体部は内湾しつつ口縁部に至る。1/2残存。	右回転ロクロ成形。回転糸切り。内外面回転によるナデ	0.5mmの砂粒を含む。	灰白色。良好。	墨書有り。須惠器。
106 S B021	杯	(13.0) (3.6) (7.0)	平な底部から体部はゆるやかに外反して口縁部に至る。口縁部は薄くなる。	右回転ロクロ成形。回転糸切り。内外面回転によるナデ	1mmの砂粒を少量含む	灰白色。良好。	須惠器。
107 S B021	杯	15.0 — —	体部は内湾し口縁部に至る。口脣部は尖る。ロクロ底が強い。高台は欠損。	回転ロクロ成形。切り難し技法不明内外面ナデ。	1mmの砂粒を含む。	にぶい橙色。	内外面スス付着。須惠器。
108 S B021	杯	— — (8.6)	平な底部から体部は直線的に立ち上がる。高台は低い。	回転ロクロ成形。切り難し技法不明内外面ナデ。	良好。	灰白色。良好。	須惠器。
109 S B021	杯	(13.8) 5.3 (6.5)	平な底部から体部は内湾し口縁部で外反する。ロクロ底が強い。高台は低い。	回転ロクロ成形。切り難し技法不明内外面ナデ。	1〜2mmの砂粒を含む。	黄灰色。	須惠器。
110 S B023	杯	11.8 4.1 5.6	平な底部から体部は外反して口縁部に至る。器肉が厚くロクロ底が強い。1/2残存。	右回転ロクロ成形。回転糸切り。内外面回転によるナデ	2〜3mmの砂粒を含む。	にぶい黄褐色。	スス付着。底部拓本有り15。須惠器。
111 S B023	杯	(13.2) (5.1) (6.0)	平な底部から体部は外反して口縁部に至る。高台は直立する。体部は粘土痕有り。	口縁部横ナデ。内外面ナデ。	1mmの砂粒を含む。	淡黄色。	スス付着。
112 S B024	鉢	(10.6) (8.8) 2.8	口縁部は外反し端部欠損。体部は中位で頤をもち底部に続く。	口縁部横ナデ。外面肩部直ナデ。内面肩部縦稜削り	1〜2mmの砂粒を含む。	黄褐色。	
113 S B024	壺	— — (7.8)	「S」字状の口縁部をもつ付箋の台部で端部を折り返す。台部1/2残存。	外面直ナデ。内面指ナデ。	1mmの砂粒を含む。	にぶい橙色。	
114 S B024	壺	— — (10.3)	「S」字状の口縁部をもつ付箋の台部で端部を折り返す。台部1/2残存。	外面斜刷毛目。内面指ナデ。台部端部指押え。	0.5mmの砂粒を含む。	にぶい橙色。	
115 S B024	甕	— — (4.0)	胴部下位は狭まりつつ底部に続く。底部の穿孔は斜に穿つ。	外面胴部縦稜削り。内面直ナデ。	1〜2mmの砂粒を含む。	褐色。良好。	
116 S B024	高杯	— — (17.0)	脚部はなだらかに「ハ」の字状に広がり裾部は薄くなり端部で尖る。脚部残存。	外面脚部縦稜削り。内面指ナデ。	1〜2mmの砂粒を含む。	褐色。良好。	
117 S B025	高杯	(19.0) — —	口縁部は外反し端部が尖る。	内外面口縁部横ナデ。	1〜3mmの砂粒を含む。	褐色。良好。	

第IV章 清水田遺跡の調査

遺物番号	器形	法 量 ⁴	器形の特徴	成・整形の特徴	胎土	色調・焼成	備考
118 S B 025	高 杯	(18.0) — —	口縁部は外反し杯部外面に強い稜がある。杯部 ⁵ 残存	口縁部横ナデ。 外面体部縦寛削り 内面体部ナデ。	1～2mmの砂粒を含む。	淡黄褐色。	
119 S B 025	高 杯	— — —	脚部は「ハ」の字状に広がる脚部 ⁵ 残存。	外面体部横、縦寛削り、脚部縦寛削り。内面ナデ。	1～3mmの砂粒を多量に含む。	淡黄褐色。	
120 S B 025	高 杯	19.0 — —	体部は外反して口縁部に至る。底部にはぞえを入れ脚部は柱部が張り脚部が広がる	外面杯部寛ナデ脚部縦寛削り内面杯部厚削き脚部ナデ	2mmの砂粒を含む。	褐色。良好。	
121 S B 025	杯	(13.0) — —	丸い底部から体部は窪みを作って立ち上がり口唇部は突る。 ⁵ 残存。	体部横ナデ。 外面底部縦削り。 内面底部ナデ。	赤褐色私物粒を含む。	褐色。良好。	
122 S B 025	杯	(11.6) — —	丸い底部から体部は大きな窪みを作って立ち上がり脚部は外反する。 ⁵ 残存。	体部横ナデ。 外面底部縦削り。 内面底部ナデ。	1mmの砂粒を含む。	にぶい褐色。	
123 S B 025	杯	(12.2) (4.7) —	丸い底部から体部は窪みを作って立ち上がり直線的に口唇部に至る。 ⁵ 残存。	体部横ナデ。 外面底部縦削り。 内面底部縦ナデ。	1～3mmの砂粒を含む。	にぶい褐色。	
124 S B 025	杯	(11.0) — —	丸い底部から体部は内湾し中央に弱い稜がある。 ⁵ 残存。	体部横ナデ。 外面底部ナデ。 内面底部ナデ。	1mmの砂粒を含む。	赤褐色。良好。	
125 S B 025	杯	13.5 (5.7) —	丸く中央が肥厚する底部から体部は大きな窪みを作って立ち上がる。 ⁵ 残存。	体部横ナデ。 外面底部縦削り 内面底部ナデ。	1～2mmの砂粒を含む。	外面褐色、内面黒色。良好。	
126 S B 026	甕	(48.0) — —	口縁部は外反し外面に沈線と波状文が巡る。口唇部に面をもち稜がある。	外面口縁部波状文有り。内面口縁部横ナデ。	1～2mmの砂粒を含む。	灰色。良好。	
127 S B 026	甕	(17.8) — —	口縁部は外反し口唇部は面をもち凹線が巡る。脚部は張りをもつ。	回転ロクロ成形。 内外面回転によるナデ。	器面なめらか。	オリーブ灰色。	須恵器。
128 S B 026	杯	11.8 3.7 4.2	平らな底部から体部はゆるやかに外反して口縁部に至る。ロクロ痕が強い。変形。	右回転ロクロ成形 回転糸切り。内外面回転によるナデ	1～3mmの砂粒を含む。	灰黄色。	内外面スス付着。須恵器。
129 S B 026	杯	(12.8) 3.7 (6.6)	平らな底部から体部はゆるやかに外反して口縁部に至る。ロクロ痕が強い。 ⁵ 残存。	回転ロクロ成形。 回転糸切り。内外面回転によるナデ	1～2mmの砂粒を含む。	淡黄褐色。	須恵器。
130 S B 026	杯	(14.8) 5.2 (7.6)	平らな底部から体部はゆるやかに内湾して口縁部に至る。 ⁵ 残存。	回転ロクロ成形。 回転糸切り。内外面回転によるナデ	0.5mmの砂粒を含む。	灰色。良好。	須恵器。
131 S B 026	杯	11.2 2.9 5.2	平らな底部から体部は内湾し口縁部で外反する。ロクロ痕が強い。変形。	右回転ロクロ成形 回転糸切り。内外面回転によるナデ	1～2mmの砂粒を含む。	にぶい褐色。	層着有り。底部部本有り15。須恵器。
132 S B 026	杯	(11.4) 3.4 (6.2)	平らな底部から体部は直線的に外反して口縁部に至る。ロクロ痕が強い。 ⁵ 残存。	回転ロクロ成形。 回転糸切り内外面回転によるナデ。	2mmの砂粒を多量に含む。	褐色。良好。	須恵器。
133 S B 026	杯	13.0 — —	体部はゆるやかに内湾し口縁部は外反する。体部下位～底部欠損。	回転ロクロ成形。 切り難し技法不明 回転によるナデ。	2mmの砂粒を含む。	にぶい褐色。	内外面スス付着。須恵器。
134 S B 026	杯	(11.0) (3.5) 3.2	底部は平で体部は内湾して口縁部に至る。口唇部は突る。	口縁部横ナデ体部～底部縦削り。上半部弁え。内面ナデ。	1mmの砂粒を多量に含む。	にぶい赤褐色。	
135 S B 026	杯	(12.6) (4.5) 5.6	平らな底部からゆるやかに外反して立ち上がり口縁部は直立する。 ⁵ 残存。	口縁部横ナデ。外面体部～底部縦削り。内面ナデ。	1～2mmの砂粒を多量に含む。	にぶい褐色。	
136 S B 026	杯	— — 5.6	平らな底部から体部はゆるやかに外反する。体部下～底部残存。	回転ロクロ成形。 切り難し技法不明 回転によるナデ。	0.5mmの砂粒を含む。	灰黄褐色。	須恵器。
137 S B 026	杯	(13.4) — —	体部は外反して口縁部に至る。 ⁵ 残存。	口縁部横ナデ体部～底部縦削り。上半部弁え。内面ナデ。	1mmの砂粒を多量に含む。	にぶい褐色。	

遺物番号	器形	法量 ¹⁾	器形の特徴	成・整形の特徴	胎土	色調・焼成	備考
138 S B 026	杯	(17.6) — —	体部は直線的に口縁部に至り口唇部で短かく直立する。口縁部～体部 ²⁾ 残存。	口縁部横ナデ。外面体部縦篋ナデ。内面体部刷毛目。	1～2mmの砂粒を含む。	褐色。良好。	
139 S B 026	杯	(15.2) 7.0 (8.5)	体部は内湾し口縁部で外反する。高台は寛く「ハ」の字状に開き端部は尖る。口縁部 ²⁾ 残存。	口縁部横ナデ。外面体部縦篋ナデ。内面ナデ。	1～2mmの砂粒を多量に含む。	褐色。良好。	
140 S B 026	杯	— — (10.4)	底部は平で高台が付く。底部～高台部 ²⁾ 残存。	回転ロク口成形。切り難し技法不明内面磨き。	2mmの砂粒を少量含む。	外面に白い褐色、内面黒色処理。	須恵器。
141 S B 029	壺	(24.6) — —	口縁部は「く」の字状に開き端部で更に外反する。口縁部 ²⁾ 残存。	外面口縁部縦篋ナデ。外面口縁部縦篋ナデ。内面口縁部横ナデ。	0.1mmの砂粒を含む。	褐色。良好。	
142 S B 029	壺	(19.8) — —	口縁部は外反し口唇部で強く外反する。口縁部 ²⁾ 残存。	口縁部横ナデ。外面頸部縦刷毛目内面頸部横篋ナデ。	1～2mmの砂粒を含む。	褐色。良好。	
143 S B 029	壺	(16.4) — —	口縁部は「く」の字状に開き高台に2本の突起がある。胴部は狭る。口縁～胴部 ²⁾ 残存。	口縁部横ナデ。外面胴部横篋ナデ。内面胴部横篋ナデ。	1mmの砂粒と金雲母を含む。	内外面褐色、断面に白い褐色。	
144 S B 029	壺	(16.0) — —	口縁部下平は直立し上半で外反する。胴部は肥厚し外面に粒土底有り。	外面口縁～胴部横ナデ。内面口縁部横ナデ。胴部横ナデ。	1mmの砂粒を含む。	褐色。良好。	
145 S B 029	壺	— — (3.8)	胴部は狭まりながら底部に狭く。胴部下位～底部 ²⁾ 残存。	外面底部磨き。内面底部磨ナデ。	2mmの砂粒を含む。	に白い黄褐色。	
146 S B 029	壺	(17.0) — —	「S」字状の口縁部で胴部が肥厚する。口縁部 ²⁾ 残存。	口縁部横ナデ。外面頸部縦刷毛目内面頸部ナデ。	0.5mmの砂粒を含む。	褐色。良好。	
147 S B 029	壺	— — (11.2)	「S」字状の口縁部をもつ台付壺の台部で端部を折り返す。	外面斜磨き。内面端部指押え。	1mmの砂粒を含む。	に白い褐色。	
148 S B 029	罎	(10.4) (9.6) (3.8)	口縁部は外反し胴部で肥厚し胴部は中位で張り、平な底部に狭く。口縁部 ²⁾ 欠損。	口縁部横ナデ。外面胴部～底部縦篋ナデ。内面ナデ。	1～3mmの砂粒を含む。	に白い褐色。	
149 S B 029	罎	(9.5) (8.0) (4.0)	口縁部は外反し胴部で肥厚し胴部中位で張り、上げ巻の底部に狭く。口縁部 ²⁾ 欠損。	外面胴下半磨き。底部磨ナデ。内面胴部指押え。	1～2mmの砂粒を含む。	に白い黄褐色。	
150 S B 029	罎	(9.8) (8.2) —	口縁部は外反し端部で尖る胴部は中位で張り底部は丸く厚くなる。口縁部 ²⁾ 残存。	外面胴上半磨き。胴下半～底部縦篋ナデ。内面は刷毛。	1～3mmの砂粒を含む。	褐色。良好。	
151 S B 029	高杯	(20.6) — —	体部はゆるやかに外反して口縁部に至る。端部は尖る。	口縁部横ナデ。外面体部磨ナデ。内面体部磨き。	1mmの砂粒を含む。	褐色。良好。	
152 S B 029	高杯	(25.6) (15.4) (13.6)	杯部は体部に丸みをもちつつ外反し脚部は「ハ」の字状に広がる。円蓋が3個有り。	外面杯～脚部縦篋ナデ。内面杯部縦篋ナデ。脚部刷毛目。	良好。	褐色。良好。	
153 S B 031	壺	(20.0) — —	口縁部は直立気味に外反し端部で強くそる。胴部は張り有り。口縁～胴部 ²⁾ 残存。	口縁部横ナデ。外面胴部磨ナデ。内面胴部横篋ナデ。	1～2mmの砂粒を含む。	に白い褐色。	口縁部ス付着。
154 S B 031	壺	(20.6) — —	口縁部下平は直立し上半で外反し肥厚する。胴部はなだらかに狭る。	外面胴部横篋ナデ。胴部縦篋ナデ。内面胴部横篋ナデ。	1～2mmの砂粒を含む。	褐色。良好。	
155 S B 031	壺	(14.0) — —	口縁下半は内傾気味に直立し上半で外反する。胴部は張り有り胴部で薄くなる。	口縁部横ナデ。外面胴部横篋ナデ。内面横篋ナデ。	1～2mmの砂粒を含む。	赤褐色。良好。	
156 S B 031	壺	— — —	胴部に張りがあり丸みを帯びている。ロク口底が強い。胴部～胴部中位 ²⁾ 残存。	回転ロク口成形。内外面回転によるナデ。	0.5～2mmの砂粒を含む。	灰色。良好。	須恵器。
157 S B 031	杯	13.2 3.6 7.0	底部は平で体部は外反し口縁部で肥厚し外反する。ロク口底が強い。完形。	右回転ロク口成形。回転余切り。内外面回転によるナデ。	0.5～3mmの白い砂粒を含む。	黄灰色。	磨き有り。底部石本有り17。須恵器。

第IV章 清水田遺跡の調査

遺物番号	器形	法量 ^④	器形の特徴	成・製形の特徴	胎土	色調・焼成	備考
158 S B031	杯	(13.0) (3.7) (4.6)	平な底部から体部は内湾し口縁部は外反する。ㄱ残存。	右回転ロクロ成形 回転糸切り、内外面回転によるナデ	1mmの砂粒を少量含む。	褐色。良好。	内外部スス付着。
159 S B031	壺	— — (8.4)	小型台付臺の台部で「ハ」の字状にふんばり端部が尖る。台部ㄱ残存。	外面底部～台部ナデ。内面底部置ナデ。台部ナデ。	金雲母を含む。	赤褐色。良好。	
160 S B031	壺	— — (10.2)	小型台付臺の台部で「ハ」の字状にふんばる。台部ㄱ残存。	外面台部ナデ。内面台部ナデ。	0.5mmの灰色砂粒を少量含む。	褐色。良好。	
161 S B031	椀	(16.0) — —	内湾する体部から口縁部に至り口唇部で外反する。ロクロ風が強い。高台部欠損。	回転ロクロ成形。 切り難し技法不明 内外面ナデ。	1～2mmの砂粒を含む。	褐色。良好。	須恵器。
162 S B031	杯	(15.3) (6.2) 6.9	平な底部からゆるやかに内湾して口縁部に至る。高台は高く端部が肥厚する。	回転ロクロ成形。 切り難し技法不明 内外面ナデ。	0.5～1mmの砂粒を含む。	褐色。良好。	須恵器。
163 S B032	壺	— — (8.0)	胴部は中位に張りがあり厚みのある平な底部に続く。	外面胴部横置ナデ 内面胴部横置ナデ 後横置削り。	赤褐色の砂粒を含む。	外面灰褐色。内面に ぶい褐色。	
164 S B032	杯	— — —	底部は平で体部は外反する高台端部欠損。	右回転ロクロ成形 回転糸切り、内外面 回転によるナデ	5mmの砂粒を含む。	ぶい褐色。	底部拓本有り 18。須恵器。
165 S B032	杯	11.4 3.7 5.6	底部は平で体部は外反しつつ口縁部に至る。腰と口縁部は肥厚する。ㄱ残存。	口縁部横ナデ。外面 体部指厚ナ。底 部置削り。内面ナ デ。	0.5mmの砂粒を含む。	浅黄褐色。	体部スス付着。
166 S B032	杯	(10.9) — —	体部は内湾し口縁部は外反する。	回転ロクロ成形。 切り難し技法不明 内外面ナデ。	良好。	灰白色。良好。	須恵器。
167 S B032	杯	(14.0) 5.3 (7.8)	平な底部からゆるやかに内湾して口縁部に至る。高台は7.8部が平である。	回転ロクロ成形。 外面は器面が割離 している。内面ナ デ。	1～2mmの砂粒を含み割離あり。	ぶい赤褐色。	須恵器。
168 S B033	甌	— — —	胴部下位は狭まり底部にのびる。	回転ロクロ成形。 切面胴部側置削り 内面胴部横置ナデ	1～2mmの砂粒を多量に含む。	ぶい褐色。	須恵器。
169 S B033	椀	(13.0) (3.8) (6.0)	平な底部から体部は内湾して立ち上がり口唇部で外反する。ㄱ残存。	口縁部横ナデ。外面 体部～底部置削り。 内面磨磨き。	1mmの砂粒を含む。	外面浅黄褐色。内面 黒色処理。	
170 S B033	杯	(12.0) 3.9 (5.3)	平な底部から体部は中央で器内が薄くなりつつ外反し口唇部は肥厚する。	回転ロクロ成形。 回転糸切り、内外 面回転によるナデ	0.5mmの砂粒を含む。	灰白色。良好。	底部スス付着。須恵器。
171 S B033	杯	— — 6.4	平な底部から体部はゆるやかに内湾する。高台は丁字に付く。	回転ロクロ成形。 切り難し技法不明 内外面ナデ。	1mmの砂粒と 5mmの石を含む。	灰オリーブ色。	須恵器。
172 S B033	杯	(15.7) (6.2) (7.0)	平な底部から体部は直線的に口縁部に至る。高台部欠損。	回転ロクロ成形。 切り難し技法不明 内外面ナデ。	0.5mmの砂粒を含む。	ぶい黄褐色。	スス付着。須恵器。
173 S B033	杯	14.0 5.7 11.0	平な底部から体部は内湾し口唇部で外反する。高台は広く厚い。ほぼ完形。	回転ロクロ成形。 切り難し技法不明 内外面ナデ。	0.2mmの白色 鉱物を含む。	灰白色。良好。	磨面有り。須恵器。
174 S B035	壺	(17.8) — —	口縁部は外反し端部で強く外反する。胴部は中位にやや張りをもち直線的である。	口縁部横ナデ。 外面胴部縦置削り 内面胴部横置ナデ	1mmの砂粒を含む。	浅黄褐色。	
175 S B035	壺	(22.0) — —	口縁部は外反し胴部は直線的に続く。外面胴部に粘土痕有り。	口縁部横ナデ。 外面胴部縦置削り 内面胴部横置ナデ	1～2mmの砂粒を含む。	褐色。良好。	
176 S B035	壺	(15.7) (27.1) (6.8)	口縁部は「く」の字状に外反し胴部中位でやや張りをもち底部に続く。頸部に粘土痕。	口縁部横ナデ。 外面胴部縦置削り 内面胴部横置ナデ	1mmの砂粒を含む。	黄灰色。	
177 S B035	壺	(23.8) — —	口縁部は外反し口唇部に凹線が走る。胴部は直線的に広がる。	口縁部横ナデ。 外面胴部縦置削り 内面胴部横置ナデ	2～3mmの砂粒を含みツラザラ。	褐色。良好。	

遺物番号	器 形	法 量 (g)	器 形 の 特 徴	成・整形の特徴	胎 土	色 調・焼 成	備 考
178 S B 035	瓶	— — (9.0)	胴部下半は丸みをもち狭まりながら底部に終り、底部は平でふくらみをもつ。	外面胴部縦稜磨き 底部磨削リ。内面胴部縦稜磨き。	良好。	外面にふい橙色、内面褐色。	
179 S B 035	壺	— — (6.2)	胴部は丸みをもち狭まりながら平な底部に終り。胴部下位へ底部が残存。	外面胴へ底部磨削リ、底部中央指押え。内面指ナデ。	1～2mmの砂粒を含む。	褐色。良好。	
180 S B 035	壺	(12.0) — —	口縁部は外反し胴部は狭まりながら底部に終り、台部は厚い。台付小型壺である。	口縁部横ナデ。 外面胴部縦稜磨削リ 内面胴部横ナデ。	1～2mmの砂粒を含む。	にふい橙色。	
181 S B 035	壺	(14.0) — —	口縁部は直立気味に外反し頸部で肥厚し胴部に張りをもつ小型壺。	口縁部横ナデ。 外面胴部縦稜磨削リ 内面胴部横ナデ。	1～3mmの砂粒を多量に含む。	にふい赤褐色。	
182 S B 035	壺	(13.8) 12.5 (6.5)	口縁部は外反し胴部は中位に張りがあり肥厚し平な底部に終り小型壺。ノミ残存。	口縁部横ナデ。 外面胴部縦稜磨削リ 内面胴部横ナデ。	1～3mmの砂粒を含む。	褐色。良好。	胴部スス付着。
183 S B 035	壺	— — 4.4	胴部は狭まりながら平な底部に至る。底部完形。	外面底部磨削リ。 内面底部置ナデ。	1～3mmの砂粒を含む。	褐色。良好。	
184 S B 035	杯	(11.6) — —	丸い底部から体部は窪みを作って立ち上がり外面に凹線が走る。	体部横ナデ。 外面底部ナデ。 内面底部ナデ。	1mmの砂粒を含む。	にふい橙色。	
185 S B 035	杯	— — —	丸い底部から体部は窪みを作って立ち上がり外反する。	体部横ナデ。 外面底部磨削リ。 内面底部ナデ。	1～2mmの砂粒を含む。	褐色。良好。	
186 S B 035	杯	(12.0) — —	丸い底部から体部は窪みを作って立ち上がり中央に弱い線をもつ。底部ノミ残存。	体部横ナデ。 外面底部磨削リ。 内面底部ナデ。	1～2mmの砂粒を含む。	褐色。良好。	
187 S B 035	杯	(13.6) (4.2) (12.0)	丸い底部から体部はややふくらみをもち外反する。ノミ残存。	体部横ナデ。 外面内面摩擦のため整形不明瞭。	1～2mmの砂粒を含む。	褐色。良好。	
188 S B 035	杯	(12.7) (5.7) —	丸い底部から体部は強い窪みを作って立ち上がり内湾する。	体部横ナデ。 外面底部磨削リ。 内面底部ナデ。	赤褐色鉱物粒、黒黄母を含む。	明褐色。	
189 S B 035	杯	(13.4) (5.0) (12.2)	丸い底部から体部は窪みを作って立ち上がり強く外反する。底部ノミ欠損。	体部横ナデ。 外面底部磨削リ。 内面底部ナデ。	1～2mmの砂粒を含む。	褐色。良好。	底部スス付着。
190 S B 035	杯	13.9 4.8 —	丸い底部から体部は窪みを作って立ち上がり直線的に開く。ほぼ完形。	体部横ナデ。 外面底部磨削リ。 内面底部ナデ。	1～2mmの砂粒を含む。	褐色。良好。	
191 S B 035	杯	(12.3) (5.3) —	丸い底部から体部は強い窪みを作って立ち上がり直線的に開く。口唇部はつまむ。	体部横ナデ。 外面底部磨削リ。 内面底部ナデ。	1～2mmの砂粒を含む。	にふい橙色。	底部スス付着。
192 S B 035	鉢	(13.4) 9.0 —	丸い底部から体部は内傾し口唇部でつまみ上げ内面に線を幾す。ノミ残存。	口縁部横ナデ。 外面底部縦稜磨削リ 内面底部縦稜磨き。	1～2mmの砂粒を多量に含む。	外面にふい橙色、内面黒色処理。	
193 S B 035	杯	12.7 5.1 —	丸い底部から体部は強い窪みを作って外反し口唇部で直立する。ほぼ完形。	体部横ナデ。 外面底部磨削リ。 内面底部ナデ。	1～2mmの砂粒を含む。	褐色。良好。	
194 S B 035	杯	(14.0) (5.6) —	丸い底部から体部は外反し体部内面に凹線が走り口唇部が尖る。底部に穿孔有り。	体部横ナデ。 外面底部磨削リ。 内面底部刷毛目。	1～3mmの砂粒を含む。	褐色。良好。	
195 S B 035	杯	12.6 4.9 —	丸い底部から体部は窪みを作って外反し外面に凹線が走る。口唇部をつまむ。	体部横ナデ。外面底部指押え、裏側ナデ。内面ナデ。	1mmの砂粒を含む。	褐色。良好。	底部スス付着。
196 S B 035	瓶	(15.8) 9.5 —	口縁部下半は直立し上半で外反する。体部は丸みをもち下位で肥厚する。	口縁部横ナデ。 外面底部磨削リ。 内面置ナデ。	1～3mmの砂粒を含む。	褐色。良好。	内外面スス付着。
197 S B 037	壺	(22.0) — —	口縁部下半は直立し上半は外反する。胴部に張りをもつ。口縁部～胴部ノミ残存。	口縁部横ナデ。 外面胴部縦稜磨削リ 内面胴部縦稜磨き。	金黄母、長石、角閃石を含む。	淡褐色。	

第IV章 清水田遺跡の調査

遺物番号	器形	法量 ^寸	器形の特徴	成・整形の特徴	胎土	色調・焼成	備考
196 S B 037	羽釜	(22.0) — —	口縁部は内傾し口唇部は平である。胴部でやや張りがあり三角形の跡をもつ。	口縁部横ナデ。 外面胴部横ナデ 内面胴部横ナデ	1～2mmの砂粒を含む。	橙色。良好。	
199 S B 037	羽釜	(18.6) — —	口縁部は内傾し口唇部は平である。胴部上で張りをもち唇は三角形である。	口縁部横ナデ。 外面胴部横ナデ 内面胴部横ナデ	1～2mmの砂粒を含む。	にぶい橙色。	
200 S B 037	杯	(10.9) 5.5 6.6	底部は平で厚く体部は内湾しつ口縁部に至る。口唇部は丸みをもつ。	回転ロクロ成形。 回転未切り。内外面回転によるナデ	1mmの砂粒を含む。	浅黄褐色。	須恵器。
201 S B 037	杯	(11.6) (3.5) (5.6)	平らな底部から体部は外反し口縁部に至る。体部外面に粘土質有り。ノミ残存。	口縁部横ナデ。外面体部指押え。底部底面削り。内面ナデ。	1mmの砂粒を含む。	灰黄褐色。	
202 S B 037	碗	— — (7.2)	底部内面に重ね焼き時の痕有り。高台端部欠損。	回転ロクロ成形。 切り離し技法不明 内外面ナデ。	良好。	灰白色。良好。	緑釉。
203 S B 37・39 ・40	甕	(25.0) — —	口縁部は強く外反し中位で肥厚する。胴部は直線的である。口縁～胴上部ノミ残存。	口縁部横ナデ。外面胴上部斜削目 内面横ナデ。	0.5～1mmの砂粒を含む。	橙色。良好。	
204 S B 37・39 ・40	甕	(14.4) — —	口縁部は直立気味に外反し口唇部に印線が流る。肩部は張りをもつ。小破片。	口縁部横ナデ。 外面肩部横ナデ 内面肩部横ナデ	1mmの砂粒を含む。	にぶい橙色。	
205 S B 37・39 ・40	羽釜	(20.0) — —	口縁部は内湾し胴部に強く唇は端部と上部が平である口縁部～胴部ノミ残存。	口縁部横ナデ。 内外面ナデ。	1mmの砂粒を含む。	橙色。良好。	
206 S B 039	杯	(15.0) — —	体部は内湾し口縁部で外反する。口縁部～体部ノミ残存。	回転ロクロ成形。 切り離し技法不明 内外面ナデ。	0.5～1mmの砂粒を含む。	浅黄褐色。	須恵器。
207 S B 039	杯	— — (5.6)	平な底部から体部はゆるやかに外反する。口縁部欠損。	右回転ロクロ成形 回転未切り。内外面回転によるナデ	1～2mmの砂粒を含む。	にぶい黄褐色。	底部拓本有り19。須恵器。
208 S B 039	甕	— — (10.2)	甕の台部で中位に腰をもち「ハ」の字状に開く。	外面台部ナデ。 内面台部ナデ。	粗い砂粒を含む。	にぶい橙色。	
209 S B 039	碗	— — (8.4)	碗部欠損の直立した高台部。	回転ロクロ成形。 回転未切り。高台部ナデ。	1～2mmの砂粒を含む。	にぶい橙色。	須恵器。
210 S B 040	杯	15.0 5.2 7.1	平な底部から体部は内湾して立ち上がり口唇部で外反する。高台は低い。	回転ロクロ成形。 回転未切り。内外面回転によるナデ	1～2mmの砂粒を含む。	明黄褐色。良好。	内面スス付着。須恵器。
211 S B 040	杯	(14.0) (5.4) (6.2)	平な底部から体部は内湾し口縁部は肥厚し外反する。高台は厚く低い。	回転ロクロ成形。 切り離し技法不明 内外面ナデ。	1mmの砂粒を含む。	にぶい黄褐色。	須恵器。
212 S B 040	杯	(13.4) (4.7) (5.0)	平な底部から体部は内湾し口縁部は外反する。ロクロ痕が強い。ノミ残存。	回転ロクロ成形。 回転未切り。内外面回転によるナデ	2mmの砂粒を少量含む。	にぶい黄褐色。	須恵器。
213 S B 040	杯	13.0 4.0 5.6	平な底部から体部はゆるやかに外反して口縁部に至る。唇部が厚い。ノミ残存。	右回転ロクロ成形 回転未切り。内外面回転によるナデ	1～2mmの砂粒を含む。	にぶい橙色。	スス付着。須恵器。
214 S B 040	杯	(12.0) 4.0 5.6	平な底部から体部はゆるやかに外反して口縁部に至る。体部ノミ欠損。	右回転ロクロ成形 回転未切り。内外面回転によるナデ	1mmの砂粒を少量含む。	にぶい黄褐色。	底部拓本有り20。須恵器。
215 S B 040	杯	12.8 4.2 5.0	底部は平で、体部は内湾し口縁部は外反する。光形。	右回転ロクロ成形 回転未切り。内外面回転によるナデ	1mmの砂粒を含む。	灰白色。良好。	底部拓本有り21。須恵器。
216 S B 040	碗	(12.8) — —	体部は内湾し口縁部で強く外反する。	外面体部回転によるナデ。内面磨き。	1mmの砂粒を含む。	外面にぶい橙色、内面黒色地埋。	
217 S B 040	杯	(12.0) — —	体部は内湾し口縁部で強く外反する。口縁部～体部小破片。	回転ロクロ成形。 切り離し技法不明 内外面ナデ。	0.5mmの砂粒を含む。	にぶい褐色。	磨き有り。須恵器。

遺物番号	器形	法量(k)	器形の特徴	成・整形の特徴	胎土	色調・焼成	備考
218 S B041	壺	16.5 20.4 4.8	口縁部は上半で強く外反し閉き、肩部は歪む。胴部は中位が張り底部に続く。	外面胴部縦瓦削り 内面胴部横瓦毛目 底部指ナデ。	1~3mmの砂粒を含む。	にぶい橙色。	外面スス付着。
219 S B041	壺	14.9 — —	口縁部は外反し口唇部は尖る胴部は中位で張る。口縁部~胴部中心位に残存。	口縁部横ナデ。 外面胴部縦瓦削り 内面胴部指ナデ。	2mmの砂粒を含む。	橙色。良好。	
220 S B041	壺	16.0 — —	口縁部は外反し胴部は直線的に広がる。口縁部~胴部中心位に残存。	外面胴上横瓦削り。 胴部縦瓦削り。 内面胴部横瓦ナデ	0.5~3mmの砂粒を含む。	にぶい橙色。	
221 S B041	瓶	— (8.0)	胴部下位は狭まり底部にのびる。底部に穿孔有り。胴部小破片。	外面胴下位縦瓦削り。 内面胴下位指ナデ、蔑削り。	0.5~1mmの砂粒を含む。	明赤褐色。良好。	
222 S B041	壺	17.2 — —	口縁部は直立し口唇部で外反し内面に凹線が走る。胴部は張りがある。口唇部は残存。	口縁部横ナデ。 外面胴部横瓦削り 内面胴部横瓦ナデ	0.5mmの砂粒を含む。	橙色。良好。	
223 S B041	杯	11.2 4.8 —	丸い底部から体部は強い窪みを作って外反し口唇部は肥厚する。口唇部は残存。	体部横ナデ。 外面底部蔑削り。 内面底部ナデ。	2mmの砂粒を含む。	橙色。良好。	口縁~底部スス付着。
224 S B041	杯	12.5 5.1 —	丸い底部から体部は強い窪みを作って外反し口唇部は尖る。体部口唇部は残存。	体部横ナデ。 外面底部蔑削り。 内面底部ナデ。	0.5~1mmの砂粒を含む。	橙色。良好。	底部スス付着。
225 S B043	壺	(18.2) — —	口縁部下半で直立し上半で外反する。胴部上位に張りがあり器内が薄くなる。	口縁部横ナデ。 外面胴部斜瓦削り 内面胴部横瓦ナデ	0.5mm以下の砂粒を含む。	にぶい褐色。	
226 S B043	壺	(18.2) — —	口縁部下半は内傾し上半は直立気味に外反する。胴部から薄くなり胴部が張る。	外面胴部斜瓦削り 胴部縦瓦削り。 内面胴部横瓦ナデ。	赤褐色の鉱物粒を含む。	橙色。良好。	
227 S B043	壺	(16.8) — —	口縁部下半は内傾し上半で外反し口唇部で尖る。胴部は張りをもつ。	口縁部横ナデ。 外面胴部横瓦削り 内面胴部横瓦ナデ	1~2mmの砂粒を含む。	にぶい橙色。	
228 S B043	壺	(12.4) — —	口縁部下半は直立気味に内傾し上半で強く外反する。胴部内外面に張をもつ。	口縁部横ナデ。 外面胴部横瓦削り 内面胴部横瓦ナデ	1mmの砂粒を含む。	橙色。良好。	口縁部スス付着。
229 S B043	杯	(15.7) — —	体部は内湾し口縁部は外反する。口唇部が強い。	回転口唇部成形。 切り離し技法不明 内外面ナデ。	紅石、0.5mmの砂粒を含む。	外面灰白色、内面灰黄色。	須臾器。
230 S B043	杯	(13.5) (4.0) (7.4)	平な底部から体部は外反し口縁部に至る。口縁部は横をもも肩部が尖る。口唇部は残存。	口縁部横ナデ。外面体部指押え底部蔑削り。内面ナデ。	0.5mmの砂粒を含む。	にぶい橙色。	体部スス付着。
231 S B043	杯	(14.6) (5.2) (6.6)	体部は内湾し口縁部で器内が薄くなり肩部で丸みをもつ。高台は低く底部欠損。	回転口唇部成形。 切り離し技法不明 内外面ナデ。	比較的細かい。	にぶい褐色。	体部スス付着、須臾器。
232 S B043	杯	— (8.4)	平な底部からゆるやかに内湾して立ち上がり、高台は低い。口唇部が強い。	回転口唇部成形。 切り離し技法不明 内外面ナデ。	0.5mmの砂粒を含む。	にぶい橙色。	須臾器。
233 S B043	杯	— (7.2)	平な底部からゆるやかに内湾して立ち上がり、高台は低く肩部が平である。	右回転口唇部成形 回転余切り。内外面回転によるナデ	1~2mmの砂粒を含む。	灰色。良好。	底部拓本有り22、須臾器。
234 S B043	杯	— (6.8)	平な底部に肩部の尖った高台が付く。体部下~高台部に残存。	回転口唇部成形。 切り離し技法不明 内外面ナデ。	1mmの砂粒を含む。	灰白色。良好。	墨書有り。須臾器。
235 S B044	壺	(18.0) — —	口縁部は外反し口唇部に凹線をもつ。胴部は肥厚し胴部上位に張りをもつ。	外面胴上半横瓦削り 胴下半縦瓦削り 内面胴部横瓦ナデ	白色砂粒を多量に含む。	橙色。良好。	
236 S B044	壺	(12.4) — —	口縁部下半は内傾し上半で外反する。胴部は張り薄くなる。	口縁部横ナデ。 外面胴部横瓦削り 内面胴部横瓦ナデ	0.5mmの砂粒を含む。	外面橙色、内面にぶい褐色。	内外面スス付着。
237 S B044	壺	— 5.6	胴部は狭まりながら底部に続き肩部はラッパ状に外反する。胴部下位~台部残存。	外面胴部縦瓦削り 内面胴~底部蔑削り 台部ナデ。	0.5mmの砂粒を多量に含む。	橙色。良好。	

第IV章 清水田遺跡の調査

遺物番号	器形	法量[m]	器形の特徴	成・製形の特徴	胎土	色調・焼成	備考
238 S B044	甕	— (9.8)	胴部は狭まりながら底部に 続き台部は「ハ」の字状に よんばる。	外面胴部縦捩り 台部ナデ。内面底 部縦ナデ、台部ナ デ	茶褐色鉱物粒 を含む。	明赤褐色。	
239 S B044	杯	(15.0) (5.8) (7.2)	底部は平で体部は内湾し口 縁部で外反する。口口痕 が強い。高台は低い。	回転ロクロ成形。 切り離し技法不明 内外面ナデ。	1～2mmの砂 粒を含む。	にぶい褐色。	須恵器。
240 S B044	杯	— (7.0)	平な底部から体部は内湾し て立ち上がる。口口痕が 強い。高台は端部欠損。	右回転ロクロ成形 回転糸切り。内外 面回転によるナデ	軽石、1mmの 砂粒を含む。	灰オリーブ色。	須恵器。
241 S B044	杯	— (6.4)	底部は上げ底で体部は内湾し つつ立ち上がる。口口 痕が強い。	回転ロクロ成形。 回転糸切り。内外 面回転によるナデ	角閃石、0.5mm の砂粒を含む。	にぶい黄褐色。	体部スス付 着。須恵器。
242 S B044	杯	(17.2) — —	体部は内湾し口縁部で弱く 外反する。口縁部～体部欠 残存。	回転ロクロ成形。 切り離し技法不明 内外面ナデ。	1mmの砂粒を 含む。	外面にぶい褐色。内 面褐色。	黒書有り。須 恵器。
243 S B044	杯	15.6 — —	底部は平で体部は内湾し口 唇部で外反する。高台部欠 損。	回転ロクロ成形。 切り離し技法不明 内外面ナデ。	0.5～1.5mmの 砂粒を含む。	にぶい黄褐色。	須恵器。
244 S B044	樽	14.2 — —	底部は平で体部は内湾し口 唇部で強く外反する。高台 部欠損。	右回転ロクロ成形 回転糸切り。外面 ナデ。内面磨きナ デ。	1mmの砂粒を 含む。	浅黄褐色。	底部拓本有り 23。須恵器。
245 S B044	杯	— (7.0)	平な底部に低い高台が付く	右回転ロクロ成形 回転糸切り。内外 面回転によるナデ	赤褐色の鉱物 粒を含む。	にぶい赤褐色。	外面スス付 着。須恵器。
246 S B045	甕	— (10.6)	「S」字状の口縁部をもつ 台付甕の台部で端部を折り 返す。台部欠残存。	外面斜刷毛目後縦 捩りナデ。内面磨 きナデ。	赤褐色の鉱物 粒を含む。	にぶい黄褐色。	
247 S B046	羽釜	(20.8) — —	口縁部は内湾し口唇部は平 である。脚は三角形状であ る。	口縁部横ナデ。 内外面ナデ後指 押え。	赤褐色鉱物 粒、長石、石 英を含む。	褐色。良好。	
248 S B046	羽釜	(21.2) — —	口縁部は直立し口唇部は平 である。脚は三角形状で短 かい。	口縁部横ナデ。 内外面ナデ。	赤褐色鉱物 粒、白色軽石 を含む。	褐色。良好。	
249 S B046	甕	— (8.8)	胴部下位は直線的に平な底 部に続く。器肉が厚い。胴 部下位～底部欠残存。	外面胴下位横捩り り、底部縦捩り。 内面胴部横捩りナ デ	雲母、長石軽 石を含む。	褐色。良好。	
250 S B047	甕	(17.4) — 9.4	「S」字状の口縁部で頸部が 肥厚し胴部は張りをもつ。 口縁部～胴部上位欠残存。	口縁部横ナデ。外 面頸～胴部縦、斜 刷毛目。内面ナ デ。	1mmの砂粒を 含む。	にぶい黄褐色。	
251 S B047	甕	(5.9) (5.3) (9.4)	「S」字状の口縁部をもつ 台付甕の台部で端部を折り 返す。	外面斜刷毛目。 内面指ナデ。	1mmの砂粒を 含む。	にぶい黄褐色。	
252 S B048 ～049	杯	(13.6) (4.6) (5.2)	平な底部から体部は直線的 に口縁部に至る。口口痕 が強い。欠残存。	右回転ロクロ成形 回転糸切り。内外 面回転によるナ デ	0.5mmの砂粒 を含む。	浅黄褐色。	黒書有り。須 恵器。
253 S B048 ～049	杯	(13.2) — —	体部はゆるやかに外反して 口縁部に至る。口口痕が 強い。	回転ロクロ成形。 内外面回転による ナデ。	黒雲母、石英 を含む。	にぶい褐色。	内外面スス付 着。須恵器。
254 S B048 ～049	杯	— (6.2)	平な底部から体部はゆるや かに外反する。体部～底部 欠残存。	外面体部～底部縦 捩り。上半指押え。 内面ナデ。	軽石、角閃石 を含む。	明赤褐色。良好。	
255 S B048 ～049	甕	— (9.6)	台付甕の台部で「ハ」の字状 によんばり端部は尖る。台 部欠残存。	外面台部ナデ。 内面台部ナデ。	軽石、角閃石 を含む。	褐色。良好。	
256 S B050	羽釜	(22.0) — —	口縁部は内湾し口唇部は平 である。胴部は上位で丸み をもち脚は三角形状である	口縁部横ナデ。 外面胴部縦捩りナ デ 内面胴部横捩りナ デ	赤褐色鉱物 粒、長石を含 む。	褐色。良好。	
257 S B050	羽釜	(18.4) — —	口縁部は内湾し口唇部は平 である。胴部は上位で張り をもち脚は三角形状に長い	口縁部横ナデ。 外面胴部縦捩りナ デ 内面胴部横捩りナ デ	赤褐色鉱物粒 を含む。	赤褐色。良好。	

遺物番号	器 形	法 量 ¹⁾	器 形 の 特 徴	成・整形の特徴	胎 土	色 調・焼 成	備 考
258 S B 050	椀	— — 7.8	平な底部から体部は内湾して立ち上がる。高台は直立し縁部が平である。	右回転ロクロ成形 回転糸切り。内外 面回転によるナデ	1mmの砂粒を含む。	外面浅黄褐色、内面 黒色。	須恵器。
259 S B 055	罌	(20.2) — —	口縁部は「く」の字状に外反し口唇部で面をもつ。胴部は上段でやや張りをもつ。	口縁部横ナデ。外 面厚縁のため整形 不明。内面刷毛目。	口縁部横ナデ。外 面厚縁のため整形 不明。内面刷毛目。	長石を含む。 — —	— — —
260 S B 055	羽 蓋	(18.4) — —	口縁部は直立し口唇部は平で胴部は直線的にのびる。蓋は三角形状である。	口縁部横ナデ。 外面胴部縦割削り 内面胴部横割削り	口縁部横ナデ。 外面胴部縦割削り 内面胴部横割削り	赤褐色鉱物 粒、軽石を含む。	明黄褐色。
261 S B 055	羽 蓋	(22.8) — —	口縁部は内傾し口唇部は平で胴部は上段が張る。蓋は三角形状で短い。	口縁部横ナデ。 外面胴部縦割削り 内面胴部横割削り	口縁部横ナデ。 外面胴部縦割削り 内面胴部横割削り	赤褐色の鉱物 粒を含む。	褐色。良好。
262 S B 055	羽 蓋	(21.4) — —	口縁部は直立し口唇部は平である。胴部は直線的にのびる。	口縁部横ナデ。 外面胴部縦割削り 内面胴部横割削り	口縁部横ナデ。 外面胴部縦割削り 内面胴部横割削り	赤褐色の鉱物 粒を含む。	— — —
263 S B 055	杯	(17.0) — —	体部は内湾し口唇部で外反する。	口縁部横ナデ。 外面体部縦割削り 内面ナデ。	口縁部横ナデ。 外面体部縦割削り 内面ナデ。	赤褐色の鉱物 粒を含む。	— — —
264 S B 055	杯	(13.8) — —	体部は外反し口唇部はやや直立する。口縁部へ体部が残り。	口縁部横ナデ体部 へ底面縦割削り。上 半部押入。内面ナ デ。	口縁部横ナデ体部 へ底面縦割削り。上 半部押入。内面ナ デ。	赤褐色の鉱物 粒を含む。	— — —
265 S B 055	杯	(11.0) (4.3) (6.6)	平な底部から体部は外反して口縁部に至る。高台は低く接合部分に厚みをもつ。	回転ロクロ成形。 回転糸切り。内外 面回転によるナデ	1～2mmの砂 粒を含む。	— — —	— — —
266 S B 055	杯	10.8 3.7 4.5	底部は平で、体部は外反して口縁部に至る。ロクロ痕が弱い。	右回転ロクロ成形 回転糸切り。内外 面回転によるナデ	2～3mmの砂 粒を少量含む。	— — —	— — —
267 S B 055	杯	10.4 3.5 5.0	底部は平で、体部は外反し口縁部に至る。体部が残り。	回転ロクロ成形。 回転糸切り。内外 面回転によるナデ	砂粒を少量に 含みザラザラ。	— — —	— — —
268 S B 055	杯	10.2 3.5 5.4	平な底部から体部はゆるやかに外反して口縁部に至る。残り。	右回転ロクロ成形 回転糸切り。内外 面回転によるナデ	角閃石、1mm の砂粒を含む。	— — —	— — —
269 S B 055	杯	11.7 3.2 5.0	平な底部から体部はゆるやかに外反して口縁部に至る。ほぼ変形。	右回転ロクロ成形 回転糸切り。内外 面回転によるナデ	粒子の粗い砂 粒を含む。	— — —	— — —
270 S B 055	杯	(12.0) (3.8) (5.6)	平な底部から体部は内湾して立ち上がり、口唇部で外反する。残り。	右回転ロクロ成形 回転糸切り。内外 面回転によるナデ	金雲母を含む。	— — —	— — —
271 S B 055	杯	9.0 3.7 4.0	平な底部から体部はゆるやかに外反して口縁部に至る。ロクロ痕が強い。残り。	回転ロクロ成形。 切り離し技法不明 内外面ナデ。	赤褐色の鉱物 粒を含む。	— — —	— — —
272 S B 056	杯	(11.6) — —	体部は外反し口縁部に至る。体部と口縁部との境に線をもち。残り。	口縁部横ナデ。 外面体部縦割削り 内面ナデ。	口縁部横ナデ。 外面体部縦割削り 内面ナデ。	雲母を含む。 — —	— — —
273 S B 056	杯	(14.0) — —	体部は外反し口縁部に至る。体部と口縁部との境が薄く残り。	口縁部横ナデ。 外面体部縦割削り 内面ナデ。	口縁部横ナデ。 外面体部縦割削り 内面ナデ。	雲母を含む。 — —	— — —
274 S B 056	罌	— — (8.4)	台付罌の台部で胴部は厚くなる。台部が残り。	台部内外面ナデ。	台部内外面ナデ。	赤褐色の鉱物 粒を含む。	— — —
275 S B 056	杯	— — (8.2)	平な底部からゆるやかに内湾して立ち上がり、高台は端部欠損。	回転ロクロ成形。 回転糸切り。内外 面回転によるナデ	1mmの砂粒を 含む。	— — —	— — —
276 S B 057	杯	— — (6.8)	平な底部から体部はゆるやかに内湾して立ち上がる。底部へ体部が残り。	右回転ロクロ成形 回転割削り。内外 面回転によるナデ	白色軽石を含む。	— — —	— — —
277 S B 057	杯	— — (5.6)	平な底部から体部はゆるやかに外反して口縁部に至る。底部へ体部が残り。	右回転ロクロ成形 回転糸切り。内外 面回転によるナデ	石英を含む。	— — —	— — —

第IV章 清水田遺跡の調査

遺物番号	器形	法量	器形の特徴	成・整形の特徴	胎土	色調・焼成	備考
278 S B 058	杯	(13.8) (3.6) (6.6)	底部は平で体部は内湾して立ち上がり口縁部は外反する。口縁部が強い。	右回転ロクロ成形 回転糸切り。内外面回転によるナデ	良好。	灰黄色。	須恵器。
279 S B 058	杯	13.2 3.3 6.4	平な底部から体部はゆるやかに外反して直線的に口縁部に至る。ㄥ残存。	右回転ロクロ成形 回転糸切り。内外面回転によるナデ	良好。	灰色。良好。	須恵器。
280 S B 058	杯	(10.2) (3.6) (5.2)	平な底部から体部は外反して口縁部に至る。胴と口唇部は肥厚する。ㄥ残存。	口縁部横ナデ。外面指ナデ 底面削り。内面ナデ	赤褐色鉱物粒を含む。	明褐色。良好。	
281 S B 058	杯	9.8 4.1 7.2	平な底部から内湾しつつ口縁部に至る。高く直立した高台の上に低い杯部が付く	回転ロクロ成形。 回転糸切り。内外面回転によるナデ	1mmの砂粒を含む。	褐色。良好。	須恵器。
282 S B 059	杯	(11.0) 3.0 (6.2)	底部は平で体部は内湾して立ち上がり口縁部は外反する。ㄥ残存。	回転ロクロ成形。 回転糸切り。内外面回転によるナデ	赤褐色の鉱物粒、長石を含む。	明赤褐色。良好。	須恵器。
283 S B 059	杯	10.8 3.1 5.5	平な底部から体部はゆるやかに外反して直線的に立ち上がり口縁部に至る。	右回転ロクロ成形 回転糸切り。内外面回転によるナデ	良好。	明赤褐色。良好。	底部拓本有り 28。須恵器。
284 S B 059	杯	(12.4) — —	体部は直線的に口縁部に至る。口唇部は肥厚する。口縁部が強い。ㄥ残存。	回転ロクロ成形。 切り離し技法不明 内外面ナデ。	赤褐色鉱物、白色軽石粒を含む。	褐色。良好。	内外面スズ付着。須恵器。
285 S B 059	碗	(14.4) (5.8) (7.4)	体部は内湾し口唇部で外反する。口縁部～体部へ、底面ㄥ残存。	口縁部横ナデ。 外面ナデ。 内面削り。	赤褐色の鉱物粒を含む。	外面明赤褐色、内面黒色処理。	
286 S B 062～ 063	甕	(16.0) — —	口縁部は外反し胴部はやや張りをもちながら広がりをもち、口縁部ㄥ残存。	口縁部横ナデ。 外面削り斜削り 内面削り横ナデ	長石、石英、軽石を含む。	褐色。良好。	
287 S B 062～ 063	甕	(14.4) — —	口縁部下半は直立し上半で外反する。胴部は広がりをもち、口縁部ㄥ残存。	口縁部横ナデ。 外面削り斜削り 内面削り横ナデ	長石を含む。	褐色。良好。	
288 S B 062～ 063	杯	— — (7.0)	わずかに残存する底部に肥厚した高台が付く。	回転ロクロ成形。 切り離し技法不明 内外面ナデ。	長石を含む。	外面明赤褐色、内面暗赤褐色。	須恵器。
289 S B 062～ 063	杯	(11.5) 2.0 (7.8)	平な底部から体部は内湾して口縁部に至る。ㄥ残存。	右回転ロクロ成形 回転糸切り。内外面回転によるナデ	赤褐色の鉱物粒を含む。	淡黄色。	須恵器。
290 S B 062～ 063	杯	(11.2) — —	体部は外反し口縁部に至る口縁部に縁が有り口唇部は丸くなる。ㄥ残存。	口縁部横ナデ。体部～底面削り 上半削り。内面ナデ。	雲母、長石、赤褐色鉱物粒を含む。	褐色。良好。	
291 S B 062～ 063	杯	(14.4) — —	体部は内湾して口縁部に至る。体部ㄥ残存。	口縁部横ナデ。 外面指ナデ。 内面ナデ。	軽石、角閃石を含む。	褐色。良好。	
292 S B 065	甕	(18.2) — —	「S」字状の口縁部である。口縁部残存。	口縁部横ナデ。外面削り縦削り 縦削り毛目。内面削り。	赤褐色 鉱物粒、雲母、軽石を含む。	褐色。良好。	
293 S B 065	甕	(16.8) — —	底部を折り返した口縁部である。口縁部ㄥ残存。	外面口縁部横ナデ 後削り。 内面横ナデ。	赤褐色 鉱物粒、長石、石英を含む。	外面褐色、内面に白い褐色。	
294 S B 065	甕	(12.4) — —	「S」字状の口縁部で胴部が肥厚し胴部に続く。口縁部ㄥ残存。	外面口縁部横ナデ 後削り。胴部縦削り毛目。内面ナデ。	軽石を含む。	外面褐色、内面灰白色。不良。	
295 S B 065	甕	(11.0) — —	口縁部下半は直立し上半で内湾し上半で外反する。胴部に粘土帯がつく。胴部欠損。	口縁部横ナデ。胴部彫刻工具による 彫突有り。	石英、軽石を含む。	淡黄褐色。	
296 S B 066	甕	(31.0) — —	口縁部下半は直立し上半で外反する。胴部に張りをもち胴部に続く。	口縁部横ナデ。 外面削り斜削り 内面削り横ナデ。	軽石、長石、1～3mmの砂粒を含む。	に白い褐色。	
297 S B 066	甕	(25.2) — (23.1)	口縁部は外反し口唇部で面をもつ。胴部は口縁部から直線的にび底面に続く。	口縁部横ナデ。外面削り斜削り 縦削り。内面削り横ナデ。	軽石、角閃石を含む。	褐色。良好。	

遺物番号	器 形	法 量 ¹⁾	器 形 の 特 徴	成・整形の特徴	胎 土	色 調・焼 成	備 考
298 S B066	壺	(20.4) — —	口縁部下半は直立気味に内傾し上半は強く外反する。	口縁部横ナデ。外面肩部縦突起。内面肩部横ナデ。	赤褐色の鉱物粒を含む。	橙色。良好。	
299 S B066	別 釜	(21.6) — —	口縁部は内傾し口唇部に凹縁が走る。脚は三角形状である。	口縁部横ナデ。	1mmの砂粒を含む。	橙色。良好。	内外面スス付着。
300 S B066	碗	— — (4.8)	平な底部から体部は内湾して立ち上がる。	外面体部～底部削り。内面磨き。	角閃石を含む。	外面灰白色。内面黒色処理。	
301 S B066	杯	(13.0) — —	体部は内湾し口縁部で強く外反して開く。底部～高台部欠損。	回転ロクロ成形。切り離し技法不明。内外面ナデ。	赤褐色の鉱物粒を含む。	橙色。良好。	須恵器。
302 S B066	杯	(10.8) (1.6) (7.6)	底部周縁はもり上がり縁は丸みを帯びて立ち上がり口唇部で外反する。	回転ロクロ成形。回転糸切り。内外面回転によるナデ	1mmの砂粒を含む。	橙色。良好。	須恵器。
303 S B066	杯	(9.1) (1.5) (5.8)	平な底部から縁は丸みを帯びて立ち上がり口縁部に至る。	回転ロクロ成形。回転糸切り。内外面回転によるナデ	角閃石、0.5mmの砂粒を含む。	橙色。良好。	須恵器。
304 S B066	碗	(13.6) — —	体部は内湾し口縁部で外反する。口縁部～体部欠陥。	口縁部横ナデ。外面体部ナデ。内面磨き。	1～2mmの砂粒を含む。	外面灰白色。内面黒色処理。不良。	
305 S B066	杯	— — (6.8)	平な底部から体部は内湾して立ち上がり、高台は直立する。口縁部欠陥。	回転ロクロ成形。回転糸切り。内外面回転によるナデ	1～2mmの砂粒を含む。	淡黄褐色。	須恵器。
306 S B067	壺	(17.0) — —	口縁部下半は内湾し上半で外反し端部は尖る。胴部は口縁下半から直線的に開く	口縁部横ナデ。外面胴部斜削り。内面胴部横ナデ	赤褐色の鉱物粒を含む。	橙色。良好。	
307 S B068	壺	(12.8) — (5.3)	口縁部下半は直立し上半は外反する。胴部上位に張りもち底部に絞く。	口縁部横ナデ。外面胴部横削り。内面胴部横ナデ	赤褐色の鉱物粒を含む。	灰白色。不良。	
308 S B068	壺	— — (9.4)	台付脚の台部で「ハ」の字状にふんばる。台部欠陥。	外面台部ナデ後指押え。内面ナデ。	赤褐色鉱物粒、白色輝石粒を含む。	淡黄褐色。	内外面スス付着。
309 S B068	杯	— — (8.7)	底部は平である。体下部～底部欠陥。	右回転ロクロ成形。回転糸切り。外面ナデ。内面磨き	2mmの砂粒を含む。	にぶい橙色。	墨書有り。須恵器。
310 S B068	杯	12.5 4.7 5.2	平な底部から体部はゆるやかに外反して口縁部に至る。欠陥。	口縁部横ナデ。外面体部指押え。体下部～底部削り。	2mmの砂粒を含む。	にぶい黄褐色。	墨書有り。
311 S B068	杯	(13.0) (4.6) (6.4)	平な底部から体部は内湾して立ち上がり口縁部で外反する。欠陥。	口縁部横ナデ。体部～底部削り。上半指押え。内面ナデ。	0.5mm以下の砂粒を含む。	淡黄褐色。	
312 S B068	杯	(14.6) (4.9) (7.2)	平な底部から体部は内湾しつつ口縁部に至る。	回転ロクロ成形。切り離し技法不明。内外面ナデ。	茶褐色の鉱物粒を含む。	外面にぶい橙色。内面黒色処理。	須恵器。
313 S B068	杯	(14.6) — —	体部はゆるやかに外反して口縁部に至る。口縁部～体部欠陥。	口縁部横ナデ。外面体部指押え。内面ナデ。	赤褐色の鉱物粒を含む。	淡黄褐色。	
314 S B068	杯	(14.8) — —	体部はゆるやかに外反して口縁部に至る。口縁部～体部欠陥。	口縁部横ナデ。外面体部指ナデ。内面ナデ。	1mmの砂粒を含む。	黄褐色。	スス付着。
315 S B068	杯	(14.6) — —	底部は平で体部は内湾し口縁部で外反する。高台部欠陥。	口縁部横ナデ。外面体部削り。内面ナデ。	細砂粒、茶褐色色粒を含む。	にぶい橙色。	
316 S B068	杯	13.0 3.9 5.8	平な底部から体部はゆるやかに外反し口縁部で内湾する。	右回転ロクロ成形。回転糸切り。内外面回転によるナデ	1mmの砂粒を含む。	灰白色。良好。	須恵器。
317 S B068	皿	14.0 2.4 7.4	平な底部から体部は内湾して立ち上がり口唇部で外反して肥厚する。	右回転ロクロ成形。回転糸切り。内外面回転によるナデ	比較的粗い。	灰色。良好。	須恵器。

第IV章 清水田遺跡の調査

遺物番号	器形	法量 ¹⁾	器形の特徴	成・整形の特徴	胎土	色調・焼成	備考
318 S B068	椀	— — (8.0)	体部はゆるやかに内湾して立ち上がり高台は丸みを帯びている。	回転ロクロ成形。切り離し技法不明内外面ナデ。	良好。	灰白色。良好。	灰輪、須恵器。
319 S B068	杯	— — (8.8)	平な底部から器内が厚くしっかりした高台が付く。体下部～高台部 ²⁾ 残存。	回転ロクロ成形。回転糸切り。内外面回転によるナデ	軽石を含む。	明赤褐色。	須恵器。
320 S B069	甕	(20.8) — —	口縁部下半は直立し上半は外反し口唇部で尖り直立する。胴部はやや張る。	外面肩部横置削り胴部縦置削り。内面横置ナデ。	1mmの砂粒を含む。	明赤褐色。	
321 S B069	杯	(12.4) (4.0) (6.0)	平な底部から体部は直線的に口縁部に至る。 ³⁾ 残存。	口縁部横ナデ。体部～底部縦削り上半指押え。内面ナデ。	2mmの砂粒を含む。	浅黄褐色。	体部～底部スス付着。
322 S B069	椀	— — (7.4)	底部は平で体部は内湾する高台は直立し端部は平である。口縁部欠損。	外面体部縦削り。内面縦磨き。	1～2mmの砂粒を含む。	外面にふい黄褐色。内面黒色処理。	
323 S B069	杯	(12.0) (4.1) (5.8)	底部は平で体部は内湾して立ち上がり口縁部で外反する。 ⁴⁾ 残存。	口縁部横ナデ。体部～底部縦削り上半指押え。内面ナデ。	0.5～1mmの砂粒を含む。	にふい藍色。	
324 S B069	杯	(12.2) (3.9) (5.0)	底部は平で体部は外反して口縁部に至る。口縁部は肥厚し強い稜をもつ。 ⁵⁾ 残存。	口縁部横ナデ。体部～底部縦削り上半指押え。内面ナデ。	0.5～2mmの砂粒を少量に含む。	褐色。良好。	スス付着。
325 S B072	杯	— — (8.4)	平な底部は端部欠損の高台が付く。全体的に器内が厚い。体下部～高台部 ⁶⁾ 残存。	回転ロクロ成形。切り離し技法不明内外面ナデ。	0.5～1mmの砂粒を含む。	褐色。良好。	須恵器。
326 S B072	杯	(10.0) — —	口縁部は外反する。口縁部小破片。	回転ロクロ成形。内外面ナデ。	0.5mmの砂粒を含む。	にふい藍色。	墨書有り。須恵器。
327 S B072	杯	(13.4) — —	体部は直線的に口縁部に至る。口唇部は薄く尖る。底部欠損 ⁷⁾ 残存。	回転ロクロ成形。切り離し技法不明内外面ナデ。	雲母を含む。	灰白色。良好。	須恵器。
328 S B073	甕	(23.2) — —	口縁部下半は直立し上半は外反し外面に稜をもつ。胴部上位に張りをもつ。	口縁部横ナデ。外面胴部横、斜置削り。内面横置磨き	0.5～1mmの砂粒を含む。	褐色。良好。	
329 S B073	椀	(13.2) — —	丸い脚から内湾する体部は口唇部で外反する。ロクロ痕が強い。 ⁸⁾ 残存。	回転ロクロ成形。切り離し技法不明内外面ナデ。	0.5～1mmの砂粒を含む。	褐色。良好。	須恵器。
330 S B073	杯	— — (7.2)	平な底部に直立し端部が肥厚する高台が付く。底部～高台部 ⁹⁾ 残存。	回転ロクロ成形。切り離し技法不明内外面ナデ。	0.5mmの砂粒を含む。	にふい藍色。	須恵器。
331 S B074	甕	(20.0) — —	口縁部下半は直立し上半は外反し口唇部で尖り直立する。	口縁部横ナデ。外面肩部横置削り内面肩部横置ナデ	1～3mmの砂粒を含む。	褐色。良好。	
332 S B074	甕	(19.2) — —	口縁部は外反し胴部は直線的に広がる。口縁部～胴部上位 ¹⁰⁾ 残存。	口縁部横ナデ。外面胴部縦置削り内面胴部横置ナデ	1～3mmの砂粒を含む。	浅黄褐色。	
333 S B074	杯	(12.2) — —	体部は内湾し口縁部で外反する。体部に粘土痕有り。 ¹¹⁾ 残存。	口縁部横ナデ。外面体部縦削り。底部縦置削り。内面ナデ。	赤褐色の鉱物粒を含む。	褐色。良好。	
334 S B074	杯	10.0 3.3 4.8	平な底部から体部は内湾して口縁部に至る。口縁部 ¹²⁾ 欠損。	右回転ロクロ成形回転糸切り。内外面回転によるナデ	2～3mmの砂粒を含む。	褐色。良好。	須恵器。
335 S B074	皿	12.4 2.8 5.6	平な底部から体部は内湾して口縁部に至る。高台は低い。	回転ロクロ成形。回転糸切り。内外面回転によるナデ	良好。	灰白色。良好。	須恵器。
336 S B076	杯	(14.0) 5.5 (6.4)	平な底部から腰は肥厚し外反しつつ口縁部に至る。高台は厚く低い。	右回転ロクロ成形回転糸切り。内外面回転によるナデ	4mmの砂粒を少量含む。	灰白色。良好。	内外面スス付着。須恵器。
337 S B076	杯	(16.2) 6.0 (8.0)	底部は平で体部は内湾して立ち上がり口縁部でやや外反する。高台接合痕が残る。	回転ロクロ成形。切り離し技法不明内外面ナデ。	3mmの砂粒を少量含む。	灰白色。	須恵器。

遺物番号	器形	法 量 ^(cm)	器形の特徴	成・整形の特徴	胎 土	色 調・焼 成	備 考
338 S B 076	椀	(10.2) —	体部は外反し口縁部で強く外反する。口縁部へ体部小破片。	回転クロコ成形。内外面回転によるナデ。	密である。	灰色。良好。	緑釉。
339 S B 076	椀	(11.0) 3.9 6.4	内面底部に重ね置き痕有り。体部は内湾し口唇部で外反する。低い高台が付く。	右回転クロコ成形。回転未切り。内外面回転によるナデ。	密である。	灰色。良好。	緑釉。
340 S B 076	皿	(12.4) 2.3 6.4	平な蓋部から体部は直線的に外反し口縁部に至る。高台は強い痕がある。シ、残存。	回転クロコ成形。切り難し技法不明。内外面ナデ。	密である。	灰色。良好。	緑釉。
341 S B 077	壺	(30.0) — —	口縁部は外反し口唇部で面をもつ。胴部は直線的にのび頸部で僅をもつ。	口縁部横ナデ。外面胴部破産用リ。内面胴部横産ナデ。	赤褐色鉱物粒。1~3mmの砂粒を含む。	褐色。良好。	
342 S B 078	羽 蓋	(19.0) — —	口縁部は内傾し口唇部は平である。脚は三角形状で短かい。	口縁部横ナデ。	赤褐色鉱物粒を含む。	褐色。良好。	
343 S B 078	壺	— — (12.6)	平な蓋部で蓋内が厚い。底部シ残存。	外面底部産削リ。内面底部ナデ。	3mmの砂粒を含む。	褐色。良好。	
344 S B 078	杯	— — (7.0)	平な蓋部に直立した高台が付く。底部へ高台部残存。	右回転クロコ成形。回転未切り。内外面ナデ。	赤褐色鉱物、長石、石英を含む。	明赤褐色。	須恵釉。
345 S B 078	椀	— — (8.0)	縁内の薄い底部に肥厚ししっかりした高台が付く。蓋部へ高台部残存。	回転クロコ成形。切り難し技法不明。内外面ナデ。	黒雲母、角閃石を多量に含む。	褐色。良好。	須恵釉。
346 S B 079	杯	10.9 3.9 5.3	平な蓋部から体部は外反して口縁部に至る。外面体部に粘土痕が残る。完形。	口縁部横ナデ。外面体部指押え蓋部産削リ。内面ナデ。	0.5mmの砂粒を含む。	にぶい褐色。	墨書有り。
347 S B 079	杯	11.7 3.9 5.8	平な蓋部から体部は外反して口縁部に至る。外面体部に粘土痕が残る。ほぼ完形。	口縁部横ナデ。外面体部指押え蓋部産削リ。内面ナデ。	0.5mmの砂粒を含む。	にぶい褐色。	墨書有り。
348 S B 079	杯	12.4 3.2 6.1	平な蓋部から体部は外反して立ち上がり口縁部で内湾する。ほぼ完形。	口縁部横ナデ。外面体部指押え体部へ底部産削リ。	0.5mmの砂粒を含む。	褐色。良好。	墨書有り。
349 S B 079	杯	11.6 — —	体部は内湾し口縁部に至り口唇部で尖る。口縁部へ体部シ残存。	口縁部横ナデ。外面体部産削リ。内面ナデ。	0.5mmの砂粒を含む。	外面浅黄褐色。内面褐色。	墨書有り。
350 S B 079	杯	(12.0) — —	体部は外反し口縁部で直立する。口縁部に僅をもつ。口縁部へ体部シ残存。	口縁部横ナデ。外面体部指押え、産削リ。内面ナデ。	0.5~1mmの砂粒を含む。	褐色。良好。	墨書有り。
351 S B 079	杯	(10.3) (4.0) (6.2)	平な蓋部から体部は直立気味に外反して口縁部に至る。口唇部は尖る。	口縁部横ナデ。体部へ底部産削リ。上面指押え。内面ナデ。	赤褐色鉱物粒を含む。	にぶい黄褐色。	
352 S B 079	椀	(15.1) (4.7) (6.0)	平な蓋部から体部は内湾して口縁部は直立して口唇部で外反する。完形。	口縁部横ナデ。外面体部へ底部産削リ。内面産削リ。	赤褐色鉱物、金雲母、角閃石を含む。	外面褐色。内面黒色処理。良好。	
353 S B 079	杯	— — (6.4)	蓋部は平で縁から体部にかけて肥厚し口縁部に鋭く。クロコ痕が強い。高台は低い。	回転クロコ成形。切り難し技法不明。内外面ナデ。	1~5mmの砂粒を含む。	にぶい褐色。	内外面ス付着。須恵釉。
354 S B 079	椀	— — (6.2)	蓋部は平で体部は内湾する。高台は直立する。体部下位へ高台部残存。	外面体部下位産削リ。内面産削リ。	0.5mmの砂粒を含む。	外面褐色。内面黒色処理。良好。	
355 S B 079	椀	— — (7.0)	体部は内湾して立ち上がり高台は低く直立する。体部下位へ高台部破片。	外面体部下位産削リ。内面産削リ。	0.5~1mmの砂粒を含む。	外面明赤褐色。内面黒色処理。良好。	
356 S B 079	椀	(16.3) (6.9) (7.8)	蓋部は平で縁は強く体部は内湾し口唇部でやや外反する。高台は低い。	回転クロコ成形。回転未切り。外面ナデ。内面産削リ。	3mmの砂粒を含む。	外面にぶい褐色。内面黒色処理。	須恵釉。
357 S B 080	壺	— — (4.6)	頸をもつ胴部は直線的に狭まり平で厚い底部に鋭く内面胴部中に粘土痕有り	外面胴部位置磨き。下位ナデ。高台部産削リ。内面産削リ。	1~2mmの砂粒を含む。	外面暗赤褐色。内面暗褐色。	底部ス付着。

第IV章 清水田遺跡の調査

遺物番号	器形	法量 ¹⁾	器形の特徴	成・整形の特徴	胎土	色調・焼成	備考
358 S B080	杯	(12.0) (4.4) (6.0)	平な底部から体部はゆるやかに外反して口縁部に至る体部に粘土質有り。ㄥ残存。	口縁部横ナデ。外面体部指押え基部置削り。内面ナデ。	0.5～1.5mmの砂粒を含む。	にぶい橙色。	
359 S B080	杯	11.8 4.1 5.2	底部は平で体部は内湾して立ち上がり口縁部で外反する。体部に粘土質有り。	口縁部横ナデ。外面体部指押え。基部置削り。内面ナデ。	1mmの砂粒を含む。	浅黄褐色。	スス付着。
360 S B080	椀	— — (5.8)	平な底部に低い高台が付く。底部～高台部ㄥ残存。	回転ロクロ成形。切り難し技法不明内面置削り。暗文あり。	1～2mmの砂粒を含む。	外面橙色、内面黒色	須恵器。
361 S B080	杯	11.6 4.2 5.8	底部は丸く体部は外反して口縁部はわずかに内湾する体部に粘土質有り。	口縁部横ナデ体部～底部置削り上半指押え。内面ナデ。	0.5～1mmの砂粒を多量に含む。	にぶい橙色。	
362 S B080	杯	(11.6) (4.7) (5.6)	平な底部からゆるやかに外反して口縁部に至る。体部に粘土質有り。ㄥ残存。	口縁部横ナデ。外面体部指押え基部置削り。内面ナデ。	1～2mmの砂粒を含む。	にぶい黄褐色。	底部拓本有り29。須恵器。
363 S B080	杯	10.6 2.6 5.6	底部は中央がより上がり器内が薄い。体部はゆるやかに外反して口縁部に至る。	右回転ロクロ成形。回転糸切り。内外面回転によるナデ	1～2mmの砂粒を含む。	浅黄褐色。	須恵器。
364 S B080	杯	(9.8) (2.1) (5.2)	平な底部から腰部は器内が薄く体部は直線的に口縁部に至る。ㄥ残存。	右回転ロクロ成形。回転糸切り。内外面回転によるナデ	1mmの砂粒を含む。	浅黄褐色。	須恵器。
365 S B080	杯	(10.4) (2.5) (6.4)	平な底部から体部は内湾して口縁部で外反する。ㄥ残存。	右回転ロクロ成形。回転糸切り。内外面回転によるナデ	1mmの砂粒を含む。	浅黄褐色。	須恵器。
366 S B080	椀	(14.8) (4.3) 7.7	丸みを帯びた底部から体部は外反して口縁部に至る。ㄥ残存。	回転ロクロ成形。切り難し後底部置削り。内外面ナデ。	1mmの砂粒を含む。	にぶい橙色。	須恵器。
367 S B080	杯	(13.8) (5.5) (7.6)	平な底部から体部は直線的に口縁部に至る。高台は直立して肩部が平である。	回転ロクロ成形。切り難し技法不明内面ナデ。	0.5～1mmの砂粒を含む。	浅黄褐色。	須恵器。
368 S B081	杯	(12.1) 5.2 6.2	平な底部から体部は外反して直線的に口縁部に至る。高台は直立する。	回転ロクロ成形。回転糸切り。外面ナデ。内面置削り。	1～2mmの砂粒を含む。	にぶい橙色。	須恵器。
369 S B081	杯	(14.0) — —	体部は内湾し口縁部で外反する。ロクロ痕が強い。底部～高台部欠損。	回転ロクロ成形。切り難し技法不明内外面ナデ。	2～3mmの砂粒を含む。	明赤褐色。良好。	須恵器。
370 S B081	杯	(14.9) (6.0) (8.3)	底部は中央が薄く体部は内湾し口唇部で外反する。高台は「ハ」の字状にふんばる。	回転ロクロ成形。切り難し技法不明内外面ナデ。	1～4mmの砂粒を含む。	橙色。良好。	須恵器。
371 S B083	甕	(10.3) — —	口縁部下半は内傾し上半で外反し肩部で段をもつ。頸部は肥厚し肩部に鈍く。	外面肩部横置削り。肩部置削り。内面置削りナデ。	0.5～1mmの砂粒を多量に含む。	浅黄褐色。	
372 S B083	杯	12.6 4.1 5.4	底部は平で体部は外反し口縁部に至る。口縁部を縁ももつ。高台は尖る。完形。	口縁部横ナデ。外面体部～基部置削り。内面横刷毛目。	赤褐色鉱物粒、1mmの砂粒を含む。	にぶい橙色。	墨書有り。
373 S B083	杯	14.2 5.8 5.0	平な底部から外反しつづいて口唇部に至る。口唇部は肥厚しむ。高台は薄い。	口縁部横ナデ。外面体部指押え後置削り。内面ナデ。	赤褐色鉱物粒を含む。	浅黄色。	墨書有り。
374 S B083	杯	12.5 12.4 6.2	丸い底部から体部は内湾し口唇部で外反する。完形。	口縁部横ナデ。外面体部指押え基部置削り。内面ナデ。	0.5～2mmの砂粒を含む。	浅黄褐色。	墨書有り。
375 S B084～ 087	甕	(13.5) — —	口縁部は外反し頸部に窪みをもつ肥厚する肩部から肩部に鈍く。	口縁部横ナデ。外面肩部横置削り。内面置削りナデ	0.5～1mmの砂粒を含む。	浅黄褐色。	
376 S B084～ 087	杯	(14.2) (5.6) (5.8)	平な底部から体部は内湾し口縁部で外反する。ロクロ痕が強い。高台が低い。	回転ロクロ成形。底部糸切り後ナデ内外面ナデ。	1～2mmの砂粒を含む。	にぶい橙色。	須恵器。
377 S B084～ 087	杯	— — (7.6)	平な底部に低い高台が付く。体下部～高台部ㄥ残存。	回転ロクロ成形。回転糸切り。内外面回転によるナデ	0.5～1mmの砂粒を含む。	にぶい橙色。	須恵器。

遺物番号	器 形	量 量 ¹⁾	器 形 の 特 徴	成・整形の特徴	胎 土	色 調・焼 成	備 考
378 S B 084~ 087	杯	— — (6.8)	平な底部から体部は内湾して立ち上がる。高台は低い。体部~高台部 ²⁾ 残存。	回転ロクロ成形。 回転糸切り。内外面回転によるナデ	0.5~1mmの砂粒を含む。	にぶい橙色。	須恵器。
379 S B 088	碗	(14.8) — —	腰は丸みを帯び体部は内湾し口縁部に至る。ロクロ底が強い。底部~高台部欠損	回転ロクロ成形。 切り離し技法不明 内外面ナデ。	0.5~1mmの砂粒を含む。	外面にぶい橙色、内面黒色。	須恵器。
380 S B 088	碗	(13.0) — —	体部は内湾し口唇部で外反する。ロクロ底が強い。 ³⁾ 残存。	回転ロクロ成形。 切り離し技法不明 内外面ナデ。	0.5mmの砂粒を含む。	にぶい黄褐色。	内外面ス付着。須恵器。
381 S B 088	碗	— — (6.4)	底部は平で体部は内湾する高台は直立する。体部下位~高台部残存。	外面体部削削り。 内面ナデ。	1~2mmの砂粒を含む。	橙色。良好。	高台
382 S B 088	杯	(12.8) (4.4) 6.5	平な底部から体部は内湾して口唇部で外反する。ロクロ底が強い。 ³⁾ 残存。	右回転ロクロ成形 回転削削り。内外面回転によるナデ	良好。	浅黄褐色。	底部拓本有り30。須恵器。
383 S B 088	杯	(10.2) (2.7) 5.5	平な底部から腰は丸みを帯びて立ち上がり口縁部で外反する。 ³⁾ 残存。	回転ロクロ成形。 回転糸切り後削ナデ。内外面ナデ。	0.5mmの砂粒を多量に含む。	橙色。良好。	須恵器。
384 S B 088	杯	(14.0) — —	体部は内湾し口縁部に至り、口唇部で尖る。 ³⁾ 残存。	口縁部横ナデ。 外面体部削削り。 内面ナデ。	1mmの砂粒を含む。	にぶい橙色。	
385 S B 103	杯	(12.4) 4.0 (6.8)	底部は平で体下部は外反し口縁部で内湾し口唇部で外反する。 ³⁾ 残存。	口縁部横ナデ。外面体部削削り。内面ナデ。	0.5~1mmの砂粒と金雲母を含む。	にぶい橙色。	墨書有り。
386 S B 103	碗	13.4 4.3 7.8	丸い底部から体部は内湾しつつ口縁部に至る。口唇部は薄く尖る。 ³⁾ 残存。	口縁部横ナデ。外面体部ナデ。底部削削り。内面ナデ。	0.5~1mmの砂粒、金雲母を含む。	橙色。良好。	墨書有り。
387 S B 124	杯	(14.2) 4.9 8.8	丸い底部から体部は内湾し口縁部で外反する。器厚がほぼ同じ。 ³⁾ 残存。	口縁部横ナデ。外面体部削削り。内面ナデ。	1~2mmの砂粒、金雲母を含む。	橙色。良好。	墨書有り。
388 S B 094	杯	— — 6.6	底部外面にへら記号有り。体部下位~高台部残存。	回転ロクロ成形。 内外面体部~高台部回転によるナデ	良好。	にぶい橙色。	へら記号有り。須恵器。
389 S B 69・ 76・81	杯	— — 8.4	底部外面にへら記号有り。体部下位~高台部残存。	回転ロクロ成形。 内外面体部~高台部回転によるナデ	0.5mmの砂粒を含む。	浅黄褐色。	へら記号有り。須恵器。
390 S B 079	碗 352 と同一			内面に増紋あり。			
391 A-24	碗	(20.0) — —	内面底部に重ね焼き時の痕有り。体部は内湾し口唇部で外反する。高台端部欠損。	回転ロクロ成形。 内外面回転によるナデ。	密である。	灰色。良好。	緑釉。
392 A-24	皿	— — —	体部は外反して口縁部に至る。口縁部~体部小破片。	回転ロクロ成形。 内外面回転によるナデ。	密である。	灰色。良好。	緑釉。
393 C-25	碗	— — —	体部は外反する。体部小破片。	回転ロクロ成形。 内外面回転によるナデ。	密である。	灰色。良好。	緑釉。
394 表探	皿	— — —	体部は外反して口縁部に至る。口縁部小破片。	回転ロクロ成形。 内外面回転によるナデ。	密である。	灰白色。良好。	緑釉。
396 表探	皿	— — —	体部は外反し口縁部に至る口縁部~体部小破片。	回転ロクロ成形。 内外面回転によるナデ。	密である。	灰色。良好。	緑釉。
396 S D 014	羽 蓋	(26.0) — —	口縁部は内傾し口唇部は平である。胴部上位で張りをもち脚は三角形状である。	口縁部横ナデ。 内外面ナデ。	0.5~1mmの砂粒を含む。	灰白色。良好。	
397 S D 014	壺	— — (14.5)	胴部下位は直線的に狭まり平な底部に続く。胴部下位~底部 ²⁾ 残存。	外面削削りナデ。底部削削り。内面削削り~底部ナデ。	1~2mmの砂粒を多量に含む。	灰白色。良好。	

第IV章 清水田遺跡の調査

遺物番号	器形	法量 ^(a)	器形の特徴	成・整形の特徴	胎土	色調・焼成	備考
398 S D014	甕	— — (10.4)	中位に盛りをもつ胴部は中央の肥厚する平底に続く。胴部下半～底部残存。	外面胴部～底部斜削削削。内面胴部横削ナデ。底部ナデ。	1～2mmの砂粒を多量に含む。	にぶい橙色。	
399 S D014	甕	— — 10.5	中位に盛りをもち丸みを帯びた胴部は丸い底に続く。胴部下半～底部 \times 残存。	外面胴部斜削削削。内面横削ナデ。	1～2mmの砂粒を多量に含む。	橙色。良好。	
400 S D014	甕	(11.8) — —	口縁部下半は内傾し上半は外反し口唇部が尖る。肩部は腰をもち胴部上位で張る。	外面肩部横削削削。内面胴部ナデ。	1～2mmの砂粒を多量に含む。	にぶい赤褐色。	外面スス付着。
401 S D014	甕	— — 9.3	頸部は外反し口縁部欠損。胴部は肩部が張り台部が付く。ロクロ痕が強い。	回転ロクロ成形。胴部・底部回転削削。内外面ナデ。	1～2mmの砂粒を含む。	灰色。良好。	須恵器。
402 S D014	甕	— — (8.2)	胴部は中位が張り低い台部が付く。ロクロ痕が強い。胴部下半～台部 \times 残存。	回転ロクロ成形。切り離し技法不明内外面ナデ。	1～2mmの砂粒を多量に含む。	青灰色。良好。	須恵器。
403 S D014	甕	— — (10.6)	胴部は狭まりつつ底部に緩き低い台部が付く。胴部下半～台部 \times 残存。	回転ロクロ成形。底部寛切り。内外面回転によるナデ。	1～2mmの砂粒を少量含む。	にぶい橙色。	外面スス付着。須恵器。
404 S D014	鉢	(19.6) — —	体部は内湾し口縁部に至り、口唇部で尖る。口縁部～体部 \times 残存。	回転ロクロ成形。外面体部下位置削削。内外面ナデ。	1～2mmの砂粒を含む。	外面灰色、内面灰黄色。	須恵器。
405 S D014	杯	13.0 4.0 8.0	平な底部から体部は内湾し口縁部で外反する。 \times 残存。	口縁部横ナデ。外面体部～底部削削。内面ナデ。	1～2mmの砂粒を含む。	橙色。良好。	
406 S D014	杯	12.5 4.1 6.0	底部は平で体部は内湾し口縁部で内湾し薄くなり外反する。 \times 残存。	口縁部横ナデ体部～底部削削。上半指押え。内面ナデ。	1mmの砂粒を少量含む。	にぶい橙色。	
407 S D014	杯	12.1 4.3 7.0	底部は平で体部は内湾して立ち上がり直線的に口縁部に至る。 \times 残存。	口縁部横ナデ。外面体部指押え。底部削削。内面ナデ。	1～2mmの砂粒を含む。	にぶい橙色。	
408 S D014	杯	(16.0) — —	体部は内湾して口縁部で外反する。口縁部小破片。	口縁部横ナデ。内外面ナデ。	赤褐色粒を含む。	明赤褐色。	黒書有り。
409 S D014	杯	(13.4) (3.3) (10.6)	底部は平で体部は内湾して立ち上がり口縁部で外反する。 \times 残存。	口縁部横ナデ。外面体部～底部削削。内面ナデ。	1～2mmの砂粒を含む。	橙色。良好。	
410 S D014	杯	(12.4) (4.3) (6.4)	底部は平で体部は内湾して立ち上がり口唇部で外反する。 \times 残存。	口縁部横ナデ。外面体部指押え。底部削削。内面ナデ。	0.5mmの砂粒を含む。	にぶい橙色。	スス付着。
411 S D014	杯	(12.2) (4.5) (7.0)	平な底部から体部は内湾して立ち上がり口縁部でまた内湾する。 \times 残存。	口縁部横ナデ体部～底部削削。上半指押え。内面ナデ。	1mmの砂粒を含む。	淡黄褐色。	
412 S D014	杯	13.0 4.9 7.2	平な底部から体部は内湾して口縁部で直立気味に外反する。高台は直立する。	口縁部横ナデ。外面体部指押え。下半削削。内面ナデ。	0.5～1mmの砂粒を含む。	にぶい橙色。	
413 S D014	杯	(13.2) — —	底部は平で体部は内湾し口縁部で外反する。口縁部～底部 \times 残存。	口縁部横ナデ。外面体部削削。内面直削。	1mmの砂粒を含む。	外面にぶい橙色、内面黒色処理。	
414 S D014	杯	(11.4) (3.6) (4.6)	底部は厚く腰は丸みを帯びて立ち上がり口縁部で外反する。 \times 残存。	回転ロクロ成形。回転糸切り。内外面回転によるナデ。	1mmの砂粒を含む。	にぶい橙色。	須恵器。
415 S D014	杯	(12.3) (4.2) (6.0)	平な底部から体部は内湾し口縁部で外反する。 \times 残存。	口縁部横ナデ。外面体部指押え。底部削削。内面ナデ。	1～2mmの砂粒を含む。	淡橙色。	
416 S D014	杯	(12.2) (3.6) (5.8)	平な底部から体部はゆるやかに外反して口縁部に至る。 \times 残存。	右回転ロクロ成形。回転糸切り。内外面回転によるナデ。	1～2mmの砂粒を多量に含む。	灰色。良好。	須恵器。
417 S D014	杯	(13.4) (3.5) (6.2)	平な底部から体部はゆるやかに外反して口縁部に至る。 \times 残存。	右回転ロクロ成形。回転糸切り。内外面回転によるナデ。	1mmの砂粒を含む。	灰色。良好。	底部拓本有り31。須恵器。

遺物番号	器 形	法 量 ^(a)	器 形 の 特 徴	成・整形の特徴	胎 土	色 調・焼 成	備 考
418 S D014	杯	(13.4) (4.4) (7.2)	底部は平でゆるやかに外反し口縁部で内湾する。口縁部は平でゆるやかに外反し、口縁部でさらに外反する。口縁部は平でゆるやかに外反し、口縁部でさらに外反する。口縁部は平でゆるやかに外反し、口縁部でさらに外反する。	口縁部横ナデ。外面体部指ナデ。底面直削り。内面ナデ。	1～2mmの砂粒を含む。	にぶい橙色。	スス付着。
419 S D014	杯	(13.4) (4.4) (7.0)	体部はゆるやかに外反し、口縁部でさらに外反する。口縁部は平でゆるやかに外反し、口縁部でさらに外反する。	口縁部横ナデ。外面体部指ナデ。底面直削り。内面ナデ。	0.5mmの砂粒を含む。	浅黄褐色。	
420 S D014	杯	(14.2) (4.4) (7.4)	平な底部から体部は内湾し口縁部で外反する。口縁部は平でゆるやかに外反し、口縁部でさらに外反する。	口縁部横ナデ。外面体部～底部直削り。内面直削り。	1～2mmの砂粒を含む。	外面橙色、内面黒色処理。良好。	体部スス付着。
421 S D014	杯	12.4 4.1 6.6	平な底部から体部はゆるやかに外反し口縁部で外反する。口縁部は平でゆるやかに外反し、口縁部でさらに外反する。	右回転ロクロ成形。回転未切り。内外面回転によるナデ。	0.5mmの黒色砂粒を多く含む。	明灰褐色。	底部拓本有り32。須恵器。
422 S D014	杯	(14.0) (5.1) (7.3)	平な底部から体部はゆるやかに外反して口縁部に至る。口縁部は平でゆるやかに外反し、口縁部でさらに外反する。	回転ロクロ成形。回転未切り。内外面回転によるナデ。	1～2mmの砂粒を含む。	にぶい赤褐色。	須恵器。
423 S D014	杯	11.6 3.2 5.8	平な底部から体部は外反し口縁部に至る。腰の断面が厚い。完形。	右回転ロクロ成形。回転未切り。内外面回転によるナデ。	1～2mmの砂粒を少量含む。	赤褐色。良好。	底部拓本有り33。須恵器。
424 S D014	杯	12.3 3.5 5.0	平な底部から体部はゆるやかに外反して直線的に口縁部に至る。完形。	右回転ロクロ成形。回転未切り。内外面回転によるナデ。	1～5mmの砂粒を含む。	にぶい橙色。	底部拓本有り34。須恵器。
425 S D014	杯	(12.8) (3.7) (6.0)	平な底部から体部は外反して直線的に口縁部に至る。口縁部は平でゆるやかに外反し、口縁部でさらに外反する。	右回転ロクロ成形。回転未切り。内外面回転によるナデ。	1mmの砂粒を含む。	灰色。良好。	須恵器。
426 S D014	杯	(13.1) (6.0) (3.9)	平な底部から体部は内湾して口縁部に至る。口縁部は平でゆるやかに外反し、口縁部でさらに外反する。	右回転ロクロ成形。回転未切り。内外面回転によるナデ。	1～2mmの砂粒を含む。	灰白色。良好。	底部拓本有り35。須恵器。
427 S D014	杯	(13.4) (4.5) (6.8)	平な底部から体部はゆるやかに外反して口縁部に至る。口縁部は平でゆるやかに外反し、口縁部でさらに外反する。	回転ロクロ成形。回転未切り。内外面回転によるナデ。	1～2mmの砂粒を多量に含む。	赤灰色。	須恵器。
428 S D014	杯	(15.2) (5.6) (6.8)	平な底部から体部は内湾しつつ口縁部に至る。口縁部は外反し高台は直立する。	右回転ロクロ成形。回転未切り。内外面回転によるナデ。	1mmの砂粒を含む。	暗灰色。	底部拓本有り36。須恵器。
429 S D014	碗	(14.7) (6.0) (7.3)	平な底部から体部は内湾して口縁部に至る。高台は低く厚い。	回転ロクロ成形。切り離し技法不明。内外面直削り。	0.5mmの砂粒を含む。	外面にぶい黄褐色、内面黒色処理。	須恵器。
430 S D014	碗	(16.0) (6.8) (7.8)	底部は平で腰は丸みを帯び体部は内湾しつつ口縁部で外反し高台端部は平である。	回転ロクロ成形。底部未切り後ナデ。内外面ナデ。	1mmの砂粒を含む。	にぶい橙色。	須恵器。
431 S D014	杯	(14.4) — —	体部は直線的に口縁部で外反する。口縁部～体部下位に直削り。完形。	口縁部横ナデ。外面体部指ナデ。内面体部ナデ。	赤褐色。白色軽石粒を含む。	浅黄褐色。	墨書有り。
432 S D014	杯	(14.5) (6.7) (7.8)	底部は平で体部は内湾し口縁部で外反し口唇部は肥厚する。高台は端部が平。	右回転ロクロ成形。回転未切り。内外面回転によるナデ。	1～2mmの砂粒を含む。	灰色。良好。	底部拓本有り37。須恵器。
433 S D014	杯	(14.0) (5.5) (6.4)	底部は平で体部は内湾し口縁部で外反する。口縁部～底部に直削り。完形。	右回転ロクロ成形。回転未切り。内外面回転によるナデ。	1～2mmの砂粒を含む。	浅黄褐色。	須恵器。
434 S D014	杯	(15.0) — —	平な底部から体部は直線的に立ち上がり口縁部で外反する。口縁部～底部に直削り。完形。	回転ロクロ成形。回転未切り。内外面回転によるナデ。	1～2mmの砂粒を含む。	灰白色。良好。	須恵器。
435 S D014	杯	(14.0) — —	体部は外反しつつ口縁部に至る。口縁部は平でゆるやかに外反し、口縁部でさらに外反する。	回転ロクロ成形。切り離し技法不明。内外面ナデ。	1～2mmの砂粒を含む。	灰色。良好。	須恵器。
436 S D014	杯	(14.7) (5.9) (7.3)	平な底部から体部は内湾し口縁部で外反する。口縁部は平でゆるやかに外反し、口縁部でさらに外反する。	回転ロクロ成形。底部未切り後ナデ。内外面ナデ。	1mmの砂粒を含む。	にぶい黄褐色。	須恵器。
437 S D014	杯	(12.8) (4.7) (7.5)	高くて事に付いた高台の上に残り杯部が付く。底部は肥厚し直線的に口縁部に至る。	回転ロクロ成形。切り離し技法不明。内外面ナデ。	0.5mmの黒色砂粒を含む。	にぶい橙色。	須恵器。

第IV章 清水田遺跡の調査

遺物番号	器形	法量 ¹⁾	器形の特徴	成・整形の特徴	胎土	色調・焼成	備考
438 S D014	杯	(9.6) (2.2) (5.8)	肥厚した底部から体部は外反しつつ口縁部に至り口縁端部で開く。ㄱ残存。	右回転ロクロ成形 回転糸切り。内外面回転によるナデ	1mmの砂粒を少量含む。	ぶいじ色。	須恵器。
439 S D014	杯	(12.5) (4.0) (5.9)	平な底部から体部はゆるやかに外反して口縁部に至る口唇部は肥厚し失る。ㄱ残存。	右回転ロクロ成形 回転糸切り。内外面回転によるナデ	1～2mmの砂粒を含む。	灰色。良好。	底部拓本有り38。須恵器。
440 S D014	杯	(12.0) (3.4) (5.7)	平な底部から体部は内湾して立ち上がり口縁部は外反する。ㄱ残存。	右回転ロクロ成形 回転糸切り。内外面回転によるナデ	1mmの砂粒を含む。	灰色。良好。	須恵器。
441 S D014	椀	— — 4.9	平な底部から体部はゆるやかに内湾する。体部へ底部ㄱ残存。	右回転ロクロ成形 回転糸切り。内外面回転によるナデ	長石、黒曹母を含む。	灰白色。良好。	鎌倉。底部拓本有り39。須恵器。
442 S D014	杯	12.7 3.5 5.8	平な底部から体部はゆるやかに外反して口縁部に至るロクロ痕が強い。ほぼ完形。	右回転ロクロ成形 回転糸切り。内外面回転によるナデ	1～4mmの砂粒を含む。	灰色。良好。	底部拓本有り40。須恵器。
443 S D014	杯	(13.0) (3.8) (6.0)	平な底部から体部はゆるやかに外反して口縁部に至るロクロ痕が強い。ㄱ残存。	右回転ロクロ成形 回転糸切り。内外面回転によるナデ	0.5～2mmの砂粒を含む。	濁灰色。	須恵器。
444 S D014	椀	12.4 4.0 6.8	底部は平で腰は肥厚し体部は内湾しつつ口縁部に至る口唇部は尖る。ほぼ完形。	口縁部横ナデ。外面摩擦している内面磨き。	1mmの砂粒を含む。	外面ぶいじ色、内面黒色処理。	
445 S D014	杯	(12.6) (4.2) 7.0	底部は平で体部は内湾し口縁部に至る。器厚がほぼ均一である。ㄱ残存。	口縁部横ナデ。外面体部へ底部磨き。内面磨き。	1～2mmの砂粒を含む。	外面ぶいじ色、内面黒色処理。	
446 S D014	杯	(13.2) (4.3) (7.5)	平な底部から体部は外反して立ち上がり口縁部に至る腰脚が強い。ㄱ残存。	右回転ロクロ成形 回転糸切り。外面ナデ。内面磨き	0.5mmの砂粒を含む。	外面ぶいじ色、内面黒色処理。	須恵器。
447 S D014	椀	(6.5) (9.0)	腰は丸みを帯び体部は外反して口縁部に至る。高台は「ハ」の字状にふんばる。	回転ロクロ成形。 切り離し技法不明 内面磨き。	1～2mmの砂粒を多量に含む。	外面灰白色、内面黒色処理。良好。	須恵器。
448 S D014	杯	(8.8) — —	丸い底部から体部は内湾して立ち上がる。底部ㄱ欠損	体部横ナデ。 外面底部磨き。内面底部ナデ。	1～2mmの砂粒を含む。	褐色。良好。	
449 S D014	杯	(5.9) (2.8) —	丸い底部から体部は直立して口唇部が尖る。外面体部中に腰がある。ㄱ残存。	体部横ナデ。外面底部磨き後摺り。内面ナデ。	0.5～1mmの砂粒を含む。	褐色。良好。	
450 S D014	埴	— — (3.0)	胴部は丸みをもち狭まりながら平な底部に続く。	外面胴部下位へ底部磨き。内面ナデ。	1～2mmの砂粒を含む。	淡赤褐色。	
451 S D014	壺	— — (6.4)	胴部下位は狭まりながら平な底部に続く。	外面胴部下位斜削り。直部磨き。内面ナデ。	1mmの砂粒を多量に含む。	淡褐色。	
452 S D014	皿	(13.6) (3.3) (6.6)	底部は平で体部は内湾し口縁部で外反し口唇部は肥厚する。高台は丁寧に付く。	回転ロクロ成形。 切り離し技法不明 内外面ナデ。	0.5mmの砂粒を含む。	灰白色。良好。	灰釉。須恵器。
453 S D014	椀	(16.4) (4.9) (9.0)	底部は平で体部は内湾し口唇部で外反する。高台は胴部で内湾する。ㄱ残存。	回転ロクロ成形。 切り離し技法不明 内外面ナデ。	0.5mmの砂粒を少量含む。	灰色。良好。	灰釉。須恵器。
454 S D014	皿	(19.4) (3.9) (9.1)	体部は外反し口唇部で強く外反する。高台は端部で内湾する。ロクロ痕が強い。	回転ロクロ成形。 底部回転磨き後ナデ。内外面ナデ	1mmの砂粒を含む。	灰白色。良好。	灰釉。須恵器。
455 S K029	杯	(13.2) (4.5) —	丸い底部から体部は窪みを作って外反し口唇部は尖る。ㄱ残存。	体部横ナデ。 外面底部磨き。内面底部ナデ。	1～5mmの砂粒を含む。	褐色。良好。	
456 S K033	高杯	17.0 — —	体部は内湾し口縁部で外反し端部で強く外反する。脚部は「ハ」の字状に広がる。	外面体部横磨き。脚部磨き。内面杯部磨き。	2～3mmの砂粒を含む。	褐色。良好。	
457 S K036	杯	(13.0) (4.7) —	丸い底部から体部は窪みを作って外反し口唇部は強く外反しつつむ。ㄱ残存。	体部横ナデ。 外面底部磨き。内面ナデ。	0.5mmの砂粒を少量含む。	褐色。良好。	

遺物番号	器 形	法 量 ¹⁾	器 形 の 特 徴	成・彫りの特徴	胎 土	色 調・焼 成	備 考
458 S K036	杯	(14.0) (5.2) —	丸い底部から体部は窪みを 作って外反し口唇部は直立 して突る。ㄱ残存。	体部横ナデ。 外面磨削り後刷毛 目。内面ナデ。	1～2mmの砂 粒を含む。	ぶい橙色。	
459 S K036	杯	(11.7) (6.5) —	丸い底部から口縁部は内傾 する。ㄱ残存。口唇部欠損。	回転クロコ成形。 基部回転磨削り。 内外面ナデ。	1～3mmの砂 粒を含む。	灰色。良好。	須恵器。
460 S K040	壺	— — (13.0)	胴部中位で張りがあり狭ま りながら底部に狭く。低い 台部が付く。胴下半～底 部ㄱ残存。	回転クロコ成形。 底部磨削り。内外 面回転によるナデ	2～3mmの砂 粒を含む。	外面灰黄色、内面に ぶい橙色。	須恵器。
461 S K041	杯	13.8 5.0 —	丸い底部から体部は直立し 外面中央で肥厚し口唇部で 外反し突る。完形。	体部横ナデ。 外面底部磨削り後 磨き。内面ナデ。	2mmの砂粒を 含む。	橙色。良好。	
462 S K043	杯	12.0 4.6 —	丸い底部から体部は窪みを 作って外反し内面中位に弱 い縁をもつ。完形。	体部横ナデ。 外面底部磨削り。 内面底部ナデ。	2～3mmの砂 粒を含む。	ぶい橙色。	底部黒帯有 り。
463 S K058	杯	(14.4) (6.9) (8.2)	体部は内湾し口縁部で外反 する。高台は狭く端部は平 である。ㄱ残存。	回転クロコ成形。 切り離し技法不明 内外部ナデ。	1mmの砂粒を 含む。	灰白色。良好。	須恵器。
464 S K069	罎	— — (3.4)	口縁部は外反し中位で縁を もつ。胴部は上位で張りを もも平な底部に狭く。	外面胴部ナデ。胴 下半磨削り。内面 口縁、底部磨ナデ	2～3mmの砂 粒を含む。	ぶい橙色。	
465 S B006	砥石	幅 5.2 高さ 1.8	4面の使用面を持つ。約ㄱ 残存。			灰白色。	スス付着。
466 S B007	砥石	幅 5.2 高さ 7.8	4面の使用面を持つ。約ㄱ 残存。			淡黄色。	
467 S B009	砥石	幅 4.7 高さ 2.1	3面の使用面を持つ。約ㄱ 残存。			淡黄色。	
468 S B008	砥石	幅 4.4 高さ 1.4	4面の使用面を持つ。約ㄱ 残存。			灰白色。	
469 S B031	砥石	幅 5.2 高さ 2.3	4面の使用面を持つ。約ㄱ 残存。			オリーブ灰色。	
470 S B031	砥石	幅 3.3 高さ 1.7	4面の使用面を持つ。約ㄱ 残存。			淡黄色。	
471 S B067	砥石	幅 4.9 高さ 3.6	2面の使用面を持つ。約ㄱ 残存。			オリーブ灰色。	
472 S B084～ 087	砥石	幅 4.3 高さ 2.7	2面の使用面を持ち、径3 mmの穿孔有り。携帯用の砥 石。			ぶい橙色。	
473 S B092	砥石	幅 4.5 高さ 3.1	4面の使用面を持つ。約ㄱ 残存。			ぶい赤褐色。	
474 S B113	砥石	幅 4.6 高さ 2.8	4面の使用面を持つ。約ㄱ 残存。			灰白色。	
475 S B118	砥石	幅 6.1 高さ 5.1	3面の使用面を持つ。約ㄱ 残存。			緑灰色。	
476 S B101	支脚	— — —	中空の支脚で底部と思われ る一部である。	粘土層の巻き上げ 成形。外面に磨削 り痕有り。	赤褐色の鉱物 粒、軽石を含 む。	明赤褐色。良好。	
477 S B101	支脚	— — —	楕円形を呈し中央の支脚で 上下が欠損している。	磨き、指押え痕 有り。	赤褐色の鉱物 粒を含む。	橙色。良好。	
478 S B001～ 002	土 鐘	長さ 3.7 径 0.9	紡錘形を呈し長軸方向に径 2mmの孔が通る。完形。	指押え痕が見ら れる。	1mmの砂粒を 少量含む。	ぶい橙色。	
479 S B004・ 024	土 鐘	長さ 2.9 径 0.9	紡錘形を呈し長軸方向に径 1.5mmの孔が通る。端部欠 損。		1mmの砂粒を 含む。	ぶい赤褐色。	
480 S B014	土 鐘	長さ 3.1 径 1.0	紡錘形を呈し長軸方向に3 mmの孔が通る。完形。		0.5mmの砂粒 を含む。	淡黄褐色。	

第四章 清水田遺跡の調査

遺物番号	器形	法量(g)	器形の特徴	成・整形の特徴	胎土	色調・焼成	備考
481 S B014	土 鉢	長さ 3.3 径 1.0	紡錘形を呈し長軸方向に径2mmの孔が通る。変形。		0.5mmの砂粒を含む。	浅黄褐色。	
482 S B005	土 鉢	長さ 5.2 径 2.2	紡錘形を呈し長軸方向に径5mmの孔が通る。ワケ存。		やや良好。	黒褐色。	
483 S B112	土 鉢	長さ 2.7 径 1.7	紡錘形を呈し長軸方向に径6mmの孔が通る。ワケ存。		良好。	にぶい黄褐色。	
484 S B023	紡錘車	径 5.1 高さ 0.9	宿磨部を胴部を利用。平で丸く、円形にまわりを削り中心を径6mmに穿つ孔有り。	表面同心円状の叩き目、裏面平行状の叩き目有り。	0.5~1.5mmの砂粒を含む。	灰白色。	
485 S B101	紡錘車	径 4.5 高さ 1.7	台形状で円形にまわりを削り中心を径6mmに穿つ孔有り。一部欠損。	裏削り有り。	良好。	オリーブ黄色。	
486 S B113	紡錘車	径 4.5 高さ 1.8	円形にまわりを削り中心を径5mmに穿つ孔有り。変形。		0.5~1mmの砂粒を含む。	にぶい褐色。	
487 S B054	埴 輪	18.2 — —	口縁部は直立気味に外反する。突帯は台形で半円の透孔をもつ。口縁~上反突帯残存。	口唇部横ナデ。外面第1次整形縦刷毛目。内面指ナデ。	軽石、0.5mmの砂粒を含む。	外面明赤褐色、内面にぶい黄褐色。	
488 A-24	埴 輪	— — —	胴部は直立気味に外反する突帯は台形である。胴部残存。	外面第1次整形縦刷毛目。内面第1次整形斜刷毛目。	赤褐色鉱物、軽石を含む。	明褐色。	
489 A-24	埴 輪	— — —	胴部は直立気味に外反し突帯は台形である。円形または半円の透孔をもつ。	外面第1次整形縦刷毛目。内面第1次整形斜刷毛目。	赤褐色鉱物、軽石を含む。	明褐色。	
490 A-24	埴 輪	— — —	胴部は直立気味に外反し突帯は台形である。半円の透孔をもつ。	外面第1次整形縦刷毛目。内面指ナデ。	赤褐色鉱物、石英、角閃石を含む。	にぶい黄褐色。	
491 A-26	埴 輪	18.6 — —	口縁部は直立気味に外反し突帯は台形で半円の透孔をもつ。口縁~第2突帯残存。	口唇部横ナデ。外面第1次整形縦刷毛目。内面指ナデ。	赤褐色鉱物、軽石、角閃石を含む。	褐色、良好。	
492 A-26	埴 輪	— — —	胴部は直立気味に外反し突帯は台形である。粘土痕有り。	外面第1次整形縦刷毛目。内面指ナデ。	石英、長石、軽石を含む。	にぶい褐色。	
493 B-24	埴 輪	— — —	胴部は直立気味に外反し突帯は台形である。粘土痕有り。	外面第1次整形縦刷毛目。内面指ナデ。	赤褐色鉱物、石英、軽石を含む。	外面褐色、内面赤褐色。良好。	
494 B-25	埴 輪	— — —	突帯は台形である。	外面第1次整形縦刷毛目後第2次整形横刷毛目。内面指ナデ。	0.5mmの砂粒を含む。	にぶい黄褐色。	
495 C-24	埴 輪	— — —	胴部は直立気味に外反し台形の突帯をもつ。粘土痕有り。	外面第1次整形縦刷毛目。内面指ナデ。	赤褐色鉱物、石英、長石を含む。	にぶい褐色。	
496 E-24	埴 輪	— — —	胴部は直立気味に外反し台形の突帯をもつ。粘土痕有り。	外面第1次整形縦刷毛目。内面指ナデ。	赤褐色鉱物、軽石、角閃石を含む。	褐色、良好。	
497 S D014	刺	重量 4.98g	径0.15cmの穿孔有り。		石製模造品。	暗青灰色。	法量は図中参照。
498 S D014	刺	重量 9.32g	片面穿孔で径0.21cm(裏側0.18cm)。		石製模造品。	灰オリーブ色。	法量は図中参照。
499 S B040	石 帯	重量 25.0g	黒い斑の入った大理石と思われる。裏面に4箇所の繋結有り。		石製品。	灰黄色。	法量は図中参照。
500 S D014	石 帯	重量 7.3g	粘板岩と思われる。裏面に3箇所の繋結有り。		石製品。	黒色。	法量は図中参照。

第V章 小町田遺跡の調査

1 調査概要

概要 **発掘調査の経過** 昭和48年度から開始された太田東部地区県営ほ場整備事業に伴う「太田東部遺跡群」の発掘調査も最終の5年次をむかえた。本年度は、国道122号（太田バイパス）に隣接する水田予定地の表土削平部分が調査対象地となった。本遺跡の取り扱いについて例年どおり、経費は群馬県耕地面積課が負担し、調査の事業主体は館林土地改良事務所、太田東部事業所が担当し、発掘を群馬県教育委員会文化財保護課が太田市教育委員会と太田市史編集室の協力を得て実施した。調査期間は昭和53年1月から4月まで発掘調査面積は5,200㎡であった。

遺跡の環境 本遺跡は渡良瀬川の氾濫により形成された沖積地の南西部に位置する。本遺跡も含めて、この氾濫した低地中に水性堆積ロームと考えられる微高地が埋没している。これらは旧渡良瀬川の流路に沿うように北から南へ細長く続くものが多いようである。本遺跡の立地は、ボーリング調査によると、西に接する休台地に連続する低台地でなく、南東の低台地から北東にのびる微高地上に連続する舌状の先端に位置していることが判明している（文献、31）。本遺跡では、縄文時代の前期、中期を中心に分布する遺構と、古墳時代後期～平安時代の集落が検出された。その安定した連続性は、前述の埋積した微高地上の立地といった地理的特性も含めて今後の調査研究の重要な課題ともなる。本遺跡と同時代を示す周辺の遺跡を概括しておきたい。特に本遺跡で出土量の多い縄文前期前半の代表的な周辺遺跡は南西方向1kmに位置している間之原遺跡で集落を形成している。縄文中期後半になると周辺の遺跡（文献、23、25、30）に比べて本遺跡が量、質とも中核的集落の1つになっていることがわかる。古墳時代後期～平安時代になると、集落は微高地、台地縁辺に限らず分布するようになり、対応する生産地の拡大と安定傾向が予想される。このことは、2.8km北方向の位置に4世紀末から5世紀にかけて出現する矢場業師塚、藤本観音山古墳や、5世紀中葉に北西3kmの位置に出現する太田天神山古墳など東国における大首長墓系列を支える地方の小首長層の存在を推定させる。また、本遺跡S D05溝出土の木製品の様相や北西1.5kmより出土の墨書土器からも農村集落とは性格の異なる集落、積極的に意味づけるならば、官衙的性格を持った集落の存在を考えることができる。

発掘された遺跡の変遷 縄文時代の遺構は土壌のみである。前期が2基、中期が4基検出され、時期を特定できた。本遺跡の国道122号（太田バイパス）調査分と重複させてみると、これらの遺構は調査区台地中央部で東端に位置していることがわかる。古墳時代の遺構は鬼高期の住居址8軒、井戸1基、溝1条である。太田バイパス調査分と重複させてみると、調査区中央に集中して分布する遺構の東端に位置している。奈良時代の遺構は、住居址5軒、溝2条である。当初、この2条の溝がこの時期の集落の限界を画する溝として機能していたと考えられていた（文献、31）が、集落が更に東側に拡張していることからその溝の性格も再検討を要する。平安時代の遺構は住居址が3軒と減少する一方、大規模な溝が2条開鑿される。

調査日誌

小町田遺跡

1978年1月17日～4月28日

- 1・17 本日より発掘調査開始。発掘器材一括搬入。作業員雇用手続き。遺跡地周辺をマッピングしながら、調査地区の遠景写真の撮影を行なう。
- 1・18 発掘調査の段取り。発掘区の設定方法、調査体制、関係機関への調査協力のための挨拶廻り。降雪多し。
- 1・19 昨日の残雪除去作業。発掘区設定の測量作業。重機による表土削除を予定する。そのための試掘調査を実施する。
- 1・20 試掘ピットの発掘を進めるが、旧地形が複雑な様相をみせており、発掘区を限定するためにより広域な試掘を実施しなければならない。午後より重機導入。表土削ぎ開始。
- 1・23 重機による表土削ぎ終了。直ちにローム面での遺構検出作業。住居址2軒検出。
- 1・24 1号住、2号住と呼称する。住居址発掘調査を開始する。ローム面での遺構検出作業続行。
- 1・25 2号住の発掘調査。ローム面での遺構検出作業。
- 1・26 ローム面での遺構検出作業。2号住の発掘調査。セクションペンドルの土層観察作業。
- 1・27 ローム面での遺構検出作業。1号住の西側拡張作業。2号住居の床面精査。
- 1・30 1号住拡張作業。2号住平面図作成作業。午後になって1号住拡張検討の結果、床面下に3号住の存在が確認される。
- 1・31 1号住居址発掘、更に3号住前に着手。2号住は床面精査を実施。
- 2・1 1号住、3号住居土層断面実測。2号住写真撮影。出土遺物の採取。取り上げ。
- 2・3 1号住、3号住の平面図作成。遺物取り上げ作業。大きな溝検出。1号溝と呼称。住居址との切り合い関係あり。平面調査にて前後関係追本。
- 2・4 出土遺物水洗作業。調査地区恒候。
- 2・6 1号溝発掘継続。
- 2・7 1号溝土層断面図作成。
- 2・8 1号溝を中心に発掘作業。はかどらない。
- 2・9 1号住居址周辺再検討。遺構なし。1号溝発掘継続。土層断面を撰すこと。
- 2・10 1号溝発掘継続。この溝に調査の主力を注ぐ。
- 2・11 土層断面検討。出土遺物の水洗、注記作業。
- 2・13 昨日の雪のため室内にて出土した遺物の水洗作業。
- 2・14 1号溝発掘作業。2号溝の平面形の検出作業。
- 2・15 2号溝の検出作業。周辺部もジョレンカき作業。
- 2・16 2号溝は北にくくと1号溝と交差する。1号溝が2号溝を切っていると考えてよい。
- 2・17 本日より神奈川大学考古学同好会の学生応援に入る。作業の進捗を大いに期待。1号溝の掘り下げ作業。2号溝の平面実測図作成。1号土層の写真撮影と平面実測作業。
- 2・18 出土遺物の水洗、注記作業。
- 2・20 1号土層の詳細調査。1号溝の発掘継続。
- 2・21 4号住、5号住発掘作業。1号溝の平面実測も開始。2号溝土層観察作業。
- 2・22 6号住平面形検討。発掘開始。4号住、5号住発掘調査継続。出土遺物の実測、写真撮影、取り上げも併行して実施。
- 2・23 6号住の床面精査。4号住、5号住の覆土掘り下げ。新入学生に測量方法を教える。午後より北風強く作業中止。
- 2・24 6号住の床面精査。1号溝発掘調査。平面実測のために平板作業を学生に指導。実戦に起用した。
- 2・25 天候くもり。写真日和。4号住、5号住全体写真撮影作業。全員で協力。タワー移動。
- 2・27 4号住、5号住の側面に4号溝を検出。発掘作業始める。4号住、5号住の電針細検討段階。学生をこの作業に起用。
- 2・28 6号住の全体写真撮影。電針細調査。2号溝の土層断面図作成。4号住の電実測作業。
- 3・1 4号住、6号住電実測作業。1号溝の土層断面検討。午後より北風強くより発掘作業中止。室内にて出土遺物水洗。
- 3・2 4号住電実測。7号住発掘作業。2号土層実測調査。土層断面図作成。1号溝の土層断面検討。実測作業。
- 3・3 7号住の発掘作業を集中的に進める。2号土層実測作業。6号住床面精査。1号溝実測作業（平面と断面図作成）。
- 3・4 出土遺物水洗、注記。同好会学生に周辺道路案内。
- 3・6 4号住電細部検討。実測図作成。6号住電実測。床面精査作業。7号住平面図作成。
- 3・7 6号住電実測作業。7号住平面図作成。慣れるまで学生も調査担当も苦勞多い。
- 3・8 6号住、7号住床面精査。5号溝発掘開始。大きな溝である。土層断面図作成。写真撮影。
- 3・9 11号住床面精査。8号住発掘開始。5号溝の大きさには否かなる。土層断面図作成。
- 3・10 5号溝を集中的に発掘調査。泥だらけ。悪戦苦闘。
- 3・11 5号溝の発掘作業。往我が心配。
- 3・13 5号溝発掘近くに水漏れ出多し。
- 3・14 5号溝平面実測と写真撮影。
- 3・15～17 学生達の実測図の点検。帰京準備。
- 3・18 本日にて応援の学生帰る。長い間ごろうさま。
- 3・20～4・10 年度末、年度始めのため、本庁にて事務手続。
- 4・11～4・14 担当者揃わないため、出土遺物の水洗、注記。
- 4・15 出土遺物水洗、注記作業。実測図整備。
- 4・17 10号住電細部検討作業。11号住遺物出土状況写真撮影。12号住土層断面図作成。全量写真撮影。遺物取り上げ作業。15号住発掘作業。8号土層発掘開始。
- 4・18 発掘開始後、降雨。室内にて出土遺物注記作業。
- 4・19 7号土層発掘。土層断面実測。11号住床面精査。15号住、16号住発掘中。10号住電針細検討。
- 4・20 15、16号住居址の土層断面実測図作成。写真撮影。出土遺物取り上げ。4、5号土層精査。写真撮影。2号溝発掘。
- 4・21 発掘担当者出張も多く発掘調査中止。室内にて作業。
- 4・22 5号溝周辺部分の発掘調査方針投球。遺構全体図作成作業。10号住居平面図作成。
- 4・23 5号溝周辺部分の発掘調査を終日急ぐ。
- 4・24 5号溝周辺部分の発掘急ぐ。湧水多く作業困難。本層保存方法について農教委の保存処理委員と打ち合わせ。
- 4・25 8号住居電針細調査。貯蔵穴調査。雨天のため、調査状態よくない。作業はかどらない。5号溝精査。写真撮影。
- 4・26 5号溝断面土層注記。写真撮影。平面実測。8号土層発掘調査、実測、写真撮影。8号住電針細調査。
- 4・27 8号住電針細調査。実測図作成。発掘調査区全景撮影。お世話になった関係機関に御礼の挨拶廻り。
- 4・28 実測図面の再検討。発掘器材・測量器材清掃。点検。調査事務所清掃。出土遺物搬出。器材撤去。現場での作業完了。

2 遺 跡

概要

発掘区は国道122号線(太田バイパス)の工事用中心机No29と、No43を見通して、仮No35を設定した。この見通し線に沿って北西へ30mの地点をA-0とした。この基準杭から北東へ10mピッチでA-1、南東へ10mピッチで0-6の10m方眼を設定し発掘区とした。発掘区の方眼北はN-53-E、遺跡の位置は第IV座標系、X=-36.800、Y=+30.800である。小町田遺跡の発掘調査面積は昭和54年度の国道122号太田バイパス工事に伴うものが6300㎡、52年度のほ場整備事業に伴うものが5200㎡、合計11500㎡である。本遺跡地の字名は太田市竜舞^{ヌル}八^ヤ隊であるが、分布調査の状況からは遺跡地の主体が字小町田側にあるものと考え、小字名を遺跡に冠した。本遺跡の立地は南西寄りが高さ29.5m、北東寄りが28.5mで傾斜1/80で低くなる。その後の遺跡範囲確認調査では、遺跡の乗る黄色シルトの層は南の字細金から北に突き出た字小町田から字八^ヤ隊を含む舌状の埋没した自然堤防と考えられている。本遺跡は当初考えていた西側の沐浴台地の縁辺にひろがる遺跡でなく、その間に大きな谷地の存在が確認され、独立した遺跡であることが明らかとなった。発掘区で検出された遺構は、住居址16軒、溝5条、土壇10基である。住居址は発掘区全域に広がり、鬼高期の住居址は8軒検出された。住居址の平面形は方形を呈し、竈の位置は北東壁の東寄りに築かれ、東北隅に貯蔵穴を穿つことを基本としている。比較的整然と並ぶSB02、SB06、SB07の住居址が発掘区の西半分に方向の一定しない住居址が東半分に見られる。SB14とSB15の住居址は近接しており同時期内での継続が考えられる。またSB02の住居址覆土内には株名山二ツ岳火山灰(FA)の堆積が認められ、国道122号太田バイパス道路改良工事に伴う発掘調査区の15号住居址、68号住居址と同時に存在しており編年の基準となりうる。真間期に属する住居址は5軒検出されている。平面形は長方形で長辺に竈が築かれる。発掘区西側に2軒、南側に3軒が集まる。国分期に属する住居址は3軒検出されている。平面形は長方形で短辺に竈が築かれている。発掘区の西側に1軒、南側に2軒出土している。土壇は10基検出されている。平面形は楕円形を中心にさまざまな形を呈している。縄文前期初頭の土壇はSK04とSK08である。縄文中期中葉はSK01とSK05である。縄文中期後葉はSK03とSK09である。SK10は鬼高期の井戸と考えられる。SK02とSK06、SK07の3基の土壇は縄文時代の覆土を持つ。SK04の土壇からは珍しい大形で硬玉の大珠が出土している。溝は5条検出された。SD01とSD05の2条の溝は平行して走り、北西から南東へ向かっている。SD01は幅2m、深さ1.3m、SD05は幅8m、深さ2.4mほどである。2条の溝はSB06、SB07、SB13～SB16の6軒の住居址とSD02の溝を切っている。SD05の大溝は発掘区内の30mほどを確認したが、調査期間の制約と排土の膨大な量からトレンチによる部分的な調査にならざるをえなかった。この限られた部分の溝底から大量の木器が出土している。これらの遺物は伴出土器の年代から国分期に限定することができる。特に檜扇、曲物、火鑽臼、下駄など当時の生活を土器以外で復元できる貴重な資料である。今回の調査で検出されたSD05の大溝はほ場整備事業では表土部分の削平だけで、木器出土層までの破壊は免れている。今後、周知の遺跡として記録し、農地の近代化による水位の下降による木器の乾燥を防いでゆかねばならないであろう。SD02とSD03は発掘区の北から南に平行して走る。SD02の溝の上幅は1.5m、深さ60cmほどで2回以上の改修がみられる。この2条の溝は国道122号バイパス工事に伴う発掘調査区にも連続する。本遺跡のSD02は1号溝にSD03は2号溝に対応する。両遺跡を合わせたSD02の溝の全長は148mである。溝の時期は真間期と考えられ水路として常時使われていたとは思われず、また住居分布からこの時期の東限を画する集落の溝ともいえない。



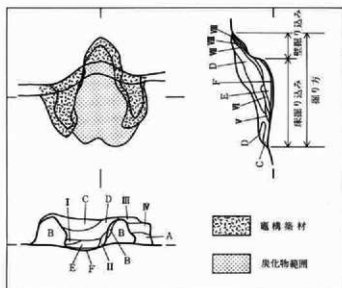
第190図 小町田遺跡 遺構分布図 (左 土壇、右 住居址と溝)

基準土層

発掘調査区内の土層については重機導入以前に試掘調査を実施、基本的な層序を確認した。

①表土層は上、下2層に分けられる。上層は灰褐色土で現水田耕作面、下層は黄灰褐色土で砂壤質、鋤込以下の流土である。②遺物包含層は黒褐色粘質土層で上、下2層に分けられる。上層はFA軽石を含み古墳時代の遺物が多い。下層は軽石を含まず上層より粘度は高く縄文土器を含む。③地山層では上層は水性堆積のロームと考えられ黄色粘土で徐々に灰褐色が強くなる。下層は青灰色粘質シルトで下部ほど青色味が強くなる。④層は厚さ20cm、⑤層は厚さ25cm、⑥層は厚さ75cmまで掘り下げたのみである。遺構覆土は3種類に分類できる。調査時点では、記述の統一に基準層序として使用した。本報告でも凡例として以下にその土層の特徴を記入しておきたい。

- | | |
|---------------------------|--------------------------|
| 01層 黒褐色土 焼土粒及びローム粒を多量に含む。 | 30層 灰黒褐色土 暗褐色味強く軟質である。 |
| 02層 灰褐色土 ロームのシルト質のもの。 | 31層 灰黒褐色土 斑文状にローム粒を含む。 |
| 03層 黄灰色土 ロームのシルト質で黄色が強い。 | 32層 灰黒褐色土 硬質で、灰層、炭化物を含む。 |
| 04層 暗褐色土 大きな粘土粒を含む。 | 33層 灰黒褐色土 粘質強くローム粒多く含む。 |
| 05層 青灰色土 暗褐色粒を多量に含む。 | 34層 灰黒褐色土 炭化物・焼土を含み粘質土。 |
| 20層 灰黒褐色土 軽石を少量含み酸化強く硬い。 | 35層 灰黒褐色土 焼土、灰層を多量に含む。 |
| 21層 灰黒褐色土 酸化強く鉄分多く硬い。 | 36層 灰黒褐色土 焼土、灰層、炭化物含む。 |
| 22層 灰黄褐色土 炭化物、焼土を含む火山灰。 | 37層 灰黒褐色土 焼土を多量に含む硬い。 |
| 23層 灰黒褐色土 ローム粒、軽石粒、焼土粒。 | 38層 暗黒褐色土 ローム粒を多量に含む。 |
| 24層 灰黒褐色土 炭化物、ローム粒を含み粘質。 | 39層 黄褐色土 壁の崩落土と考えられる。 |
| 25層 灰黒褐色土 炭化物が部分的にまとまる。 | ①下層 表土層 黄灰褐色で砂粒を多量に含む。 |
| 26層 灰黒褐色土 焼土、炭化物を多量に含む。 | ②上層 遺物包含層 黒褐色粘質土 古墳時代。 |
| 27層 灰黒褐色土 褐色味が強くローム粒を含む。 | ②下層 遺物包含層 黒色粘質土 奈良、平安時代。 |
| 28層 灰黒褐色土 ローム粒を多量に含む。 | ③上層 地山層 灰黄褐色粘質土 縄文包含層。 |



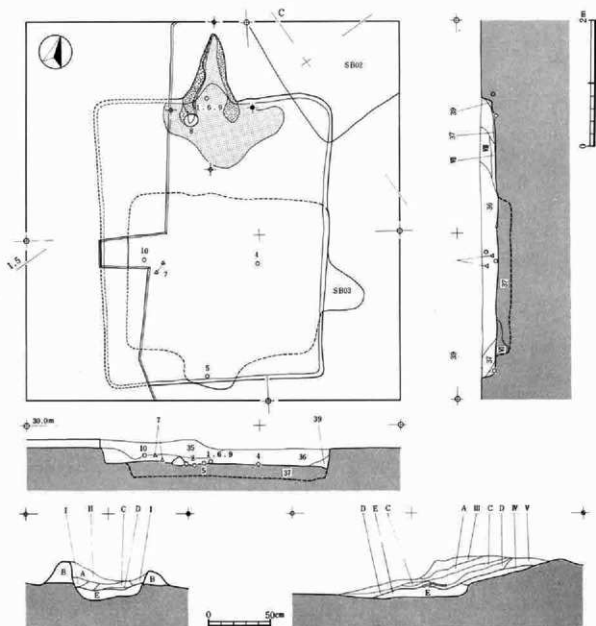
第192図 小町田遺跡 電機式図

- A層 電被覆層 灰黒褐色土層中にローム粒、炭化物、焼土、灰層を含む。
- B層 電袖芯材 明黄褐色粘土で多量に酸化した鉄分を含む。
- C層 電内崩落層 明黄褐色を呈し、ロームブロックを主体に焼けている。
- D層 電内崩落層 焼土を多量に含む、黒灰色粒、炭化物、灰層を混土。
- E層 床面構成層 焼土、炭化物を多量に含む層。
- F層 床面下掘り込み層 灰褐色粘土層中に多量にローム粒を含む。

住居址

第1号住居址 (出土遺物 第244図)

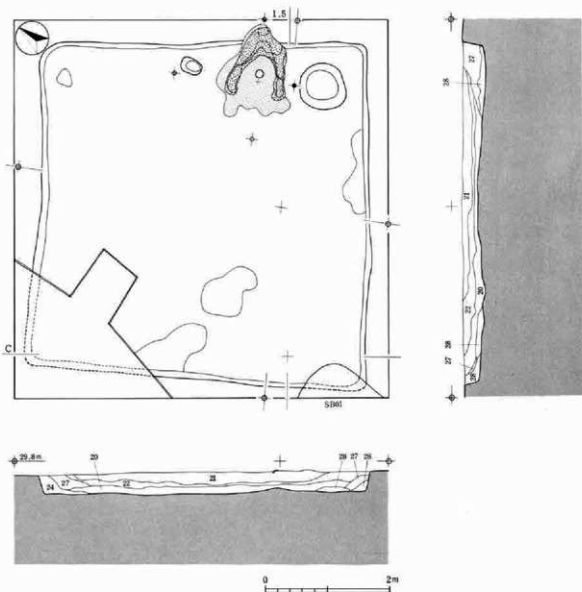
本遺跡の西寄り、B-1区に位置する。本住居址はS B02→S B03→S B01の順に重複する。平面形は縦長長方形を呈し、規模は長さ4.5m×3.8mを測り、床面積は約17.1m²である。主軸はN-2°-Wを示す。竈の付設は住居址の北辺で中央寄りに位置する。壁高は西壁で38cmを測る。壁の立ち上がりは急で70~80°である。住居址の覆土は基準に準ずる。その他I~V層は竈の覆土、VI~VIII層は住居址の覆土である。I層は灰黄粘土、II・V層は焼土ブロック、III層は粘性の強い黒褐色土、IV層は黒褐色土、VI層はローム粒を点々と含み灰黒褐色土よりやや砂質性の暗黒褐色土、VII層は暗黒褐色土層よりローム粒とカーボンを含む黒褐色土、VIII層はやや粘性をもちローム粒を多量に含む暗黒褐色土である。



第193図 小町田遺跡 1号住居址実測図

第2号住居址 (出土遺物 第245図、PL.25)

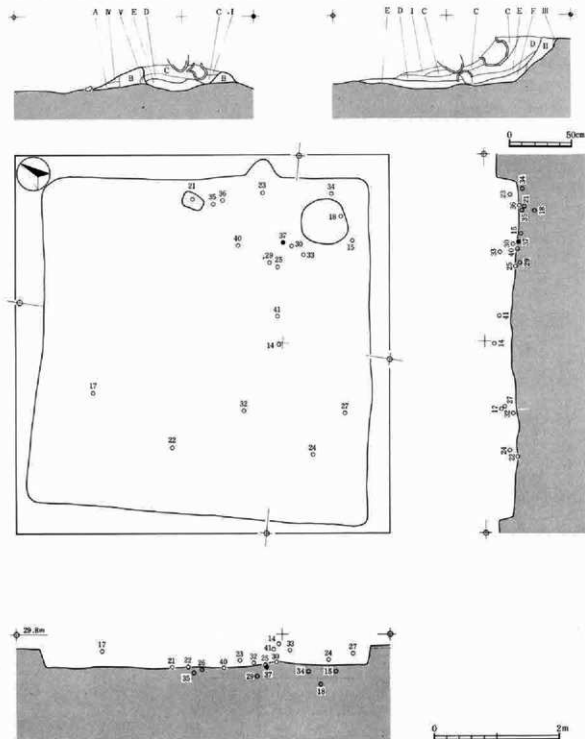
本遺跡の西寄り、C-1区に位置する。本住居址はS B02→S B03→S B01の順に重複する。平面形は方形を呈し、規模は長さ5.5m×5.2mを測り、床面積は約28.6m²である。主軸はN-55°-Eを示す。竈の付設は住居址の東辺で東寄りに位置する。壁高は東壁で32cmを測る。壁の立ち上がりは急で70~80°である。住居址の覆土は基準土層に準ずる。すなわち、20層は軽石を少量含み酸化が強く硬い灰黒褐色土、21層は酸化が強く鉄分が多く硬い灰黒褐色土、22層は炭化物・焼土を含む火山灰で灰黄褐色土、27層は褐色味が強くローム粒を含む灰黒褐色土、28層はローム粒を多量に含む灰黒褐色土であり、A層は灰黒褐色土層中にローム粒・炭化物・焼土・灰層を含む電被覆層、B層は明黄褐色粘土で多量に酸化した鉄分を含む電袖芯材、C層は明黄褐色を呈しロームブロックを主体に焼けている竈内崩落層、D層は焼土を多量に含む黒灰色粒・炭化物・灰層を混土する竈内崩落層、E層は焼土・炭化物を多量に含む層で床面構成層、F層は灰褐色粘土層



第194図 小町田遺跡 2号住居址実測図

中に多量にローム粒を含む床面下掘り込み層である。その他Ⅰ～Ⅴ層は甍の覆土である。Ⅰ層は斑点状に黄褐色粘土粒・焼土・若干のカーボンを含む灰黒褐色粘質土、Ⅱ層は焼土粒・黄褐色粒・粘土を斑点状に含む層、Ⅲ層は天井部が崩壊した層で黄褐色粘土、Ⅳ層は焼土・炭化物を含む黒褐色土で甍被覆層、Ⅴ層はカーボンを含む黄褐色粘土である。

出土遺物としては土師器と須恵器があり、土師器では杯・高杯・壺・甬・鉢・甗、須恵器では甍がある。

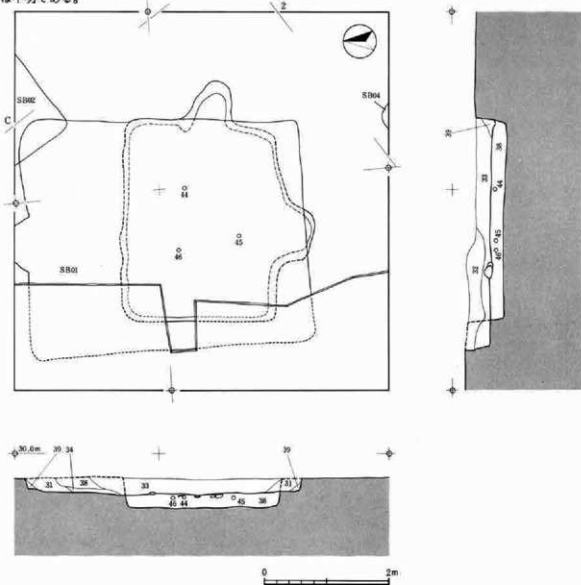


第195図 小町田遺跡 2号住居址土器出土状態図 (1/60, 1/30)

第3号住居址 (出土遺物 第246図)

本遺跡の西寄り、B-1区に位置する。本住居址は、SB02→SB03→SB01の順に重複する。平面形は縦長長方形を呈し、規模は、長さ3.1m×2.5mを測り、床面積は約7.8㎡である、主軸はN-91°-Eを示す。竈の付設は住居址の東辺で中央寄りに位置する。壁高は西壁で58cmを測る。壁の立ち上がりは急で75~80°である。住居址の覆土は基準土層に準ずる。すなわち、31層は斑文状にローム粒を含む灰黒褐色土、32層は硬質で灰層・炭化物を含む灰黒褐色土、33層は粘質強くローム粒を多く含む灰黒褐色土、34層は炭化物・焼土を含む粘質土である灰黒褐色土、38層はローム粒を多量に含む暗黒褐色土、39層は壁の崩落土と考えられる黄褐色土である。

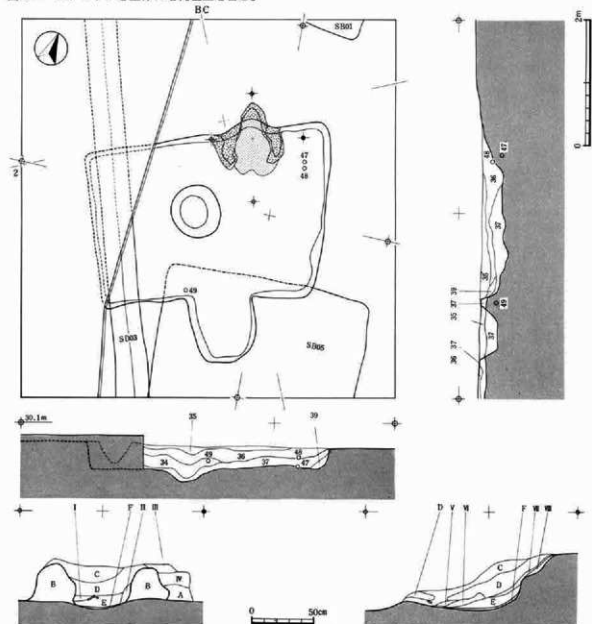
出土遺物としては土師器と須恵器があり、土師器は壺・甔、須恵器は杯・蓋がある。版組番号44の甔、45の蓋、46の杯は住居址の中央寄りに位置し、44・45・46ともに38層中に確認された。他の遺物の正確な位置は不明である。



第196図 小町田遺跡 3号住居址実測図

第4号住居址 (出土遺物 第246図)

本遺跡の西寄り、B-2区に位置する。本住居址はS B05→S B04→S D03の順に重複する。平面形は横長長方形を呈し、規模は長さ3.9m×2.7mを測り、床面積は約10.5m²である。主軸は、N-2°-Wを示す。竈の付設は住居址の北辺で東寄りに位置する。壁高は西壁で43cmを測る。壁の立ち上がりは急で80°である。住居址の覆土は基準土層に準ずる。35・36・37層は灰黒褐色土で、39層は壁の崩落土と考えられる黄褐色土であり、A層は電被覆層、B層は電袖芯材、C・D層は竈内崩落層、E層は床面構成員、F層は床面下掘り込み層である。その他I~VIII層は竈の覆土である。I層は焼土を含む明黄褐色土、II層は焼土、III層は粘性のある灰黒褐色土より淡く明るく、ロームブロックを多量に含む暗褐色土、IV層は粘性のある灰黒褐色土、V層は焼土・カーボンを含む淡い褐色土、VI層は焼土を含む明黄褐色土、VII層は焼土、VIII層は電掘り方の底面でロームブロックを主体に暗褐色土を含む。

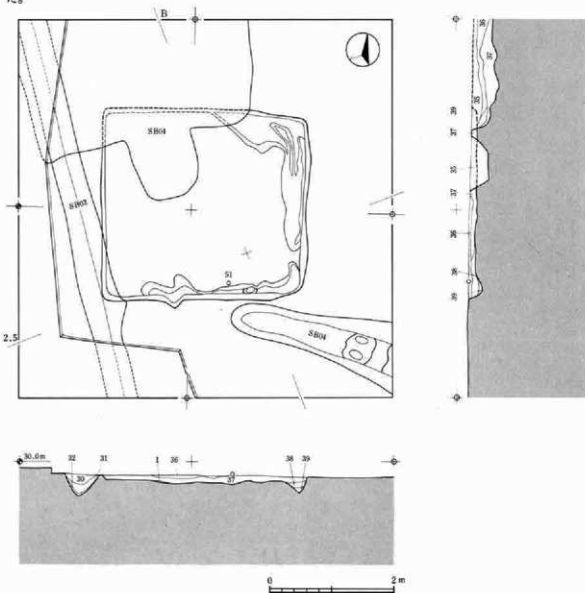


第197図 小町田遺跡 4号住居址実測図

第5号住居址 (出土遺物 第246図)

本遺跡の西寄り、B-2区に位置する。本住居址はSB05→SB04→SD03の順に重複する。平面形は方形を呈し、規模は長さ3.3m×3.0mを測り、床面積は約9.9m²である。主軸はN-15°-Wを示す。竈の付設は不明である。壁高は南壁で9cmを測る。壁の立ち上がりは急で75°である。住居址の覆土は基準土層に準ずる。すなわち、30層は暗褐色味強く軟質である灰黒褐色土、31層は斑文状にローム粒を含む灰黒褐色土、32層は硬質で灰層・炭化物を含む灰黒褐色土、35層は焼土・灰層を多量に含む灰黒褐色土、36層は焼土・灰層・炭化物を含む灰黄褐色土、37層は焼土を多量に含む硬い灰黒褐色土、38層はローム粒を多量に含む暗黒褐色土、39層は壁の崩落土と考えられる黄褐色土である。その他I層は住居址の覆土であり地山層と同質のロームブロックである。

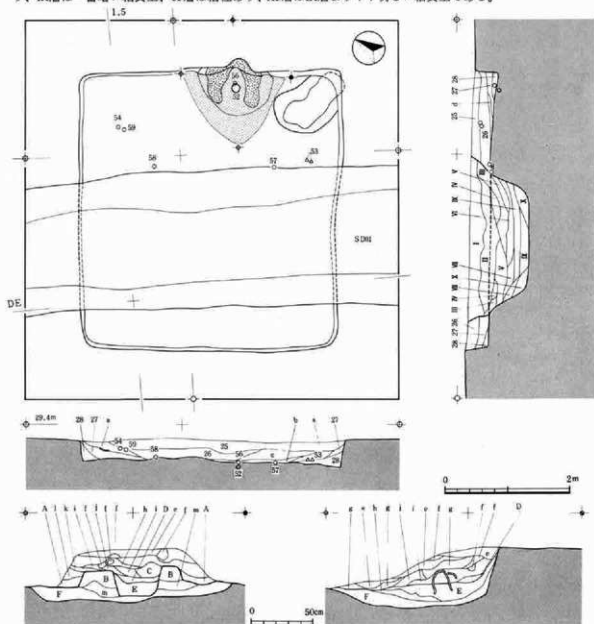
出土遺物としては土師師の杯があり、版組番号51の杯は住居址の南辺中央寄りに位置し36層中に確認された。



第198図 小町田遺跡 5号住居址実測図

第6号住居址 (出土遺物 第246図)

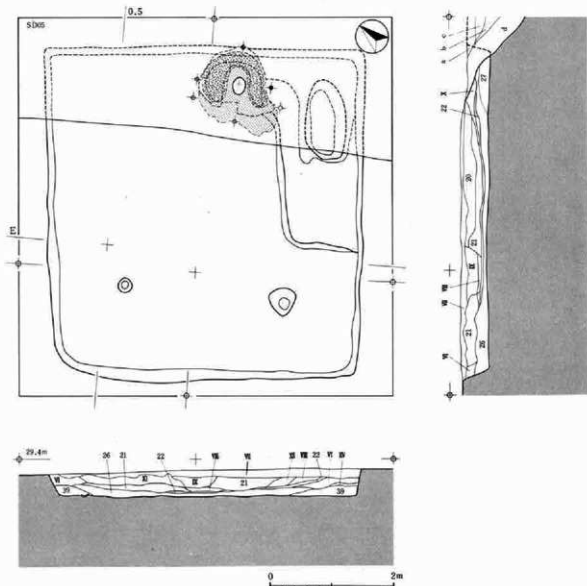
本遺跡の北寄り、D-1区に位置する。本住居址はSB06→SD01の順に重複する。平面形は方形を呈し、規模は長さ4.4m×4.1mを測り、床面積は約18㎡である。主軸はN-59°-Eを示す。竈は住居址の東辺で中央に位置する。壁高は北東壁で36cmを測る。壁の角度は急で80~85°である。a~d層は住居址覆土、e~mは竈覆土、I~XIは溝覆土である。a層は明黄褐色粘質土、b層は灰黒褐色土、c層・d層は灰黒褐色粘質土、e層は黄褐色土、f層は粘土質の灰白色土、g層は灰色土、h層は粘土質の灰白色土、i層は黒色土、j層は青灰色土、k層は焼土・ローム粒を含む灰白色土、l層は焼土・ローム粒・黒灰色ブロックを含む粘土質の灰白色土、m層は粘土質の灰白色土である。I~XI層は灰黒褐色土である。II層は硬く、III層は粘性あり硬い。IV層はII層より粘性強い。V層はII・III層より暗く粘性あり。VI層は粘性強い。VII・VIII層は粘性あり、IX層は一番暗い粘質土、X層は粘性あり、XI層はIX層よりやや明るい粘質土である。



第199図 小町田遺跡 6号住居址実測図

第7号住居址 (出土遺物 第246~248、257図、PL.26、27)

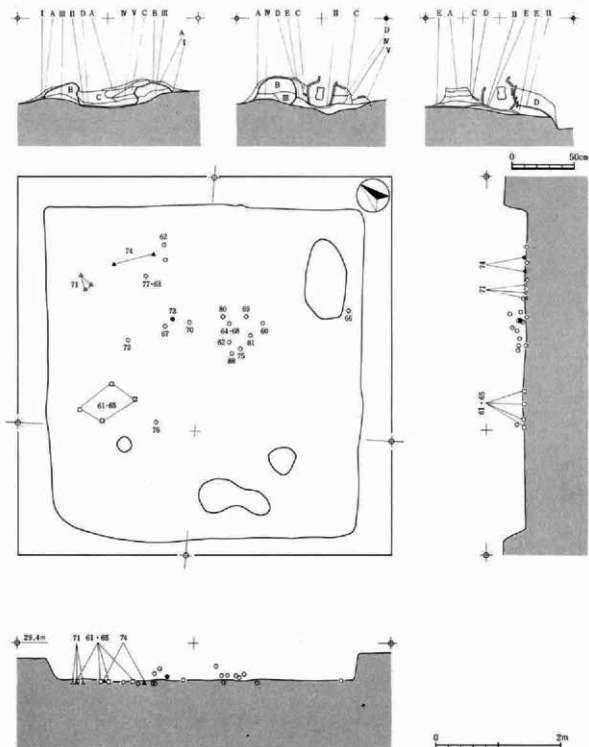
本遺跡の北寄り、D-0区に位置する。本住居址はSB07→SD05の順に重複する。平面形は方形を呈し、規模は長さ5.2m×5.0mを測り、床面積は約26㎡である。主軸はN-49°-Eを示す。竈の付設は住居址の東辺で中央に位置する。壁高は南西壁で42cmを測る。壁の立ち上がりは急で80°である。住居址の覆土は基準土層に準ずる。すなわち、20層は軽石を少量含む酸化強く硬い灰黒褐色土、21層は酸化強く鉄分多く硬い灰黒褐色土、22層は炭化物・焼土を含む火山灰で灰黄褐色土、26層は焼土・炭化物を多量に含む灰黒褐色土、27層は褐色味が強くローム粒を含む灰黒褐色土、39層は壁の崩落土と考えられる黄褐色土であり、A層は灰黒褐色土層中にローム粒・炭化物・焼土・灰層を含む竈被覆層、B層は明黄褐色粘土で多量に酸化した鉄分を含む竈袖芯材、C層は明黄褐色を呈しロームブロックを主体に焼けている竈内崩落層、D層は焼土を多量に含み、黒灰色粒・炭化物・灰層を混土する竈内崩落層、E層は焼土・炭化物を多量に含む床面構成層である。その他I~V層は竈の覆土、VI~XIV層は住居址の覆土である。I層は灰層、II層は焼土、III・IV層は灰



第200図 小町田遺跡 7号住居址実測図

2 遺 跡

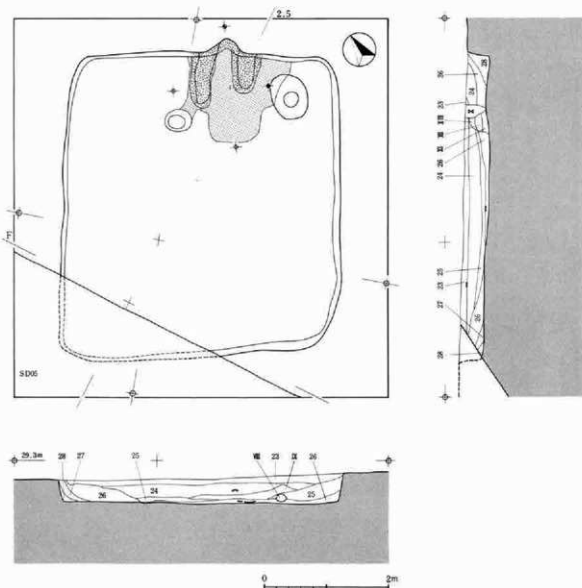
白色粘質土、V層はカーボンを含む灰黒色粘質土、VI～XIV層は灰黒褐色土でVI層はローム粒・黒褐色土ブロックを含み、VII層は白色粒を含み酸化し、VIII層は粘質土で青灰褐色粒を含み、IX層はカーボン・小ロームブロックを含み、X層は黄褐色のローム粒を含み、XI層は斑点状に黒褐色ブロックローム粒と若干の焼土粒を含み、XII・XIV層はローム粒を多く含み、XIII層は白色粒・黒褐色土を含む層である。



第201図 小町田遺跡 7号住居址土器出土状態図

第8号住居址 (出土遺物 第248～252、257図、PL.26、27)

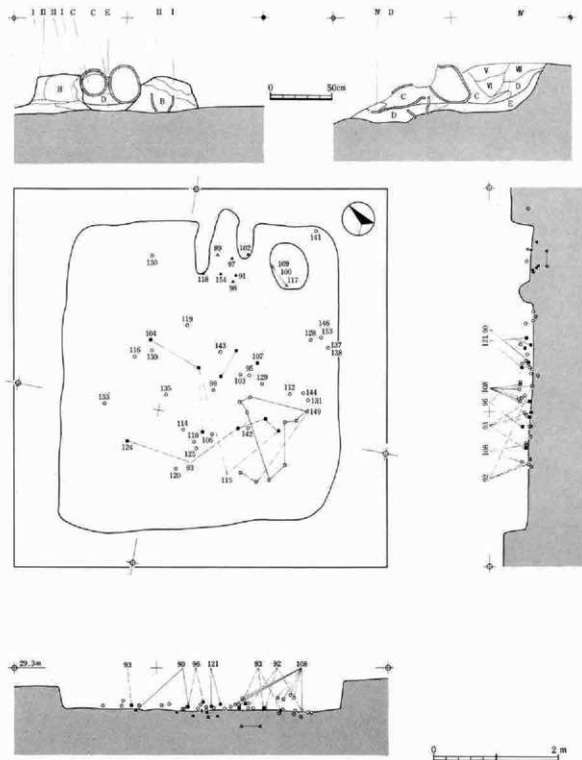
本遺跡の北寄り、F-2区に位置する。本住居址はSB08→SD05の順に重複する。平面形は方形を呈し、規模は長さ4.6m×4.5mを測り、床面積は約20.7㎡である。主軸はN-27-Eを示す。竈の付設は住居址の東北辺で中央に位置する。壁高は南東壁で45cmを測る。壁の立ち上がりは急で75～80°である。住居址の覆土は基準土層に準ずる。その他I～VII層は竈の覆土、VIII～XII層は住居址の覆土である。I層は灰褐色粘質土層より暗く青灰色粘土ブロックが少ない。II層は灰層、III層は多量の青灰色粘土ブロック・灰黒褐色土・焼土粒を含む灰褐色粘質土、IV層は砂質を多く含む青灰褐色粘質土、V層は焼土粒・ローム粒・小ロームブロックを少量含む黒褐色土、VI層は焼土粒・少量の灰褐色砂粒を含む灰褐色土、VII層はロームブロック・ローム粒・焼土ブロックを含む灰褐色土、VIII層はローム粒・白色粒子・焼土粒・黒褐色砂粒・鉄分を含み、粘質がある灰黒褐色土、IX層は24層より暗く、ロームブロック・ローム粒・焼土を含み、部分的に灰層が混



第202図 小町田遺跡 8号住居址実測図

土する灰黒褐色粘質土、X層は23層より暗く、粘質があり軟質な灰黒褐色土、XI層はブロック状の塊で灰褐色粘土ブロックと黒褐色土の混土层、XII層は黒褐色土層を主体に焼土・灰層を少量含む層。XIII層はローム粒・ロームブロックを斑点状に含み、若干の焼土・黒褐色土を含み粘質がある灰黒褐色土である。

出土遺物は土師器では杯・椀・高杯・壺・壺・甕、須恵器では杯、さらに支脚がある。

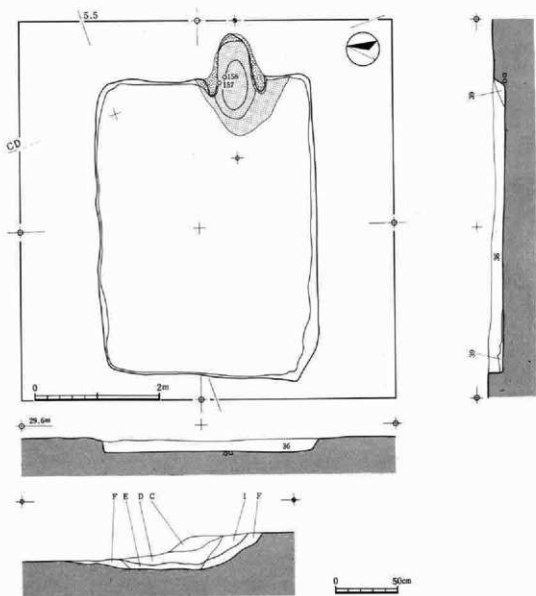


第203図 小町田遺跡 8号住居址土器出土状態図 (1/60, 1/30)

第9号住居址 (出土遺物 第252図)

本遺跡の南寄り、C-5区に位置する。平面形は縦長長方形を呈し、規模は長さ4.7m×3.5mを測り、床面積は約16.5m²である。主軸はN-73-Eを示す。竈の付設は住居址の東辺で南寄りに位置する。壁高は西壁で24cmを測る。壁の立ち上がりは急で85°である。住居址の覆土は基準土層に準ずる。すなわち36層は焼土・灰層・炭化物を含む灰黒褐色土、39層は壁の崩落土と考えられる黄褐色土であり、C層は明黄褐色を呈し、ロームブロックを主体に焼けている竈内崩落層、D層は焼土を多量に含み、黒灰色粒・炭化物・灰層を混土する竈内崩落層、E層は焼土・炭化物を多量に含む床面構成層、F層は灰褐色粘土層中に多量にローム粒を含む床面下掘り込み層である。その他I層は竈の覆土で、煙道部と考えられ若干の灰褐色土の混土する焼土ブロック層。

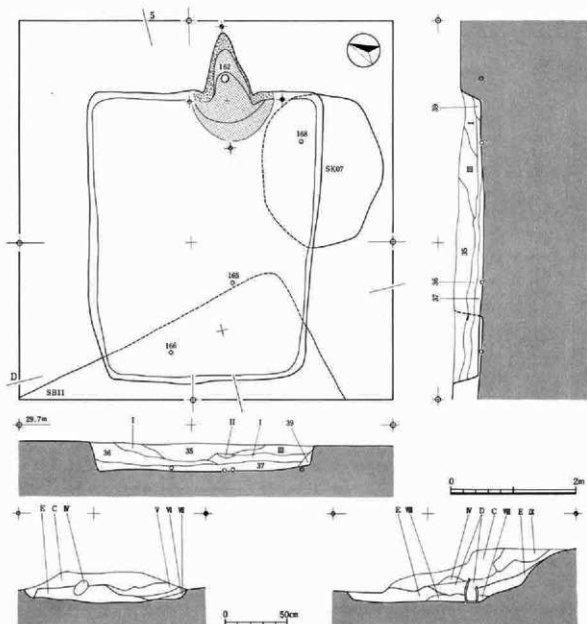
出土遺物は土師器では甕・高杯、須恵器では杯がある。



第204図 小町田遺跡 9号住居址実測図

第10号住居址 (出土遺物 第253、257図)

本遺跡の南寄り、C-4区に位置する。本住居址はSK07→SB11→SB10の順に重複する。平面形は縦長長方形を呈し、規模は長さ4.6m×3.8mを測り、床面積は約17.5m²である。主軸はN-70°-Eを示す。竈の付設は住居址の東辺で中央寄りに位置する。壁高は北壁で45cmを測る。壁の立ち上がりは急で80°である。住居址の覆土は基準土層に準ずる。その他I～III層は住居址の覆土、IV～IX層は竈の覆土である。I層はロームブロック・ローム粒・焼土・灰層を含む灰黒褐色土、II層はロームブロック・ローム粒・焼土を含む灰黒褐色土、III層は35層より明るく小粒のロームブロック・ローム粒・灰層を含む灰黒褐色土、IV層はロームブロック・焼土・炭化物を含む暗褐色土、V層は焼土を少量含む黒色灰層、VI層は焼土・炭化物を少量含む灰褐色土、VII層は竈の掘り方下層で黄褐色ロームブロック層、VIII層は粒子が細かい黄褐色灰層、IX層は竈の天井でローム粒が粘土化した層である。



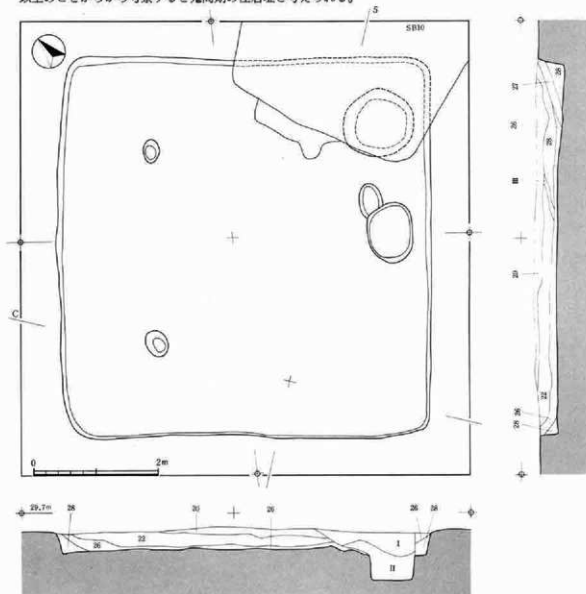
第205図 小町田遺跡 10号住居址実測図

第11号住居址 (出土遺物 第253～254図)

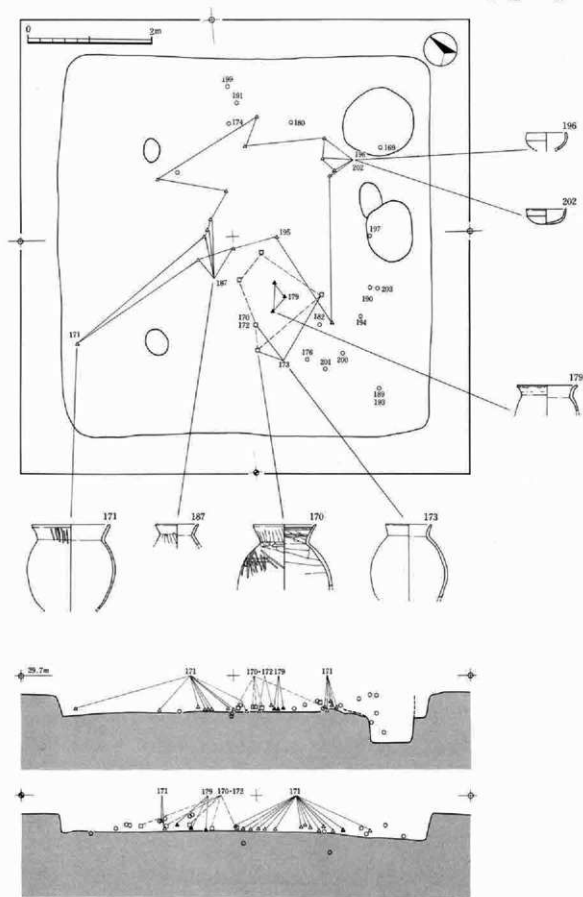
本遺跡の南寄り、C-5区に位置する。本住居址はSB11→SB10の順に重複する。平面形は方形を呈し、規模は長さ6m×6mを測り、床面積は約36㎡である。主軸はN-41°-Eを示す。竈の付設は不明である。壁高は北壁で41cmを測る。壁の立ち上がりは急で70～85°である。住居址の覆土は基準土層に準ずる。すなわち、20層は軽石を少量含み酸化が強く硬い。22層は炭化物・焼土を含む火山灰で灰黒褐色土である。26層は焼土・炭化物を多量に含む灰黒褐色土、27層は褐色味が強くローム粒を含む灰黒褐色土、28層はロームを多量に含む灰黒褐色土である。その他I～III層は住居址の覆土である。I層はローム粒を多く含み粘性は少ない黒褐色土、II層はやや灰色を呈し粘性の強いロームブロックを主体とする黄褐色土、III層は粘性が少しあり、ロームブロックを含む暗褐色土である。

出土遺物としては土師器では杯・高杯・壺・甕・甔があり、須恵器では蓋がある。

以上のことから考察すると縄文高期の住居址と考えられる。



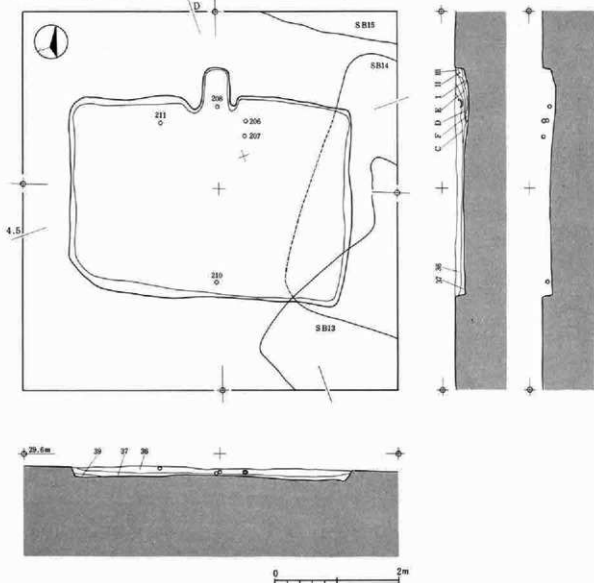
第206図 小町田遺跡 11号住居址実測図



第207図 小町田遺跡 11号住居址土器出土状態図

第12号住居址 (出土遺物 第255、257図、PL.27)

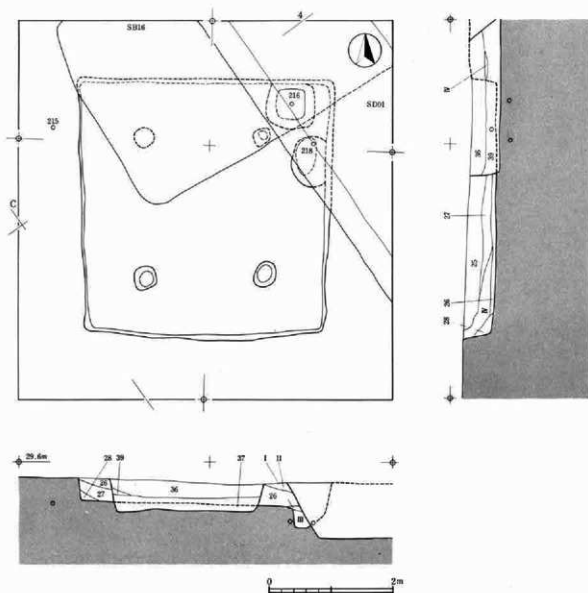
本遺跡の南寄り、C-4区に位置する。本住居址はSB14→SB13→SB12の順に重複する。平面形は横長長方形を呈し、規模は長さ4.5m×3.2mを測り、床面積は約14.4㎡である。主軸はN-16°-Wを示す。竈の付設は住居址の北辺で中央寄りに位置する。壁高は南東壁で17cmを測る。壁の立ち上がりは急で80°である。住居址の覆土は基準土層に準ずる。すなわち、36層は焼土・灰層・炭化物を含む灰黒褐色土、37層は焼土を多量に含む硬い灰黒褐色土、39層は壁の崩落土と考えられる黄褐色土であり、C層は明黄褐色を呈し、ロームブロックを主体に焼けている竈内崩落層、D層は焼土を多量に含む、黒灰色粒・炭化物・灰層を混土する竈内崩落層、E層は焼土・炭化物を多量に含む床面構成層、F層は灰褐色粘土層中に多量にローム粒を含む床面下掘り込み層である。その他I～III層は竈の覆土である。I層は竈床面下の層でロームブロックが非常に少なく灰色土層中に焼土粒を多く含む。II層は竈床面下の層で黄灰色を呈しロームブロック・焼土・灰が混土する。III層は竈床面下の層で焼土ブロックを主体とする。



第208図 小町田遺跡 12号住居址実測図

第15号住居址 (出土遺物 第255図、PL.27)

本遺跡の南寄り、D-4区に位置する。本住居址はSB15→SB16→SD01の順に重複する。平面形は、方形を呈し、規模は長さ4.1m×4.0mを測り、床面積は約16.4m²である。主軸はN-2°-Wを示す。竈の付設は不明である。壁高は南壁で44cmを測る。壁の立ち上がりは急で75~80°である。住居址の覆土は基準土層に準ずる。すなわち、25層は炭化物を部分的に含む灰黒褐色土、26層は焼土・炭化物を多量に含む灰黒褐色土、27層は褐色味が強くローム粒を含む灰黒褐色土、28層はローム粒を多量に含む灰黒褐色土、36層は焼土・灰層・炭化物を含む灰黒褐色土、37層は焼土を多量に含む硬い灰黒褐色土、39層は壁の崩落土と考えられる黄褐色土である。その他I~IV層は住居址の覆土である。I層は粘性が非常にあり、青灰色の粘性ローム粒を少量含む暗黒色土、II層は暗褐色に近く小ローム粒を少量含み、粘性は少ないが硬い黒褐色土、III層は青灰色の粘性ローム粒をI層よりも多く含む暗黒色土、IV層は黒灰色の灰層である。

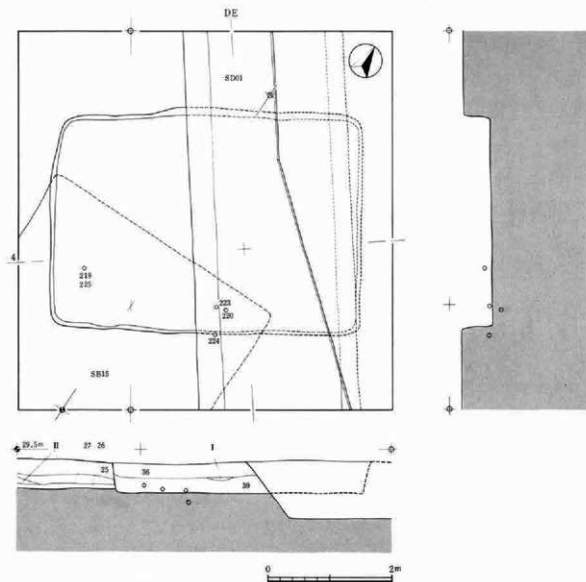


第209図 小町田遺跡 15号住居址実測図

第16号住居址 (出土遺物 第255図、PL.27)

本遺跡の南寄り、D-3区に位置する。本住居址はSB15→SB16→SD01の順に重複する。平面形は、長方形を呈し、規模は長さ5m×3.5mを測り、床面積は約17.5㎡である。主軸はN-34°-Wを示す。竈の付設は不明である。壁高は北壁で50cmを測る。壁の立ち上がりは急で80~85°である。住居址の覆土は基準土層に準ずる。すなわち、25層は炭化物を部分的に含む灰黒褐色土、26層は焼土・炭化物を多量に含む灰黒褐色土、27層は褐色味が強くローム粒を含む灰黒褐色土、36層は焼土・灰層・炭化物を含む灰黒褐色土、39層は壁の崩落土と考えられる層で黄褐色土である。その他I~II層は住居址の覆土である。I層は黒灰色の灰層であり、II層は灰黒褐色土の26層とほぼ同一であるが、やや砂質である。

出土遺物としては土師器の杯・高杯・砥石があり、版組番号219の杯と225の杯は住居址の南西辺南寄りに位置し39層中に確認され、版組番号220の杯と223の高杯は住居址の南東辺中央寄りに位置し39層中に確認された。



第210図 小町田遺跡 16号住居址実測図

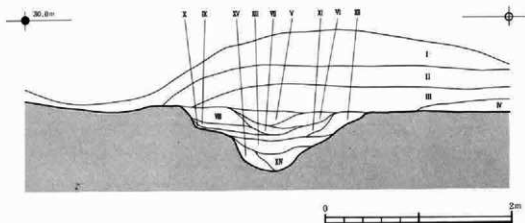
溝

第1号溝 (断面図 第199図)

1号溝は、発掘区中央部を北西方向から東南方向に走り、6号住居址、2号溝を切っている。検出面での上幅は平均2m～2.8m、下幅は1.4～1.8mを測る。溝の断面形は逆台形であり底面は平坦である。底面から110～120度の角度で、壁はなだらかに立ち上がる。溝の深さは1.2m～1.5mである。溝の走向は、ほぼ5号溝と平行して切り合うことはない。走向軸はN-37°-Wの角度を測り、発掘区では長さ66m、水路であれば北から南へ1/200の傾斜を持っている。溝の覆土は、I・II層はロームブロックを斑点状に含む灰黒褐色土でI層はしまりがよくII層は粘性が強い。III層は小さなロームブロックを含む灰黒褐色土。IV・V層はロームブロックを含む灰黒褐色土でV層はやや暗色が強くしまりに欠ける。VI層はロームブロックと黒褐色土粒を含む灰黒褐色土。VII層はロームブロック・黒褐色土ブロックを含む灰黒褐色土。VIII層はロームブロックを含む灰黒褐色粘土質で植物質を層状に含む。

第2号溝

第2号溝は、発掘区西側を北-南方向に走る。北端では1号溝に切られており、溝中央部では4号溝を切っている。溝の上幅は2m、下幅は浅いU字形を呈する。土層の堆積から、本溝は2回以上の改修が認められる。古い段階では、西側が底部から110°の角度で東側が150°の角度で立ち上がり、底部は半径40cmの弧状の断面形をとり、深さは65cmを測る。新しい溝は、上幅は2m、下幅は1.5m、底面は平坦で西側は120°の角度で立ち上がり、東側の壁は古い溝と共有し、角度は150°とゆるやかに立ち上がる。溝の深さは30cmを測る。発掘区内の溝の長さは55cmを測り、走向方はN-17°-Wを指す。溝の底面は平坦で、一方向への流れは明らかにできず、水路の可能性は少ない。溝の覆土は、I・II層は酸化した鉄分を含む灰黒褐色土。II層はしまりがよく暗い。III層は明るい灰黒褐色土。IV層はローム・白色・黒褐色のブロックを含む灰黒褐色土。V層は鉄分の沈澱の強い灰黒褐色土。VI層は灰黒褐色土。VII層は粘質の灰黒褐色土。VIII・IX・X層はロームブロックを含む灰黒褐色土。IX・XI層はロームブロックと酸化した鉄分を含む灰黒褐色土。XII層はロームと黒色のブロックを含み、粘性の強い灰黒褐色土。XIV層は灰黒褐色粘質土。



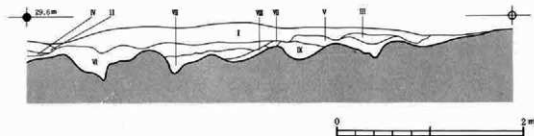
第211図 小町田遺跡 2号溝断面図

第3号溝

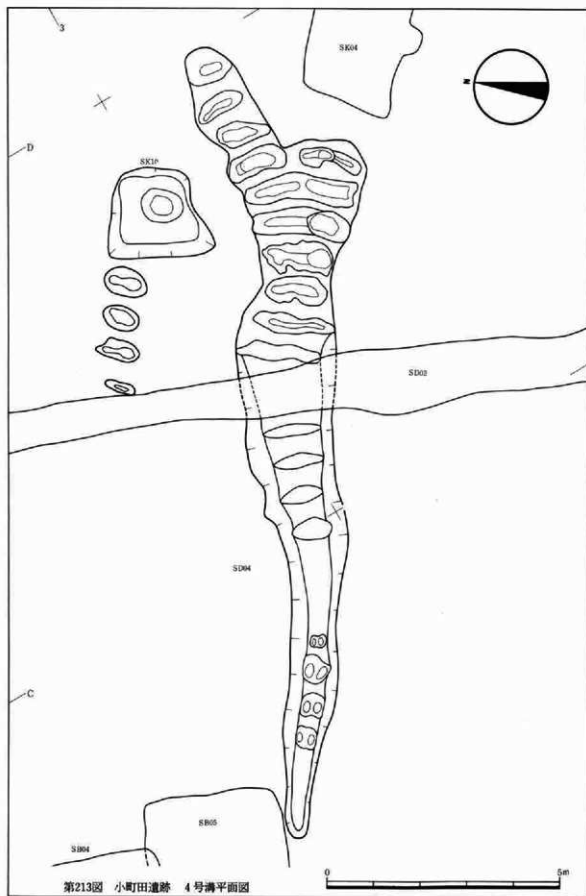
本溝は発掘区西端に位置しており、5号住を切っている。4号住と本溝との重複はあるが、覆土による前後関係は、明らかにすることはできなかった。検出された溝の長さは4.5m。走向軸はN-32°-Wを指す。溝の上幅は40~60cm、底部は尖底で深さは35cmを測る。30層は灰黒褐色土で、暗褐色味強く軟質である。31層は灰黒褐色土を呈し、斑文状にローム粒を含む。32層は灰黒褐色土を呈し、硬質で、灰層、炭化物を含む。

第4号溝

4号溝は、発掘区中央部東方向に走り、2号溝によって切られている。溝の底面は、南北方向に長い小土塊の集合体から成立しており、走向軸はN-83°-Eである。溝東端に近い位置に10号土塊が存在しており、覆土の近似性、本溝が10号溝を避けている点などから、同時期の遺構と考えることができる。溝の平面形は西側の溝幅1mで、溝の西端より東へ8mの地点より溝幅1.5mと拡がり、東端では3mを測る。長さは東南方向と北東方向の2方向へ分岐する。前者の長さは15m、後者は17mである。溝の深さは、溝の東端、西端とも発掘面は同レベルでありながら、中央部に向かってゆるやかに深くなり、60~70cmを測る。偶然にも2号溝が、この最深部分を走る。溝の底面には、前述の南北方向の小さな土塊が、確認しうるだけで20個以上掘り込まれている。当然小土塊の長さは、溝幅によって規制をうけている。小土塊の形態で最大のものは、東端寄りにある。長さ2.4m、最大幅は50cmを測る。掘削深さは30cmと深く、断面形はV字状を呈する。最小土塊は、溝の西側に位置する。長さは45cm、幅50cm、深さ20cmを測る。これらの土塊は、同一時期に埋没をしているものの、掘削から埋没の期間は短かいと考えられる。それは、土塊底面に工具痕跡と考えられる凹凸が多数検出され、それらがあまり崩れていないことから裏づけられる。また東北端の溝の北2mに接して、井戸跡と考えられる10号土塊が検出されている。本溝の土塊に対しての避け方、覆土の近似などから、古墳時代の同時期に関連をもって掘削されたものと考えられる。I層は粘性のある黒色土。下面に薄く灰白色のローム層あり。II層は黒褐色土で酸化された赤褐色の鉄分のブロックを含む。III層は粘性のある黒褐色土、ロームブロックを少量含む。IV層は茶褐色土で酸化された赤褐色の鉄分のブロックを大量に含む。V層は径5cm大のロームブロック混土層。VI層は黒褐色土の砂層で、赤褐色の鉄分を含む。VII層は茶褐色の粘質土層で径1cm大のロームブロックを含む。VIII層は黄土色のローム層で2cm大の黒褐色土をまばらに含む。IX層は黄褐色ローム。堆積層中に径1cm大の黒色ブロックを少量含む。



第212図 小町田遺跡 4号溝断面図

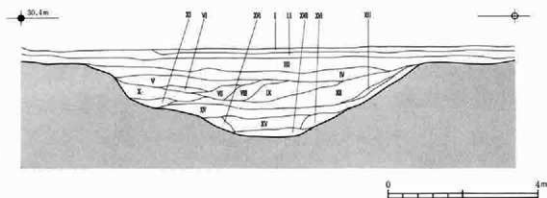


第213図 小町田遺跡 4号溝平面図

第5号溝

発掘区の東側に検出された大溝である。北西—東南方向に走り、発掘調査区では上幅は平均8m～8.6m、長さは31mを確認した。1号溝と平行して走り、7号住居址、8号住居址を切っている。土層断面の所見は以下の如くである。溝の改削が認められ、下層の古い溝の上幅は推定で7.2m、下幅は1.8mである。底面は平坦で、壁は150°で開き、深さは2mを測る。下層溝の断面には、更に改削時に堆積したと考えられるXV層も認められるが、溝全域について確認していない。上層の新しい溝は上幅8.6m、下幅5.5mを測る。底面は中央にゆるやかに凹み、壁は125°～150°の角度で立ち上がる。覆土のI・II・III層は表土層である。溝覆土のIV層は、一定の厚さで覆い安定している。新しい時期の溝に関する土層はV～XIV層であるが、V～IX層までの上位層とX～XIV層の下位層に、堆積時期が分離できると考えられる。古い時期の溝堆積層はXV～XVII層である。I層は粘質の灰黒褐色を呈し、ロームブロックと酸化した鉄分を含む。II層は粘質の灰黒褐色を呈し、ローム、褐色土、黒褐色土のブロックを含みしまりがよい。III層は灰黒褐色土で黄色ブロックを含み、粘性は強くやや暗い。IV層は灰黒褐色を呈し、ロームブロックを多量に含む。V層は粘質の灰黒褐色を呈し、ロームブロック、褐色、黒褐色のブロックを含む。VI層は粘質の強い灰黒褐色土で黄色ブロックを含む。VII層は灰黒褐色土で、一部に黄色土をレンズ状に含み、V層より明るい。VIII層は灰黒褐色粘質土で、砂を若干ブロック状に含み、VII層より明るく粗である。IX層は灰黒褐色粘質土で、砂、黄色土、黒色土のブロックを含む。X層は灰黒褐色土で、砂をブロック状に含みII、III層より明るい。XI層は灰黒褐色粘質土で多量のロームブロックを含む。XII層は灰黒褐色粘質土で、砂を部分的にはさみ、黄色味が強い。XIII層は灰色粘質土で、若干の黒褐色土のブロックを含む。XIV層は灰黒褐色粘質土で、砂れき層と粘質土層が交互に重なっている。XV層は灰黒褐色粘質土で、砂、ロームブロックを含む。XVI層は灰黒褐色粘質土で、ロームブロックを多量に、砂を少量含んでいる。XVII層は砂が堆積している。

本溝からは、大量の木器類が出土している。出土地点は発掘区全体から不規則に出土している。出土した地層は、XIV層に集中しており、溝の新しい時期に埋没している。出土した木器は、椀類、曲物、火鑽臼、下駄、折敷、皿、笥状工具などの一部加工材、木種などである。他に大量の用途不明の材、種子などが出土しているが、専門家による材質及び、種子の鑑定、及び製作技法の観察が終了しておらず、今後補遺、訂正が生じるであろう。



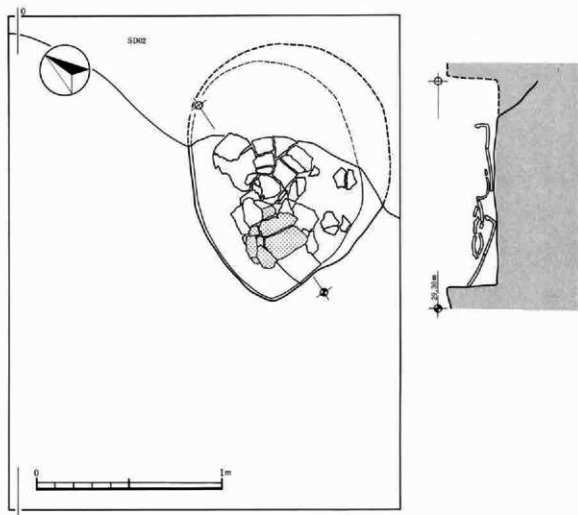
第214図 小町田遺跡 5号溝断面図

土 壌

第1号土壌 (出土遺物 第225図)

発掘区の北端D-0の位置で、2号溝に切られて出土している。平面形状は卵形を呈し、長辺は北東-南西方向で1.35m、短辺は北西-南東方向で1.07mを測る。掘り方は、東辺は溝により削平されているものの西辺では明瞭に検出され、底辺は平坦で、壁は直立しながら27cmの深さで立ち上がる。土壌覆土は2号溝覆土を除くと、土壌上層、出土土器上面層、出土土器下面層の上・中・下層に細分される。上層は黒褐色土で焼土粒及びローム粒を多量に含む。中層は黄灰色土を呈し、ロームのシルト質で黄色が強い。下層は暗褐色土で、大きな粘土粒を含む。出土遺物は一部分、溝により切断されてはいたものの器形の判明するものがある。

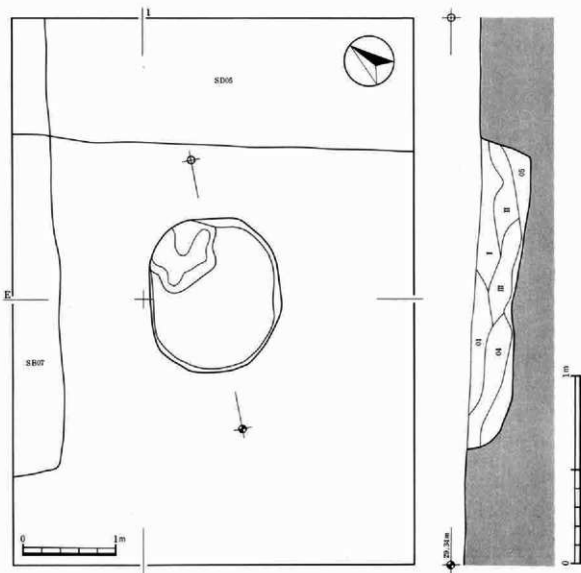
出土した土器は、縄文時代中期阿玉台式に比定される。口縁は、二対の突起をもち外反する。口縁部及び胴部文様は、隆線と半截竹管具による押し引き、沈線等で描かれる(1~4)。(1、3、4)は、同一個体である。全面に単節縄文を施した口縁部がふくらみ、頸部で「く」字にくびれ、胴部が直線的になるもの(5、6)。(5)は、胴部に隆線を垂下させる。(7)は浅鉢形をなし、口縁部に半截竹管による押し引き文を描く。胴部は無文である。



第215図 小町田遺跡 1号土壌実測図

第2号土壌

本土壌は、遺跡地の北方6号住居址と7号住居址の間で、D-1区に位置する。平面形は隅丸の長方形を呈し、長辺は北東-南西を軸に1.63m、短辺は北西-南東を軸に1.40mを測る。掘り方の底面は、ゆるやかに起伏している。壁は70°前後の角度で、直線又は腰がまるく立ち上がる。土壌の深さは、最深部で25cmである。本土壌から出土した遺物はなかったものの、発掘調査時に覆土の色調が、黒褐色土で硬質であったことから、その時期は縄文時代であることが判明していた。覆土は6層に細分され、05層は底面全体を被覆し、南方より04層とIII層が、続いて北方よりII層が中間を埋め、上層は北方より、I層と01層が流入していると判断された。01層は、黒褐色土で焼土粒及びローム粒を多量に含む。I層は、鉄分及びローム粒子を含んだ01層より、やや明るい暗灰色土。II層は、鉄分及び多量のローム粒子を含む、暗灰色粘質土。III層は上部及び中央部に鉄分を含み、斑点状のロームを含んだ暗灰色粘質土。04層は、暗褐色土で大きな粘土粒を含む。05層は、青灰色土を呈し、暗褐色粒を多量に含む。



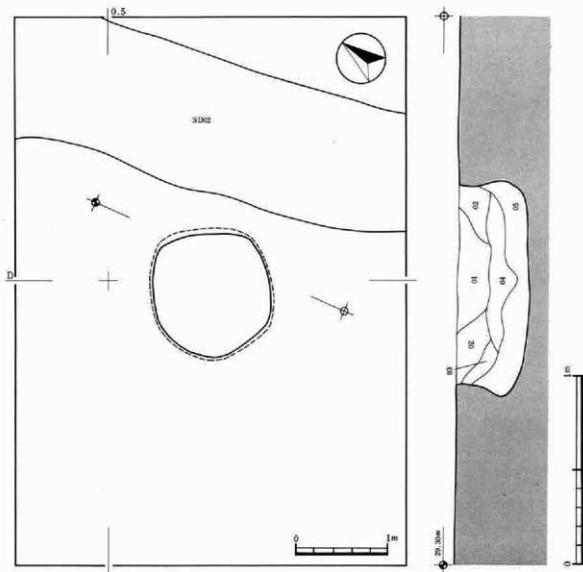
第216図 小町田遺跡 2号土壌実測図

第3号土壌 (出土遺物 第226図)

本土壌は発掘区の北西隅、2号溝と1号土壌にはさまれた付近で、c-0区に位置する。平面形は隅丸五角形を呈し、径は北-南方向で1.45m、東-西方向で1.40mを測る。掘り方の底面は平坦で、壁際は丸い腰を持ち、袋状に内傾しながら立ち上がる。深さは土壌中央の最深部で39cmである。覆土は本遺跡では縄文時代特有の、硬質の黒褐色土を呈している。01層は、黒褐色土で焼土粒及びローム粒を多量に含む。02層は、灰褐色土でロームのシルト質のもの。03層は、黄灰色土を呈しロームのシルト質で黄色が強い。04層は、暗褐色土で大きな粘土粒を含む。05層は、青灰色土を呈し暗褐色粒を多量に含む。

出土した土器は、縄文時代の中期加曾利E式に比定される。

口縁部は平縁であるが、貫孔する把手をもっている。器形は、口縁部がふくらみキャリパー状を呈すると考えられる。文様は、口縁部に隆線と沈線をもって「S」字状を描いている。胴部には、単節R Lの縄文を施している。(1)

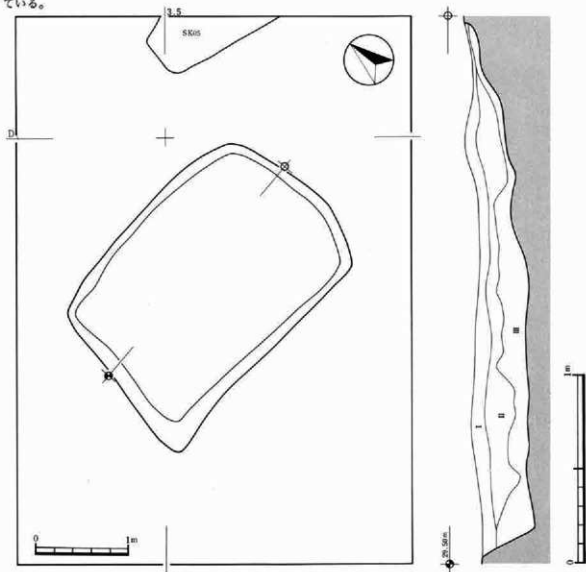


第217図 小町田遺跡 3号土壌実測図

第4号土壌 (出土遺物 第226図)

本土壌は、発掘区の中央部C-3区に位置する。北東側に5号土壌、北西側に10号土壌、西側に4号溝が検出されている。土壌の平面形は、長方形を呈している。長辺の軸はN-81°-Wをとり3mを測る。短辺は2mである。底面の掘り方の西半分は平坦で、東半分は東方に向かって段差を持ちながら立ち上がる。覆土の堆積状態はⅢ層が底部全面、特に西半分を中心に凹凸を持って覆い、Ⅱ層、Ⅲ層は土壌全体に平均的に埋める。Ⅰ層は黒褐色を呈し、焼土粒及びローム粒を多量に含み硬質である。Ⅱ層は茶褐色を呈する。内部に2cm大の酸化された赤褐色の鉄分を、縦方向で管状に含む。Ⅲ層はこげ茶色の粘性土で、赤褐色で2cm大の鉄分を含んでいる。底面近くには灰白色のローム質土が、3cm大のブロックで多数含まれている。

出土した土器は、縄文時代前期初頭のもつと中期のものである。胎土に繊維を含み、表裏面に条痕を施したもの(3)。また縄文を施したもの(4、9)。平口縁で内反し口縁部に円形刺突を施し胴部に縄文を施す(5)。平口縁で口縁部に鋸歯状に沈線を施し、直下に隆起をもたせ沈線で渦巻を描く。胴部には絡条体回転痕を施す(6)。(7)は突起部であり刻目及び沈線を施す。特筆されるものとして硬玉の大珠が出土している。

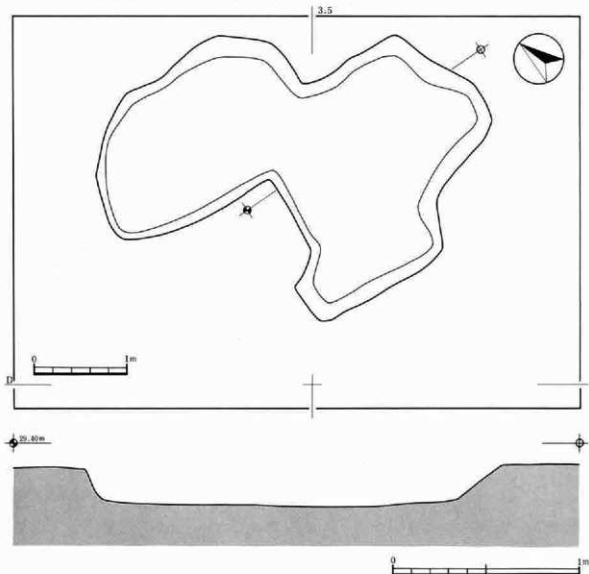


第218図 小町田遺跡 4号土壌実測図

第5号土壇 (出土遺物 第226図)

本土壇はD-3区に位置する。発掘区の中央部にあたる。北東に近接して1号溝が、南東に近接して15号住居址と16号住居址が、南西には4号土壇が存在する。平面形は、東西軸の長方形土壇が3個重複するような、不定形な形を呈する。長辺は北西-東南方向で4.2m、短辺は北東-南西方向で3.05mを測る。底面の掘り方は平坦で、壁高は40°~65°位でゆるやかに立ち上がる。深さは22cmと浅い。本土壇は、発掘当初の平面形の不定形は検出状況から重複を考え、慎重に土層断面を検討したが、掘削時期、廃棄時期の差を示す資料はなかった。覆土は、上層、中層、下層の3層に細分できた。上層は底面全体を、5cmほどの厚さで平均的に覆う。中層は壁の隅肉が、三角形に流れこむ。下層は中央部が15cmの厚さで、なだらかなU字状を呈して壁周縁に至る。上層は黒褐色土を呈して焼土粒及びローム粒を多量に含み硬い。中層は黄灰色土でロームのシルト質で黄色味が強い。下層は暗褐色土層中に大粒のローム粒を含む。

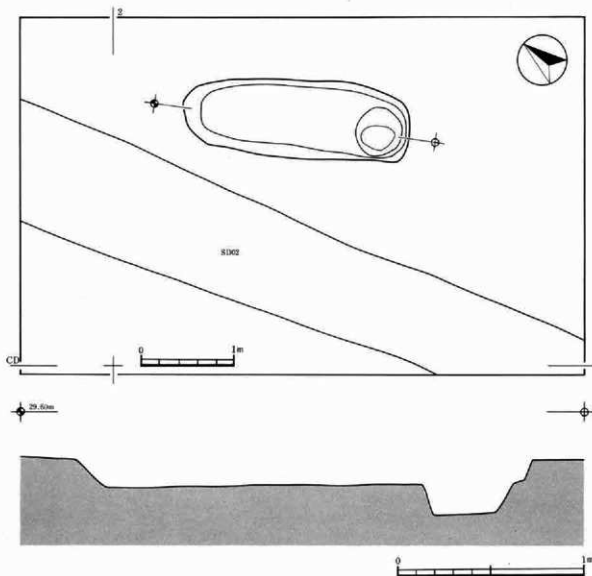
出土した土器は縄文時代中期勝坂式に比定される。胴部に隆線と半截竹管による押し引きで文様区画を行ない隆線に刻目、及び沈線等で文様を描出する。(2)



第219図 小町田遺跡 5号土壇実測図

第6号土壇

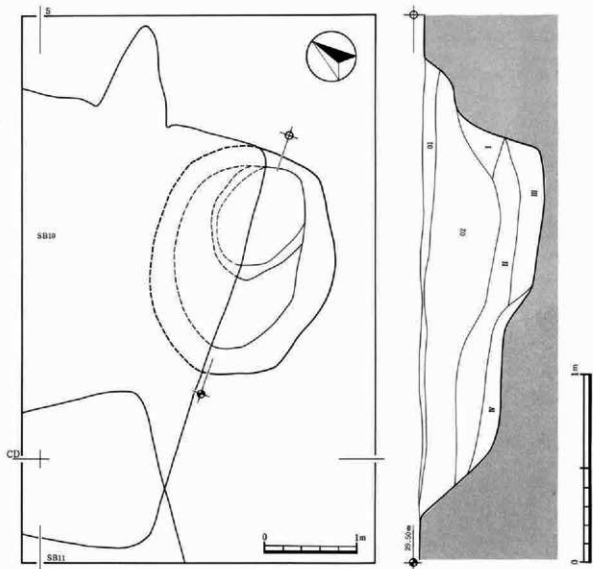
本土壇はC-2区に位置する。西に接して2号溝がある。東側4mの距離には、9号土壇がある。南側8mには、10号土壇がある。南東方向13mの距離には、4号土壇と5号土壇がある。土壇の平面形は、隅丸長方形を呈している。長辺方向の主軸は、N-29°30'-Eを指す。長辺の長さは2.45mである。短辺は中央の最大幅部分で80cmを測る。土壇の掘り方形状は、底面が平坦な隅丸長方形土壇の南側に、南北方向の上端径50cm、東西方向の上端径52cmの円形土壇が、穿たれている。上段の長方形土壇は平坦な底面から45°~60°の角度の壁が立ち上がる。掘り込みの深さは、15cmである。下段の円形土壇は底面が平坦で120°の角度で壁は立ち上がる。掘り込みの深さは、上段土壇の底面から15cmである。上段土壇の覆土は3層に細分される。01層は黒褐色土で、焼土粒及びローム粒を多量に含む。02層は灰褐色土で、ロームのシルト質のもの。04層は暗褐色土で、大きな粘土粒を含む。下段土壇のI層は、黒褐色土で径2cm大の黄色ブロックを少量混土している。II層は、黒褐色土と灰黄褐色土の混土層である。



第220図 小町田遺跡 6号土壇実測図

第7号土壌 (出土遺物 第226図)

本土壌は、発掘区の南端部C-5区に位置する。東側8mの距離には1号溝、北側15mには4号土壌、5号土壌が検出されている。本土壌は、平安時代と考えられる10号住居址に北半分を削られている。土壌は上段土壌と下段土壌からなっており、平面形状は楕円形を呈し主軸方向はN-72°-Eを指している。上段土壌の長辺は上幅2.42m、下幅1.6mを測り、短辺は上幅1.95m、下幅1.4mを測る。平坦な底部から50°~55°の角度で壁は立ち上がる。深さは最深部で46cmである。下段土壌の長辺は上幅1.1m、下幅72cm、短辺は上幅1.04m、下幅83cmを測る。底面は平坦で壁は110°~145°の角度で立ち上がる。深さは、上段土壌底面より17cmと浅い。覆土は6層に細分される。01層は黒褐色土で、焼土粒及びローム粒を多量に含む。02層は灰褐色土で、ロームのシルト質のもの。I層は、バサバサした灰褐色土でローム粒を多く含む。II層は、灰黒褐色土でしまりよく若干のローム粒を含む。III層は、灰黒褐色土で非常に固くしまっており斑点状にローム粒を含む。IV層は、灰褐色土でしまりよく、ローム粒を多量に含む。

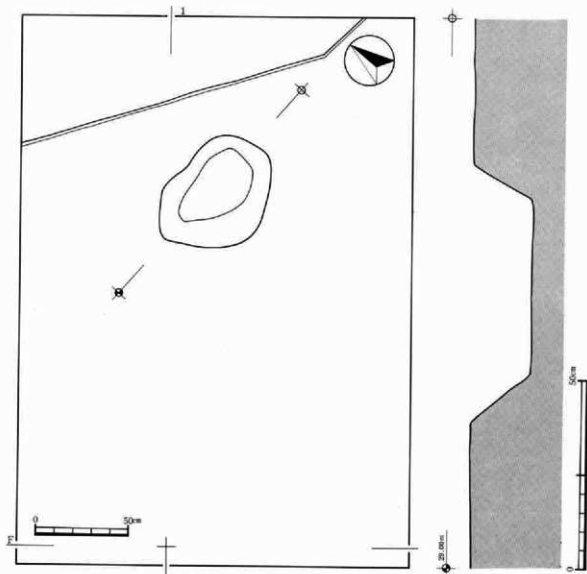


第221図 小町田遺跡 7号土壌実測図

第8号土壇 (出土遺物 第226図)

本土壇は、発掘区の北東端F-1区に位置する。西側には5号溝がある。南西方向12mの距離には2号土壇がある。南東方向15mの距離には8号住居址がある。土壇の平面形は、不安定な楕円形である。長辺主軸の方向はN-85°-Wを指す。長辺の上幅は68cm、下幅は47cmを測る。短辺の上幅は50cm、下幅は28cmを測る。掘り方の底面は平坦で、壁は50°~60°の角度で立ち上がる。土壇の深さは16cmと浅い。覆土は3層に細分できる。下層は土壇底面を5cmの厚さで平らに覆う。中層は土壇縁辺部より斜めに流れ込み、土層断面は三角形を呈する。上層は、土壇を覆いつくす下面がU字状を呈する断面である。01層は黒褐色土で、焼土粒及びローム粒を多量に含む。02層は灰褐色土でロームのシルト質のものI層は黄灰色土でロームシルト。II層は硬い黒褐色土で炭化物を多量に含む。

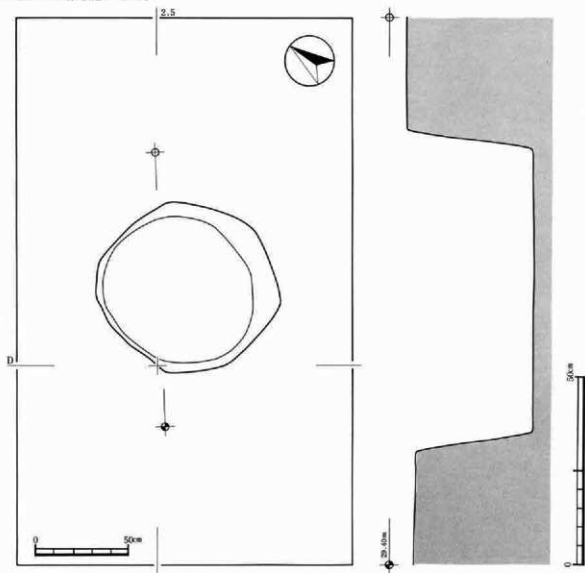
出土した土器は、縄文時代前期初頭のものである。胎土に繊維を含み、胴部に縄文を施す。縄文は掘りの反する2種類の2段単節を用いて羽状をなす。一方は0段多条の可能性もある。また、裏面には条痕を施している。(8)



第9号土壇 (出土遺物 第226図)

本土壇は、発掘区の中央D-2区に位置する。東は1号溝、西は2号溝にはさまれている。北西方向4mの位置には、6号土壇が位置する。南東方向10mには、5号土壇が位置する。南方向6mの位置には10号土壇、10mの位置には4号土壇がある。土壇の平面形は、円形を呈する。掘り方の形状は、平坦な底面が60°~85°の角度で、直接的な壁を持って外反する。北-南方向の上幅は99cm、下幅は78cmを測る。東-西方向の上幅は90cm、下幅は78cmを測る。01層は黒褐色土で、焼土粒及びローム粒を多量に含む。I層は灰褐色土を呈し、部分的にロームシルトをはさむ。II層は灰褐色土を呈し、ローム質の黄色土ブロックを含む。III層は暗褐色土を呈する。IV層は黒褐色硬質土である。

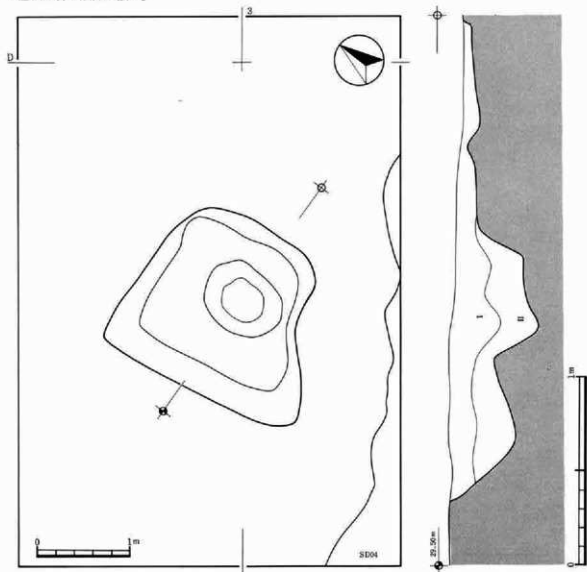
出土した土器は、縄文時代中期加曾利E式に比定される(10, 11, 12)。波状口縁で頸部から口縁にかけて、大きく外反する深鉢形となり、口縁部には隆帯と沈線で文様構成がなされ、文様は沈線による渦巻文を基本としている(11)。平口縁のキャリバー状を呈する深鉢形で、口縁部文様は沈線と隆帯で構成され、胴部には縦位に条線を施す(12)。



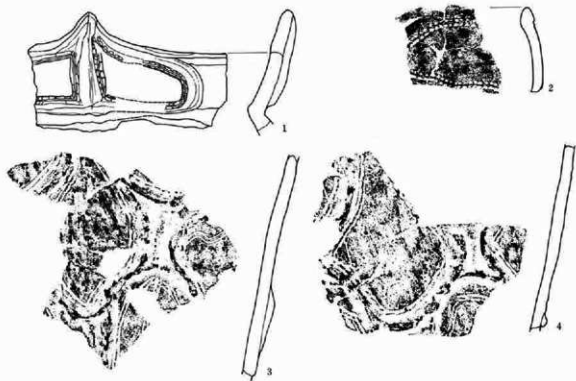
第223図 小町田遺跡 9号土壇実測図

第10号土壌

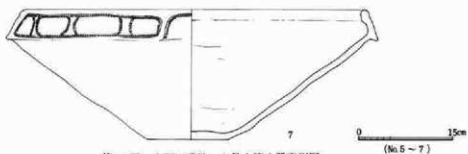
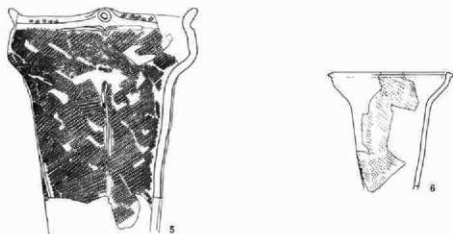
本土壌は、発掘区の中央部C-2区に位置する。1号溝と2号溝に挟まれており、南側に接して本土壌と一体を成すと考えられる4号溝がある。北側5mの位置には9号土壌がある。北西方向8mの位置には6号土壌がある。南東5mの位置には4号土壌が、更に7mの位置には5号土壌が位置する。本土壌周辺、C-2区、C-3区には不定形で径20cm大で深さ5cmの凹凸が多数存在しており、因化は無理であったが人為的な様子がうかがわれ遺構面と考えられた。本土壌の平面形は、一部括れる方形を呈している。掘り方形は片流れの底面を持ち、平面形の上段遺構と平面が楕円形で、底面中央が上げ底を呈する下段遺構で構成される。上段遺構の北-南方向の上幅は2.25m、下幅は1.72m、東-西方向の上幅は1.9m、下幅は1.4mを測る。深さは東寄りが15cm、西寄りが35cmと片方に傾斜する。壁の立ち上がり角度は50°~75°である。下段遺構の北-南方向の上幅は90cm、下幅は50cm、東-西方向の上幅は69cm、下幅は40cmを測る。最深部は、上段遺構底面より25cmである。壁は60°を測る。I層は茶褐色を呈し径2cm大の鉄分の強いブロックを含む。II層は茶褐色土で底面は特に鉄分が強い。



第224図 小町田遺跡 10号土壌実測図



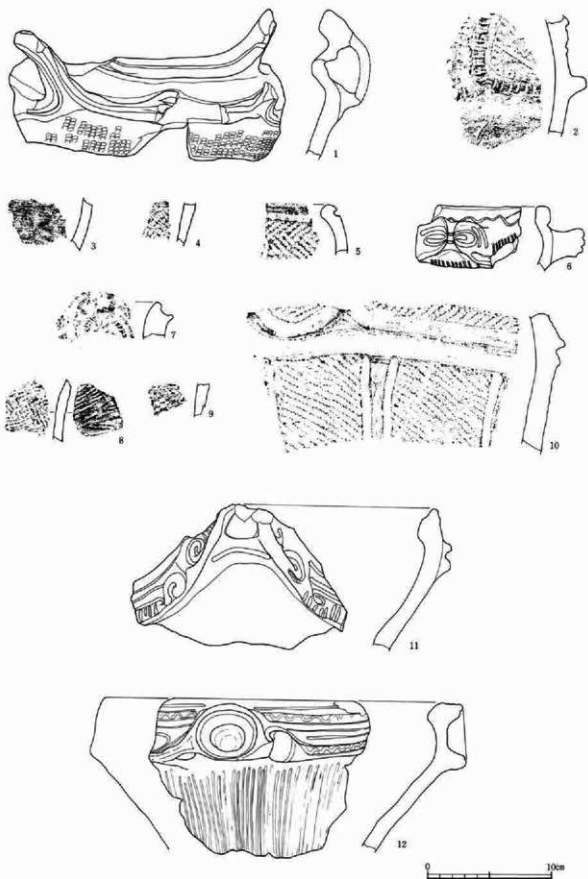
0 10cm
(No.1-4)



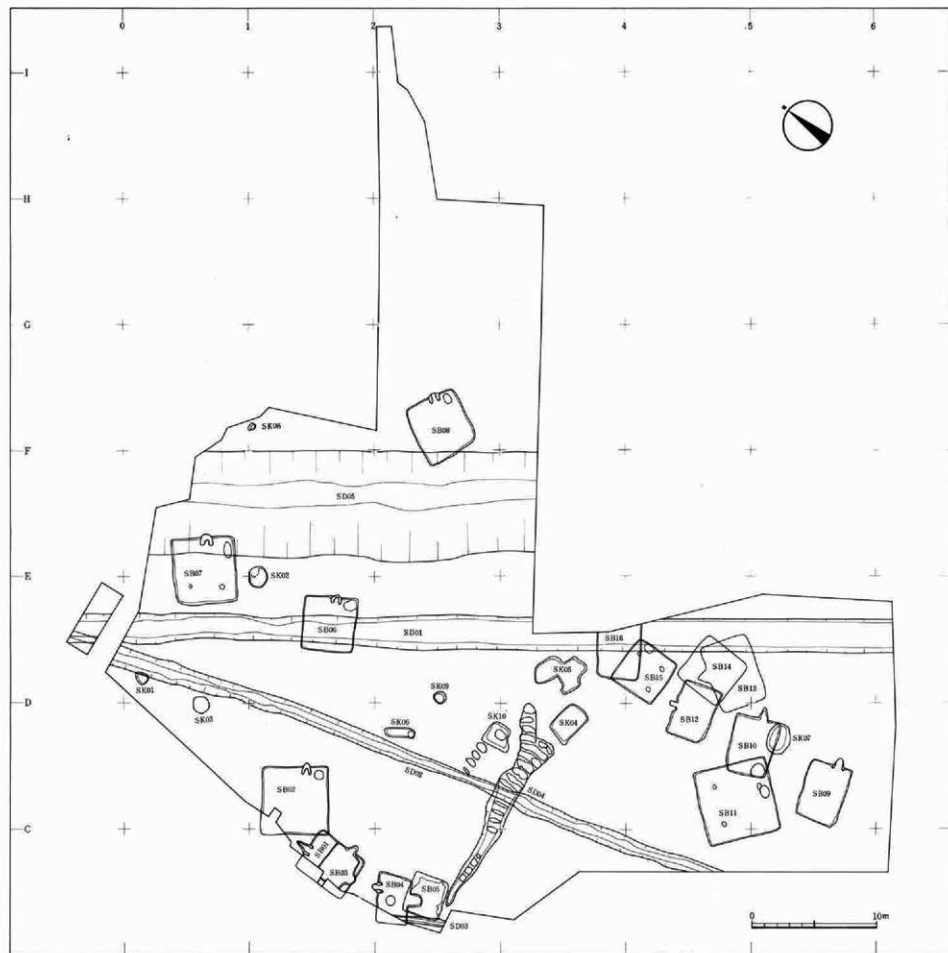
0 15cm
(No.5-7)

第225图 小町田遺跡 1号土壙土器実測图

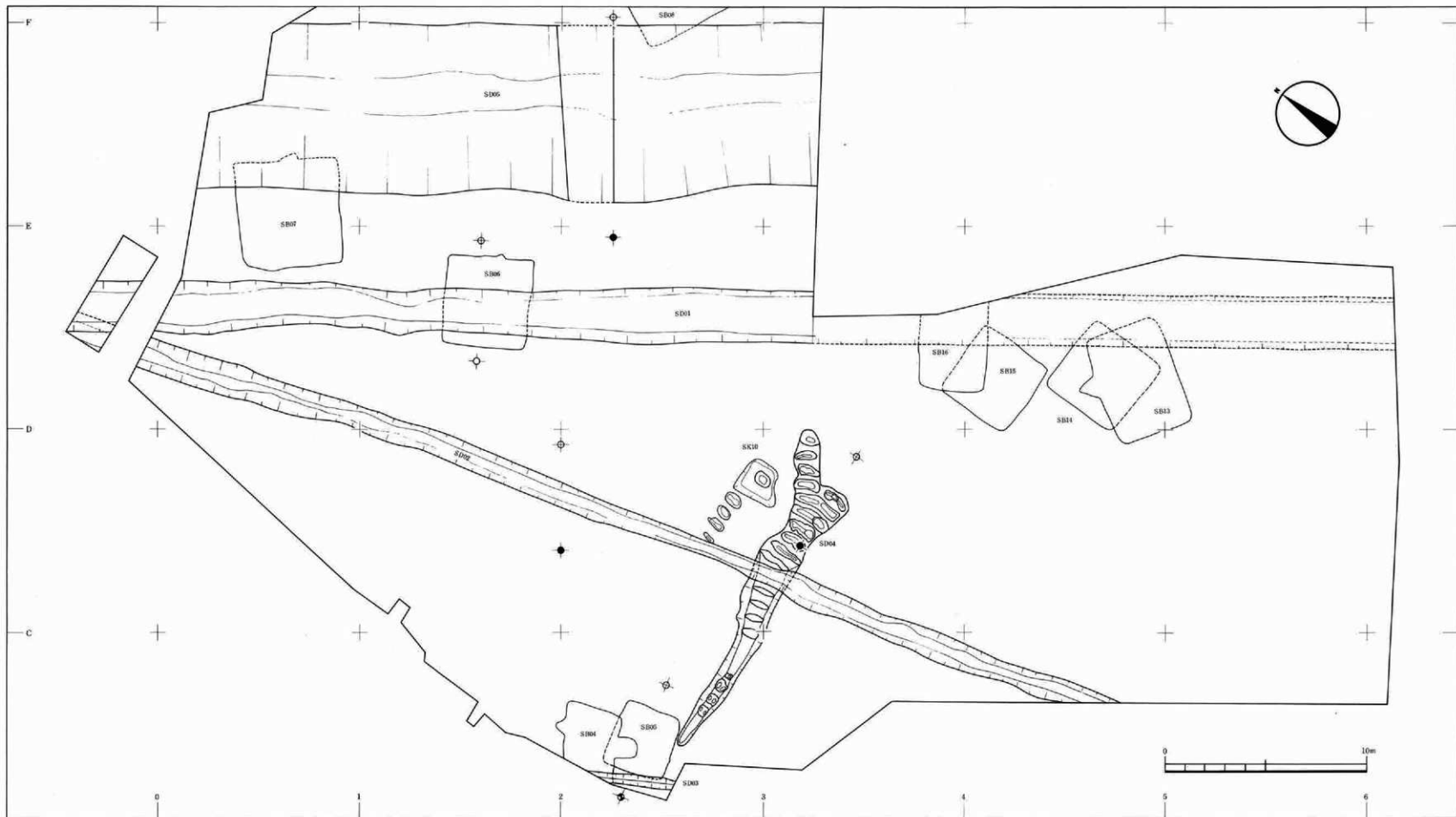
第V章 小町田遺跡の調査



第226図 小町田遺跡 3・4・5・7・8・9号土壇土器実測図



第227図 小町田遺跡 全体図



第228回 小町田遺跡 溝平面図

3 遺 物

概要

発掘調査した総面積は5200㎡である。検出された遺構は住居址16軒、溝5条、土壇10基であった。

住居址の時期は、鬼高期が8軒、真間期が5軒、国分期が3軒である。溝の時期は鬼高期1条、真間期2条、国分期2条である。土壇の時期は覆土の色調から縄文時代9基、鬼高期1基である。更に縄文時代9基の土壇は、前期が2基、中期が4基、不明が3基に細分される。

本遺跡から出土した土器の総点数は9033点である。遺構別にみると、住居址出土5105点、溝出土1254点、土壇出土46点、発掘区出土1461点、その他の表採品1167点である。遺構や発掘地点から明瞭に図化して取り上げられた土器が87%にのぼり、今回の調査の質の向上は発掘参加者の協力によるところ大である。

土器別にみると、土師器5550点、須恵器184点、縄文3299点である。土師器が全体の62%、縄文土器が36%と縄文土器の多さが注目される。

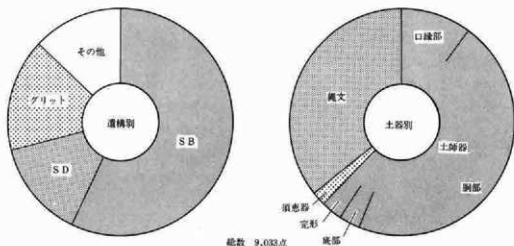
整理作業で実測した土器は534点、報告書に所収したものは283点で、全出土土器の3%にあたる。

縄文時代の土器は、前期初頭の花積下層式、中期中葉の阿玉台式、勝坂式、中期後半の加曾利EⅢ式～EⅣ式、後期初頭の称名寺I式、後期中葉の加曾利B式が出土している。

古墳時代の土器は、主として7軒の鬼高期の住居址から出土している。この時期の土器の器形は杯、椀、壺、甔、高杯、用類など小型土器類などである。特に須恵器蓋杯模倣の土師器の杯や、甔の発達に対応して変化している長胴壺に編年の視点が集中する。

また、須恵器の杯が出土しており、S B07の88はT K10、S B08の155はMT15、S B11の204はT K47に近似、位置づけられることができれば、5世紀の第4四半紀から6世紀の第2四半紀までの須恵器と土師器の編年対応が可能となる。

真間期と国分期を時期区分した理由に住居址の平面形態による分類が基本にあった。そのため重複住居の土器分類と組成と時期判定に若干の齟齬が生じている。各時期の器形変化で特徴的なものは長壺である。墨書土器は国分期の須恵器杯に書かれてたものが3点出土し、その他には土製支脚、砥石、土錘が出土している。



第229図 小町田遺跡 出土土器の分類

遺構外出土遺物

本遺跡で出土した縄文時代の遺物は、検出された縄文時代の遺構出土のものは少なく、むしろ歴史時代住居址・擾乱・表採等々の縄文時代以外の時代の遺構等より出土したものが大多数を占める。そこで本項ではこれら縄文時代の遺構以外から出土した遺物を、遺構外遺物として扱うこととする。

土 器 (第230～234図)

遺構外出土土器は、縄文時代前期初頭から後期後半までの様々な時期の土器が含まれている。分類にあたっては、時期別に第1群から第5群まで次に示すごとく大きく5分した。

第1群土器 縄文時代前期前半 第2群土器 縄文時代中期前半 第3群土器 縄文時代中期後半
第4群土器 縄文時代後期前半 第5群土器 縄文時代後期後半

第1群土器

第1類 (第230図1～9)

本類は、縄文時代前期初頭花積下層式土器に比定される土器である。胎土に多量の繊維を含む。

- a) 器面にハイガイの貝殻背部による連続的な圧痕をもつ土器である(1～4)
これらの土器に表出する文様は、一見2段単節の縄文を思わせるが、これは施文具であるハイガイ特有の放射肋上に等間隔の乳頭状結節があるためである。むしろ、このハイガイを押圧する手法により、疑似縄文を描きさせた様な感もある。また、(4)は、棒状の施文具により等間隔に刺突を巡らせ、その下に2段単節RLを施し、さらに縄文と同様に貝殻背圧痕を併用している。
- b) 裏面に、貝殻条痕の施される土器である。(5～7)表面に右捻り、左捻りの2種類の原体を用いて羽状縄文を施文している(7)が、器面の風化により原体は不明である。(4～5)についても、表面に縄文を施しているが風化のため原体は不明である。
- c) 口縁は平縁で、口縁部に段をもち2段単節RL・LRの2種で羽状縄を施文する。LRの原体はやや細目の節が緻密になっている。胴部にも、口縁部と同様に羽状縄文を施す(8)。(9)は、胴部片であるが施文される縄文は(8)と同様の羽状縄文である。

第2類 (第230図10～12)

本類は、縄文時代前期閉山式土器に比定される土器である。胎土に繊維を含む。

- a) (10)は、隆帯を巡らし、隆帯上に棒状ないしは、ヘラ状工具で底に刺突による刻みを施し、その直下の胴部以下に2段単節 $R < \frac{1}{2}$ と、0段多条の $L < \frac{1}{R}$ でループ文を羽状に数段施す。(11)についても(10)と同様に、ループ文で羽状に縄文を施す。
- b) 口縁が平縁で、異状斜縄文 $R < \frac{1}{R}$ と、 $L < \frac{1}{R}$ の2種類で施文したものの(12)である。

第3類 (第230図13～22)

本類は、胎土に繊維を含む胴部片で、器面に縄文が施文されている。時期については、明確ではない。

- a) 斜縄文を主とする。無節のLを施したものの(13、22)。単節RLを施したものの(18、19)がある。(22)は繊維策が荒く、条が太い。
- b) 羽状縄文を主とする。2種類の撚りの異なる無節のLと、Rで羽状を施すもの(17)。同様に単節LRと、RLで羽状を施すもの(16、21)。この(16、21)は共にRLの節が、LRのものとは比密である。(14)は、LRとRの2種類の原体を結束させたものである。LRは節がかなり密であり、0段多条による可能性もある。(20)は、無節のRとLによる結束での羽状縄文である。

第2群土器

第1類(第230図23~33)

本類は、縄文時代中期、阿玉台式土器に比定される土器である。胎土に雲母を含む。

- a) 口縁は平縁で、舌部が広く、口縁部にヘラ状の工具により刺突を巡らせ、直下に隆帯及びヘラ、棒状工具で施文したもの(25)。口縁が平縁で、半載竹管状の工具により連続的な押し引き文を施すもの(27)。口縁が波状となり、波状頂部から隆帯を垂下させる。口舌部及び隆帯上に刻みを、さらに半載竹管状工具により連続的な押し引き文を施すもの(31)。口縁部から胴部へ変換する部分で大きく「く」の字に屈曲し、ヘラ状工具により刺突を施した浅鉢形土器となるもの(32)。隆帯等を持ち、楕円状に連続押し引き文を施すもの(28、30)。胴部に爪形状に刺突を巡らせたもの(33)。隆帯による文様装飾を行なうもの(29)。

- b) 口縁が平縁で、口縁部に隆帯を持ち、半載竹管状の工具で連続的な押し引き文を施すもの(23、24、26)。

第2類(第230図34~42)

本類は、縄文時代中期勝坂式に比定される土器である。

- a-1) 口縁は平縁で、口縁部に1cm程の無文帯がめぐらされ、その直下に隆帯と半載竹管状の工具で連続的な押し引き文を施したもの(36)。

- a-2) 口縁は平縁で、口縁部に1cm程の無文帯がめぐらされ、その直下に半載竹管状の工具で連続的な押し引き文を数条施したもの(34、35)。(34)は2種類の工具が用いられている。

- a-3) 胴部に隆帯で文様区画し、その周りに半載竹管状の工具で連続刺突を施したもの(38、42)。(38)は隆帯上にも刺突を施す。胴部に隆帯ではなく、沈線で区画し、刺突を施すもの(41)。

- b) (40)は隆帯と沈線により区画し、沈線で渦巻状に文様を施す。また隆帯上に刻目状に刺突を施す。

- c-1) (37)は隆帯で区画し、その周りに幅の広い半載竹管状で刺突を施し、さらに、先端の細い半載竹管状で刺突を加えている。

- c-2) (39)は器面に単節LRを縦位方向に施文している。

第3群土器

第1類(第231図1~7)

本類は、おおよそ縄文時代中期加曾利EⅠ式に比定される土器である。

- a) 口縁に把手をもつと考えられ、口縁部と胴部の文様を区画する部分に鈎状の隆帯をもつ深鉢形をなす。胎土に雲母を含む。口縁部文様は、隆帯と刺突で鋸歯状文を持ち、鈎状隆帯上部に刻目状に刺突を施す。胴部には、無節のLで単軸絡条体による回転圧痕を施す(1)。

- b) 口縁に把手をもつと考えられ、口縁部には沈線を主とした渦巻等の文様を施す(2)。

- c) 地文に無節Lの単軸絡条体による回転圧痕を施し、口縁部に隆帯及び沈線で横位「S」字文を構成す

第V章 小町田遺跡の調査

る(4)。胴部に無節Lの単軸絡条体による回転圧痕を施し、底面に網代痕をもつ(5)。

d) 地文に単軸絡条体による回転圧痕を施し、口縁部に隆線によるクランク状文を構成する(6)。口縁は平縁で、地文に縄文を施し、隆線で文様構成する(3)。

e) 貫孔する把手で、把手上に「S」字文が大きく施され、口縁部の地文に単節RLが施される(7)。

第2類(第231図8～17)

本類は、おおよそ縄文時代中期加曾利Ⅱ式及びそれと同期と考えられる土器である。

a) 口縁が平縁で口縁部に隆線と沈線で文様構成するもの(8)、また地文に縄文をもつもの(9～12)。

b) 頸部に無文帯をもち、胴部地文に単節LRを施し、沈線で区画する(13)。

c) 口縁が平縁で、口縁部文様帯下の頸部無文帯をもち、胴部文様の区画が沈線によって施されるもの(14～16)。

d) 口縁は波状をなし、口縁部文様は波状頂部下に渦巻をもち、頸部が「く」字にくびれ無文帯のもの(17)。

この土器は、関東系のものではなく、むしろ東北系の大木式b 8式土器と考えられる。

第3類(第232図1～11)

本類は、おおよそ縄文時代中期加曾利EⅢ式に比定される土器である。

a) 深鉢形をなし、胴部に櫛歯状工具による条線を施したもの(1)。

b) 口縁が平縁で胴部の張る浅鉢形をなし、口縁部は無文で胴部に沈線で文様構成を行なう(2)。

c-1) 口縁が波状ないし平縁で、口縁部文様において前段階の渦巻がくずれ楕円区画が発達する。また地文に縄文を施すものが主となり、沈線を垂下させることで区画を行ない、その沈線間に磨り消すという手法が多く用いられる(3～10、12)。

c-2) 口縁は平縁でやや内反し、口縁部に円形刺突文を2条めぐらせ、胴部地文に縄文を施す。

第4類(第232図12～18、第233図1～19、第234図1～9)

本類は、おおよそ縄文時代中期加曾利EⅣ式に比定される土器である。

a-1) 口縁は平縁で、やや内反する。口縁部文様が無く、地文に2段単節の縄文を施し、沈線で文様区画を行ない区画内を磨り消すもの(第232図13、14)。

a-2) 平縁で、やや内反する。口縁部に無文帯をもち、地文縄文で沈線による文様区画と磨り消しを行なうもの(第232図15、16)。

b) 口縁は平縁で、内反する。口縁部に無文帯をもち、以下を隆線と沈線で文様区画を行ない、地文に単節縄文を施す(第232図17、18)。

c-1) 波状口縁で、内反する。口縁部に沈線を1条めぐらせ、口縁部無文帯と胴部文様を区画する。胴部文様は、地文に単節縄文を施し沈線で区画する。さらに区画内を磨り消す(第233図1、2)。この2片は同一個体である。

c-2) 胴部で「く」字にくびれる。文様は、地文縄文で沈線による区画と磨り消しが施される。胴部上下半に施される縦長の楕円状区画は、一線上に並ぶように施される。(第233図3、4)。

d-1) 波状口縁で内反し、波状の一つに把手をもつ。真文に単節縄文を施す(第233図5)。

d-2) 平縁ないしは波状口縁となり口縁が内反する。口縁部無文帯と胴部文様を一条の沈線をめぐらせて区画する。胴部文様は地文に単節縄文を施し、沈線で区画してから区画内を磨り消す(第233図6～12)。

d-3) d-2と同様であるが、口縁部無文帯と胴部文様を区画するにあたり、沈線ではなく刺突によって描出するもの(第233図13、14)。

d-4) 胴部が「く」字にくびれ、地文縄文で沈線と磨り消しで文様を施す。c-2と類する点はあるが、楕円状の区画が上・下でずれるように施文されたもの(第233図15)。

e) 平緑ないしは波状口縁となり、口縁が内反する。口縁部無文帯と胴部文様を区画するため、一条の沈線をめぐらせる。胴部には、単節縄文を施す(第233図16、17)。(17)は、同一原体で回転方向を変えることにより羽状を描出させている。

f-1) 平緑で口縁が内反し、把手をもつ。d-2で施文された文様を基本とする。d-2では、沈線による文様区画がなされたが、沈線を微隆帯に転換させ同様な文様を描出させたもの(第233図18、19)。

f-2) e)に類するが、沈線ではなく微隆帯により口縁部無文帯と胴部文様を区画するもの(第234図1~7)。把手をもつものもある(第234図1~3)。

f-3) 平緑ないしは波状口縁で、口縁が内反する。口縁部無文帯と胴部文様を微隆帯で区画し、胴部には地文縄文で微隆帯を垂下させ文様区画を行ない、さらに区画内を磨消する(第234図8~9)。

第4群土器

第1類(第234図10~12)

本類は縄文時代後期初頭に位置づけられ、加曾利EIV式から称名寺I式への過渡期のものと考えられる。

波状口縁となり、口縁がやや内反する。第3群土器第4類Fに施された口縁部無文帯、及び口縁部と胴部区画の微隆帯は、そのまま残存し描出される。しかし、胴部において、研磨された無文地に曲線を主とした沈線が施されたもの(10~12)。

第2類(第234図13~20)

本類は、縄文時代後期掘之内I式に比定される土器である。

a) 口縁は平緑を基本とするが、山形状に2対の突起をもつ。口縁部に太目なゆるやかな沈線を施し刺突等を加える。胴部には、縦文様を基調とした曲線的な沈線を施し、地文に縄文をもつ(13~18)。把手をもち、胴部上半部に注ぎ口を有する注口土器となるものもある(19)。

b) 平口縁で、全体的に外反するが口縁部でやや内反する。口縁部文様は、太い沈線と直下に刺突をめぐらせる。胴部は、地文縄文で沈線による曲線等を描く(20)。

第5群土器

第1類(第234図21~24)

本類は、縄文時代後期加曾利B1式に比定される土器である。

a) 胴部に数条の平行沈線を施しさらに平行沈線を区切るように縦にくずれた「S」字状の沈線を施したものの(21)。胴部に縦の沈線で区切り端部を丸める平行沈線を施したものの(22)。沈線間には縄文を施す。

b) 口縁に突起をもち、胴部に数条の平行沈線を施す。さらに平行沈線を縦に区切るように「c」状の沈線を施している(23)。器面はよく研磨されている。

c) 平口縁で、胴部文様として格子状に沈線を施している(24)。a・bに比べ、器面研磨もなされず厚身の土器である。粗製土器として考えられよう。

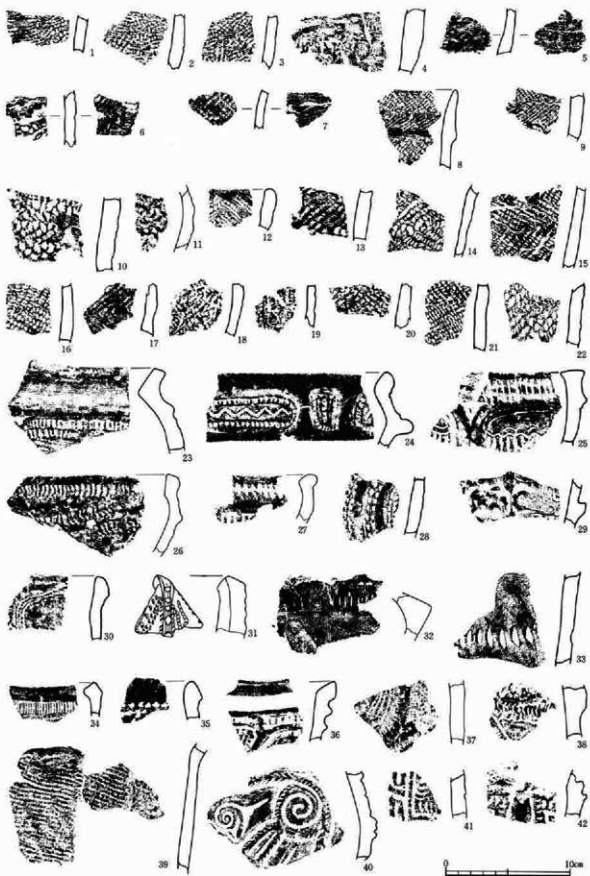
第2類(第234図25)

本類は、縄文後期加曾利B2式に比定される土器である。

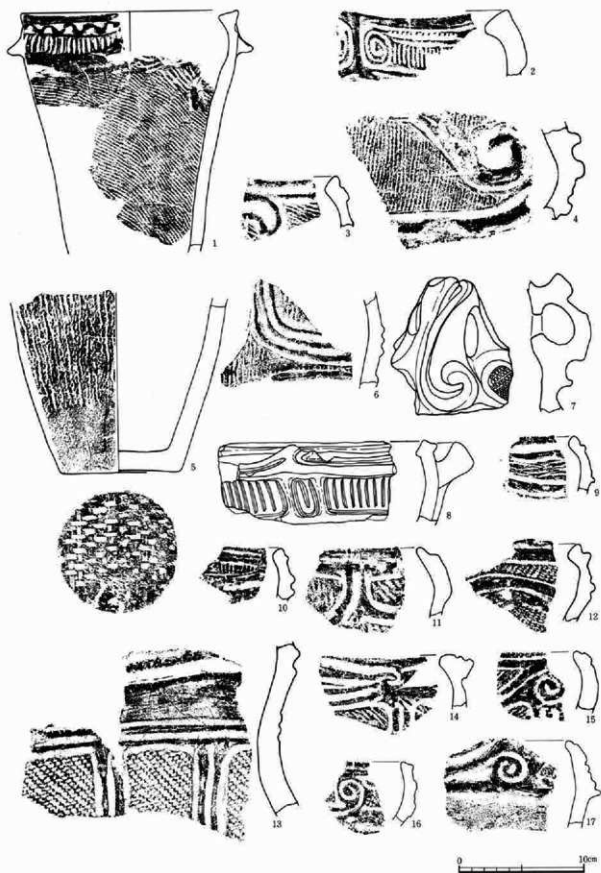
口縁は内反し、口舌部に刻み状の刺突を施したものである(25)。

(谷藤)

第V章 小町田遺跡の調査

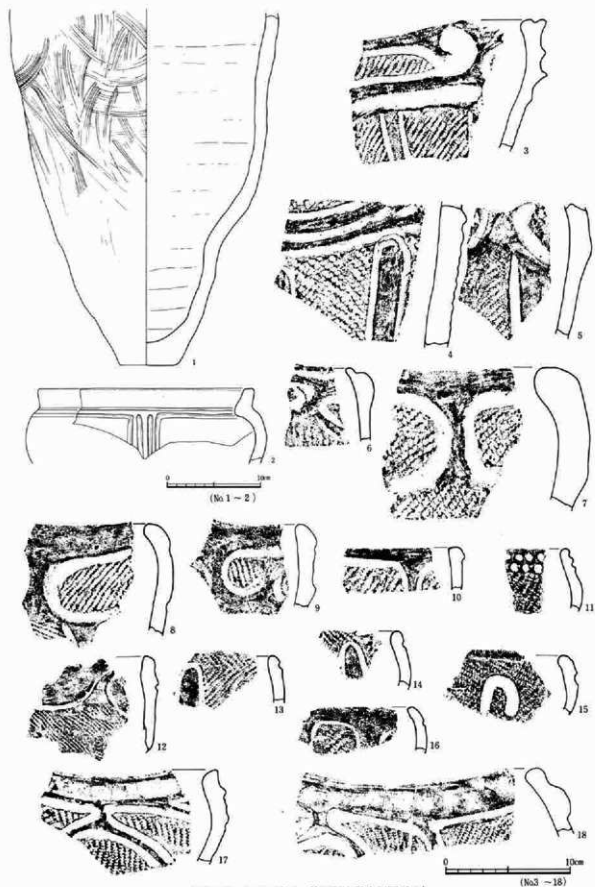


第230図 小町田遺跡 第1・2群土器実測図

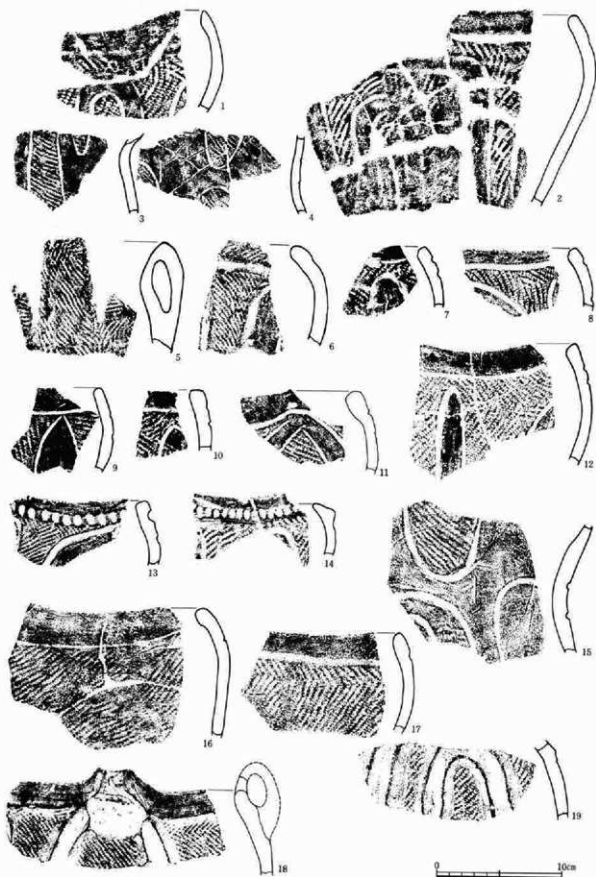


第231图 小町田遺跡 第3群土器実測图(1)

第V章 小町田遺跡の調査

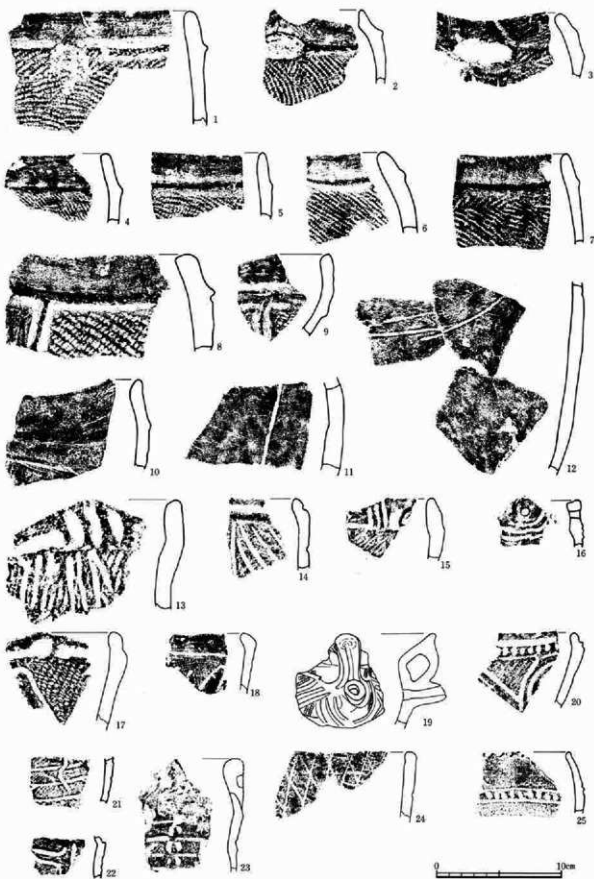


第232図 小町田遺跡 第3群土器実測図(2)



第233图 小町田遺跡 第3群土器実測图(3)

第V章 小町田遺跡の調査



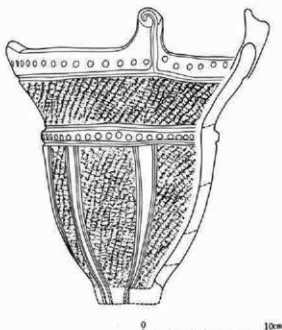
第234図 小町田遺跡 第3・4・5群土器実測図

表採の縄文土器

c-3区より単独で調査前に表採されたものである。

器形は、口縁に小さな波状口縁及び把手状の突起をもち、頸部がぐびれ、胴部がやや膨らむキャリバー状を呈する深鉢形となる。文様は、突起部に「S」字状ないしは蕨手状の沈線を縦に施す。口縁部に円形刺突を巡らせ、その直下に平行沈線を一条施す。また、胴部文様との区画帯として頸部に隆帯を巡らせ、隆帯上に円形刺突を施し、隆帯の上下に平行沈線を施す。胴部には、縦位の平行沈線を施すことにより文様を区画し、区画内の磨消を行なっている。なお、地文には単節L.R.を施している。

以上の特徴から、縄文時代中期後半の土器と考えられる。



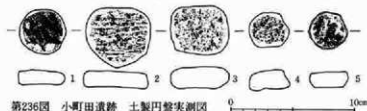
第235図 小町田遺跡 表採の縄文土器実測図

土 製 品

ミニチュア土器 (第237図) 所謂手握土器である。現存するのは約1/4程度ではあるが、器高3.5 cm、口径約5 cm、底径約4.5 cmと推定される。全体的に厚身であり、口縁は不規則ではあるが一応平縁と考えられる。時期は不明である。

土 製 円 板 (第236図1~5)

出土した土製円板は、5点である。いずれも土器の破片を加工したものであり、(1・2・5)は表面に土器の文様が残っている。また(3)は、円形というよりやや長方形に近い形状であるが、角は丸くなっている。



第236図 小町田遺跡 土製円盤実測図



第237図 小町田遺跡 ミニチュア土器実測図

小町田遺跡 土製円盤計測表 (第7表)

番 号	出土位置	計 測 値				備 考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	
1	SK04	3.5	3.7	1.2	17.4	土器外面が磨耗し、にぶい赤褐色を呈する。
2	SD04	4.8	5.2	1.3	37.3	土器外面が磨耗している。にぶい黄褐色を呈し赤褐色鉱物粒を含む。
3	SD04	3.9	4.7	1.7	31.8	土器外面が磨耗し、にぶい橙色を呈する。
4	SB15	2.7	3.2	1.7	9.2	土器外面が磨耗している。にぶい橙色を呈し赤褐色鉱物粒を含む。
5	SB03	2.9	3.2	1.2	12.7	土器外面が磨耗し、にぶい橙色を呈する。

石 器 (第238～243回)

石鏃 形態は、基部の抉りが深い二等辺三角形を呈する。基部の一方を破損している。

石槍 形態は、やや細身の柳葉形を呈する。調整加工は、大きな剝離で作り出され基部近くに細かな周辺加工が行なわれている。

鍔身具 硬玉製大珠といわれているものである。大珠は、いわゆる鏝筒形を呈し、孔は長軸に直交して管状穿孔されている。石質は、ひすい輝石質であるが一部石英、蛇紋岩を含む。

磨製石斧 形状は楕円に近い形を呈する。4、6は頭部、7は両端を欠いている。磨製石斧は、長軸に対し縦位に磨成形している。4、5は刃部がつぶされたような打撃痕を残している。7は、二次焼成を受け赤色化している。

打製石斧 打製石斧は、楕円形を1類、短冊形を2類、分銅形を3類とした。1類 刃部は、8～10が丸味を持ち、11～12は直線的である。胴側縁部は、8がやや外曲している以外は、直線的である。9は頭部の一部を欠いている。2類 14、15の刃部は、丸味を帯び、13、16～18の刃部は直線的である。胴側縁部は、13、14、16が直線的であり、15、17、18がやや内曲する。13、16～18は、刃部に使用痕と思われる欠損部が見られる。3類 22、23、31、32は刃部が直線的になる。19～21、24～30は刃部に丸味を持つ。胴側縁部は、大きく内曲している。19、20、22は上半部欠損、23、27、29、30は刃部に使用痕と思われる欠損部が有る。

凹石 形態は、円形、長円形、角が丸味を帯びた長方形の三種類ある。円形のもの、表裏に凹みがあり側面に磨滅痕が見られる。長円形のもの、表裏に凹みがあり、側面に磨滅や、敲打痕が認められる。長方形のもの、大面に凹みが認められた。

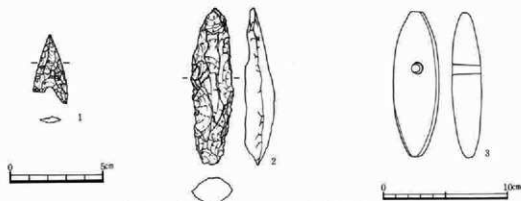
磨石 形が不安定で偏平なものを1類、長円形で厚味のあるものを2類、球形に近いものを3類とした。1類は、全面に磨滅痕がみられる。50は、敲打による剝離が有る。2類は、全面に磨滅痕が有るものと、側面のみに磨滅痕の認められるものがある。また本類の破片は、凹石の可能性も考えられるが、ここでは、凹みを有さない事から便宜的に磨石とした。3類は、全面に磨滅痕が認められた。

敲石 形態は、棒状を呈し、断面は丸味を帯びる。両端部と、側縁中央部に敲打痕を有する。

石錘 形態は、長円形で偏平である。長軸の両端を剝離成形して抉りを入れている。

石皿 円形の偏平な自然石に、なだらかな凹みを形成しているものである。凹み面は、よく磨かれているが、それ以外の部分は自然面を残し磨かれていない。67は、裏面に凹石同様の小さな凹みと、一部磨かれている所を有する。

(関根)



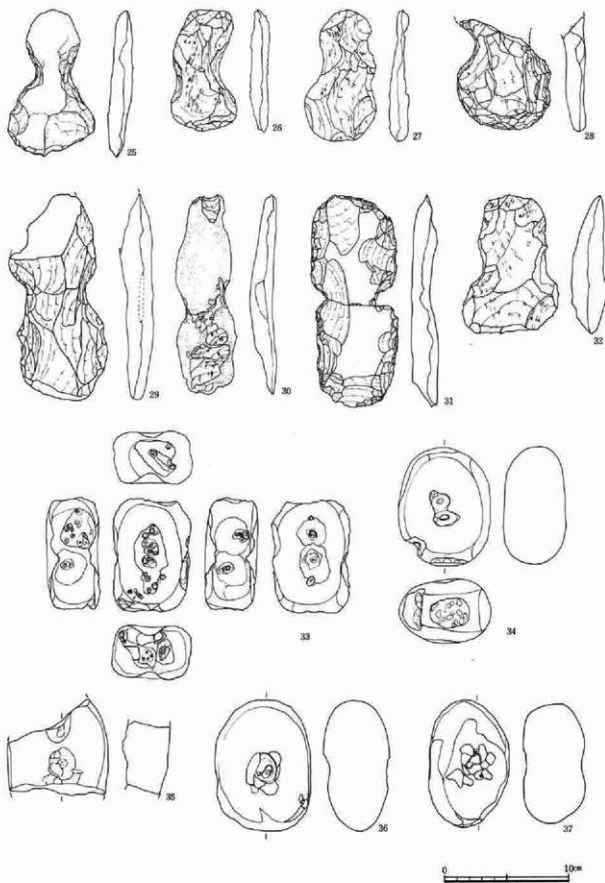
第238回 小町田遺跡 石鏃・石槍・大珠実測図

3 遺 物

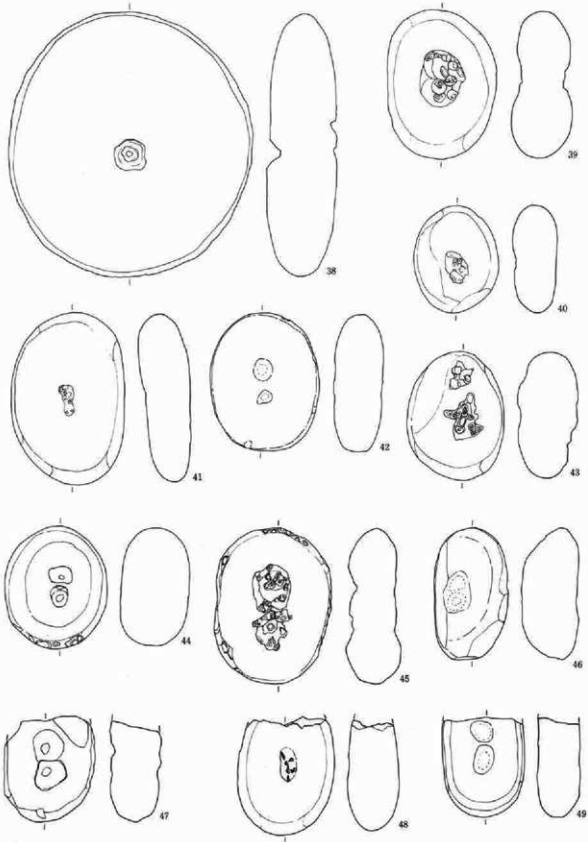


第239図 小町田遺跡 磨製・打製石片実測図

第V章 小町田遺跡の調査

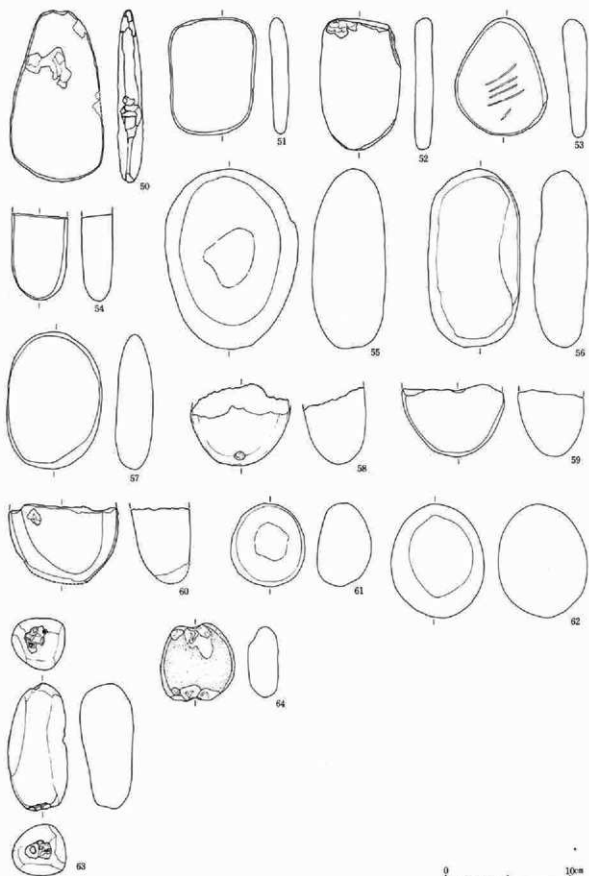


第240図 小町田遺跡 打製石斧・凹石夾圖

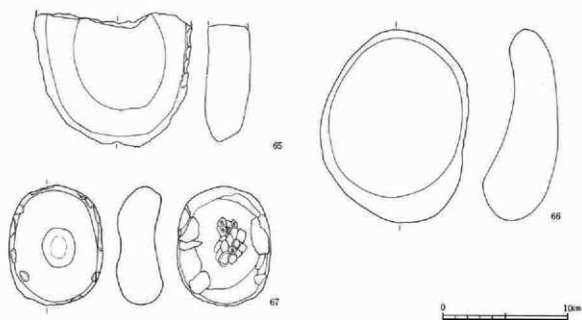


第241圖 小町田遺跡 凹石突洞圖

第V章 小町田遺跡の調査



第242図 小町田遺跡 磨石・敲石・石錘実測図



第243図 小町田遺跡 石皿実測図

小町田遺跡 石器計測表

石 鏃 (第8表)

番 号	出土位置	石 材	計 測 値				備 考
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	
1	SB11	黒曜石	3.7	1.8	0.3	(2)	一部欠損。

石 槍 (第9表)

番 号	出土位置	石 材	計 測 値				備 考
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	
2	SD04	点紋粘板岩	12.5	3.4	2.4	96	

大 珠 (第10表)

番 号	出土位置	石 材	計 測 値				備 考
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	
3	SK04	翡翠輝石質岩	11.6	3.8	2.4	158	全体がよく研磨されている。孔をもつ。

磨 製 石 斧 (第11表)

番 号	出土位置	石 材	計 測 値				備 考
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	
4	SD01	輝緑凝灰岩	(11.1)	5.3	3.1	313	上半欠損。
5	SD01	不明	10.2	4.8	2.5	207	
6	表 採	蛇紋岩	(6.3)	4.0	1.7	70	上半欠損。
7	C-2	輝緑岩	(11.0)	4.7	3.2	235	刃部周辺が2次約焼成のため赤色化。両端欠損。

第V章 小町田遺跡の調査

打製石斧 (第12表)

番 号	出土位置	石 材	計 測 値				類 別	備 考
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
8	表 探	点紋粘板岩	10.8	7.6	2.0	195	1類	
9	SD02	粘板岩	(11.1)	5.0	(2.9)	160	#	一部欠損。
10	SD04	粘板岩	7.7	3.8	0.9	25	#	
11	SB03	石英質堆積岩	7.8	4.0	1.9	70	#	
12	SB07	砂岩	8.6	5.5	2.3	125	2類	
13	SD04	点紋粘板岩	7.6	4.2	1.7	60	#	
14	SD05	点紋粘板岩	7.3	4.3	1.2	50	#	
15	C-2	粘板岩	7.9	4.2	2.0	75	#	
16	表 探	安山岩	13.4	5.6	2.7	225	#	
17	SB02	頁岩	12.6	6.5	2.7	241	#	
18	表 探	珪質粘板岩	12.8	5.8	1.9	135	#	一部欠損。
19	SD02	点紋粘板岩	(6.2)	6.8	2.0	110	3類	上半欠損。
20	表 探	点紋粘板岩	(6.5)	5.5	1.5	60	#	上半欠損。
21	C-3	点紋粘板岩	9.5	5.6	1.2	76	#	
22	表 探	点紋粘板岩	(8.0)	5.2	2.0	80	#	上半欠損。
23	表 探	砂岩	(9.0)	6.8	2.4	165	#	下半欠損。
24	SB07	点紋粘板岩	9.3	5.6	2.1	125	#	
25	SD02	点紋粘板岩	11.5	7.1	1.9	145	#	
26	表 探	点紋粘板岩	9.7	5.2	1.5	95	#	一部欠損。
27	SD05	粘板岩	10.3	5.7	1.6	95	#	
28	SD02	点紋粘板岩	(9.0)	(7.6)	(1.7)	125	#	上半欠損。
29	SD01	頁岩	(16.3)	7.9	2.6	305	#	一部欠損。
30	C-2	珪質粘板岩	15.8	4.8	2.1	165	#	
31	SD05	頁岩	16.9	6.9	2.2	290	#	
32	C-2	点紋粘板岩	11.0	7.6	2.8	245	#	

凹 石 (第13表)

番 号	出土位置	石 材	計 測 値				備 考
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	
33	SD02	安山岩	(8.9)	6.2	4.0	315	6面に凹あり。凹数9。
34	表 探	安山岩	9.4	7.4	5.0	410	2面に凹あり。凹数3。
35	SD02	安山岩	(7.6)	8.1	3.3	290	1面に凹あり。凹数2。両端欠損。
36	SD05	安山岩	10.4	7.7	5.4	525	2面に凹あり。凹数2。
37	SD02	安山岩	10.1	6.5	5.1	425	2面に凹あり。凹数2。
38	SD01	安山岩	20.9	19.6	5.6	2959	2面に凹あり。凹数3。
39	表 探	安山岩	11.8	8.8	4.9	535	2面に凹あり。凹数2。
40	SD05	安山岩	8.5	6.8	3.6	266	1面に凹あり。凹数1。
41	C-2	安山岩	13.6	9.0	4.2	660	2面に凹あり。凹数3。
42	SB08	安山岩	10.9	8.7	4.0	575	2面に凹あり。凹数3。
43	SD04	安山岩	10.2	7.7	4.9	435	2面に凹あり。凹数4。

凹 石 (第13表)

番 号	出土位置	石 材	計 測 値				備 考
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	
44	SB01	安山岩	9.7	8.2	5.5	650	2面に凹あり。凹数4。
45	C-3	安山岩	12.3	9.4	4.5	645	2面に凹あり。凹数2。
46	SB03	砂岩	10.5	5.9	4.6	400	2面に凹あり。凹数4。
47	表 採	安山岩	(8.3)	7.3	4.4	365	1面に凹あり。凹数1。上半欠損。
48	SD02	安山岩	(8.8)	7.8	4.2	405	1面に凹あり。凹数2。上半欠損。
49	SD02	安山岩	(7.9)	6.6	3.5	280	2面に凹あり。凹数3。上半欠損。

磨 石 (第14表)

番 号	出土位置	石 材	計 測 値				類 別	備 考
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
50	SD01	安山岩	13.6	7.5	2.0	235	1類	全面研磨。
51	表 採	砂岩	9.2	7.0	1.5	145	#	全面研磨。
52	SD02	砂岩	10.4	6.5	1.5	165	#	全面研磨。
53	SD04	砂岩	9.3	7.4	2.1	140	#	全面研磨。
54	SD02	砂岩	(6.9)	4.4	2.5	125	2類	全面研磨。上半欠損。
55	SB01	安山岩	14.2	10.7	15.9	1070	#	全面研磨。
56	SB03	石英斑岩	13.9	7.4	4.3	650	#	側面研磨。
57	SD04	安山岩	10.8	7.6	3.0	425	#	側面研磨。
58	SB03	安山岩	(6.5)	(7.9)	(5.0)	280	#	側面研磨。上半欠損。
59	SB01	安山岩	(5.7)	(8.2)	(5.3)	295	#	側面研磨。上半欠損。
60	SB11	安山岩	(6.1)	(8.8)	(4.7)	305	#	側面研磨。上半欠損。
61	SD01	安山岩	6.6	5.9	4.4	245	3類	全面研磨(球形)。
62	表 採	安山岩	9.0	7.4	7.1	675	#	全面研磨(球形)。

敲 石 (第15表)

番 号	出土位置	石 材	計 測 値				備 考
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	
63	SB03	安山岩	10.0	4.8	4.3	295	凹あり。両端部を使用。

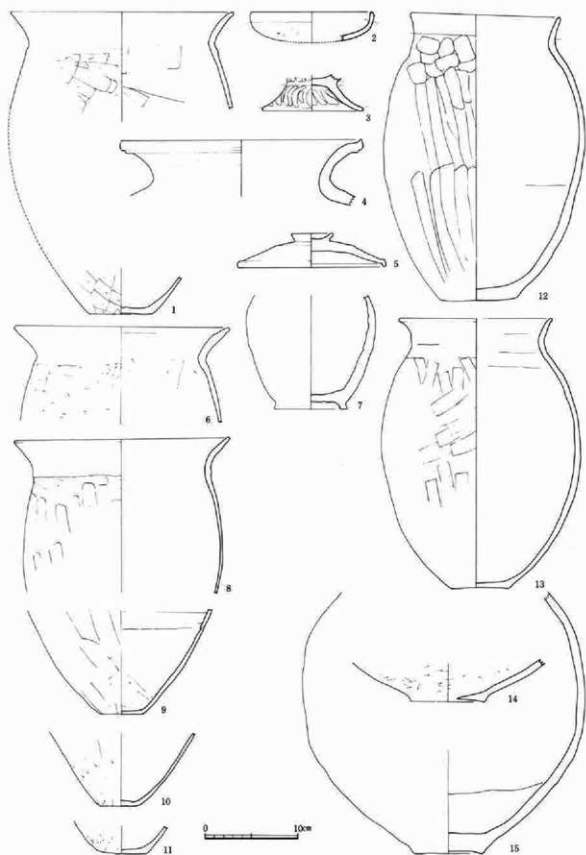
石 錘 (第16表)

番 号	出土位置	石 材	計 測 値				備 考
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	
64	SD05	安山岩	6.2	5.9	2.4	120	

石 皿 (第17表)

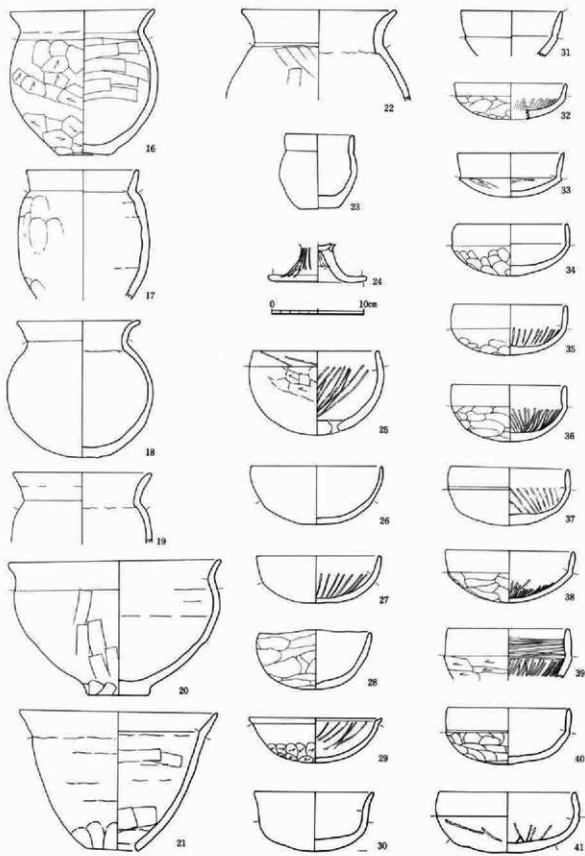
番 号	出土位置	石 材	計 測 値				備 考
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	
65	SD01	安山岩	(10.6)	(12.7)	(3.6)	690	上半欠損。
66	SD04	安山岩	15.2	11.9	6.1	1118	
67	表 採	安山岩	9.5	7.5	4.0	355	裏面に凹あり。

第V章 小町田遺跡の調査



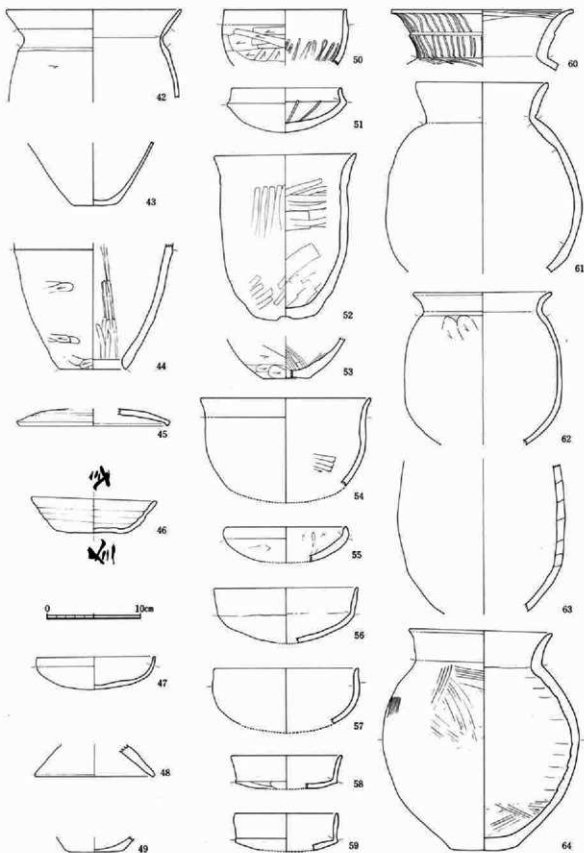
第244図 小町田遺跡 土器実測図(1)

3 遺 物

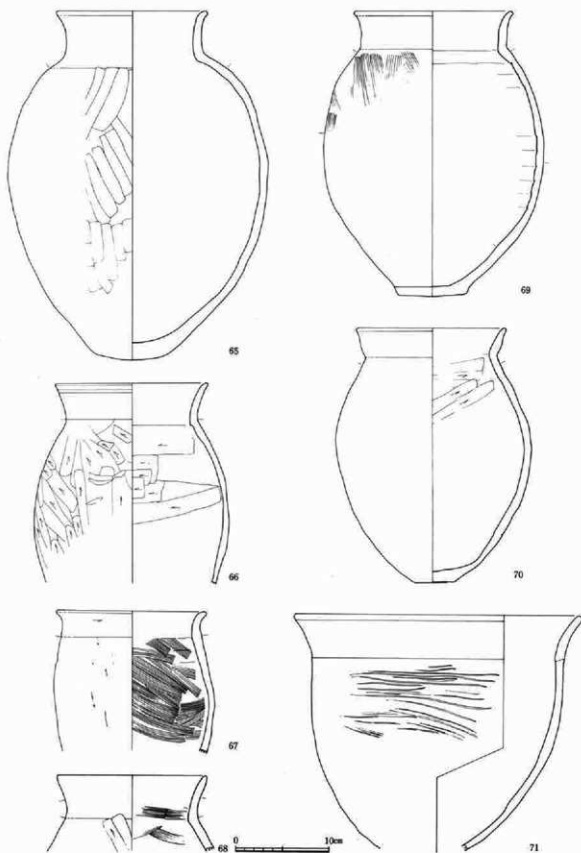


第245图 小町田遺跡 土器実測图(2)

第V章 小町田遺跡の調査

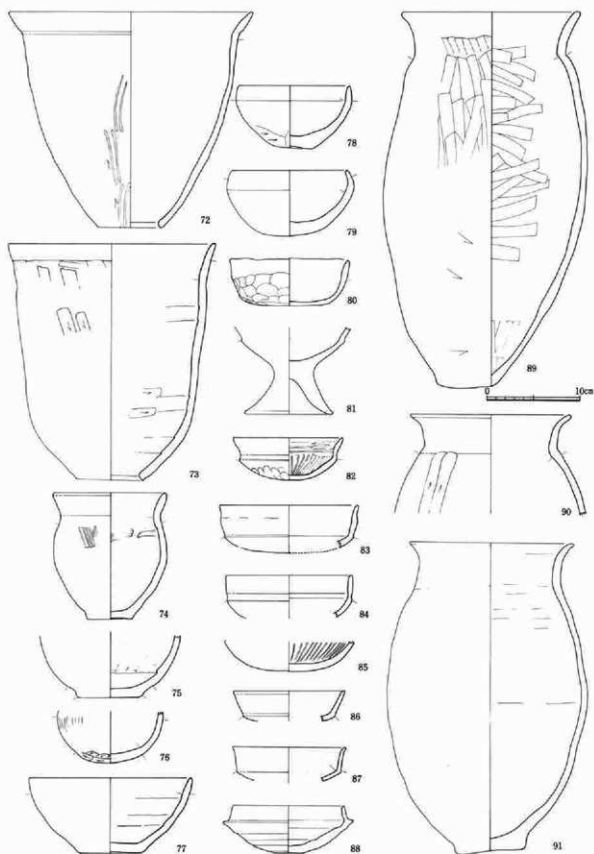


第246図 小町田遺跡 土器実測図(3)

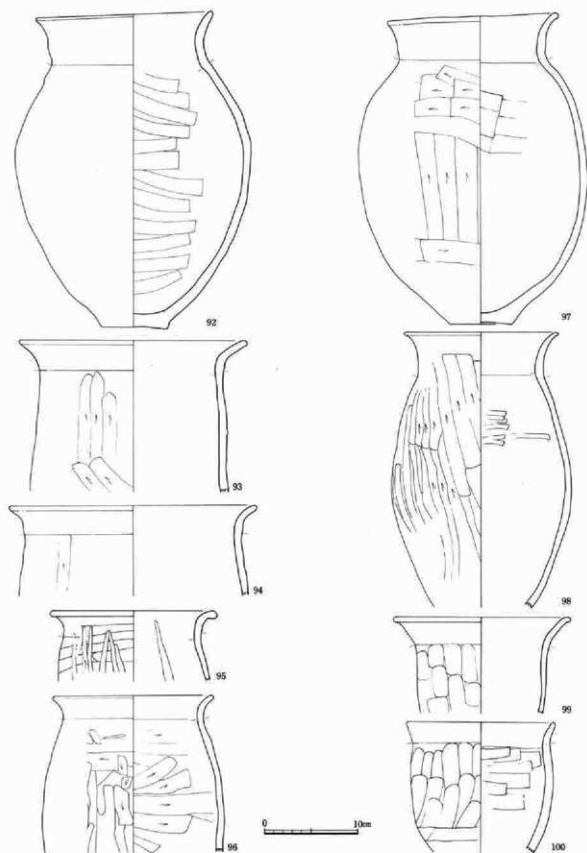


第247図 小町田遺跡 土器実測図(4)

第V章 小町田遺跡の調査

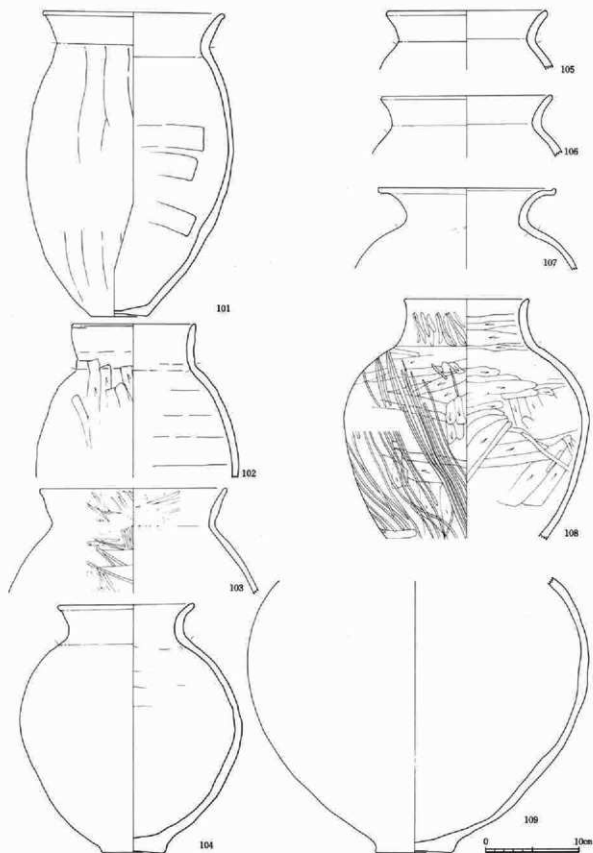


第248図 小町田遺跡 土器実測図(5)

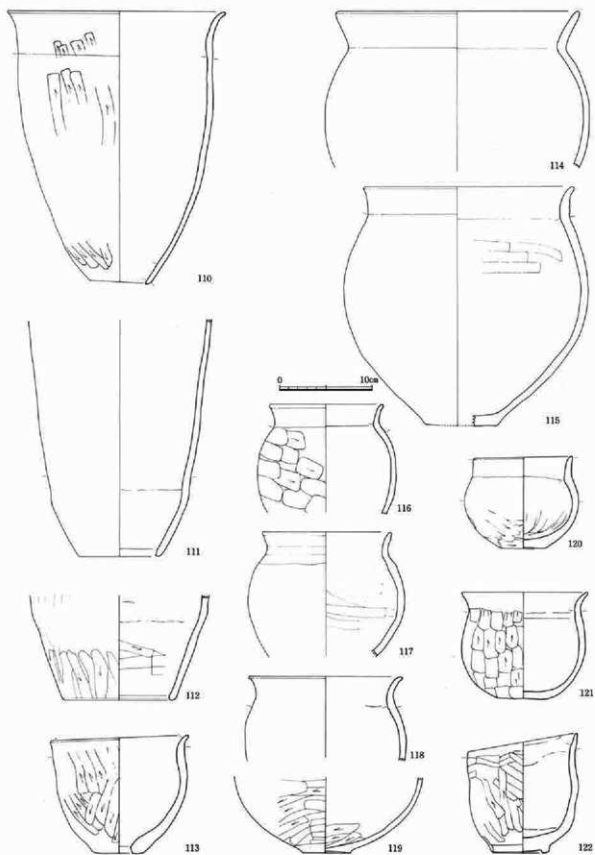


第249図 小町田遺跡 土器実測図(6)

第V章 小町田遺跡の調査

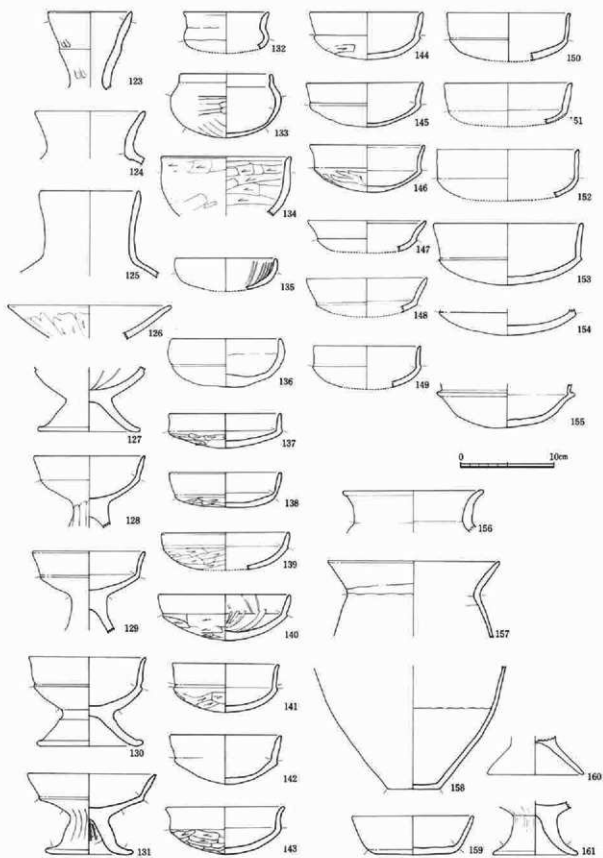


第250図 小町田遺跡 土器実測図(7)



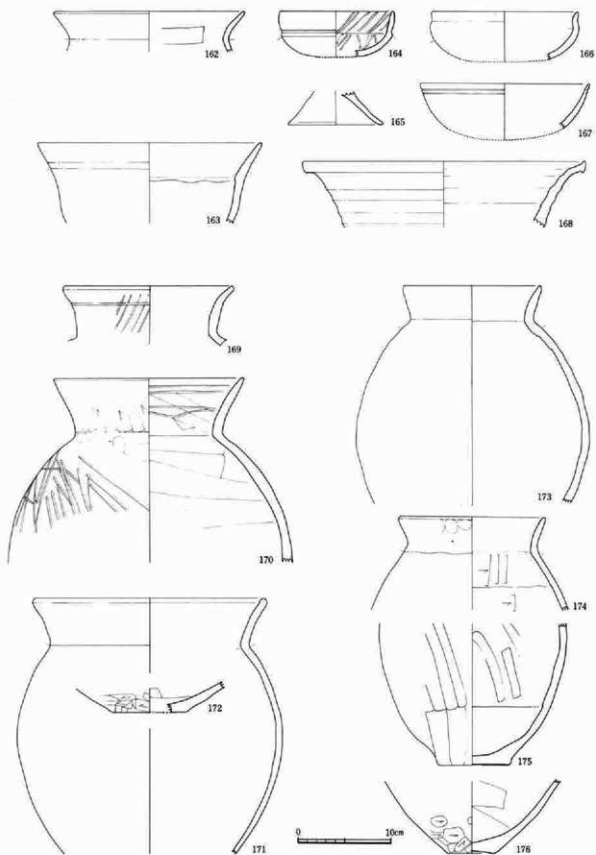
第251図 小町田遺跡 土器実測図(8)

第V章 小町田遺跡の調査



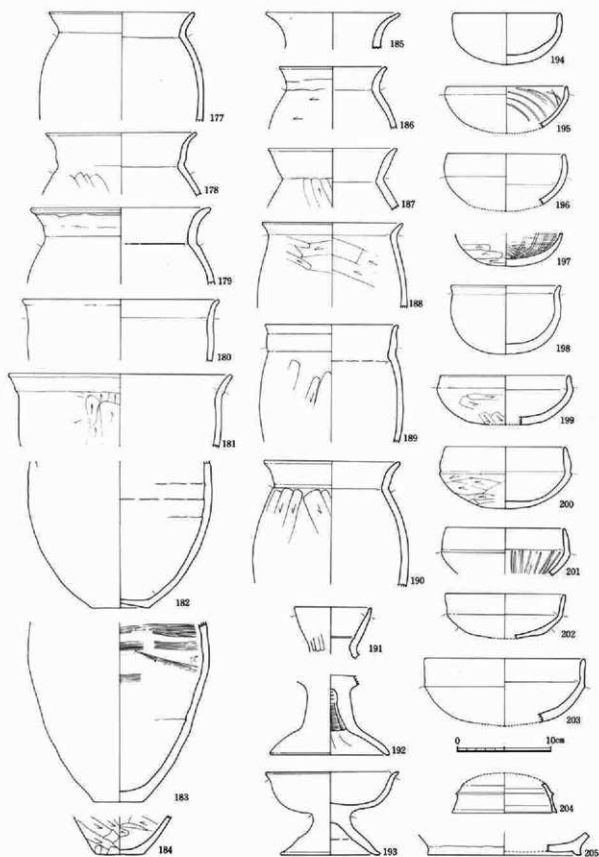
第252図 小町田遺跡 土器実測図(9)

3 遺 物



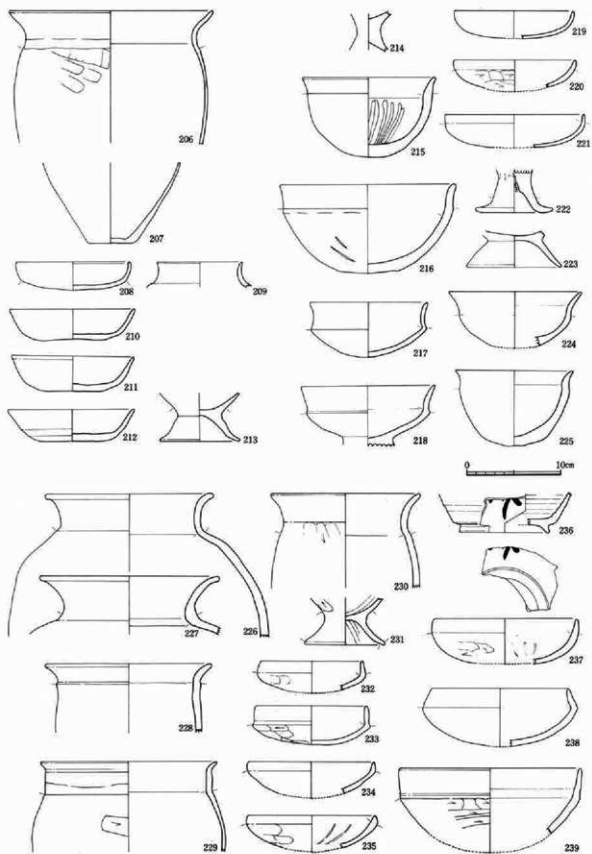
第253図 小町田遺跡 土器実測図 (10)

第V章 小町田遺跡の調査



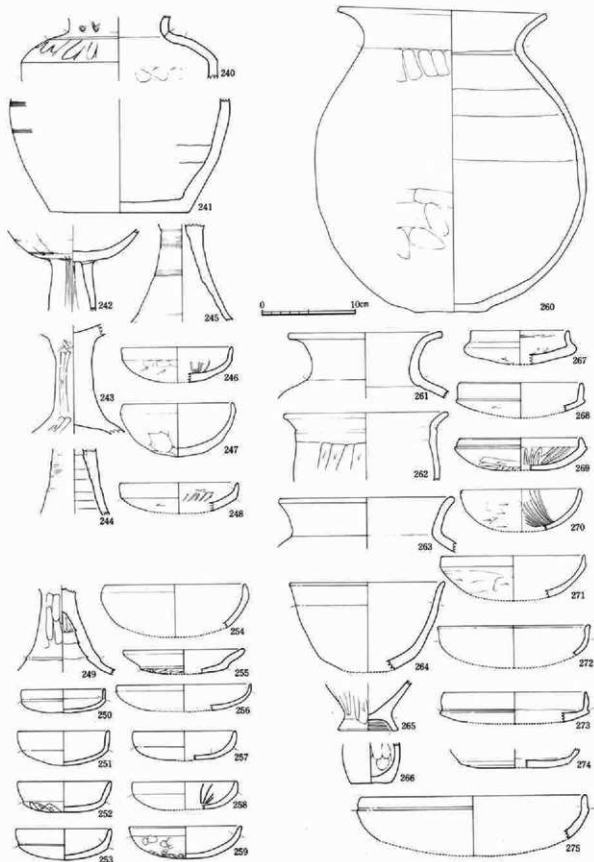
第254図 小町田遺跡 土器実測図(11)

3 遺 物



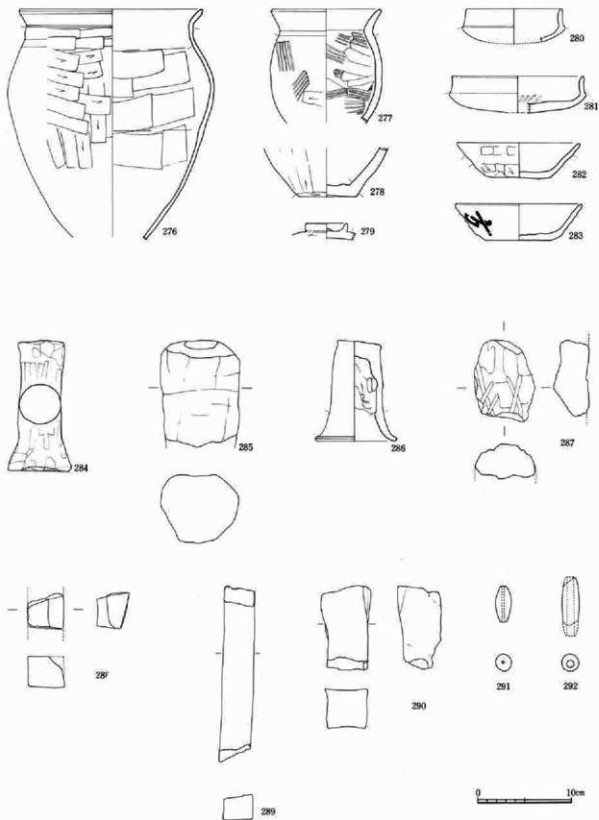
第255図 小町田遺跡 土器実測図 (12)

第V章 小町田遺跡の調査



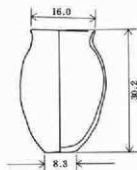
第256図 小町田遺跡 土器実測図(13)

3 遺 物



第257図 小町田遺跡 遺物実測図 (土器・土製支脚・砥石・土錘)

遺物観察表



法 量 (cm)	
口 径	16.0
器 高	30.2
底 径	8.3

推定復元の場合は()を付けた

小町田遺跡 遺物観察表 (第18表)

遺物番号	器 形	法 量 (cm)	器 形 の 特 徴	成・整形の特徴	胎 土	色 調・焼 成	備 考
001 S B01	甕	24.0 — 7.0	口縁部が、「く」の字状に開く長壺。底部は平底。	口縁部横ナデ、胴部外面縦割削り、内面横割ナデ。	1%の砂粒を含む。	にぶい橙色。良好。	
002 S B01	杯	12.9 3.2 —	胴上復元。口縁部の立ち上がりは短かく平底へと続く。	口縁部横ナデ、外面横割削り、内面横ナデ。	良好。	橙色。良好。	外面有機物付着。
003 S B01	高 杯	— — 10.8	胴部が残存。杯部との接合部から急に開く脚部は短かく、基部は大きく広がる。	杯部外面縦割削り、脚部外内面縦割ナデ、基部横ナデ。	良好。	明赤褐色。良好。	
004 S B01	壺	26.0 — —	口縁部が残存。埴輪から急に反する口縁部。	口縁部横ナデ。肩部指ナデ。	良好。	外面にぶい橙色、内面灰白色。	須恵器。
005 S B01	蓋	15.8 3.6 —	輪台状のつまみを持つ蓋。	回転クロロ成形成、内外面回転による横ナデ。	1~4%の小石を含む。	灰白色。良好。	須恵器。
006 S B01	甕	23.0 — —	口縁~胴部上半が残存。「く」の字状に開く長壺。	口縁部横ナデ、外面横割削り、内面横割ナデ。	良好。	にぶい橙色。良好。	
007 S B01	壺	— — 7.8	肩部の狭りの弱い長頸壺の胴部。	回転クロロ成形成、内外面回転による横ナデ。	緑石粒、角閃石粒を含む。	灰色。良好。	自然釉付着。須恵器。
008 S B01	甕	23.0 — —	口縁~胴部上半残存。口縁部は「く」の字状に開く壺の最大径をもつ。体部はうすい。	口縁部横ナデ、体上半縦割削り、以下縦割削り、内面横ナデ。	良好。	赤褐~にぶい赤褐色。良好。	内外面鉄分、スス付着。
009 S B01	甕	— — 5.0	胴部下半~底部が残存。底部は平底。	胴部外面縦割削り、内面中央横ナデ、下半横ナデ。	良好。	灰褐色。	
010 S B01	甕	— — 4.5	胴上部の欠失した甕の下半部。	胴部外面縦割削り、内面横ナデ。	1~2%の砂粒を含む。	にぶい橙色。良好。	スス付着。
011 S B01	甕	— — 5.5	胴下半~底部残存。底部は平底。	体部外面縦割削り	1%ほどの砂粒を多量に含む。	褐灰色。良好。	スス付着。
012 S B02	甕	16.0 30.2 8.3	ほぼ球形。口縁部短く開く長壺。底部は平底。	口縁部横ナデ、胴部横ナデ、外面縦割削り、内面ナデ。	良好。	淡黄褐色。良好。	内外面黒色部分が広範囲を占める。
013 S B02	甕	16.4 28.5 6.2	ほぼ球形。最大幅を胴中に持ち口縁部はゆるやかに外反する。	口縁部横ナデ、体部外面縦割削り、内面横ナデ。	良好。	灰白色。硬質。	内外面スス付着。
014 S B02	壺	— — (8.0)	胴下半~底部残存。埴輪の下半部から、小さな基部にかけて残存する。	体部外面縦割削り、内面横ナデ。	2%の砂粒を含む。	橙色。良好。	スス付着。
015 S B02	壺	— — 7.4	胴部~底部残存。狭りのある肩部から底部に至るにつれくびれる。底部は平底。	内面2~3cmの輪積み痕あり、整形不明瞭。	良好。	外面橙色、内面明褐色。良好。	黒斑あり。

遺物番号	器 形	法 量 ^g	器 形 の 特 徴	成・整形の特徴	胎 土	色 調・焼 成	備 考
016 S B02	壺	15.4 15.0 5.5	完形。口縁部は「く」の字状に開き、胴部は張り出し、底部は平底。	口縁部横ナデ、外面磨削り、内面磨ナデ。輪轆み痕。	0.5～1%大の砂粒を多量に含む。	浅黄褐色。良好。	スス付き。
017 S B02	壺	12.1 — —	口縁～胴部残存。口縁部は短かく外反し、胴部は張りが少ない。	口縁部横ナデ、外面磨削り、内面磨ナデ。	茶色の軟かい鉱物を含む。	赤褐色。	
018 S B02	壺	13.0 14.4 —	完形。口縁部は短かく外反し、胴部は中央部に最大径を持つ。	口縁部横ナデ、内外面磨削。	0.5%石英粒、1%白色砂粒を含む。	明赤褐色。良好。	スス付き。
019 S B02	壺	14.7 — —	口縁～胴部上半分残存。口縁が「く」の字状に開き、体部の張りは少ない。	胴部外面磨削り、内面磨ナデ、接合痕あり。	良好。	にぶい褐色。良好。	
020 S B02	鉢	22.6 14.2 6.4	ほぼ完形。口縁部は「く」の字状に開き、胴部が張り内湾しながら平底の底部へ続く。	口縁部横ナデ、外面磨削り、内面磨ナデ。輪轆み痕あり。	0.5～1%の砂粒を多量に含む。	灰白色。	
021 S B02	瓶	21.0 14.6 5.4	ふつくりとした胴部は、外反しながら屈曲する口縁部に至る。大きな単孔を穿つ。	口縁部横ナデ、体部内外面磨ナデ、底部磨削り。	良好。	灰白色～にぶい黄褐色。硬質。	
022 S B02	壺	(16.1) — —	口縁部～胴部上半分残存。口縁部は「く」の字状に開く。	口縁部横ナデ、胴部外面磨削り、内面丁寧な磨ナデ	良好。	にぶい褐色。不良。	
023 S B02	壺	7.4 7.8 4.2	完形。口縁部は直立している。	口縁部接合痕。胴部輪轆みが残る。内外面共に磨削。	長石など粗砂粒を多量に含む。	赤褐色。良好。	
024 S B02	高 杯	— — 10.6	杯部内側面をしており基部から端部にかけて外反する器高は低い。	ホソを単独に胴部の空間部分に挿入放り目痕あり。	良好。	黄褐色。良好。	
025 S B02	杯	(13.5) 8.9 —	口縁部～底部残存。口縁部僅かに内傾、底部5mmの底孔あり、器内厚く大形。	口縁部磨削き、内外面共に磨削き。	良好。	内面浅黄褐色、外面褐色。硬質。	スス付き。外面黒斑あり。
026 S B02	杯	(14.0) 6.1 —	口縁部は種をもたず内湾し丸底の底部に続く。	口縁部、体部内面、外面体部上半まで磨んで、他磨り。	赤茶色の鉱物を多量に含む。	褐色ひらあり。不良。	
027 S B02	杯	13.4 5.0 —	口縁部～底部残存。底部は丸底、口縁から底部の厚さは一定である。	口縁部横ナデ、体部外面磨削き、内面放射状磨削き。	良好。	褐色。良好。	
028 S B02	杯	12.0 6.2 —	半球形をした器内の厚い杯。	外面磨削り、内面水引き跡を残す。作りは雑。	良好。	褐～黒褐色。良好。	
029 S B02	杯	14.2 4.0 —	完形。口縁は短かく、外反し、口唇部に最大径をもつ。	体部外面は磨削り内面磨削きで放射状の磨文をつける。	良好。	にぶい褐色。良好。	外面底部に(7×3)cm大の黒斑あり。
030 S B02	杯	12.8 6.3 —	口縁部～底部残存。丸底の底部から体部は直立し、口縁部は外反する。	口縁部横ナデ、体部内外面磨削し不明瞭。	2～3%の茶色鉱物を多量含む。	明赤褐色。良好。	
031 S B02	杯	10.7 — —	須恵郡の蓋杯を模した杯である。横線で区画され底部に至る。	口縁部横ナデ、体部内外面磨削き、外面磨削り。	良好。	褐色。硬質。	スス付き。
032 S B02	杯	12.0 3.8 —	須恵郡の蓋杯、体部は直立する。	口縁部横ナデ、外面丁寧な磨削り。	良好。	灰白色。良好。	
033 S B02	杯	11.2 4.6 —	口縁～底部～残存。須恵郡の蓋杯を模した杯で、横線で区画される。	口縁部横ナデ、体部内外面共磨削き、底部磨削り。	茶色鉱物を含む。	内面褐色、外面明褐色。	
034 S B02	杯	11.8 5.5 —	須恵郡の蓋杯を模した杯である。口縁は内湾し、丸底の底部に続く。	口縁部横ナデ、体部外面磨削り、内面磨ナデ。	1～2%赤褐色鉱物を含む。	褐色。良好。	
035 S B02	杯	12.0 5.3 —	須恵郡の蓋杯を模した杯である。横線で区画され底部に至る。	口縁部横ナデ、体部外面磨削り、内面放射状磨削き。	1～3%赤褐色鉱物を含む。	褐色。良好。	外面付着物あり。

第V章 小町田遺跡の調査

遺物番号	器形	法 量	器形の特徴	成・整形の特徴	胎 土	色 調・焼 成	備 考
036 S B02	杯	12.0 5.7 —	須恵部の蓋杯を模した杯である。稜線で区画され底部は深長があり丸底である。	体部外面は寛削り内面は放射状の笠磨き。	1～2%の赤褐色鉱物を含む。	橙色。良好。	外面に3ヶ所黒色部分あり。
037 S B02	杯	12.4 6.1 —	須恵部の蓋杯を模した杯である。稜線で区画され底部に至る。全体に丸味をもつ。	口縁部横ナデ。体部外面寛削り、内面寛削り。	1～2%の赤褐色鉱物を含む。	橙色。良好。	スス付着。
038 S B02	杯	13.6 5.5 —	須恵部の蓋杯を模した杯である。稜線で区画され底部は浅い。	口縁部横ナデ。体部外面寛削り、内面丁寧な寛ナデ。	良好。	橙色。良好。	スス付着。
039 S B02	杯	13.0 — —	須恵部の蓋杯を模した杯である。口縁部は内傾し、稜線で区画され底部に至る。	口縁部内面横削磨き、底部外面寛削り、内面寛削り。	1%の砂粒を含む。	によい橙色。良好。	
040 S B02	杯	12.9 6.0 —	須恵部の蓋杯を模した杯である。稜線で区画され底部に至る。	口縁部横ナデ。底部外面寛削り後磨き、内面寛削り。	1～2%の黒色鉱物を含む。	橙色。良好。	
041 S B02	杯	14.6 6.4 —	須恵部の蓋杯を模した杯である。口縁部は内傾し、稜線で区画され底部に至る。	口縁部横ナデ。体部内外面共に寛削り。	茶色鉱物、小石粒を多量に含む。	橙色。良好。	
042 S B03	壺	18.6 — —	口縁部が「く」の字状に開く長壺。	口縁部横ナデ。体部外面寛削り、内面寛ナデ。	良好。	によい黄褐色。良好。	
043 S B03	壺	— — 4.7	底部残存。胴部は底部から直線的に外方に向かって立ち上がる。底部は平底。	胴部外面縦削磨り内面横ナデ、底部寛削り。	良好。	によい橙色。良好。	汚れ付着。
044 S B03	瓶	— — 7.4	ふくろとした胴部は、稜線で区画され口縁部に至る。底部は大きな単孔を穿つ。	口縁部横ナデ。体部外面横削磨き、内面縦削磨き。	良好。	灰白色。良好。	体部外面黒斑あり。
045 S B03	蓋	16.4 — —	天井部を欠失し、身受部の先端が尖る。	回転ロコロ成形。内外面回転による横ナデ。	良好。	灰色。良好。	須恵器。
046 S B03	杯	13.4 3.6 8.5	大きな底部から短かい体部は外反する。	回転ロコロ成形。内外面回転による横ナデ。	軽石を含む。	灰色。良好。	履蓋あり、須恵器。
047 S B04	杯	12.5 3.5 —	ほぼ完形。口縁部は短かく直立し底部は丸底。	口縁部横ナデ。体部外面横削磨り、内面ナデ。	小砂を含む。	赤褐色。良好。	
048 S B04	壺	— — 12.8	台部が残存。壺を欠失した「ハ」の字状に開く脚台。	内外面共に横ナデ。	1～2%砂粒を含む。	によい橙色。良好。	
049 S B04	壺	— — 6.3	胴部が欠失した壺の底部。	外面縦削磨り。内面横ナデ。	1～2%砂粒を含む。	橙色。良好。	スス付着。
050 S B05	杯	13.0 — —	口縁部は直立し、半球形の体部に続く。	口縁部横ナデ。体部外面寛削り、内面放射状笠磨き。	1～2%の砂粒を含む。	によい橙色。良好。	
051 S B05	杯	4.7 11.7 —	須恵部の蓋杯を模した杯である。稜線で区画され底部に至る。	口縁部横ナデ。体部外面寛削り、内面寛削り。	茶褐色鉱物を含む。	外面橙色。内面暗赤褐色。	底部黒斑あり。
052 S B06	壺	15.3 17.5 6.8	口縁部は開き、胴部はふくらみを持たずに平底の底部に続く。押で押印の痕あり。	外面上半縦刷毛目下半斜刷毛目。内面寛ナデ後刷毛目。	良好。	によい黄褐色。良好。	内外面スス付着。
053 S B06	壺	— — (5.2)	胴部下半～底部が残存。底部は平底。	体部外面横削磨り内面刷毛目。	1～2%の砂粒を含む。	橙色。良好。	
054 S B06	杯	(9.2) — —	口縁部～体部上半が残存。口縁部は外反し、体部は内湾しながら底部へ至る。	口縁部横ナデ。体部内面横削磨り。他は摩滅し不明瞭。	茶色鉱物を含む。	によい橙色。良好。	
055 S B06	杯	(12.8) (3.8) —	口縁部～体部が残存。口縁部は短かく直立し、器高は低い。	口縁部横ナデ。体部外面縦削磨き、内面放射状笠磨き。	良好。	黒褐色。軟質。	

遺物番号	器 形	法 量 ^{kg}	器 形 の 特 徴	成・整形の特徴	胎 土	色 調・焼 成	備 考
056 S B06	杯	(15.4) (5.9) —	須恵器の蓋杯を模した杯である。稜線で区画され底部に至る。	口縁部横ナゲ、体部外面磨削り、内面磨ナゲ。	良好。	外面灰黄褐色、内面 にぶい橙。良好。	底部に黒痕あり。
057 S B06	杯	(15.4) — —	ㄱ残存。口縁部は短かく、体部は強く内湾し丸底の底部に至る。	口縁部横ナゲ後遺磨き、体部外面磨削り、内面遺磨き。	良好。	褐色。良好。	
058 S B06	杯	(11.8) (3.6) —	須恵器の蓋杯を模した杯である。体部は外反し、稜線で区画され底部に至る。	口縁部横ナゲ、体部外面磨削り、内面刷毛ナゲ。	茶色鉱物を含む。	褐色。良好。	
059 S B06	杯	(11.0) (4.0) —	須恵器の蓋杯を模した杯である。体部は直立し、稜線で区画され底部に至る。	口縁部横ナゲ、体部外面磨削り、内面磨ナゲ。	茶色鉱物、石英粒を含む。	にぶい褐色。良好。	
060 S B07	盃	(19.6) — —	口縁部～肩部にㄱ残存。口縁部は「く」の字状に開き稜線で二段にわかれる。	口縁部縦寛磨き、胴部横磨き、内面横磨き磨ナゲ	0.5%白色鉱物1%砂粒少量含む。	褐色。良好。	
061 S B07	盃	14.0 — —	口縁～体部下半残存。口縁部は「く」の字状に開き、胴部中央に最大径を持つ。	胴部外面磨削り、内面磨ナゲ、肩部内面指押え痕あり	小石粒を含む。	外面褐色、内面黄褐色。良好。	スス付着。
062 S B07	盃	(14.7) — —	口縁ㄱ～体部にㄱ残存。口縁部は強く外反し、なで肩を返す。	口縁部横ナゲ、胴部外面縦磨削り、内面ナゲ。	良好。	赤褐色。不良。	スス付着。
063 S B07	盃	— — —	口縁部、底部の欠失した長盃。	外面不明瞭だが寛磨きわずかに残存内面磨削り。	白色鉱物を含む。	赤色。良好。	胴部外面黒痕あり。
064 S B07	盃	15.2 23.2 7.0	口縁～底部にㄱ残存。口縁部は外反し、胴部中央に張りを持つ。底部は平底。	胴部外面刷毛目と荒削り、内面磨ナゲと底部に刷毛目	良好。	外面褐灰色～にぶい褐色、内面にぶい褐色。良好。	内面横痕。
065 S B07	盃	16.2 3.6 8.7	ほぼ完形。胴部は直立し口縁部で外反する。胴部中央に最大径を持ち、平底。	口縁部横ナゲ、胴部外面縦磨削り、内面磨ナゲ。	1%の黒色鉱物を含む。	にぶい黄褐色。良好。	スス付着。
066 S B07	盃	16.4 — —	口縁～胴部にㄱ残存。口縁部は外反する。	口縁部横ナゲ、胴部外面磨削り、内面磨ナゲ。	1～2%砂粒含む。	にぶい褐色。良好。	
067 S B07	盃	16.0 — —	口縁～胴部残存。口縁部は外反し、胴部は狭みを持ち張りが無い。	口縁部横ナゲ、胴部外面縦磨削り、内面刷毛目。	0.5%程の砂粒多数含む。	にぶい褐色。良好。	
068 S B07	盃	(16.0) — —	口縁～胴部上半にㄱ残存。口縁部は「く」の字状に開き張りのない底部に至る。	口縁部横ナゲ、胴部外面縦磨削り、内面横磨削り。	茶色、白色鉱物を含む。	にぶい褐色。良好。	
069 S B07	盃	17.0 30.2 7.4	ㄱ残存。口縁部は外反し、胴は狭めで中央部に張りを持つ。底部は平底。	口縁部横ナゲ、胴部外面刷毛目と荒削り、内面磨ナゲ。	良好。	外面褐灰色～黒色、内面褐灰色。良好。	底部に棒状の圧痕、輪轆み痕あり。
070 S B07	盃	16.0 26.9 (4.0)	口縁部は「く」の字状に開き、胴中央部に張りを持つ。底部は小さな平底。	口縁部横ナゲ、胴部外面磨削り、内面磨ナゲ。	白色鉱物を含む。	にぶい黄褐色。軟質。	スス付着。
071 S B07	盃	39.8 — —	口縁部～胴部下半まで残存。口縁部は外反し最大径をもつ。器内は厚い。	口縁部横ナゲ、胴部外面縦磨削り、内面磨ナゲ。	白色、茶色鉱物を含む。	にぶい黄褐色。軟質。	
072 S B07	瓶	(26.0) (22.8) (7.0)	ㄱ残存。口縁部は外反し、底部には大きな単孔を穿つ。	口縁部横ナゲ、胴部外面磨削り、内面不明瞭。	白色鉱物、石英粒を含む。	明赤褐色。軟質。	
073 S B07	瓶	(22.2) 25.0 6.7	ㄱ残存。口縁部は外反し、ふっくらとした胴部に至る底部に大きな単孔を穿つ。	口縁部横ナゲ、胴部外面磨削り、内面横磨ナゲ。	有機物を含む。	にぶい褐色。良好。	僅かにスス付着。
074 S B07	盃	12.1 13.3 4.8	口縁部欠損。口縁部は外反し平底の底部に至る。小型である。	口縁部横ナゲ、胴部外面磨削り、内面不明瞭。	茶色鉱物を含む。	赤色。良好。	スス付着。
075 S B07	盃	— — 7.1	胴部下半～底部残存。底部は平底で胴部は丸みを持つ	胴部外面横磨削り内面磨ナゲ、底部外面磨削り。	良好。	外面赤褐色、内面褐灰色。良好。	

第V章 小町田遺跡の調査

遺物番号	器形	法量 ¹⁾	器形の特徴	成・整形の特徴	胎土	色調・構成	備考
076 S B 07	杯	(11.0) 5.5 —	口縁部は外反し、稜を持たずに体部に至る。底部は丸底。	口縁部と体部内外面はナデ、底部磨削り、磨減している。	粗砂を多く含む。 茶。	赤褐色。良好。	底部にスス付着。
077 S B 07	椀	17.4 16.5 6.7	ほぼ完形。口縁は内両し、平底の底部に至る。	口縁部横ナデ、体部外面磨削き、内面ナデ、剥落著しい。	茶色鉱物を含む。	赤〜赤褐色。良好。	
078 S B 07	杯	12.2 6.5 4.6	口縁〜底部 $\frac{1}{2}$ 残存。口縁部は内傾し、底部は平底。	口縁部横ナデ、外面磨削り後磨削き内面刷毛目。	小砂を含む。	暗赤灰色。良好。	
079 S B 07	杯	6.2 6.9 —	口縁部は内傾し、体部は内両しながら厚い底部に至る。	口縁部横ナデ、体部外面磨削き、内面磨ナデ、底部磨削き。	白色茶色鉱物、石英を含む。	淡黄褐色。良好。	スス付着。
080 S B 07	杯	12.8 5.0 —	口縁部は外反し、平底の底部に至る。	体部外面磨削り、内面上半部ナデ、下半部ナデ。	靑石粒、角閃石粒を含む。	にぶい黄褐色。良好。	
081 S B 07	高杯	— — 9.4	口縁部は外反し、稜線で底部と区画される。脚部は割れに向かって開き器内厚い。	杯部、脚部共成整後接合、外面磨削り、内面水引き肌。	粗砂粒を多く含む。	赤褐色。良好。	
082 S B 07	杯	11.8 5.0 —	須恵器の蓋杯を模した杯である。体部は外反し、稜線で区画され底部に至る。	口縁部、体部外面磨削き、内面放射状磨削き。	良好。	にぶい橙。良好。	
083 S B 07	杯	(14.8) — —	須恵器の蓋杯を模した杯である。稜線で区画され底部に至る。体部と比ぶ器高浅い。	口縁部横ナデ、体部外面磨削きの為不明瞭。	良好。	橙色。良好。	
084 S B 07	杯	13.3 — —	須恵器の蓋杯を模した杯である。体部は直立し、稜線で区画され底部に至る。	口縁部横ナデ、体部外面磨削り。	良好。	にぶい橙色。良好。	スス付着。
085 S B 07	杯	— — —	底部のみ残存。須恵器の蓋杯を模した杯。	体部外面磨削り、内面放射状磨削き。	良好。	外面灰褐色、内面赤色。不良。	
086 S B 07	杯	(12.0) — —	$\frac{1}{2}$ 残存。須恵器の蓋杯を模した杯。体部は外反し、口唇部は尖る。底部は浅い。	口縁部横ナデ、底部磨削り。	良好。	橙色。良好。	
087 S B 07	杯	12.0 — —	須恵器の蓋杯を模した杯である。稜線で区画され底部に至る。底部は深長が浅い。	口縁部横ナデ、体部外面磨削り、内面ナデ。	良好。	にぶい橙色。良好。	外面スス付着。
088 S B 07	杯	12.0 5.0 —	杯身の底部は丸底、受部は内傾して短い。	内外面回転による横ナデ、底部回転磨削り。	良好。	黄灰色。良好。	
089 S B 08	壺	19.1 39.7 6.6	ほぼ完形。口縁部は「く」の字状に開く長頸、底部は平底。	外面胴部上半縦刷毛目、下半斜磨削り、内面刷毛目。	荒い粒を多量に含む。	にぶい黄褐色〜橙色。不良。	
090 S B 08	壺	17.2 — —	口縁部〜胴部上半 $\frac{1}{2}$ 残存。口縁部は「コ」の字状に外反し、肩には張りを持たない。	口縁部横ナデ、胴部外面縦磨削り、内面横磨ナデ。	茶色鉱物、石英を含む。	にぶい橙色。良好。	スス付着。
091 S B 08	壺	17.5 33.0 7.5	口縁部は外反し、胴は長く最大径を中位に有する。底部は平底。	胴部外面不明、内面磨ナデ、輪襷も現あり。底部葉状磨削。	1〜2%の砂粒を含む。	にぶい橙色。	
092 S B 08	壺	19.0 33.0 7.4	胴部〜底部 $\frac{1}{2}$ 欠損。口縁部は外反し、胴部中央が狭まっている。底部は平底。	胴部外面磨削きが著しいが磨削り、内面刷毛目、底部磨削き。	荒い砂粒を多量に含む。	にぶい黄褐色。軟質。	内外面マス付着。
093 S B 08	瓶	24.3 — —	口縁〜胴部上半残存。口縁部は外反し、胴部には張りがない。	胴部外面上半縦磨削り、下半斜磨削り、内面磨削き。	茶色鉱物を含む。	にぶい橙色。良好。	内外面マス付着。
094 S B 08	壺	(26.4) — —	口縁〜胴部上半 $\frac{1}{2}$ 残存。頸部は直立し、口唇部外反する。	口縁部横ナデ、胴部外面縦磨削り、内面磨削き。	石英を含む。	外面橙色、内面にぶい橙色。軟質。	黒斑あり。
095 S B 08	壺	17.8 — —	口縁部〜胴部上半のみ残存。最大径が口縁にあり短い長頸。	口縁部横ナデ、胴部内外面共縦磨削き。	白色鉱物を含む。	にぶい橙色。良好。	スス付着。

遺物番号	器 形	法 量 ^{mm}	器 形 の 特 徴	成・整形の特徴	胎 土	色 調・焼 成	備 考
096 S B08	壺	(17.0) — —	口縁～胴部下半 ¹ / ₂ 残存。口縁は、「く」の字状に開く長さ。	口縁部横ナデ、胴部外面縦溝削り、内面横溝ナデ。	金雲母を含む。	外面にふい赤褐色、内面明赤褐色。良好。	
097 S B08	壺	18.9 32.5 7.0	完形、口縁は外反し、体部中央に張りを持つ、底部は平底。	胴部外面縦削り、下半横ナデ、内面縦ナデ、一部縦削り。	軽石粘土鉱物粒を含む。	褐色。良好。	黒斑あり。
098 S B08	壺	(16.4) — —	胴最大幅が中位にある、底部の欠失した長頸。	口縁部横ナデ、胴部外面縦溝削り、内面横方向のナデ	小砂を含む。	赤褐色。良好。	
099 S B08	壺	(18.9) — —	口縁～体部上半 ¹ / ₂ 残存。口縁は外反し、胴部は張りを持たず直線的にせばまる。	口縁部横ナデ、胴部内外面共丁寧なナデ。	1%砂粒を少量含む。	褐色。硬質。	
100 S B08	壺	15.9 — —	底部欠損。口縁は外反し、胴部は内湾しながら底部に向かう。	口縁部横ナデ、胴部外面縦溝削り、内面横溝ナデ。	1%内外の石英を多量に含む。	にぶい褐色。良好。	内外面スス付着。
101 S B08	壺	19.4 32.2 6.5	口縁部は、「く」の字状に開く長頸、底部は平底。	口縁部横ナデ、胴部外面縦削り、内面横溝ナデ。	小砂を多く含む。	白っぽい黄褐色。良好。	
102 S B08	壺	13.2 — —	口縁部は直立し、張りのある胴部に至る。	口縁部横ナデ、胴部外面縦溝削り、内面ナデ、輪痕あり。	小砂を多く含む。	白味かかった灰褐色良好。	
103 S B08	壺	(20.6) — —	口縁～胴部上半 ¹ / ₂ 残存。口縁は、「く」の字状に開き張りのある胴部に至る。	口縁部胴部内外面とも磨き。	1%ほどの砂粒を含む。	褐色。良好。	スス付着。
104 S B08	壺	(14.6) 26.3 6.8	口縁部は外反し、体部中央に最大径を持ち偏円球形でせばまる、底部平底。	口縁部横ナデ、胴部外面縦磨き、内面横溝ナデ。	良好。	明赤褐色。良好。	スス付着。
105 S B08	壺	(16.4) — —	口縁部～肩部 ¹ / ₂ 残存。口縁部は外反し、肩部に至る。	口縁部横ナデ、胴部外面縦ナデ、内面ナデ、器底磨減。	茶色鉱物を含む。	にぶい褐色。軟質。	
106 S B08	壺	(18.0) — —	口縁～肩部 ¹ / ₂ 残存。口縁部は外反して、肩部に続く。	口縁部横ナデ、胴部外面縦削り、内面縦ナデ。	1～2%砂粒を多量に含む。	にぶい褐色。良好。	
107 S B08	壺	19.0 — —	口縁～胴上半 ¹ / ₂ 残存。夫い胴上部に外湾する口縁がつき、底部はつまみ上げる。	内外面ナデ、胴部に指環状痕。	赤褐色白色軽石含む。	褐色。良好。	
108 S B08	甗	(13.3) — —	胴部は内傾しながら口唇部で外反する。胴部の最大径は肩部にある。	口縁部外面と胴部外面縦磨き、内面削り削り。	1～2%の砂粒を含む。	にぶい褐色。良好。	スス付着。
109 S B08	甗	— — 8.2	胴部 ¹ / ₂ ～底部残存。胴部は張りがあり、中央に最大径を持ち平底の底部に至る。	胴部外面～底部縦磨き、内面磨減だが底部に磨ナデ。	白色鉱物を含む。	外面灰黄色、内面灰白色。	黒斑あり。
110 S B08	甗	23.8 28.6 6.8	ふっくらとした胴部は、外反しながら直向する口縁部に至る。大きな単孔を穿つ。	口縁部横ナデ、胴部外面縦削り、内面縦磨き。	小砂を少量含む。	暗褐色。良好。	
111 S B08	甗	— — 8.8	胴部は直線的に口縁部に向かう、底部に大きな単孔を穿つ。	外面上半剛毛目、下半横磨き、内面半縦磨き、下半ナデ。	2～3mm大の小石を含む。	にぶい褐色。	胴部外面黒斑あり。
112 S B08	甗	— — 12.0	大きく切り抜かれた底部から直線的に胴部が開く。	外面縦削り、内面横削り毛目、孔縁部縦磨き、輪痕あり。	1～3%の砂粒を含む。	にぶい褐色。良好。	
113 S B08	甗	14.8 12.2 5.6	ふっくらとした胴部は、外反する口縁部に至る。底部に単孔を穿つ。	口縁部横ナデ、外面縦削り、内面縦ナデ、孔縁部ナデ。	赤色の鉱物を含む。	茶褐色。良好。	
114 S B08	壺	(26.0) — —	口縁～胴中央部 ¹ / ₂ 残存。口縁部は「く」の字状に開き、ふっくらとした胴部に至る。	内外面磨減のための整形不明瞭。	1～5%の砂粒を多量に含む。	にぶい褐色。良好。	
115 S B08	壺	19.8 25.2 7.8	口縁部は外反し、ふっくらとした胴部から平底の底部に至る。	口縁部横ナデ、胴部内外面共横削りナデ。	赤色白色黒色の鉱物を含む。	灰褐色。良好。	スス付着。

第V章 小町田遺跡の調査

遺物番号	器形	法量 ⁴⁾	器形の特徴	成・整形の特徴	胎土	色調・焼成	備考
116 S B08	葉	12.1 — —	口縁部は外反し、ふっくらとした胴部に至る。底部欠損。	口縁部横ナデ、胴部外面斜度削り、内面横度削り。	細砂粒1%茶褐色鉱物を含む。	浅黄褐色。良好。	
117 S B08	葉	13.8 — —	口縁部は外反し、張りのある胴部に至る。	口縁部横ナデ、胴部外面直ナデ、内面削毛目。	1%程の砂粒を多量に含む。	淡赤褐色。良好。	スス付着。
118 S B08	葉	16.4 — —	口縁～体部上半 $\frac{1}{2}$ 残存。口縁部は「く」の字状に開き胴部に続く。	口縁部横ナデ、胴部外面縦度削き、内面横度削り。	茶色鉱物を含む。	にぶい褐色。	
119 S B08	壺	— — 5.0	胴部は球形を呈し、底部は小さい。	内外面共に横度削り。	1～2%の砂粒多量に含む。	赤褐色。良好。	外面スス付着。
120 S B08	葉	10.6 9.6 5.0	口縁部は直立し、体部はふっくらと丸みをもち平底の底部に至る。小型の壺。	外面胴部上半直度削き、下半斜度削り内面直度削り。	小砂を多量に含む。	茶褐色。良好。	
121 S B08	壺	13.4 11.2 —	口縁～胴部 $\frac{1}{2}$ 欠損。口縁は外反し、底部は平底。	口縁部横ナデ、胴部外面縦度削り、内面丁寧な直ナデ。	0.5%程の砂粒多量に含む。	赤褐色。良好。	スス付着。
122 S B08	葉	12.0 11.7 6.1	片口を思わせる不正形な壺で胴下半が強つて底部となる。	口縁部横ナデ、体部外面縦度削り、内面直度削り。	小砂を含む。	灰褐色。良好。	
123 S B08	壺	(9.0) — —	口縁部 $\frac{1}{2}$ 残存。口縁部は外反し、中位外面一様を持つ。	口唇部横ナデ、胴部外面縦度削き、内面直ナデ。	茶色鉱物を含む。	淡褐色。	
124 S B08	壺	11.7 — —	口縁部のみ残存。胴部から外反し、口唇部に至る。	内外面共に磨滅している為不明瞭、接合痕あり。	0.5～1%砂粒多量に含む。	淡赤褐色。良好。	
125 S B08	壺	(10.7) — —	口縁部 $\frac{1}{2}$ 残存。口縁部は、胴部から直立し中央で外反して尖った口唇部に至る。	内外面共に磨滅し不明。	1%茶褐色砂粒均等に含む。	にぶい褐色。良好。	
126 S B08	高杯	(18.5) — —	脚部が欠失した浅い杯。	杯部外面縦度削り。	1～2%砂粒多量に含む。	褐色。良好。	スス付着。
127 S B08	高杯	— — 11.2	杯部は体部と底部の境に線をもち、脚部は短かくラッパ状に広がる。	杯部内面直度削き、脚部凹転による横ナデ、天井部指おさえ。	白色鉱物を含む。	にぶい褐色。良好。	
128 S B08	高杯	11.9 — —	体部は外反し、縁線で区画され底部に至る。	口縁部外面直度削り内面ナデ、脚部外面縦度削り。	1%白色鉱物を多量に含む。	淡赤褐色。良好。	
129 S B08	高杯	12.2 — —	体部は外反し、縁線で区画され体部に至る。脚部は開く。	口縁部横ナデ、杯部内外面、脚部共ナデ。	白色鉱物を多量に含む。	赤褐色。良好。	
130 S B08	高杯	12.5 9.4 11.2	杯部は深く、体部は外反し、縁線で区画され底部に至る。脚部は短かくラッパ状に開く。	口縁部横ナデ、体部外面直度削り、内面不明、脚部指ナデ。	良好。	橙～赤灰色。	内外面スス付着。
131 S B08	高杯	13.6 8.5 9.2	体部は外反し、縁線で区画され浅い底部に至る。脚部は短かく、裾部で急に開く。	口縁部横ナデ、体部～脚部外面直度削り、内面指ナデ。	2～3%の小石を少量含む。	褐色。良好。	内外面スス付着。
132 S B08	杯	(9.1) — —	$\frac{1}{2}$ 残存。口縁は外反し、体部は張りをもち、口縁に比べ浅い。	口縁～体部内面横ナデ、底部磨滅し不明。	良好。	にぶい褐色。不良。	両面黒斑あり。
133 S B08	壺	(10.0) 6.8 —	口縁部 $\frac{1}{2}$ 欠損。胴部は内傾し、口唇部で直立する、体部～底部は球形。	口縁部横ナデ、外面体部～底部直度削り、内面指ナデ。	小砂を含む。	赤褐色。良好。	
134 S B08	杯	(14.0) — —	口縁部～体部 $\frac{1}{2}$ 残存。口唇部のみ外反し丸味をもつ体部に続く。	口唇部横ナデ、体部外面直度削り、内面横度削り。	1.5%砂粒1%石英、黒雲母含む。	灰白色。良好。	
135 S B08	杯	(10.2) — —	$\frac{1}{2}$ 残存。口縁部は直立し、浅い体部に至る。下降するにつれて器内が薄くなる。	口縁部横ナデ、体部外面直度削り、内面放射状直度削り。	良好。	灰褐色。良好。	

遺物番号	器 形	法 量 ¹⁾	器 形 の 特 徴	成・整形の特徴	胎 土	色 調・焼 成	備 考
136 S B08	杯	(11.8) 5.1 —	須恵器の蓋杯を模した杯。 体部は内傾し、稜線で区画 され厚い底部に至る。	口縁部横ナデ、体 部外面削製削り、 内面不明瞭。	良好。	赤褐色。硬質。	
137 S B08	杯	12.0 3.7 —	須恵器の蓋杯を模した杯で ある。体部は直立し、稜線 で区画され底部に至る。	口縁部横ナデ、底 部外面削製削り、内 面磨き。	小砂を含む。	灰褐色。良好。	
138 S B08	杯	12.0 3.7 —	須恵器の蓋杯を模した杯。 体部は外反し、稜線で区画 され底部に至る。	口縁部横ナデ、底 部外面削製削り。	小砂を少量含 む。	茶褐色。良好。	
139 S B08	杯	13.7 4.0 —	須恵器の蓋杯を模した杯。 体部は短かく直立し稜線で 区画され底部に至る。	口縁部横ナデ、底 部外面削製削り。	1～2%砂粒 多量を含む。	褐灰色。良好。	スス付着。
140 S B08	杯	(14.2) 4.8 —	須恵器の蓋杯を模した杯で ある。稜線で区画され底部 に至る。口唇部のみ外反。	口縁部横ナデ、底 部外面削製削り、 内面放射状磨き	小砂を含む。	灰赤色。良好。	
141 S B08	杯	(11.4) 5.1 —	須恵器の蓋杯を模した杯で ある。稜線で区画され底部 に至る。口唇部のみ外反。	口縁部横ナデ、底 部外面削製削り、 内面ナデ。	小砂を多量に 含む。	赤褐色。良好。	
142 S B08	杯	11.8 5.2 —	須恵器の蓋杯を模した杯で ある。体部は外反し、稜線 で底部と区画される。	体部内外面横ナデ 底部外面削製削り、 内面ナデ。	良好。	赤褐色。良好。	
143 S B08	杯	12.6 5.0 —	須恵器の蓋杯を模した杯で ある。稜線で区画された体 部は、中央から外反する。	体部内外面横ナデ 底部外面削製削り、 内面ナデ。	小砂を多く含 む。	赤味をおびた褐色。 良好。	
144 S B08	杯	(12.0) 5.0 —	須恵器の蓋杯を模した杯で ある。体部は外反し、稜線 で底部と区画される。	体部外面横ナデ、 底部外面と内面全 体は、剥離している。	砂粒を含む。	赤褐色。良好。	
145 S B08	杯	12.5 4.6 —	須恵器の蓋杯を模した杯で ある。体部は外反し、稜線 で区画され底部に至る。	体部内外面横ナデ 底部外面不明瞭、 内面磨ナデ。	砂粒を含む。	褐色。良好。	
146 S B08	杯	12.2 5.0 —	須恵器の蓋杯を模した杯で ある。体部は外反し、口唇 部内面に沈線を持つ。	体部内外面横ナデ 底部外面削製削り。	小砂を多く含 む。	明褐色。良好。	
147 S B08	杯	12.6 — —	須恵器の蓋杯を模した杯で ある。口唇部は、つまみ上 げて内面に線を持つ。	体部内外面横ナデ 底部外面削製削り、内 面ナデ。	良好。	外面黒色、内面灰褐 色。不良。	
148 S B08	杯	(12.8) — —	須恵器の蓋杯を模した杯で ある。体部は外反し、稜線 で区画され底部に至る。	体部内外面横ナデ 底部外面削製削り。	1～2%の砂 粒含む。	にぶい褐色。良好。	
149 S B08	杯	11.4 — —	須恵器の蓋杯を模した杯で ある。体部は直立し、稜線 で区画され底部に至る。	体部内外面横ナデ 底部外面削製削り、 内面磨ナデ。	良好。	1～2%の茶 褐色鉱物を含む。	にぶい褐色。良好。
150 S B08	杯	13.2 — —	須恵器の蓋杯を模した杯で ある。体部は直立し、口唇 部のみ外反する。	体部外面横ナデ、 底部外面削製削り、 内面削製。	良好。	外側明赤褐色、内面 はにぶい赤褐色。不 良。	内面黒斑あり。
151 S B08	杯	(13.6) — —	須恵器の蓋杯を模した杯で ある。体部は外反し、口唇 部内面に線を持つ。	体部内外面横ナデ 底部内外面削製削り。	1%砂粒含 む。	褐色。良好。	
152 S B08	杯	15.2 — —	須恵器の蓋杯を模した杯で ある。体部は直立し、口唇 部に線を持つ。	体部横ナデ、底部 外面削製削り、内面 ナデ。	良好。	褐色。	外面に黒斑あり。
153 S B08	杯	16.0 6.5 —	須恵器の蓋杯を模した杯で ある。稜線で区画され体部 に至る。	体部内外面横ナデ 底部外面削製削り、 内面磨ナデ。	良好。	にぶい褐色。良好。	内外面にスス 付着。
154 S B08	杯	— — —	底部のみが残存。須恵器の 蓋杯を模した杯である。	底部外面削製削り、内 面横磨き。	茶色鉱物を含 む。	にぶい褐色。	
156 S B08	杯	— — —	不整形で丸い底部は明瞭な 稜線を持って立ち上がる。	回転クロコ成形、 底部内外面回転削 切り、他不明瞭。	小石粒を含 む。	黒色。	須恵器。

第V章 小町田遺跡の調査

遺物番号	器形	法量	器形の特徴	成・整形の特徴	胎土	色調・焼成	備考
156 S B09	甕	(15.0) — —	口縁部が残存。頸部は直立し、口唇部で外反する。	口縁部横ナデ。	1%砂粒を含む。	灰白色。良好。	
157 S B09	甕	(18.4) — —	口縁～体部上半分が残存。口縁部は「く」の字状に外反する長甕。	口縁部横ナデ、体部外面縦磨削り、内面寛ナデ。	良好。	褐色。良好。	
158 S B09	甕	— — 5.5	胴上半部を欠失した長甕。底部は平底で小さい。	体部外面縦磨削り、内面寛ナデ、底部縦削り。	良好。	褐色。良好。	一部にス付着。
159 S B09	杯	(13.0) 4.1 9.2	口縁部欠損。口縁部は外反して立ち上がり、底部は比較的大きい。	回転ロクロ成形、腰部磨削り、底部回転糸切り。	良好。	灰白～灰色。良好。	須恵器。
160 S B09	高杯	— — 10.2	脚部が残存。脚部は直線的に開き、端部に至る。	回転台を利用しての成形。	良好。	にぶい褐色。良好。	
161 S B10	甕	— — (9.0)	脚部残存。脚部は比較的短かい。	外面縦磨削り、内面横ナデ、底部横ナデ。	良好。	にぶい褐色。不良。	
162 S B10	甕	20.5 — —	口縁部が残存。頸部から外反し、直線的に伸びて口唇部に至る。	外面横ナデ、内面寛ナデ。	金雲母を含む。	褐色。良好。	
163 S B10	鉢	(23.8) — —	体部がすぼまり、口縁部はゆるやかに長くのびる。	口縁部横ナデ、胴部外面縦磨削り、内面縦磨削り。	金雲母を含む。	褐色。良好。	
164 S B10	杯	12.1 — —	須恵器の蓋杯を模した杯。体部は横線で区画され底部に至る。	底部外面磨削り、内面全体に斜磨削り。	茶褐色紅物を含む。	褐色。	
165 S B10	高杯	— — 10.1	杯の欠失した脚台。頸部が頸部から急に大きく広がっている。	内外面横ナデ。	金雲母を含む。	にぶい褐色。軟質。	
166 S B10	杯	(15.6) — —	口縁部が残存。底部を欠く体部は短かく外反する口縁部を持つ。	口縁部横ナデ、体部外面磨削り、内面ナデ。	良好。	褐色。良好。	
167 S B10	杯	(18.0) — —	口縁～体部が残存。ゆるく丸く、底部から体部に至る。	回転ロクロ成形、口縁部に二条の沈線を持つ。	良好。	灰色。良好。	須恵器。
168 S B10	甕	(30.2) — —	明瞭に「ろくろ」目を残す甕の口縁部。	回転ロクロ成形、内外面回転による横ナデ。	1～2%の砂粒を含む。	灰色。良好。	
169 S B11	甕	18.1 — —	口縁部のみ残存。球頸部を欠失して、直立して口縁部が残る。	外面斜磨削り、内面寛磨き。	良好。	にぶい褐色。軟質。	
170 S B11	甕	(20.0) — —	口縁～底部が残存。口縁部は「く」の字状に外反し、張りのある脚部に至る。	口縁部外面磨削り、内面寛磨き、胴部外面磨削り、内面横ナデ。	1～3%の砂粒を含む。	淡褐色。良好。	
171 S B11	甕	25.0 — —	底部の欠失した長脚部は、「く」の字状に開く口縁部に至る。	口縁部外面磨削り、内面寛磨き、胴部外面磨削り、内面不明。	白色、茶色紅物を含む。	外面明赤褐色、内面にぶい黄褐色。硬質。	外面一部に黒斑あり。
172 S B11	甕	— — 7.8	底部は平底で、外反する胴部に続く。	外面横磨削り、内面寛ナデ。	良好。	淡褐色。良好。	
173 S B11	甕	(14.7) — —	口縁～胴部下半分が残存。口縁部は「く」の字状に外反し、胴部中央に張りを持つ。	口縁部横ナデ、胴部外面磨削り、内面寛ナデ。	粗い砂粒を含む。	にぶい褐色。良好。	
174 S B11	甕	15.5 — —	口縁～胴部上半分が残存。口縁部は「く」の字状に外反し、胴部は張り出す。	口縁部指圧痕あり、胴部外面磨削り、内面寛ナデ、輪積み痕。	1%茶褐色紅物を多量に含む。	褐色。軟質。	外面にス付着。
175 S B11	甕	— — 7.6	胴部～底部残存。張りのある胴部から平底の底部に続く。	外面縦磨削り後磨き、内面縦磨削り、底部磨削り。	茶色紅物を含む。	外面褐色、内面にぶい褐色。硬質。	

遺物番号	器 形	法 量 ⁴⁾	器 形 の 特 徴	成・整形の特徴	胎 土	色 調・焼 成	備 考
176 S B11	甕	— — (5.6)	胴部下半～底部 ⁵⁾ 残存。胴部は張りがあり、底部は小さく平底。	外面削り、内面直ナデ。	1～2%の砂粒を含む。	にぶい黄褐色。良好。	スス付着。
177 S B11	甕	(15.6) — —	口縁部～胴部上半 ⁵⁾ 残存。口縁は「く」の字状に外反し、胴部の張りが無い。	口縁部横ナデ、胴部直磨き、内面直ナデ。	良好。	外面にぶい橙色、内面にぶい褐色。良好。	
178 S B11	甕	(16.1) — —	口縁部は外反し張りのある胴部へ続く。	口縁部横ナデ、胴部外面縦削り、内面刷毛ナデ。	良好。	灰黄褐色。良好。	
179 S B11	甕	(19.2) — —	口縁～胴部 ⁵⁾ 残存。口縁部は「く」の字状に外反し器内厚い。	口縁部横ナデ、胴部外面斜削り、内面横直ナデ。	良好。	外面淡黄褐色、内面にぶい橙色。不良。	内外面スス付着。
180 S B11	瓶	21.0 — —	口縁部 ⁵⁾ 残存。口縁部は直立し口唇部で外反する。胴部は直線的に下垂する。	口縁部横ナデ、胴部外面ナデ、内面直磨き。	良好。	浅黄褐色～靑灰色。良好。	
181 S B11	甕	23.9 — —	口縁～体部上半 ⁵⁾ 残存。口縁部は外反し、胴部は直線的に下垂する。	口縁部横ナデ、胴部外面縦削り。	軽石、雲母、赤褐色鉱物を含む。	黒褐色。不良。	
182 S B11	甕	— — (6.0)	胴部～底部 ⁵⁾ 残存。胴部は丸みを持ち、底部は平底でへこむ。	胴部外面縦削り、内面直ナデ、底部内面直削り、輪積み肌。	比較的精い。	外面赤褐色、内面灰褐色～黒色。良好。	外面スス付着。
183 S B11	甕	— — 5.5	胴部 ⁵⁾ ～底部残存。胴部上半に最大径を持つ、底部は平底。	胴部外面縦削り、内面上半刷毛ナデ下半横直ナデ。	良好。	外面にぶい橙色、内面灰褐色～にぶい褐色。	スス付着。
184 S B11	甕	— — 5.4	胴部下半～底部 ⁵⁾ 残存。底部は平底。	胴部外面斜削り、内面横直削り後直ナデ。	1～2mmの砂粒を多量に含む。	浅黄褐色。	
185 S B11	甕	(14.4) — —	口縁部 ⁵⁾ 残存。口縁部は強く外反する。	口縁部横ナデ。	赤褐色、白色、軽石粒を含む。	にぶい橙色。良好。	
186 S B11	甕	(11.5) — —	口縁部～胴部上半 ⁵⁾ 残存。口縁部は「く」の字状に外反し、胴部中央に最大径を持つ。	口縁部横ナデ、胴部外面直削り、内面直ナデ、輪積み肌。	良好。	橙～赤褐色。良好。	
187 S B11	甕	(13.6) — —	口縁部 ⁵⁾ 残存。口縁は「く」の字状に外反し、体部に続く。	口縁部横ナデ、胴部外面縦削り、内面ナデ。	赤褐色、白色、軽石、石英を含む。	にぶい褐色。	
188 S B11	甕	(15.0) — —	口縁～胴部 ⁵⁾ 残存。口縁部は短かく、「く」の字状に外反する。	口縁部横ナデ、胴部外面横削り、内面斜直ナデ。	0.5～1%程の砂粒多量に含む。	赤褐色。良好。	
189 S B11	甕	(14.2) — —	口縁部～胴部 ⁵⁾ 残存。口縁部は直立し、胴部は僅かに張りを持つ。	口縁部横ナデ、胴部外面縦削り、内面直ナデ。	良好。	赤褐色～にぶい褐色。不良。	
190 S B11	甕	(14.5) — —	口縁～体部上半 ⁵⁾ 残存。口縁部は「く」の字状に外反し胴部中央に最大径をもつ。	口縁部横ナデ、胴部外面縦削り、内面直削り。	良好。	外面にぶい橙色、内面靑灰色。良好。	スス付着。
191 S B11	壺	8.2 — —	口縁部のみ残存。頸部から外反する。頸部内面に一条の沈線を持つ。	口唇部横ナデ、頸部外面直削り、内面ナデ。	良好。	橙色。軟質。	
192 S B11	高 杯	— — 12.7	脚部のみ残存。太く短かい柱部から頸部は内湾気味に急に広がる。	外面縦磨き、内面直ナデ、内外共雑である。	良好。	にぶい褐色。良好。	スス状の黒色部あり。
193 S B11	高 杯	14.2 8.8 10.7	杯部 ⁵⁾ ～脚部残存。杯部は丸味をもち、口唇部で外反する。脚部は短かく闊く。	杯部口唇部横ナデ外面直削り、内面直ナデ、脚部外面直削り。	1～2%茶褐色鉱物を含む。	橙色。良好。	
194 S B11	杯	11.5 5.5 —	⁵⁾ 残存。口縁部は直立する半球形の杯。	外面削り、内面直ナデ。	1～2.3%茶褐色鉱物多量に含む。	橙色。良好。	
196 S B11	杯	(12.8) — —	口縁～体部 ⁵⁾ 残存。口縁部は短かく内傾し、底部は丸底。	口縁部横ナデ、胴部外面直削り、内面斜直磨き。	5%砂粒多量に含む。	明赤褐色。硬質。	

第V章 小町田遺跡の調査

遺物番号	器形	法 量	器形の特徴	成・整形の特徴	胎 土	色 調・焼 成	備 考
196 S B11	杯	(12.5) — —	1/2残存。体部は内湾しながら口唇部に至る。底部は丸底。	口縁部横ナデ。体部外面覓削り、内面ナデ。	良好。	にぶい褐色。硬質。	内外面スス付着。
197 S B11	杯	— — —	底部1/2残存。丸底底部、下降するに於いて唇厚を増す。	外面横覓削り、内面覓磨き。	2〜3%砂粒を多量に含む。	褐色。良好。	
198 S B11	杯	(11.8) (7.2) —	口縁〜底部1/2残存。口縁部は短かく外反し、半球状。	口縁部横ナデ。体部外面覓削り、側面している。	1〜3%砂粒含む。	褐色。良好。	
199 S B11	杯	(14.0) 5.2 —	須恵部の蓋杯を模した杯。体部は内傾し、絞線で区画され底部に至る。	口縁部横ナデ。底部外面覓削り。他側面している。	1〜5%砂粒含む。	にぶい褐色。良好。	
200 S B11	杯	(13.0) (6.5) —	須恵部の蓋杯を模した杯。体部は内傾し絞線で区画され底部に至る。	口縁部横ナデ。底部外面覓削り。	1〜2%砂粒含む。	明赤褐色。良好。	スス付着。
201 S B11	杯	12.6 — —	須恵部の蓋杯を模した杯。体部は内傾し絞線で区画され底部に至る。	口縁部覓磨き。底部外面覓削り、内面磨き。	良好。	明赤褐色。硬質。	
202 S B11	杯	(12.8) (4.7) —	1/2残存。須恵部の蓋杯を模した杯。体部は外反し絞線で区画され底部に至る。	口縁部横ナデ。外面腰部指押え底部覓削り、内面磨き。	1%の茶褐色鉱物を含む。	にぶい褐色。軟質。	
203 S B11	杯	(17.0) — —	須恵部の蓋杯を模した杯。体部は直立し絞線で区画され底部に至る。	口縁部横ナデ。底部外面覓削り、内面覓ナデ。	良好。	浅黄褐色。良好。	
204 S B11	蓋	(11.0) — —	天井部と口縁部の境に強い絞線を持ち、口唇部はつまみ上げて平皿面を持つ。	回転ロクロ成形。内外面回転による横ナデ。	0.5〜1%砂粒を含む。	灰色。良好。	自然胎付着。須恵器。
205 S B11	蓋	— — 16.4	底部〜高台部1/2残存。付け高台を持つ角圓蓋。	外面高台接合時の横ナデ。接合痕あり。	1%砂粒を含む。	赤褐色。不良。	
206 S B12	壺	(21.8) — —	口縁部は「く」の字状に開きゆがんでいる。器内薄い。	口縁部横ナデ。側部外面斜覓削り、内面覓ナデ。	良好。	褐色。良好。	
207 S B12	壺	— — 5.2	胴部下半〜底部1/2残存。器内は薄く、底部平底。	胴部外面覓削り内面覓ナデ。底部覓削り。	良好。	にぶい褐色。良好。	外面にスス付着。
208 S B12	杯	12.0 3.0 —	底部が浅く広い口縁部は内湾する。口唇部内面に絞線を持つ。	口縁部横ナデ。底部外面覓削り、内面磨ナデ。	黒雲母を少量含む。	にぶい褐色。良好。	
209 S B12	壺	(9.2) — —	頸部は内傾し、口唇部で外反する。	口縁部内外面横ナデ。	1%砂粒を含む。	にぶい褐色。良好。	スス付着。
210 S B12	杯	(13.4) 3.2 9.6	口縁1/2〜底部残存。底部は平底で体部は直線的に外反する。器高は低い。	回転ロクロ成形。底部静止糸切り痕。	白色鉱物を含む。	灰白色。良好。	「井」形印。須恵器。
211 S B12	杯	13.0 3.7 6.5	ほぼ完形。平坦な底部から腰は丸く、体部は直線的に外反する。	回転ロクロ成形。底部回転糸切り。	1%黒色鉱物を含む。	灰白色。良好。	須恵器。
212 S B12	杯	13.5 3.4 7.8	ほぼ完形。大きな平底の底部から、体部は直線的に外反する。	回転ロクロ成形。底部右回転糸切り。	白色鉱物を多量に含む。	灰白色。良好。	須恵器。
213 S B12	壺	— — 8.6	胴部下半〜台部残存。台部は短かく、裾部で広がる。	胴部外面覓削り内面覓ナデ。台部内外面覓ナデ。	良好。	にぶい褐色。良好。	
214 S B15	高 杯	— — —	脚柱部のみ残存。細く短い。	外面覓削り、杯部、脚部共内面覓ナデ。	茶色鉱物、石英を含む。	褐色。良好。	
215 S B15	杯	14.2 8.4 —	完形。底部は丸底で、内湾しながら開き、口縁部は外反する。器内厚く重量がある。	口縁部横ナデ。体部外面覓削り、内面覓磨き。	茶色鉱物を含む。	にぶい褐色。硬質。	体部外面黒痕あり。スス付着。

遺物番号	器 形	法 量	器 形 の 特 徴	成・整形の特徴	胎 土	色 調・焼 成	備 考
216 S B15	杯	18.8 9.4 —	ㄥ残存。口縁部は外反し、 体部は内湾して丸底の底部 に至る。肉厚である。	口縁部横ナデ、体 部外面磨減、内面 ナデ、輪積み痕。	2～3%の小 石を少量含 む。	灰褐色。良好。	一部スス付 着。
217 S B15	杯	12.6 5.8 —	口縁部ㄥ欠損。口縁部は底 部との境に稜を持ち、底部 は内湾する。	口縁部横ナデ、底 部外面磨削り、内 面磨ナデ。	良好。	にぶい橙色。良好。	一部スス付 着。
218 S B15	高 杯	14.2 — —	体部は外反し、底部と稜線 で区画され脚部は欠損する	口縁部横ナデ、体 部外面磨削り、内 面磨ナデ。	0.5～1% 茶 褐色鉱物を含 む。	褐色。良好。	
219 S B16	杯	(12.6) (3.0) —	ㄥ残存。体部は浅く、内湾 しながら口縁部に続く、器 肉は薄い。	口縁部と体部内面 横ナデ、体部外面 磨削り。	良好。	にぶい橙色。良好。	
220 S B16	杯	(13.0) — —	ㄥ残存。体部は内湾しなが ら口縁部に続く、口縁部は 短かく、境に稜線を持たな い。	口縁部横ナデ、体 部外面磨削り。	金賞母を少量 含む。	にぶい橙色。良好。	
221 S B16	杯	(14.4) — —	ㄥ残存。全体的に内湾する 器高は低く厚きは薄い。	口縁部横ナデ、体 部外面磨削り、内 面ナデ。	良好。	にぶい褐色。良好。	
222 S B16	高 杯	— — 8.2	脚部ㄥ残存。脚柱部は太く 頸部は短かく広がる。	柱部内外面磨削り、 頸部内外面横ナデ 絞り目痕。	1～2%の小 石を含む。	褐色。良好。	
223 S B16	高 杯	— — 10.0	脚部のみ残存。脚部は接合 部から直線的に開く。	脚部内外面横ナデ 器部の寛れ目出つ	良好。	にぶい橙色。良好。	
224 S B16	杯	(14.0) — —	口縁～体部ㄥ残存。口縁部 は外反し、丸部の底部に至 る。	口縁部横ナデ、体 部外面磨削り、内 面ナデ。	金賞母を少量 含む。	褐色。良好。	
225 S B16	杯	12.5 8.0 —	ㄥ残存。口縁部は頸部内面 に稜を持ち外反し、体部は 器厚を増して丸底底部に至 る。	口縁部横ナデ、体 部外面磨削り、内 面放射状磨き。	3～5%の茶 色鉱物を含む。	にぶい橙色。良好。	
226 S D01	壺	18.0 — —	頸部は直立し、口唇部で外 反する。肩部は張りを持ち 丸味のある体部に続く。	口縁部横ナデ頸部 上半内面磨ナデ、 他不明瞭。輪積み 痕。	白色、茶色鉱 物を含む。	にぶい褐色。軟質。	埋土中灰色ス ス付着。
227 S D01	壺	(19.0) — —	口縁～頸部上半ㄥ残存。口 縁部は外反し張りのある肩 部へ続く。	口縁外面磨き、内 面横ナデ、頸部外 面磨き、内面磨ナ デ。	白色鉱物を含 む。	外面褐色。内面に ぶい褐色。不良。	輪積み痕。
228 S D01	壺	17.8 — —	口縁部は短かく外反し、頸 部に稜を持ち、張りのない 頸部に続く。	口縁部横ナデ、頸 部外面磨削り、内 面磨ナデ。	良好。	にぶい褐色。良好。	外面スス付 着。
229 S D01	壺	(18.8) — —	口縁～頸部上半ㄥ残存。口 縁は「コ」の字状。	口縁部は横ナデ、 頸部外面横磨削り 内面磨ナデ。	良好。	にぶい褐色。良好。	
230 S D01	壺	(16.5) — —	口縁～頸部上半ㄥ残存。口 縁部は外反し、張りのない 頸部に続く。	口縁部横ナデ、頸 部外面磨削り、内 面磨ナデ。	良好。	褐色。良好。	
231 S D01	壺	— — 8.6	頸部下半～台部残存。台部 は円盤型。	台部外面～頸部横 ナデ、台部内面と 頸部内外面磨削り ナデ。	白色鉱物を含 む。	赤色。良好。	
232 S D01	杯	(11.0) — —	口縁～底部ㄥ残存。口縁は 内傾し、底部は浅い。	口縁部横ナデ、底 部外面磨削り、内 面ナデ。	良好。	外面淡褐色。内面黒 褐色。硬質。	内外面スス付 着。
233 S D01	杯	(11.9) (4.1) —	須恵窯の蓋杯を模した杯。 体部は内傾し、稜線で区画 され底部に至る。	口縁部横ナデ、底 部外面磨削り、内 面ナデ。	良好。	外面淡褐色。内面黒 色。良好。	
234 S D01	杯	(13.7) — —	口縁部は短かく直立し、体 部に続く。	口縁部横ナデ、体 部上半指押入、下 半磨削り。	良好。	灰白色。軟質。	
235 S D01	杯	(13.8) (3.8) —	口縁部は短かく厚みを持ち 器高は低い。	口縁部横ナデ、体 部外面磨削り、内 面放射状磨削り。	良好。	赤褐色。硬質。	外面黒斑あ り。

第V章 小町田遺跡の調査

遺物番号	器形	法量	器形の特徴	成・整形の特徴	胎土	色調・焼成	備考
236 S D01	杯	— — 8.6	高台付の底部から体部はゆるやかに外反する。	回転ロクロ成形、内外面回転による横ナデ。	良好。	灰白色。良好。	須恵器。
237 S D01	杯	(15.6) (4.8)	1/2残存。口縁部は直立し、体部は内湾する。	口縁部横ナデ、体部外面磨き、内面放射状磨き。	良好。	にぶい黄褐色。硬質。	スス付着。
238 S D01	杯	(14.6) (6.1)	須恵器の蓋杯を模した杯。体部は内傾し縁線で区画され底部に至る。	口縁部横ナデ、底部外面磨き、内面指ナデ。	良好。	にぶい黄褐色。良好。	
239 S D01	杯	(19.4)	須恵器の蓋杯を模した杯。体部は直立し、複数の縁線を持って底部に至る。大型の杯。	口縁部横ナデ、底部外面磨き、内面指ナデ。	0.1%砂粒を含む。	灰白色。不良。	スス付着。
240 S D02	壺	— — —	肩部が最大幅を持ち、口縁部は直立する。	外面口縁部放射状文、体部磨き、肩部内面指圧痕あり。	良好。	灰白色。良好。	須恵器。
241 S D02	壺	— — (15.0)	胴下部～底部1/2残存。底部は平底で大きい。	胴部内外面横方向のナデ、底部磨削り。	良好。	灰色。良好。	須恵器。
242 S D02	高杯	— — —	杯部は内湾しながら底部に至る。胴部に円筒形3本の透しがある。	回転ロクロ成形、杯部外面縦磨ナデ。	良好。	灰赤色。	須恵器。
243 S D02	高杯	— — —	頸柱部のみ残存。円筒型を呈し直線的で裾部でふくらみを持つ。	外面縦磨り、杯部内面放射状磨き、胴部内面磨ナデ。	良好。	褐色。良好。	スス付着。
244 S D02	高杯	— — —	脚部のみ裾欠損1/2残存。脚部は外反し透しの部分で割離している。	回転ロクロ成形、外面横刷毛ナデ。	良好。	灰色。良好。	須恵器。
245 S D02	高杯	— — —	脚部のみ残存。脚部は外反し透しの部分で割離している。	回転ロクロ成形、外面横刷毛ナデ。	良好。	灰色。良好。	外面に自然釉がかかる須恵器。
246 S D02	杯	(11.8)	口縁部～底部1/2残存。口縁部は直立し、浅い体部に続く。	口縁部横ナデ、体部外面斜磨き、内面放射状磨き。	良好。	灰白色。良好。	
247 S D02	杯	11.8 5.1	口縁部1/2欠損。体部は内湾し半球型で口縁部は内傾する。	口縁部横ナデ、体部外面磨き、内面刷毛ナデ。	茶色胎物を含む。	褐色。硬質。	
248 S D02	杯	12.6	体部は浅く、口縁部は直立する。	口縁部横ナデ、体部外面磨き、内面放射状磨き。	良好。	淡褐色。良好。	
249 S D03	高杯	— — —	接合部から開き、裾部との境に稜を持つ。裾部は大きく広がると思われる。	柱部外面縦磨り、内面はナデ、裾部は横ナデ。	茶褐色胎物を含む。	にぶい褐色。軟質。	
250 S D03	杯	8.9 2.5	体部は短かく直立し縁線で区画され底部に至る。	口縁部横ナデ、底部外面磨き、内面指ナデ。	良好。	黄褐色。	内面 スス付着。
251 S D03	杯	9.7 3.6	1/2残存。体部は直立し縁線で区画され底部に至る。	底部外面磨き、他回転による横ナデ。	良好。	淡黄褐色。	口縁部内外面黒色。
252 S D03	杯	(10.1) 3.2	体部は外反し、縁線で区画され底部に至る。	口縁部内外面、底部内面横ナデ、外面磨り。	良好。	褐色。良好。	
253 S D03	杯	10.4 3.3	1/2残存。体部は短かく外反し、底部は浅く丸底で体部との境に稜を持つ。	口縁部横ナデ、底部外面磨き、内面指ナデ。	良好。	淡黄褐色。軟質。	黒色部分あり。
254 S D03	杯	(14.8)	口縁部～体部上半1/2残存。口縁部は内傾し、体部は内湾し肩が張る。	口縁部横ナデ、体部内外面不明瞭。	良好。	灰黄色。軟質。	
255 S D03	杯	(13.0)	1/2残存。底部は浅く口縁部は肥厚して急に外反する。	底部内面から口縁部内外面横ナデ、底部外面磨き。	良好。	褐色～褐色。良好。	内面にスス付着。

遺物番号	器 形	法 量 ¹⁾	器 形 の 特 徴	成・整形の特徴	胎 土	色 調・焼 成	備 考
256 S D03	杯	(14.4) — —	1/2残存。口縁は短かく、体部は深長が浅く丸底。	口縁部横ナデ、体部外面寛削り、内面直ナデ。	良好。	橙色。硬質。	
257 S D03	杯	(11.0) — —	1/2残存。丸底の浅い底部から、口縁部は直立する。	口縁部横ナデ、体部外面寛削り、内面直ナデ。	良好。	灰白色。軟質。	スス付着。
258 S D03	杯	(11.0) — —	1/2残存。丸底の浅い底部から、腰が張り、口縁部は直立する。	口縁部横ナデ、体部外面寛削り、内面放射状磨き。	良好。	にぶい橙色。硬質。	内外面にスス付着。
259 S D03	杯	(12.0) 3.4 —	1/2残存。丸底の底部から口縁部は外反する。	口縁部横ナデ、体部外面指頭圧痕、底部寛削り、内面不明。	0.1%砂粒を含む。	褐灰色。良好。	
260 S D04	壺	(16.2) 31.8 7.8	口縁部は「く」の字状に外反し、肩部内面に稜を持つ。体部は張り中央に最大径を持つ。	体部外面寛削り、内面丁寧なナデ底部に指頭圧痕。	良好。	外面にぶい橙色、内面灰白色。不良。	体部中～底部に黒斑あり。
261 S D04	壺	(16.4) — —	口縁～肩部1/2残存。肩部は直立し口唇部で外反する。肩部は張る。	口縁部外面縦磨き、体部横削り、内面直ナデ。	茶褐色鉱物を含む。	外面褐色、内面明褐色。硬質。	
262 S D04	壺	17.6 — —	口縁部は外反し、頸部に稜を持って張りのない胴部に続く。	口縁部横ナデ、胴部外面縦削り。	1～2%砂粒を含む。	橙色。良好。	スス付着。
263 S D04	壺	(18.3) — —	口縁部～肩部1/2残存。口縁部は「く」の字状に外反し、肩部は張る。	口縁部内外面磨き、外面頸部横削り、内面不明。	良好。	にぶい褐色。硬質。	
264 S D04	杯	(16.6) (9.4) —	口縁～底部1/2残存。口唇部は外反し内湾しながら丸底の底部に至る。	体部上半縦削り、下半横削り、内面直削り、内面直削り。	良好。	体部上半灰白色。他黒色。	
265 S D04	壺	— — 6.4	胴部下半～台部残存。台部は短かい。	胴部外面縦削り、内面不明、台部内面直削り。	0.1～1.5%砂粒、金雲母を含む。	にぶい橙色。良好。	
266 S D04	壺	— — 4.2	胴部～底部残存。胴部は内湾し底部は平底の小型壺。	外面縦削り、内面不明、内面指頭圧痕。	良好。	外面にぶい橙色、内面褐色。良好。	
267 S D04	杯	(10.5) (3.6) —	突出した底部を持ち、屈曲して口縁は直立する。	口縁内面磨き、底部外面磨き、内面放射状磨き。	良好。	橙色。硬質。	
268 S D04	杯	(13.0) (3.6) —	須恵器の蓋杯を模した杯。体部は直立し、稜線で区画され底部に至る。	体部横ナデ、底部外面削り、内面不明瞭。	良好。	にぶい褐色。硬質。	
269 S D04	杯	(13.2) — —	1/2残存。須恵器の蓋杯を模した杯。体部は短かく内湾し、稜線で区画され底部に至る。	外面底部上半指ナデ、下半削り、内面放射状磨き。	1～2%砂粒を含む。	橙色。良好。	
270 S D04	杯	(12.9) — —	1/2残存。口唇部から内湾して底部に至る半球形。	口縁部横ナデ後外面横削り、内面直削り。	0.1～1%砂粒を含む。	明赤褐色。良好。	黒斑あり。
271 S D04	杯	(15.2) (4.8) —	1/2残存。口縁部は直立し、内湾しながら底部に至る。	口縁部横ナデ、体部外面横削り、内面不明瞭。	0.3%黒雲母粉0.5%砂粒少量含む。	橙色。良好。	
272 S D04	杯	(16.2) — —	1/2残存。口縁部は体部との境に稜を持たず、口唇部で外反する。	口縁部から内面横削り、体部外面削り。	良好。	褐色～灰白色。良好。	
273 S D04	杯	(15.2) (3.4) —	1/2残存。須恵器の蓋杯を模した杯。体部は直立し、強い稜線で底部と区画される。	口縁部横ナデ、底部外面削り、内面直削り。	良好。	浅黄褐色。不良。	
274 S D04	杯	— — (12.0)	大きく平らな底面で体部が欠く。	回転ロクロ成形、内外面回転による横ナデ。	1mmの砂粒を含む。	灰白色。	須恵器。
275 S D04	鉢	(24.0) (6.3) —	口縁～体部上半1/2残存。口縁部は直立し、体部との境に稜を持つ。	口縁部横ナデ、体部外面横削り、内面磨減し不明瞭。	良好。	にぶい橙色。硬質。	

第V章 小町田遺跡の調査

遺物番号	器形	法量 ¹⁾	器形の特徴	成・整形の特徴	胎土	色調・焼成	備考
276 S D05	甕	19.5 — —	口縁部は「コ」の字状を呈し張りのある肩部から直線的に底部に向かう。器内窪い。	胴部上半横置削り下半縦置削り、内面横置ナデ。	良好。	灰白色。良好。	スス付着。
277 S D05	甕	(11.5) — —	口縁～胴部下半 $\frac{1}{2}$ 残存。口縁は「く」の字状に開く。	口縁部横ナデ、胴部内外面厚減。瓦ナデわずかに残存。	金雲母粉、長石、石英、白色鉱物を含む。	褐色。良好。	
278 S D05	甕	— — 6.6	長甕と考えられる胴下半部から底部。	胴部外面縦置削き内面横置ナデ、底部木の美込。	良好。	褐色。良好。	スス付着。
279 S D05	蓋	つまみ 4.4 — —	身受部の欠失した天井つまみ。	回転クロロ成形、内外面回転による横ナデ。	0.1～0.5%砂粒を含む。	灰白色。	須恵器。
280 S D05	杯	(10.2) — —	須恵器の蓋杯を模した杯、体部は直立し、縁縁で区画され底部に至る。	口縁部～内面横置削き、外面縦置削き。	良好。	外面横～にぶい黄褐色、内面黒色。良好。	
281 S D05	杯	(14.0) (3.9) —	$\frac{1}{2}$ 残存。口縁部は底部との境に縁を持ち、内傾して口唇部で外反する。体部は浅い。	口縁部横ナデ、底部外面部削き、内面放射状置削き。	良好。	にぶい黄褐色。不良。	底部外面黒斑あり。
282 S D05	杯	13.0 3.6 7.0	$\frac{1}{2}$ 残存。底部は平底で、体部は直線的に外側に向けて伸びる。	口縁部横ナデ、体部下半から底部削削り。	良好。	灰白色。良好。	口縁部内面光沢のある黒色。
283 S D05	杯	13.4 3.8 7.2	底部は平底で、体部は直線的に外側に向けて伸びる。	回転クロロ成形、内外面回転による横ナデ。	良好。	灰白色。良好。	黒書、須恵器。
284 S B07	支脚	4.8 13.9 6.3	裾広がりの円柱形を呈し中実の支脚である。	縦置削き痕有り。	良好。	にぶい褐色。良好。	
285 S B07	支脚	— — —	中実の支脚で底がくぼんでいる。上部欠損。		砂質を含む泥岩。	外面黄褐色、断面にぶい褐色。良好。	
286 S B08	支脚	4.7 10.7 8.7	高杯の脚部と類似した形である。	外面縦置削り、胴部内外横ナデ、内面指押え。	砂粒を少量含む。	明褐色。良好。	
287 S B12	支脚	— — —	中実の支脚で上下欠損している。	置削き痕有り。	1～2%の砂粒を含む。	にぶい褐色。良好。	
288 S B10	砥石	幅 3.9 高さ 3.5	4面の使用面を持つ。約 $\frac{1}{2}$ 残存。			灰白色。	
289 S B16	砥石	幅 3.3 高さ 2.5	4面の使用面を持つ。			灰色。	
290 S D02	砥石	幅 5.3 高さ 4.5	4面の使用面を持つ。約 $\frac{1}{2}$ 残存。			灰色。	
291 S D05	土 罎	長さ 3.8 径 1.7	紡錘形を呈し長軸方向に径3mmの孔が通る。完形。		黒雲母、微砂粒を少量含む。	淡黄色。良好。	
292 S K10	土 罎	長さ 5.2 径 1.9	紡錘形を呈し長軸方向に径8mmの孔が通る。 $\frac{1}{2}$ 残存		1%の砂粒を少量含む。	内外面にぶい黄褐色断面褐色。良好。	

木器

5号溝の底面から、大量に木製品が出土した。出土層位はXIV層に集中しており、土層断面の観察からは新旧、2つの時期に分類でき、木器出土の地層は、新しい時期の底部に該当する。その他、種子が若干出土しており、それらを含めて種子、樹種鑑定及び木製品の製作技法について、専門家による観察を依頼してあるが、今回はその成果は間に合わなかった。後日、補遺して責任を課すつもりである。

楡屑 ヒノキの薄板を用いたと考えられる楡屑の骨(1~3)である。骨はいずれも厚さ0.2cm弱で上端幅2cm、下端幅2.1cm、要の部分の幅約2cmである。長さは24.3cm~24.5cmと一定していない。骨の先端部は、直線的に角を落とす。下端は多角で落とした半円形を呈する。下端から約1.5cm上に要の孔をあける。要の固定方法、綴りの方法、屑縁の曲線、開き角度など知るすべはない。

火鑽臼 火鑽臼(4)の材の両端は、折り欠く切断方法と考えられる。細長い角棒を使い、一端はくびれて尖る。臼孔は片方の平面部分の側縁に2個、他側縁に1個穿石、臼孔は楕円形を呈し、内面は焦げ、臼孔に沿う側面には刻み目が残る。

曲物容器 曲物容器(5~15)と皿(16)である。曲物容器は側板(5~13)と底板(4~15)の部分からなる。薄い側板は破損して多くの細片となり、個体の固定は難しい。側板は厚さ0.2~0.3cmで高さ4cmの小さなもの(5、6、8~10)と、厚さ0.5~0.6cmで、高さ10cm以上の大きなものに大別される。両方とも征目材を使用しているが、側板の内面に多数の斜線の刻線を入れ、円筒形に曲げて両端を樟皮で縫いつける。縫い方は2目1単位で縦方向に1.5cm前後の間隔をおくもの(5)と、3目1単位の縦方向で樟皮の端部を目隠しするもの(8)などがある。曲物底板で板目材のもの(14)は、内面に側板を取りかけるために、周縁を一段と低く削り落としている。幅は2.3cm、深さは5mである。なお、外面全体に炭化がみられる。征目材のもの(15)は、周縁、内面に側板取り付けの段差を削り落としている。幅1.5cm、深さ3mである。また、この材は火鑽臼として転用されており、底板内面の外周部分に3ヶ所の焦げた臼孔が残る。内周部分には6ヶ所、折損部分に1ヶ所の臼孔が残る。いずれも焦げて炭化している。遺存のよい臼孔は、径1cm、深さ0.5cmを測る。

皿 挽物容器の皿(16)であろう。全体の1/3程度の残存状態である。径10cmの平底をもち、短かい口縁は強く屈曲して外反する。内面は深さ0.3cmと浅い。2ヶ所に角釘状の貫通孔が穿たれ、片方に紐状の植物繊維が残っている。

棒状品(筥と把手) 棒状品としたものに筥状木器(17~19)、両端を丸めた棒(20)、把手形木器(21~23)に分類される。筥状木器は転用品と考えられ、厚い板の先端を刀子状に尖らせたもの(17、18)と曲物容器の側板に考えられる薄板の先端を、斜めに切り落としたものである。把手形木器の用途はそれぞれ異なると考えられ、先端下2.5cmを盤で横走させ、紐を括りつける用途(21)、先端から6cm、径3cm、その下は径2cmと細くなるもの(22)、先端を3cmの球形に削り出し、幅3cm、径2.5cmのくびれを作って下に続くもの(23)に分けられる。

板状品 板状品は2種類出土している。大形品(24)は、長さ34.9cm、最大幅は10cm、厚さ0.9cmを測る。長辺の一方は直線的で、片方は短辺の隅丸径が大きく、ゆるやかに直線に至る。隅丸の大きなものは、隅切りが意図的に行なわれているらしく、長辺の直線部分が使用面、又は、主要部分と考えてもよい。小形品(25)は、長さ29cm、最大幅4.3cm、厚さ1.6cmである。征目材で両端部は欠損している。平の面の片側には、長平方向に続く段差がみられ、反対の平の面とは使用方法が異なる。

下駄 2枚歯の連歯下駄(26)である。台部と前歯が摩耗して残る。前幅、後幅とも一定で、8.2cmを測り、後部は欠損している。平面形は前部、後部ともに半円形を呈し、全体としては楕円を呈すると考えられる。

前歯は摩耗がはげしいものの、下方に向かって両側に広がり、下端幅が台幅よりも左右に広がっていたらしい。欠損して後歯は無く、痕跡が抉られて残っている。前歯は高さ1cmのみ残存するが、台幅8.2cmに対して8.5cmと広い。通常、台の前方には1孔、後方には2孔の鼻緒孔を穿つ、本例では前方1孔と、後方の図示左側に1孔を残す。穿孔方法は不明であるが、それぞれ径は前後方向に9mm、左右方向に7mmと長円形を呈している。台の中心線で、前端より4.2cmの位置に前壺が彫られている。前壺から後孔までの長さは9cmを測る。後孔の左右幅は、5.5cmを推定する。鼻緒孔の位置と前歯の位置を考慮して、下駄の全長を推定すると、22cmと考えられる。使用痕跡として、歯の摩滅の他に「鼻緒ずれ」が、前壺と後孔の両方の前後方向に認められる。台上面の「足ずれ」や「踵癖」は認められなかった。もう1点、連歯下駄の断片(27)が出土している。残存する長さは8.6cm、幅は4.4cm、厚さは1cmを測る。下駄の台部前部、左半分である。周縁は摩耗して、尖り気味に丸く角がとれ、台部前縁で裏面は、特に摩耗がはげしい。「鼻緒孔」は欠失して、認められない。前歯の部分は抉れて、欠落している。

尖頭棒 棒状品で一方は欠損し、片一方を尖らせたものを、尖頭棒として一括(28~32)した。ほとんど杭として使用したものであろうが材の太さや先端部分の加工の差異から以下に分類される。残存する長さ16.3cm、径2.3cmで表皮を残し三ヶ所程の切り込みを入れた後に手折ったものと考えられ、木製品製作の第1工程と考えられるもの(28)、残存する長さ38.4cm、径3cmで表皮を残し大きく彎曲した先端を加工し、長さ5cmで5つの方向から削り落とし、更に細かな削りを残すもの(29)、残存する長さ38.7cm、径3cm表皮を残し、加工は両方向から切り込み位置を変えて入れ、手折る。このため片面がそがれて、破面は広くとれるもの(30)、表皮を残し残存長さ91.9cm、径2cmの尖頭棒で小枝は切り落とされ、先端部加工長さ2.5cmを5面以上の削り込みを入れて尖らせるもの(31)、残存長さ44.5cm、表皮を残した直径3cmの尖頭棒で小枝を切り落した先端を長さ9cmの加工を施す。先端に向かって5面の角錐に仕上げている(32)。

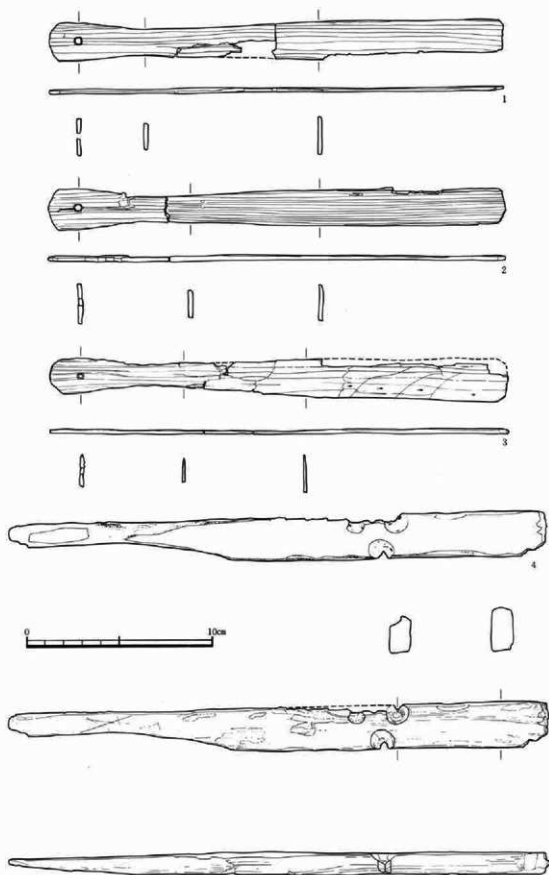
土木材 木樋と考えた大形の部材である。長さ1390cmのもの(33)は、直径24cm以上の材から木取りをしたもので、半載に断ち割り「コ」の字形に残った断面をみせる。表面の樹皮は残らないが、外面の加工痕や、内面の樋の部分の容工痕跡は明瞭でない。けれども、残存する全体を通して「コ」の字形に削り抜かれたように見える。両端の樋としての接続仕口は残らない。長さ1869cmのもの(34)は、直径24cm以上の材から木取りしたものと考えられ、前述のものと材は異なる。半載に断ち割り「コ」字形に削り抜き樋としたものであろう。けれども、水路部分にあたる内側削り抜きの技法が、明瞭に纏めてはいない。表面の樹皮は残らないもの、加工痕も認められない。部材の上部2ヶ所に長さ15cmの切り欠きが、同線上に49cmの間隔に穿たれている。これは柱材の貫穴又は、間渡穴の部分に担当するのではないかと考えられる。

5号溝から出土した木製品は総数35点を数えた。そのうち11点と最大量を数える曲物容器は全体の1/3弱を占める。また日常生活にかかわる椀類、火鑽臼、皿、篋、把手類、下駄は合計14点を数える。これらのことから本溝より出土した木器類は付近の集落で使用、廃棄された部材であろうと考えることができる。

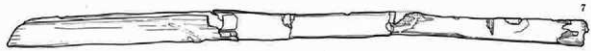
小町田遺跡 木製品計測値一覧表 (第19表)

番号	分類	部位	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	木取	備 考
1	服飾具	檜扇骨	24.3	2.0	0.2	M	
2	服飾具	檜扇骨	24.4	1.8	0.2	M	墨書痕残る
3	服飾具	檜扇骨	24.5	2.0	0.2	M	
4	発火具	火鑽白	28.9	2.2	1.2	I	白穴径1.2cm、深さ0.6cm
5	食膳具	曲物側板	(11.1)	4.0	0.3	M	桜の皮による縫合
6	食膳具	曲物側板	(19.4)	4.2	0.3	M	5と6の接合長30.0
7	食膳具	曲物側板	(31.1)	(1.2)	0.3	M	
8	食膳具	曲物側板	(24.1)	(4.2)	0.3	M	桜の皮による縫合
9	服飾具	曲物側板	(15.8)	(4.0)	0.3	M	8と9の接合長
10	食膳具	曲物側板	(15.4)	(4.2)	0.3	M	渋又はアクによる吸着
11	食膳具	曲物側板	(7.0)	(1.3)	0.2	M	
12	食膳具	曲物側板	(17.3)	(10.7)	0.6	M	カギ穴状の痕跡あり
13	食膳具	曲物側板	(28.2)	(9.8)	0.5	M	カギ穴状の痕跡あり
14	食膳具	曲物底板	(25.8)	(1.3)	1.2	I	底板裏は炭化状態
15	食膳具	曲物底板	(18.3)	(2.9)	(1.0)	M	1部に打ち込み痕あり
16	食膳具	皿			(2.0)	M	径 17.4cm
17	棒状品	筥	(12.8)	(1.3)	(0.8)	M	先端摩耗と炭化あり
18	棒状品	筥	(5.9)	(0.9)	(0.8)	I	両面摩耗
19	棒状品	筥	(12.4)	(1.4)	(0.2)	M	曲物容器側板の転用か
20	棒状品	丸めた棒	(15.5)				枝材 径1.5cm
21	棒状品	把手	(16.7)				枝材 径2.1cm
22	棒状品	把手	(17.0)				枝材 径3.0cm
23	棒状品	把手	(12.9)				枝材 径3.0cm
24	板状品	全面加工品	(34.9)	(10.0)	(0.9)	M	長手方向の先端は摩耗
25	板状品	全面加工品	(29.0)	(4.3)	(1.6)	M	表面の長手方向に段差
26	履物	下駄	(19.4)	(8.2)	(2.0)	I	裏面先端に擦過痕あり
27	履物	下駄	(8.6)	(4.4)	(1.0)	I	裏面先端は摩耗あり
28	棒状品	尖頭棒	(16.3)				枝材 径2.3cm
29	棒状品	尖頭棒	(38.4)				枝材 径3.0cm
30	棒状品	尖頭棒	(38.7)				枝材 径3.0cm
31	棒状品	尖頭棒	(91.9)				枝材 径2.0cm
32	棒状品	尖頭棒	(44.5)				枝材 径3.0cm
33	土木材	木 樋	(1390)	(17.5)	(11.0)		幹
34	土木材	木 樋	(1869)	(16.0)	(9.5)		幹、切り欠きあり

第V章 小町田遺跡の調査

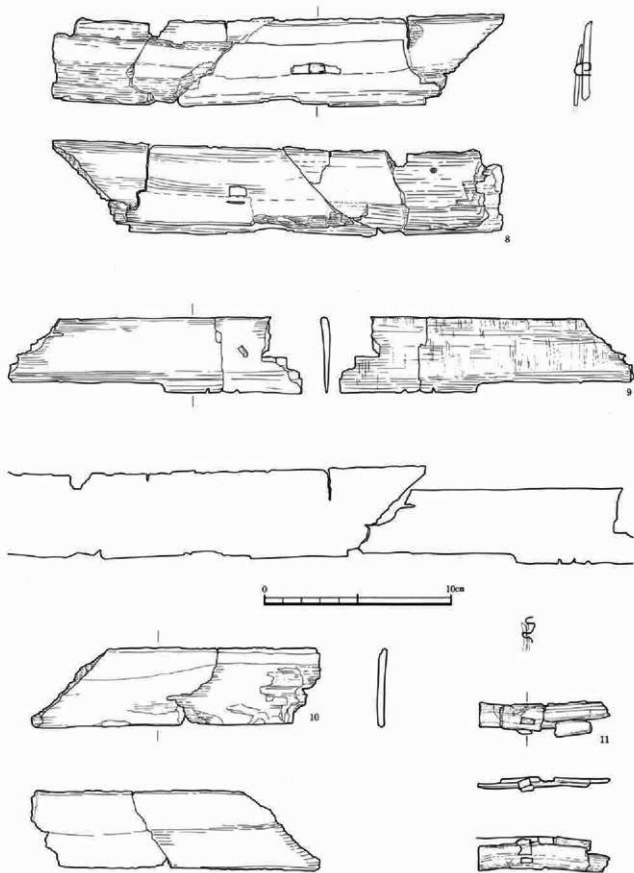


第258図 小町田遺跡 木製品実測図(1)

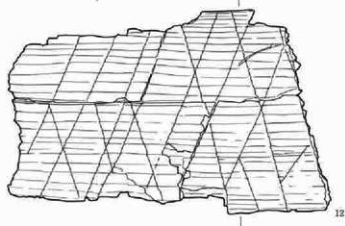
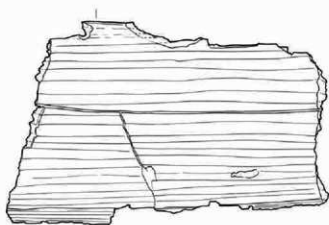


第259図 小町田遺跡 木製品実測図(2)

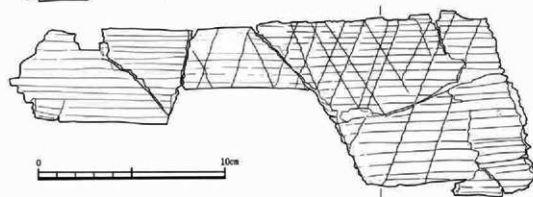
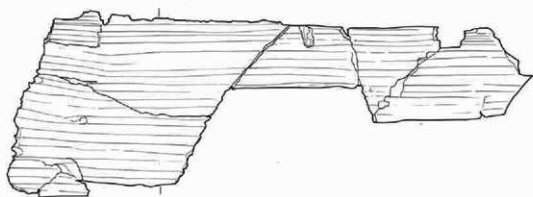
第V章 小町田遺跡の調査



第260図 小町田遺跡 木製品実測図(3)



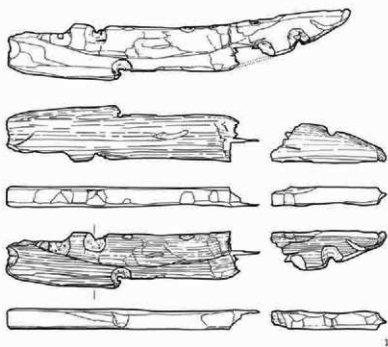
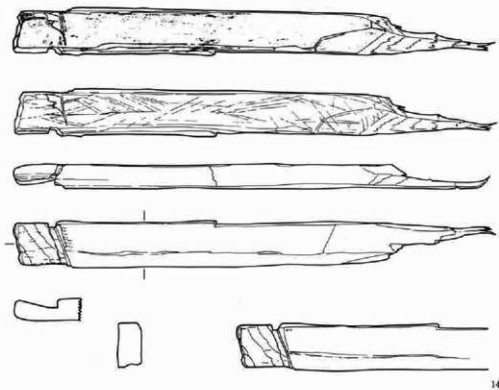
12



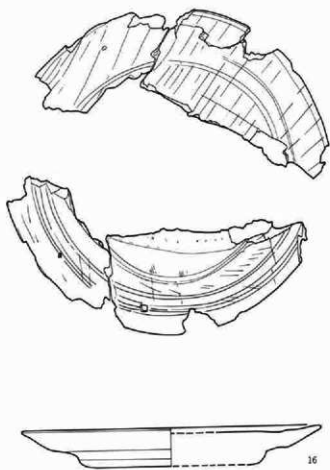
13



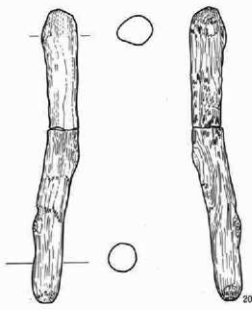
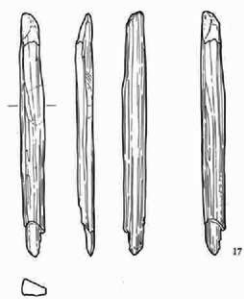
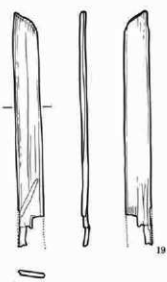
第261図 小町田遺跡 木製品実測図(4)



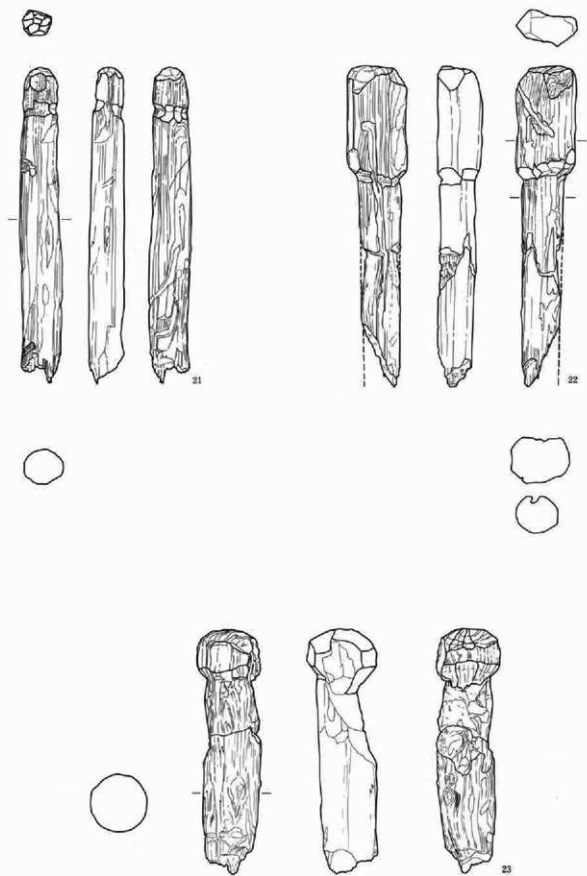
第262図 小町田遺跡 木製品実測図(5)



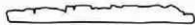
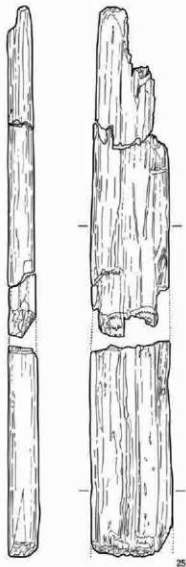
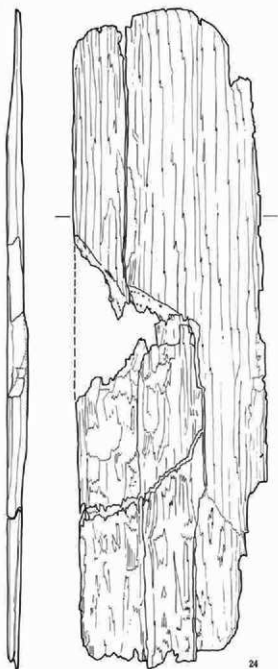
3 遺 物



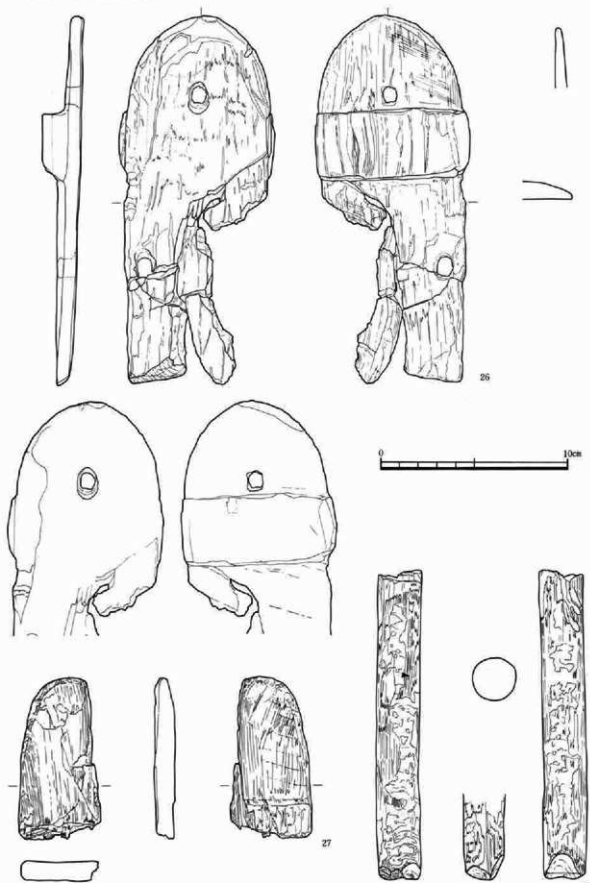
第263図 小町田遺跡 木製品実測図(6)



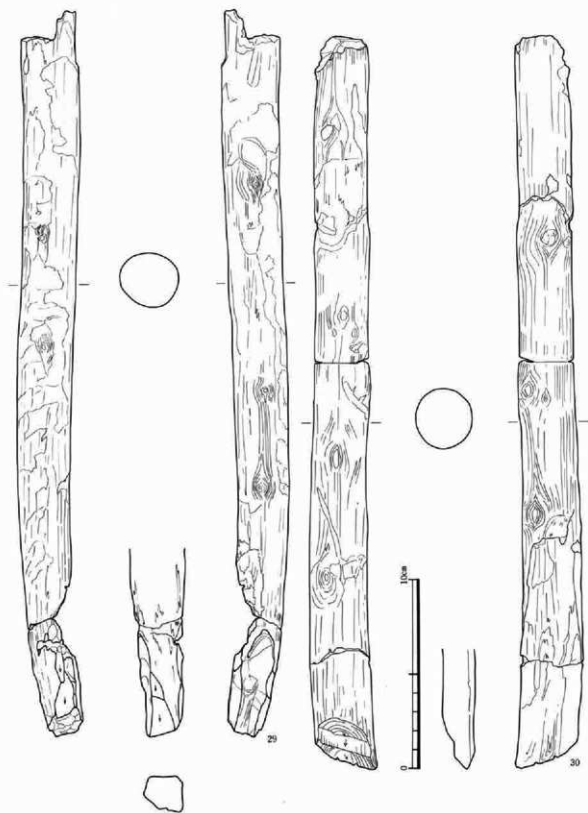
第264図 小町田遺跡 木製品実測図(7)



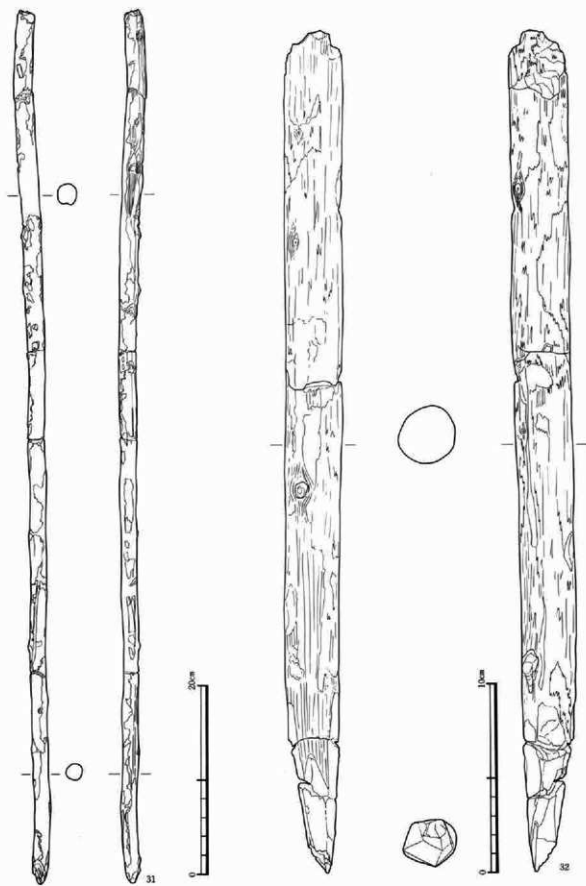
第265図 小町田遺跡 木製品実測図(8)



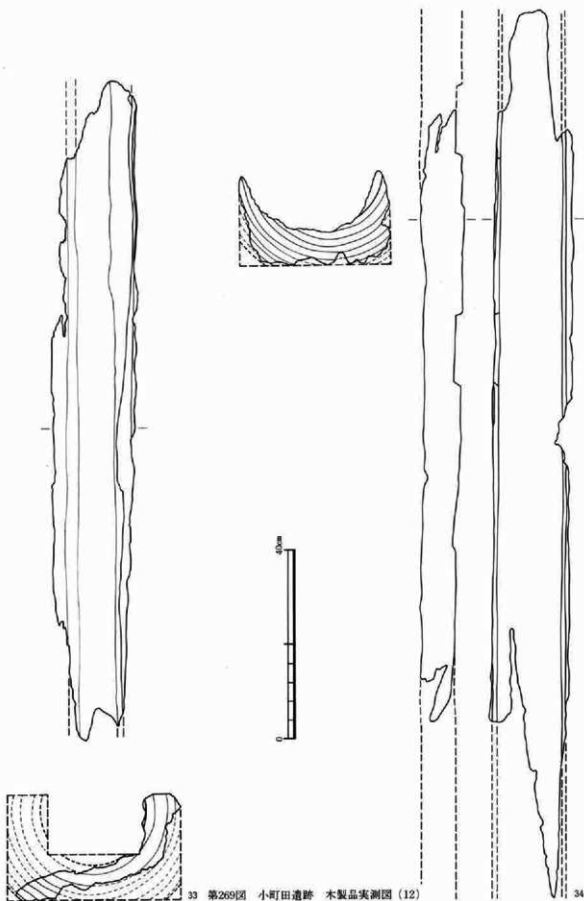
第266図 小町田遺跡 木製品実測図(9)



第267図 小町田遺跡 木製品実測図 (10)



第268図 小町田遺跡 木製品実測図 (11)



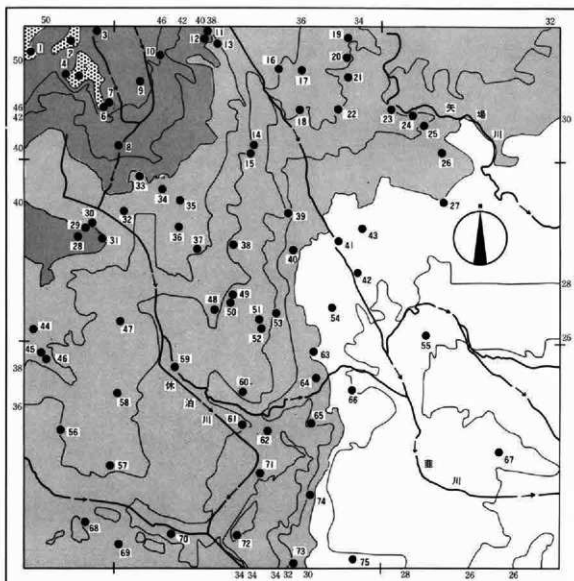
33 第269図 小町田遺跡 木製品実測図 (12)

34

第VI章 総 括

東の足尾山地と西の金山丘陵に挟まれて渡良瀬川扇状地は展開する。この扇状地面は西側を流れる菰川流路の洪積世扇状地と東を流れる矢場川流路の沖積世扇状地の2面に分類されている(文献, 35)。かつて、この地域は季節になると必ずといってよいほど湛水被害を被ることで有名であった。そのため、ほ場整備事業によって排水路工事を完成させ、麦作地帯に変容させることが農民の悲願に近いものであった。昭和47年に計画は実行に移され、その後並行して国道122号(太田バイパス)道路改良工事も実施され、現在、周辺は営農の近代化と都市景観の錯綜した急激な変貌を見ている。それらの開発事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査も進み、本地域内の昭和43年の周知の遺跡は25遺跡、昭和48年になると50遺跡、本報告書では75遺跡を数えている。これは文化財サイドの分布調査の精度の高さもさることながら近年の開発事業に伴う遺跡発見の量が増加していることが主たる原因でもある。

歴史的環境を把握してもらうために塚井遺跡をほぼ中心に周辺3km四方の遺跡分布を作成してみた(第270図)。この地域は北西から南東へ菰川台地、休泊台地、邑兼台地が続き、その周辺に「渡良瀬川扇状地I面」が広がる。この台地を削り込むように休泊川、菰川、矢場川が蛇行して流下する。これらの複雑な地理的条件は一応除外して各時代の変遷のみを概括しておきたい。旧石器時代の遺跡は、焼山遺跡、細田遺跡B区また塚井遺跡から南方4.5km離れた御正作遺跡(文献, 32)がある。特に御正作遺跡の立地がローム層の埋没低地であることから今後の本地域からの遺跡発見の可能性は大きい。縄文時代草創期は、焼山遺跡、細田遺跡B区、上遺跡、間之原遺跡、小町田遺跡で有舌尖頭器や僅少な土器が発見される程度である。縄文時代早期は、焼山遺跡、上遺跡、賀茂遺跡、間之原遺跡、小町田遺跡で出土する土器の量は増えてくる。縄文時代前期は、焼山遺跡、上遺跡、清水田遺跡、賀茂遺跡、塚廻り古墳群、大塚・間之原遺跡、御堂遺跡、間之原遺跡、小町田遺跡、細金遺跡で、特に上遺跡、間之原遺跡では集落が検出されている。縄文時代中期になると、焼山遺跡、雷遺跡、上遺跡、灰塚遺跡、賀茂遺跡、御堂遺跡、間之原遺跡、小町田遺跡、細金遺跡があげられる。中期前半の遺跡は少数、後半は増加する。特に小町田遺跡では発掘調査で住居址23軒、土壇89基が検出されている。縄文時代後期になると、雷遺跡、塚廻り古墳群、間之原遺跡と遺跡数、遺物とも減少する。縄文時代晩期になると、間之原遺跡のみとなる。弥生時代の遺跡は、焼山遺跡、渋沼遺跡、間之原遺跡である。古墳時代前期前半になると遺跡は急増する。焼山遺跡、上遺跡、清水田遺跡、安房田遺跡、塚廻り古墳群、大塚・間之原遺跡、間之原遺跡、細金遺跡、深町遺跡である。古墳時代前期後半になると、清水田遺跡、安房田遺跡、賀茂遺跡、大塚・間之原遺跡、深町遺跡となり規模も若干減少するようである。古墳時代後期になると、遺跡は各台地縁辺にまとまりながら、また微高地上に分布する。前代から継続する遺跡はもちろんのこと、遺跡数の増大と分布の拡散は生産地の拡大と安定を窺うことができる。奈良時代、平安時代の遺跡は前代より拡大し、台地縁辺は間断なく更に台地中央にまで進出するようである。また、この時期になると、農業生産向上のために用水または排水路の開鑿などの大規模土木事業を施行することが特筆される。



第270図 太田東部遺跡群 周辺の遺跡分布

遺 跡 名	
1 内並木遺跡	19 温井遺跡
2 堀ノ山遺跡	20 矢場城
3 原店遺跡	21 牧草遺跡
4 焼山遺跡	22 矢場萬壽山古墳
5 焼山古墳群	23 勢至堂墓古墳
6 細田遺跡B区	24 瀬ノ上遺跡
7 細田遺跡A区	25 新宮遺跡
8 戸井口遺跡	26 藤本観音山古墳
9 安良岡遺跡	27 後原・清水田遺跡
10 塚本古墳群	28 太田天神山古墳
11 稲荷山古墳	29 太田天神山古墳陪塚
12 埴子尾遺跡	30 目塚遺跡
13 向台古墳	31 女体山古墳
14 花ノ水遺跡	32 太田工業北裏遺跡
15 宮免遺跡	33 金井町遺跡
16 矢場氏家代の墓	34 大日山古墳群
17 妻合遺跡	35 下小林館
18 本矢場城	36 雷遺跡
	37 上遺跡
	38 上神原遺跡
	39 清水田遺跡
	40 塚井遺跡
	41 遠空遺跡
	42 安岡田遺跡
	43 二ノ塚遺跡
	44 宮前遺跡
	45 飯塚遺跡
	46 飯塚古墳群
	47 内ヶ島古墳群
	48 庚塚古墳
	49 庚塚遺跡
	50 淨光寺墓石
	51 賀茂神社西遺跡
	52 電舞館
	53 賀茂遺跡
	54 塚廻り古墳群
	55 洗石遺跡
	56 東別所遺跡
	57 長良神社古墳
	58 内ヶ島南田遺跡
	59 大塚・間之原遺跡
	60 御雷遺跡
	61 大塚遺跡
	62 間之原遺跡
	63 小町田遺跡
	64 畑金遺跡
	65 石神遺跡
	66 深町遺跡
	67 松本古墳群
	68 吉水川入遺跡
	69 古水古墳
	70 坂田北方遺跡
	71 相之原遺跡
	72 北小塚遺跡
	73 富士ノ越遺跡
	74 大泉高枝付近遺跡
	75 東小塚遺跡

「太田東部遺跡群」周辺遺跡一覧 (第20表)

番号	遺跡名	いせきめい	所在地	時	期	文献	備考
1	内並木遺跡	うらなみきいせき	太田市大字太田字内並木			7	
2	塩ノ山遺跡	しおのやまいせき	太田市大字東金井字塩ノ山	○		7	
3	原店遺跡	はらだないせき	太田市大字東金井字原店	○		7	
4	焼山遺跡	やけやまいせき	太田市大字東長岡字焼山	○		5	
5	焼山古墳群	やけやまこふんぐん	太田市大字東長岡字焼山	○	●	20	菑川村86ノ辺号墳
6	細田遺跡B区	ほそだいせきBく	太田市大字東長岡字細田	○	○	20	
7	細田遺跡A区	ほそだいせきAく	太田市大字東長岡字細田	○	○	21	
8	戸井口遺跡	といぐらいせき	太田市大字東長岡字戸井口	○		7	
9	安良岡遺跡	やすらおかいせき	太田市大字安良岡字五反田	○		7	
10	塚本古墳群	つかもとこふんぐん	太田市大字台之郷字塚本	○	●	1	菑川村17ノ1号墳
11	稲荷山古墳	いなりやまこふん	太田市大字上小林字埴子尾	○	●	1	菑川村17ノ1号墳
12	埴子尾遺跡	むじろだいこふん	太田市大字上小林字埴子尾	○	●	7	
13	向台古墳	むこうだいこふん	太田市大字台之郷字花ノ木	○	●	1	菑川村16号墳
14	花ノ木遺跡	はなのきいせき	太田市大字台之郷字花ノ木	○	○	15	
15	宮免遺跡	みやめんいせき	太田市大字茂木字宮免	○	○	30	
16	矢場氏墓代の墓	やばしるいだいのみほか	太田市大字矢場字寺境内			4	
17	寄合遺跡	よりあいいせき	太田市大字矢場字寄合			7	
18	本矢場城	もとやばじょう	太田市大字矢場			8	
19	温井遺跡	ぬくいせき	足利市東矢場町字温井、字熊野			26	
20	やばじょう	やばじょう	足利市東矢場町字牧原			8	
21	まきはらいせき	まきはらいせき	足利市東矢場町字牧原			26	

○文献番号は336頁の参考文献に対応する。
 ○遺跡の時期で○印は集落址 ●印は墓址を表わす。
 ○遺跡番号は第270図の番号に対応する。

第VI章 総 括

番号	遺跡名	いせきめい	所在地	時	期	文献	備考
49	唐塚遺跡	かのえづかいせき	太田市大字竜鏡字唐塚	○	○	23	
50	浄光寺基石	じようこうじほせき	太田市大字竜鏡字上耕地	○	○	7	
51	賀茂遺跡	かもうまいせき	太田市大字竜鏡字西原	○	○	8	
52	竜鏡畑	りゆうきやかた	太田市大字竜鏡字賀茂	○	○	30	
53	塚廻り古墳群	つかまわりこふんぐん	太田市大字竜鏡字塚廻り	○	○	1・7	
54	賀茂遺跡	かもうまいせき	太田市大字竜鏡字賀茂	○	○	16・24	
55	渋沼遺跡	しぶぬまいせき	邑楽郡邑楽町大字石打字渋沼	○	○	7	
56	東別所遺跡	ひがしべつしよいせき	太田市大字東別所	○	○	32	
57	長良神社古墳	ながらじんじゃこふん	太田市大字東別所字本郷	○	○	1・7	九合村61号墳
58	内ヶ島田遺跡	うちがしまみなみだいせき	邑楽郡大泉町大字内ヶ島字南田	○	○	27	
59	大塚・間之原遺跡	おおつか・あいのほらいせき	太田市大字竜鏡字川向 字中西田	○	○	22	川合・中西田地区
60	御霊遺跡	ごりよういせき	太田市大字竜鏡字御霊	○	○	30	
61	大塚遺跡	おおつかいせき	太田市大字竜鏡字大塚	○	○	7	
62	間之原遺跡	あいのほらいせき	太田市大字竜鏡字高原	○	○	7	
63	小町田遺跡	こまちだいせき	太田市大字竜鏡字小町田	○	○	17	
64	細金遺跡	ほそかねいせき	太田市大字竜鏡字細金	○	○	22	
65	石神遺跡	いしがみいせき	太田市大字竜鏡字石神	○	○	31	
66	深町遺跡	ふかまちいせき	太田市大字竜鏡字深町	○	○	30	
67	松本古墳群	まつもとこふんぐん	邑楽郡大泉町大字石打字松本	○	○	7	高島村1・8号他
68	古水川入遺跡	ふるこおりかわいりいせき	邑楽郡大泉町大字古水字川入	○	○	30	
69	古水古墳	ふるこおりこふん	邑楽郡大泉町大字古水	○	○	32	大川村24号墳
70	坂田北方遺跡	さかたほつぽういせき	邑楽郡大泉町大字坂田字本郷	○	○	1	
71	相之原遺跡	あいのほらいせき	邑楽郡大泉町大字上小泉	○	○	7	
72	北小泉遺跡	きたこいずみいせき	邑楽郡大泉町大字上小泉字柳町	○	○	32	
73	富士ノ峰遺跡	ふじのこしいせき	邑楽郡大泉町大字下小泉字富士ノ越	○	○	32	
74	大泉高校付近遺跡	おおいずみこうこうふきんいせき	邑楽郡大泉町大字下小泉	○	○	7	
75	東小泉遺跡	ひがしこいずみいせき	邑楽郡大泉町大字下小泉	○	○	7	

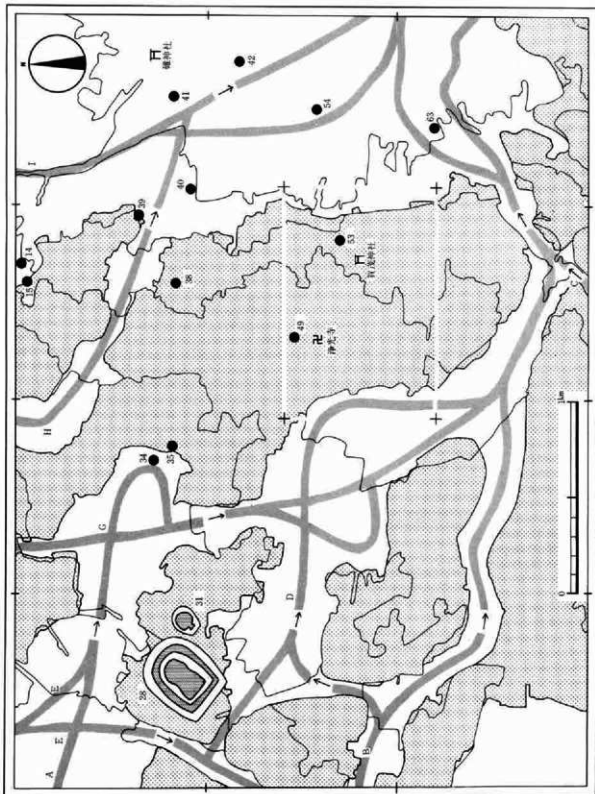
河川復元

- A河道 大島堤跡
- B河道 小瀬木堤跡
- C河道 西矢島堤跡
- D河道 内ヶ島堤跡
- E河道 新島堤跡
- F河道 原長堤跡
- G河道 安良堤跡
- H河道 石新堤跡
- I河道 重川堤跡

遺跡名

- 14 花ノ木遺跡
- 15 宮倉遺跡
- 28 太田天神山古墳
- 31 女体山古墳
- 34 木田山古墳群
- 35 下小林館
- 38 上神原遺跡
- 39 榑木田遺跡
- 40 塚竹遺跡
- 41 蓮草遺跡
- 42 笠原田遺跡
- 49 成塚遺跡
- 53 賀茂遺跡
- 54 塚廻り古墳群
- 63 小町田遺跡

註 十印の区画内の調査成果については参考文獻30を参照のこと



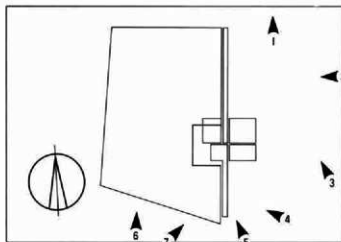
第271圖 木田東部発掘群 周辺の水系復元図

第VI章 総 括

参考文献 (第21表)

- | | | | |
|----|-------|---|----------------|
| 1 | 1938年 | 〔上毛古墳総覧〕 | 群馬県No.2 |
| 2 | 1939年 | 〔山田郡誌〕 | 山田郡教育会 |
| 3 | 1963年 | 〔群馬県の遺跡—群馬県遺跡調査報告—〕 | 群馬県教育委員会 |
| 4 | 1968年 | 〔太田市の遺跡〕 | 太田市教育委員会 |
| 5 | 1968年 | 〔城山遺跡総合調査報告〕 | はにわの会 |
| 6 | 1970年 | 〔史跡天神山古墳外堀発掘調査報告書〕 | 群馬県教育委員会 |
| 7 | 1971年 | 〔群馬県遺跡台帳Ⅰ(東毛編)〕 | 群馬県教育委員会 |
| 8 | 1971年 | 〔群馬県古城皇社の研究 上巻〕 | 群馬県文化事業振興会 |
| 9 | 1972年 | 〔菅ノ沢遺跡—オ VI次調査概報—〕 | 駒沢大学考古学研究室概報10 |
| 10 | 1972年 | 〔聖天沢遺跡調査報告書〕 | 太田市教育委員会 |
| 11 | 1973年 | 〔太田東部地区県営園場整備事業に伴う発掘調査—昭和48年度概報—〕 | 群馬県教育委員会 |
| 12 | 1973年 | 〔群馬県遺跡地図〕 | 群馬県教育委員会 |
| 13 | 1973年 | 〔堂原遺跡発掘調査報告書〕 | 太田市教育委員会 |
| 14 | 1974年 | 〔太田東部地区県営園場整備事業に伴う発掘調査—昭和49年度概報—〕 | 群馬県教育委員会 |
| 15 | 1975年 | 〔太田東部地区県営園場整備事業に伴う発掘調査—昭和50年度概報—〕 | 群馬県教育委員会 |
| 16 | 1976年 | 〔太田東部地区県営園場整備事業に伴う発掘調査—昭和51年度概報—〕 | 群馬県教育委員会 |
| 17 | 1977年 | 〔太田東部地区県営園場整備事業に伴う発掘調査—昭和52年度概報—〕 | 群馬県教育委員会 |
| 18 | 1977年 | 〔沢野村63号墳—発掘調査概報—〕 | 太田市教育委員会 |
| 19 | 1978年 | 〔五反田・諏訪下遺跡〕 | 太田市教育委員会 |
| 20 | 1978年 | 〔細田遺跡—発掘調査概報—〕 | 太田市教育委員会 |
| 21 | 1979年 | 〔細田遺跡発掘調査略報—菑川西小学校建設用地内遺跡—〕 | 太田市教育委員会 |
| 22 | 1980年 | 〔大塚・間之原遺跡確認調査の概要—川向・中西田地区—〕 | 太田市教育委員会 |
| 23 | 1980年 | 〔庚塚・上・雷遺跡—国道122号(太田バイパス)Ⅰ—〕 | 群馬県埋蔵文化財調査事業団 |
| 24 | 1980年 | 〔塚廻り古墳群〕 | 群馬県教育委員会 |
| 25 | 1981年 | 〔大塚・間之原遺跡確認調査の概要—白金・榎戸・大塚・高原地区—〕 | 太田市教育委員会 |
| 26 | 1981年 | 〔年報Ⅱ—足利市文化財総合調査昭和55年度—〕 | 足利市教育委員会 |
| 27 | 1982年 | 〔大塚・間之原遺跡—川向・中西田地区—〕 | 太田市教育委員会 |
| 28 | 1982年 | 〔天神山古墳外堀部発掘調査概報〕 | 太田市教育委員会 |
| 29 | 1982年 | 〔年報Ⅳ—足利市文化財総合調査昭和57年度—〕 | 足利市教育委員会 |
| 30 | 1984年 | 〔賀茂遺跡—国道122号(太田バイパス)Ⅲ—〕 | 群馬県埋蔵文化財調査事業団 |
| 31 | 1984年 | 〔小町田遺跡—国道122号(太田バイパス)Ⅱ—〕 | 群馬県埋蔵文化財調査事業団 |
| 32 | 1984年 | 〔御正作遺跡—埋蔵文化財発掘調査報告書—〕 | 大泉町教育委員会 |
| 33 | 1985年 | 〔渡良瀬川流域遺跡群発掘調査概報(駒形・矢場向・稲荷宮遺跡)〕 | 群馬県教育委員会 |
| 34 | 1971年 | 倉田芳郎・飯島武次・千葉基次 「利根川中流域左岸の古墳・歴史時代遺跡」 九学会連合 | |
| 35 | 1977年 | 沢口宏 「渡良瀬川川扇状地の地形とその教材化」 群馬県立太田女子高等学校 | |
| 36 | 1980年 | 高橋幸夫・中島吾治 「八王子丘陵の地形地質」 群馬県自然観察指導員養成講座基礎資料 | |

写 真 图 版



1. 発掘区全景



2. 発掘区全景



3. 発掘区全景



4. 遺跡全景



5. 遺跡全景



6. 遺跡全景



7. 遺跡全景



1. SB01建物 東より



2. SB02建物 西より



3. SB03建物 西より



4. SB04建物 南西より



5. SD01溝



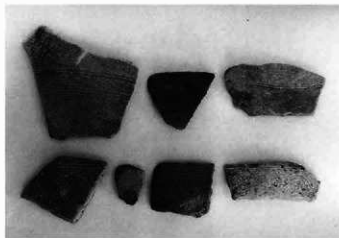
6. SD02・03溝 北西より



7. SD02溝 断面



8. SD03溝 断面



1. 各遺構より出土 東海系土師器



2. 各遺構より出土 古式土師器 左壺 器高 約18cm



3. SB01 土師器 口径 約18cm



4. SB02 土師器 器高 約7cm



5. SB07 土師器 器高 約14cm



6. SB07 土師器 器高 約18cm



7. SB07 土師器 器高 約10cm



8. SD02 土師器 口径 約26cm



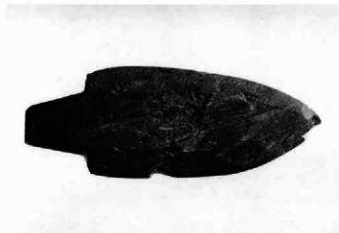
1. SB07 土罐 径 約3cm



2. C1区 石製横造品 全长 約7cm



3. C1区 石製横造品 表 全长 約14cm



4. C1区 石製横造品 裏



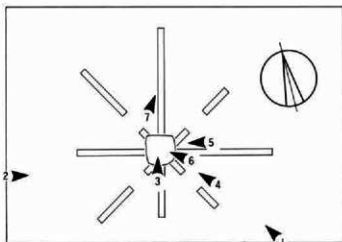
5. SB01建物 柱 横入り方



6. SB01 柱 側面 底辺(長径) 約12cm



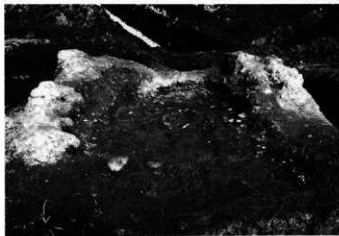
7. SB01 柱 底面



1. 発掘区全景



2. 発掘区全景



3. 主体部



4. 墳丘盛土



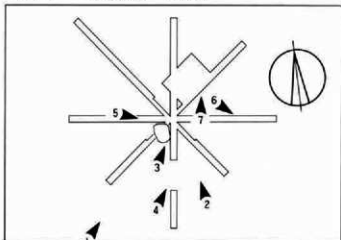
5. 墳丘盛土



6. 西トレンチ



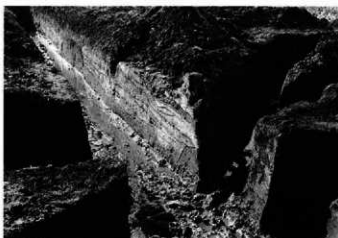
7. 北トレンチ



1. 発掘区全景



2. 主体部トレンチ



3. 主体部トレンチ



4. 南トレンチ



5. 西トレンチ



6. 東トレンチ



7. SB01・02建物



1. 1号墳 土師器 器高 約10cm



2. SB01 土師器 口径 約12cm



3. SB03 土師器 器高 約32cm



4. 2号墳 土師器 胴径 約19cm



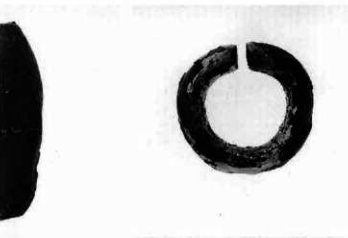
5. 2号墳 土師器 口径 約12cm



6. 2号墳 土師器 口径 約13cm



7. 2号墳 紡錘車 径 約4cm



8. 2号墳 土錘 長軸径 約5cm



9. 2号墳 金環 径(左右) 約3cm



1. 発掘区全景 東より



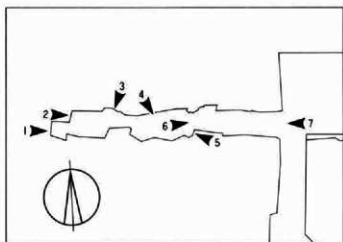
2. 発掘区全景 南東より



3. 発掘区近景 東より



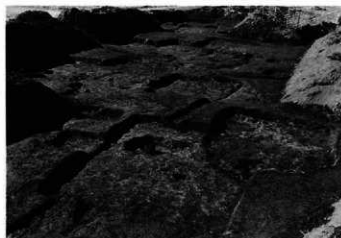
4. 発掘区近景 南より



1. 西区 西より



2. 西区 西より



3. 西区 東より



4. 西区 北西より



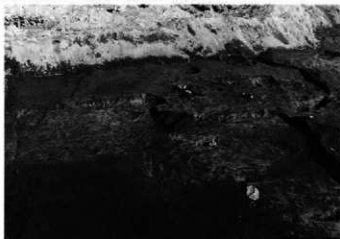
5. 西区 南東より



6. 西区 西より



7. 西区 東より



1. SB05-07建物 南より



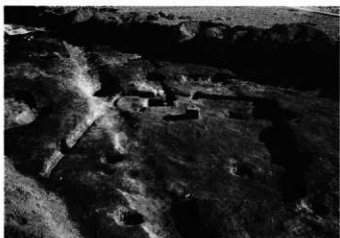
2. SB10建物 北より



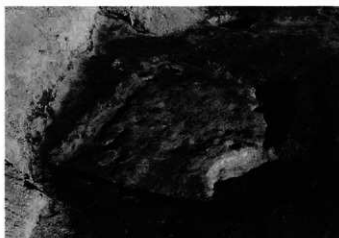
3. SB15建物 西より



4. SB16建物 北西より



5. SB20建物 北西より



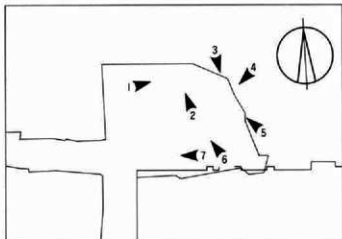
6. SB23建物 西より



7. SB24建物 西より



8. SB35建物 南より



1. 北東区 西より



2. 北東区 南より



3. 北東区 北より



4. 北東区 北東より



5. 北東区 南東より



6. 北東区 南より



7. 北東区 東より



1. SB71建物 南西より



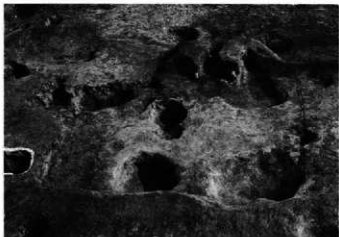
2. SB72建物 西より



3. SB47建物 北より



4. SB49建物 南より



5. SB54建物 南西より



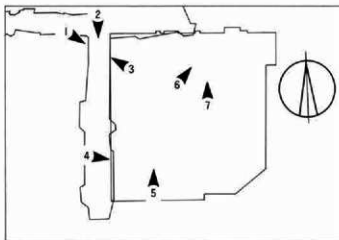
6. SB66建物 西より



7. SB66建物 南東より



8. SB88建物 北東より



1. 南区 北西より



2. 南区 北より



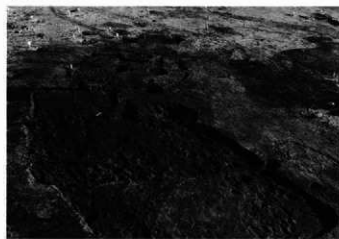
3. 南区 南東より



4. 南東区 西より



5. 南東区 南より



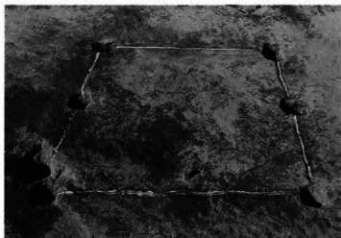
6. 南東区 南西より



7. 南東区 南より



1. SB133建物 南より



2. SB139建物 南東より



3. SK28土壇



4. SK60・61土壇



5. SD14溝 南より



6. SD14溝 断面



7. SD11・12溝 南東より



8. SD11・12溝 断面



1. 各遺構より出土 古式土師器



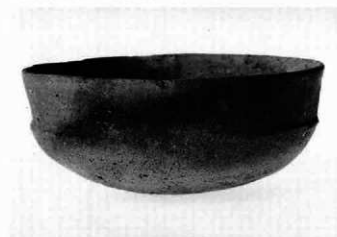
2. SB29 土師器 器高 約8cm



3. 各遺構より出土 鬼高式土器 左下杯 口径 約14cm



4. SB35 土師器 口径 約16cm



5. SB35 土師器 口径 約14cm



6. SB41 土師器 口径 約11cm



7. SB41 土師器 器高 約20cm



8. SB25 土師器 口径 約19cm



1. 各遺構より出土 国分式土器



2. SB07 土師器 口径 約16cm



3. SB15 土師器 口径 約13cm



4. SB40 土師器 口径 約18cm



5. SB44 土師器 胴径 約23cm



6. SB74 灰釉陶器 口径 約12cm



7. SD14 灰釉陶器 胴径 約18cm



8. SD14 土師器 口径 約13cm



1. SB83 口径 約13cm



2. SB103 口径 約13cm



3. SB79 口径 約12cm



4. E28区 口径 約12cm



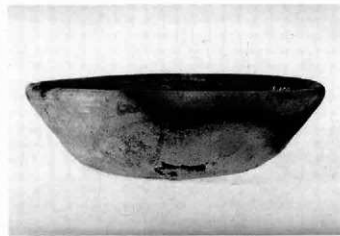
5. SB68 口径 約13cm



6. SB26 口径 約11cm



7. F17区 口径 約13cm



8. SB94 口径 約11cm



1. SB106



2. SB83



3. SB103



4. E28区



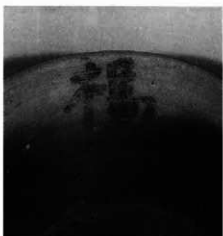
5. I20区



6. E28区



7. SB68



8. SB26



9. F17区



10. SB33



11. SB15



12. SB79



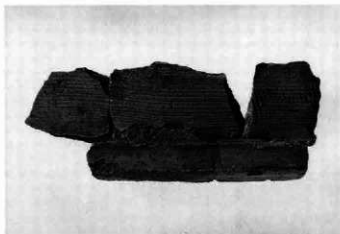
1. SB76 緑釉陶器 口径 約11cm



2. SB76 緑釉陶器 口径 約13cm



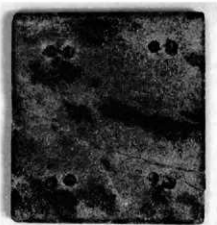
3. A24区 緑釉陶器 口径 約20cm



4. B25区 埴輪 長さ(上下) 約5cm



5. SB40 石帯 表 径(左右) 約4cm



6. SB40 石帯 裏



7. SD14 石帯 径(左右) 3cm



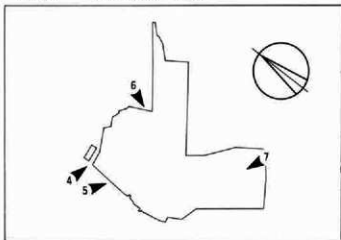
8. SB07 磁石 残存長(上下) 8cm



9. SB14 土鏝 長軸径 3cm



10. SB23 紡錘車 径 5cm



1. 発掘区全景 雪の日に



2. 発掘区全景



3. 発掘区全景



4. 遺跡全景



5. 遺跡全景



6. 遺跡全景



7. 遺跡全景



1. SB02建物 南西より



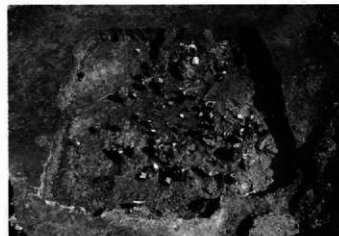
2. SB04・05建物 南より



3. SB06建物 南西より



4. SB07建物 南西より



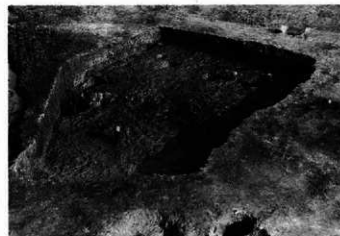
5. SB08建物 南より



6. SB10・11建物 南西より



7. SB12建物 南より



8. SB15・16建物 北西より



1. SB02建物 南西より



2. SB02建物 北西より



3. SB02建物



4. SB06建物



5. SB07建物



6. SB08建物 竈正面



7. SB08建物 竈袖



8. SB12建物



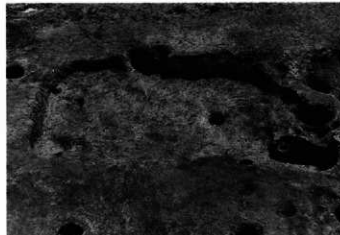
1. SK01土壌



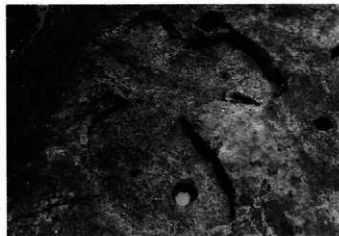
2. SK02土壌



3. SK03土壌



4. SK04土壌



5. SK05土壌



6. SK08土壌



7. SK09土壌



8. SK10土壌



1. SD01溝 北西より



2. SD01溝 断面



3. SD02・04溝 東より



4. SD02溝 断面



5. SD05溝 南東より



6. SD05溝 断面



7. SD05 下駄出土状態



8. SD05 木桶出土状態



1. SK01 縄文土器 右深鉢 口径 約30cm



2. C3区 縄文土器 器高 約23cm



3. SB02 土師器 器高 15cm



4. SB02 土師器 器高 約14cm



5. SB02 土師器 口径 約23cm



6. SB02 土師器 口径 約21cm



7. SB02 土師器 口径 約14cm



8. SB02 土師器 口径 12cm



1. SB07 土師器 器高 約23cm



2. SB07 土師器 器高 25cm



3. SB07 土師器 口径 約13cm



4. SB07 土師器 口径 12cm



5. 各遺構より出土 鬼高式土器 左側 器高 約26cm



6. SB08 土師器 器高 約40cm



7. SB08 土師器 器高 約25cm



8. SB08 土師器 口径 約10cm



1. SB12 土師器 口径 12cm



2. SB12 土師器 口径 13cm



3. SB15 土師器 口径 約14cm



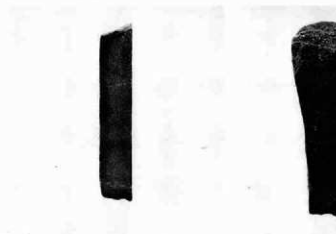
4. SB07 土製支脚 全長 約14cm



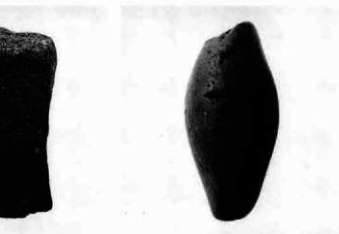
5. SB07 土製支脚 全長 約11cm



6. SB08 土製支脚 全長 約11cm

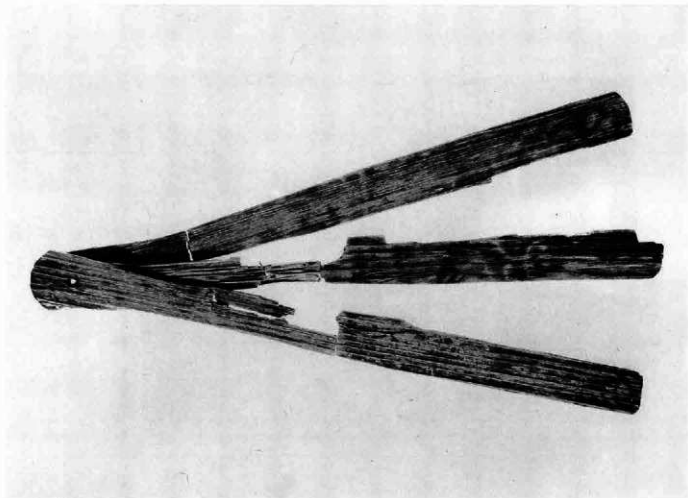


7. SB16 砥石 残存長 約10cm



8. SD02 砥石 残存長 約9cm

9. SD05 土錘 長軸径 約4cm



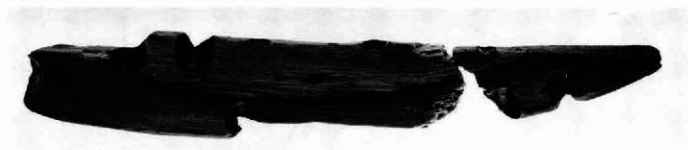
1. SD05 檢屑 長さ(左右) 約24cm



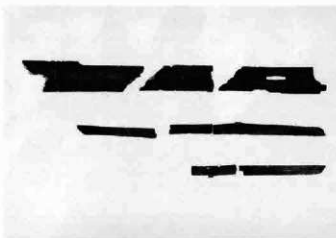
2. SD05 火燄白 長さ(左右) 約29cm



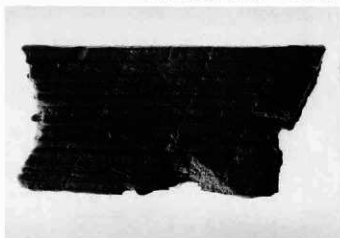
3. SD05 曲物容器 底板 長さ(左右) 約26cm



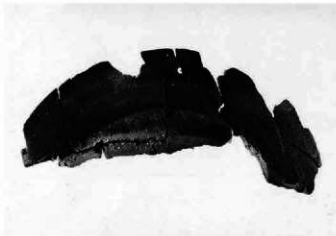
4. SD05 曲物容器 底板 長さ(左右) 約19cm



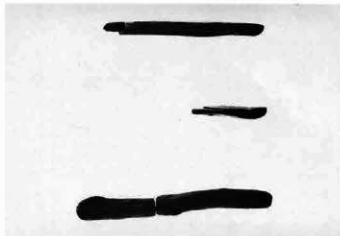
1. SD05 曲物容器 側板 上段 長さ(左右) 約40cm



2. SD05 曲物容器 側板 内面 長さ(左右) 約17cm



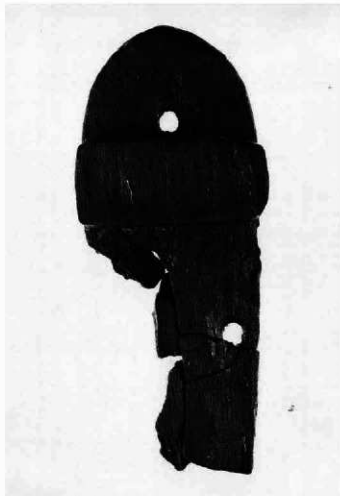
3. SD05 皿 底面 長さ(左右) 約14cm



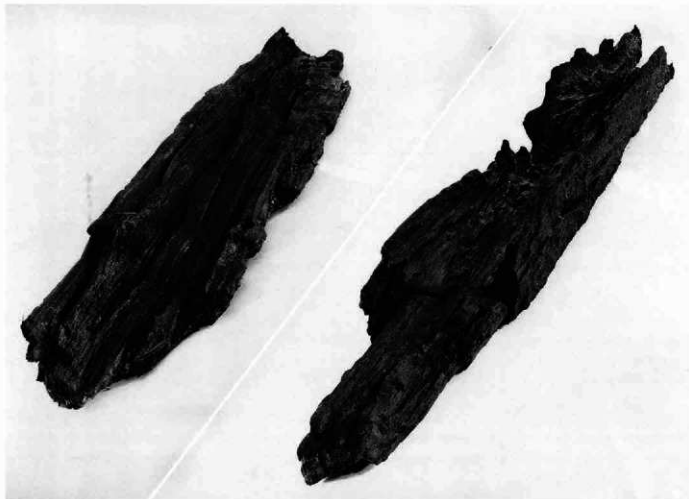
4. SD05 棒状品 下段 長さ(左右) 約13cm



5. SD05 下駄 表 長さ(上下) 約20cm

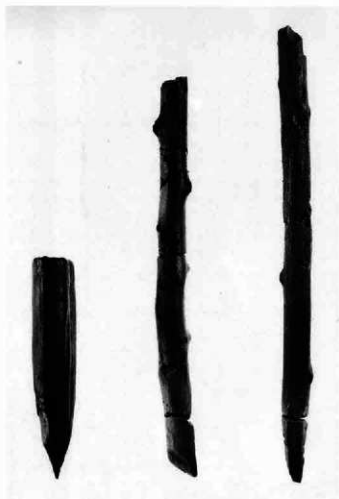


6. SD05 下駄 裏

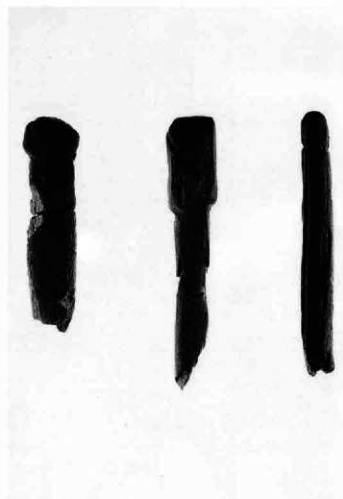


1. SD05 木槓 長さ 約130cm

2. SD05 木槓 長さ 約186cm



3. SD05 尖頭棒 右 長さ(上下) 約45cm



4. SD05 棒状品 把手 右 長さ(上下) 約17cm



1. 清水田遺跡



2. 清水田遺跡



3. 小町田遺跡



4. 小町田遺跡 排水作業



5. 清水田遺跡



6. 小町田遺跡



7. 清水田遺跡 実測作業



8. 清水田遺跡 記念撮影

太田東部遺跡群

昭和60年3月20日 印刷

昭和60年3月30日 発行

編集者 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
〒377 勢多郡北橋村大字下箱田784番地の2
電話 (0279) 52-2511(代表)

群馬県教育委員会
〒371 前橋市大手町1丁目1番1号
電話 (0272) 23-1111(代表)

発行者 群馬県考古資料普及会
〒377 勢多郡北橋村大字下箱田784番地の2
電話 (0279) 52-2511(代表)

印刷者 朝日印刷工業株式会社
